

# 東関東自動車道（木更津・富津線） 埋蔵文化財調査報告書 5

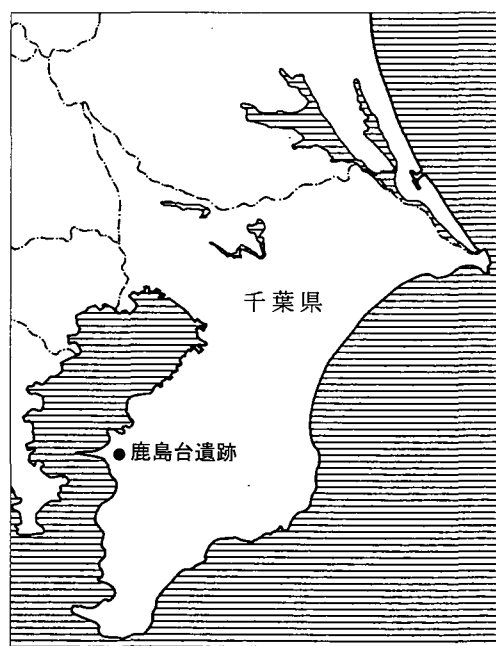
— 君津市鹿島台遺跡（A区・D区） —

平成18年3月

東日本高速道路株式会社  
財団法人 千葉県教育振興財団

# 東関東自動車道（木更津・富津線） 埋蔵文化財調査報告書 5

きみつしかしまだいいせき  
－君津市鹿島台遺跡（A区・D区）－





## 序 文

財団法人千葉県教育振興財団（財団法人千葉県文化財センターから平成17年9月1日付で名称変更）は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その結果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第529集として、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）関東支社の東関東自動車道千葉富津線（木更津・富津）建設事業に伴って実施した鹿島台遺跡（A区・D区）の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、縄文時代から古墳時代に至るまでの竪穴住居跡を多数検出するとともに、鹿島台古墳群に属する古墳の一部を調査し東京湾内房地域の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を始めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人千葉県教育振興財団  
理事長 佐藤健太郎

## 凡 例

- 1 本書は、東日本高速道路株式会社（旧日本道路公団）による東関東自動車道（木更津・富津線）建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県君津市六手字鹿島台761-1ほかに所在する鹿島台遺跡（A区・D区）（遺跡コード225-020）と鹿島台古墳群（遺跡コード225-021）の一部である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、東日本高速道路株式会社の委託を受け、財団法人千葉県文化財センター（平成17年9月1日付で財団法人千葉県教育振興財団と名称変更）が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は本文目次に示したとおり、第1章を中道俊一、第2章、第3章、第4章について縄文時代の遺構、土器関係を安井健一、石器関係を新田浩三が執筆した。第4章の弥生時代のまとめは加藤修司が執筆した。上記以外はすべて栗田則久・木島桂子が担当した。編集は栗田が担当した。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁教育振興部文化財課、東日本高速道路株式会社、君津市教育委員会、財団法人君津郡市文化財センター及び土肥孝、林田利之、渡辺新各氏の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、以下のとおりである。
  - 第1・7図 国土地理院発行 1/50,000地形図「木更津」(N1-54-25-4)  
「富津」(N1-54-26-1)
  - 第6図 国土地理院発行 1/25,000地形図「鹿野山」(N1-54-26-1-1)
- 8 周辺地形の航空写真は、京葉測量株式会社による昭和42年撮影のものを使用した。
- 9 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。測量については、日本測地系に基づいている。
- 10 本書で使用した遺構の種別・番号は基本的に調査時の番号を踏襲したが、一部変更した遺構がある。これについては、第1章第1節2の調査の方法で提示した。
- 11 土器の赤彩については図示しておらず、土器観察表での記載としている。

# 本文目次

序 文

凡 例

第1章	はじめに	【中道俊一】	1
第1節	調査の概要		1
1	調査の経緯と経過		1
2	調査の方法		3
第2節	遺跡の位置と環境		7
1	地理的環境		7
2	歴史的環境		7
第2章	A区の遺構と遺物	【栗田則久・木島桂子】	13
第1節	縄文時代		13
1	竪穴住居跡	(安井健一)	13
2	土坑	(安井健一)	14
3	遺構外出土石器	(新田浩三)	18
第2節	弥生時代		21
1	竪穴住居跡		21
2	方形周溝墓		21
3	再葬墓		34
4	土坑		34
5	遺構外出土遺物		36
第3節	古墳時代		38
1	古墳		38
2	土坑墓		54
3	その他の土坑		60
4	遺構外出土遺物		64
第3章	D区の遺構と遺物	【栗田則久・木島桂子】	65
第1節	縄文時代		65
1	竪穴住居跡	(安井健一)	65
2	土坑	(安井健一)	110
3	石鏃製作関連遺構	(新田浩三)	112
4	グリッド・遺構外出土土器・土製品	(安井健一)	134
5	遺構外出土石器	(新田浩三)	163
第2節	弥生時代		174
1	竪穴住居跡		174
2	方形周溝墓		194

3	遺構外出土遺物	194
第3節	古墳時代	198
1	古墳	198
2	埋葬施設	211
3	竪穴住居	213
4	その他の土坑	248
5	溝出土遺物	251
6	遺構外出土遺物	253
第4節	奈良・平安時代	256
1	竪穴住居跡	256
2	遺構外出土土器	257
第4章	まとめ	258
第1節	縄文時代の集落について (安井健一)	258
1	早期	258
2	中期	259
3	後期	268
第2節	縄文時代中期後半における石鏃製作関連遺構について (新田浩三)	277
1	石鏃製作関連遺構の概要	277
2	住居への遺物廃棄の検討	282
3	集落の変遷	284
4	廃絶住居への遺物廃棄推定モデルの提示	284
5	まとめ	288
第3節	鹿島台遺跡周辺における弥生時代中期前半期の諸様相 (加藤修司)	290
1	中期前半期の土器について	290
2	再葬墓と初現期の方形周溝墓について	297
	－鹿島台遺跡と常代遺跡－ (その1)	
第4節	古墳時代について (栗田則久・木島桂子)	304
1	D区の集落	304
2	A区古墳について	306
3	舟絵の描かれた須恵器	308
報告書抄録		

## 挿図目次

第1図	東関東自動車道（木更津・富津線）関連遺跡位置図	4	第65図	SI-029（1）	87
第2図	A～D区分割図	5	第66図	SI-029（2）	88
第3図	グリッド名称例	6	第67図	SI-029（3）	89
第4図	A区確認調査設定図	6	第68図	SI-033	89
第5図	D区確認調査設定図	6	第69図	SI-036（1）	90
第6図	遺跡の位置と周辺の遺跡（1）	10	第70図	SI-036（2）	91
第7図	遺跡の位置と周辺の遺跡（2）	11	第71図	SI-037（1）	93
第8図	A区遺構分布図	12	第72図	SI-037（2）	94
第9図	SI-001	14	第73図	SI-038（1）	95
第10図	SI-001出土遺物	15	第74図	SI-038（2）	96
第11図	SI-003	16	第75図	SI-039	97
第12図	SK-061	17	第76図	SI-040	98
第13図	SK-051・052	18	第77図	SI-041（1）	99
第14図	A区遺構外出土石器（1）	19	第78図	SI-041（2）	100
第15図	A区遺構外出土石器（2）	20	第79図	SI-047（1）	101
第16図	SI-002	22	第80図	SI-047（2）	102
第17図	SS-001	23	第81図	SI-054	103
第18図	SS-002・004	24	第82図	SI-059	105
第19図	SS-002・004出土遺物	25	第83図	SI-061（1）	106
第20図	SS-003	26	第84図	SI-061（2）	107
第21図	SS-005～007	27	第85図	SI-067	108
第22図	SS-009	29	第86図	SI-069	109
第23図	SS-010	30	第87図	SK-011・014・044	111
第24図	SS-012～014	31	第88図	石鏃製作関連遺構遺物分布図	114
第25図	SS-015～018	33	第89図	石鏃製作関連遺構SI-014遺物分布図	116
第26図	SK-013	35	第90図	石鏃製作関連遺構SI-014出土石器（1）	117
第27図	SK-020	36	第91図	石鏃製作関連遺構SI-014出土石器（2）	118
第28図	遺構外出土土器	37	第92図	石鏃製作関連遺構SI-017遺物分布図	119
第29図	4号墳墳丘現況図	39	第93図	石鏃製作関連遺構SI-017出土石器	120
第30図	4号墳墳丘測量図	40	第94図	石鏃製作関連遺構SI-036遺物分布図	122
第31図	4号墳墳丘断面図	41	第95図	石鏃製作関連遺構SI-036出土石器	123
第32図	1・2号埋葬施設	42	第96図	石鏃製作関連遺構SI-037遺物分布図	125
第33図	3号埋葬施設	44	第97図	石鏃製作関連遺構SI-037出土石器	126
第34図	3号埋葬施設出土遺物（1）	45	第98図	石鏃製作関連遺構SI-038遺物分布図	127
第35図	3号埋葬施設出土遺物（2）	46	第99図	石鏃製作関連遺構SI-038出土石器	129
第36図	4号埋葬施設	47	第100図	石鏃製作関連遺構SI-061遺物分布図	131
第37図	5号埋葬施設・墳丘出土遺物	48	第101図	石鏃製作関連遺構SI-061出土石器（1）	132
第38図	SM-001・002・SK-032	50	第102図	石鏃製作関連遺構SI-061出土石器（2）	133
第39図	SK-032遺物出土状況	51	第103図	A・D区遺構外出土縄文土器（1）	135
第40図	SM-003～006	53	第104図	A・D区遺構外出土縄文土器（2）	136
第41図	SK-011	54	第105図	A・D区遺構外出土縄文土器（3）	137
第42図	SK-018・053	55	第106図	A・D区遺構外出土縄文土器（4）	138
第43図	SK-054・057	56	第107図	A・D区遺構外出土縄文土器（5）	139
第44図	その他の土坑（1）	62	第108図	A・D区遺構外出土縄文土器（6）	140
第45図	その他の土坑（2）	63	第109図	A・D区遺構外出土縄文土器（7）	141
第46図	遺構外出土土器	64	第110図	A・D区遺構外出土縄文土器（8）	142
第47図	D区遺構分布図	66	第111図	A・D区遺構外出土縄文土器（9）	143
第48図	縄文時代遺構配置図	67	第112図	A・D区遺構外出土縄文土器（10）	144
第49図	SI-001（1）	68	第113図	A・D区遺構外出土縄文土器（11）	145
第50図	SI-001（2）	69	第114図	A・D区遺構外出土縄文土器（12）	146
第51図	SI-003	70	第115図	A・D区遺構外出土縄文土器（13）	147
第52図	SI-005	71	第116図	A・D区遺構外出土縄文土器（14）	148
第53図	SI-009（1）	72	第117図	A・D区遺構外出土縄文土器（15）	149
第54図	SI-009（2）	73	第118図	A・D区遺構外出土縄文土器（16）	150
第55図	SI-014（1）	74	第119図	A・D区遺構外出土縄文土器（17）	151
第56図	SI-014（2）	75	第120図	A・D区遺構外出土縄文土器（18）	152
第57図	SI-014（3）	76	第121図	A・D区遺構外出土縄文土器（19）	153
第58図	SI-017	77	第122図	A・D区遺構外出土縄文土器（20）	154
第59図	SI-018（1）	80	第123図	A・D区遺構外出土縄文土器（21）	155
第60図	SI-018（2）	81	第124図	A・D区遺構外出土縄文土器（22）	156
第61図	SI-018（3）	82	第125図	A・D区遺構外出土縄文土器（23）	157
第62図	SI-018（4）	83	第126図	A・D区遺構外出土縄文土器（24）	158
第63図	SI-018（5）	84	第127図	A・D区遺構外出土縄文土器（25）	159
第64図	SI-018（6）	85	第128図	A・D区遺構外出土縄文土器（26）	160
			第129図	A・D区遺構外出土縄文土器（27）	161

第130図	D区出土土製品	162	第198図	SI-049	244
第131図	D区遺構外出土石器(1)	164	第199図	SI-050	245
第132図	D区遺構外出土石器(2)	165	第200図	SI-055	245
第133図	D区遺構外出土石器(3)	166	第201図	SI-060	246
第134図	D区遺構外出土石器(4)	167	第202図	SI-063	247
第135図	D区遺構外出土石器(5)	168	第203図	SI-068	248
第136図	D区遺構外出土石器(6)	169	第204図	その他の土坑(1)	250
第137図	D区遺構外出土石器(7)	170	第205図	その他の土坑(2)	251
第138図	D区遺構外出土石器(8)	171	第206図	その他の土坑(3)	252
第139図	D区遺構外出土石器(9)	172	第207図	溝出土土器	252
第140図	D区縄文時代草創期石器	173	第208図	遺構外出土遺物(1)	254
第141図	SI-004・007	175	第209図	遺構外出土遺物(2)	255
第142図	SI-008(1)	176	第210図	SI-006	256
第143図	SI-008(2)	178	第211図	奈良時代出土土器	257
第144図	SI-015	178	第212図	縄文中期住居跡主要出土土器及び仮設時期(1)	261
第145図	SI-023	179	第213図	縄文中期住居跡主要出土土器及び仮設時期(2)	262
第146図	SI-026~028	181	第214図	縄文中期住居跡主要出土土器及び仮設時期(3)	263
第147図	SI-030・031	182	第215図	縄文中期竪穴住居跡	266
第148図	SI-034	183	第216図	縄文時代後期における遺構配置図	269
第149図	SI-035	184	第217図	縄文後期住居跡主要出土土器及び仮設時期	270
第150図	SI-042	185	第218図	縄文後期竪穴住居跡	272
第151図	SI-048・051・052	187	第219図	DSI-018住居跡柱穴深度	274
第152図	SI-053	188	第220図	DSI-018住居跡の推移	275
第153図	SI-056・057	189	第221図	縄文時代中期後半における遺構配置図	278
第154図	SI-058・062・064	191	第222図	縄文時代中期後半における遺構別石鏃実測図	279
第155図	SI-065	192	第223図	石鏃製作関連遺構における	
第156図	SI-066	193		黒曜石重量ヒストグラム	281
第157図	SS-001	194	第224図	縄文中期後半における集落の変遷	283
第158図	遺構外出土土器	195	第225図	廃絶住居への遺物廃棄推定モデル	283
第159図	弥生時代以降出土石器(1)	196	第226図	縄文中期後半における廃絶住居への	
第160図	弥生時代以降出土石器(2)	197		遺物廃棄推定モデル(1)	286
第161図	8号墳丘現況図	199	第227図	縄文中期後半における廃絶住居への	
第162図	8号墳丘測量図	200		遺物廃棄推定モデル(2)	287
第163図	8号墳丘断面図	201	第228図	須和田遺跡出土中期弥生土器	290
第164図	8号墳出土遺物	202	第229図	弥生中期前半期の土器(1)	292
第165図	9号墳丘現況図	204	第230図	弥生中期前半期の土器(2)	293
第166図	9号墳丘測量図	205	第231図	弥生中期前半期の土器(3)	295
第167図	9号墳丘断面図	206	第232図	上敷免遺跡出土土器	297
第168図	9号墳出土遺物	207	第233図	「壺形以外」の一例(再葬墓)(中期中葉)	299
第169図	11号墳丘測量図・断面図・出土遺物	209	第234図	「壺形以外」の一例(方形周溝墓)(中期中葉)	299
第170図	SM-001(1)	210	第235図	「壺形以外」の一例(土坑)(中期中葉)	300
第171図	SM-001(2)	211	第236図	「壺形以外」の一例(再葬墓・土器棺)	
第172図	SM-002, SK-016・018	212		(中期中葉~中期後半)	302
第173図	SK-013・042	214	第237図	D区古墳時代遺構分布図	305
第174図	SI-002(1)	215	第238図	白玉の形態別グラフ	307
第175図	SI-002(2)	216	第239図	各地の船舟土器	309
第176図	SI-010	217			
第177図	SI-011(1)	218			
第178図	SI-011(2)	219			
第179図	SI-012(1)	221			
第180図	SI-012(2)	222			
第181図	SI-013	223			
第182図	SI-016(1)	225			
第183図	SI-016(2)	226			
第184図	SI-019(1)	227			
第185図	SI-019(2)	228			
第186図	SI-020(1)	229			
第187図	SI-020(2)	230			
第188図	SI-021	231			
第189図	SI-022(1)	233			
第190図	SI-022(2)	234			
第191図	SI-022(3)	235			
第192図	SI-024	236			
第193図	SI-025	237			
第194図	SI-032	239			
第195図	SI-044	240			
第196図	SI-045	241			
第197図	SI-046	242			

## 図版目次

- 図版1 鹿島台遺跡周辺航空写真  
図版2 A区全景（北から）  
A区全景（南から）  
A区空撮  
図版3 SI-001  
SI-001遺物出土状況  
SI-003  
図版4 SK-051  
SK-052  
SK-051遺物出土状況  
SK-052遺物出土状況  
図版5 SK-061  
SI-002  
SI-002遺物出土状況  
図版6 SI-002遺物出土状況  
SS-002  
SS-002遺物出土状況  
図版7 SS-003  
SS-003遺物出土状況  
SS-004  
図版8 SS-004遺物出土状況  
SS-009a  
SS-009b  
図版9 SS-009c  
SS-009d  
SS-009d遺物出土状況  
図版10 SS-010a  
SS-010b  
SS-010遺物出土状況  
図版11 SS-012  
SS-013  
SS-014  
図版12 SS-015  
SS-015遺物出土状況  
SS-016  
図版13 SS-016遺物出土状況  
SS-017  
SK-013  
図版14 SK-013遺物出土状況  
SK-020  
SK-010・011・016  
図版15 SK-026  
SK-029  
SK-053  
図版16 SK-054  
SK-054遺物出土状況  
SK-056  
図版17 SK-057  
SK-066  
4号墳調査前状況  
図版18 4号墳全景  
4号墳南西土層断面  
第1施設・第1施設太刀出土状況  
第2施設・第2施設鉄鏃出土状況  
図版19 第2・3施設・第3施設太刀出土状況  
第3施設刀子出土状況・第3施設鉄鏃出土状況  
第3施設玉類出土状況・第4施設  
第5施設・第5施設鉄剣出土状況  
図版20 SM-001  
SM-001遺物出土状況  
SM-001・002土層  
図版21 SM-003  
SM-004  
SM-004遺物出土状況  
図版22 SM-005  
SK-032  
SK-032鉄製品・SK-032管玉・勾玉出土状況  
SK-032管玉SK-032玉類出土状況  
図版23 縄文時代竪穴住居跡・土坑出土土器  
弥生時代竪穴住居跡・方形周溝墓出土土器（1）  
図版24 方形周溝墓出土土器（2）  
図版25 方形周溝墓（3）・再葬墓・古墳・遺構外出土土器  
図版26 4号墳出土鉄製品  
図版27 4号墳・土坑出土鉄製品  
図版28 4号墳・土坑出土玉類  
図版29 SK-032出土玉類  
図版30 A区出土石器  
図版31 D区調査前全景  
8・9・11号墳  
D区空撮  
図版32 SI-001  
SI-003  
SI-009  
図版33 SI-009遺物出土状況・SI-009炉跡  
SI-014  
SI-014炉  
SI-017  
図版34 SI-018  
SI-018柱穴材・SI-018炭化材  
SI-018遺物出土状況  
SI-018石棒出土状況・SI-018炉  
SI-018遺物出土状況  
図版35 SI-029  
SI-033  
SI-036  
図版36 SI-036遺物出土状況  
SI-037  
SI-037炉・SI-038遺物出土状況  
SI-038  
図版37 SI-041炉・SI-047炉  
SI-054  
SI-061・046  
SI-061遺物出土状況  
図版38 SK-011  
SK-044  
SI-004  
図版39 SI-007  
SI-008  
SI-015  
図版40 SI-023  
SI-023遺物出土状況・SI-023炉  
SI-023遺物出土状況・SI-026炉跡  
SI-026  
図版41 SI-027  
SI-035  
SI-035遺物出土状況  
SI-031遺物出土状況・SI-051遺物出土状況  
図版42 SI-048~051  
SI-052  
SI-053・034  
図版43 SI-053遺物出土状況  
SI-056  
SI-066・068  
SI-002炭化物出土状況・SI-002遺物出土状況  
図版44 SI-002  
SI-002遺物出土状況  
SI-010  
SI-010遺物出土状況・SI-011遺物出土状況  
図版45 SI-011  
SI-011土層断面・SI-011遺物出土状況

	SI-011鎌出土状況・SI-011柱穴内炭化材出土状況
図版46	SI-012遺物出土状況・SI-012炉 SI-013 SI-013炉・SI-019遺物出土状況 SI-019
図版47	SI-019炉・SI-020遺物出土状況 SI-020 SI-021
図版48	SI-021遺物出土状況・SI-022遺物出土状況 SI-022 SI-022遺物出土状況・SI-022カマド状況 SI-024
図版49	SI-024遺物出土状況・SI-046遺物出土状況 SI-049 SI-058 SI-060・063
図版50	SI-025 SI-044 SI-045・065
図版51	8号墳 表土除去後・周溝 墳丘断面・遺物出土状況 9号墳
図版52	11号墳 SM-001 SM-001遺物出土状況 SM-001周溝内土層断面・SI-006カマド
図版53	SI-006 SK-004・SK-009 SK-010・SK-013 SK-017・SK-018
図版54	SK-038・SK-039 SK-045
図版55	竪穴住居跡出土土器 (1)
図版56	竪穴住居跡出土土器 (2)
図版57	竪穴住居跡出土土器 (3)
図版58	竪穴住居跡出土土器 (4)
図版59	竪穴住居跡出土土器 (5)
図版60	竪穴住居跡出土土器 (6)
図版61	竪穴住居跡出土土器 (7)
図版62	竪穴住居跡出土土器 (8)
図版63	竪穴住居跡出土土器 (9)
図版64	竪穴住居跡出土土器 (10)
図版65	竪穴住居跡 (11)・土坑出土土器
図版66	D区石鏃製作関連遺構SI-014出土土器 D区石鏃製作関連遺構SI-017出土土器 D区石鏃製作関連遺構SI-036出土土器 D区石鏃製作関連遺構SI-061出土土器
図版67	D区石鏃製作関連遺構SI-061出土土器
図版68	D区石鏃製作関連遺構SI-037出土土器 D区石鏃製作関連遺構SI-038出土土器 D区大型住居跡SI-018出土土器 (1)
図版69	D区大型住居跡SI-018出土土器 (2)
図版70	A・D区遺構外出土縄文土器 (1)
図版71	A・D区遺構外出土縄文土器 (2)
図版72	A・D区遺構外出土縄文土器 (3)
図版73	A・D区遺構外出土縄文土器 (4)
図版74	A・D区遺構外出土縄文土器 (5)
図版75	A・D区遺構外出土縄文土器 (6)
図版76	A・D区遺構外出土縄文土器 (7)
図版77	A・D区遺構外出土縄文土器 (8)
図版78	A・D区遺構外出土縄文土器 (9)
図版79	A・D区遺構外出土縄文土器 (10)
図版80	A・D区遺構外出土縄文土器 (11)
図版81	A・D区遺構外出土縄文土器 (12)

図版82	A・D区遺構外出土縄文土器 (13)
図版83	A・D区遺構外出土縄文土器 (14)
図版84	D区出土土製品・注口
図版85	D区遺構外出土土器 (1) D区遺構外出土土器 (2)
図版86	D区遺構外出土土器 (3)
図版87	D区遺構外出土土器 (4)
図版88	D区遺構外出土土器 (5)
図版89	D区遺構外出土土器 (6) D区遺構外出土土器 (7)
図版90	竪穴住居跡・遺構外出土土器
図版91	縄文時代草創期・弥生時代以降出土土器
図版92	竪穴住居跡出土土器 (1)
図版93	竪穴住居跡出土土器 (2)
図版94	竪穴住居跡出土土器 (3)
図版95	竪穴住居跡出土土器 (4)
図版96	竪穴住居跡出土土器 (5)
図版97	竪穴住居跡・古墳出土土器
図版98	古墳・土坑出土土器
図版99	竪穴住居跡・古墳出土鉄製品
図版100	出土土製品・その他
図版101	遺構外出土土器

## 表目次

第1表	SK-051土坑礫組成表	17
第2表	SK-052土坑礫組成表	17
第3表	SK-054出土ガラス玉計測表	57
第4表	石鏃製作関連遺構遺物組成表	112
第5表	石鏃製作関連遺構別器種組成表	113
第6表	石鏃製作関連遺構別石材組成表	113
第7表	SI-014遺物組成表	115
第8表	SI-017遺物組成表	119
第9表	SI-036遺物組成表	121
第10表	SI-037遺物組成表	124
第11表	SI-038遺物組成表	128
第12表	SI-061遺物組成表	130
第13表	A区縄文時代竪穴住居跡観察表	311
第14表	A区縄文時代土器観察表	311
第15表	A区弥生時代竪穴住居跡観察表	311
第16表	A区弥生時代土器観察表	311
第17表	A区古墳時代土器観察表	312
第18表	D区縄文時代竪穴住居跡観察表	312
第19表	D区縄文時代土器観察表	313
第20表	D区弥生時代～奈良時代竪穴住居跡観察表	315
第21表	D区弥生時代土器観察表	318
第22表	D区古墳時代土器観察表	319



# 第1章 はじめに

## 第1節 調査の概要

### 1. 調査の経緯と経過

東日本高速道路株式会社は、房総地域の発展および東京湾周辺の連携を強化する目的で、館山自動車道の建設を計画し、その一部（木更津～富津線）の建設事業が行われることとなった。

実施にあたって、東日本高速道路株式会社から建設用地内の「埋蔵文化財の所在の有無及びその取り扱いについて」の照会文書が、千葉県教育委員会あてに提出された。千葉県教育委員会ではこれを受けて、事業地内の現地踏査を実施し、事業地内に埋蔵文化財包蔵地及び鹿島台古墳群に属する古墳の一部が所在する旨の回答を行った。その取り扱いについて、千葉県教育委員会と東日本高速道路株式会社との慎重な協議が重ねられた。その結果、現状保存が困難な地点については、やむを得ず記録保存の措置を講ずることと協議が整い、財団法人千葉県文化財センターが発掘調査を実施することとなった（第1図）。

調査に入るにあたり、南北に長い調査区を便宜的に区割りして呼ぶこととし、地形的特徴から北端の狭い平坦地をA区、谷を挟んで南側のやや広範囲な平坦地部分をB区、さらにその面から一段上がった地区をC区、そこから南の斜面部をD区とした（第2図）。調査は平成12年4月、調査対象面積28,470㎡全域の上層確認調査から開始された。確認調査の結果、上層については遺跡南斜面部及び南東斜面部の急傾斜地を除く23,520㎡の範囲に、鹿島台古墳群に属する古墳をはじめ、縄文時代中期から古墳時代中期にかけての竪穴住居や土坑が著しく重複した状態で確認され、本調査が実施されることになった。上層の本調査はA区から開始され、続いてB区、D区、C区の順に行われた。それぞれ上層の本調査の後、下層の確認及び本調査が行われ、平成14年9月にすべての発掘調査が終了した。また、鹿島台古墳群の一部を構成する盛土が認められる古墳8基の調査についても、それぞれの古墳が所在している該当区の調査の際に併行して行った。

整理作業は平成14年に発掘調査と併行して始めた。各調査区の検出遺構数や出土遺物量を考慮して、報告書をAD区、C区、B区の分冊及び刊行順で計画され、その計画に従ってAD区、C区、B区の順に整理作業が進められた。平成17年3月現在もC区、B区については整理作業が継続中である。本書においては、平成14年度から平成17年度にかけて整理作業を行った鹿島台遺跡A区とD区及び当該区に所在する鹿島台古墳群の一部について報告する。

発掘調査及び整理作業に関わる各年度の組織・担当職員及び作業内容は以下のとおりである。

#### (1) 発掘調査

平成12年度

調査期間：平成12年4月5日～平成13年3月30日

内容：（上層）確認調査 28,470㎡のうち2,847㎡

本調査 23,520㎡のうち9,088㎡

（下層）確認調査 89㎡

本調査 なし

組織：南部調査事務所長 高田 博

担当者：副所長 柴田龍司 上席研究員 鈴木良征 上席研究員 渡邊昭宏

平成13年度

調査期間：平成13年4月2日～平成14年3月31日

内容：(上層) 本調査 7,222㎡

(下層) 確認調査 440㎡

本調査 846㎡

組織：南部調査事務所長 高田 博

担当者：副所長 白井久美子 室長 小林清隆 上席研究員 稲生一夫 上席研究員 地引尚幸

上席研究員 石川 誠 研究員 黒沢 崇 研究員 高梨友子

平成14年度

調査期間：平成14年4月1日～平成14年9月30日

内容：(上層) 本調査 7,210㎡

(下層) 確認調査 なし

本調査 なし

組織：南部調査事務所長 鈴木定明

担当者：主席研究員 土屋治雄 室長 小林清隆 上席研究員 地引尚幸

上席研究員 田島 新

## (2) 整理作業

平成14年度

内容：水洗注記の一部と記録整理の一部

組織：南部調査事務所長 鈴木定明

担当者：主席研究員 土屋治雄

平成15年度

内容：水洗注記の一部から実測の一部まで

組織：調査部副部長兼整理課長 深澤克友 南部調査事務所長 鈴木定明

担当者：上席研究員 植草 均 上席研究員 中道俊一 整理技術員 木島桂子

平成16年度

内容：水洗注記の一部から原稿執筆の一部まで

組織：調査部整理課長 及川淳一 南部調査事務所長 高田 博

担当者：主席研究員 栗田則久 上席研究員 中道俊一 整理技術員 木島桂子

平成17年度

内容：原稿執筆の一部から刊行まで

組織：調査部整理課長 加藤修司

担当者：整理課長 加藤修司 主席研究員 栗田則久 上席研究員 中道俊一

整理技術員 木島桂子

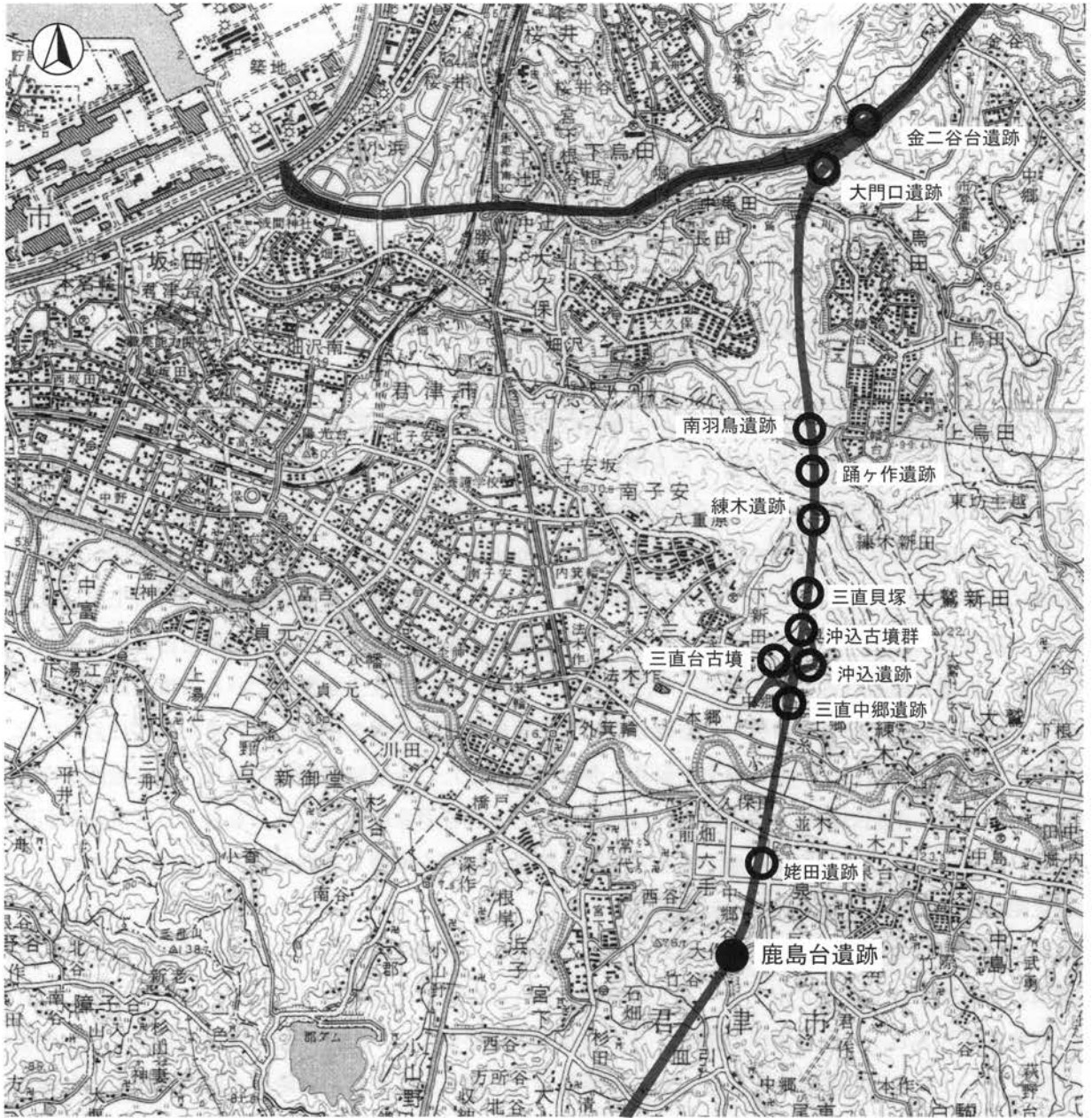
## 2. 調査の方法

調査にあたっては、国土方眼座標（第IX座標系）に基づいたグリッドの設定を行っている。調査対象範囲を覆うように、20m×20mの方眼網を設定し、これを大グリッドとした。大グリッドの名称は、南北方向を北から1, 2, 3…、東西方向は西からA, B, C…とし、この数字とアルファベットを組み合わせで大グリッド名とした。さらに、この大グリッドを2m×2mの小グリッドに100分割し、北から00～90、西から00～09とした。この大グリッドと小グリッドを組み合わせで、例えば3D-45というように呼称した（第3図）。

上層の確認調査は、まず調査対象面積の10%について、トレンチを設定して遺構の種類や時期及び遺構の広がりを知るために行われた（第4・5図）。このトレンチは、調査地の地形や調査範囲にあわせて設定し、状況に応じて拡張しながら全体の把握に努めた。その結果、A区からは、鹿島台古墳群に属する盛り土を伴う古墳（鹿島台古墳群4号墳）をはじめ、盛り土を失っている古墳の周溝、弥生時代から古墳時代中期にかけての竪穴住居跡及び土坑などを多数検出した。確認調査の結果を受けて、A区上層は全域について本調査となった。D区の上層については、確認調査の結果、A区と同様に鹿島台古墳群に属し、盛り土を伴う古墳（鹿島台古墳群7, 8, 9, 11号墳）をはじめ、盛り土を失っている古墳の周溝、弥生時代から古墳時代中期にかけての著しく重複した竪穴住居群、近世の溝を検出した。また当区においては、縄文時代中期から後期にかけての縄文土器片も多量に出土した。上層確認調査の結果、調査範囲最南端のD区においては、上記の遺構の検出がされた緩斜面部を本調査対象範囲とした。なお、D区東側斜面部及び南側斜面部については、急斜面地であると同時に黒色土が厚く堆積し遺構も検出できなかったため上層本調査範囲及び下層確認調査範囲の対象外とされた。

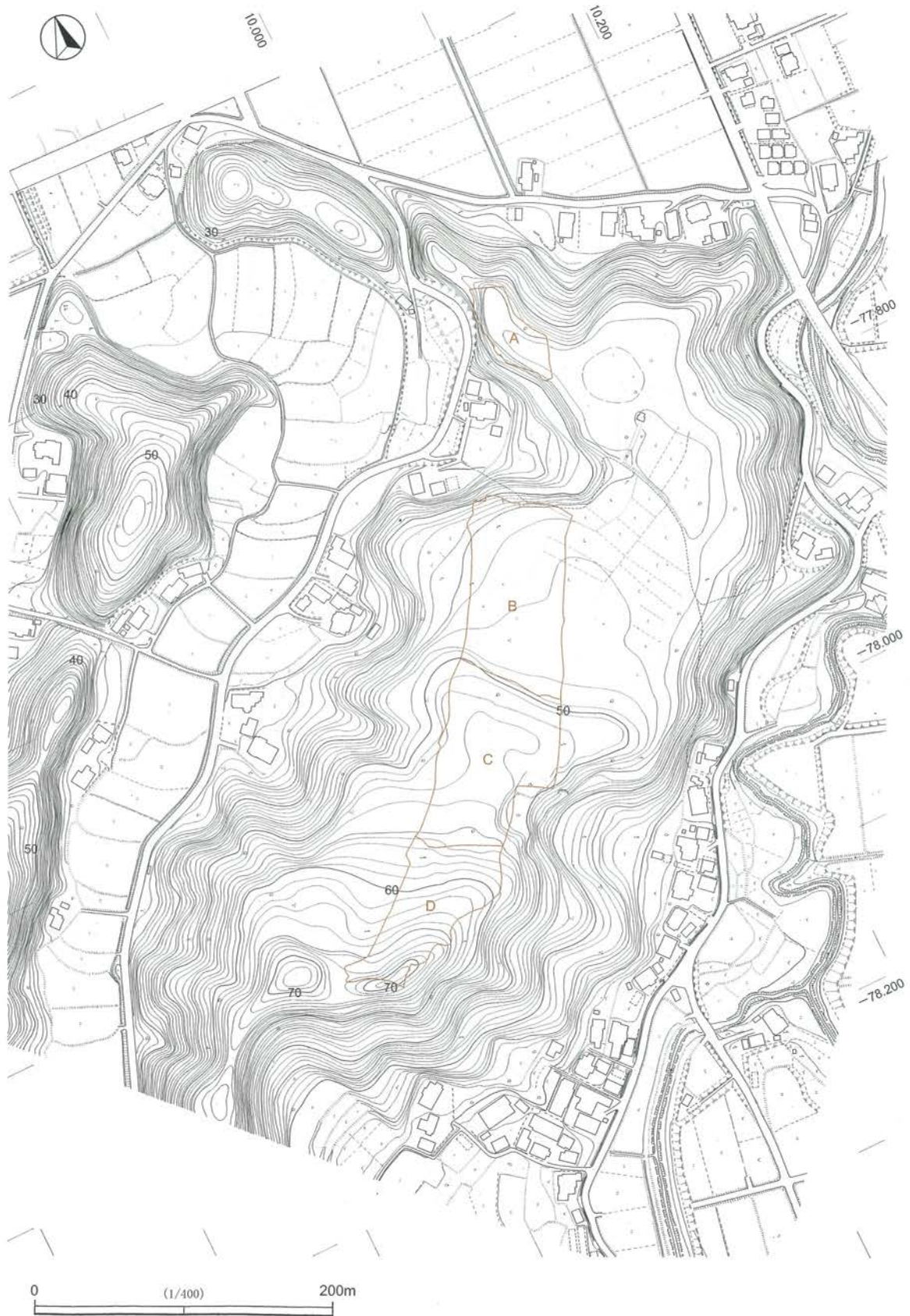
本調査にあたっては、A～D区、それぞれの区に分けて、各遺構に種別ごとの通し番号を付した。各区各遺構の種別については、アルファベットの略称で、A区の竪穴住居跡にはA S I、A区の土坑にはA S K、溝状遺構A S D、方形周溝状遺構A S S、盛り土が現存せず、本調査段階で周溝が確認された古墳をA S Mとし、これに通し番号を付した。なお、鹿島台古墳群として踏査の段階から確認されていた盛り土を伴う古墳については、鹿島台古墳群での呼称（例 4号墳）をそのまま用いることとした。D区の調査もA区同様に遺構種別の前にアルファベットのDを冠した上で、新たに通し番号を付した。整理作業においても調査時の遺構番号を踏襲している。

上層の本調査終了後、調査対象面積の4%について2m×2mのグリッドを均等性、地形を考慮した上で設定し、下層の確認調査を行った。その結果、A区、D区共に遺物の出土が確認されなかったため、本調査は行わず、確認調査で終了とした。

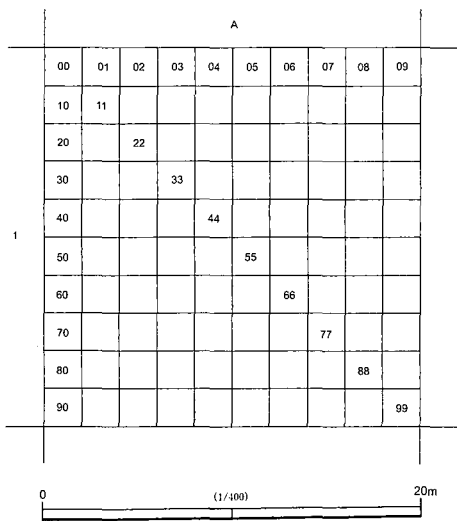


第1図 東関東自動車道（木更津・富津線）関連遺跡位置図（1：50,000）

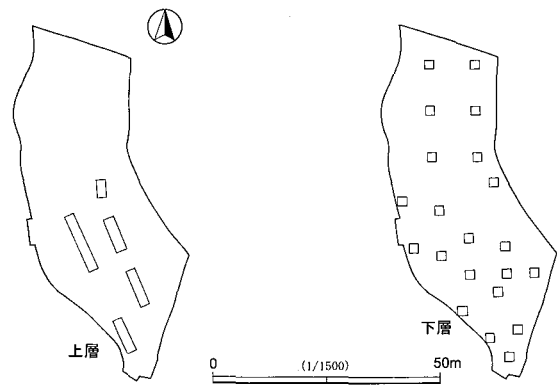




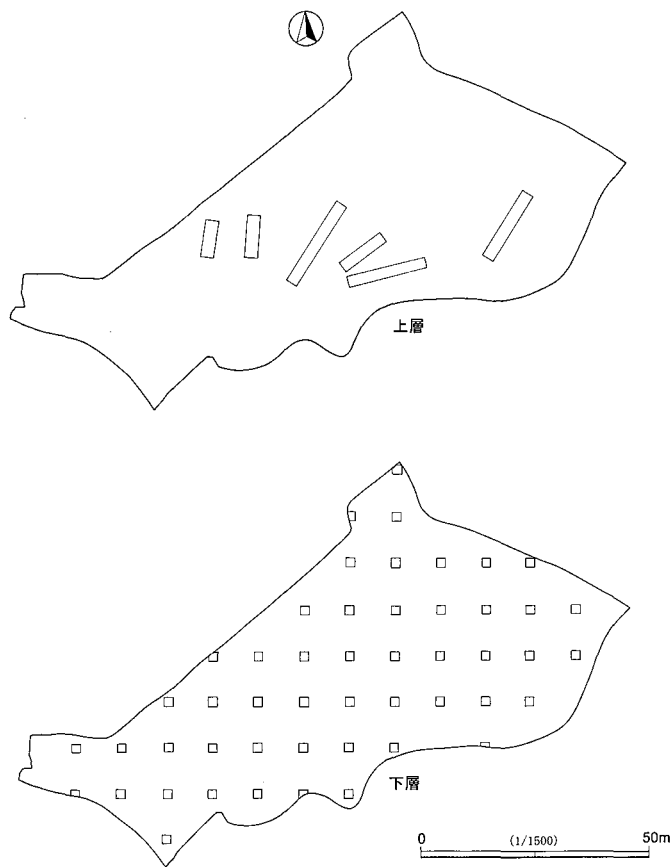
第2図 A~D区分割図



第3図 グリッド名称例



第4図 A区確認調査設定図



第5図 D区確認調査設定図

## 第2節 遺跡の位置と環境

### 1. 地理的環境

鹿島台遺跡の所在する君津市は、房総半島のほぼ中央部に位置し、北西端は東京湾に面している。東京湾に面する部分は、かつては約4kmの海岸線であったが、1960年代に埋め立てられ、自然形成の海岸線は消滅している。北部は台地を形成しており木更津市と接し、東部は標高200m～300mの清澄山系、南部は三舟山、鹿野山、高宕山系の山地に所在する。清澄山に源流を發し君津から木更津を経て東京湾に注ぐ小櫃川と、高宕山に源流を發し君津市中心部を通り東京湾に注ぐ小糸川の二つの河川による沖積平野が東京湾に面する君津市北西部に形成されている。中でも小糸川は、西に流れを変える地点において、北は下総台地、南は上総丘陵と境界となっており、蛇行しながら樹枝状の小支谷を開析、中流域では河岸段丘を形成している。当遺跡が所在する君津市六手地区は、蛇行しながら西流する小糸川両岸の段丘地帯が退いて沖積地の範囲が開ける扇状地の頂点にあっている。

君津市鹿島台遺跡は、小糸川が東京湾に注ぐ現在の河口から7kmほど上流、左岸約800mの南側河岸段丘上に位置する。遺跡周辺の地形は、蛇行する小糸川両岸に沖積地が形成され水田耕作が営まれており、その沖積地に向かって南北から河岸段丘が樹枝状に張り巡らされている様相を示す。その細長い丘陵部のひとつに鹿島台遺跡も所在している。遺跡北端部の丘陵先端から遺跡南端部まではおよそ500m。丘陵東側直下には、水源を鹿野山に發する小糸川の支流馬登川が流れる。標高は丘陵先端の北端部で45m、丘陵奥にあたる南端部で75mあり、河岸段丘状の地形変化を示し、遺跡内で約25mの比高が認められる。

### 2. 歴史的環境

鹿島台遺跡の所在する小糸川流域には、低地あるいは丘陵という立地条件に関わらず、数多くの遺跡が分布・確認されている。縄文時代以降の主な遺跡を取り上げて、歴史的様相を概観してみる。

#### (1) 縄文時代

縄文時代の遺跡としては、調査例が少ない中において小糸川対岸に所在する三直貝塚(56)や練木遺跡(58)が確認されている。小糸川の対岸ではあるが、直線距離にしておよそ1.5km北側の丘陵上に位置する三直貝塚では、縄文時代後期から晩期にかけての集落と盛土遺構が見つかった。この三直貝塚より北側高地に位置する練木遺跡の調査では、縄文時代中期の集落と石鏃の製作跡が検出されている。これらの調査成果から、小糸川両岸の丘陵上・微高地上には、縄文時代の集落が数多く形成されている可能性が指摘できる。

#### (2) 弥生時代

弥生時代の遺跡としては、鹿島台遺跡の約2km西、小糸川左岸の沖積地に位置する常代遺跡(33)の成果があげられる。常代遺跡では、100基を越える方形周溝墓群の検出とともに多量の木製品が出土している。また、郡条里遺跡(31)からは中期の方形周溝墓の検出、条痕文土器が出土している他、小糸川上流部ではあるが、鹿島台遺跡と同様に台地上に位置する畝山遺跡(128)では、中期の環濠が検出されるという成果が報告されている。鹿島台遺跡が所在する丘陵直下の沖積地においても、泉遺跡(9)で後期の流路や木製の高杯が見つかっており、生活拠点の痕跡がうかがえる。今後、調査例が増えれば、小糸川中流域の沖積地、河岸段丘上を問わず集落の展開が明らかにされる遺構が検出されるものと期待できる。

### (3) 古墳時代

古墳時代の遺跡は、小糸川下流域から中流域にかけて数多くの古墳が所在しており、この地域においては最も周知されている時代といえる。はじめに古墳に限って着目すれば、小糸川流域というやや広い範囲においては、下流域の須恵国造の墓域とされる内裏塚古墳群があげられる。なかでも、5世紀中葉の築造の内裏塚古墳(84)は、千葉県内最大の墳丘を有する前方後円墳で、以後、九条塚(87)、稲荷山(81)、青木亀塚(82)、古塚(83)、三条塚(86)と全長100m前後の大型前方後円墳が周辺に築造され、7世紀代の大型方墳に至るまで首長級の古墳が継続されている。中流域では、4世紀末～5世紀初頭の初期前方後方墳である道祖神裏古墳(42)、中期型式前方後円墳で盾形周溝をともなう八幡神社古墳(36)が特に著名で県史跡にも指定されている。6世紀代の前方後円墳星谷上古墳(44)は、後円部の調査を行った結果、箱型石棺が発見されている。他にも、花輪堂古墳(55)など、中流沖積地に墳長40～60m前後の前方後円墳が数多く築造されている。上流域に目を向けると、丘陵上に方墳2基、円墳22基が群集した大井戸八木古墳群(120)をはじめ、前方後方墳2基を含む駒久保古墳群(119)、金ヶ谷古墳群(122)、福岡古墳群(121)など、丘陵上に円墳を中心とした群集墳が随所に築かれていることが特徴としてあげられる。

鹿島台遺跡周辺に目を向け、当遺跡が所在する六手地区から皿引、尾車地区を概観すると、狐山古墳(2)をはじめとし、西山古墳群(3)、熊野前古墳(4)、奥中谷古墳群(5)、八幡神社古墳群(6)といった古墳が集約的に分布している。また、遺跡東側を流れる馬登川を数百メートル上流に遡れば、段丘の縁辺に北から順に丹後塚(11)、南丹後塚(12)、北天王塚(13)、天王塚(14)、羽黒下(15)、天皇塚(16)、皿引古墳群(17)と古墳が連なる。大半は未調査の古墳であるが、成果として、鹿島台遺跡・鹿島台古墳群が所在する丘陵の最先端に位置する狐山古墳は、6世紀中葉に築造された前方後円墳であり、小糸川流域の古墳調査では出土例が少ない埴輪が出土しており、埴輪を伴う古墳であったと報告されている。奥中谷古墳群は、平成7年度に円墳2基の調査が行われており、6世紀初頭および7世紀前半の築造であることがわかっている。尾車に所在する前方後円墳天皇塚古墳は、貴人および陵墓(ミサキ)伝承が色濃く残っていることでも知られている。谷を挟み鹿島台遺跡の東隣の丘陵部、君ヶ作、白駒、竹際、武勇それぞれの地区も、10m～20mの墳長を持つ円墳を中心として、群集墳が所在している。

後期以降になると、これら群集墳を築造した丘陵斜面に多数の横穴を築き、横穴群として残存している。鹿島台遺跡周辺には、六手中谷横穴墓群(別称奥中谷横穴墓群)3基(25)をはじめ、常代谷田横穴群6基(26)、君ヶ作横穴群2基(70)が周知されている。

古墳時代の集落遺跡は古墳にくらべ検出例は少ないが、遺跡丘陵北側直下の姥田遺跡(8)で後期の円形周溝跡に生活痕跡が見られる。出土遺物が本報告書で報告される鹿島台遺跡所在の古墳群の築造時期と合致することから、鹿島台遺跡が所在する丘陵上を墓域とし、生活、生産の拠点を丘陵直下の低地に展開していたのではないかと推測できる。馬登川をはさんで、姥田遺跡の対岸、同じく小糸川左岸沖積地に位置する泉遺跡(9)においても後期の集落跡が検出されている。泉遺跡から沖積地をさらに北東へ1kmほど目を移すと、泉遺跡に連続する6世紀中葉から7世紀前半にかけての集落の形成が確認された天神台遺跡(60)が所在する。2kmほど下流域の常代遺跡(33)では、やはり後期の集落の存在が明らかになっている。目を対岸の小糸川右岸に向けると、鹿島台遺跡の真北1kmの沖積地に三直中郷遺跡(38)が広く展開している。ここでも古墳時代後期から中世に至るまでの集落跡が確認されている。今後、小糸川中流域沖積地での調査例が増えれば、古墳築造に携わった人々の生活・生産の実態も明らかになると期待できる。



#### (4) 奈良・平安時代

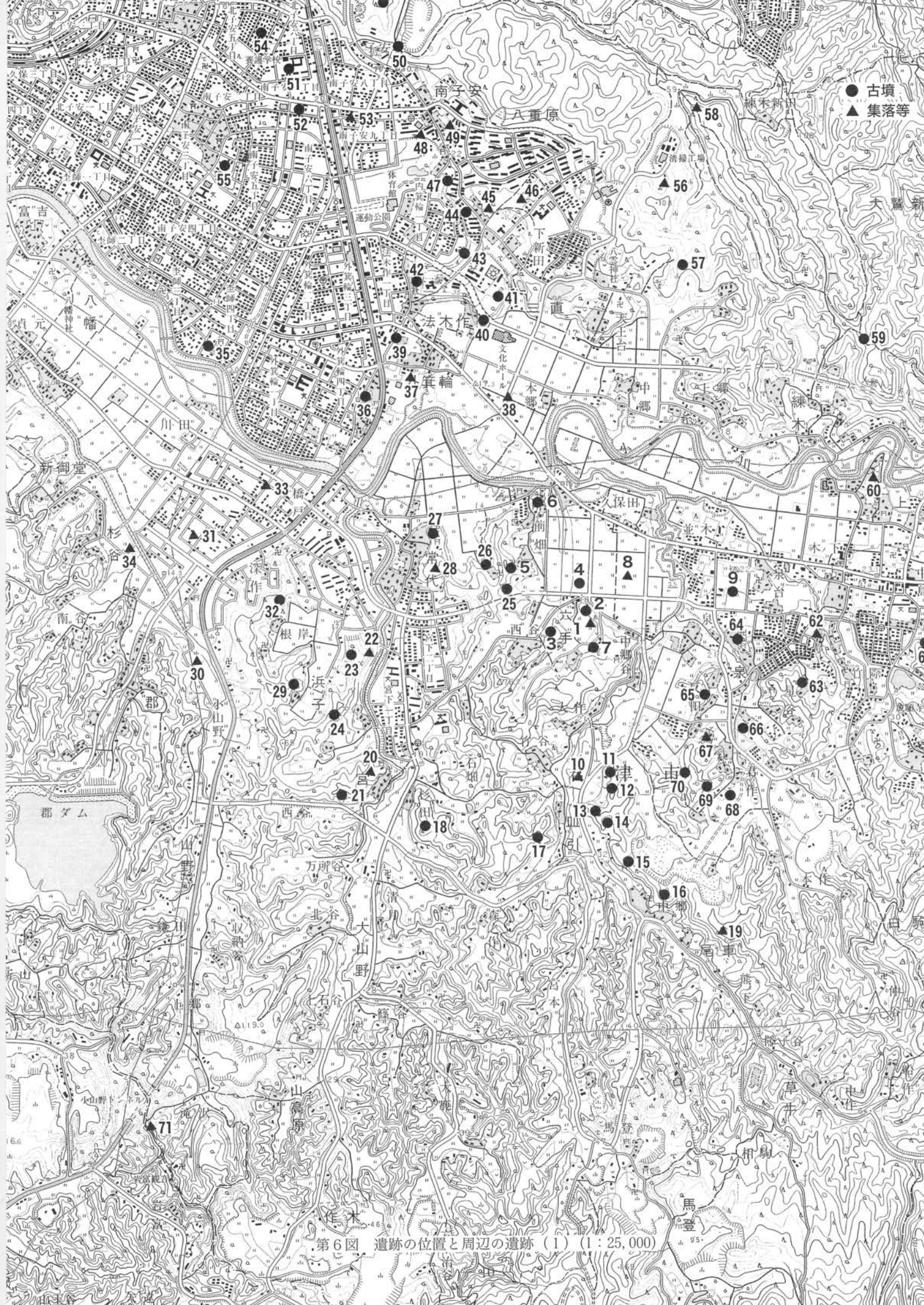
奈良・平安時代の遺跡を概観するならば、鹿島台遺跡北西約3.7km、扇状地が広く開ける地域の丘陵中腹に、8世紀はじめに建立された九十九坊廃寺(49)が所在する。九十九坊廃寺は、古代周淮郡の郡寺であったといわれ、講堂跡や塔跡が確認されたり、蓮華文の鎧瓦が出土しているが、伽藍配置や出土瓦など、研究が進められている途上である。また、『日本三代実録』元慶元年(877年)閏二月廿六日条で従五位下に叙された「上総国常世神」が北西1km先の丘陵上に位置する常代神社であると考えられている。沖積地に展開する郡条里遺跡(31)の調査では、存在が推定される条里遺構の復元をおこなっている。複合遺跡でもある常代遺跡からは奈良・平安期の集落跡が見つまっている。「郡」という地名からも、早くから須恵郡衙推定地として注目されている地域でもあり、小糸川中下流域は古代房総半島の中心地的な役割を果たした地域であるといえる。

#### (5) 中・近世

中世の遺跡となると、対岸台地上の外箕輪遺跡(37)から、鎌倉時代の土師器小皿、コネ鉢、甕などが出土しているほか、掘立柱建物跡3棟、井戸1基が検出されており、13世紀の領主層の姿の一端が垣間見れる。この外箕輪遺跡の周辺は、13世紀末期に幕府から称名寺に寄進された荘園であったことから、集落と称名寺領との関係が注目される。戦乱の世を示す遺跡も数多く所在している。鹿島台遺跡の直近においても、狐山古墳との間に位置する狐山砦(7)では、曲輪の一部を確認している。他にも常代城跡(28)、北上砦跡(71)、荷倉砦跡(67)、三舟山砦跡(77)など、丘陵上には数多くの城や砦が築かれている。中でも三舟山砦跡は、永禄10年(1567)の三舟山合戦の折、相模の後北条氏が築いた砦跡であり、合戦は相手方の里見氏が勝ち、勢力を盛り返している。

近世になると、馬登川上流、尾車に所在する尾車十三塚群(19)、西隣の丘陵地の宮下西谷塚群(20)をはじめとして、小糸川対岸でその数29基を数える三直B行人塚(46)など、古墳と合間見入る形で塚が築かれた。この地域の塚信仰の深さを物語っている。また、高間屋敷跡(22)の調査では、文献資料との両面から江戸で商いを行っていた高間伝兵衛の足跡や、江戸時代の豪商の在地生活の一端が明らかにされている。

以上各時代を概観したように、鹿島台遺跡周辺、小糸川中下流域一帯は、縄文時代から近世に至るまで、貴重な遺跡が数多く分布している地域である。



第6図 遺跡の位置と周辺の遺跡(1) (1:25,000)

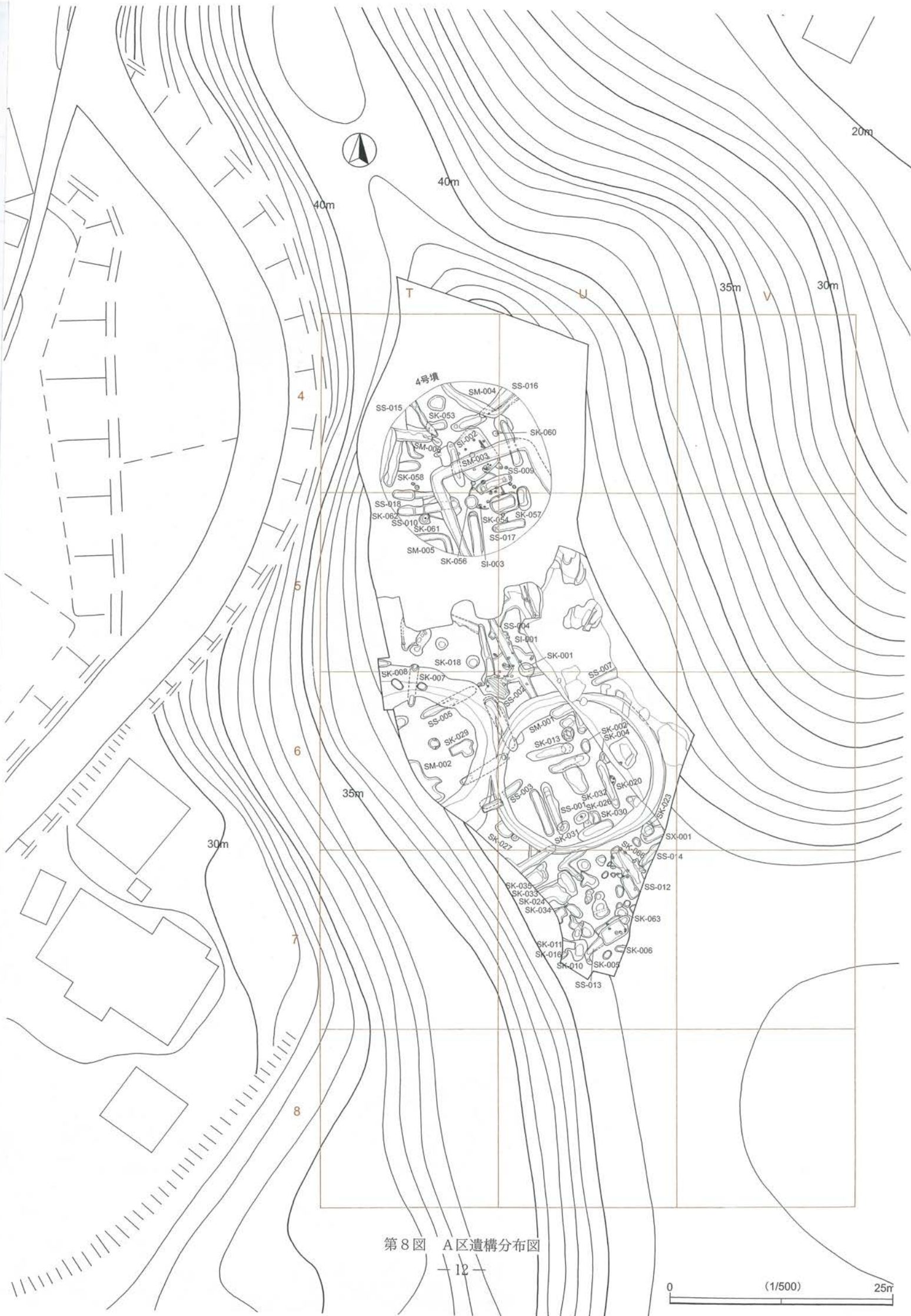


東  
京  
湾

浦  
賀  
水  
道

第7図 遺跡の位置と周辺の遺跡(2) (1:100,000)





第8图 A区遗构分布图

## 第2章 A区の遺構と遺物

### 第1節 縄文時代

#### 1. 竪穴住居

SI-001 (第9・10図, 図版3・23)

T5-99, U5-80・81・90・91, U6-00・01グリッドに位置する。弥生時代の方形周溝墓や古墳などに大半を削平されており, 詳細は不明である。長軸の残存長は4.3m, 短軸は3.3mで, 4.5m×4.0m程度の大きさであったと考えられる。主軸方位は不明であるが, 埋設土器の位置などからN-130°-Wと推測される。確認面からの深さは30cm程度あるが, 覆土には焼土粒やロームブロックの混入が目立つ土層があり, 人為堆積の可能性が高い。床面からは直径20cm~40cm, 深さ30cm~50cmのピットが4基検出されており, 柱穴と考えられる。中央よりやや西側に, 80cm×60cmの皿状の土坑に底部を欠損した土器が埋設されている。住居床面直上に黒灰色土が堆積した後埋設されており, 住居跡より新しい可能性がある。

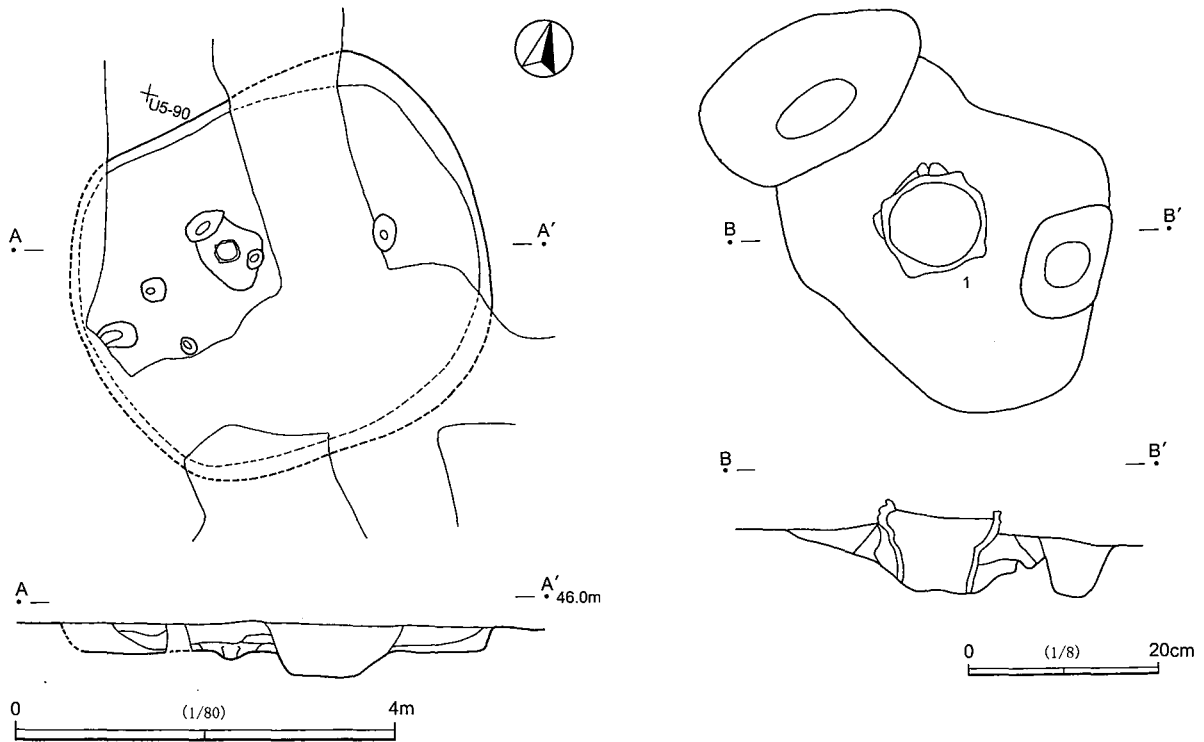
実測できたのは, 埋設された土器1点のみである。被熱の程度は弱い。1は深鉢上半部で, 全周する。口縁部から頸部にかけて, 半裁竹管による刻みをもつ隆帯を, 横位に三角状もしくは渦巻き状に貼り付ける。部分的に先の尖った棒状工具を使用した羽状の刻みもみられる。渦巻き状になる部分には, 器面から円錐形に突出するように粘土を貼り付ける。突起は4対設けられ, そのうち正面側は隆帯が3重の輪を構成するよう作り出す。他の3対は, 隆帯が口唇に向かって突き出すような形状を呈し, 片側に三叉文と円形刺突を配する。隆帯の間はやや太い棒状工具もしくは半裁竹管による平行沈線で充填するのを基本とするが, 短い3本の沈線と半裁竹管による刺突を組み合わせた「ヨ」状の文様を充填する区画, 円形刺突を三叉文で囲んだ「玉抱き三叉文」が配される区画も存在する。頸部は上下を刻みのない太い隆帯で区画し, 中間に横位の波状沈線を巡らせ, 上下に縦位の平行沈線を充填する。胴部はほとんど欠損しているため不明な点が多いが, 刻みのない隆帯による横位の三角形区画文を配し, 沈線で充填するとみられる。正面やや右側には刻みのある隆帯を円形に貼り付け, 中に円錐状の突起を貼り付ける。新旧各要素の混在が認められるが, 井戸尻編年における藤内I~II式に相当するものとみられる。

SI-003 (第11図, 図版3・23)

T4-98・99, U4-90, T5-08・09, U5-00グリッドに位置する。弥生時代の方形周溝墓や住居跡に切られるため, 規模はかろうじて押さえられるものの, 詳細は不明である。不整円形を呈し, 南北長・東西長とも約4.2m, 主軸方位は不明である。覆土はほとんど残存していなかった。床面南西部に硬化している部分があるが, 範囲は狭い。床面からは直径25cm, 深さ40cmほどのピットが多数検出されている。壁際のピットは住居中央に向かって傾斜して掘られているものもあり, 壁柱穴と考えられる。炉跡は後世の遺構に削平されたと思われる。

遺物は少なく, 曽利系の土器が主体である。1は深鉢胴部で, 頸部とみられるくびれに半裁竹管による沈線が3条横位に配され, 蛇行隆起線がそれに沿うように貼り付けられる。胴部は櫛羽状条線を地文として, 蛇行する沈線が縦位に施される。2は深鉢口縁部で, 頸部くびれに半裁竹管による沈線が2条横位に配され, その上側は無文帯となる。口唇部はわずかに肥厚して内湾する。炭化物の付着が顕著である。





第9図 SI-001

## 2. 土坑

### SK-051 (第12図, 第1表, 図版4)

T4-56・57グリッドに位置する。南北1.8m, 東西1.9mの楕円形を呈する。最深0.4mで坑底はほぼ平坦である。覆土中には大量の焼礫が集積されていた。いわゆる集石土坑とされるものであろう。

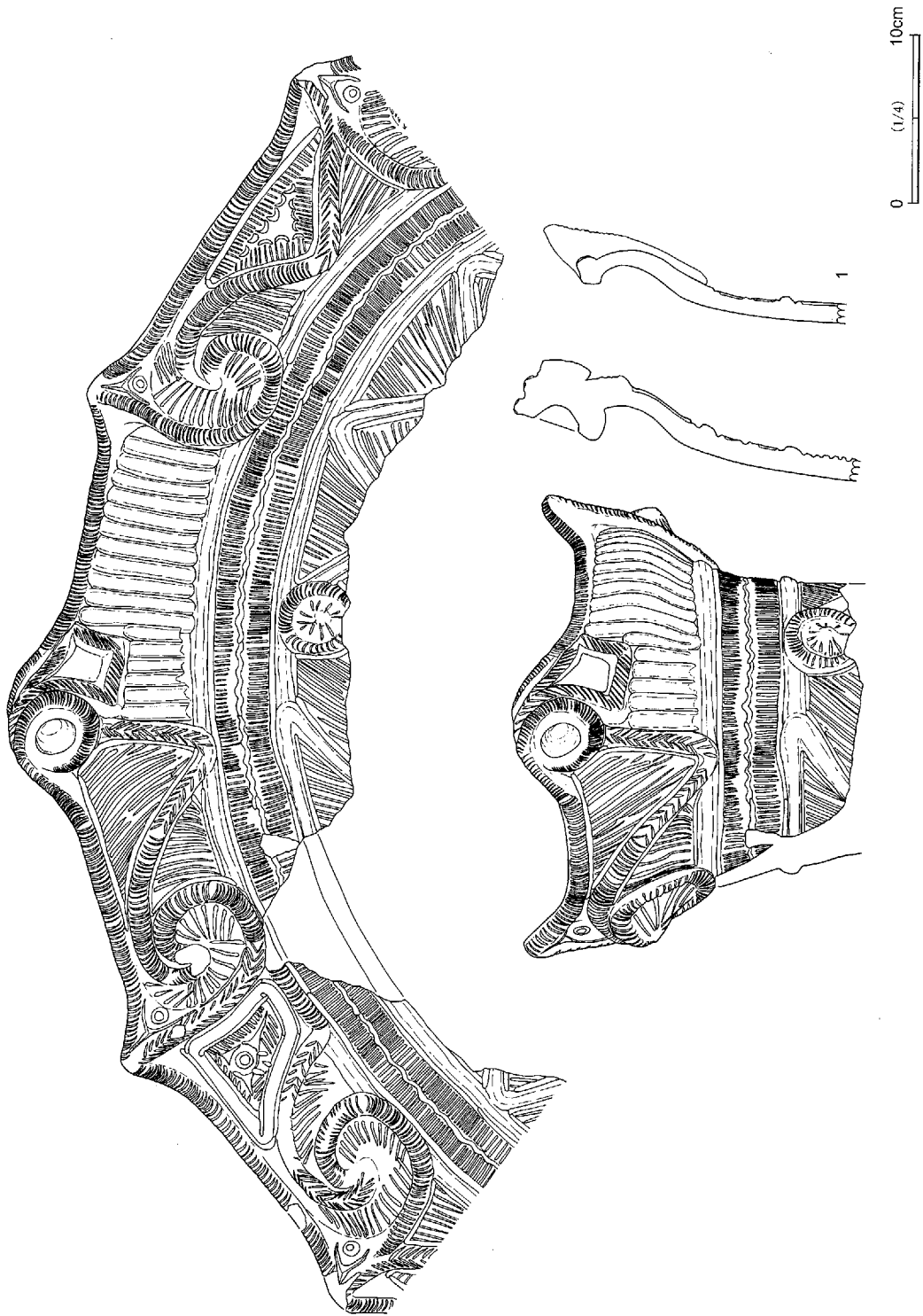
土器の出土はほとんど無く, 遺物から時期の決定はできない。性格が同じと考えられるSK-052土坑からは, 撚糸文土器および条痕文土器が出土しており, いずれかの時期であろう。

礫は総計90点出土した。完形礫2点・破損礫88点で大半が破損礫である。破損礫のうち, 表面と剖面がどちらも赤化しているものが87点であり, 大半の礫が分割後に焼かれていることが推察される。重量平均は113gで小型のもので構成されている。石材組成は, 砂岩46点・流紋岩27点・チャート11点・ホルンフェルス6点で, 君津市周辺の河川で採集できる礫組成と類似する。出土状況は, 南西部に分布し, 覆土上部から出土しており, 覆土下部からは出土していないことが特徴である。しかも, 底部は赤化しておらず, 焼土や炭化物も出土していない。当該地域の早期の集石土坑が検出した木更津市久野遺跡においては, 礫が総計100点以下のものは覆土上部付近に礫が出土する傾向がみられ, 底部も赤化しておらず, 焼土や炭化物も出土していない。隣接するSK-052においても, 同様の礫組成を示し, 出土状況も類似する。SK-051・052のような集石土坑のあり方は, 君津地域における早期の集石土坑の普遍的なあり方といえよう。

### SK-052 (第12図, 第2表, 図版4)

T4-76グリッドに位置する。南北0.8m, 東西1.2mの楕円形を呈する。最深0.4mで坑底は楕円状を呈する。土坑とは位置がややずれるが, 大量の焼礫が集積されている。集石土坑である。

出土した土器は小片のみである。1はLR縄文が縦位に施される。グリッドの遺物出土状況から, 井草式に属する可能性が強い。2・3は表裏に条痕が施されるもので, 胎土に植物繊維を含む。遺存状況は悪く,



第10图 SI-001出土遺物

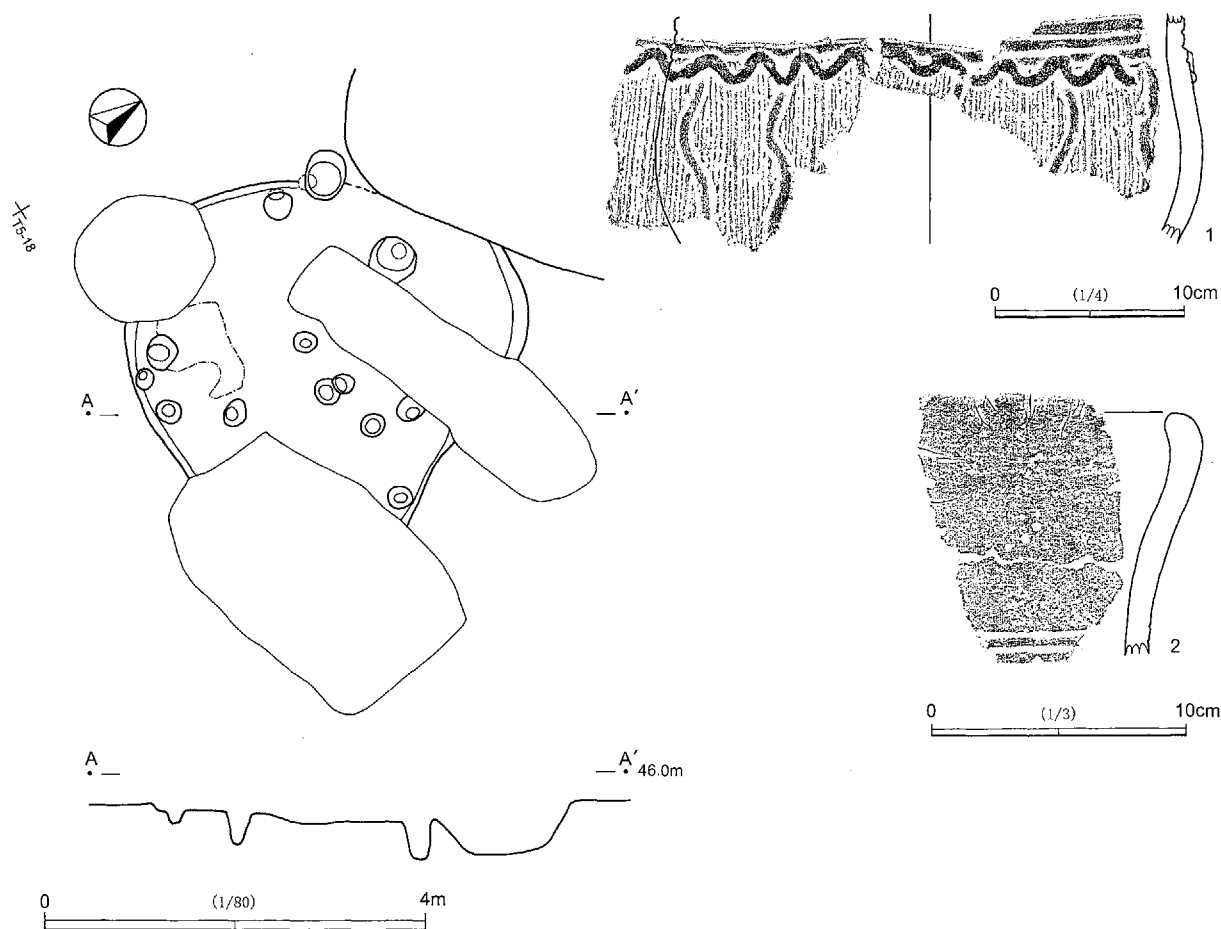
時期の決定は難しいが、グリッドの出土状況から鵜ヶ島台式から茅山下層式にかけてと推測される。

礫は総計50点出土した。完形礫3点・破損礫47点で大半が破損礫である。破損礫のうち、表面と割面がどちらも赤化しているものが44点であり、大半の礫が分割後に焼かれていることが推察される。重量平均は118gで小型のもので構成されている。石材組成は、砂岩21点・流紋岩20点・チャート5点・ホルンフェルス4点で、君津市周辺の河川で採集できる礫組成と類似する。出土状況は、中央部に分布し、覆土上部から出土しており、覆土下部からは出土していないことが特徴である。しかも、底部は赤化しておらず、焼土や炭化物も出土していない。SK-051と類似する。

SK-061 (第13図, 図版5・23)

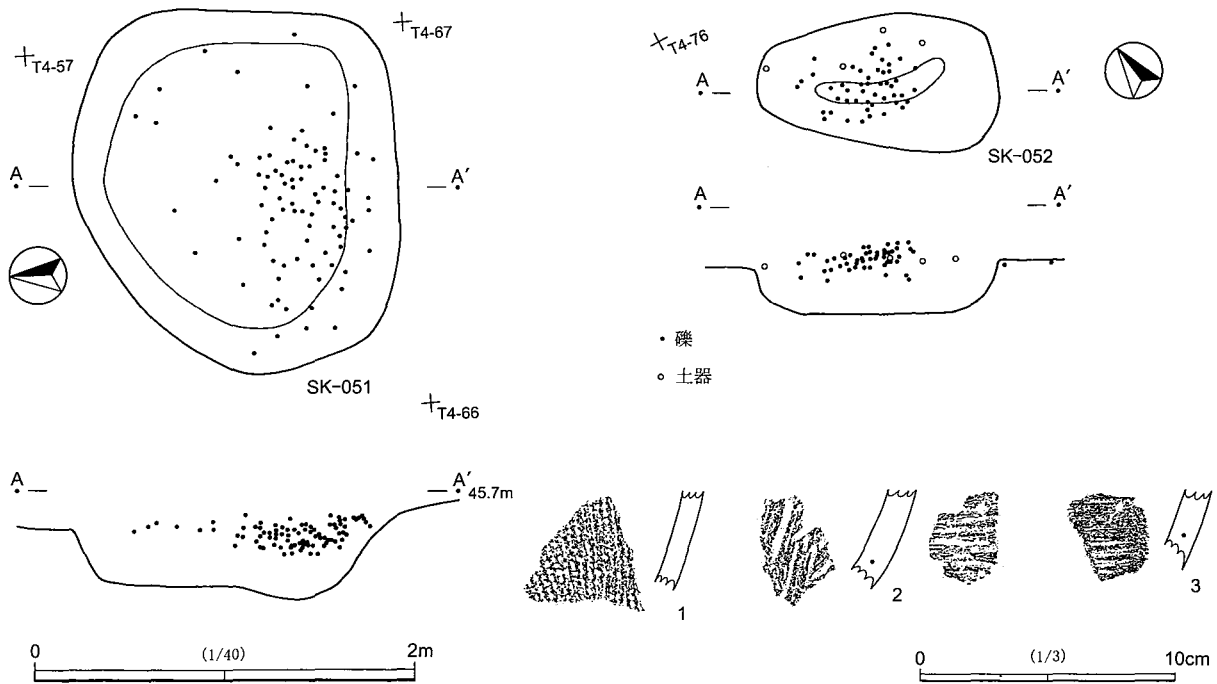
T5-15・16グリッドに位置する。長軸140cm, 短軸110cmの不整楕円形を呈し、主軸方位はN-35°-Eである。深さは確認面から75cmを測り、覆土は自然堆積と考えられる。壁は坑底から直上するように立ち上がり、中央部で段状に屈曲して広がるように坑口に至る。坑底は平坦で、中央部に直径20cm, 深さ25cmのピットが掘られている。陥穴であろう。

1は深鉢口縁部で、胎土に植物繊維を含み、表裏ともいわゆる条痕文が横位に施される。2は包含層や古墳の墳丘下などから出土した土器片が接合したものであるが、実測図左端の破片1点がこの陥穴の最下層から出土した。この陥穴の時期を示すものであるかは慎重に判断する必要があるが、仮にそうであれば希有な事例であると考えられる。深鉢胴部から口縁部にかけてで、胎土に植物繊維を含み、器表面を条痕文で調整する。口唇はやや内傾するように削ぎ落とされ、端部に刻みが施される。2段の屈曲をもち、間に棒状工具による押し引きで幾何学的な文様を描出する。茅山下層式に属すると考えられる。



第11図 SI-003





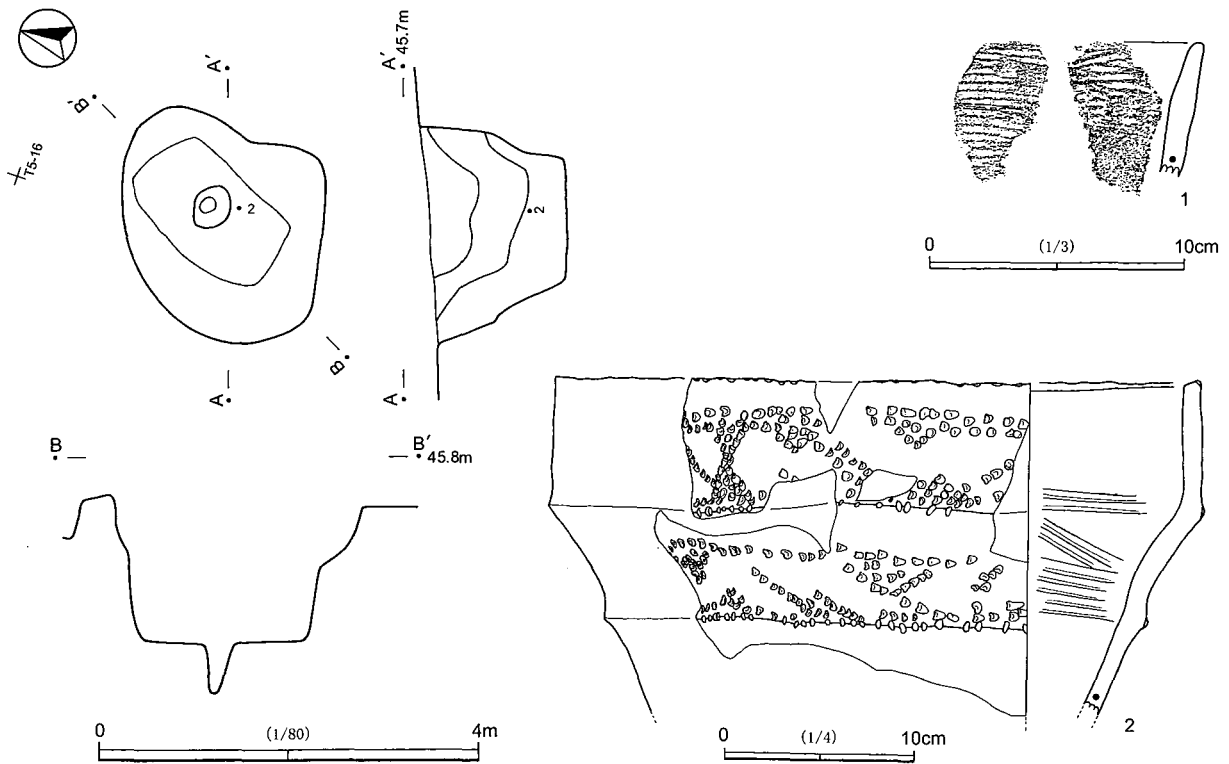
第12図 SK-051・052

第1表 SK-051土坑礫組成表

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
				割面赤化	割面非赤化	割面赤化	割面非赤化		
		IA	IB	IIA	IIB	IIC	IID		
チャート	個数	0	0	3	0	0	2	5個	10.0%
	重量	0	0	517	0	0	161	678g	11.5%
	重量平均	0	0	172	0	0	81	136g	
ホルンフェルス	個数	0	0	3	0	0	1	4個	8.0%
	重量	0	0	563	0	0	198	761g	12.9%
	重量平均	0	0	188	0	0	198	190g	
砂岩	個数	0	0	21	0	0	0	21個	42.0%
	重量	0	0	2,078	0	0	0	2,078g	35.3%
	重量平均	0	0	99	0	0	0	99g	
流紋岩	個数	3	0	17	0	0	0	20個	40.0%
	重量	805	0	1,570	0	0	0	2,375g	40.3%
	重量平均	268	0	92	0	0	0	119g	
合計	個数	3	0	44	0	0	3	50個	100.0%
	重量	805	0	4,728	0	0	359	5,892g	100.0%
	重量平均	268	0	107	0	0	120	118g	
組成比	個数比	6.0%	0.0%	88.0%	0.0%	0.0%	6.0%	100.0%	
	重量比	13.7%	0.0%	80.2%	0.0%	0.0%	6.1%	100.0%	

第2表 SK-052土坑礫組成表

石材	分類	完形礫		破損礫				合計	組成比
		表面赤化	表面非赤化	表面赤化	表面赤化	表面非赤化	表面非赤化		
				割面赤化	割面非赤化	割面赤化	割面非赤化		
		IA	IB	IIA	IIB	IIC	IID		
チャート	個数	0	0	10	0	0	1	11個	12.2%
	重量	0	0	377	0	0	5	382g	3.8%
	重量平均	0	0	38	0	0	5	35g	
ホルンフェルス	個数	0	0	6	0	0	0	6個	6.7%
	重量	0	0	929	0	0	0	929g	9.2%
	重量平均	0	0	155	0	0	0	155g	
砂岩	個数	2	0	44	0	0	0	46個	51.1%
	重量	322	0	4,465	0	0	0	4,787g	47.3%
	重量平均	161	0	101	0	0	0	104g	
流紋岩	個数	0	0	27	0	0	0	27個	30.0%
	重量	0	0	4,033	0	0	0	4,033g	39.8%
	重量平均	0	0	149	0	0	0	149g	
合計	個数	2	0	87	0	0	1	90個	100.0%
	重量	322	0	9,804	0	0	5	10,131g	100.0%
	重量平均	161	0	113	0	0	5	113g	
組成比	個数比	2.2%	0.0%	96.7%	0.0%	0.0%	1.1%	100.0%	
	重量比	3.2%	0.0%	96.8%	0.0%	0.0%	0.0%	100.0%	

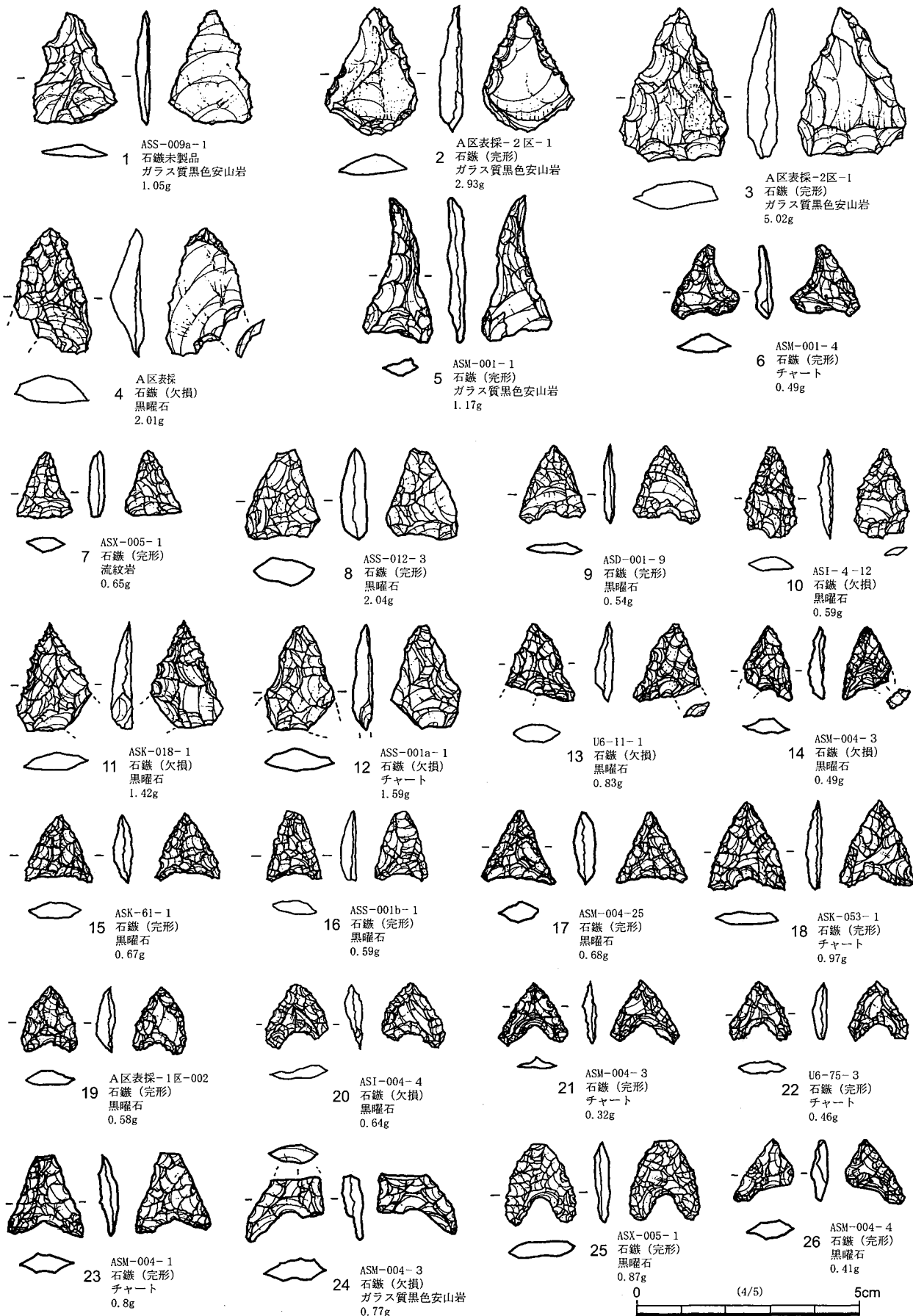


第13図 SK-061

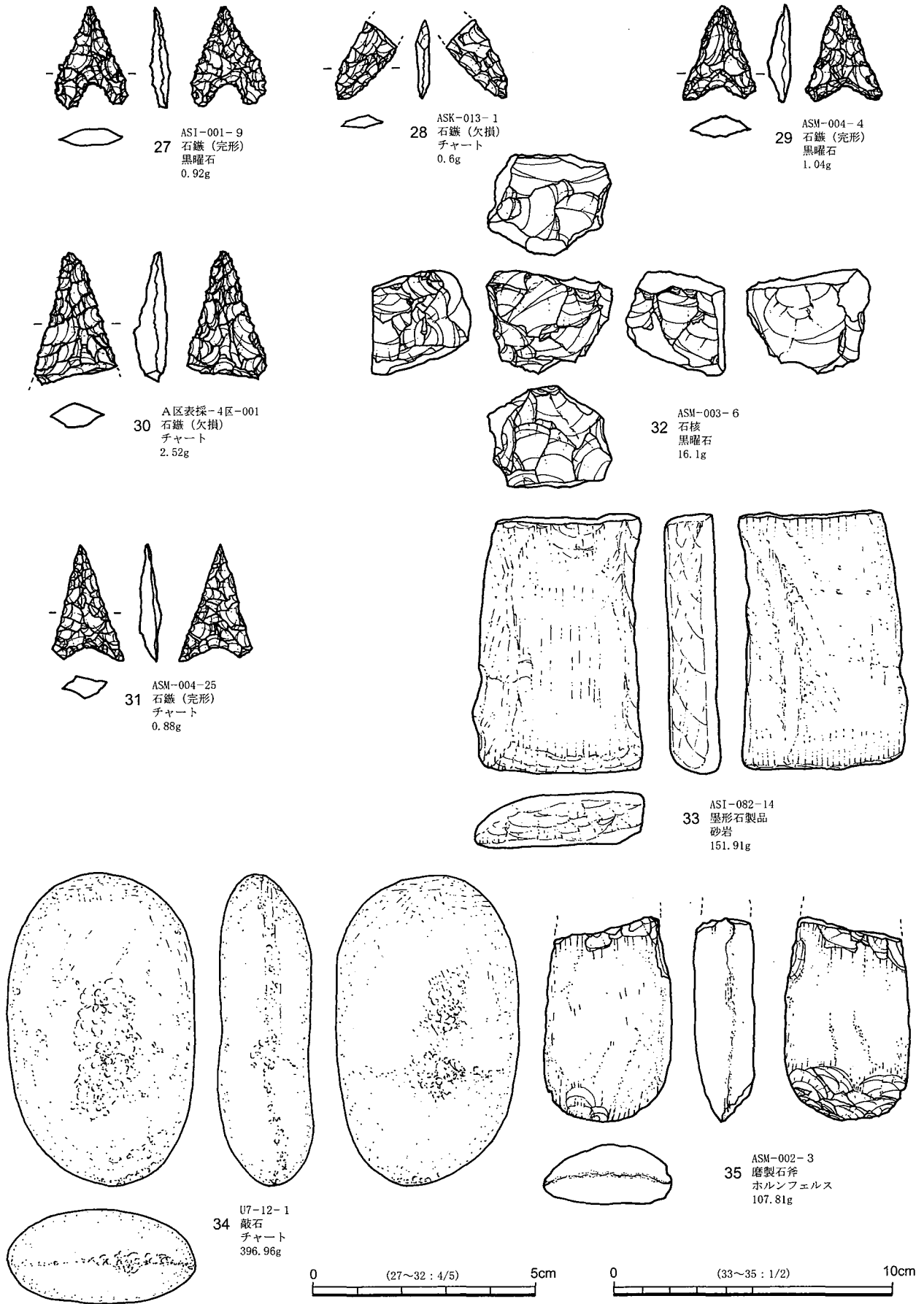
### 3. 遺構外出土石器 (第14・15図, 図版30)

A区から出土石器のなかで、図示できた石器は遺構外出土のもののみであった。所産時期は、遺構や遺構外出土土器の内容から、早期の井草式から夏島式期と前期後半の諸磯式期が主体を占めると思われる。

1～31は石鏃である。1～3は基部が丸みをおびる円基鏃である。いずれも、ガラス質黒色安山岩が用いられており、厚みのない幅広の剥片を素材としている。周縁部に細かい調整加工が施されており、器体の中央部まで及ぶ平坦剥離は施されていない。器体中央部付近の剥離面の稜線上に研磨痕がみられ、局部磨製石鏃に分類することも可能である。3が特に顕著である。5も同質の石材で、研磨痕がみられる。これらは、前期によくみられることから、前期後半の諸磯式期の所産のものである可能性が高い。4は裏面に大きく素材面を残していることから、未製品の可能性がある。6は右側縁部が内湾しており、先端部を再生した可能性がある。7～9は正三角形を呈し、脚部の挟りがほとんどないものである。10～12は二等辺三角形を呈し、脚部の挟りが浅いものか、あるいは、脚部が欠損したものである。13・14は二等辺三角形を呈し、脚部の挟りが浅いものである。15～23は正三角形を呈し、脚部の挟りが浅い。24～31は二等辺三角形を呈し、脚部の挟りはやや深い。25・27は脚部が丸みを持つ円脚鏃に分類される。石鏃の形態のみで時期を限定することは困難であるが、土器の分布状況を判断して、4・6～31は早期の井草式から夏島式期の所産のものである可能性が高い。32は厚みのある分割礫を素材として、サイコロ状に打面を転移して、小型の横長剥片を剥離している。おそらく、6～31の石鏃の素材生産と同様な剥離が行われたものと思われる。33は墨形石製品である。砂岩を用いており、全面を研磨して、板状の形態を呈する。墨形石製品の典型例ではないが、D地点出土遺構外出土石器の77・78に類似する。34は敲石である。楕円形礫を素材として、平坦面中央付近と右側縁と下端部に敲打痕がみられる。35は磨製石斧である。楕円形礫を素材として裏面下端部に階段状の調整加工が施されている。早期でよくみられる礫石斧の可能性もある。



第14図 A区遺構外出土石器(1)



第15図 A区遺構外出土石器 (2)

## 第2節 弥生時代

### 1. 竪穴住居

#### SI-002 (第16図, 図版5・6)

調査区北側T4-78グリッド付近に所在する。中央をASM-003に、西側をSS-009の溝により切られている。主軸方向はN-38°-Wを指し、床面積は22.2㎡を測る。確認面からの深さは浅く、壁は遺存していなかった。壁溝は幅0.2m~0.3m程で全周する。床面はほぼ平坦で、中央付近に部分的な硬化面が認められる。柱穴は対角線上に4本配置される。径20cm程と小規模であるが、深さは0.8m~0.9mと深くなる。南東壁中央部に接して確認されるピットは出入り口に伴うものであろう。炉は床面ほぼ中央に位置するが、南半分をSM-003に削平されているため詳細不明である。床面全体に焼土と炭化材が遺存していることから焼失住居と考えられる。

遺物は床面直上からの出土で、1の大型甕は南側コーナーから検出された。

#### 出土遺物

1~4は甕である。1は大型で、口唇部には指による押捺が施されている。外面は口縁部から胴部中位にかけて三段の羽状の当たりの強いハケで調整され、その後ハケを切るように胴部最大径の位置に、横方向に5条の条痕が認められる。2は横・斜位のハケが口縁部から胴部下位まで施され、後に胴部下位に斜位のナデが加えられる。口唇部にはヘラ状工具による刻みがみられる。3は小型で、口縁から底部の一部が残存しているにすぎない。胴部が赤く変色していることから二次的に火を受けていると思われる。4の胴部はヘラナデ、口唇部は短く折り返されており、指により押捺されている。口唇端部には、ヘラの先端部による細かい刻みが施される。5は胴部中位から底部の遺存である。内外面に細かいハケ目が残し、底部には細かい布目痕が認められる。6はミニチュアの碗で、全体を指によるナデで調整している。これらの土器は、宮ノ台期の所産と考えられる。

### 2. 方形周溝墓

#### SS-001 (第17図)

調査区南側、U6-65グリッド付近、SM-001の中に所在する。四隅に陸橋部を残す形態である。北側溝は、SK-003により東端を、西側溝は攪乱によって南端を削平されている。規模は、南北長9.2m、東西長7.8mを測る。北側溝は長さ約3.8m、幅0.9m、深さ0.4m、東側溝は北側溝にほぼ直行し、長さ5.7m、幅1.0m深さ0.7mを測る。南側溝は北側溝にほぼ平行で、長さ4.2m、幅1.2m、深さ0.4m、西側溝は、長さは約5.6m、幅1.1m、深さ0.8mを測る。東側と西側の溝には2段に掘り込まれた痕跡が認められる。覆土中にローム粒を多く含んでおり、人為的に埋め戻されたものと思われる。

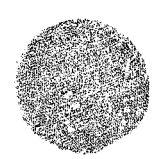
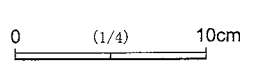
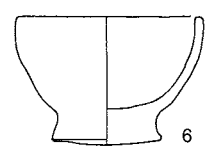
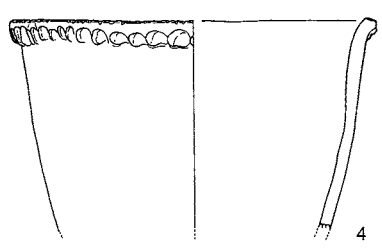
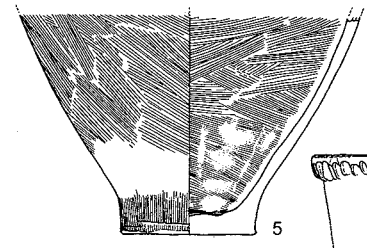
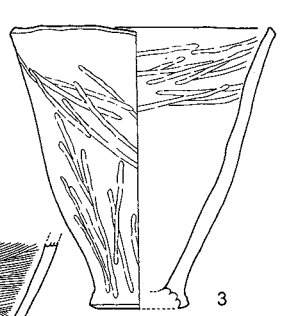
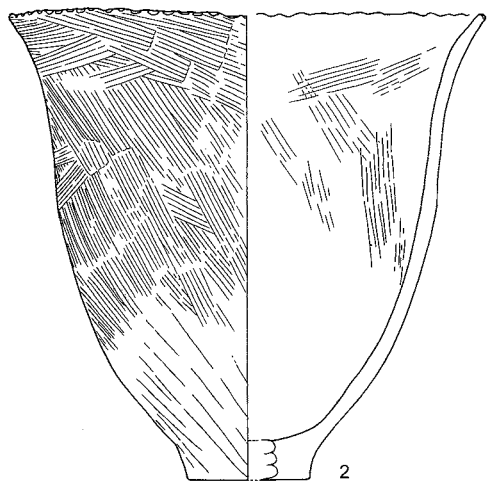
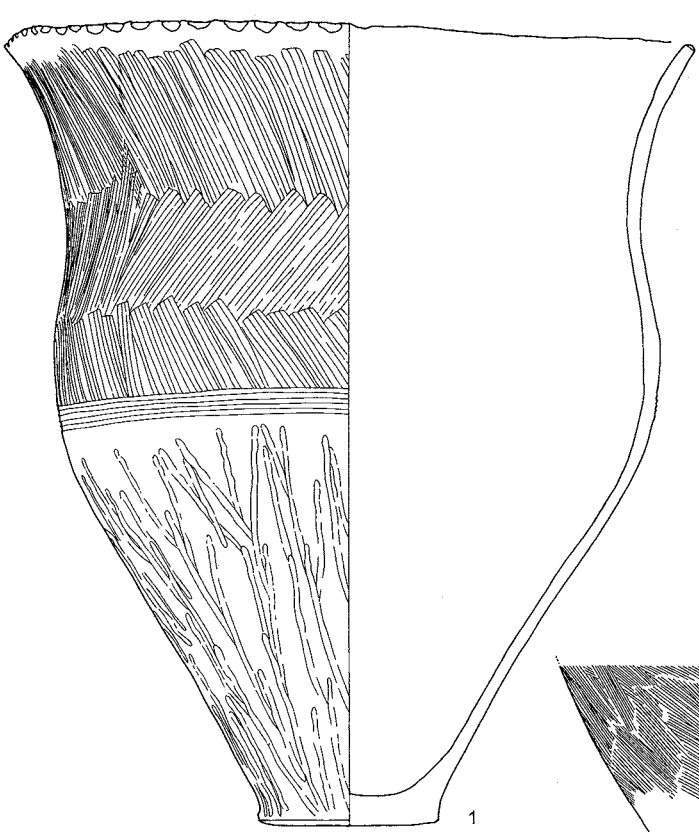
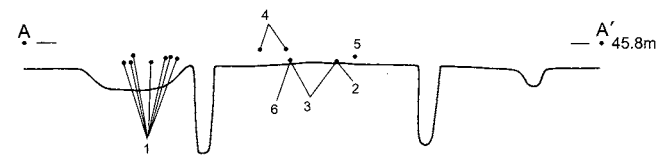
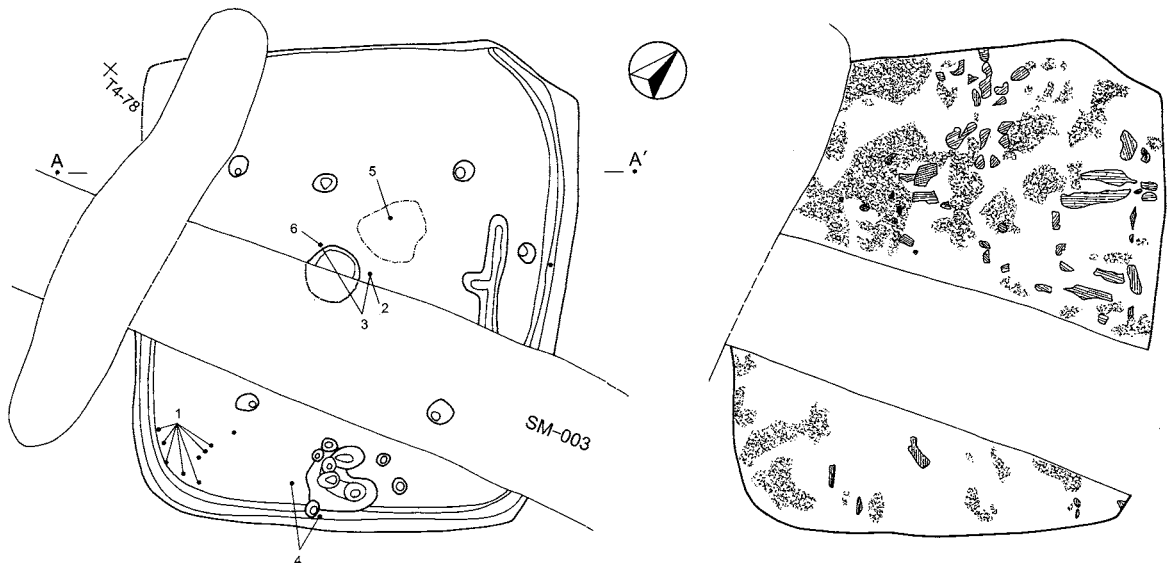
遺物は小破片が主体で、覆土中からの出土である。

#### 出土遺物

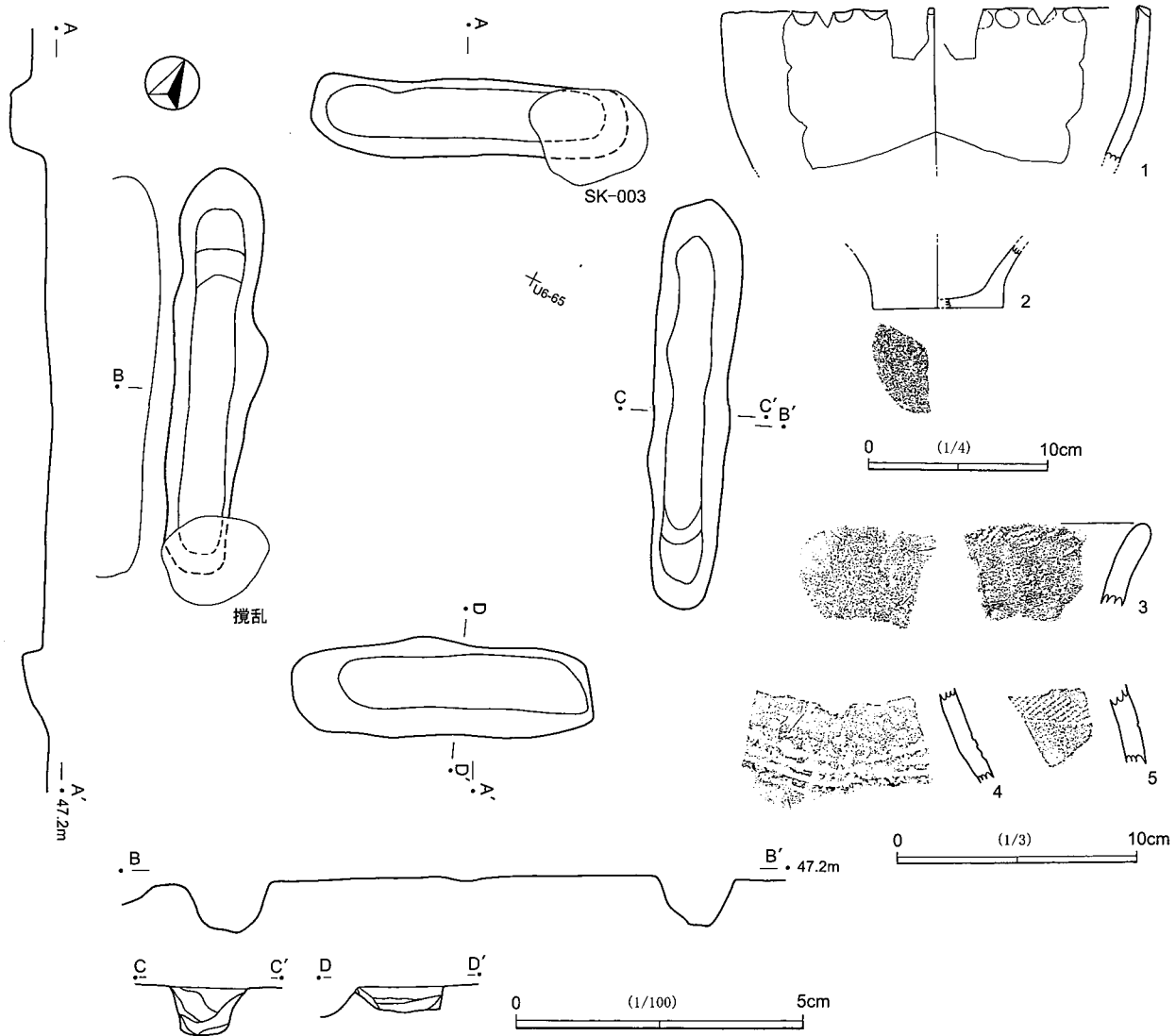
1は甕の口縁部で、口唇部は指で内外面から摘み上げられている。2は壺の底部片と思われる。底部には細かい網代痕が認められる。3~5は壺の小破片である。出土遺物が少ないため、明確な時期は不明であるが、他の方形周溝墓の時期と比較すると、弥生時代中期に含まれるものと思われる。

#### SS-002 (第18・19図, 図版6・23・24)

調査区中央、U5-61グリッド付近に所在する。北側溝はSS-004に切られており、東側は削平により不明である。南北方向の全長は10.2mを測る。西側溝は、長さ約5.7m、幅1.0mを測る。南側溝は、推定長5.0



第16图 SI-002



第17図 SS-001

m, 幅1.1mを測り, 船底状の断面を呈している。覆土は自然堆積の様相を呈する。

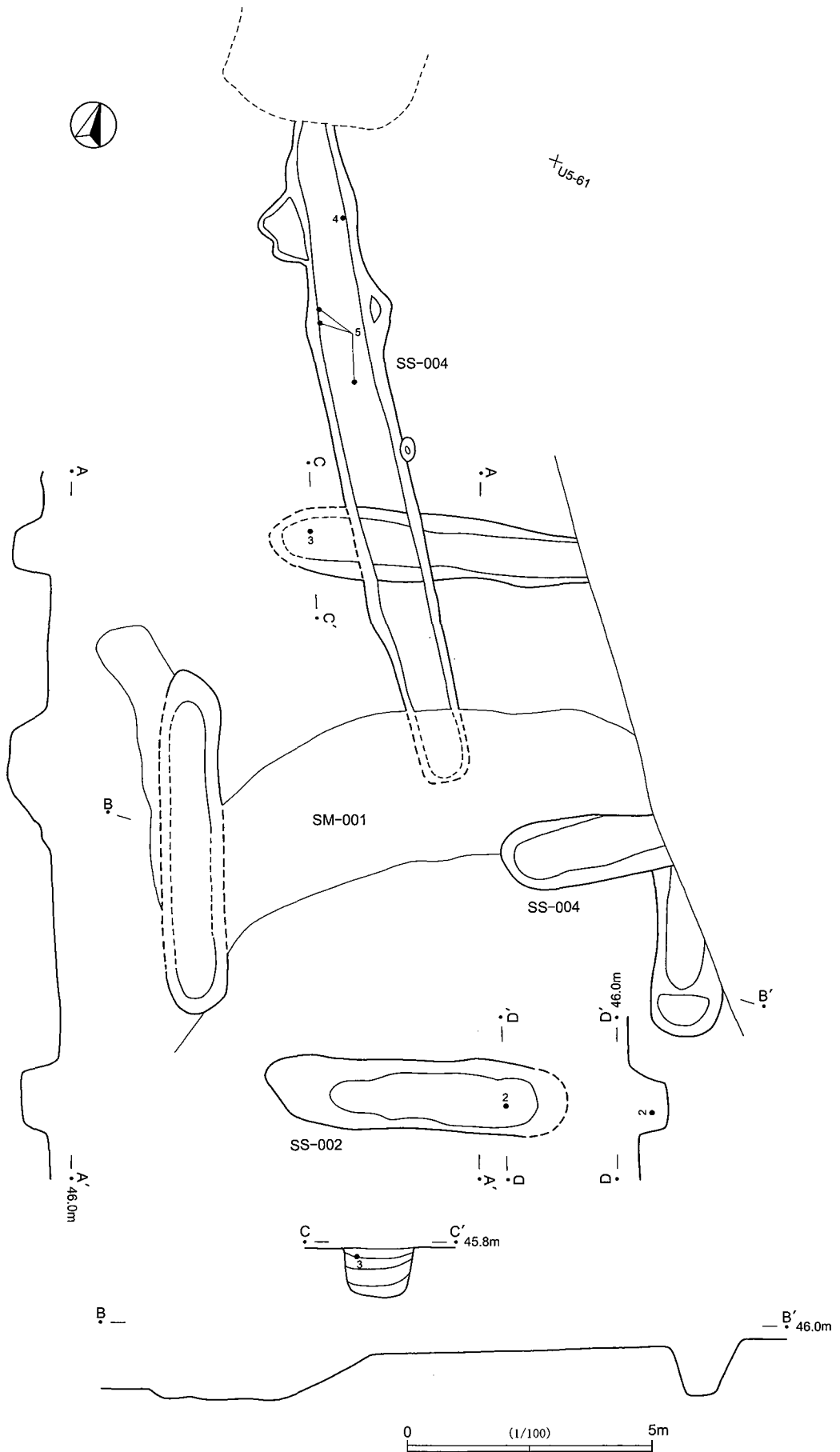
遺物の出土は比較的多く, 1・2の壺は南側溝, 3の壺は北側溝の覆土上層からの出土である。

#### 出土遺物

1～3は壺である。1は胴部下半を欠く。ハケ目を地文とし, 肩部から胴部にかけて横方向の沈線が巡る。沈線間には波状の沈線が充填される。肩部には縦に3単位と思われる一対の小孔が穿たれる。2は口縁部を欠く。頸部下位と肩部に横方向の沈線が二条巡り, 条間に2条の山形文, 下位に工字文状の雑な文様が施される。3には縦方向のヘラミガキ後横方向のヘラミガキがみられる。外面には赤彩が加えられる。宮ノ台期の古相を呈する。

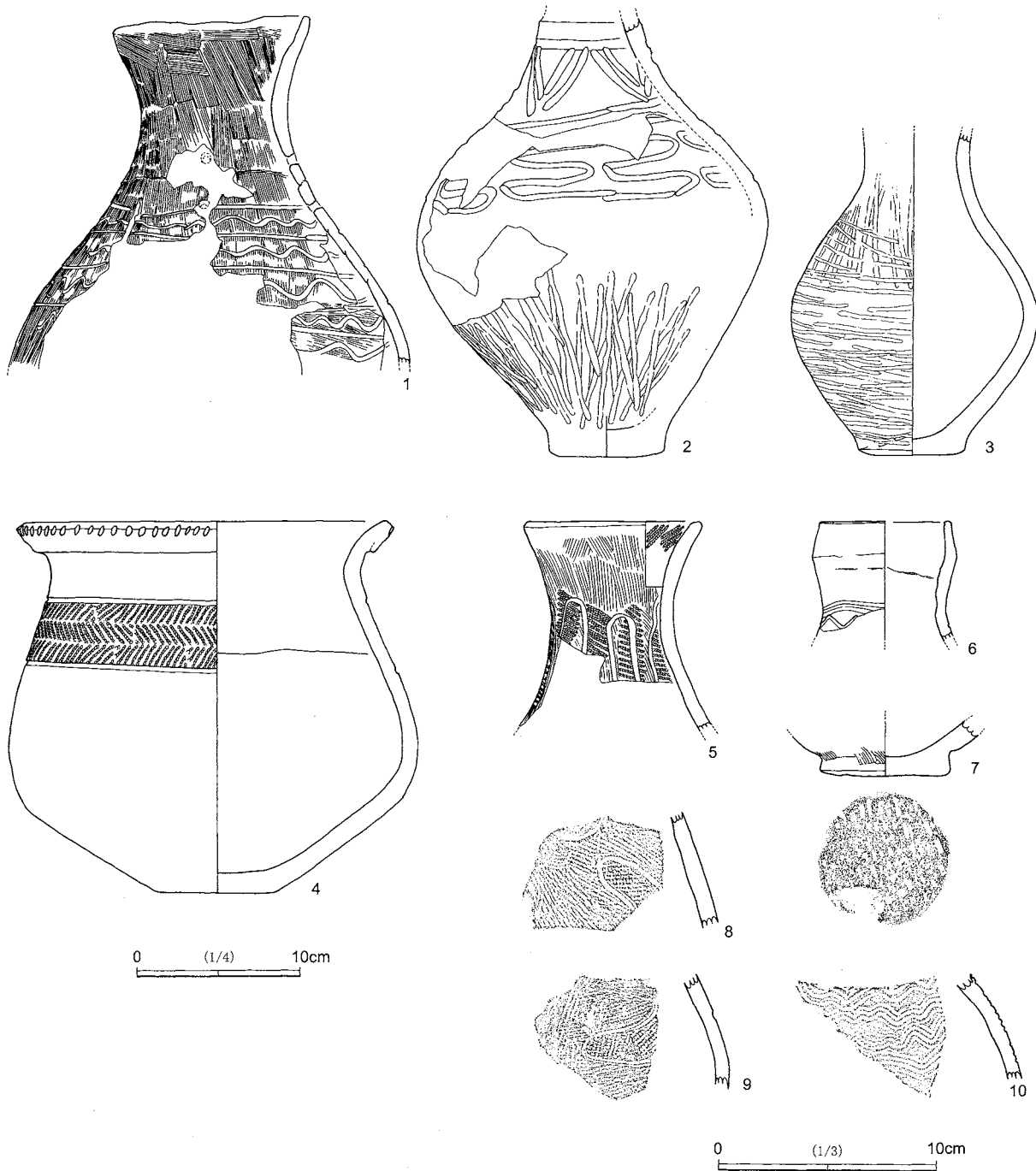
#### SS-003 (第20図, 図版7・24)

調査区南側U7-01グリッド付近に所在する。北側溝は西側をSM-002に切られている。長さは不明である。幅は1.02mを測る。東側溝は長さ5.6m, 幅1.1mである。断面は船形状を呈しており, 土器が出土している。南側溝は東側をSM-001に切られており, 西側は調査区外であるため詳細不明である。残存部の幅は1.1mである。西側溝は調査区外のため不明である。



第18図 SS-002・004

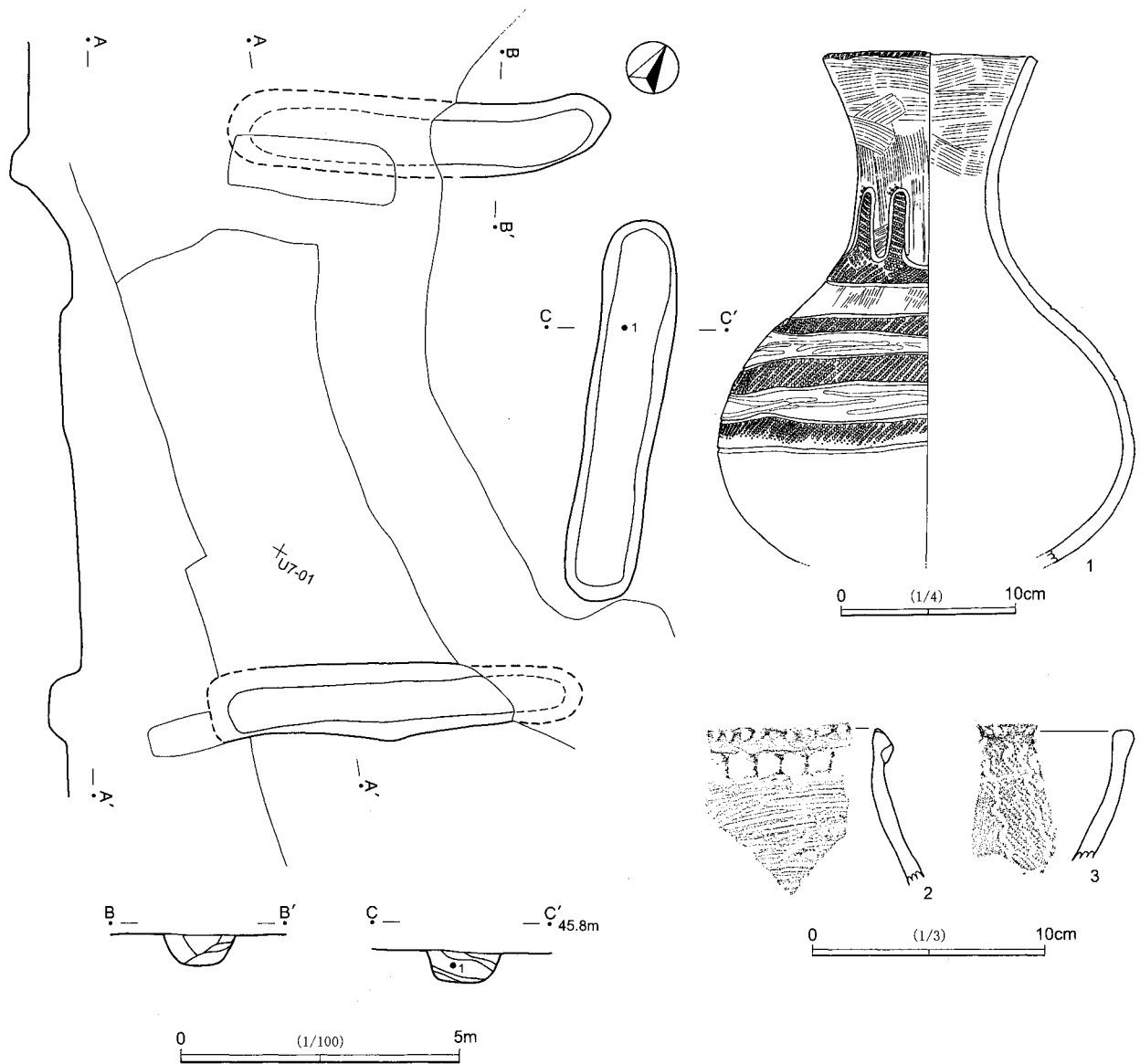




第19図 SS-002・004出土遺物

### 出土遺物

1は胴下半部に最大径を有する壺で底部を欠く。ハケ目を地文とし、頸部には沈線で区画された意匠文内にLRの単節縄文がみられる。胴部は横方向の沈線で区画された縄文帯が3条施文され、口唇部にはLRの単節縄文が加えられる。口縁部内面には横方向のハケ目が残る。2・3は口縁部片である。2は口唇部に細かい刻み、口縁部下端に大きめの棒状工具による刻みが施されている。3は単節RLの縦方向の結節文がみられる。宮ノ台期の所産である。



第20図 SS-003

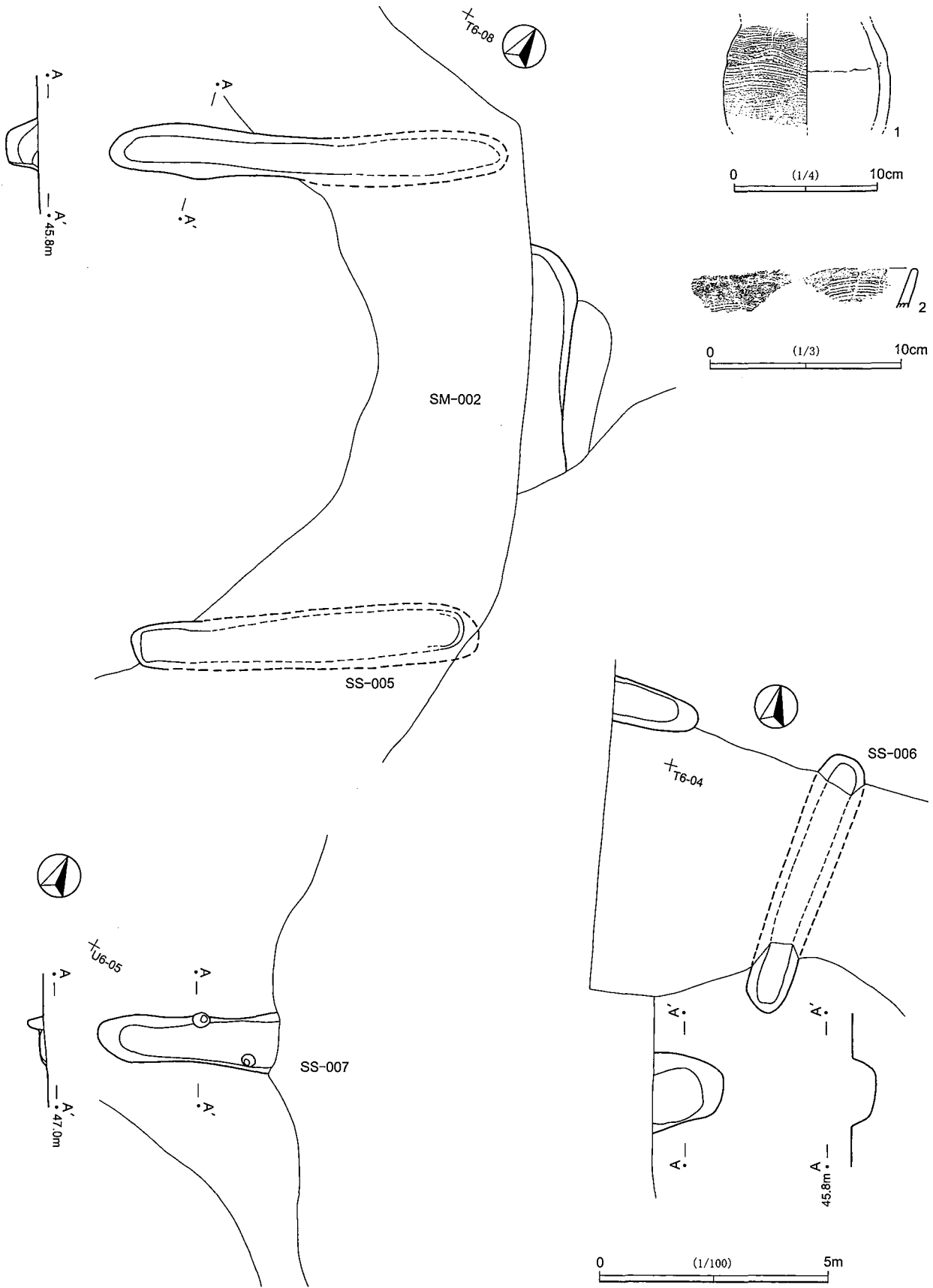
SS-004 (第18・19図, 図版7・8・24)

調査区中央U5—61グリッド付近に所在し, SS-002を切る。西側溝と南側溝の一部を確認したが, 西側溝は全長10mを越すような長い溝で, 方形周溝墓としてはやや疑問がある。

遺物は覆土中位からの出土である。

出土土器

4は広口壺である。折り返し口縁には棒状工具による刻みが認められ, 胴部上位の沈線区画内に三段の単節斜縄文(LR・RL)を転がしている。内外面に赤彩が観察される。5は壺の口縁部で, 縦方向のハケ調整後RLの縄文を施し, さらにループ状の沈線を加えている。口縁部内面にもRLの単節縄文帯が巡る。6は小型壺の口縁部であろう。頸部に横方向の沈線2本と山形の沈線が認められる。7は網代痕が残る壺の底部である8~10は壺の胴部片で, 8・9は地文にハケが残り, 単節RLの縄文が充填させた弧状の沈線がみられる。10には4本一単位の櫛搔き波状文が施こされている。遺物の様相から, 宮ノ台期と考えられる。



第21図 SS-005~007

#### SS-005 (第21図)

調査区中央T6-08グリッド付近に所在する。南北の溝が確認されたが、ほとんどSM-002によって削平されているため詳細は不明である。北側溝の残存部幅は約1mを測る。

#### 出土遺物

1は小型の壺で、小口状工具によると思われる横方向のハケ目痕がみられる。2は口縁部の小破片で横方向のハケが施されている。

#### SS-006 (第21図)

調査区西端、T6-07グリッド付近に所在する。北側と南側溝の大部分は調査区外にあり、東側溝は北端と南端を残してSM-002に切られている。残存部の幅0.7mを測る。

遺物の出土はなかった。

#### SS-007 (第21図)

調査区東側、U6-05グリッド付近に所在する。部分的にしか確認されていないため詳細は不明である。確認面からの掘り込みはきわめて浅い。残存部の幅は0.9mである。

遺物の出土はなかった。

#### SS-009 (第22図, 図版8・9・24)

調査区北側、T4-79グリッド付近に所在する。ほぼ中央をSM-003に切られているものの、本遺跡の中では比較的遺存良好な遺構である。規模は、南北長8.6m、東西長7.7mを測る。北側溝は長さ4.7m、幅1.2m、深さ0.7m、東側溝は長さ5.4m、幅0.9m、深さ0.5m、南側溝は長さ4.2m、幅1.1m、深さ0.6m、西側溝は長さ5.1m、幅1.1m、深さ0.5mを測る。南北の溝に比して東西の溝の長さが短くなる。東側以外の溝には段掘りがみられ、中央部が低くなっている。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物の出土は少ないが、1の壺は南側溝の底面近くから出土している。

#### 出土土器

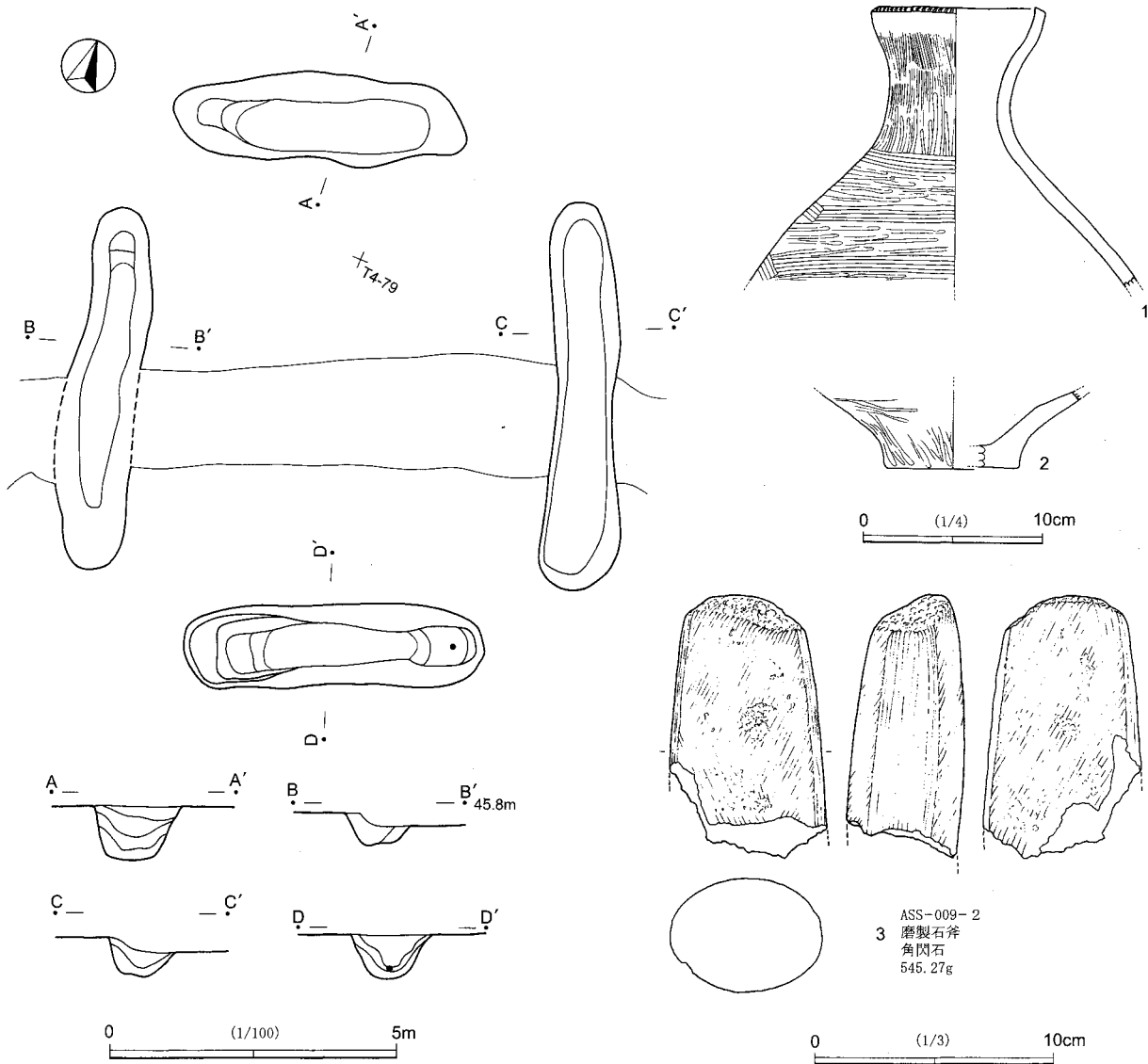
1は壺で、縦方向のハケが施され、頸部には縦方向、胴部には横方向のヘラミガキが加えられる。胴部上位から中位に4本一単位の櫛描き文が3条認められる。口唇部にはLRの単節縄文が施されている。口縁部内面と胴部外面の文様間に赤彩されている。2は壺の底部である。3は磨製石斧である。宮ノ台期の遺物であろう。

#### SS-010 (第23図, 図版10・24)

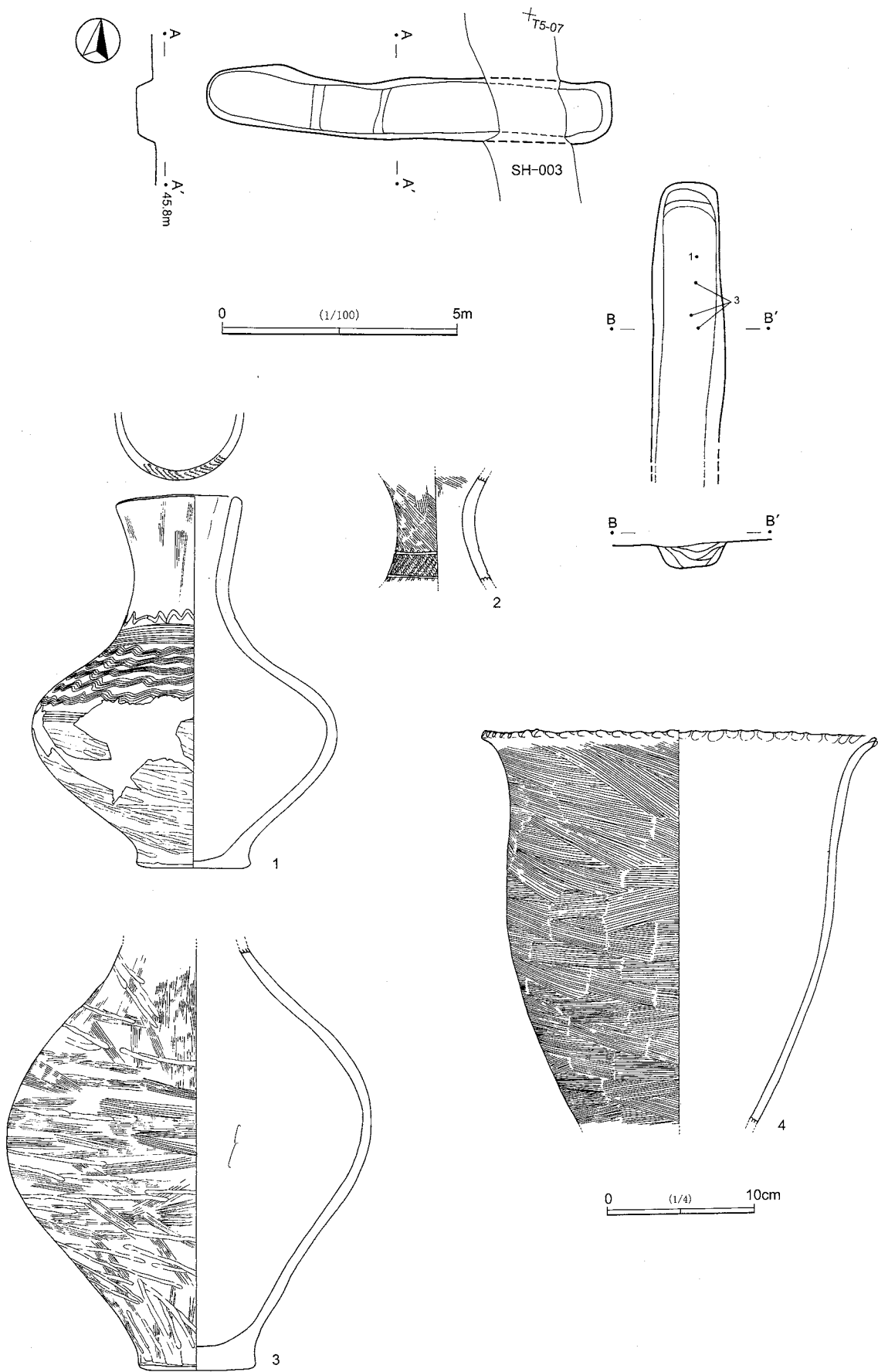
調査区北側、T5-07グリッド付近に所在する。2辺の溝を確認したのみである。北側溝は東側の一部をSM-003に切られているが、長さ7.0m、幅1.1m、深さ0.3mを測る。西側で2段に掘り込まれる。東側溝は南端部が不明であるが、現存長4.4m、幅1.2m、深さ0.4mを測る。自然堆積の様相を呈する。1と3の壺は東側溝の底面近くから出土している。

#### 出土土器

1～3は壺である。1の肩部には山形沈線と4本1単位の平行櫛描き文間に5条の櫛描き波状文が充填されている。口縁部にはハケ目後ナデ、胴下半部はミガキ調整される。口唇部にはLRの単節縄文が施され、底部には木葉痕が残る。2は頸部片で、LRの単節縄文を沈線により区画している。3は口縁部を欠く。全体に細かいハケ目調整後粗いヘラミガキが施されている。底部には木葉痕が残る。4は甕である。全体に横または斜位のハケ目が明瞭にみられる。口唇部は波状を呈する。宮ノ台期の所産である。



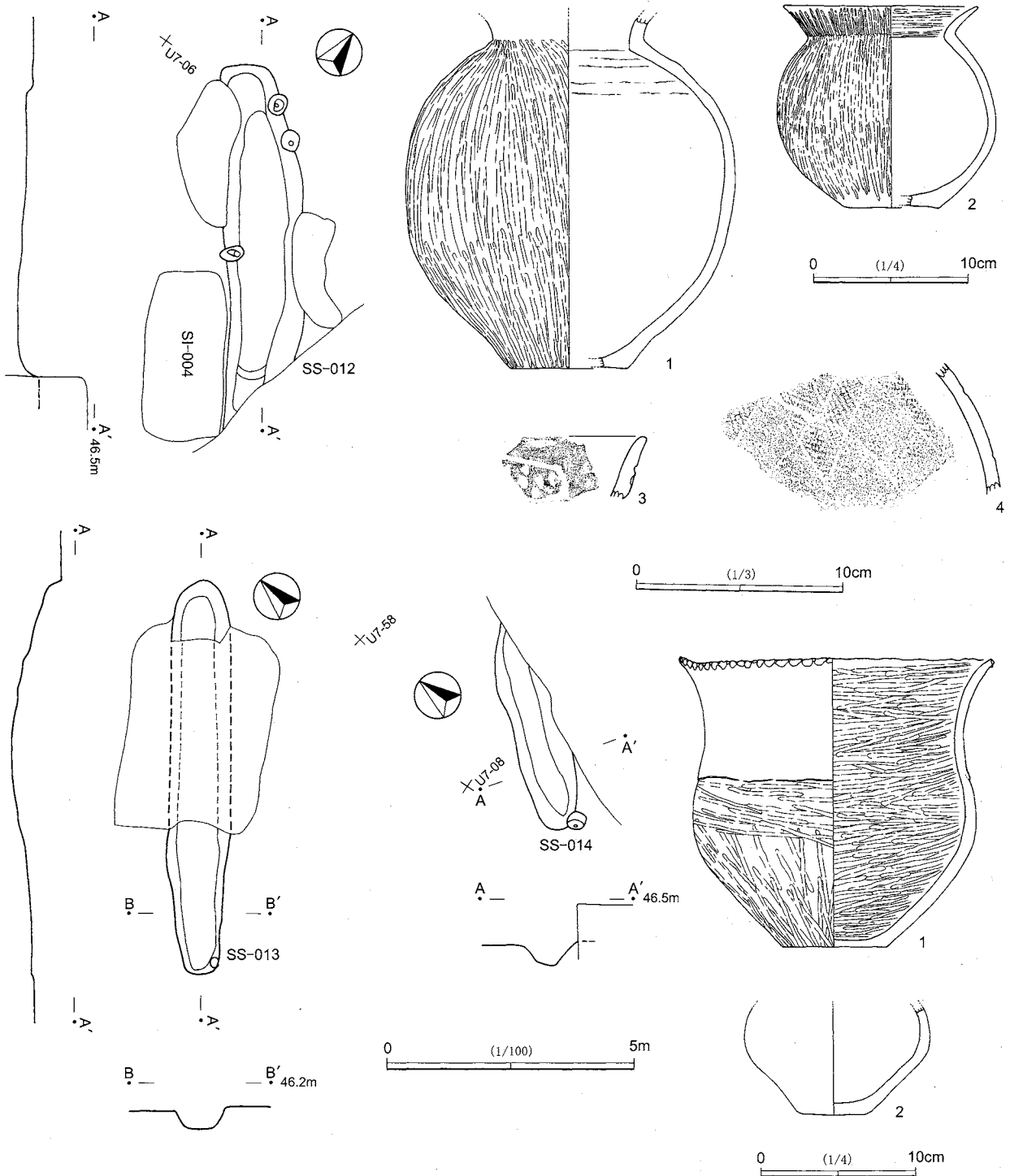
第22図 SS-009



第23图 SS-010

SS-012 (第24図, 図版11・24)

調査区南側, 7U-06グリッド付近に所在する。1辺のみの確認であるが, 東側が調査区外になるため, 西辺に相当する溝と思われる。確認面からの掘り込みはきわめて浅い。現存長5.2m, 幅1.3m, 深さ0.2mを測る。



第24図 SS-012~014

## 出土土器

1・2は甕で、球形に近い胴部形態である。1は胴部外面全体に縦方向のヘラミガキが丁寧に施されている。2の外面はハケ調整後丁寧な縦方向のヘラミガキが施され、口縁部内面には横方向のヘラミガキが加えられる。3は口縁部の小破片で、沈線区画内にヘラ状工具による刺突が充填される。4は壺の胴部片で、RLの単節縄文を沈線で区画した山形文が施文されている。1・2は古墳時代前期の土師器と思われる。本遺構自体は弥生時代に含まれ、混入品となろう。

### SS-013 (第24図, 図版11)

調査区南端, U7-58グリッド付近に所在する。南側が調査区外となるため、北側溝に相当すると思われる。中央を土坑により切られている。長さは6.4m, 幅1.03m, 深さ0.3mを測る。

遺物の出土はなかった。

### SS-014 (第24図, 図版11・24)

調査区南側, U7-06グリッド付近に所在する。南側が調査区外となるため、北辺に相当すると思われる。現存長3.3m, 幅0.9m, 深さ0.3mを測る。

## 出土土器

1は甕で、胴部中位に明瞭な接合痕を残している。ヘラナデの後内面は全面、外面は接合痕より下位に丁寧なヘラミガキが施されている。口唇部には、ヘラ状工具による刻みがみられる。2は小型の壺で、口縁部を欠く。磨耗が著しいため調整は不明瞭であるが、外面は赤彩されている。

### SS-015 (第25図, 図版12・24・25)

調査区北端, T4-85グリッド付近に所在する。東西方向の溝のみの確認で、全体は不明である。西端部はASD-004により削平されている。現存長4.1m, 幅1.3m, 深さ1.0mを測る。覆土は自然堆積の様相を呈する。遺物は底面近くからまとまって出土した。

## 出土遺物

1～3は壺である。ハケ目を地文とし、頸部から胴部にかけて沈線で区画された文様帯がみられる。頸部にはLRの単節縄文を沈線で区画した舌状文が施され、下位には縄文帯と櫛描き波状文帯が交互に施文される。底部付近には縦方向の粗いミガキが加えられる。頸部から肩部にかけて対角線上に小孔が上下一対で穿たれているが、一カ所は上の孔はなく、下の孔も貫通しない状態で収まっている。いずれも焼成後の穿孔である。2は口縁部から胴部下位にかけて羽状文が横走し、胴部下位にはヘラミガキが加えられる。口唇部にはLRの単節縄文が施文されている。3は口頸部を欠く。胴部上位の横位沈線の上下に舌状の縄文帯が配され、以下はミガキが施されている。4・5は底部のみの遺存である。

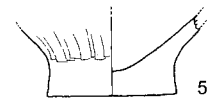
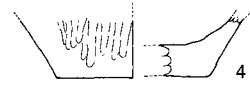
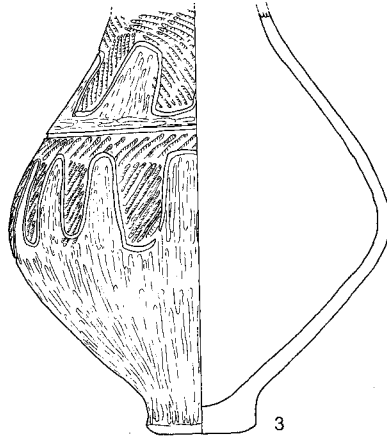
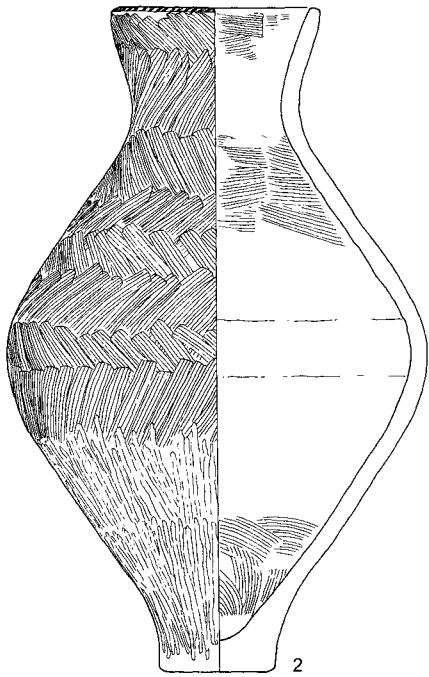
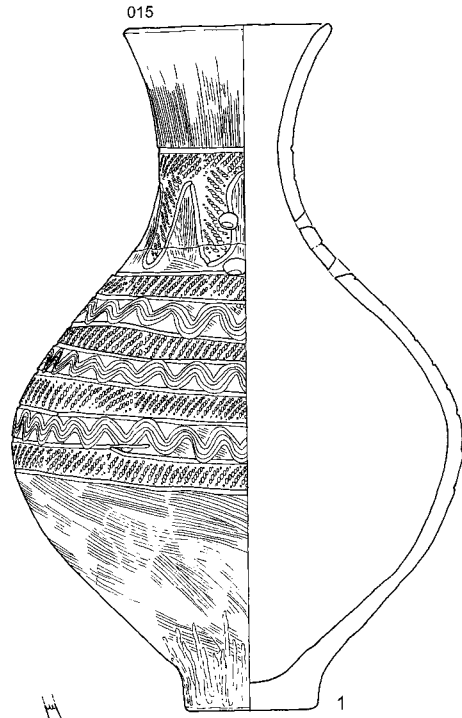
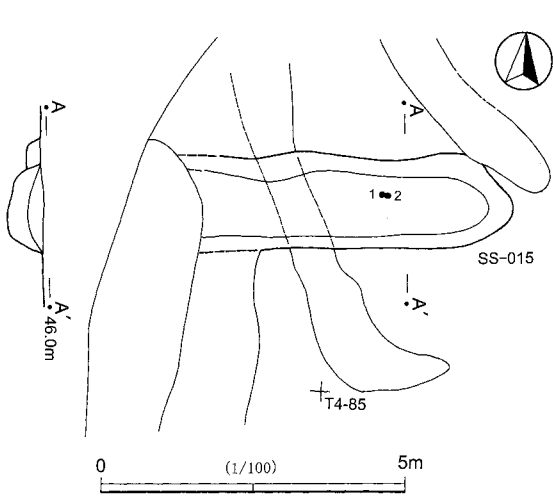
### SS-016 (第25図, 図版12・13・25)

調査区北端, T4-59グリッド付近に所在する。溝の一部分のみの遺存であるため、詳細は不明である。SM-004に切られる。現存長4.3m, 幅1.2m, 深さ0.5mを測る。

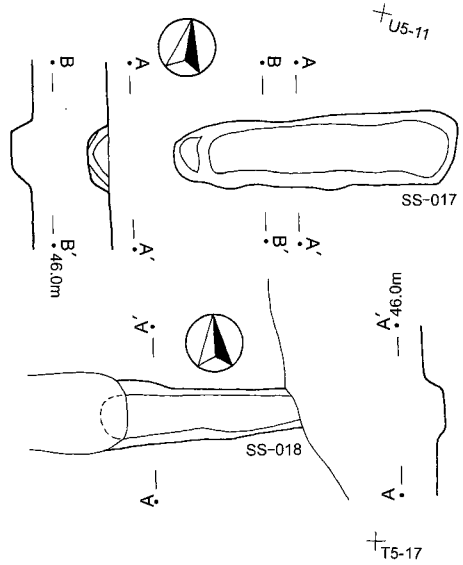
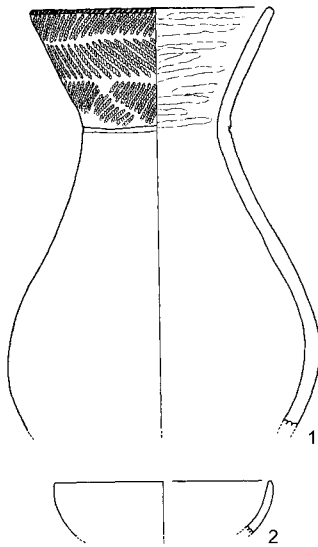
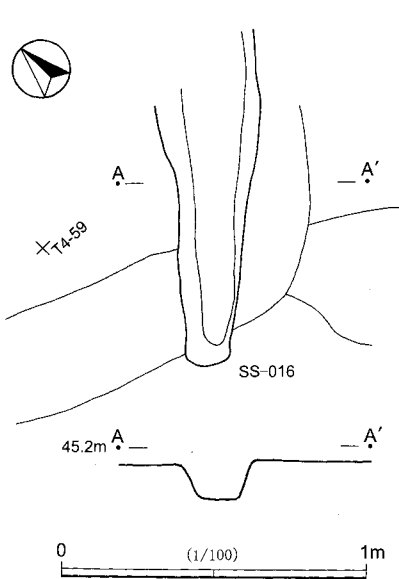
## 出土遺物

1は壺で、底部を欠く。全体に磨滅が著しく不明瞭な点が多いが、LR, RL, LRの単節縄文が口縁から頸部にかけて三段施文され、下端は沈線により区画される。口唇部はLRの縄文である。胴部外面と口縁部内面にミガキが部分的に観察される。沈線下の外面と口頸部内面に赤彩認められる。2は杯で、磨滅が著しく調整不明である。





0 (1/4) 10cm



第25图 SS-015~018

### SS-017 (第25図, 図版13)

調査区北側, U5-11グリッド付近に所在する。東西方向の溝が1本確認されたのみである。長さ3.7m, 幅1.0m, 深さ0.3mを測る。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物の出土はなかった。

### SS-018 (第25図)

調査区北側, T4-97グリッド付近に所在する。東西方向の溝が1本確認されたのみで, 東側をSM-003に切られる。現存長2.3m, 幅0.7m, 深さ0.3m程を測る。

遺物の出土はなかった。

## 3. 再葬墓

### SK-013 (第26図, 図版13・14・25)

調査区南側, U6-34グリッドに所在する。部分的に木の根による攪乱がみられ, 底面に凹凸がある。長軸1.5m, 短軸1.3mの略円形を呈し, 確認面からの深さは浅く, 0.2mを測る程度である。覆土は攪乱が入り込んでいるため明確ではないが, 人為的に埋め戻されたようである。

掘り形のやや東側によった位置から壺が3点原位置でつぶれたような状態で出土した。

#### 出土遺物

1～3は長頸の壺である。1はほぼ完形で, 口縁部にはLRの縄文が施され, 直下から胴部上半にかけて長方形及び台形の太沈線によって区画された4段の文様帯が配される。LRの単節縄文を地文とするが, 3段目の沈線区画内には, ヘラ状工具による斜めの刺突が充填される。文様帯以下は貝殻と思われる条痕がみられる。上部は横位, 下部は縦位の羽状を呈する。2は破損部分が多い。1とやや異なり, 口縁部がラッパ状に開く形態である。口縁部文様帯はLRの単節縄文, 頸部中央には, 上下を太沈線で区画された文様帯が巡る。沈線内はLRの単節縄文と4単位と想定される耳状突起で構成される。胴部文様帯は, LRの単節縄文を地文とし, 太沈線による幾何学的な文様が施される。円形の沈線内には竹管による刺突が充填されている。口縁部には横位, 胴部文様帯下には斜位の条痕が施される。1と異なり, 小口を利用した条痕のようである。頸部下端と肩部に対となる焼成後の穿孔が開けられている。3は口縁部を欠く。頸部から胴部上半にかけて文様帯がみられる。縦区画とX字状の太沈線による区画を基本とし, 交点には円形の太沈線が配される。太沈線内には条痕が残る。地文としての縄文は単節LRで, 文様帯以下には斜位の条痕がみられる。これらの土器は弥生時代中期中葉の範疇に入るものであるが, 詳細については後章でとりあげる。

## 4. 土坑

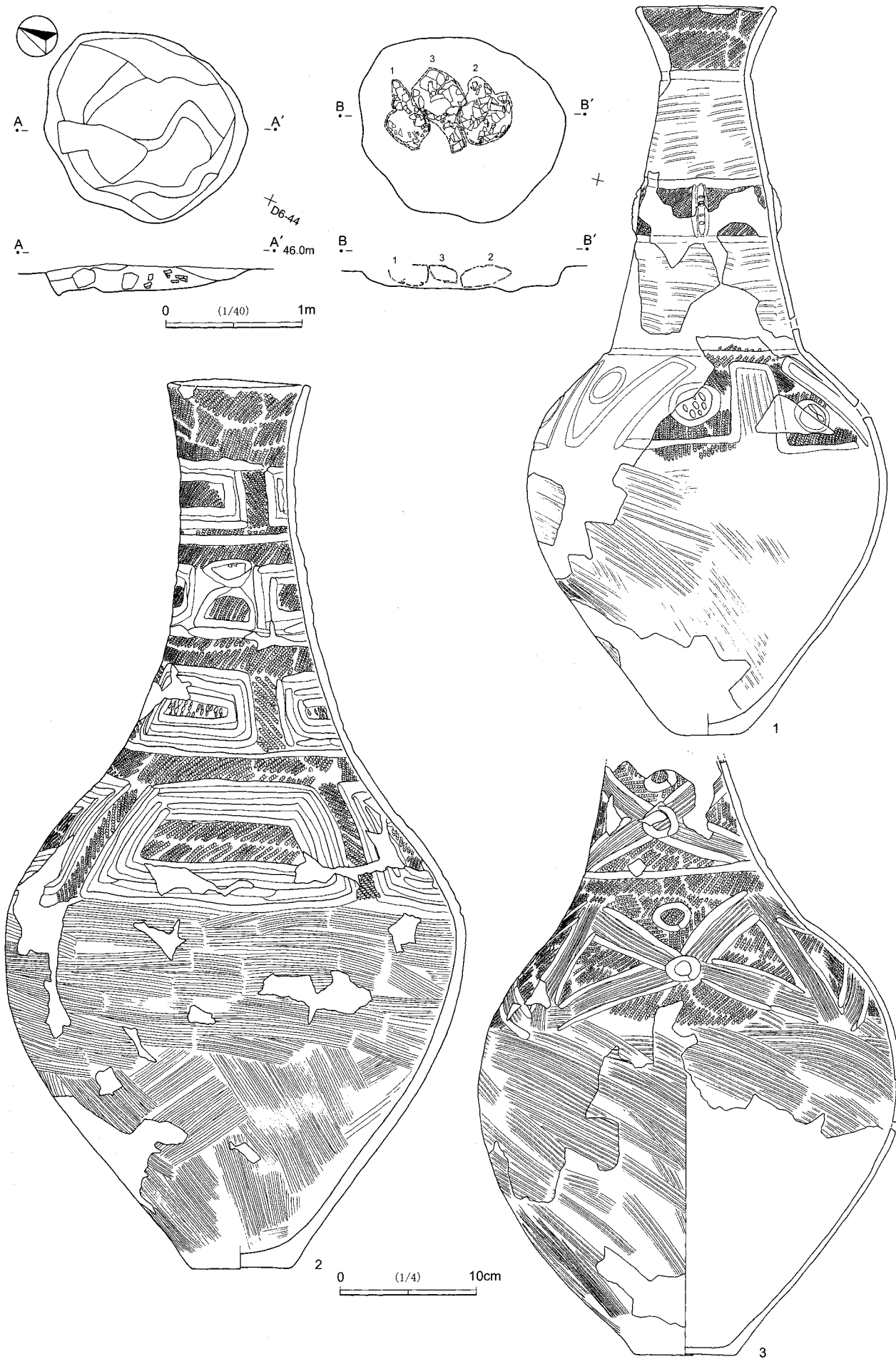
### SK-020 (第27図, 図版14・25)

調査区南東側, U6-67グリッド付近に所在し, 西半分をSS-001に切られている。円形を呈すると思われるが, 規模は不明で確認面から0.1mと浅い。底面には深さ0.2m程度のピットが3ヶ所確認された。性格は不明である。

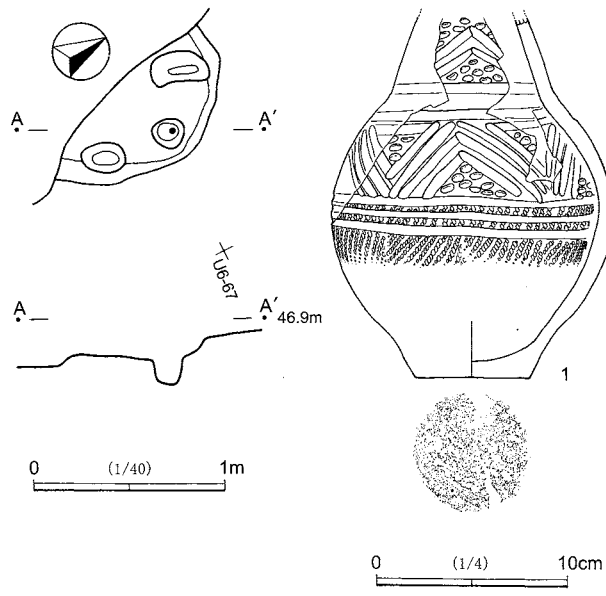
ピット内から壺が1点出土した。

#### 出土遺物

1は小形の壺で, 口縁部を欠く。内外面ともに器面の荒れが著しく施文は明瞭ではないが, 頸部下端と胴部中央の太横沈線で区画し, 内部を山形の太沈線と刺突で充填している。胴下半部には地文としてLRの単節縄文が認められ, 底部には布目痕が残る。



第26图 SK-013

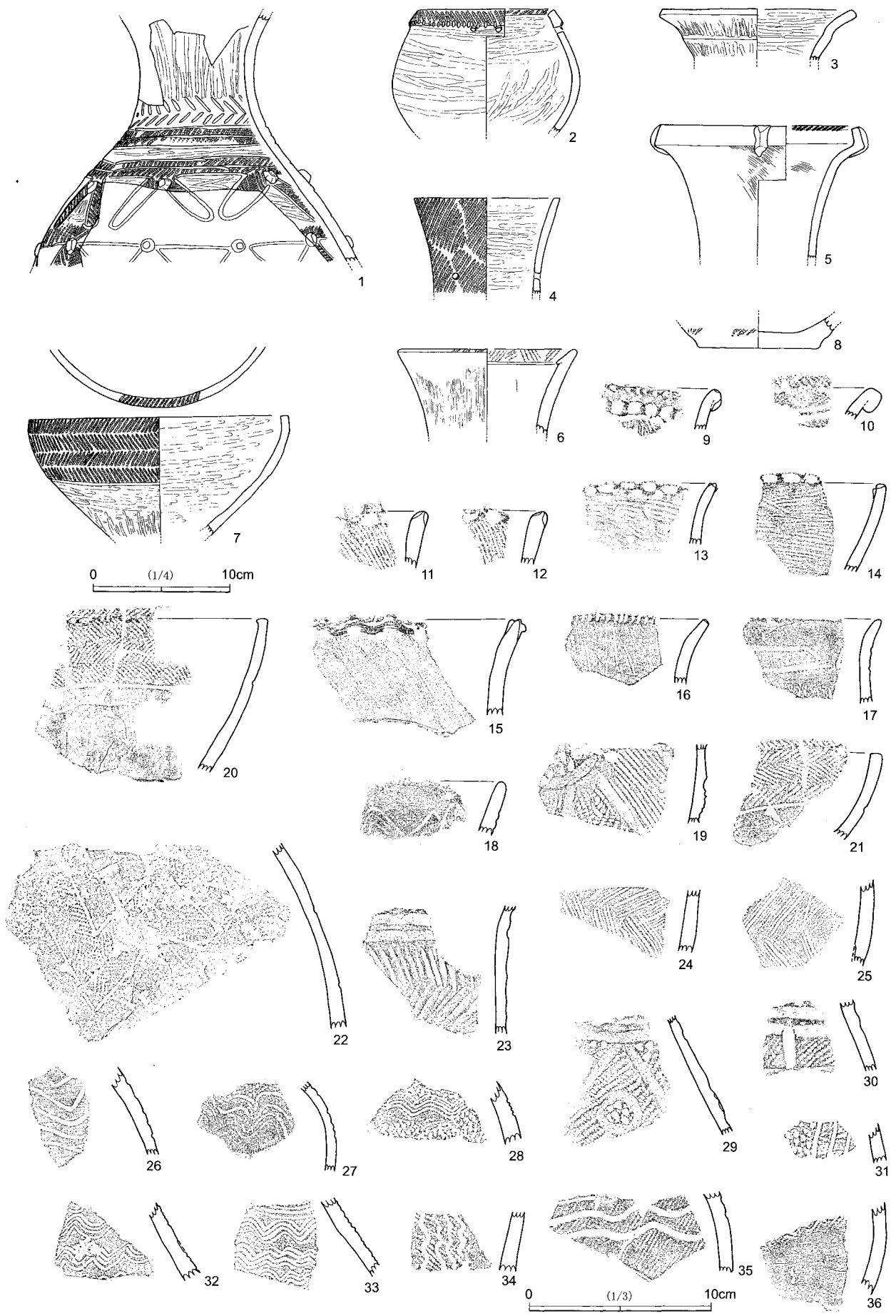


第27図 SK-020

### 5. 遺構外出土遺物 (第28図)

古墳等から出土した土器を扱った。

1は宮ノ台期の壺である。最上位の文様帯は、短沈線による綾杉文、以下は沈線による意匠文が施される。地文をLRの単節縄文とし、上位には横位の沈線、下位には舌状文と三角形文が沈線により描かれている。舌状文及び三角形文の交点には瘤状の突起がそれぞれ貼り付けられている。縄文以外の部分が赤彩される。内面は器面が荒れているため調整不明である。2は無頸壺である。口縁下に2個1対の焼成後穿孔が開けられる。折り返し口縁で、外面にはRL、内面にはLRの単節縄文が施文され、棒状工具による刻みが口縁下に巡る。胴部は内外面とも粗いミガキが加えられる。口縁部外面以外に赤彩が認められる。3～5は壺の口頸部である。5には4単位と思われる棒状浮文が貼り付けられ、口唇部にLRの単節縄文が施文される。6は特異な形態と施文がみられる。口縁部は内面に折り返され、内面と口唇部に櫛歯による刺突が施される。4はLRの単節縄文で、焼成後の穿孔が認められる。7は底部を欠くが、高杯となろう。口縁部から体部中位にかけて羽状縄文が施され、下端は沈線により区画される。縄文帯以外の内外面が赤彩される。9・10は複合口縁片である。11～16は口唇部に刻みを施す甕の口縁部片で、胴部には斜位の条痕がみられる。17・18は沈線による文様、20・21は7と同様、羽状縄文が施される鉢あるいは高杯の口縁部である。22～36は胴部片である。29・30は中期中葉の壺と思われる。縄文を地文とし、直線の太沈線と刺突を充填した円形の太沈線で構成される。23～25は羽状の条痕文がみられる。27～35には波状の沈線を主とする一群がある。36は山形の沈線区画内に羽状縄文が施文される。



第28図 遺構外出土土器

### 第3節 古墳時代

#### 1. 古墳

##### 4号墳 (第29～37図, 図版17～19・26～28)

鹿島台4号墳は、A区の北端、やせ尾根状の台地先端部に位置する。

##### 墳丘と埋葬施設

鹿島台4号墳は、見かけの墳丘長東西43.5m、南北46mを測る円墳で、やや南北に長い楕円形を呈している。旧表土であるローム粒、焼土粒を含む黒色土の上に盛土して墳丘を構築している。盛土の高さは0.4mで、地山も含めた見かけの墳丘高は0.8mを測る。古墳の地盤は北東側に低く傾斜し、約2.5mの高低差がある。そのため、北東側からの見かけの墳丘が高く見える。

##### 墳丘の構築と埋葬施設の設置

墳丘の構築方法は、まず古墳築造の範囲を整地し、次ぎに植生していた草木を焼き払っている。これは、旧表土に焼土が混入していることから伺える。その後、地山を掘削して墳丘端部を整形している。明確な周溝は認められないが、東側では旧表土から約6m低くなっており、墳丘を区画する目的で墳丘周辺を大きく掘削して整形を行なっている。古墳の盛土は整地したこれらの土を用いて行なっているようである。

墳丘断面図を見ると、旧表土面から約2.5m盛土を行なった段階で平坦面を形成し、3号・4号・5号埋葬施設を構築している。1号埋葬施設は、3号埋葬施設よりレベルが高い位置から掘り込まれており、3号埋葬施設との掘り形の境界が明確に残っていることから、3基の埋葬施設を埋めて盛土したあとに掘り込んで構築されている。第5号埋葬施設は、墳丘断面図から、4号埋葬施設構築後に盛土した層から掘り込んでいるので、その後に構築されたことが分かる。2号埋葬施設は、3号埋葬施設を切って掘り込まれているため、3号埋葬施設よりも後に構築されている。3号埋葬施設と4号埋葬施設の前後関係ははっきりしないが、4号埋葬施設は墳丘の中心部分に位置し、墓壙の規模も最も大きいことから、本古墳の中心埋葬施設であると言えよう。以上のことを踏まえて整理してみると、4号・3号→1号・2号・5号埋葬施設の順番で構築されたと考えられる。埋葬施設の主軸は、ほぼ同一方向を意識して構築されているが、2号埋葬施設のみ東西方向と異なっている。

##### 埋葬施設

##### 1号埋葬施設 (第32図, 図版18・26)

墳丘中心からやや西南にずれた位置にあり、3号埋葬施設と東壁を接するように平行して構築されている。長軸2.15m、短軸1.1mの長方形の墓壙で、壁はほぼ垂直に掘り込まれている。棺部は長さ1.6m、幅0.63m、棺底までの深さ0.2mを測る。土層断面から、埋葬施設の構築過程はまず墓壙を掘り込み、次ぎに棺底部に少量のローム粒を含む黒褐色土を敷いて、その上に木棺を安置し、固定するように裏込めしている。棺部の北側隅に径0.25mの土坑が検出されているが、性格は不明である。

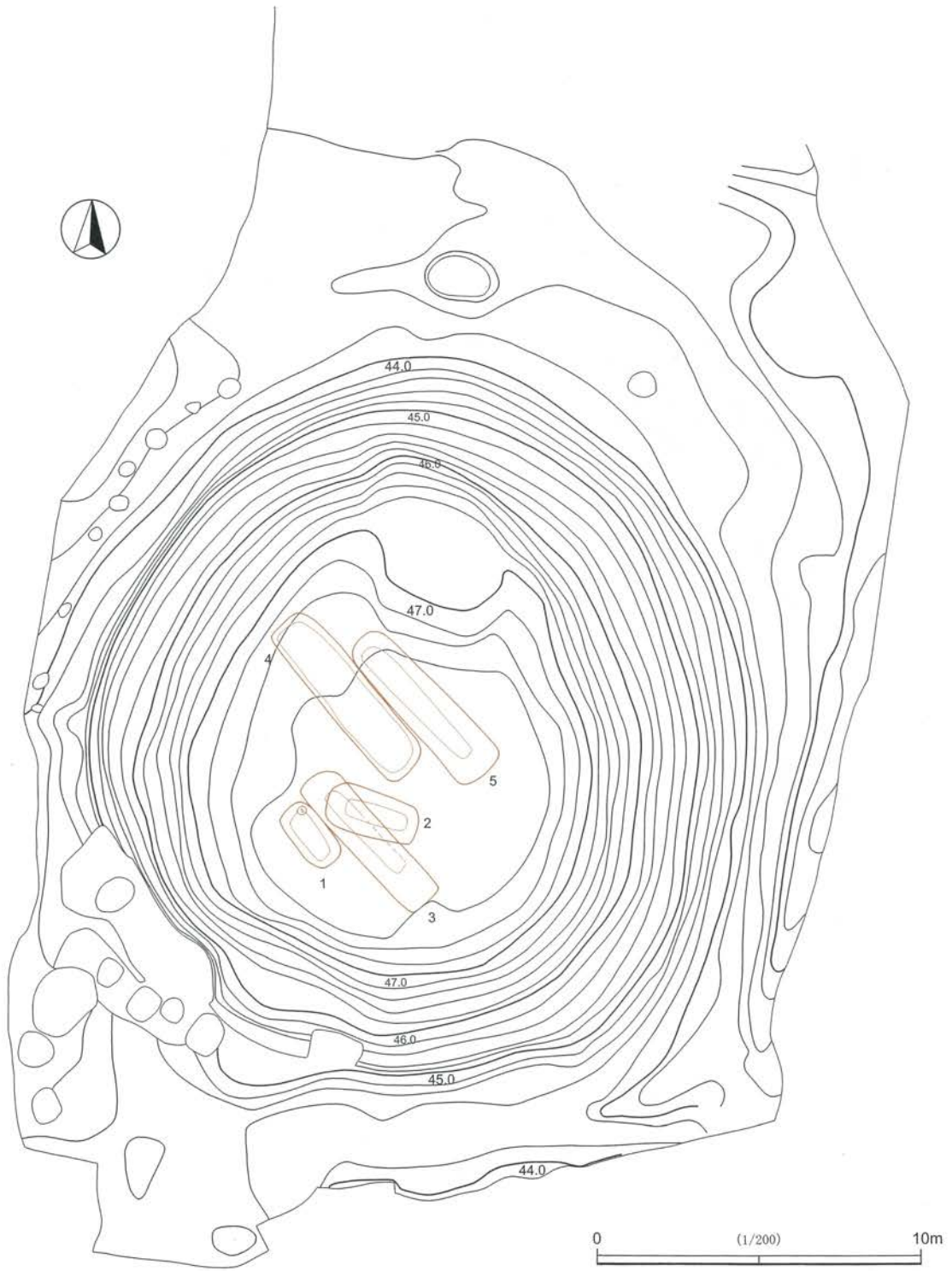
副葬品は、埋葬施設の中央付近からまとまって検出された。6の直刀は、刀先を北に向け、刃を東に向けた状況である。直刀の西側に接して出土した5の刀子は、直刀と同じ向きで出土している。

鉄鏃4点、刀子1点、直刀1振りが出土している。鉄鏃は短頸式で、逆刺があり腸袂状を呈している。鏃身部の断面は片丸で、棘篋被(2・3)とスカート状(1・4)の2つのタイプがある。5の刀子は両関となり、茎が完存している。茎尻に近い位置に目釘孔が一ヶ所開けられ、目釘が遺存している。木質の遺存状況から、茎に繊維を巻きつけ、柄木を装着したものと思われる。6の直刀は刃先を欠損しているが、

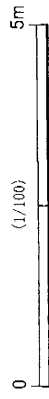
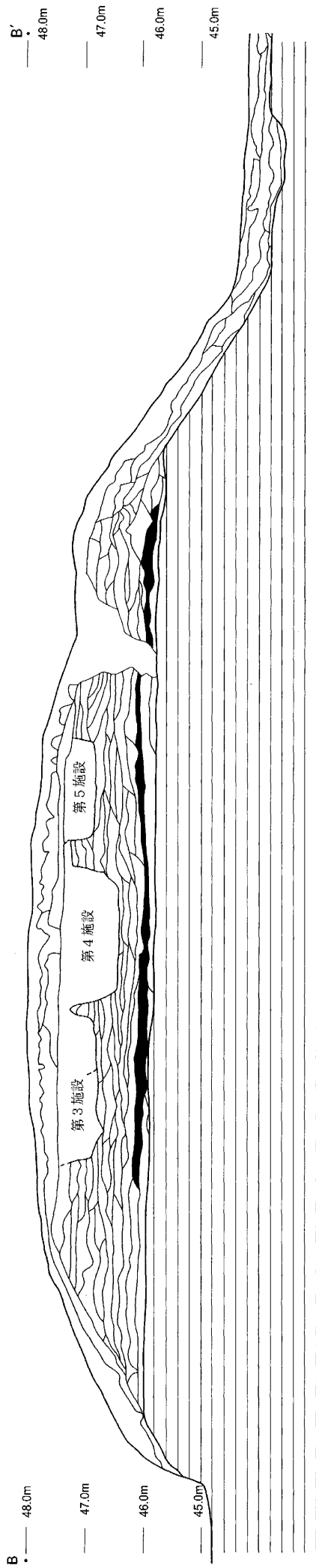
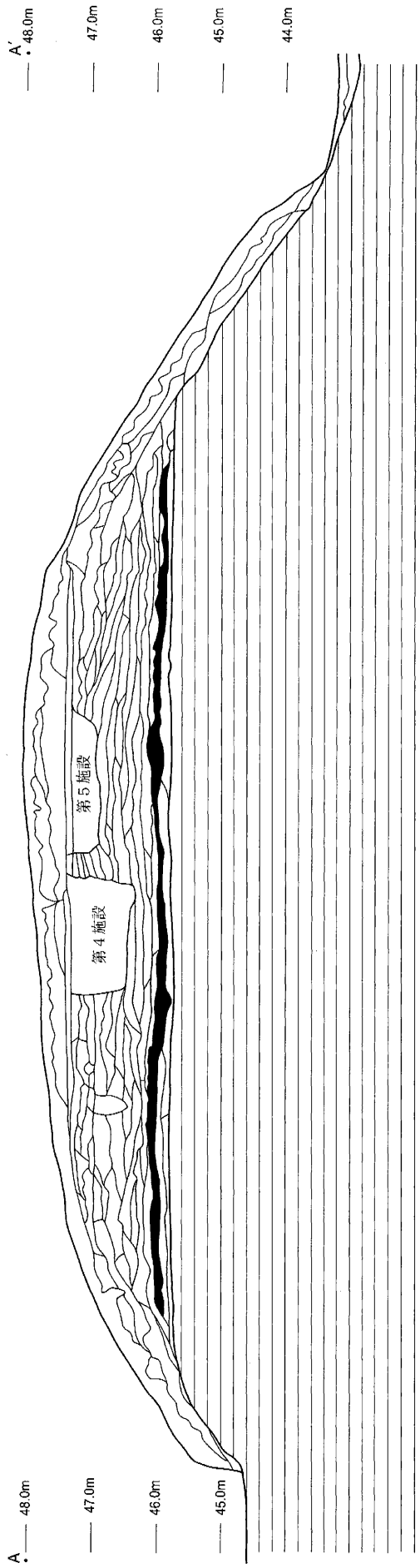


第29图 4号墳墳丘現況図

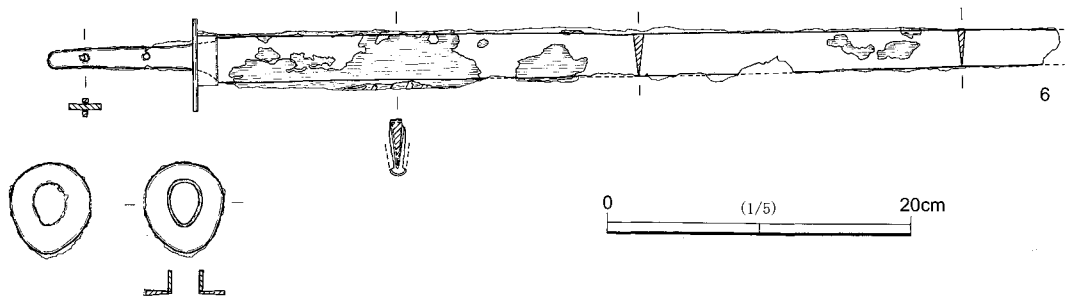
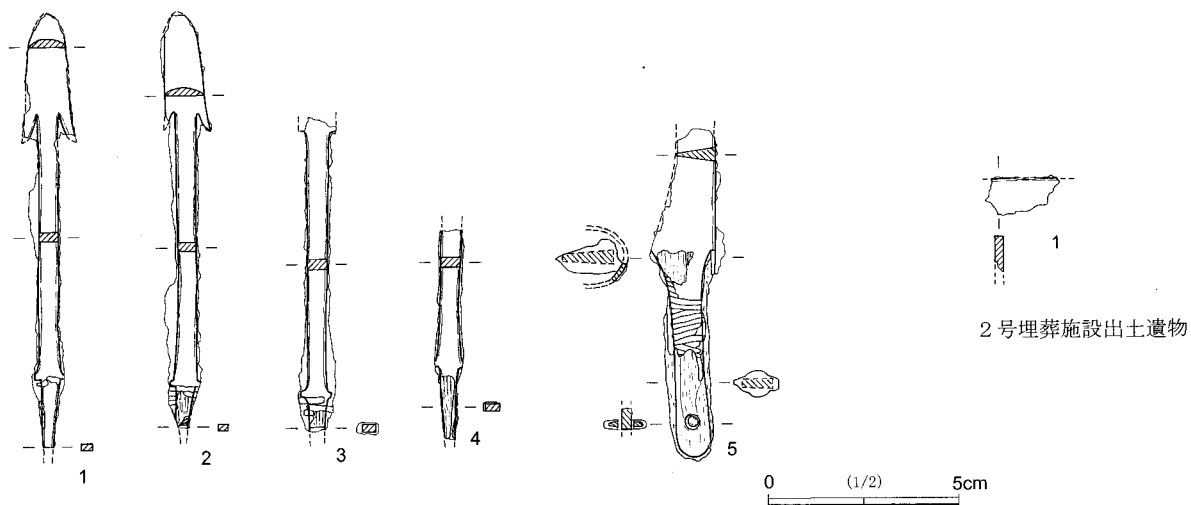
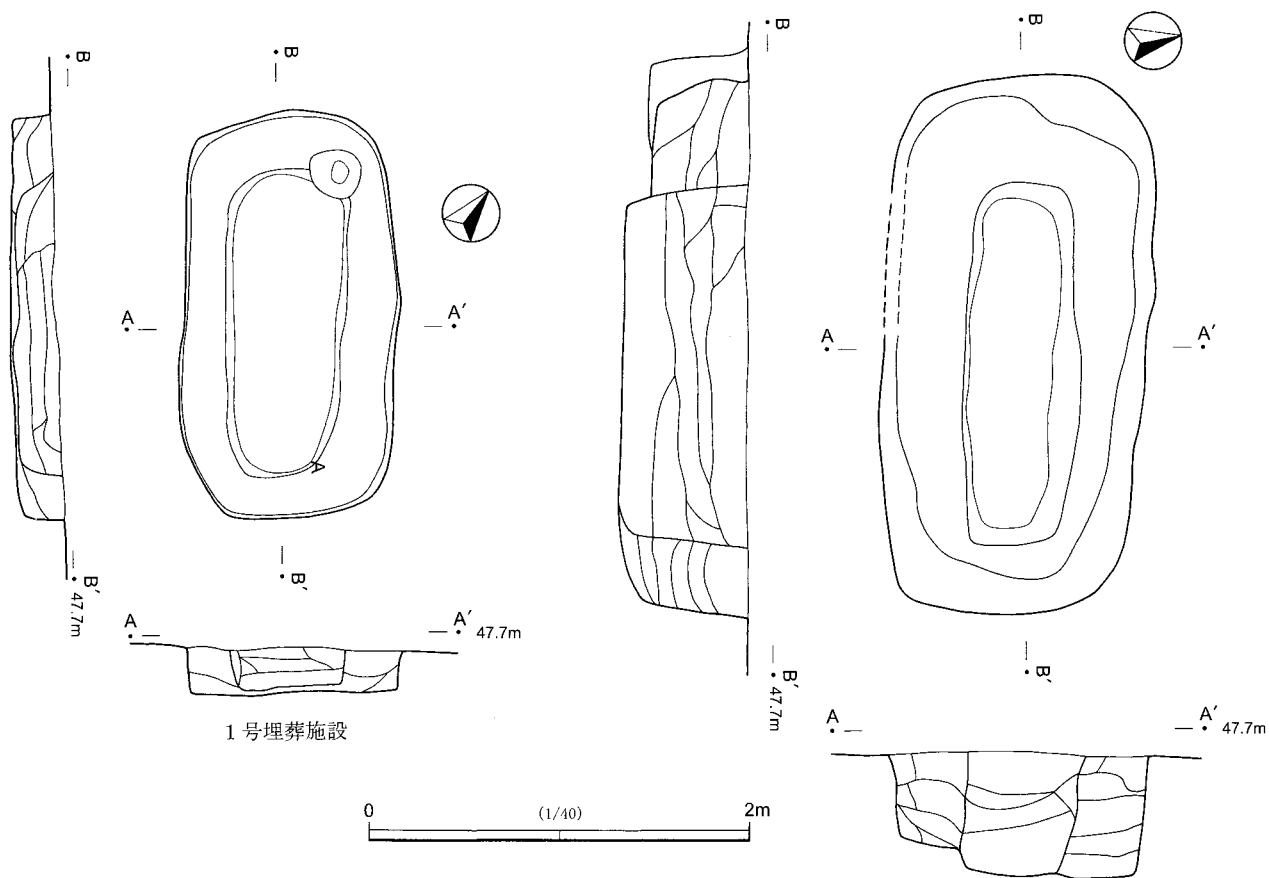




第30図 4号墳丘測量図



第31图 4号墳墳丘断面图



第32図 1・2号埋葬施設

現存長66.4cmを測る。片関で棟側には関が形成されないようである。茎には目釘孔が2か所確認でき、茎尻側には目釘が遺存している。鏝は無窓の卵倒形である。明瞭ではないが、鞘木の遺存部分に植物繊維が巻きつけられている。巻の間隔が密な部分と粗い部分がある。また、鞘木の遺存部分に黒漆色の光沢のある面が確認でき、漆塗りとなる可能性もある。

#### 2号埋葬施設（第32図，図版18・19）

墳丘中心からやや南側に偏った位置に、3号埋葬施設の中央部付近を斜めに切り込んで墓壙を掘り込んでいる。他の埋葬施設とは主軸が約30度異なっている。墓壙は、長軸2.85m、短軸1.4mの長方形を呈し、底面は、南側より北側の方が20cm、西側より東側の方が15cmほど深く掘り込まれている。棺部は長さ1.97m、幅0.63m、棺底までの深さは0.66mを測る。

2号埋葬施設からの副葬品は少なく、用途不明の鉄製品片が1点出土しているのみである。

#### 3号埋葬施設（第33～35図，図版19・26・27・28）

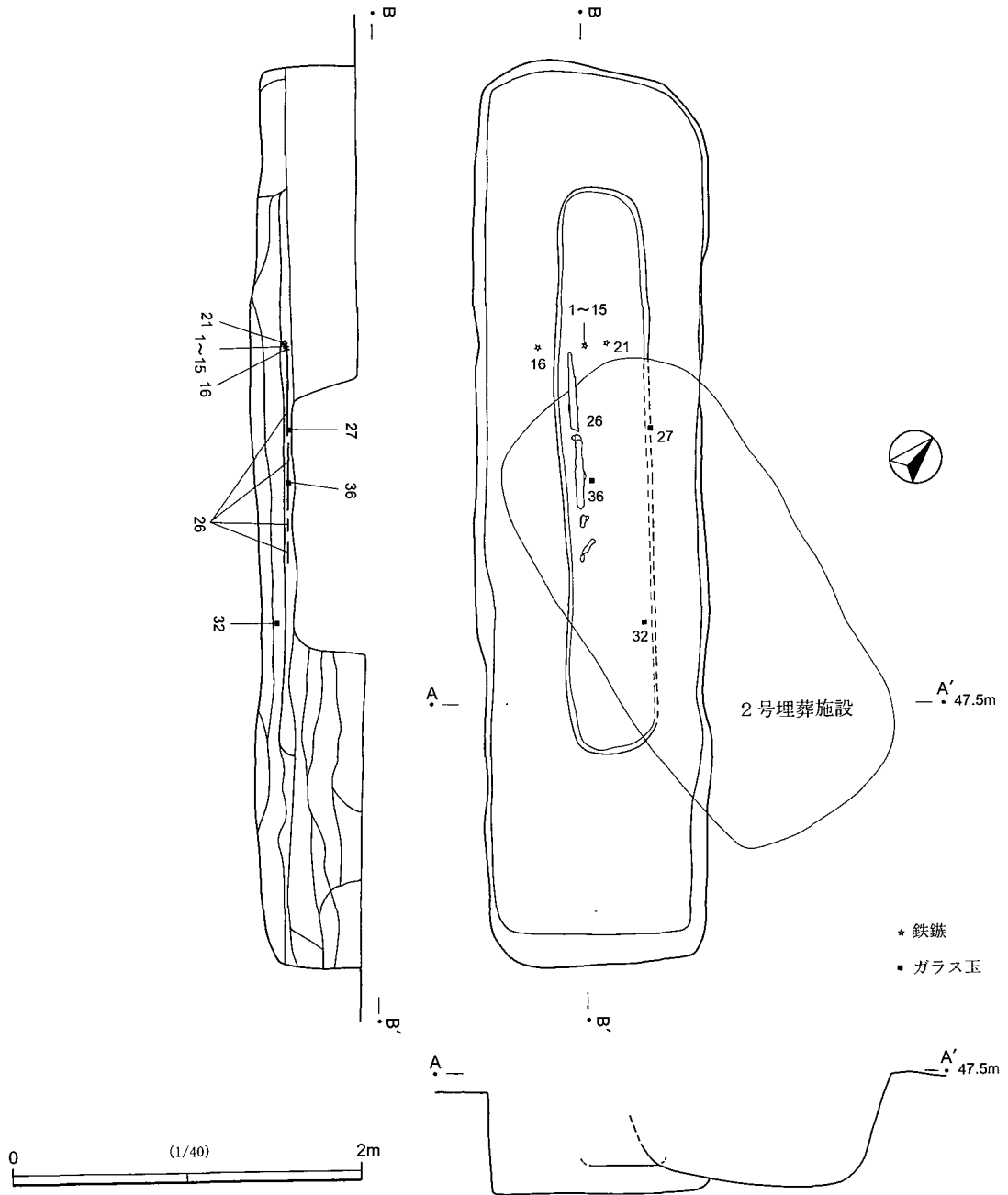
墳丘中心からやや西南側に偏った位置に設けられるが、2号埋葬施設によって中央付近を切られている。墓壙は、長軸5.2m、短軸1.3mの長方形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれる。棺部は長さ3.25m、幅0.55m、棺底までの深さは最大0.65mを測る。2号埋葬施設によって中央付近が削平されているため不明な部分もみられるが、底面から15cmほど高い位置で遺物が出土している。遺物の出土状況から考えると、遺物の出土レベル付近に棺底面があったものと思われる。墓壙底面と棺底面との間層は、ローム細粒を含む黒褐色土の敷き土であろう。

出土遺物は、埋葬施設の中央付近からまとまって出土しているが、直上まで2号埋葬施設の底面が及んでいるためやや明確でない部分もある。直刀は、刀先を西に向け、刃を北に向けて出土している。鉄鏃は直刀の西側付近から出土し、固まって出土している鉄鏃は、鏃身部を東に向けている。玉類は、埋葬施設の中央付近から切子玉・丸玉・ガラス玉が混在して出土している。

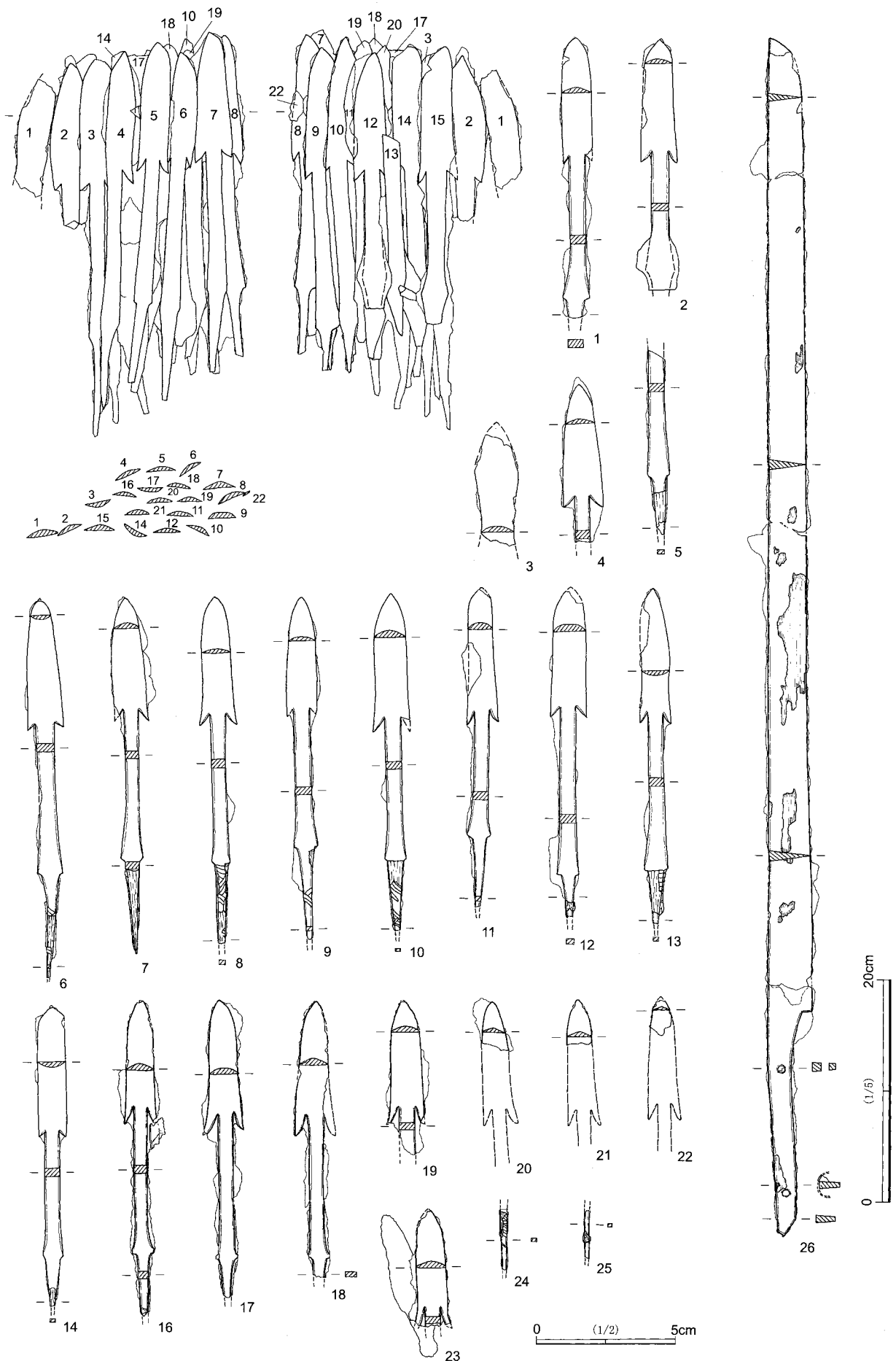
水晶製の切子玉・丸玉計13点、ガラス玉19点、鉄鏃8本、直刀1振りが出土している。1～22の鉄鏃は短頸式で、逆刺があり腸袂状を呈している。鏃身部の断面は片丸で、茎関の形状がスカート状を呈し、すべて同一のタイプである。これらの鉄鏃はすべて一塊の錆着した状態であり、断面形からほぼ水平に積み重なった状態であることが伺われることから、胡碌のような容器に入れて副葬したことが想定される。容器の大きさは一塊の鉄鏃の外形に近いものであろう。23も同様のタイプの鉄鏃である。26は、全長107.2cmを測る直刀で、刃側に直角の関が形成され、棟側には存在しない。鞘木と柄木が部分的に遺存し、茎の背に紐巻の痕跡を留めている。目釘孔は2ヶ所開けられる。27～39は水晶製の玉類で、いずれも片側穿孔である。算盤形を呈する切子玉5点（27～31）と丸玉8点（32～39）に大きく分けられる。40～58はガラス玉である。直径6～7mmで群青色のガラス玉12点（40～51）が主体であるが、形態的にバラエティーがある。他に、直径3～4mmで群青色のガラス玉2点（52・53）と直径3～4mmで空色のガラス小玉5点（54～58）が出土している。

#### 4号埋葬施設（第36図，図版19・28）

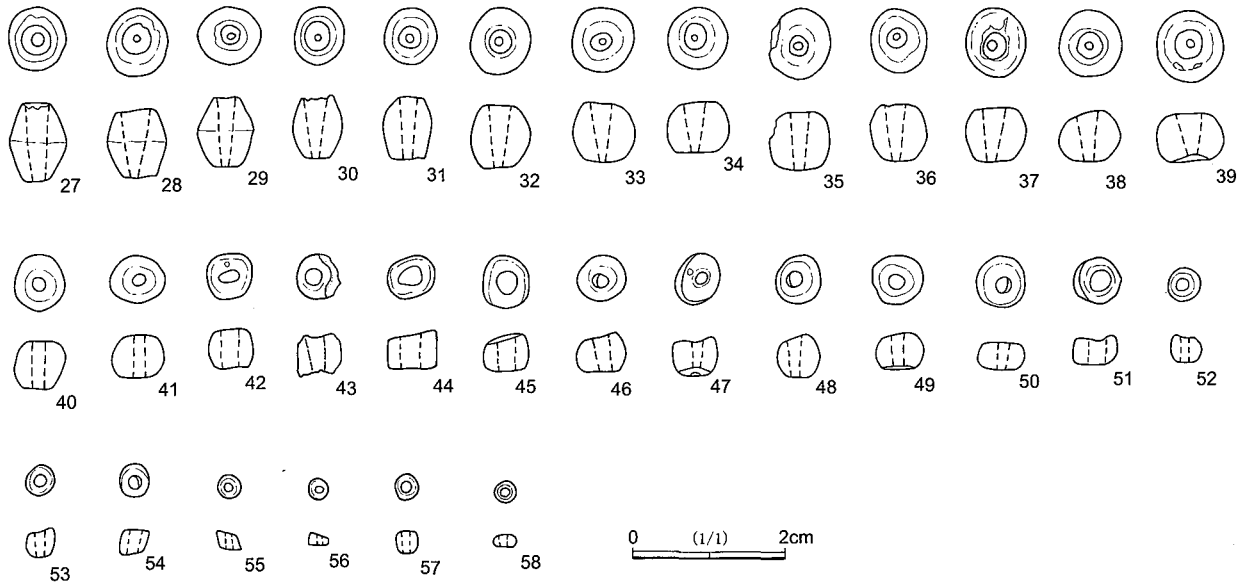
墳丘の中心付近に位置する。出土遺物は少ないが、規模からしても中心的な埋葬施設となろう。墓壙は、長軸5.9m、短軸1.5mのやや不整な長方形を呈し、棺部は長さ4.5m、幅0.55m、棺底までの深さ約1mを測る。南東壁はやや傾斜をもって外側に開くが、他の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。木棺部の形状は、北側の小口部は直線的で、南側が弧状を呈している。割竹形木棺であろう。墓壙と木棺部の間はロー



第33図 3号埋葬施設



第34图 3号埋葬施設出土遺物(1)



第35図 3号埋葬施設出土遺物(2)

ムブロック・ローム粒が主体の黒褐色土により裏込めされている。出土遺物は、底面から40cm以上浮いており、棺外からも出土していることから、後世に何らかの攪乱があったものと想定される。

出土した副葬品は、ガラス玉6点のみである。1～3は径6～7mmを測る群青色のガラス玉で、中央に膨らみを有する。4～6は空色の小形品となる。

#### 5号埋葬施設(第37図, 図版19・27・28)

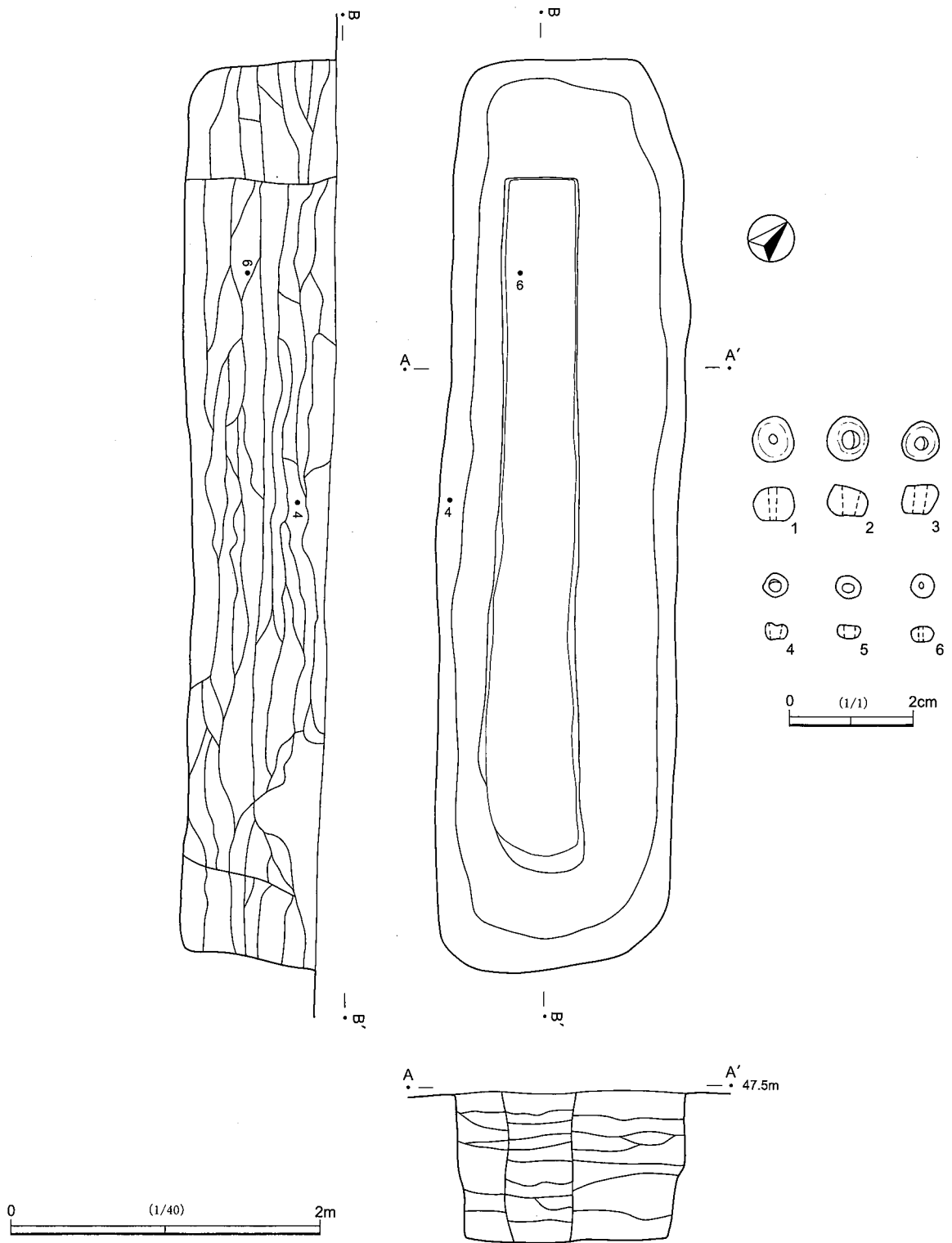
墳丘の中心からやや北東にずれた位置にあり、4号埋葬施設と西壁を接して平行に構築されている。墓壇は、長軸5.55m、短軸1.65mの長方形を呈するが、北側がやや弧状となる。棺部は長さ4.45m、幅0.7m、棺底までの深さ0.4m前後を測る。土層断面を見ると、底面にローム粒を含む黒色土を敷いて木棺を設置し、ロームブロックを含む暗褐色土で裏込めしている。また、棺部は南側に向かって徐々に幅を狭めていることから、割竹形木棺であった可能性が高い。

出土遺物は、木棺の上部レベル、確認面付近から出土しており、棺外に置かれていた可能性が考えられる。直刀は、刀先を西に、刃を南に向けて出土している。ガラス玉や耳環が西側から出土していることから、頭位方向は西側と思われる。副葬品は、ガラス玉12点、鉄鏃5本、刀子1点、直刀1振り、錫製の金環1点である。1～12は小形のガラス玉である。直径2～3mmで色調は緑色を呈している。13～17は長頸鏃と思われる鏃身部を欠く。茎関の形状がスカート状になるタイプ(15・17)と篋被状になるタイプ(14・16)がある。18は切先部を欠く刀子である。柄木が良好に遺存している。19の直刀は両関となるが、棟側は直角、刃側は弧状となる。鞘木と柄木と思われる木質が部分的に遺存する。20は錫製の耳環であるが、遺存状態が極めて悪いため詳細は不明である。1個体分として推定したが、2個体分となる可能性もある。

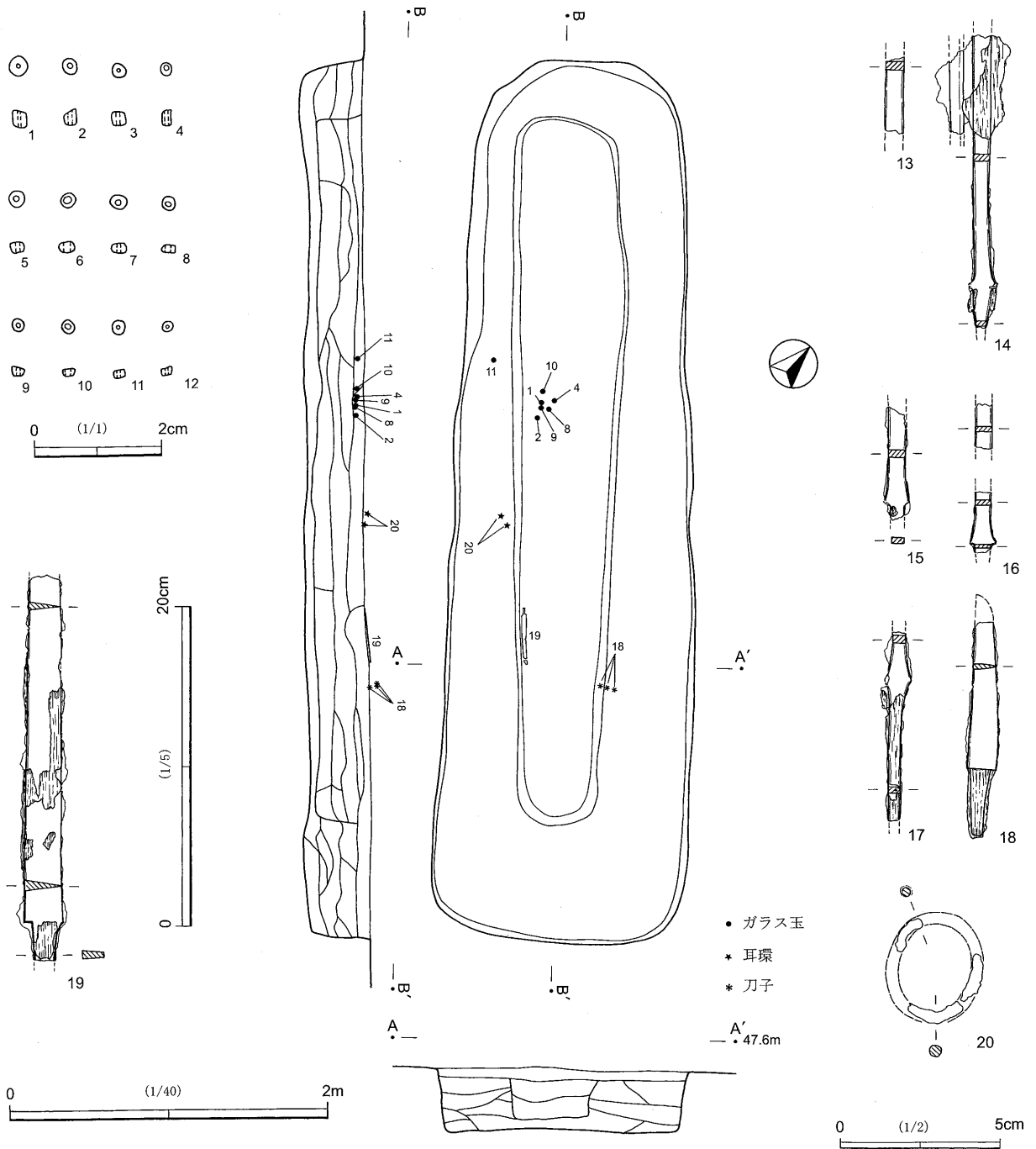
#### 墳丘出土遺物(第37図, 図版25・28)

墳丘から土師器の坏2点が検出された。1は口縁部の一部のみのため全体の様相は不明であるが、口縁部が外傾するタイプで、体部外面にヘラケズリが施される。内外面ともに赤彩される。2は、口径13.4cm、器高4.3cmを測り、体部に比べて口縁部が大きいタイプである。口縁部は長くやや内傾し、体部は扁平で底部が若干上げ底となる。全体に薄く仕上げられ、ナデ調整が施される。内外面とも赤彩が加えられる。これらの土器の年代は、6世紀前半のやや新しい時期と考えられる。3～7は出土位置不明の玉類である

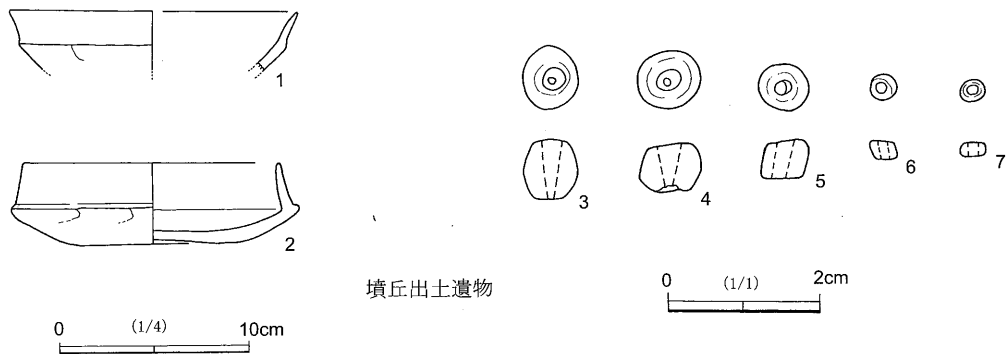




第36図 4号埋葬施設



5号埋葬施設・出土遺物



墳丘出土遺物

第37図 5号埋葬施設・墳丘出土遺物

が、本来埋葬施設に伴う副葬品であろう。3・4は水晶製で、3は切子玉、4は丸玉となろう。5～7はガラス玉である。形態がそれぞれ異なるが、5は群青色、6は緑色、7は青色を呈している。

#### SM-001 (第38図, 図版20)

調査区南側に位置する円墳であるが、墳丘は削平されており、周溝のみの検出となった。SM-002と周溝東側で一部切り合っている。前後関係は明確ではないが、本古墳の方が新しい時期の所産と思われる。規模は、周溝外側で東西19.7m、南北18.3mと東西にやや長くなる。周溝の幅も一定ではなく、底面も西側に比べて東側が広がる傾向にある。周溝の覆土は自然堆積であるが、全体にローム粒やロームブロックを多く含んでおり、墳丘盛土が流れ込んだものと思われる。周溝からは、杯と埴が検出された。覆土中がほとんどであるが、埴は周溝南西側の底面直上からの出土である。

埋葬施設については、位置関係からしてSK-032が相当すると思われる。

#### 出土遺物

1～3は土師器の杯である。いずれも小片であるが、1は器壁が薄く硬緻で、丁寧な作りである。口唇部内面に沈線状の凹みが巡る。内外面とも赤彩される。2・3は口縁下に明瞭な稜を有さず、全体に厚いつくりである。ナデの後横方向にヘラナデが施されている。4はほぼ完形の埴である。やや厚手のつくりで、内面に輪積み痕が明瞭に観察される。頸部に縦方向の細かいハケ目が若干残り、胴部は幅広のケズリが施される。5は外面に粗いヘラケズリが残る甕の底部である。本古墳の築造年代を示す土器は4のみである。明確ではないが、5世紀中頃に含まれるものと思われる。

#### SK-032 (第38・39図, 図版22・27・29)

調査区中央よりやや南、U6-55グリッド付近に所在する。北側はSS-001と重複しているため不明であるが、時期的には本遺構のほうがSS-001により新しい。当初は単独の埋葬施設として捉えていたが、位置関係や出土遺物などから、SM-001に伴う埋葬施設として扱うこととする。現存する長軸3.5m、短軸2.1mを測る。確認面からの掘り込みはきわめて浅く、全体の形状も不整な長方形を呈すると思われる。底面はほぼ平坦である。

副葬品は、南側を中心に中央付近まである程度の纏まりをもって検出された。特に、集中範囲の南側からは、勾玉・管玉・鉄製品などが集中し、多量の白玉の分布も勾玉周辺に集中する傾向にある。このことからすると、頭位を南に置いた埋葬と思われる。

#### 出土遺物

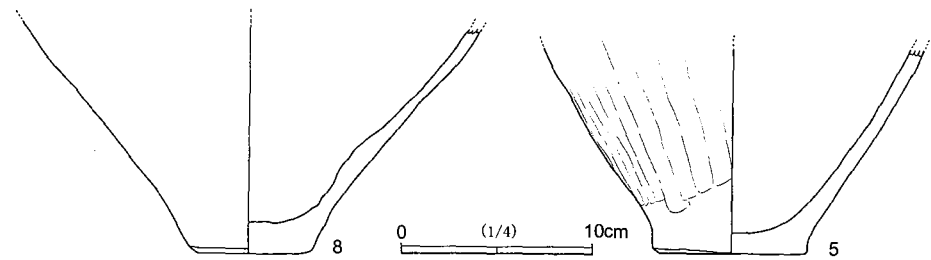
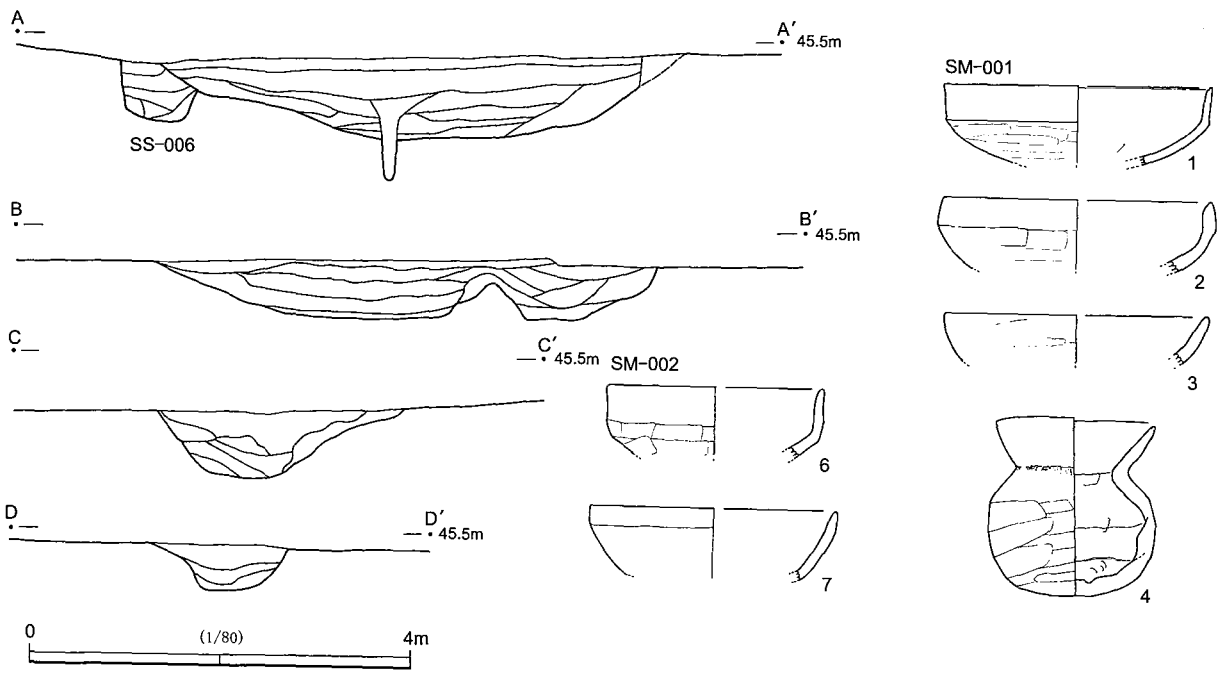
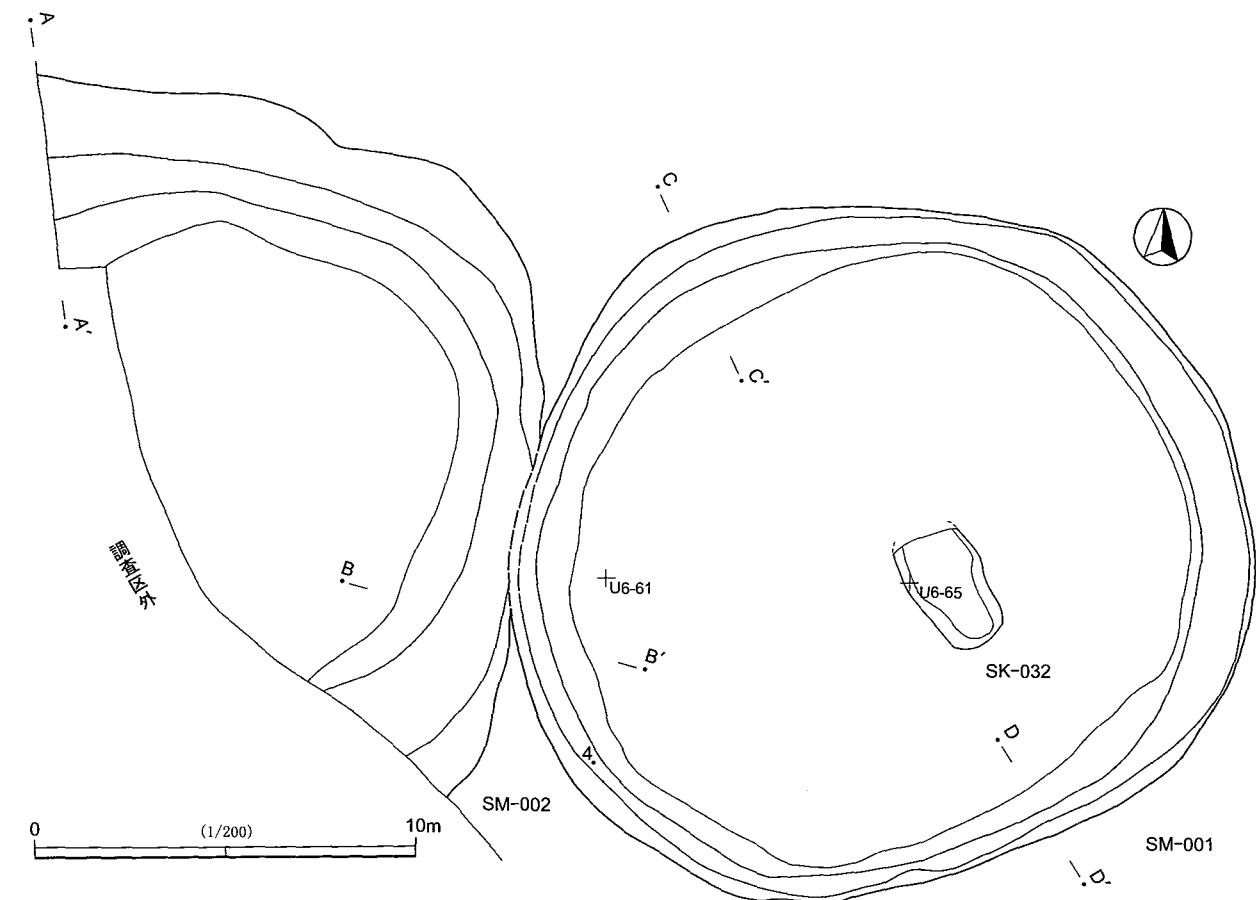
1～20は緑色凝灰岩製の管玉、21は硬玉製・22はメノウ製の勾玉、23～102は滑石製の白玉である。103は先端部を欠く刀子で、茎部に木筒が良好に遺存する。104は木製の筒状容器に入れられた鉄製針で3本確認される。管玉は全体に細身で、長さにもそれほどバラつきは認められない。白玉は全部で3,686点出土している。

#### 白玉の分類

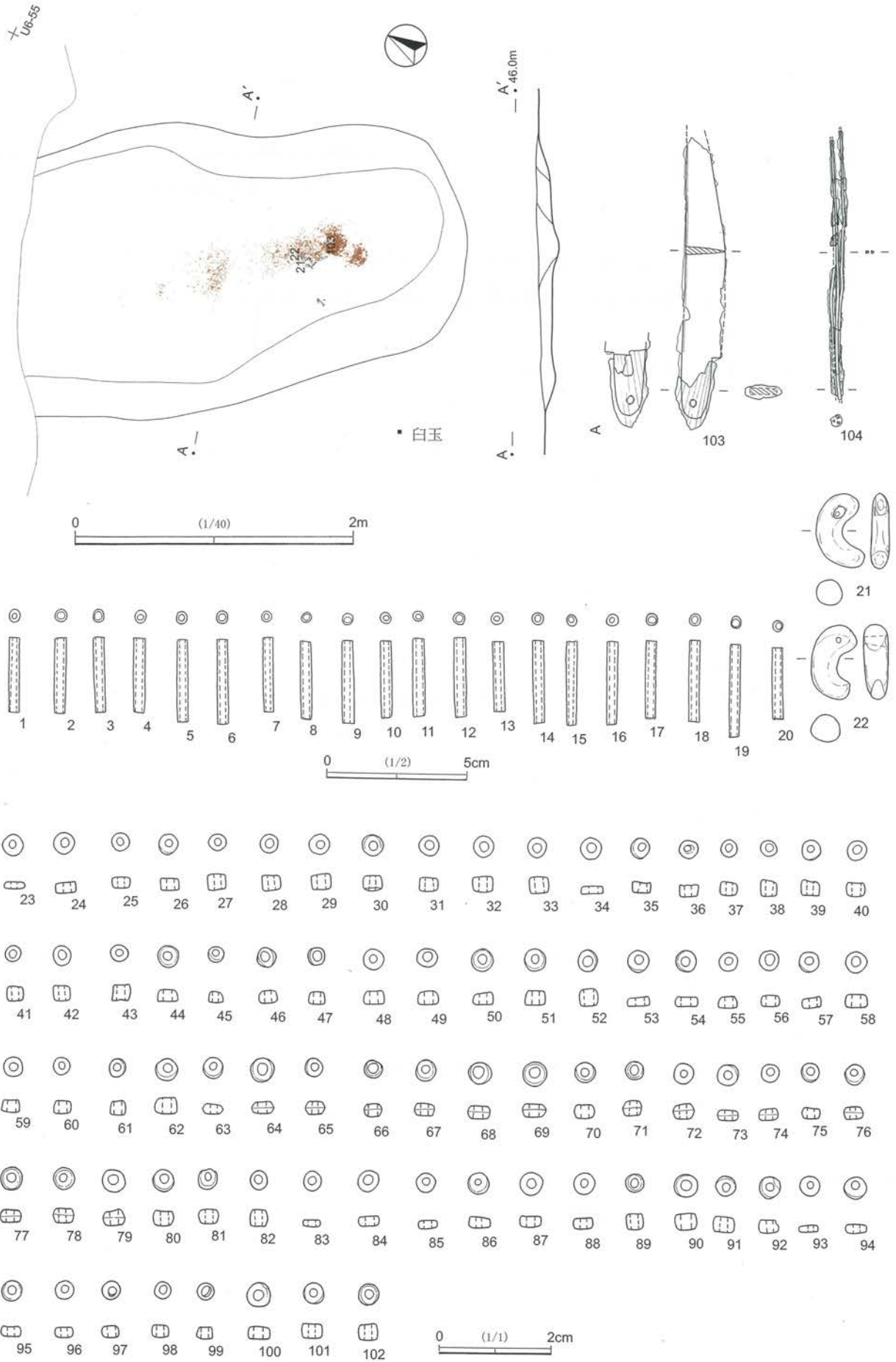
製作時における研磨の方法などにより4つの形態に分類した。これは、白玉製作工程模式図（千葉県文化財センター『研究紀要13』第40図）に基づき、最終調整とその結果生じた形態を分類したものである。

丁寧な調整が施されているものをA、比較的粗雑な調整のものについてBとした。Aのタイプが圧倒的に多い。また、それぞれを以下のとおりに4分類した。

1. 全体を一方向に上から下に研磨し、円筒形を呈しているもの。



第38図 SM-001・002・SK-032



第39图 SK-032遺物出土狀況

2. 上面からやや斜位に上下に研磨することで、稜が中位よりやや下にできるもの。
3. 上面からの研磨の後裏返して同様に研磨することで、中位に明瞭な稜ができ算盤玉形を形成するもの。
4. 全体を繰り返し上下に研磨することで、上下端部より中位に膨らみを有する形となるもの。

この4形態を詳細に観察すると、全てに上面（一面）のみを研磨して整えているものと、上下面丁寧に研磨しているものがある。結果としては表とグラフの通りであるが、丁寧に研磨を施した《A》が圧倒的に多いことがわかる。

それぞれの形態について、最大径と高さの個体数の分布を細かくみてみたい。（第238図参照）

- \* A 1は224個体である。散在するものの最大径は、2.8mm～3.4mmに集中している。高さを見ると、ばらばらで特に傾向は持たない。
- \* A 2は658個体である。最大径は4.5mm前後のものがいくつか目立つものの、3.2mm～3.8mmに集中している。高さは1.5mm～2.5mmに集中している。
- \* A 3は、971個体である。最大径は3.0mm～3.9mmに集中している。高さは1.7mm～2.7mmに集中している。
- \* A 4は、1721個体で最も多い形態であり、最大径は2.6mm～3.8mmに特に集中している。高さは1.7mm～2.6mmに集中している。

形態による高さの特徴は大きくみられない。全体的に1mm～3.5mmの間で製作されている。最大径については、形態1、4は、2、3と比較すると比較的最大径が小さい、稜を有さずいわゆる細い仕上がりが多いということになる。形態2、3は中位または下位に稜を有しており、幅のある感がある。

#### SM-002（第38図，図版20）

SM-001同様周溝のみ検出された円墳である。西側は調査区外となる。SM-001に西側周溝の一部が切られる。北側調査区境界付近でSS-006を若干切っている。規模は不明であるが、SM-001に近い大きさと思われる。ただ、周溝の幅は広くなり、周溝の掘り方も雑である。埋葬施設については確認されなかった。周溝内の覆土は自然堆積の様相を呈しているが、覆土中のローム粒・ブロックの混入は少なく、墳丘自体それほど高くなかったものと思われる。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

6・7は杯の小片である。6には横方向のヘラケズリ、7にはナデ調整が施されている。8は甕の底部である。内面は剥離が著しく、二次的に火を受けている可能性もある。

#### SM-003（第40図，図版21）

調査区北側、4号墳墳丘下で検出された方墳である。周溝のみの遺存で、南側は4号墳の地山整形により削平されている。規模は、東西方向で推定13.0mほどを測る。周溝の掘り込みは浅い。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

1はコップ状を呈しており、口唇部に細く細かい刻みが認められる。全体にナデ調整される。本遺構に伴う土器ではなからう。

SM-004 (第40図, 図版21)

4号墳墳丘下北側で検出された方墳である。周溝の一部を確認したのみで、他は4号墳の地山整形により削平されている。規模も不明であるが、SM-003よりはやや大形になると思われる。

遺物の出土は少ないが、南東コーナーで完形の埴が溝底に正位で置かれたような状態で検出された。

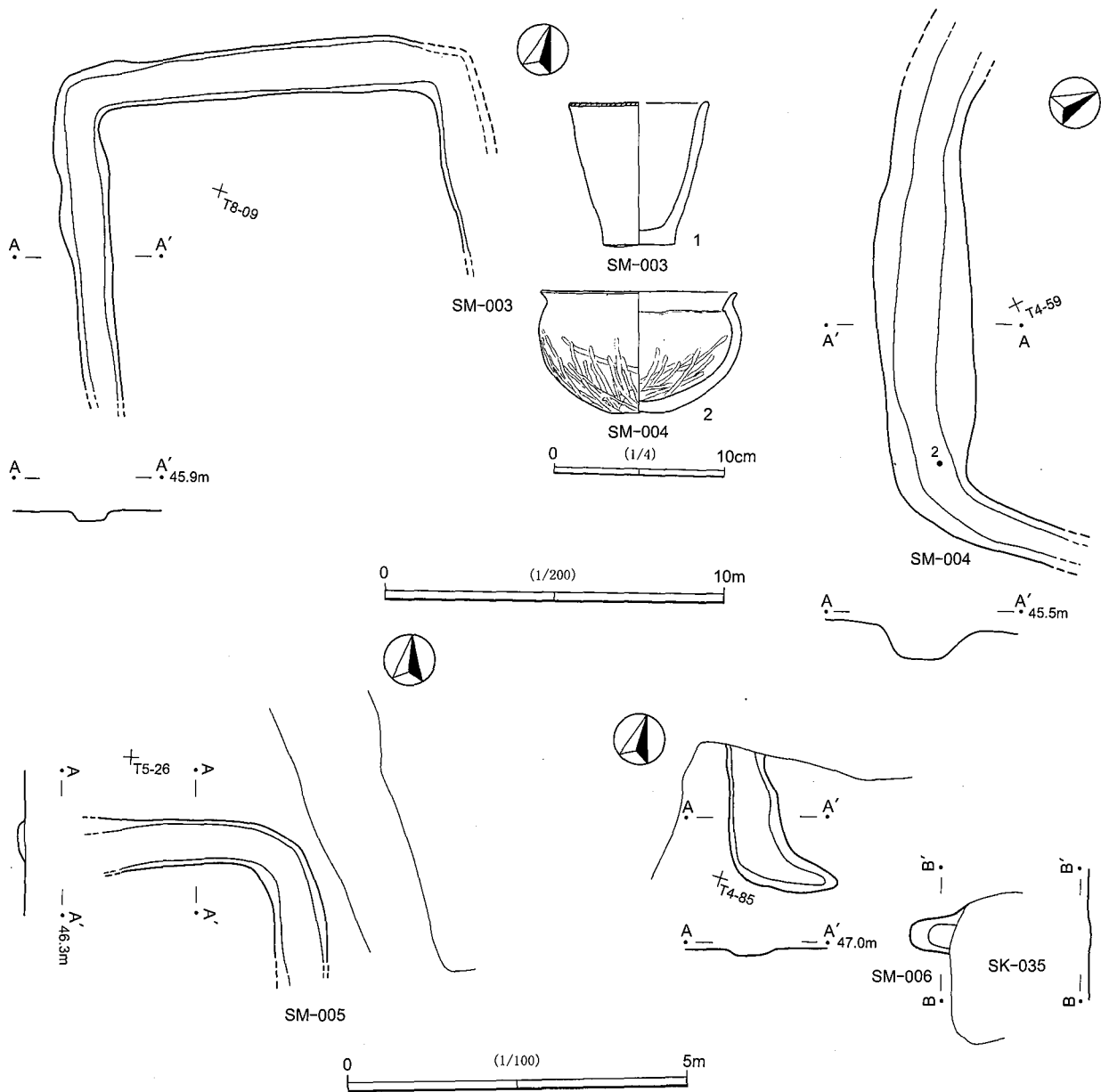
出土遺物

2は完形の土師器埴である。口縁部は外側に短く摘みあげられ、底部は小さくやや上げ底となる。作りは丁寧にミガキが内外面に施される。口縁部内面の屈曲部には成形時の粘土痕が明瞭に残る。本遺構に伴う土器であり、古墳時代前期から中期にかけての所産であろう。

SM-005 (第40図, 図版22)

4号墳墳丘下南側で検出された方墳である。北東コーナー付近のみの検出で、他は4号墳の地山整形により削平されているため、全体の規模は不明である。確認面からの掘り込みは浅い。

遺物の出土はなかった。



第40図 SM-003~006



## SM-006 (第40図)

4号墳墳丘下南側で検出された遺構であるが、方形周溝墓や土坑・溝と重複しているため詳細は不明である。西側溝と南側溝の一部のみの遺存と想定した。南側溝の中央に陸橋部を有するタイプと思われる。

確認面からの深さはきわめて浅い。

遺物の出土はなかった。

## 2. 土坑墓

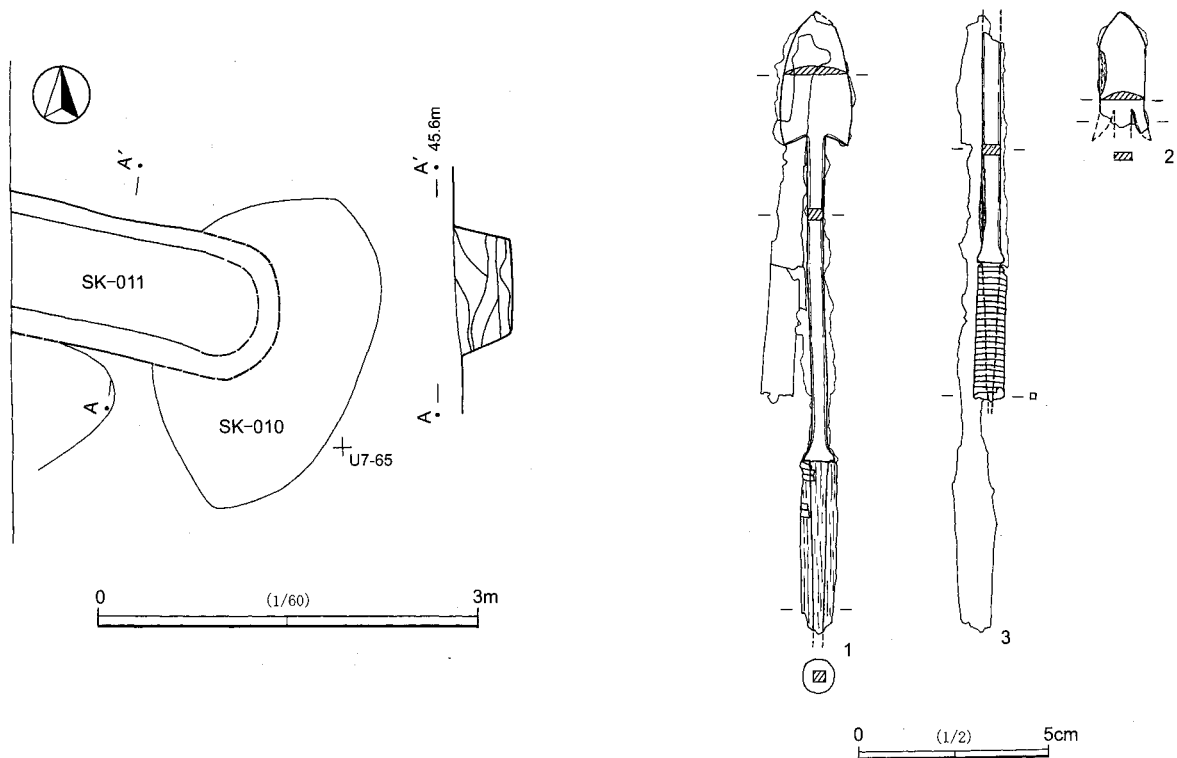
### SK-011 (第41図, 図版14・27)

調査区南端, U7-54グリッド付近に所在し, 東側で土坑と重複するが, 新旧関係は不明である。幅1.0m, 確認面からの深さ0.5mを測る。覆土中にロームブロックを多く含むことから, 人為的に埋め戻されたものと思われる。

遺物は, 底面付近から纏まって鉄鏃が出土していることから, 単独の埋葬施設となる可能性が高い。

### 出土遺物

1～3は鉄鏃で, 1・2は錆着している。1はほぼ完形の長頸鏃である。鏃身は片丸造りで, 逆刺の浅い長三角形式となる。関部は台形状を呈する。茎には木質が良好に残り, 皮巻き痕跡がみられる。2は鏃身のみで, 逆刺の深い柳葉形である。片鑄造りに近い。3は鏃身を欠く。茎部の皮巻き痕が明瞭に観察される。



第41図 SK-011

### SK-018 (第42図)

調査区中央, U6-00付近に位置する。溝や方形周溝墓と重複しているが, 新旧関係は不明である。長軸3.2m, 短軸0.9mを測るやや不正な長楕円形を呈する。土坑内は2段に掘り込まれており, 確認面からの深さ0.6mを測る。覆土中にローム粒・ロームブロックを多く含み, 人為的に埋め戻されたようである。

遺物の出土は少ないが、その形状から考えると、単独の埋葬施設となる可能性が高い。

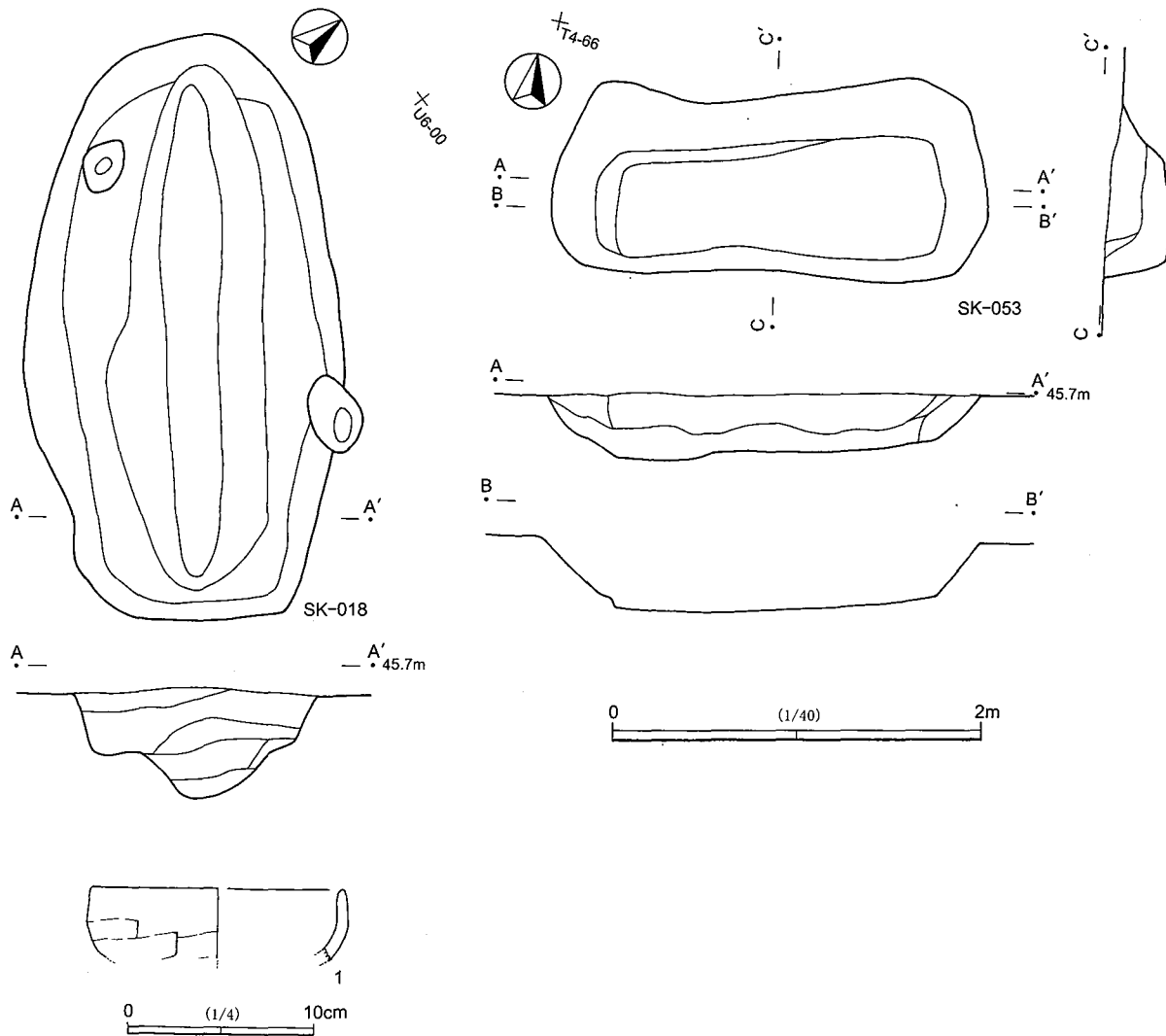
### 出土遺物

1 は土師器の杯片で、体部外面にヘラケズリが施される。古墳時代後期の所産であろう。

### SK-053 (第42図, 図版15)

4号墳墳丘下に位置し、SD-005と西端で重複するが、新旧関係は不明である。長軸2.4m、短軸1.0mを測る長方形を呈示する。確認面からの深さは0.35m程度で底面はほぼ平坦である。

遺物の出土はなかったが、形状と位置関係からSM-006の埋葬施設となる可能性が考えられる。

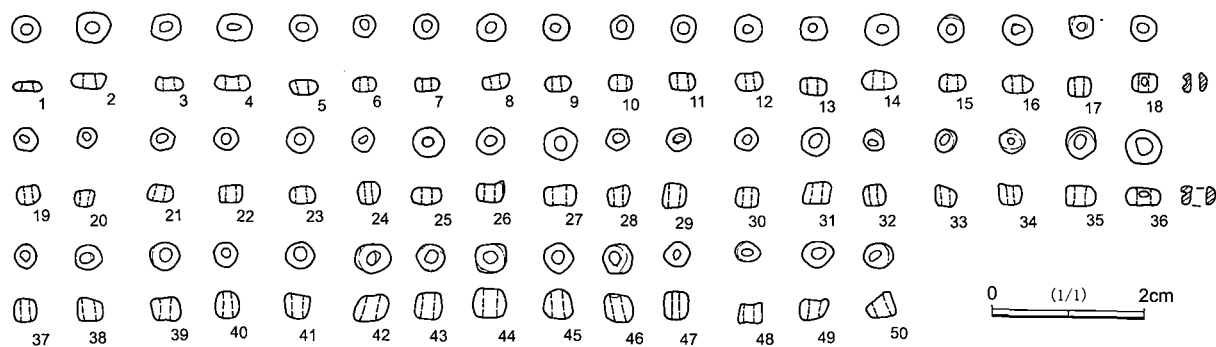
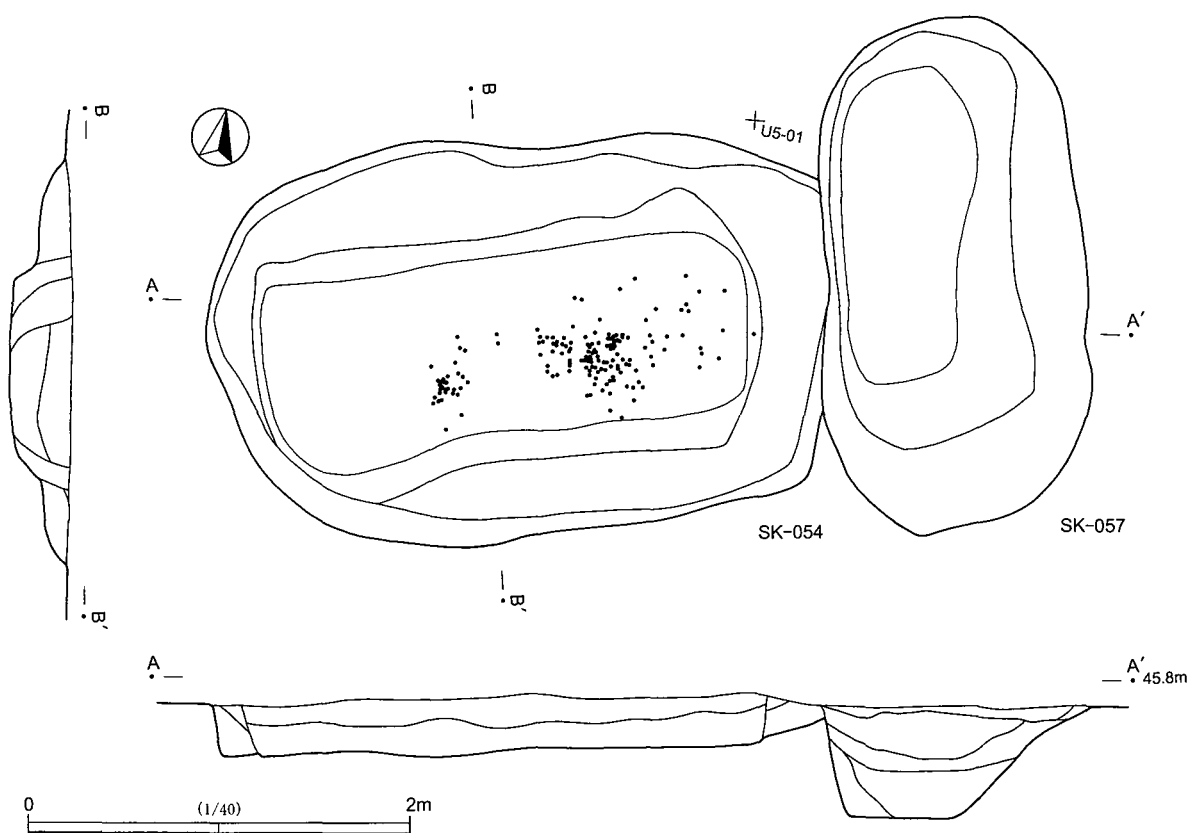


第42図 SK-018・053

### SK-054 (第43図, 図版16・28, 第3表)

4号墳墳丘下に位置し、SK-057と東端で重複するが、本遺構のほうが時期的に先行するものと思われる。長軸約3.3m、短軸2.0mを測り、内部が長軸2.7m、短軸1.2mで若干低く掘り込まれている。確認面からの深さは0.3mである。土層断面図からは、内部が木棺部として認識できる。

位置関係からして、SM-003に伴う埋葬施設と考えられる。



第43図 SK-054・057

出土遺物 (第3表)

出土遺物はガラス玉のみで、総数316点出土している。その内50点を図示した。他は計測表を参照されたい。分布範囲は、東側を中心に中央付近まで比較的集中している。若干浮いているものもあるが、ほとんど底面直上からの検出である。

径は、最大は5.95mm、最小は2.30mmであるが、最大と最小以外は2.6mmから4.7mmの間にあり、ほぼ一定の大きさである。一方、高さはややバラツキが認められる。色調はほぼ同一で、空色が9割以上を占めている。

第3表 SK-054出土ガラス玉計測表

挿図No.	遺物No.	径	高さ	孔径	重量
		(mm)	(mm)	(mm)	(g)
13	1-1	3.60	2.30	2.00	0.04
35	1-2	3.90	2.80	2.00	0.05
	1-3	3.50	2.20	1.50	0.03
	1-4	3.10	2.35	1.50	0.03
	1-5	3.25	2.15	1.50	0.03
	1-6	3.30	1.60	1.50	0.03
	1-7	3.30	2.30	1.50	0.03
	1-8	3.40	2.90	1.50	0.04
47	1-9	3.35	3.65	1.00	0.05
	1-10	3.50	2.30	1.50	0.04
17	1-11	3.30	2.70	1.00	0.04
	1-12	3.60	2.50	1.50	0.04
	1-13	3.00	2.90	1.50	0.03
2	1-14	3.55	2.20	1.50	0.03
	1-15	3.00	2.50	1.00	0.03
	1-16	3.25	1.50	2.00	0.01
	1-17	3.60	1.95	1.50	0.03
	1-18	2.80	1.70	1.50	0.02
	1-19	3.05	2.60	1.50	0.03
	1-20	3.40	1.70	1.00	0.02
	1-21	4.00	2.40	2.00	0.05
	1-22	2.80	2.30	1.00	0.02
	1-23	2.80	1.95	1.00	0.02
	1-24	3.70	2.30	1.50	0.03
	1-25	3.55	2.30	1.50	0.03
	1-26	2.30	2.40	1.50	0.02
	1-27	(3.20)	(2.70)	(1.50)	(0.02)
	1-28	2.70	2.50	1.50	0.03
	1-29	2.90	2.05	1.50	0.03
	1-30	3.10	3.20	1.00	0.04
	1-31	3.20	2.10	1.50	0.03
	1-32	3.40	1.60	2.00	0.02
	1-33	3.80	2.40	2.00	0.04
	1-34	3.00	2.80	1.00	0.03
38	1-35	3.35	2.70	2.00	0.03
	1-36	2.80	2.20	1.00	0.02
	1-37	3.90	1.85	2.00	0.03
	1-38	3.80	2.70	1.50	0.06
	1-39	2.70	2.65	1.50	0.03
	1-40	3.60	2.00	2.00	0.03
	1-41	3.05	4.30	1.50	0.05
	1-42	3.50	3.25	1.00	0.04
	1-43	3.35	2.40	2.00	0.03
	1-44	3.55	3.70	1.50	0.04
	1-45	2.80	2.65	1.50	0.03
	1-46	3.30	2.50	1.50	0.03
	1-47	(2.50)	(2.50)	(1.00)	(0.02)
38	1-48	3.40	1.50	2.00	0.02
	1-49	3.30	2.60	1.50	0.03
	1-50	3.95	2.45	1.00	0.04
29	1-51	3.00	2.90	1.50	0.03

挿図No.	遺物No.	径	高さ	孔径	重量
		(mm)	(mm)	(mm)	(g)
40	1-52	3.50	3.50	1.00	0.05
	1-53	3.30	2.45	1.50	0.03
	1-54	3.30	3.10	1.50	0.04
	1-55	3.40	2.20	1.00	0.03
	1-56	4.20	2.30	1.50	0.04
	1-57	4.30	3.20	1.50	0.07
	1-58	3.10	1.25	2.00	0.01
	1-59	3.10	2.10	1.50	0.02
33	1-60	2.90	2.10	1.50	0.02
	1-61	3.70	1.80	1.50	0.02
	1-62	3.80	1.75	1.50	0.04
	1-63	3.50	1.75	1.50	0.03
	1-64	—	—	—	—
	1-65	3.50	2.25	1.50	0.03
	1-66	2.90	1.80	1.50	0.01
	1-67	4.00	1.40	1.00	0.02
	1-68	3.50	1.80	2.00	0.02
34	1-69	3.50	1.75	1.00	0.02
	1-70	—	—	—	—
	1-71	4.00	2.00	1.50	0.03
	1-72	4.05	2.50	1.50	0.04
	1-73	3.95	2.65	1.00	0.05
	1-74	4.35	1.95	2.00	0.05
	1-75	2.65	2.20	1.50	0.03
20	1-76	3.40	2.25	1.00	0.03
	1-77	—	—	—	—
	1-78	3.40	2.10	1.00	0.03
	1-79	3.15	2.15	2.00	0.03
39	1-80	2.65	2.00	1.50	0.02
	1-81	3.20	1.95	1.00	0.02
	1-82	2.65	2.30	1.50	0.02
	1-83	3.30	2.20	1.50	0.03
	1-84	2.70	2.45	1.00	0.03
	1-85	3.80	2.00	1.50	0.03
	1-86	—	—	—	—
	1-87	3.30	3.90	1.50	0.05
	1-88	3.30	2.35	1.50	0.04
	1-89	3.85	3.00	1.50	0.06
	1-90	3.70	2.35	1.50	0.04
	1-91	3.90	2.50	1.50	0.05
	1-92	4.50	2.55	2.00	0.05
	1-93	3.05	2.20	1.50	0.03
11	1-94	3.80	2.70	2.00	0.05
11	1-95	3.45	1.75	1.50	0.02
	1-96	(3.70)	(2.55)	(1.50)	(0.02)
	1-97	4.15	2.40	1.50	0.04
	1-98	3.45	2.70	1.50	0.04
	1-99	2.95	1.60	1.50	0.02
3	1-100	3.45	2.10	1.50	0.03
	1-101	3.20	2.55	1.00	0.03
27	1-102	3.80	1.80	1.50	0.04

挿図No.	遺物No.	径	高さ	孔径	重量
		(mm)	(mm)	(mm)	(g)
	1-103	3.35	1.95	1.50	0.02
	1-104	—	—	—	—
	1-105	3.60	2.05	1.50	0.03
	1-106	3.40	2.15	1.50	0.02
	1-107	3.20	3.25	1.50	0.04
30	1-108	4.20	2.65	2.00	0.05
	1-109	3.80	2.20	1.50	0.04
	1-110	2.90	2.35	1.50	0.02
	1-111	3.20	1.80	1.00	0.02
18	1-112	3.15	2.70	1.00	0.03
	1-113	3.50	2.05	1.50	0.03
	1-114	3.35	2.15	1.50	0.03
	1-115	3.00	2.80	1.50	0.03
48	1-116	3.50	2.30	1.50	0.03
4	1-117	2.85	2.10	1.50	0.03
	1-118	3.20	1.75	1.50	0.02
	1-119	2.85	2.00	1.50	0.02
	1-120	3.90	3.05	1.50	0.05
	1-121	3.00	1.70	1.50	0.02
	1-122	3.25	1.70	1.50	0.02
19	1-123	4.50	1.90	2.00	0.04
41	1-124	3.15	2.60	1.00	0.03
	1-125	3.20	1.80	2.00	0.02
	1-126	—	—	—	—
	1-127	3.20	2.60	1.50	0.03
	1-128	3.55	2.60	1.00	0.04
	1-129	3.70	2.85	1.50	0.05
	1-130	3.20	2.80	1.50	0.03
	1-131	2.60	1.45	1.00	0.01
23	1-132	3.70	3.00	1.50	0.05
	1-133	3.65	1.90	1.50	0.03
	1-134	(3.50)	(2.70)	(1.50)	(0.03)
	1-135	3.35	2.30	1.50	0.03
	1-136	3.70	2.50	1.50	0.03
	1-137	3.90	3.30	1.50	0.06
28	1-138	3.45	2.15	1.50	0.03
	1-139	3.20	1.30	1.00	0.02
	1-140	3.50	2.35	1.00	0.03
	1-141	3.90	2.65	1.00	0.04
	1-142	3.70	2.80	1.50	0.05
28	1-143	2.70	2.75	1.50	0.02
	1-144	4.20	3.60	1.00	0.07
21	1-145	2.90	2.30	2.00	0.02
	1-146	3.30	2.20	1.00	0.03
	1-147	3.25	2.65	1.50	0.03
	1-148	3.20	2.30	1.50	0.03
37	2	3.05	2.10	1.50	0.02
	3	3.65	2.30	2.00	0.03
	4	3.30	2.30	1.50	0.03
	5	3.05	1.40	1.00	0.02
7	6	3.30	3.10	1.00	0.04
	7	3.10	2.70	1.50	0.03
	8	3.30	2.15	1.50	0.03

挿図No.	遺物No.	径	高さ	孔径	重量
		(mm)	(mm)	(mm)	(g)
	9	3.10	2.60	1.00	0.04
	10	3.60	3.55	2.00	0.04
	11	—	—	—	—
44	12	3.20	1.90	1.50	0.02
	13	2.95	3.10	1.50	0.03
	14	3.95	2.80	2.00	0.05
	15	3.40	2.80	2.00	0.04
	16	3.20	2.90	1.50	0.04
46	17	4.70	3.85	2.00	0.09
	18	3.65	2.85	1.50	0.04
	19	3.10	2.50	1.00	0.03
45	20	3.80	3.70	1.50	0.07
31	21	3.60	2.35	1.00	0.03
	22	2.70	2.70	1.50	0.03
	23	3.70	3.35	1.50	0.05
8	24	3.60	3.10	2.00	0.04
	25	3.10	3.00	1.00	0.04
	26	3.30	1.90	2.00	0.03
	27	3.00	1.50	1.50	0.01
	28	3.40	3.30	1.50	0.04
	29	3.10	2.25	1.50	0.02
	30	—	—	—	—
22	31	3.55	1.75	2.00	0.02
	32	3.60	2.90	1.50	0.04
	33	4.00	2.60	1.50	0.05
32	34	3.65	2.40	1.50	0.03
	35	4.00	2.50	1.50	0.05
	36	3.75	3.45	2.00	0.05
	37	3.40	2.00	1.50	0.02
	38	3.40	2.05	1.50	0.02
	39	3.50	4.00	1.00	0.06
	40	3.60	3.70	1.50	0.06
10	41	2.80	2.20	1.00	0.02
	42	3.75	3.20	1.00	0.05
	43	4.30	2.05	2.00	0.04
24	44	3.10	2.25	1.50	0.03
	45	3.30	2.80	1.50	0.04
	46	3.65	2.75	1.50	0.05
50	47	3.00	2.85	1.50	0.03
	48	4.35	2.15	2.00	0.04
	49	3.70	2.25	1.50	0.04
	50	3.05	2.30	1.50	0.02
	51	4.30	2.75	1.50	0.06
43	52	3.50	3.40	2.00	0.04
	53	3.65	2.40	1.00	0.04
	54	3.85	3.10	1.00	0.06
	55	3.00	2.50	1.50	0.03
	56	4.25	2.80	1.50	0.06
	57	3.05	3.00	1.00	0.03
	58	3.80	2.60	2.00	0.05
	59	5.95	3.65	2.00	0.04
	60	3.10	2.50	1.00	0.03
	61	4.00	2.75	1.50	0.05

挿図No.	遺物No.	径	高さ	孔径	重量
		(mm)	(mm)	(mm)	(g)
	62	4.00	2.20	2.00	0.03
5	63	4.65	3.60	2.00	0.05
	64	2.70	2.90	1.50	0.03
	65	3.30	1.75	1.50	0.02
	66	2.90	2.00	1.00	0.02
	67	4.00	2.80	1.50	0.04
	68	(3.30)	(1.40)	(1.50)	(0.01)
	69	4.20	2.55	1.00	0.06
	70	3.10	1.70	1.50	0.01
	71	3.20	3.15	1.00	0.04
	72	4.30	2.40	2.00	0.05
	73	3.30	2.25	1.50	0.03
	74	4.00	3.15	1.50	0.06
	75	3.75	2.30	1.50	0.04
12	76	3.10	2.65	1.50	0.03
	77	3.30	2.00	1.50	0.03
	78	4.65	2.50	1.50	0.05
	79	3.50	2.60	1.50	0.04
	80	3.60	2.85	1.50	0.04
	81	3.50	2.35	1.50	0.03
	82	3.20	2.80	1.50	0.02
6	83	2.95	1.85	1.50	0.02
	84	3.95	3.00	1.50	0.06
	85	3.40	2.00	2.00	0.02
	86	3.80	2.40	1.50	0.04
	87	4.15	3.60	1.50	0.08
	88	3.50	2.95	1.00	0.03
	89	3.20	2.60	1.50	0.05
	90	3.50	2.70	1.00	0.04
49	91	3.40	2.60	1.50	0.04
49	92	3.80	2.15	1.50	0.03
	93	3.40	2.45	1.50	0.04
	94	3.65	2.50	1.50	0.04
	95	3.00	2.90	1.00	0.04
	96	3.40	2.90	1.00	0.04
	97	3.00	2.35	1.50	0.02
	98	3.15	2.85	1.50	0.03
	99	3.05	3.05	1.00	0.03
	100	3.00	2.85	1.50	0.03
	101	4.20	3.20	1.50	0.07
	102	3.35	2.20	1.50	0.03
14	103	4.70	2.50	1.50	0.07
	104	3.80	2.80	1.50	0.04
	105	3.80	2.05	2.00	0.04
	106	3.90	4.40	2.00	0.08
	107	4.25	3.20	1.50	0.07
16	108	3.90	2.40	1.50	0.04
	109	3.60	2.40	2.00	0.04
	110	3.30	3.30	1.50	0.03
9	111	3.30	1.85	1.50	0.02
	112	2.80	2.75	1.50	0.02
	113	3.40	1.75	2.00	0.02
	114	3.30	3.20	1.50	0.04
	115	3.30	2.20	1.50	0.03

挿図No.	遺物No.	径	高さ	孔径	重量
		(mm)	(mm)	(mm)	(g)
	116	3.80	2.65	1.50	0.05
	117	(4.20)	(2.80)	(2.00)	(0.04)
25	118	4.00	2.30	1.50	0.05
	119	—	—	—	—
	120	4.70	3.40	1.50	0.09
	121	3.50	2.00	1.50	0.03
	122	2.95	2.65	1.50	0.03
	123	3.70	2.75	2.00	0.04
	124	3.15	2.00	1.50	0.03
26	125	3.60	2.40	2.00	0.03
	126	3.05	2.30	1.50	0.03
	127	3.80	2.00	1.50	0.03
	128	3.80	2.35	2.00	0.03
	129	3.90	2.50	1.50	0.05
	130	3.70	2.35	2.00	0.04
15	131	3.35	2.10	1.50	0.02
	132	3.60	2.50	1.50	0.04
	133	3.80	2.35	1.50	0.05
	134	3.80	3.80	1.50	0.06
	135	3.50	2.20	1.50	0.04
	136	3.20	2.20	1.00	0.02
	137	2.95	1.95	1.00	0.02
	138	3.40	1.60	1.50	0.02
1	139	3.50	1.55	2.00	0.02
1	140	3.85	2.50	1.50	0.05
	141	4.65	3.85	1.50	0.10
	142	3.50	2.70	1.50	0.04
	143	4.20	3.10	2.00	0.07
	144	2.70	1.55	1.50	0.01
	145	3.65	2.20	1.00	0.03
	146	3.60	3.05	1.50	0.05
	147	4.35	2.50	1.50	0.05
	148	4.00	2.90	2.00	0.05
	149	3.35	2.80	1.50	0.04
	150	3.60	2.60	1.50	0.04
	151	3.65	1.65	1.50	0.02
	152	3.40	3.00	1.50	0.04
	153	4.25	2.90	1.50	0.06
	154	3.60	2.05	2.00	0.03
	155	3.40	2.85	1.50	0.04
	156	3.80	2.90	1.50	0.05
	157	3.15	2.10	1.50	0.03
	158	3.90	2.15	1.50	0.03
	159	3.10	2.00	1.00	0.02
	160	3.50	2.35	1.50	0.04
	161	3.40	1.40	2.00	0.02
	162	—	—	—	—
42	163	4.60	3.00	2.00	0.07
	164	3.70	3.10	1.00	0.05
	165	3.10	2.50	1.00	0.03
	166	—	—	—	—
	167	3.60	2.70	1.50	0.04
36	168	4.70	2.55	2.00	0.05
	169	3.60	3.00	1.50	0.04

### 3. その他の土坑（第44・45図，図版14～17）

#### SK-001

調査区中央，U6-01付近に位置する。西側半分がSS-004，南側半分がSS-002の覆土中に掘り込まれている。径約1.5mの円形を呈する。

#### SK-002

調査区中央，U6-33グリッド付近に所在する。短径1.0m，長径1.5mの楕円形を呈する。覆土は自然堆積である。

#### SK-004

調査区ほぼ中央，U6-55グリッド付近に所在する。東側は削平により不明となっているが，ほぼ円形を呈すると思われる。径は約1.3mである。覆土は自然堆積である。

#### SK-005

調査区南端，U7-65グリッド付近に位置する。短径0.8m，長径1.1mの楕円形を呈している。覆土は自然堆積である。

#### SK-006

調査区南端に位置し，東側半分は調査区域外である。短軸0.8mを測る楕円形を呈し，確認面からの深さ0.4mである。

#### SK-007

調査区西側，T6-05グリッド付近に所在する。長軸1.05m，短軸0.75mの楕円形を呈する。SM-002の周溝覆土中に掘り込まれている。

#### SK-008

調査区西端，T6-04グリッド付近に所在する。長軸1.4m，短軸0.9mの楕円形を呈する。SK-007同様SM-002の覆土に掘り込まれている。

#### SK-010

調査区南端，U7-65グリッド付近に所在する。埋葬施設と思われるSK-011を切って掘り込まれる。長軸2.65m，短軸1.1mの楕円形を呈している。

#### SK-023

調査区南側，U7-97グリッド付近に所在する。南半分はSX-001を切っている。直径1.35mを測る略円形を呈する。覆土は自然堆積である。

#### SK-024

調査区南側，U7-25グリッド付近に位置し，西半分は調査区域外である。底面は平坦で，自然堆積の様相を呈する。

#### SK-026

調査区南側，U6-95グリッド付近に位置する。長軸1.8m，短軸1.1m，深さ0.8mの楕円形を呈する。底面中央に径0.2m，深さ0.5mのピットが掘り込まれる。覆土は自然堆積である。

#### SK-027

調査区西側，U7-00グリッド付近に所在する。東側1/3程度はSM-001に切られている。径2.1mほどの略円形を呈すると思われる。

#### SK-029

調査区西側，T6-58グリッド付近に所在する。長軸2.9m，短軸1.0mの長方形に南側に突出部のある不整形を呈する。底面はほぼ平坦で，深さ0.15mである。

#### SK-030

調査区南側に位置し，南東端をSS-001に切られる。長軸1.55m，短軸0.65mの不整な長方形を呈する。底面は平坦で深さは0.15m程度である。

#### SK-031

調査区南側に位置し，SK-030に隣接している。南東部をSS-001に北西部をSK-026に切られているため詳細は不明である。

#### SK-033

調査区南側，U7-35グリッド付近に所在し，長軸3.2m，短軸1.4mの不整な長方形を呈している。底面は平坦で，深さ0.3～0.4mを測る。

#### SK-034

調査区南側，U7-35グリッド付近に位置し，SK-024に切られる。底面は平坦で，深さは0.1～0.3mと浅い。

#### SK-035

調査区南西側，U7-13グリッド付近に位置している。南西部と北西部は調査区外であるため形状等の詳細は不明瞭である。

#### SK055

調査区北側，T49-79付近に位置している。東1/3程度をSS-009に切られている。底面は平坦で，深さ0.15m程度である。

#### SK-056

調査区北側，T5-19付近に所在する。直径1.4mのほぼ正円形を呈する。底面はほぼ平坦で，深さ0.25mである。覆土は自然堆積である。

#### SK-058

調査区北側，T4-97グリッド付近に位置している。西側の一部をSD-003により切られている。短軸1.1mを測る。

#### SK-060

調査区北側，U4-70グリッド付近に所在する。径0.65mのほぼ正円形を呈する。深さ0.5m程度である。

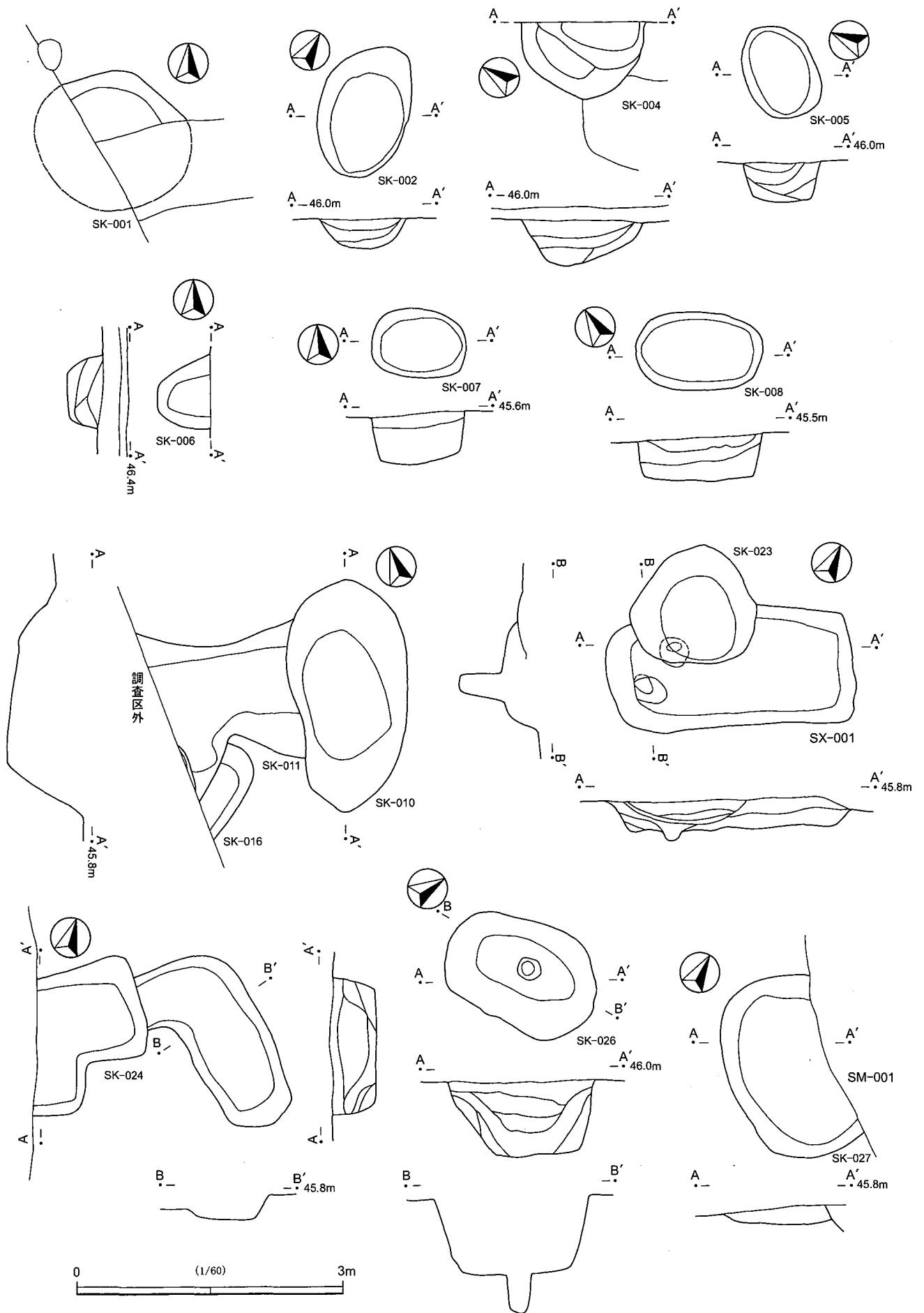
#### SK-063

調査区南側，U7-26グリッド付近に所在する。長軸1.5m，短軸1.1mの不整な楕円形を呈する。深さ0.5mである。

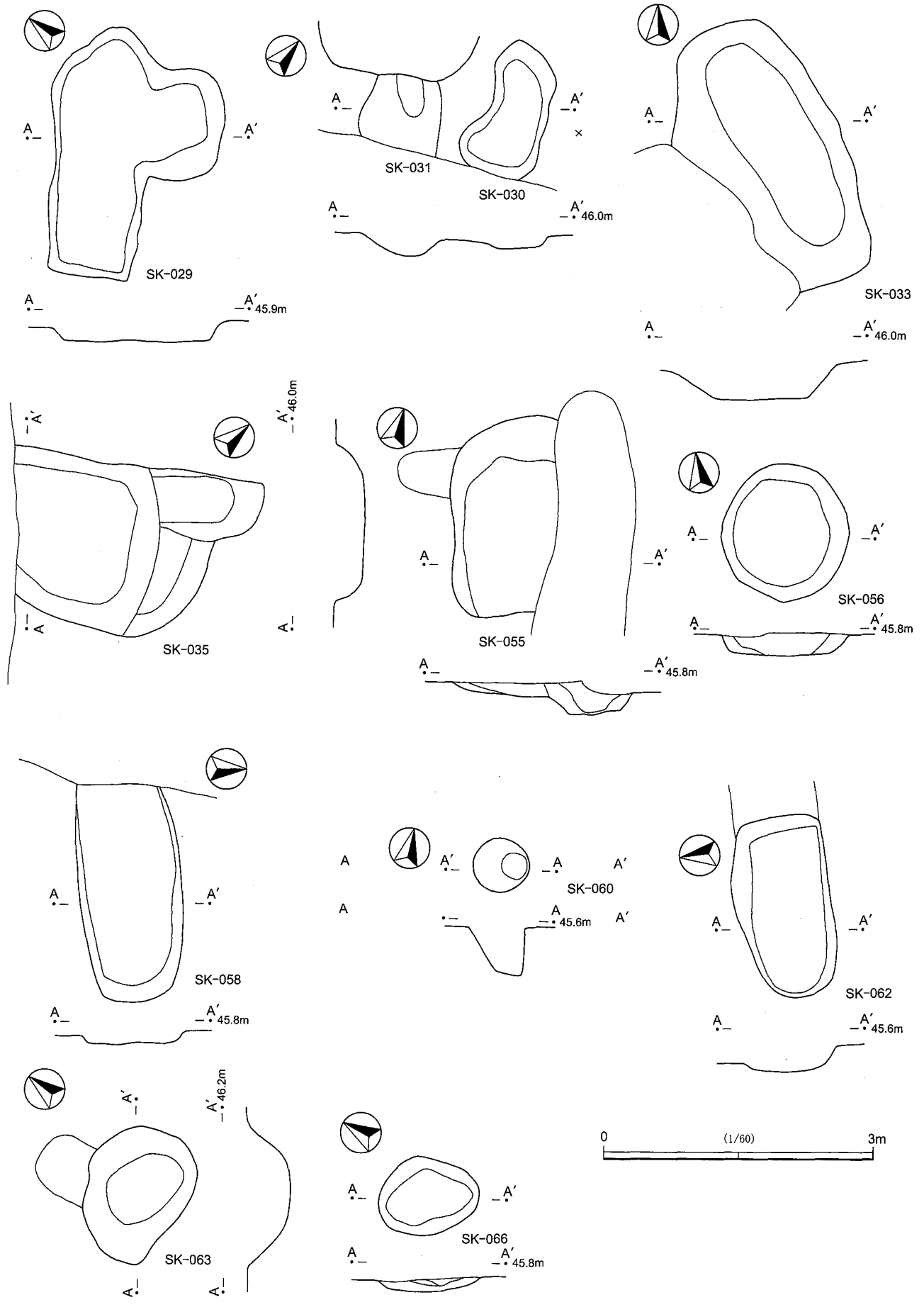
#### SK-066

調査区南側，U7-08グリッド付近に位置する。長軸1.2m，短軸0.9mの楕円形状を呈する。焼土が多量に含まれる。





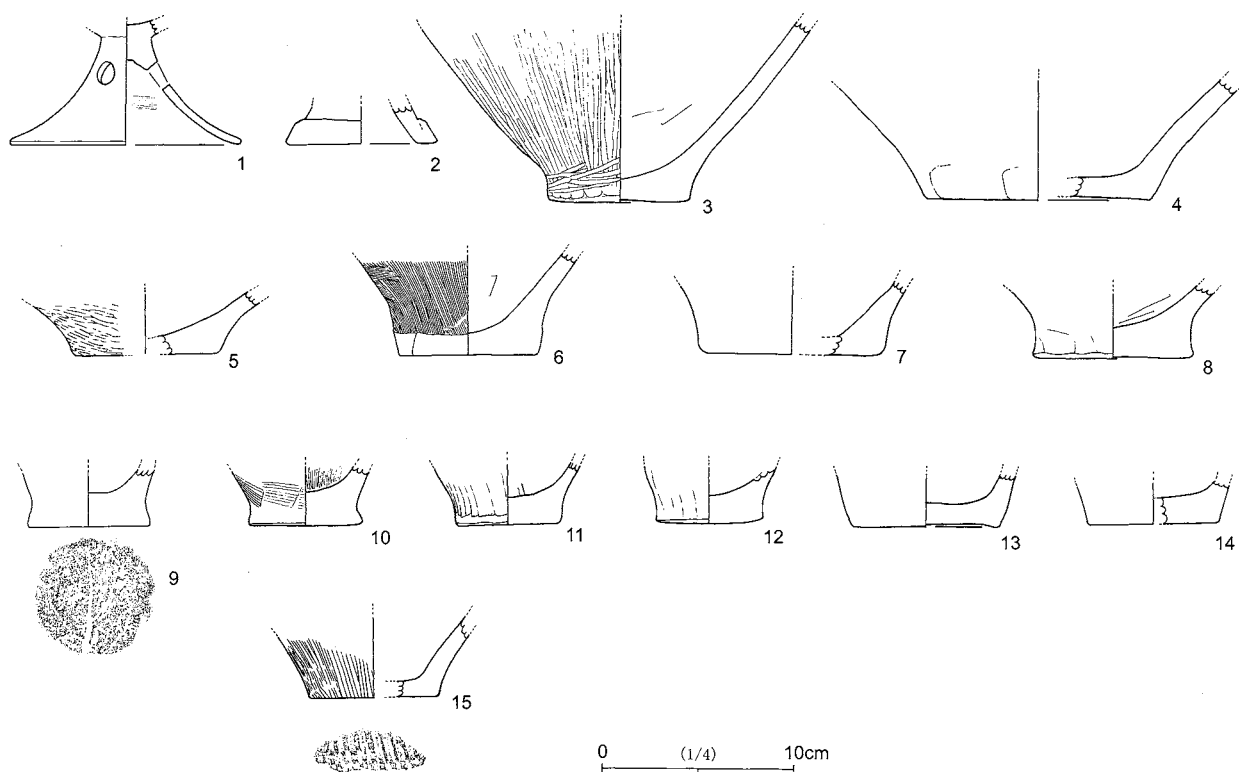
第44図 その他の土坑 (1)



第45図 その他の土坑 (2)

#### 4. 遺構外出土土器 (第46図)

1・2は高杯である。1は脚部のみで遺存で、脚部上位に穿孔が穿たれている。裾部はスカート状に広がる。2は裾部のみで遺存で、端部は折り返されている。3・5・9は壺形土器、4・6～8・10・11・13～15は甕形土器、12は鉢形土器の底部である。3は弥生の壺で外面には丁寧な縦方向のミガキが施されている。5は弥生の壺で横方向のミガキ調整痕が僅かに残る。6は土師器の甕で縦方向の細かいハケ目調整が施された後に、端部に横方向のヘラナデが施されている。8は土師の甕である。底部が突出するタイプで胴部は大きく広がる様相である。9は土師器の壺で底部外面には木葉痕が確認できる。10は弥生の甕である。外面には横方向の、内面には縦方向のハケ調整が施されている。11は土師の甕で縦方向のヘラナデが丁寧に施されている。15は弥生の甕である。外面には粗い目のハケ調整が施されている。底部外面には何らかの敷物痕が残されている。



第46図 遺構外出土土器

## 第3章 D区の遺構と遺物

### 第1節 縄文時代

#### 1. 竪穴住居

SI-001 (第49・50図, 図版32・55・57・84)

K22-97・98, L22-90, K23-07・08・17・18, L23-00・10グリッドに位置する。切り合いが激しく、一部は推定復原せざるを得なかった。楕円形を呈し、主軸長6.1m, 横軸長推定5.1m, 主軸方位N-82°-Wである。覆土は確認面より最深約30cmで、自然堆積と考えられる。SI-041住居跡の覆土上に床面が構築されており、SI-041住居跡より新しいと考えられる。また、SI-005住居跡, SK-001・SK-002・SK-003の各土坑, SD-002・SD-005・SD-006の各溝に切られる。中央に直径20cm~30cm, 深さ40cmのピットが2基検出されているが、柱穴かどうかは不明である。炉は検出されなかった。

出土遺物は後期後葉の安行1式を主体とする。いずれも器表面の摩滅が著しく、文様がはっきりしない部分が多い。1は平口縁精製深鉢である。口唇に沿って2段の隆起縄文帯が巡らされ、沈線を隔てて半円状の弧線文が配される。2は口縁が内傾する精製深鉢である。3段の隆起縄文帯が巡らされる。3は精製深鉢の底部であるが、弧線に囲まれた磨消縄文の位置が通常安行1式とは異なっている。4は深鉢底部で、形状から後期前葉に属すると推測される。5・7は波状口縁の深鉢で、5は口唇に沿って棒状工具による三角形の刺突列が巡らされる。いずれも沈線の起点は頸部である。6は平口縁の深鉢で、口縁内側に浅い沈線が施され、口縁部から頸部に向かって沈線が施される。加曾利B式に属すると考えられる。8は口縁部が内傾する浅鉢もしくは鉢形土器で、口唇部がわずかに外反し、直下に横位の沈線が数条配される。9は平口縁の深鉢で、沈線に区画された磨消縄文が口縁下に配される。10はいわゆる紐線文の粗製深鉢であるが、摩滅が著しく地に縄文が施されているか確認できない。口唇内側が肥厚する。11は浅鉢口縁部で、2本の沈線が巡らされ、その下に縄文が施される。沈線上に瘤が貼り付けられる。12はいわゆる瓢形の深鉢の胴部下側である。13は精製深鉢の胴部破片で、横位の刺突列がわずかに屈曲する。14は異形台付土器の口唇状突起で、竹管による圧痕が施される。15~17は山形土偶で、同一個体である。15は胴部破片で、肩部から胸部にかけて隆起線が貼り付けられる。16・17は脚部で、前側に横位の沈線が施される。18は石棒で、断面形は楕円形を呈し、上端部は欠損後に、敲打痕と研磨痕がみられる。

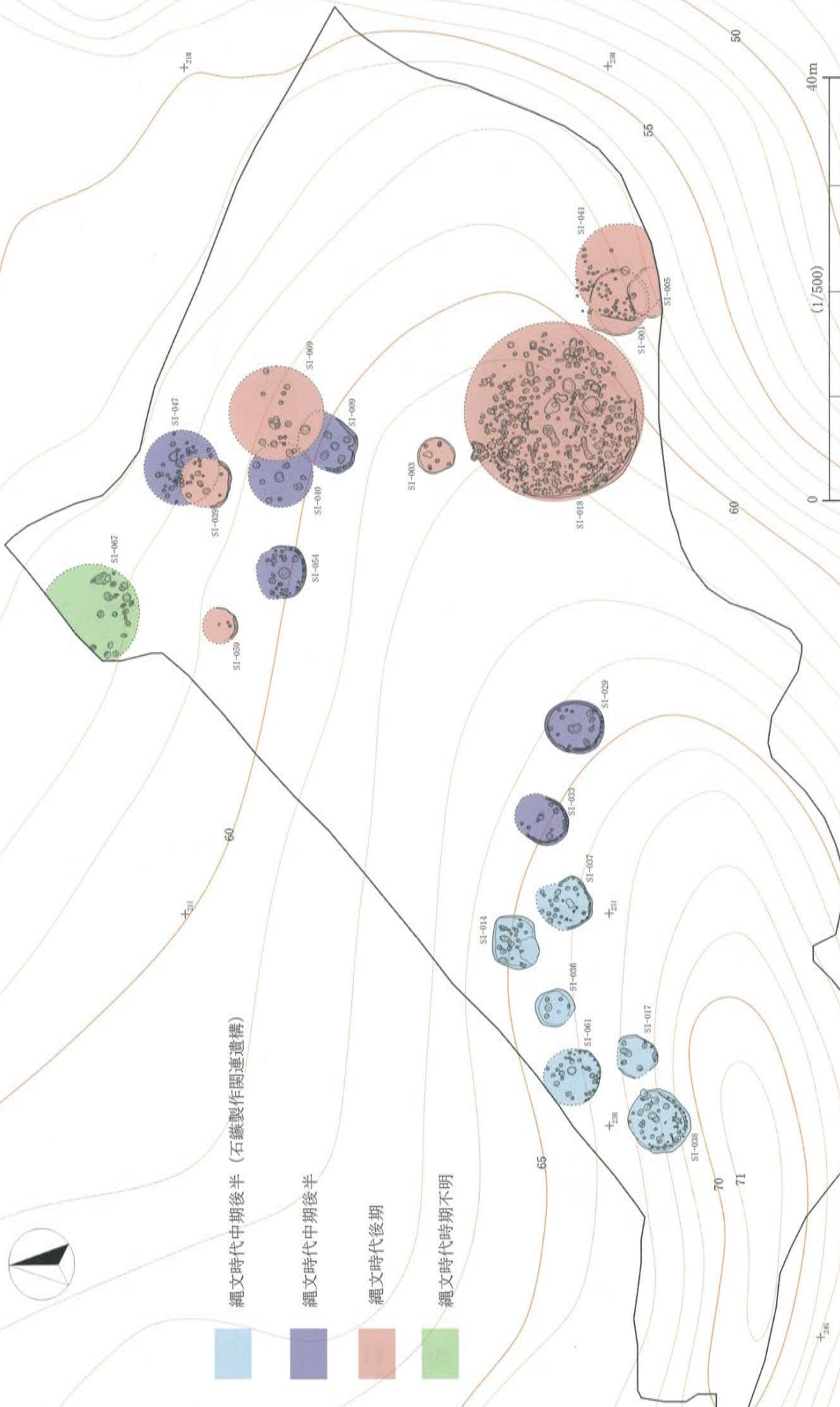
SI-003 (第51図, 図版32・58・84)

K22-01・02・10・11・19・20・21・22グリッドに位置する。正円に近い楕円形を呈し、主軸長3.4m, 横軸長3.3m, 主軸方位はN-14°-Wである。覆土は確認面より最深20cm程度と浅く、自然堆積と考えられる。柱穴と考えられるピットが4基検出されており、直径は20cm~50cm, 深さは30cm~60cmである。炉跡は北側の柱穴間に構築され、75cm×50cmの皿状を呈する。

出土遺物は少ない。後期中葉の加曾利B3式を主体とする。1は浅鉢で、台付になる可能性が強い。摩滅著しく文様は不明瞭である。底部から大きく広がるように立ち上がり、強く屈曲して口縁部に至る。屈曲する頸部に大振りな把手がつけられる。把手を中心に2本一組の沈線が放射状に配され、区画された部分に縄文が施される。2は波状口縁の精製深鉢で、口唇に沿って下部を沈線で区画された刻みが巡る。波頂部には円筒形の突起がつけられる。3は平口縁の精製深鉢で、小突起がつけられる。口唇に沿って下部



第47图 D区遺構分布图



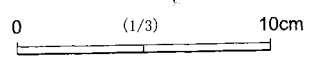
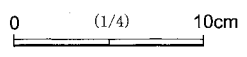
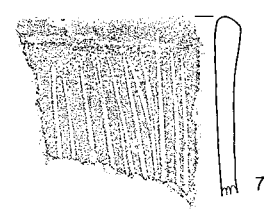
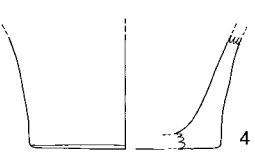
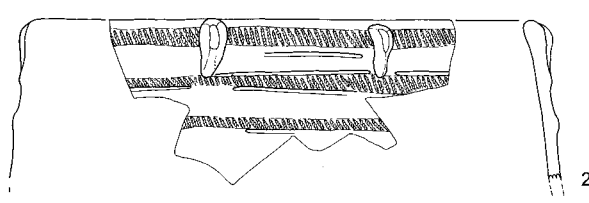
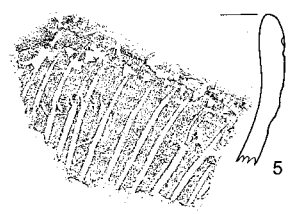
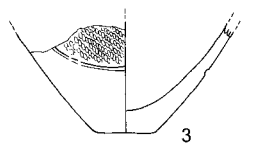
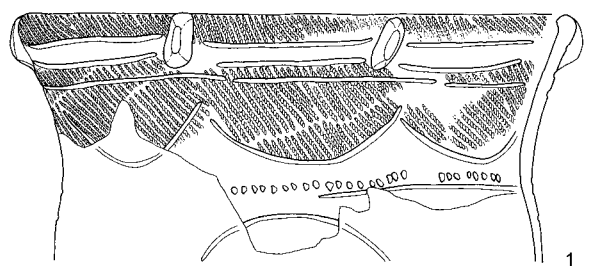
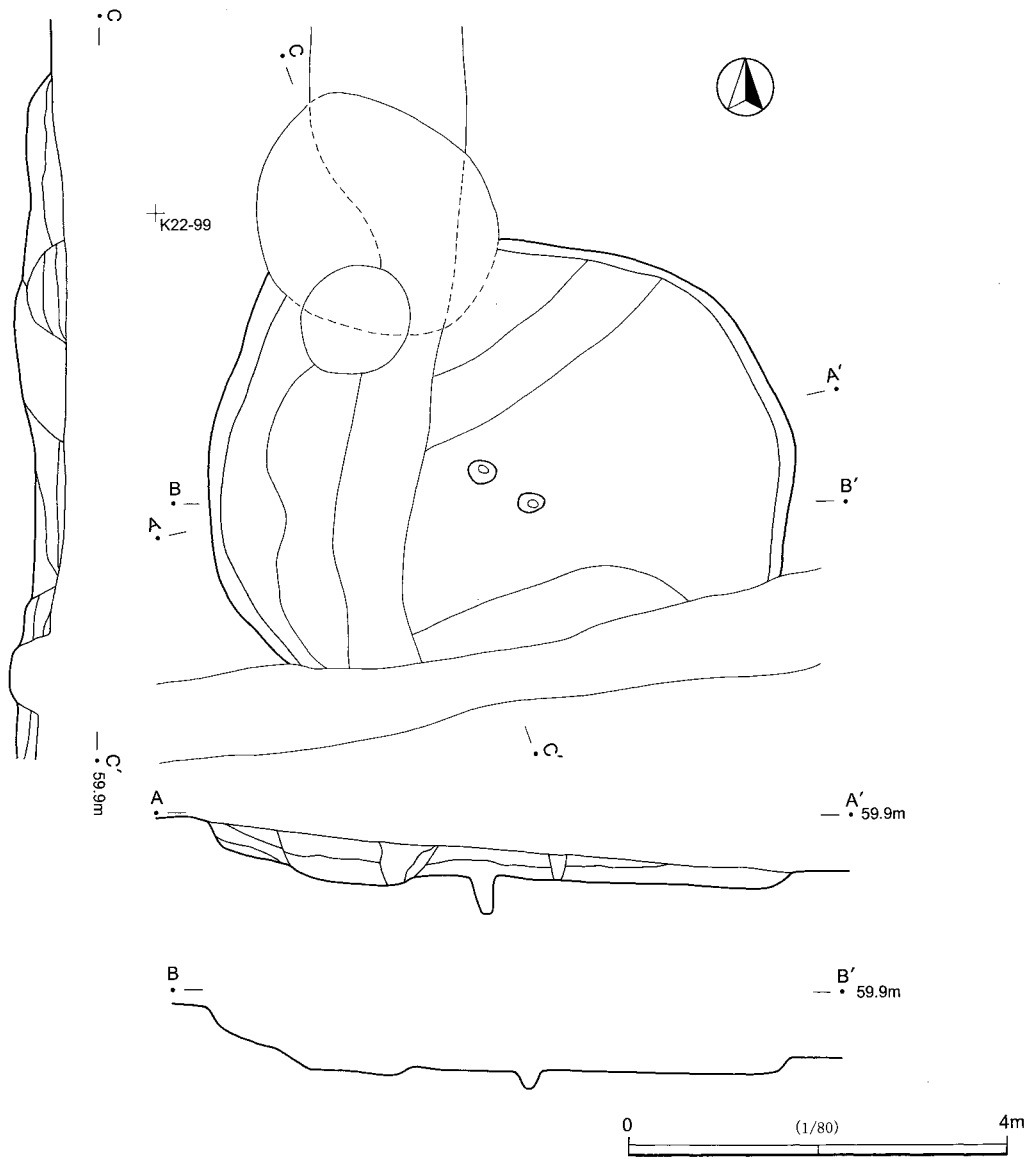
繩文時代中期後半 (石鏃製作関連遺構)

繩文時代中期後半

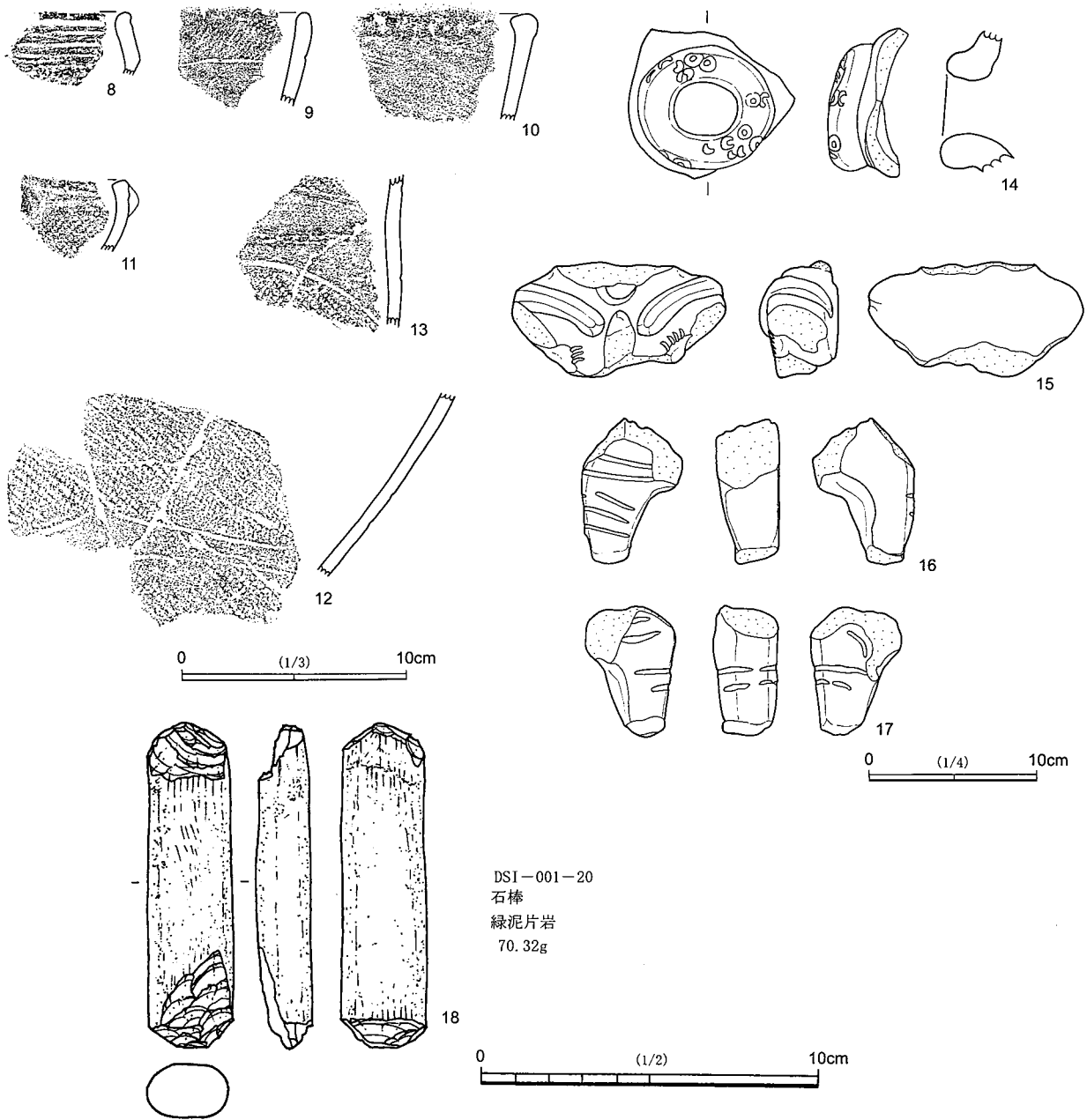
繩文時代後期

繩文時代時期不明

第48図 縄文時代遺構配置図



第49图 SI-001 (1)



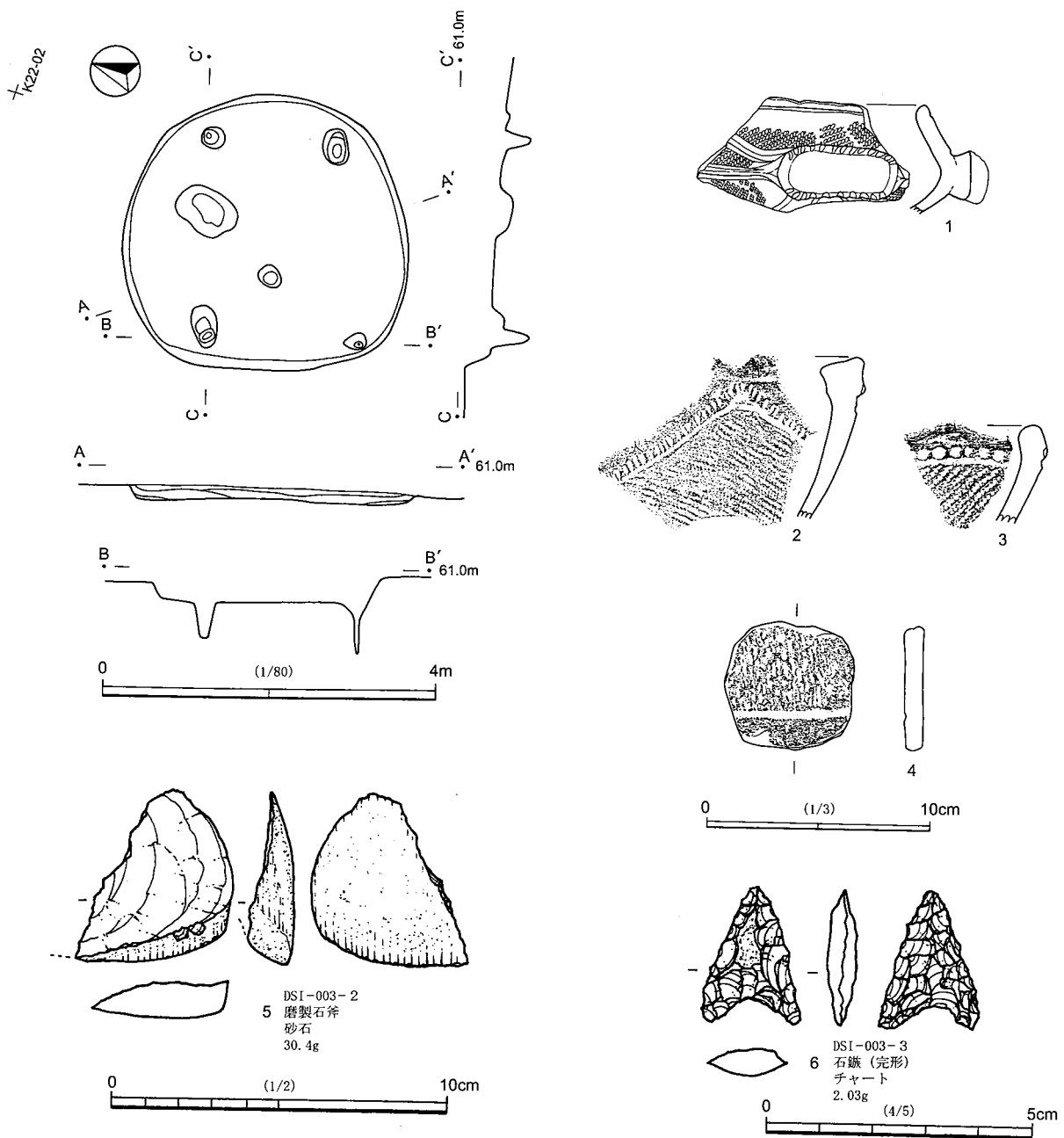
第50図 SI-001 (2)

を沈線で区画された刺突が巡る。4は土製円盤で、全面打ち欠き成形後、一部に研磨調整を加えている。5は磨製石斧で、刃部が残存しており、形状は定角式を呈する。6は石鏃で、表面中央にわずかに自然面がみられるが、ほぼ全面に調整加工が施されている。二等辺三角形を呈し、脚部の挟りは浅い。

SI-005 (第52図, 図版55・58)

K23-18・19・28・29, L23-10グリッドに位置する。南側は急斜面となっており流失している。他の遺構との切り合いも激しく、検出部分は本来の1/2以下とみられる。形状は不明であるが、隅丸方形もしくは楕円形と推測され、検出部の東西長4.7m, 南北長2.6mである。主軸方向は不明。覆土は確認面より20cm弱と浅く、自然堆積と考えられる。SI-001住居跡を切っており、SD-002・SD-005溝に切られる。位置関係を見る限りSI-041住居跡とも切り合っており、SI-001より古いと考えられるため、このSI-005もSI-041より新しいと考えられるが、調査ではそのことを直接裏付ける知見は得られていない。床面からピットが1基検出されているが、性格は不明である。炉跡は検出されていない。



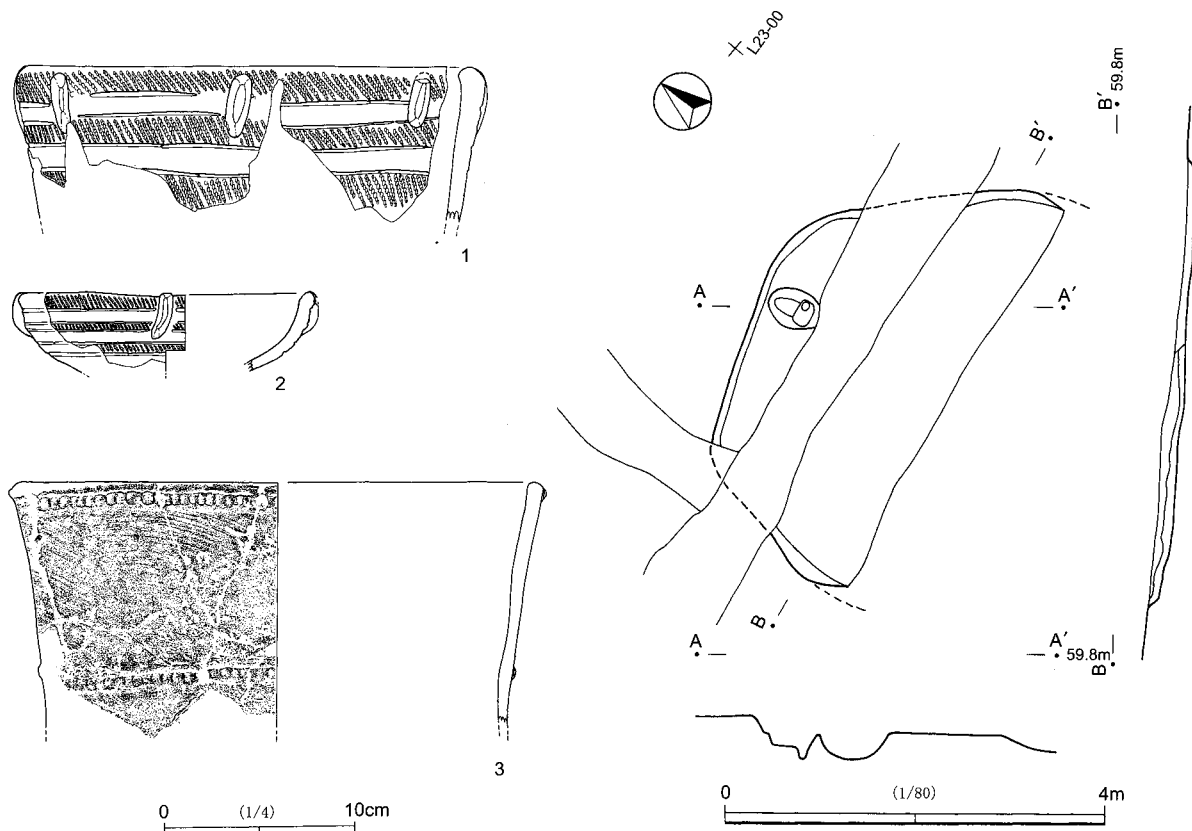


第51図 SI-003

出土遺物は少ない。安行1式が主体である。1は平口縁の精製深鉢で、口唇に沿って2段の隆起縄文帯が巡る。無文帯をはさんでその下側に見える縄文は、おそらく弧線に区画された磨消縄文となる。2は浅鉢で、口唇に沿って3段の隆起縄文帯が巡る。貼り付け瘤はわずかに傾く。3は紐線文の粗製深鉢である。直立した胴部から口縁に向かってわずかに開く器形を呈する。地文は横位の条線を縦列に配するが、頸部紐線文から下側は摩耗しており不明。

SI-009 (第53・54図, 図版32・33・55・58)

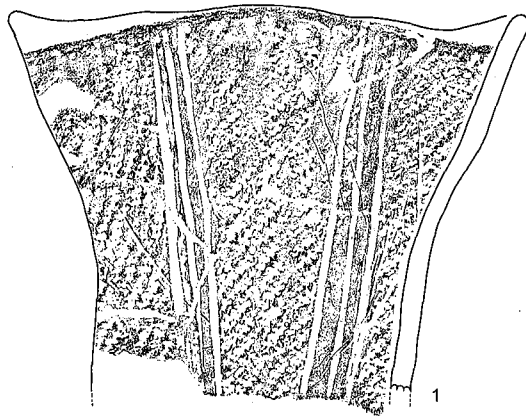
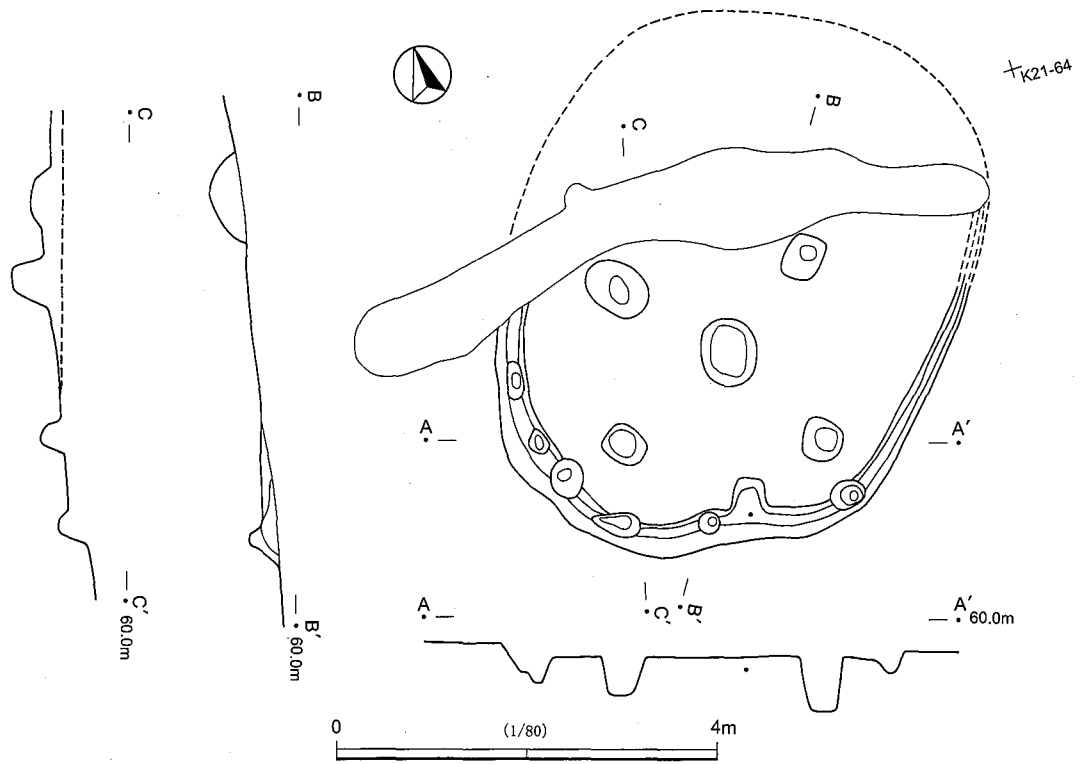
K21-60・61・62・63・70・71・72・73グリッドに位置する。北側は斜面となっており流失しているため、全容は不明である。残存部から推測して、形状は楕円形と推測される。検出部の主軸長は4.6m、横軸長は3.8mで、全体は6.0m×4.8m程度と復原される。主軸方位は、住居のプランを基準とするとN-140°-Wであるが、埋設土器と炉跡を結ぶ線を基準とするとN-155°-Wである。SD-004溝に切られる。床面からは、直径40cm~70cm、深さ30cm~60cmの柱穴と考えられるピットが4基検出されている。壁に沿って周



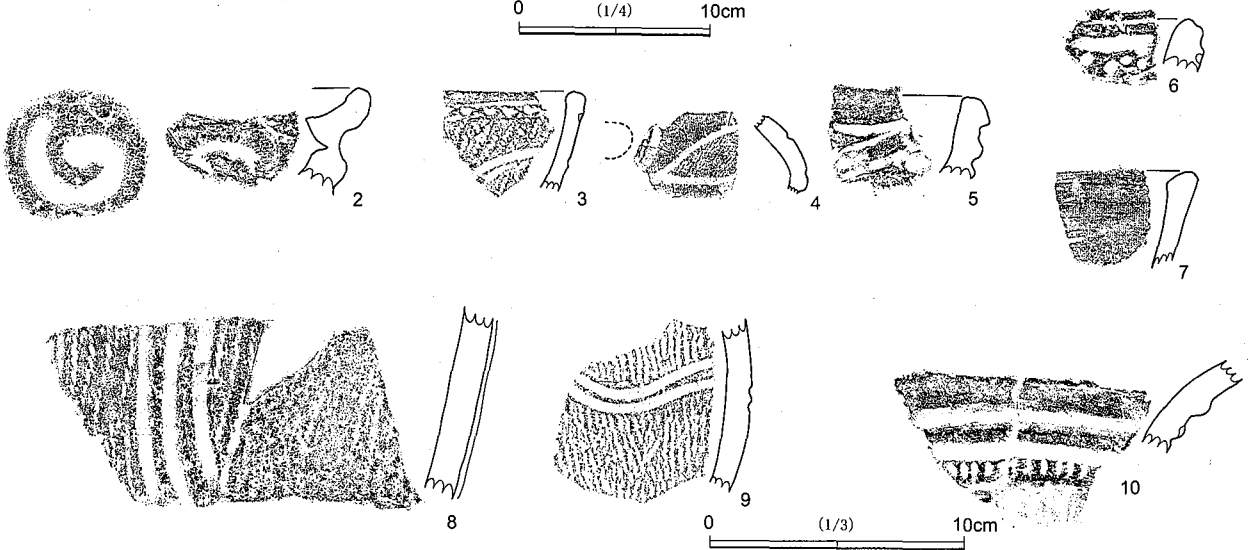
第52図 SI-005

溝と、壁柱穴とみられる小ピットが6基検出されている。覆土は南側の壁沿いにわずかに残存するが、確認面からの深さは20cm弱であり、詳しい堆積状況は不明である。中央よりやや南側に、炉跡が検出されている。70cm×60cmの皿状を呈し、熱による硬化が顕著である。かなり使用頻度が高かったと推測される。南側の壁沿いのピットに土器が埋設されている。

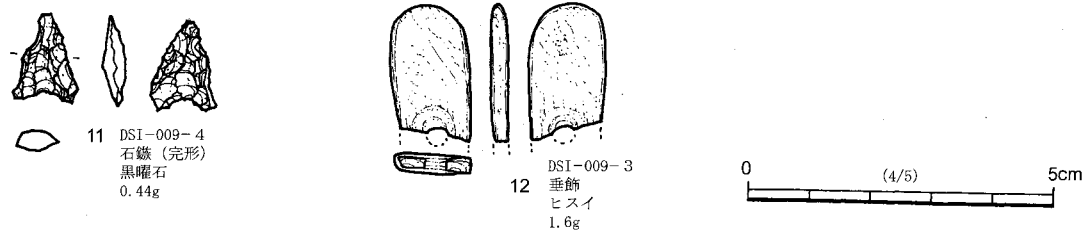
遺物はやや混在が認められるが、加曾利E式を中心とすると考えられる。1は口縁部が緩やかに開く器形を呈する深鉢で、0段3条RLR(ℓ×3)を縦位に施文し、3本一組の沈線による磨消懸垂文を配する。2は深鉢口縁部に貼り付けられていたとみられる突起で、太い沈線による渦巻きが認められる。3は口唇に沿った刺突列の下側に磨消縄文が配される。後期中葉以降の所産であろう。4は堀之内式とみられる注口土器の胴部上半分で、左側が注口部である。5・6は口唇に沿って太沈線が巡るもので、6は円形刺突が伴う。7は無文の浅鉢で、後期中葉以降の所産であろう。8は撚糸地文に2本一組の隆起線が貼り付けられる。撚糸はかなり間隔が広く、一見稻荷台式を思わせる。9は逆に間隔の狭い撚糸文を地文に、2本一組の沈線が配される。いわゆる連弧文土器であるが、数は少ない。10は深鉢の頸部で、2本一組の隆起線が横位に配され、1本の隆起線には刻みもつけられる。口縁部は無文と考えられる。11は石鏃で、やや荒い調整加工が周縁部に施されており、器体の中央部にまで及ぶ調整加工が施されていない。小型で二等辺三角形を呈し、脚部の扱いは浅い。12は垂飾で、器体の中央部から欠損している。器体中央部は両面から穿孔されている。



0 (1/4) 10cm



第53图 SI-009 (1)

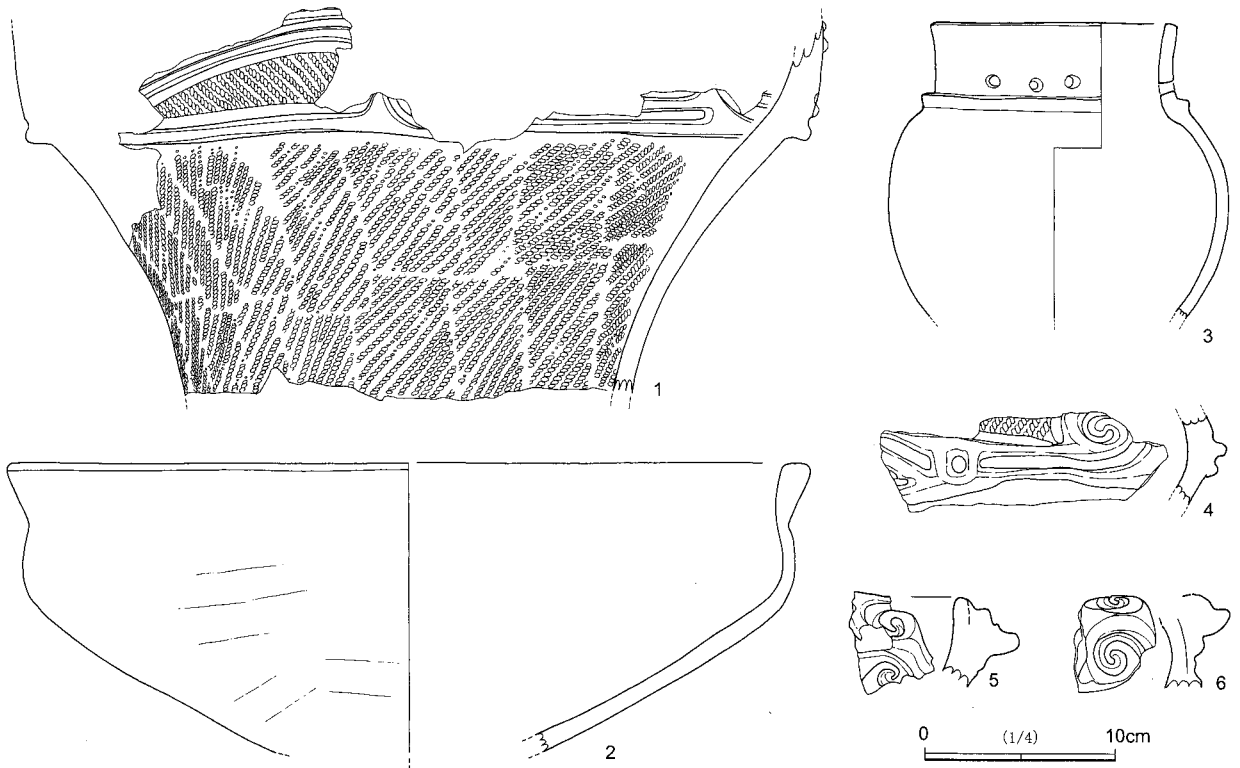
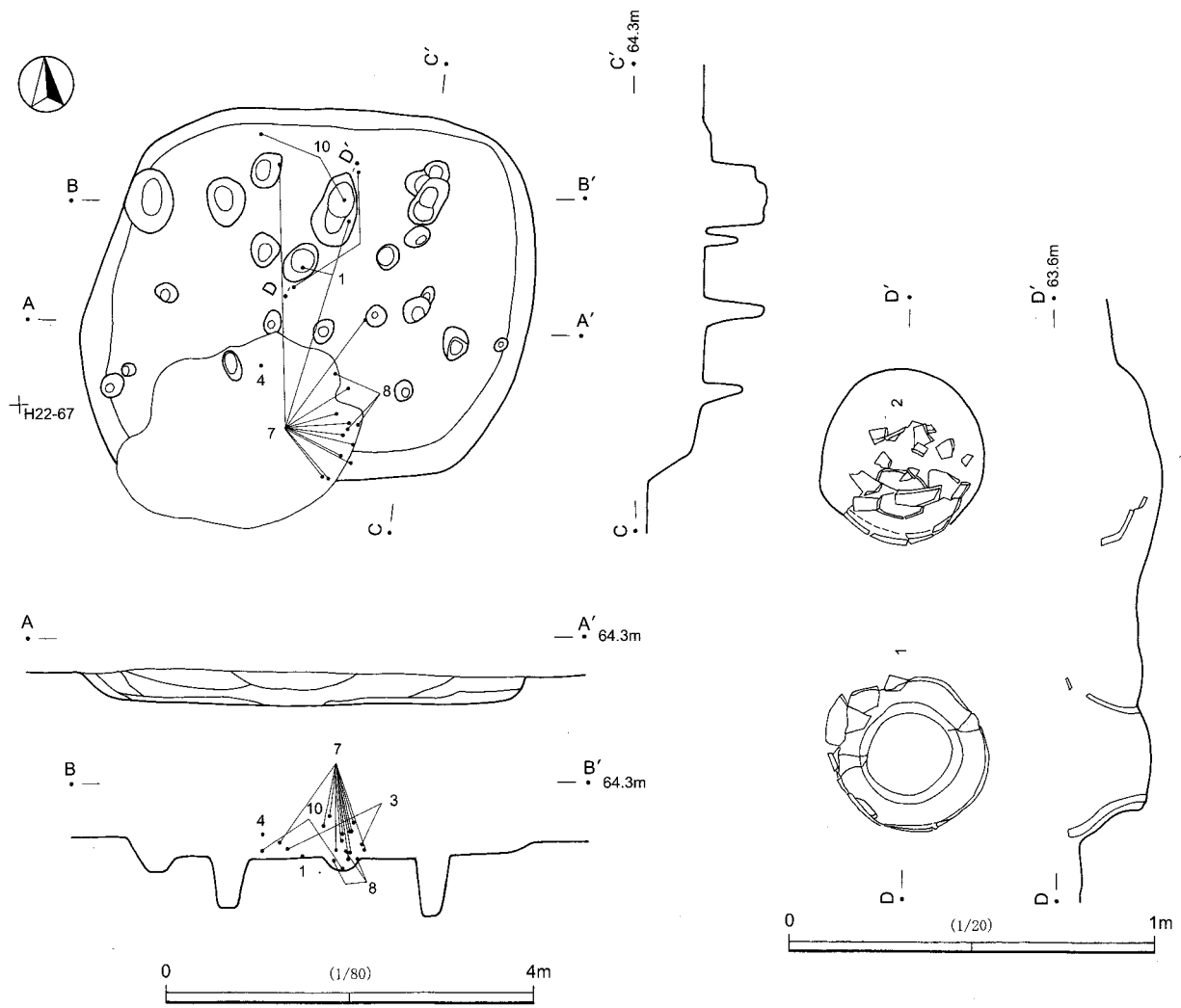


第54図 SI-009 (2)

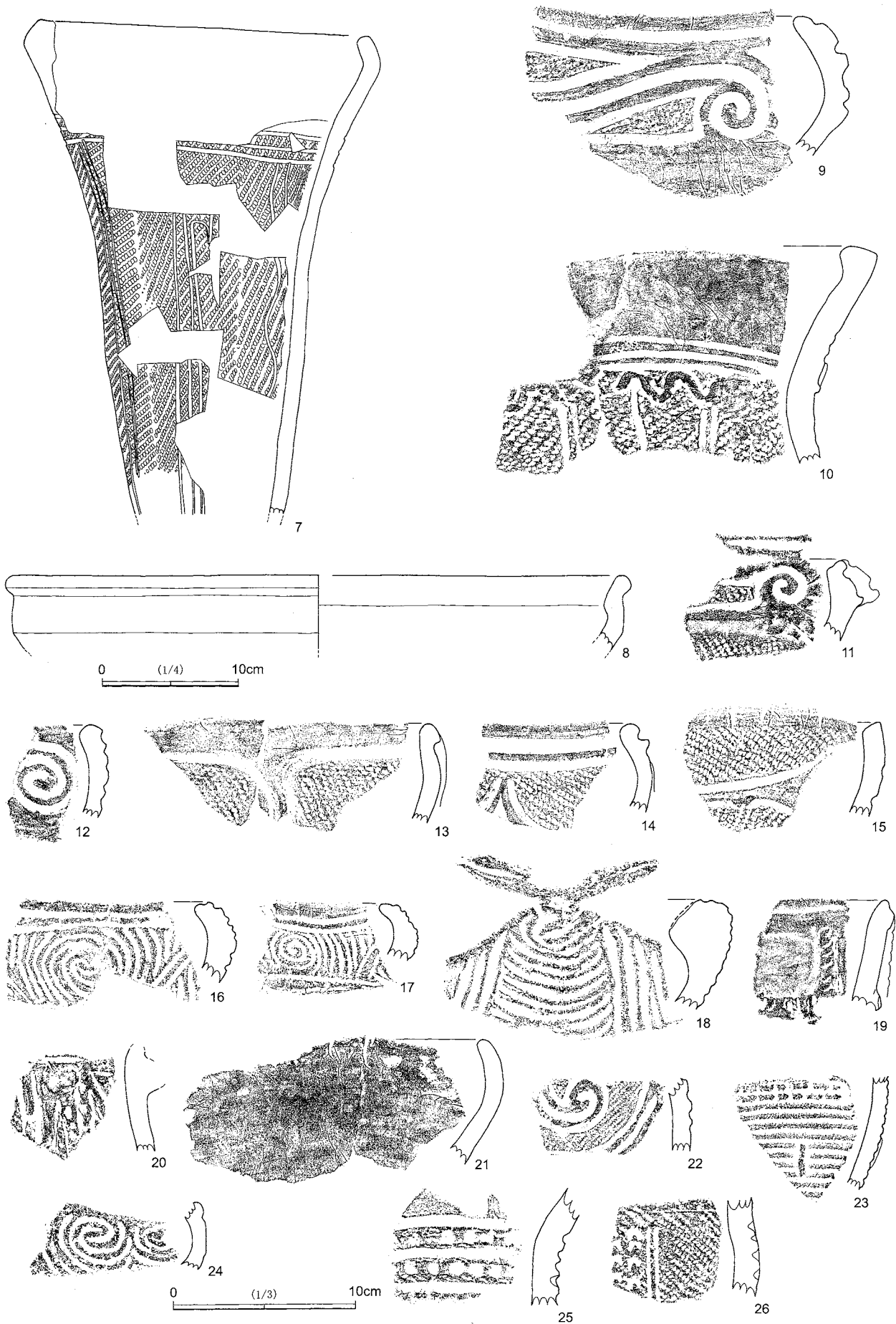
SI-014 (第55～57図, 図版33・55・56・58・59)

H22-47・48・49・57・58・59・67・68・69グリッドに位置する。南側が風倒木により破壊されるが、ほぼ全体が検出されている。楕円形を呈し、炉の方向を主軸方位とすると主軸長4.9m, 横軸長4.0m, 主軸方位N-93°-Wである。覆土は確認面より最深67cmで、自然堆積と考えられる。床面からは多くのピットが検出されているが、特に北辺沿いには直径40cm～80cm, 深さ60cm程度の大形のピットが検出されていて、支柱穴と考えられる。北東側の柱穴は建て替えがあったことを示している。炉跡は2基検出されている。南側の炉1は直径45cmの円形で、深鉢上半部が埋設される。北側の炉2は80cm×50cmの楕円形で、浅鉢が埋設される。

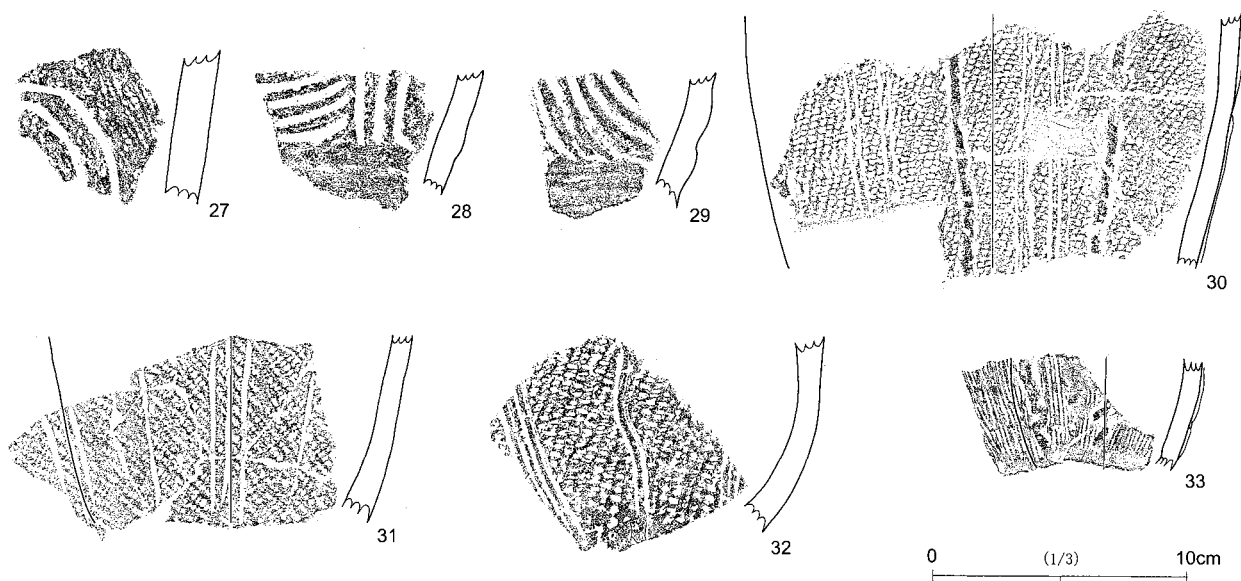
遺物は加曽利E式を中心とし、曾利式の影響を受けた土器が相伴する。石器は石鏃製作に関連する遺物が1, 123点出土しており、3. 石鏃製作関連遺構において記載する。1は炉1に埋設されていた大形の深鉢頸部で、キャリパー形を呈する。頸部に横位の隆帯を巡らせ、口縁部側は横位の隆帯区画に縄文を充填する。胴部側はRL単節縄文を縦位に施文するのみ。2は炉2に埋設されていた大形の浅鉢である。底部から胴部が大きく広がるように立ち上がり、頸部でいったん屈曲して口縁部がわずかに広がる器形を呈する。外面に赤色顔料の付着が認められるが、範囲は不明である。3は有孔罎付土器である。頸部の孔は3穴一組になるよう穿たれている。4は深鉢頸部で、口縁部下端を隆帯で区画し、その下側が無文帯のように見える。5・6は小形の把手で、いずれも渦巻きのモチーフが用いられる。7は深鉢で、最大径に対し器高がかなり高い。無文の口縁部が屈曲するように内傾し、頸部に3本一組の沈線を横位に巡らせる。胴部側は縦位のRL縄文を施し、3本一組の沈線が垂下される。同様の文様構成を呈すると考えられるのが19と25で、19は縦位の隆起線によって口縁部に区画が形成される。25は横位の沈線を5本巡らせ、交互に連続刺突を施す。8は浅鉢口縁部で、全体にほぼ直立するが口唇部が強く外反する。9・11～15はキャリパー形の深鉢である。9は口縁部で、胴部側は分かりにくいだがLRL複節縄文が縦位に施文される。10・20・22・23・26・33は曾利系の深鉢である。10は無文の口縁部が強く外反するもので、口唇が内側へ三角状に肥厚する。頸部に3本一組の沈線が横走し、その下側に蛇行する隆起線が貼り付けられる。20は屈曲する頸部から隆起線が垂下されるもので、貼り付け瘤も認められる。22は深鉢胴部で、隆帯による渦巻きを配する。23は半裁竹管による平行沈線を多段に充填するもので、直行するように小隆起線が貼り付けられる。26は縄文地文の深鉢頸部に、半裁竹管による縦位の沈線と連続押し引きを配する。33は櫛羽状工具による条線を地文として、貼り付け隆起線を縦位に配する。11・18～24・27～32は加曽利E式である。11は口縁部の幅狭な文様帯に渦巻きモチーフの隆帯が配されるもの、12はやはり渦巻きモチーフであるが隆帯がそれほど発達していない。13・14は深鉢口縁部で隆帯による区画を主体とするもの。いずれもLRL複節縄文が地文になっている。15は隆帯が全く認められないもので、磨消縄文がどのようなモチーフを形成するかは不明である。16～18・24は深鉢口縁部で、沈線による渦巻きを主モチーフとするものである。16～19・28・



第55图 SI-014 (1)



第56图 SI-014 (2)



第57図 SI-014 (3)

29は渦巻きもしくは重弧文を主体とするもので、ほとんどがキャリパー形を呈する。18は重弧状の沈線と渦巻きを組み合わせ、渦巻きに向かって突起を形成している。28・29は同一個体の深鉢頸部で、18の下側にあたる可能性が強い。30は縄文地文の深鉢胴部に、半裁竹管による2本の沈線と貼り付け隆起線を縦方向に交互に配する。31・32は縄文地文に棒状工具もしくは半裁竹管による沈線を垂下させるもの。21は無文の浅鉢で、熱によるとみられる剥落が目立つ。

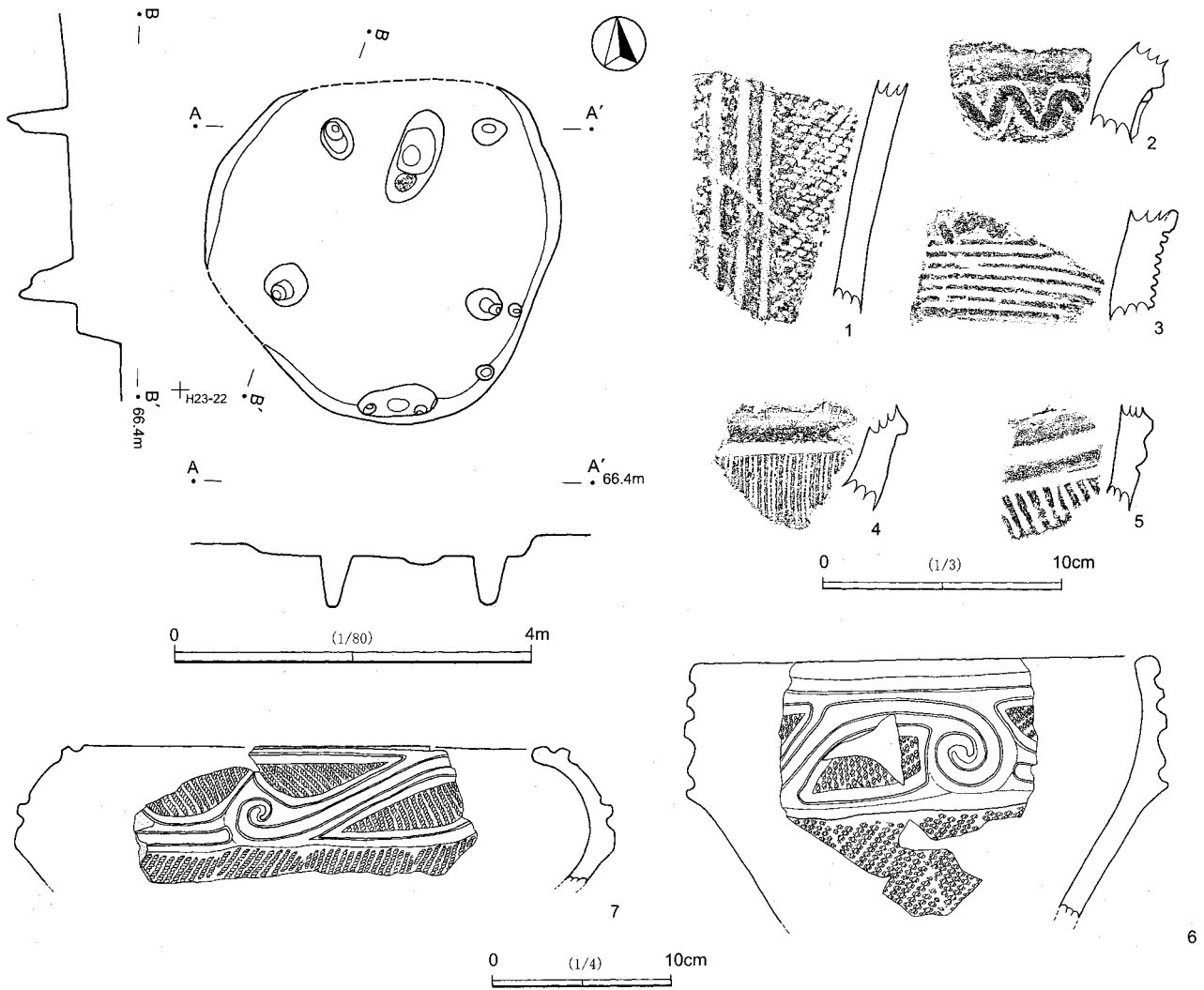
SI-017 (第58図, 図版33・59)

H23-02・03・04・12・13・14・22・23グリッドに位置する。北側は斜面で流失するものの、ほぼ全体が検出されている。不整形を呈し、主軸長3.9m、横軸長4.0m、主軸方位N-174°-Wである。覆土は単独では記録されていないが、9号墳の墳丘セクションで一部捕捉されており、それによると深さは確認面より50cm程度で、自然堆積であると考えられる。床面から直径30cm~50cm、深さ60cm~70cmのピットが4基検出されており、柱穴と考えられる。炉跡は北側の柱穴の中間に設置され、大きさは110cm×50cmである。炉跡と対するよう、南壁際に90cm×30cm×20cmの楕円形のピットが存在する。出入口施設を思わせるが、性格は不明である。

遺物は極めて少ない。加曾利E式を中心とする。石器は石鏃製作に関連する遺物が291点出土しており、3. 石鏃製作関連遺構において記載する。1は深鉢胴部で、縄文地文に縦位の沈線を配する。2・3は蛇行する隆起線が横位に貼り付けられるもので、3は横位沈線が配される。4・5は深鉢頸部と考えられる破片で、櫛羽状条線が施される。6・7はキャリパー形の深鉢口縁部で、いずれも隆帯による渦巻きモチーフを主体とする。6は摩滅していて分かりにくい、地文は0段目を3条としたRLR (0×3)であろう。

SI-018 (第59~64図, 図版34・55・56・59・60・68・69・84)

J22-49・59・69・79・89・99, K22-31~34・40~46・50~56・60~67・70~77・80~87・90~97, K23-00~06・11~14グリッドに位置する (注1)。この遺構は北東部緩斜面に構築されており、調査当初は斜面部に自然堆積した黒色土と考えられていたが、先行して確認された古墳時代のSI-002住居跡の調査後、床面の下に幾つものピットが認められ、全体が竪穴住居跡の覆土であることが認識された。改めて精査したところ、斜面上側の西から南側にかけて弧を描くようなプランが検出され、円形の大型住居跡の存在が確



第58図 SI-017

認された。住居の山側の壁は保存状態が比較的良好であるのに対して、谷側の壁や床は流出して残存せず、立ち上がりが残るのは全体の約3分の1にとどまっている。ただし柱穴などから全体の規模をうかがうことができる。主軸を設定する場合、出入口の位置が問題となるが、北側に存在する「く」の字状のピットが出入口施設にあたると思った。本来ならもう1対存在するはずであるが、古墳時代の竪穴住居に破壊されたと推定した。そのようにして設定した主軸長は最大16.7m、横軸長16.0m、主軸方位はN-5°-Wとなる。ただし、最初から最後まで主軸が一定であったかという点、そうとは言い切れない。詳細はまとめの項で触れるが、最初は東側を入り口とし、途中で現在の位置に移動した可能性が強い。壁高は西側で最大70cmを測るが、覆土の堆積状況は記録が存在しないため不明である。床面には大小様々なピットが検出されている。特に西側では、壁に沿って直径10cm前後のピットが連続するように掘り込まれており、それらをつなぐように周溝が巡っている。観察したところでは3列の柱穴列が認められ、少なくとも2回の建て替えがあったことが想定される。これらは住居跡の拡張に伴って掘られたと考えられる。これもまとめの項で触れる。住居東側はピットが少ないが、斜面で床面が流失し、浅いピットや周溝が失われたためであろう。中央付近には直径60cm~100cm、深さ100cmを越えるような大きなピットがいくつか検出されている。それらの中には2・3回掘り直されているものもある。主柱穴であったことは間違いないが、建



て替えのどの段階に伴うかは今後の検討課題である。炉跡は中央よりやや東側に構築され、170×120cmの大規模なものである。掘り込みは浅いが火床部は赤く変色して極めて固くなっている。長期にわたる使用を想定させる。南側にはより規模が小さいものの、やはり炉と考えられる施設が構築されているほか、床面が熱を受けている地点も数カ所観察されている。

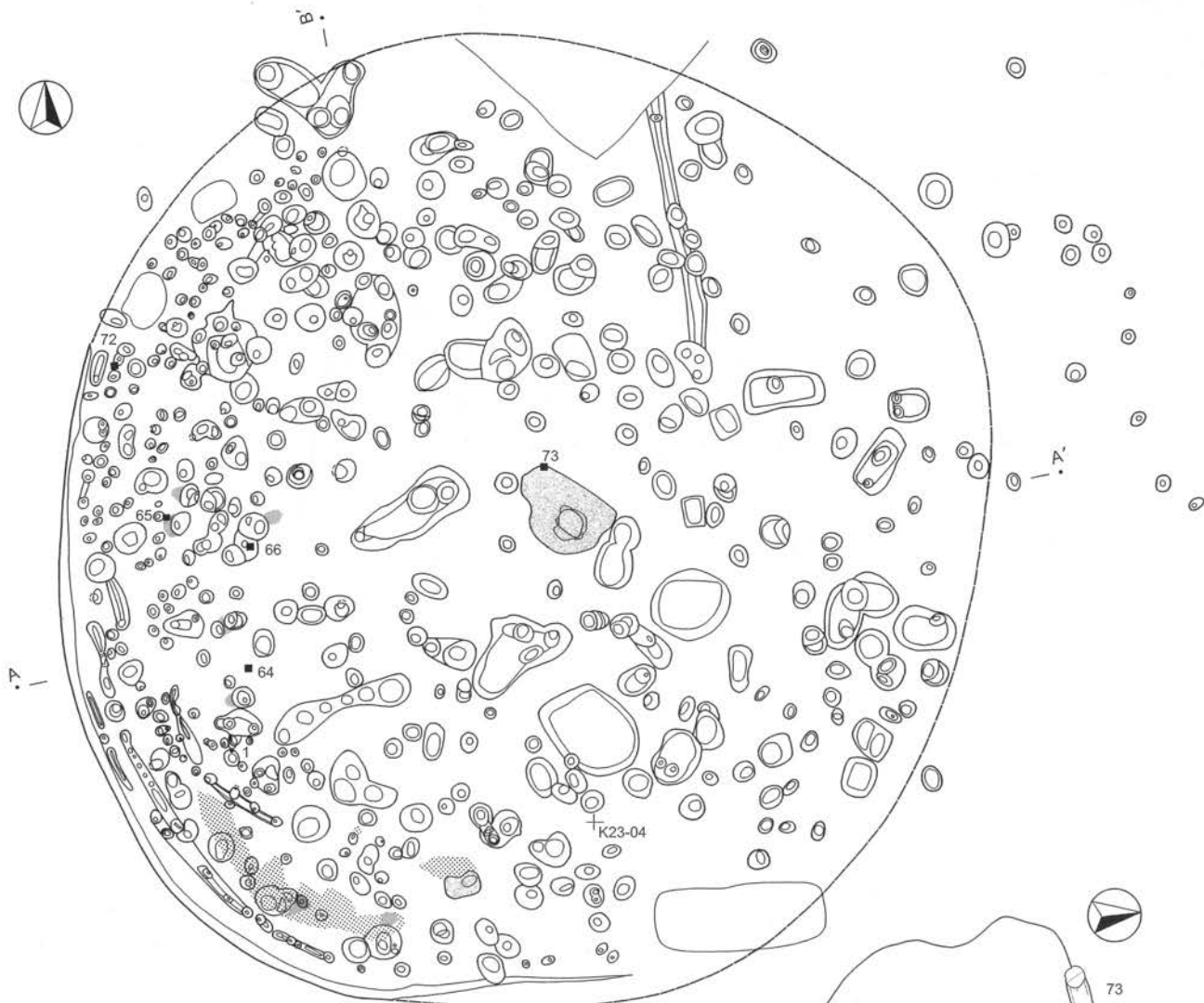
出土遺物は該期の他の遺構に比べると多いが、それでも遺構の規模や他遺跡の事例を考えると、少ないと言わざるを得ない。加曾利B3式を主体とした後期中葉～後葉の遺物が多い。いずれも摩耗が顕著である。1は釣手土器である。台の一部と釣手頂部の一部をそれぞれ欠くが、ほぼ完形である。体部は長径12.9cm、短径8.1cmの楕円形に作られ、高さは9.6cmある。釣手は長径の両端部から付けられ、頂部に直径4.2cmの把手があり、釣手方向に穴が開けられている。さらに釣手の取り付け部には橋状の把手が付いて、体部から釣手頂部にかけて紐がとおされていた状況が想像できる。体部に条線が認められるほかは装飾に乏しい。2は瓢形の深鉢である。口唇部がわずかに肥厚し、口唇に沿って2条の連続刺突が巡る。口縁部と頸部の中間に沈線で区画された縄文帯が横位に配され、頸部くびれに沿って2条の連続刺突が配される。胴部最大径は底部より頸部側に近く、相互入り組み弧線文が配される。3は平口縁の深鉢で、4対の突起が付けられる。口唇に沿って沈線で区画された刻みが巡り、その下にやはり沈線で区画された縄文帯が配される。無文帯をはさんで頸部くびれに沿って沈線で区画された刻みが巡り、下側に斜行条線が施される。4は浅鉢で、台付の可能性もある。小さい底部から胴部にかけて大きく広がり、頸部でいったん屈曲して口縁部に向かって大きく外反する。口縁部には沈線で区画された斜行条線が巡り、無文帯をはさんで頸部に刺突列、胴部から底部にかけて弧状の集合条線が配される。5は土器の脚部で、異形台付土器の可能性もある。下方に直線的に広がる器形を呈し、沈線を境に横位の縄文帯と無文帯が交互に配される。脚の下側に網代圧痕が観察されるが、摩耗が著しく不明瞭である。6は台付き浅鉢で、胴部のみ残存する。横位の縄文帯と無文帯が交互に配され、上段側の縄文帯に円形瘤が貼り付けられる。口縁側は欠損しているが、4と同じく大きく外反すると思われる。7・8は注口土器の注口部である。9・10は釣手土器で、9は橋状把手の基部から頂部にかけて、10は基部である。11・13～16・18～20・22～26は浅鉢である。13・14は熱を受けており灰褐色に変色している。18は加曾利B1式と考えられる。22～25は直線状に開く無文の浅鉢である。26は釣手土器であろう。12・17・21・27は精製深鉢である。21は分かりにくいですが、刺突列の下側に襷掛状の磨消縄文が配される。29～31はいわゆる瓢形の深鉢である。30は口径15cmを越えると思われるもので、他の土器とは異なりほとんど摩滅していない。29は横位の帯縄文、31は襷掛状の磨消縄文が配される。28・32～37・40～46は粗製深鉢で、後期中葉から後葉の各時期にわたる。32は縄文地文のみ、33は口唇に沿って紐線が貼り付けられるもの、35・36は丸棒状の工具による条線が施されるもの、37は角棒状の工具による条線が施されるもので、当住居跡出土の粗製土器群では古い段階に位置づけられる。28・34は縄文地文に紐線文、丸棒状工具による条線が施されるもので、先に挙げたものより条線が密になる。41は同じ文様構成をとるが紐線が細くなり、指頭圧痕の間隔も短くなる。40・42は地文に縄文が施されないもの。これらは先の群より新しい段階になる一群で、住居跡に伴うものと考えられる。43・45・46は内傾する口縁に沿って間隔の短い紐線文が貼り付けられ、条線が横位に施されるもので、45は沈線で区画された無文帯が、紐線文から垂下される。これらは粗製土器群では最も新しい群である。それらと同時期と考えられる遺物が38・39で、38は安行1式の浅鉢、39は安行2式の注口土器もしくは台付浅鉢である。47は深鉢底部で縄文地文と条線が確認できる。48は後期前葉から中葉にかけての深鉢底部で、熱を受けて著

しく変形している。49・51～54は無文の深鉢底部で、49は後期後葉、それ以外は後期中葉と考えられる。50は無文の浅鉢底部で、後期中葉と考えられる。55は耳栓である。56は異形台付土器の把手である。全体に赤色顔料が付着する。

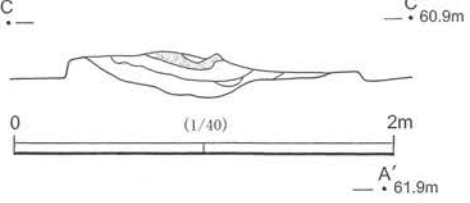
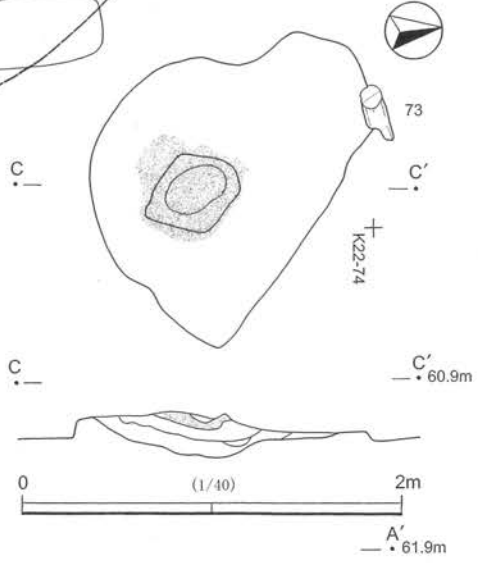
出土石器は大形住居であるにもかかわらず、通常の大形住居の石器の出土量よりも少ない。ただし、墨形石製品3点(64～66)や小型の磨製石斧(68)やほぼ完形の石棒(72)や大型の石棒(73)など通常の住居からあまり出土しない石器が、まとまって出土していることが特徴的である。住居の形態や出土土器との関連から、祭祀に関連する遺構である可能性がある。57～63は石鏃である。全体形状や素材の用い方が多様である。57は表裏両面に自然面がおおきく残っており、薄い板状の母岩を素材として、周縁部に細かい調整加工が施されている。脚部の抉りはほとんどみられない。58は厚みのない縦長剥片を素材として、基部と先端部に調整加工が施されている。59～63は器体のほぼ全面に調整加工が施されているが、全体形状や大きさが異なる。64～66は墨形石製品である。形態が書道に用いる「墨」に似ている砥石を「墨形石製品」(2002 白井・小林)と呼称しており、本報告においてもこの呼称を用いる。すべて砂岩が用いられており、6面とも磨きが施されている。煤けたように黒灰色を示す部分が多く、赤化していることから、火熱を受けたと考えられる。全面に研磨面が施されていることから、製作過程は、不確定なところもあるが、平坦面を両面に研磨して板状に成形した後に、左右と上下を折断して墨形の素材を作出し、折断面を研磨して最終調整している。64は完形であるが、65・66は上部付近から欠損した痕跡が認められることから、何らかの使用による欠損の可能性もある。64・65はピット内の出土である。墨形石製品は、君津市三直貝塚や千葉市六通貝塚からも出土しており、いまのところ後期から晩期の遺跡に限って出土が認められるようである。また、石材が砂岩で定型化した形態をもち、ピット内の出土で、火熱を受けた状態が認められることから、砥石として分類する積極的な痕跡が乏しい。用途は不明であるが、何らかの目的をもって加工された、石製品の一種である可能性が高いといえよう。67は軽石製の浮子で、上部に穴を穿ったものである。形状は64～66の墨形石製品と類似しており、何らかの共通した用途に用いられた可能性も考えられる。68は小型の磨製石斧である。刃部は刃こぼれがみられるが、刃こぼれの後に研磨されている。69～71は敲石で、いずれも長楕円形の礫を用いて下端部に強い敲打痕がみられる。70・71は上端部と平坦面にも敲打痕がみられる。72は床面に近いレベルで、横位の状態で出土した石棒である。頭部は線刻が施され、上端部は軽い敲打によって調整加工されており、裏面が欠損している。基部の下端部は敲打後に研磨されている。ほぼ完存している。73は炉の側に斜めに立った状態で出土した石棒である。大型の石棒で、頭部の形状がわずかに観察できる。断面形状はほぼ円形で、中央部付近から欠損しており、かなり大型であったことが推察される。

#### SI-029 (第65～67図, 図版35・56・60・61・84)

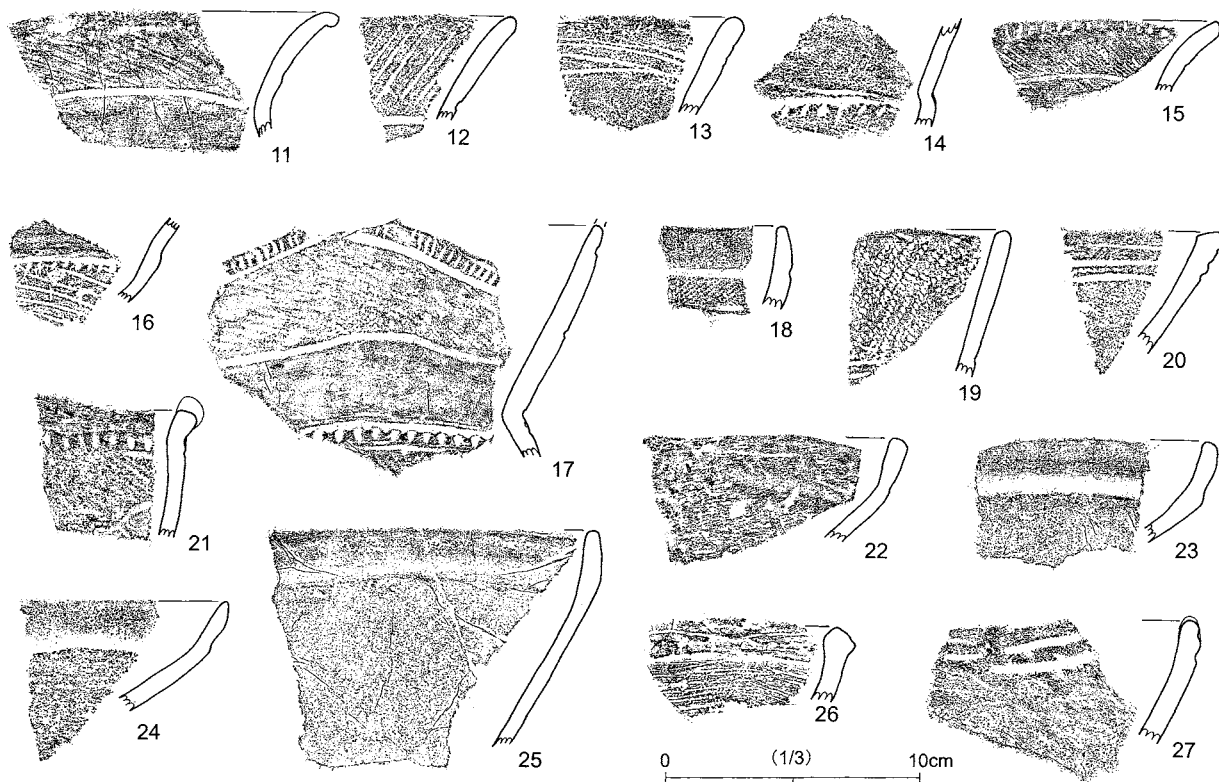
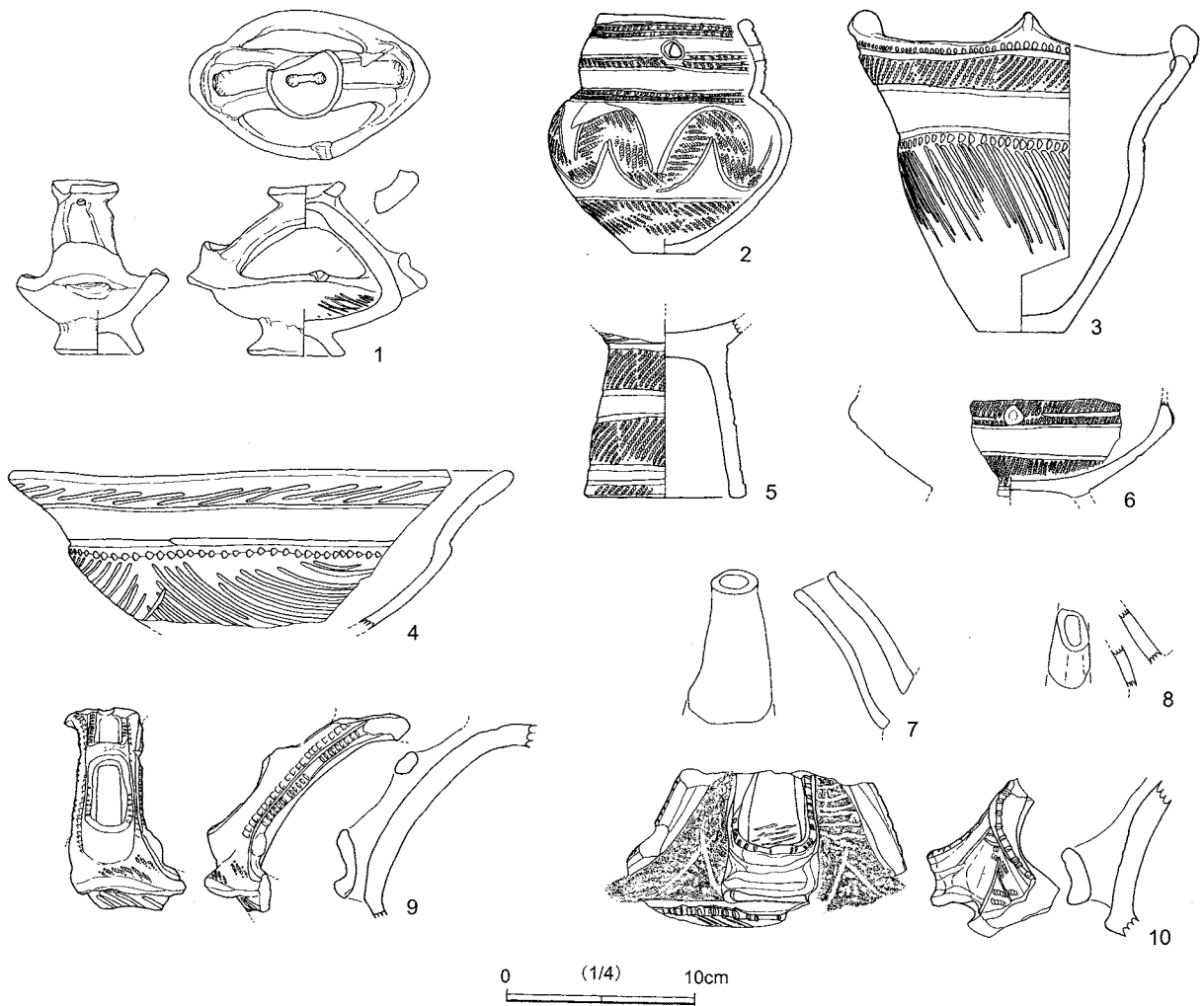
122-77・78・79・87・88・89・97・98・99グリッドに位置する。緩斜面に構築された住居跡で、斜面下部は壁が検出されないが、周溝によって全体がうかがえる。楕円形を呈し、主軸長5.5m、横軸長5.1m、主軸方位はほぼ南北である。覆土は確認面より最深63cmで、自然堆積と考えられる。炉を中心として、住居西側の床面が硬化しているのが観察される。床面からは直径20cm～70cmのピットが多数検出されており、ほとんどが柱穴と考えられる。北西隅のピットは深さ130cmあり、建て替えの痕跡を示している。壁に沿って周溝が巡るほか、北から西側の壁には小ピットが17基構築される。壁柱穴であろう。炉跡は竪穴のほぼ中央に位置し、規模は120cm×100cmである。



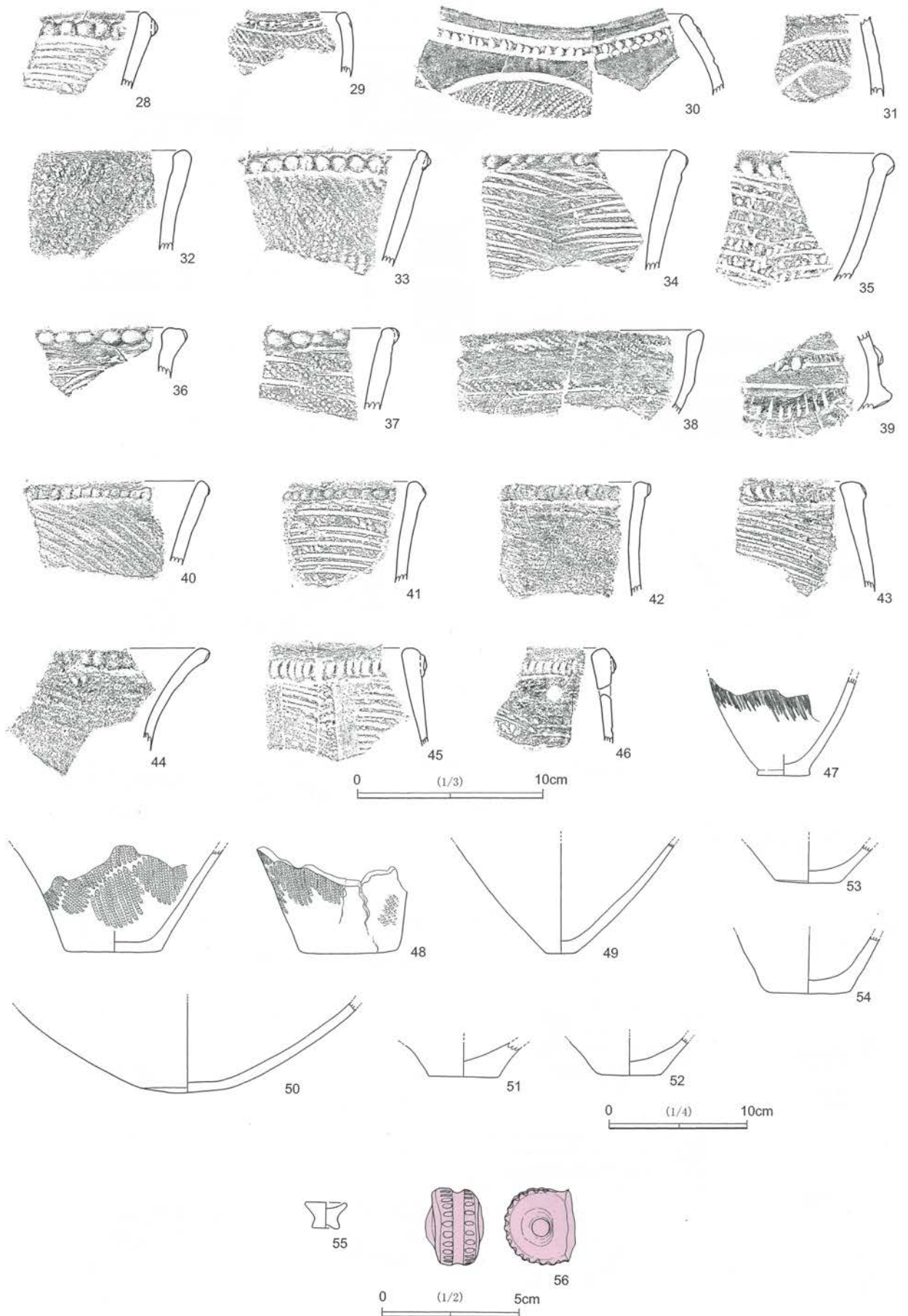
床面が焼けている場所  
 焼上の堆積



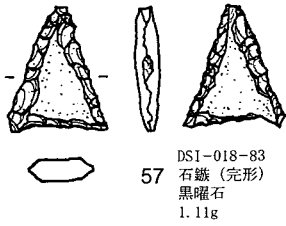
第59図 SI-018 (1)



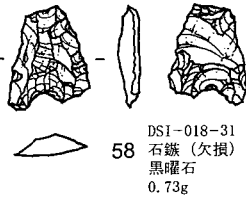
第60图 SI-018 (2)



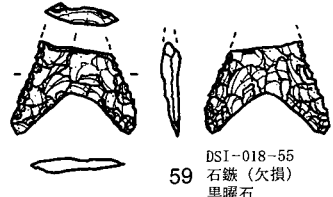
第61图 SI-018 (3)



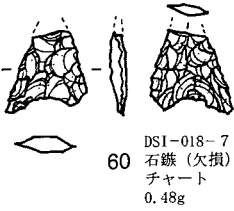
DSI-018-83  
石鏃 (完形)  
黒曜石  
1.11g



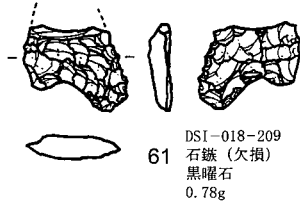
DSI-018-31  
石鏃 (欠損)  
黒曜石  
0.73g



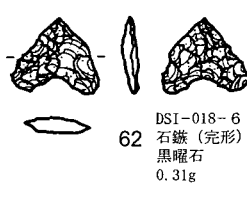
DSI-018-55  
石鏃 (欠損)  
黒曜石  
0.59g



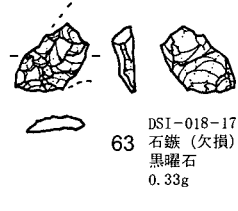
DSI-018-7  
石鏃 (欠損)  
チャート  
0.48g



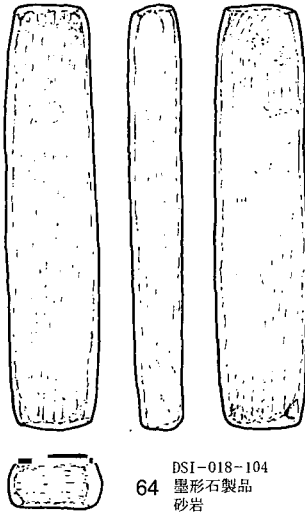
DSI-018-209  
石鏃 (欠損)  
黒曜石  
0.78g



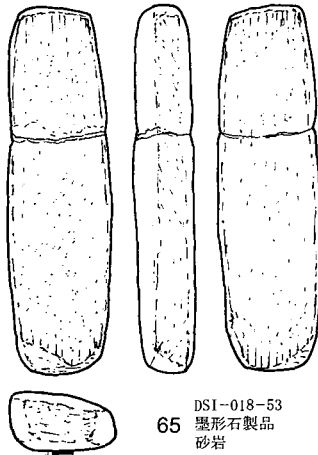
DSI-018-6  
石鏃 (完形)  
黒曜石  
0.31g



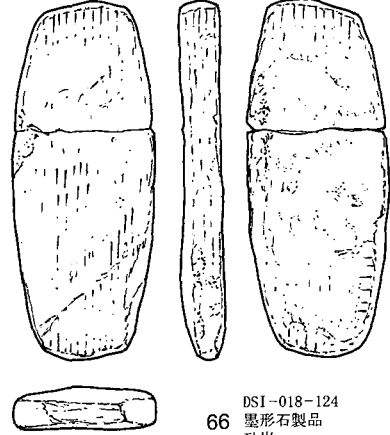
DSI-018-17  
石鏃 (欠損)  
黒曜石  
0.33g



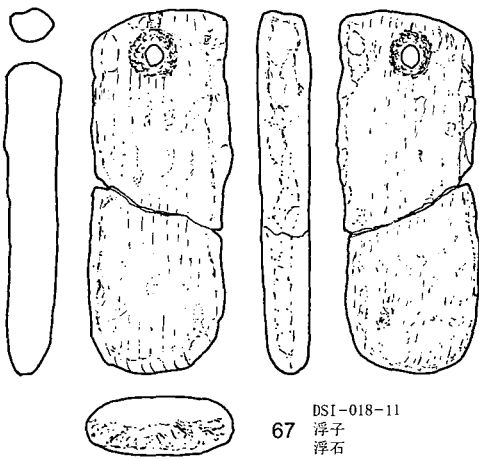
DSI-018-104  
墨形石製品  
砂岩  
63.86g



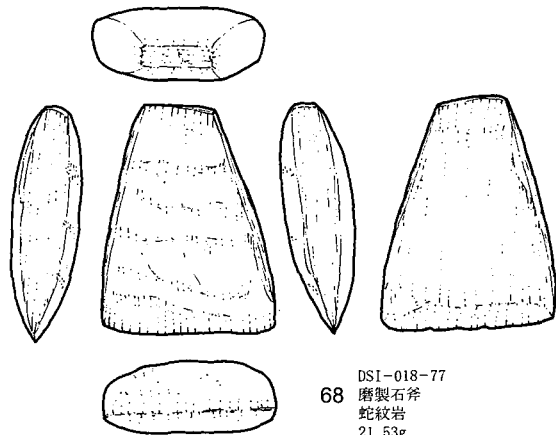
DSI-018-53  
墨形石製品  
砂岩  
55.89g



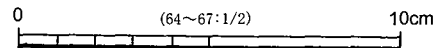
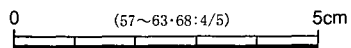
DSI-018-124  
墨形石製品  
砂岩  
56.04g



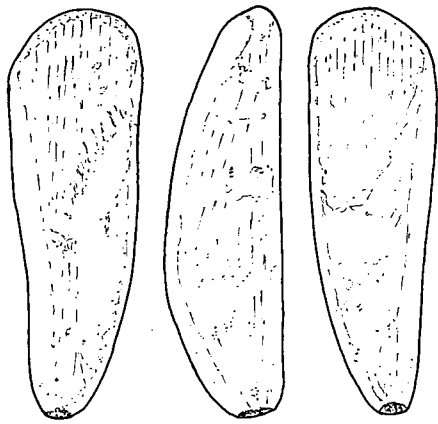
DSI-018-11  
浮子  
浮石  
13.58g



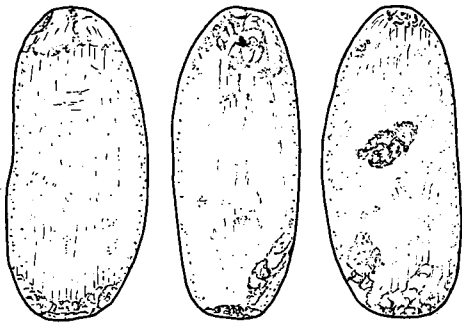
DSI-018-77  
磨製石斧  
蛇紋岩  
21.53g



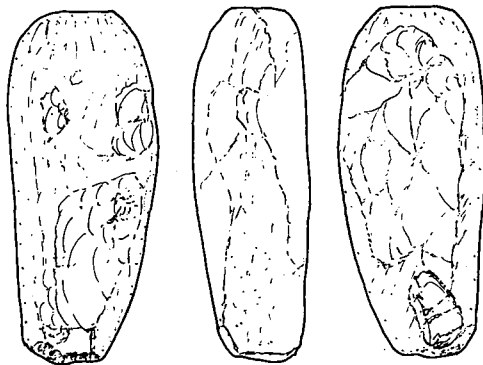
第62図 SI-018 (4)



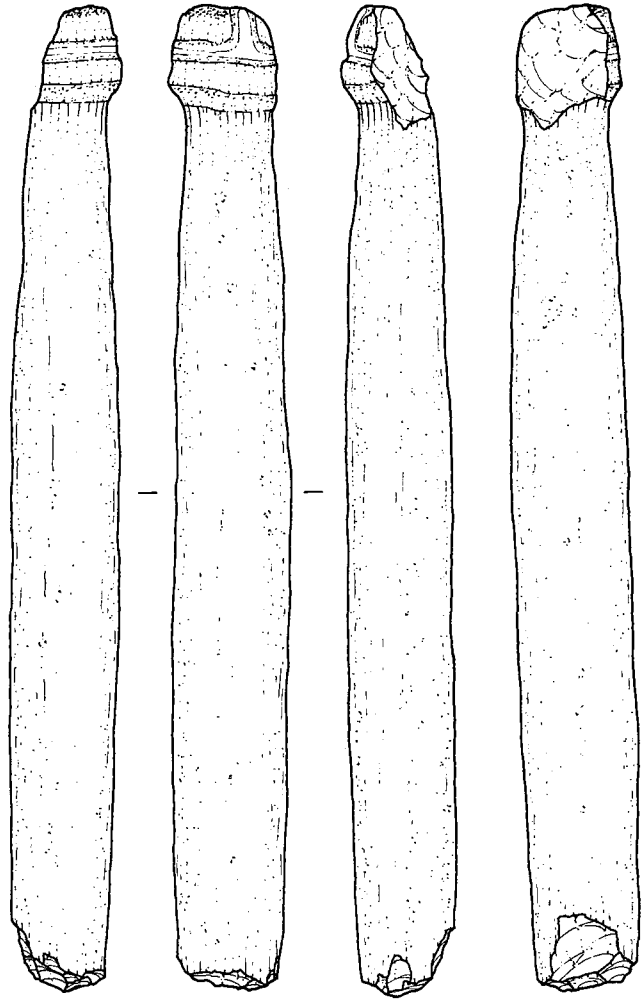
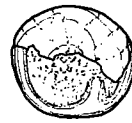
DSI-018-41  
69 敲石  
砂岩  
164.67g



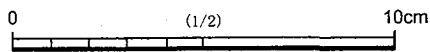
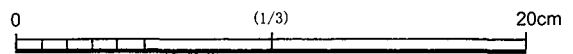
DSI-018-94  
70 敲石  
砂岩  
165.54g



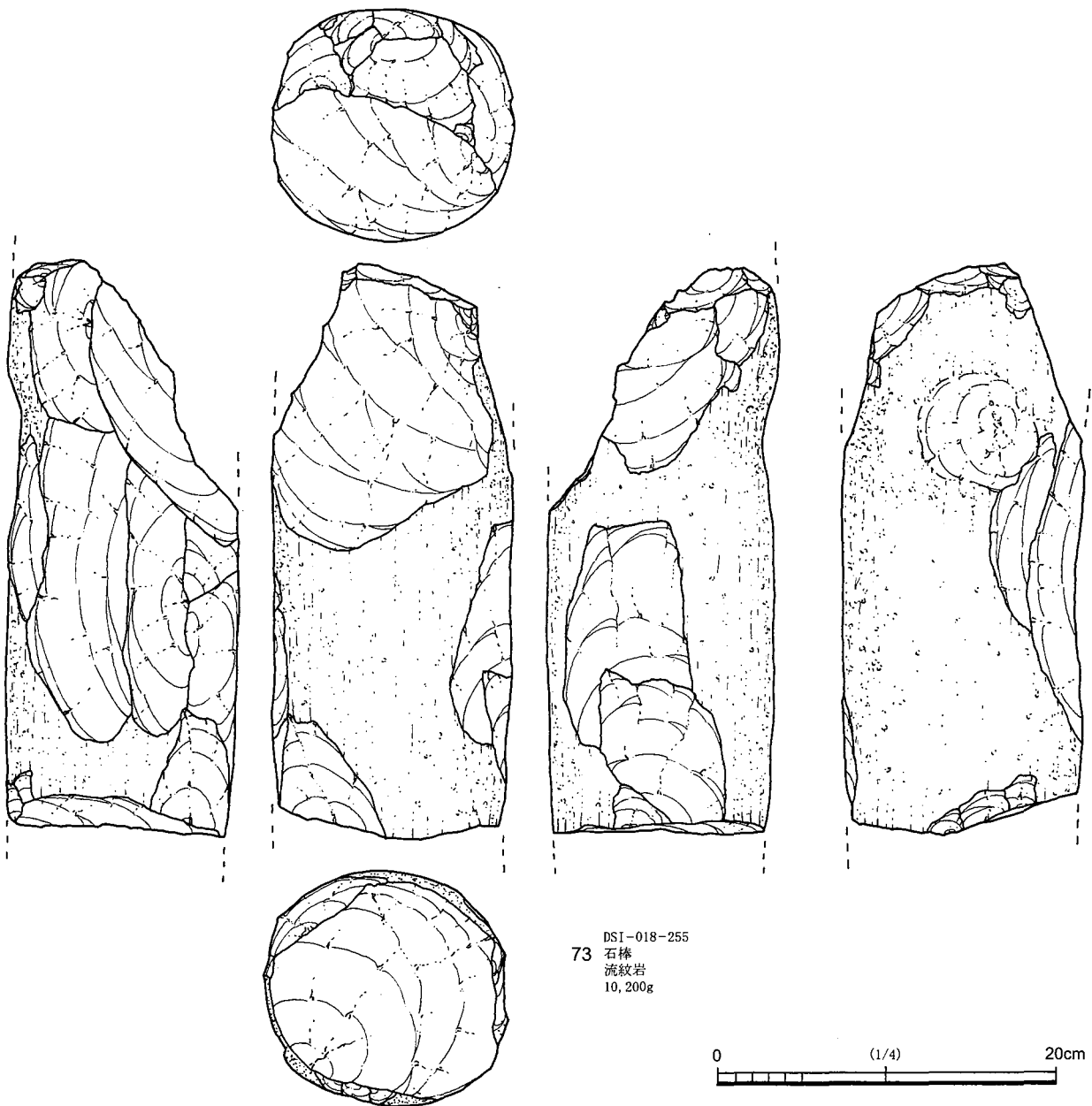
DSI-018-120  
71 敲石  
砂岩  
170.52g



DSI-018-107  
72 石棒  
綠泥片岩  
1,345g



第63圖 SI-018 (5)



第64図 SI-018 (6)

遺物は比較的多い。主体は連弧文土器となり、曾利系土器が供伴する。典型的な加曾利E式は少数派であり、当調査区では異例である。1はキャリパー形の深鉢で、口唇に沿って3本の沈線が巡り、そのうち2本には円形の連続刺突が伴う。胴部は撚糸を地文として3本一組の沈線によるいわゆる連弧文が配される。2は胴部くびれから直線的に立ち上がる深鉢で、口唇部が内側に肥厚する。縦位の半裁竹管による沈線を地文とし、やはり3本一組の沈線による連弧文が配される。3は同様の文様構成をとる深鉢底部であるが、2とは別個体である。10・14・17・21・26・28は連弧文土器の破片資料で、いずれも半裁竹管による沈線を地文とする。10と17は同一個体である。4～8・13は加曾利E式のキャリパー形の深鉢で、11・



12・15・16・25も加曾利E式に属するとみられる。4は胴部で、撚糸文を地文として8対の懸垂磨消文を配する。5～8は口縁部で、当住居跡では珍しく地文が縄文である。11は分かりにくい口唇に沿った隆起線に交互刺突が施される。15・16は同一個体の深鉢で、口縁部は無文帯とし、頸部に円形の連続刺突が巡る。25は浅鉢胴部で、胴部から口縁部へ向かって大きく内傾する。9・18～20・22～24・27は曾利系土器である。9は深鉢口縁部で、斜行する半裁竹管による沈線を地文として、蛇行する隆起線を貼り付ける。18・20は半裁竹管による沈線を地文として、蛇行する隆起線を貼り付ける。19は縄文地文に蛇行する隆起線および沈線を巡らせる。22・23は同一個体の深鉢口縁部で、渦巻き状の隆起線を貼り付け、その間を半裁竹管による沈線によって充填する。24は半裁竹管による縦位沈線を地文とし、指頭押圧で成形された隆起線が貼り付けられる。27はいわゆる籠目土器である。28～30は土器片錘で、29・30は片側を欠損する。32～35は石鏃および石鏃未製品である。石鏃製作に関連するSI-014・017・036～038・061と同一の時期であり、石材も黒曜石が主に用いられ、形状も類似していることから、SI-029も石鏃製作に関連したものと思われる。32は石鏃未製品で、表面に自然面を大きく残し、脚部に抉り痕がわずかにみられる。33～35は石鏃である。33は正三角形を呈し、脚部の抉りはわずかにみられる。34は器体中央付近が細まっており、錐状の形態を呈する。35は脚部の抉りがやや深い。36は打製石斧で全体形状は短冊形を呈するが、裏面下部からの数回の調整加工がみられ、器体中央付近で階段状を呈している。刃部再生を何回か行ったものと思われる。

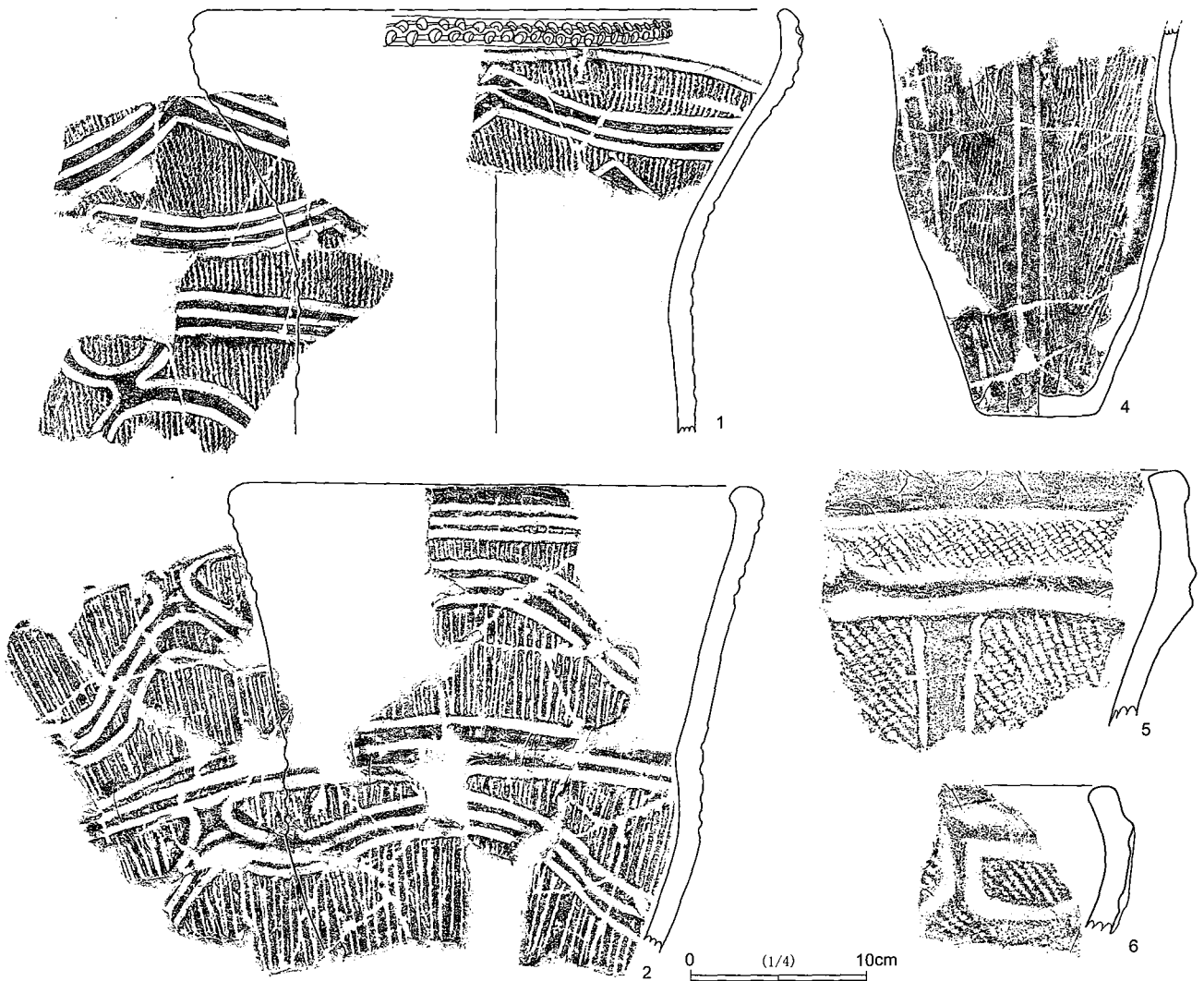
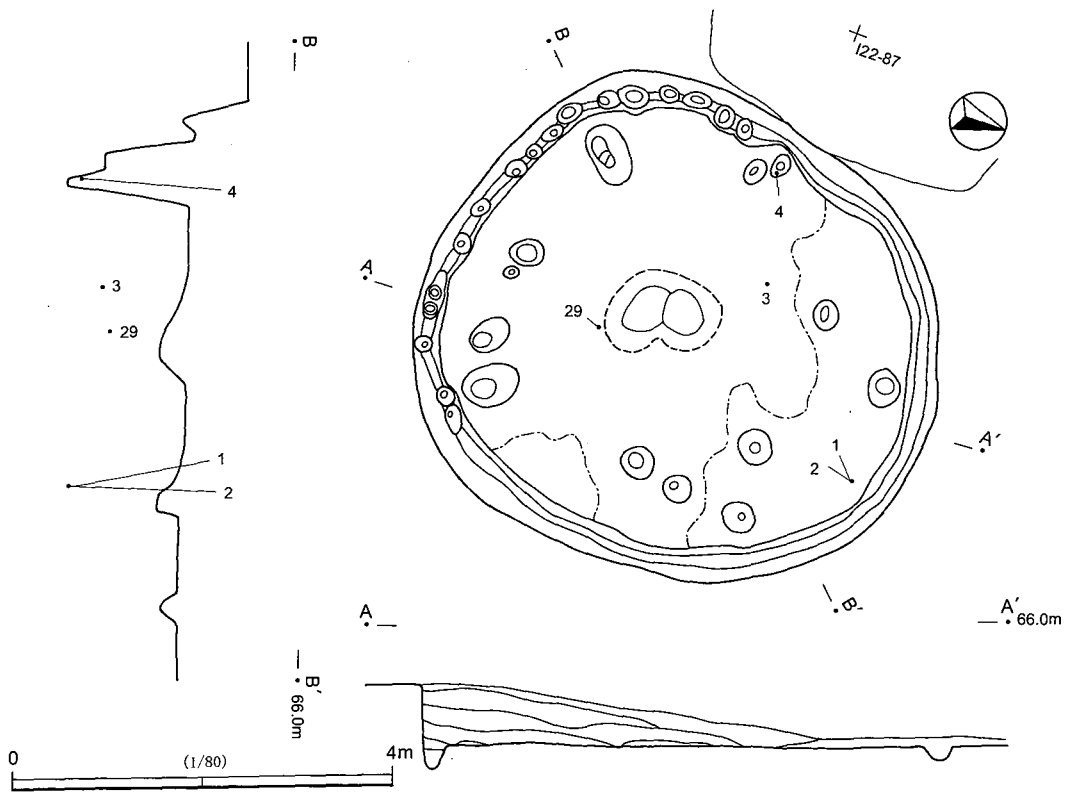
#### SI-033 (第68図, 図版35・61)

122-53・54・63・64・65・73・74・75・84グリッドに位置する。北側が斜面で流失しているほか、SI-024住居跡に切られており、全容は不明である。形状は楕円形を呈するものと思われ、残存主軸長は3.4m、横軸長は4.1m、主軸方位はN-150°-Wである。覆土は確認面より最深40cmで、自然堆積と考えられる。壁が残存している部分は、ほぼ全面床面硬化が観察される。床面からは直径20cm～40cm、深さ50cmのピットが検出されている。そのうち壁から40cm程度の距離をおいて、やや規模の大きなピットが3基巡っており、支柱穴と考えられる。壁に沿って周溝が巡るほか、壁柱穴と考えられる小ピットが18基検出される。また、南壁際には直径40cmほどのやや大きなピットが検出される。小ピットが5基集中しており、出入口施設の可能性が強い。炉跡は住居中央よりやや北側に構築されるが、後世のピットに切られている。規模は60cm×50cm程度である。

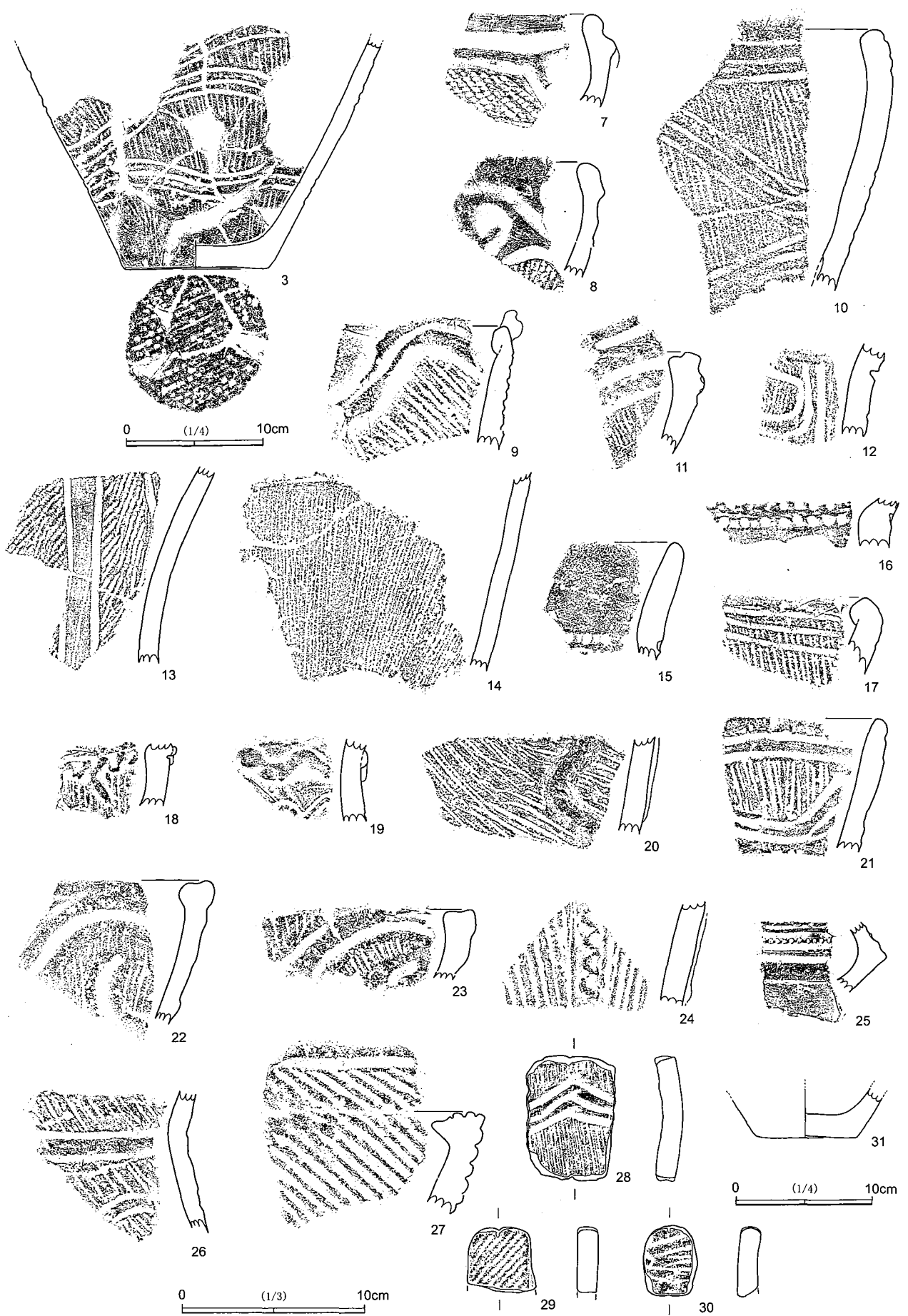
遺物は極めて少なく、曾利系土器が主体となる。1は加曾利E式のキャリパー形深鉢の口縁部で、摩耗が顕著である。2～4は曾利系土器で、2は櫛羽状工具による条線を地文として、3本一組の沈線で渦巻き状のモチーフを描く。3は深鉢頸部で、縄文を地文として蛇行する隆起線とそれを区画するように2本の平行隆起線が貼り付けられる。4は深鉢頸部で口縁側は無文とし、胴部側は半裁竹管による縦位の沈線を施す。くびれに沿うように半裁竹管によって連続刺突された隆起線を貼り付ける。5は堀之内2式～加曾利B1式の浅鉢口縁部の突起で、混入したものであろう。

#### SI-036 (第69・70図, 図版36・56・61)

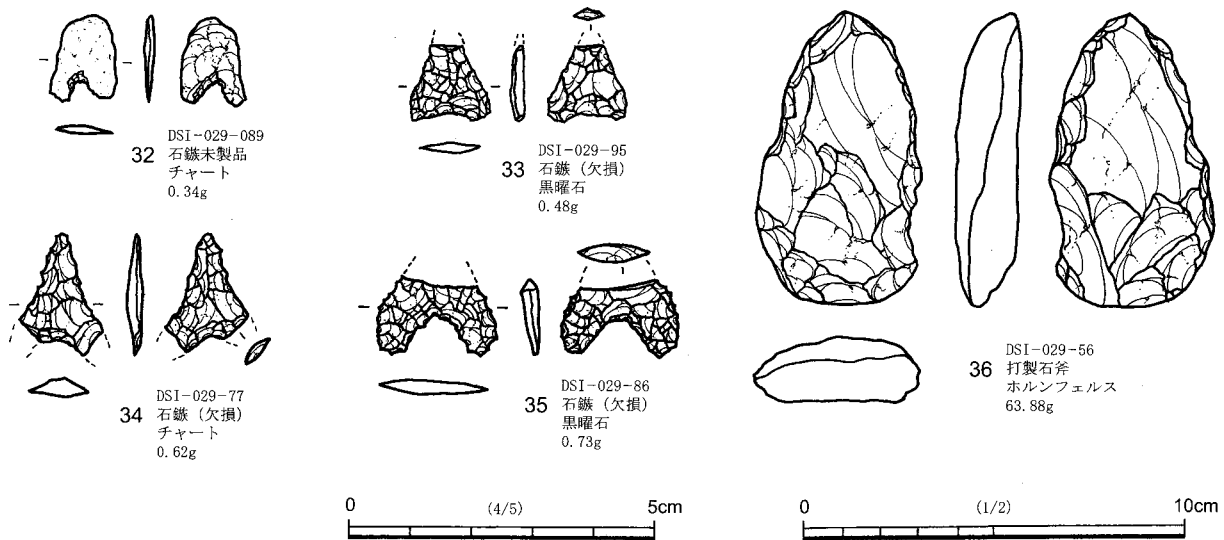
H22-64・65・66・74・75・76・85・86グリッドに位置する。不整円形を呈し、主軸長3.6m、横軸長3.4m、主軸方位N-177°-Wの小規模な住居跡である。SM-001に切られる。覆土は確認面より最深約60cmで、自然堆積と考えられる。床面からは直径25cm～40cm、深さ50cm～60cmのピットが4基検出されており、支柱穴と考えられる。南壁際に60cm×30cmの楕円形のピットが検出されるが、出入口施設かどうかは不明。



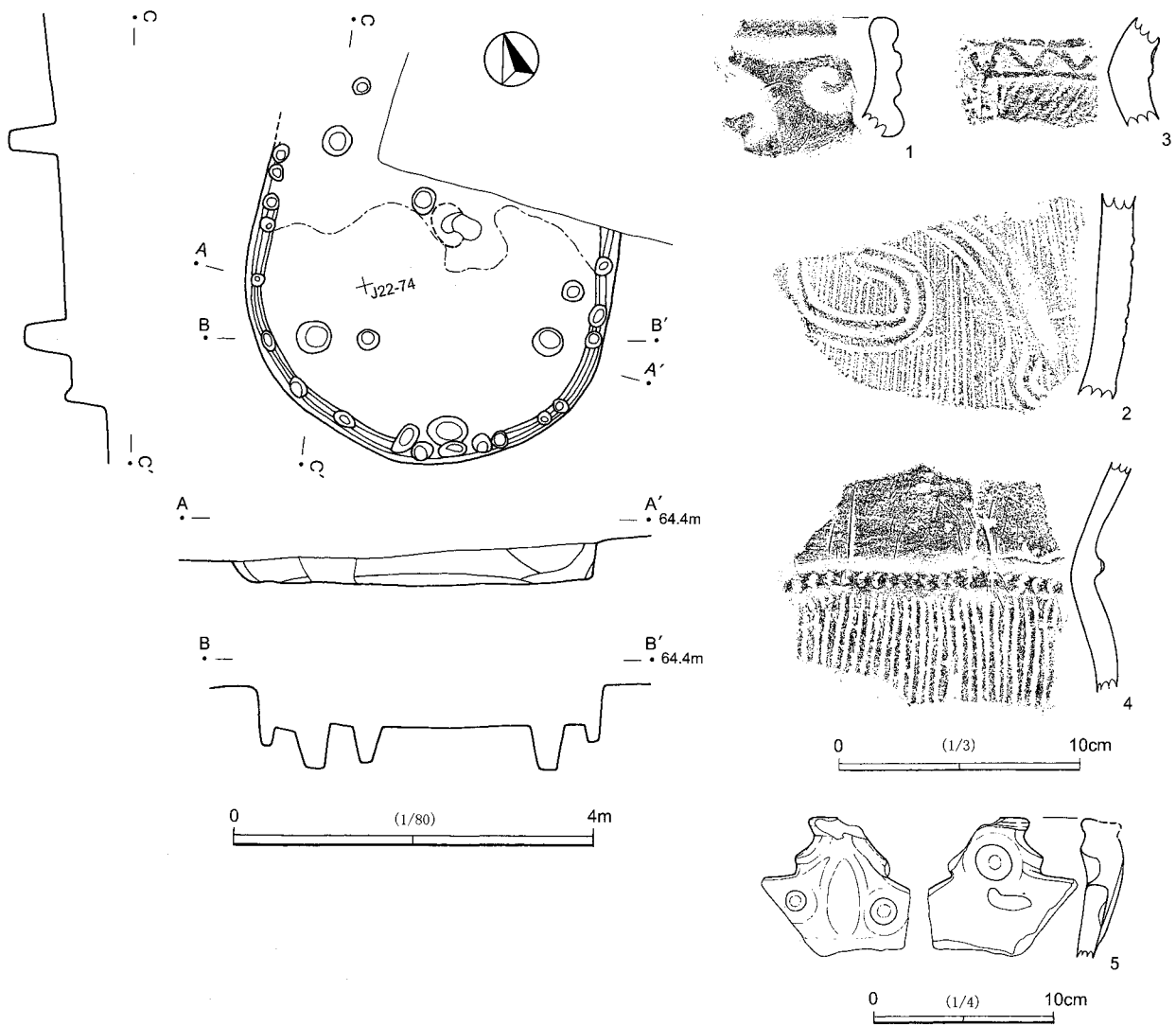
第65图 SI-029 (1)



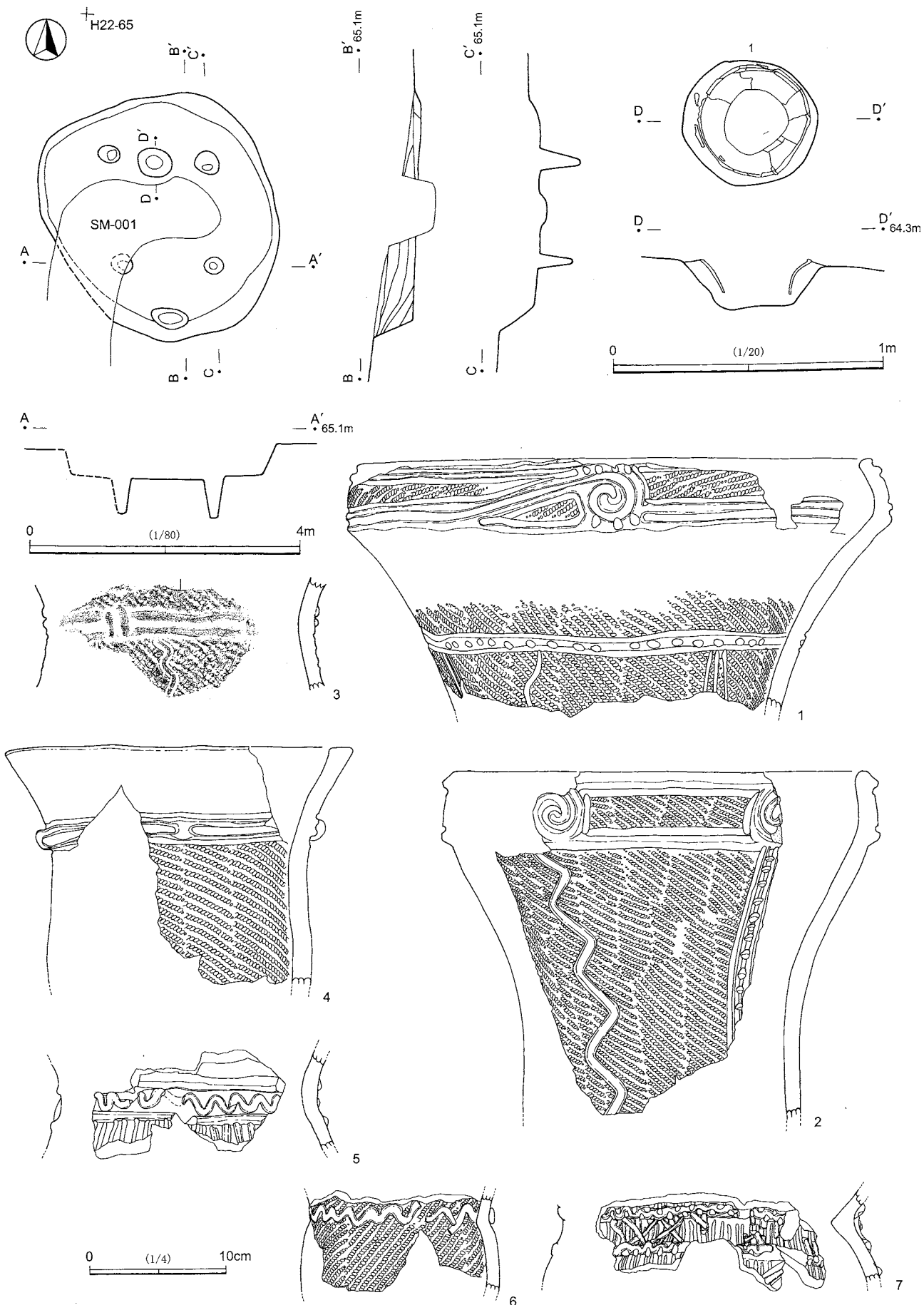
第66图 SI-029 (2)



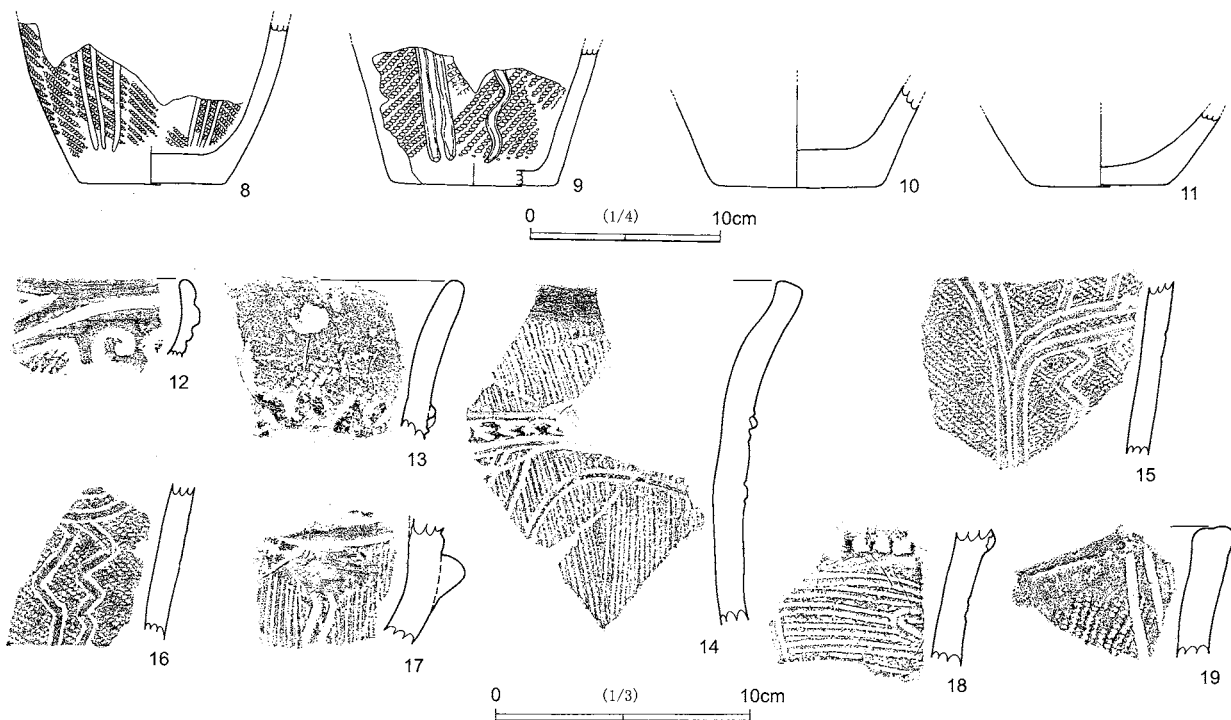
第67図 SI-029 (3)



第68図 SI-033



第69图 SI-036 (1)



第70図 S1-036 (2)

炉跡は住居中央より北側に構築され、径50cmの規模の土器囲い炉であるが、使用の形跡はほとんど無い。床面の硬化もほとんど認められない。通常の竪穴住居とは機能が異なっていた可能性がある。

小形の住居跡であるが、遺物量は比較的多い。加曾利E式に良好な資料が多いが、曾利系土器もまとまって出土している。石器は石鏃製作に関連する遺物が721点出土しており、3. 石鏃製作関連遺構において記載する。1・2・12はキャリパー形深鉢の口縁部である。1は埋設土器で、出土状況を見ると炉体土器として使用が想定されるが、熱による損傷はほとんど無い。口縁部に幅の狭い文様帯が形成され、頸部には沈線で区画された楕円形刺突列が横位に配される。その間は上側2/3~3/4が磨り消し無文帯となっている。胴部は蛇行沈線と3本一組の直行沈線が交互に配される。2は口縁部の渦巻き文の下側に、半裁竹管による蛇行沈線もしくは刺突列を伴う沈線が垂下される。3・4・19は口縁部が直線状に開く深鉢である。3は頸部で、2本の隆起線を横位に貼り付け、直交するように2本の短い隆起線を貼り付ける。4は口唇部がやや肥厚し、口縁部は無文帯となる。頸部に2本の隆起線が横位に貼り付けられ、瘤状の小突起が4単位貼り付けられる。19は波状口縁となる深鉢で、口縁部から胴部まで文様帯が単一のものである。5~7・13・14・17・18は曾利系土器である。5・6・13はいずれも蛇行する隆起線を、頸部に横位に貼り付けるものである。5は地文が半裁竹管による沈線で、上下を区画する隆起線を伴う。6は縄文地文に蛇行隆起線を貼り付けただけのもの。7は強い屈曲をもつ深鉢頸部で、胴部は大きくふくらみ、口縁部も強く外反する。半裁竹管による沈線を地文とし、斜格子状の貼り付け隆起線が横位に配され、交互刺突が施された隆起線で上下を区画する。14は櫛羽状工具による条線を地文として、半裁竹管を使用したモチーフが配される。口唇部は若干肥厚し、頸部の隆起線には半裁竹管による連続刺突が認められる。17は分かりにくいですが、上部の沈線に交互刺突が施される。8~11は深鉢底部で、8は縄文地文に沈線が、9には隆起線が配される。15・16は地文が縄文となるもので、同一個体である。

SI-037 (第71・72図, 図版36・56・62)

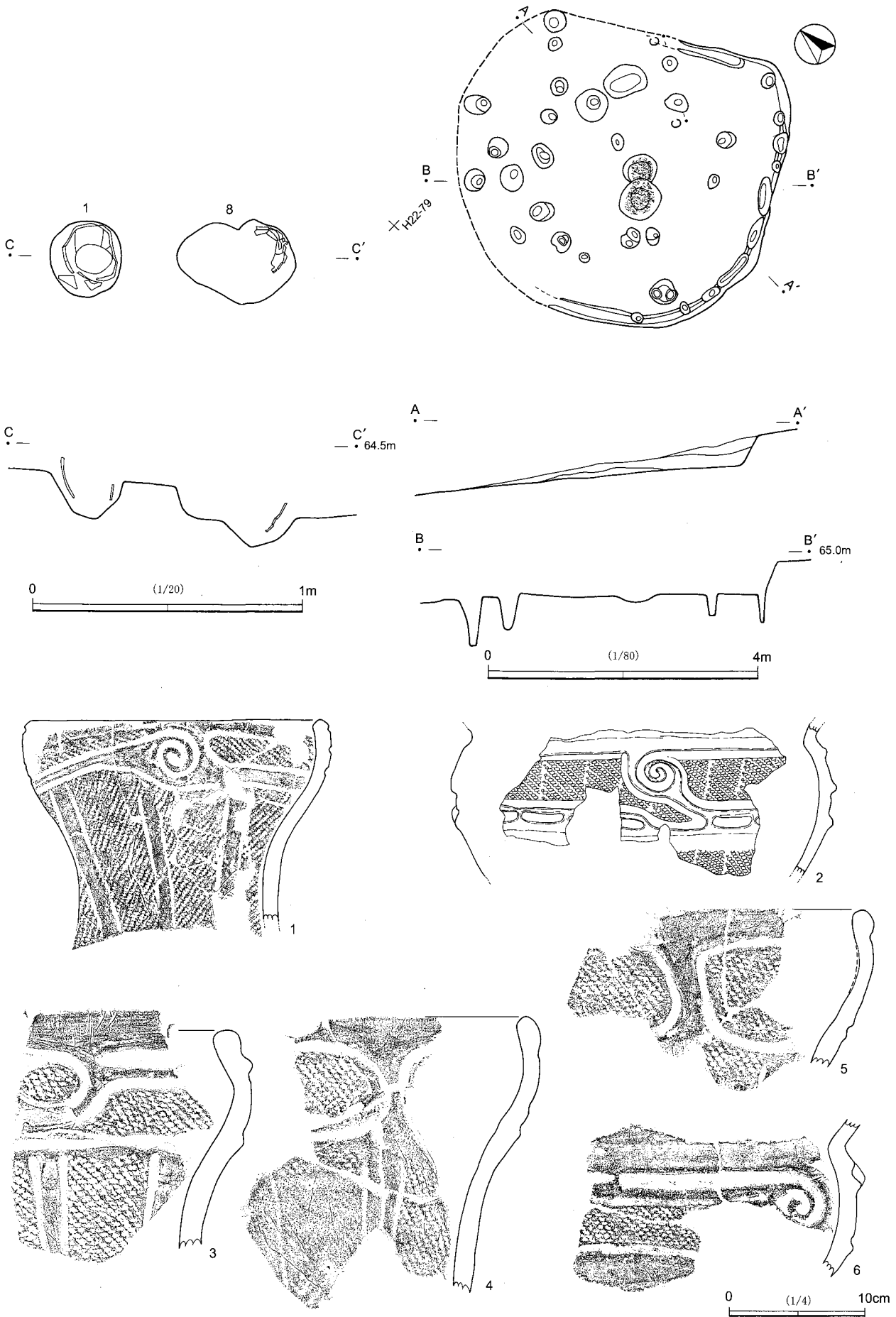
H22-69・79・89・99, I22-60・61・70・71・80・81・90グリッドに位置する。北側は斜面で流失しているが、残された柱穴などから全容が推測できる。形状は円形といえるが、北東側の壁は直線になっている。規模は主軸長4.4m, 横軸長4.7m, 主軸方位N-141°-Wである。覆土は確認面より最深50cmで、自然堆積と考えられる。床面から直径20cm~50cm, 深さ30cm~70cmのピットが多数検出されている。ほとんどが柱穴と考えられる。また、壁が残存している部分のほとんどに周溝が巡っており、壁柱穴と考えられる小ピットが検出されている。炉跡は住居中央よりやや南寄りに構築される。直径50cm~60cmの浅い皿状を呈し、2基が連結するような平面形状を呈する。同時使用か新旧関係があるのかは不明。炉跡より北東側には2基の埋設土器が検出されている。炉の配置とこの埋設土器の位置などから、この住居跡の出入り口は北東側と推測した。床面はあまり硬化しておらず、凸凹が認められる。

小規模な住居跡であるが、遺物は良好である。加曽利E式を中心で、曽利系土器も供伴する。石器は石鏃製作に関連する遺物が310点出土しており、3. 石鏃製作関連遺構において記載する。1・3~5・8は加曽利E式のキャリパー形深鉢である。1は埋設土器で、住居中心側から出土したもの。口縁部文様帯に隆起線を使用せず、横位の沈線によって区画される。幅が一定せず胴部文様帯がかなり上位まで張り出す。4・5・8は同一個体で、8は埋設土器である。2と6は加曽利E式の鉢形土器である。頸部文様帯は隆起線で区画され、渦巻きを中心とした区画が横位に配される。7・9・10~12は曽利系土器である。7は半裁竹管による横位の平行沈線上に、爪形の交互刺突を伴った隆起線が縦に貼り付けられる。口唇部が断面三角形に肥厚し、その上にも半裁竹管による斜位の平行沈線が施される。9・10は籠目文土器で、いずれも蛇行する隆起線が貼り付けられる。12は櫛羽状工具による条線上に隆起線が貼り付けられるもので、横位の隆起線上には半裁竹管による連続刺突が施される。13は底部で、櫛羽状工具による条線が施される。

SI-038 (第73・74図, 図版36・55・56・62・84)

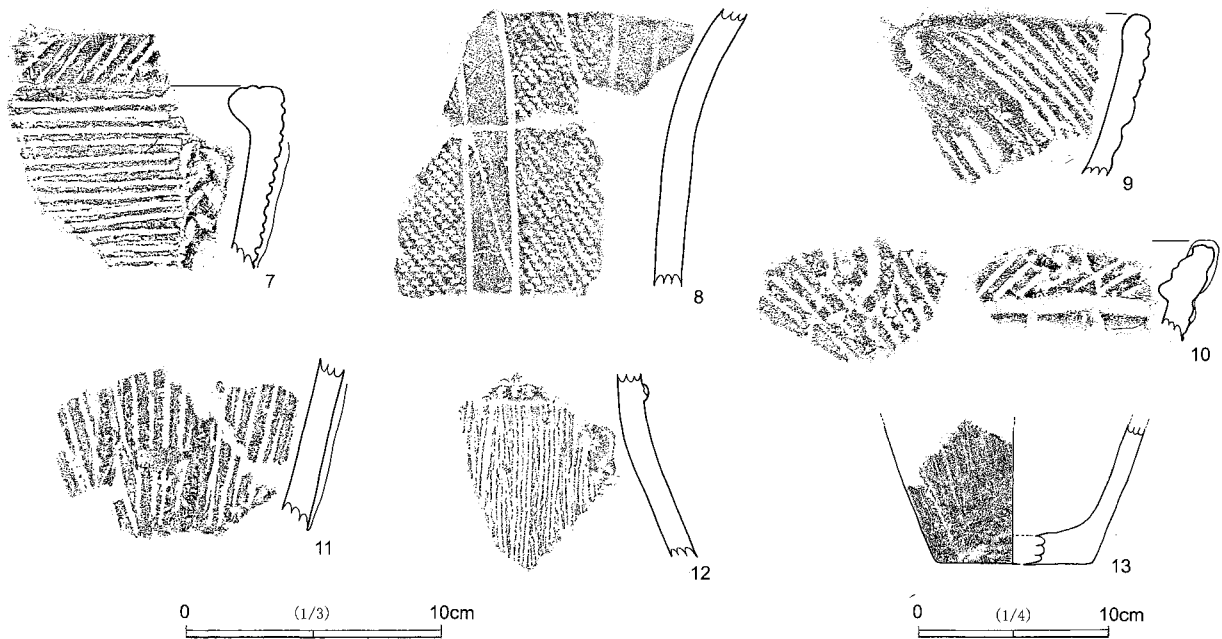
G23-19・28・29・39, H23-10・11・20・21・30・31グリッドに位置する。北側が斜面になっており、壁が流失している。楕円形を呈し、主軸長5.5m, 横軸長4.8m, 主軸方位N-152°-Wである。覆土は確認面から最深110cmで、自然堆積と考えられる。床面からは多数のピットが検出されているが、南側に密集するごく小さなピットを除く、直径20cm~50cmのピットが柱穴であると考えられる。南側の壁に沿って周溝が巡り、壁柱穴と考えられる小ピットが構築される。なお、北側は柱穴が2重に巡るのが確認でき、建て替えが行われたことを示している。炉は住居中心よりやや北側に構築され、直径50cmの浅い皿状のプランが2基検出されている。始めに中心に近い側の炉が使用され、次いでより北側の炉が使用されたとみられる。北側の土坑には、土器が3個体分埋設されている。

遺物は大形破片が多い。加曽利E式、連弧文土器、曽利系土器など各種出土する。石器は石鏃製作に関連する遺物が445点出土しており、3. 石鏃製作関連遺構において記載する。1は大形の鉢形土器で、炉埋設土器のうちの1つである。頸部がほぼ全周残存する。隆起線によって渦巻き文や区画が形成され、沈線によって充填される。文様帯の下端は斜めの連続刺突を伴う隆起線によって区画される。2は無文の口縁部が強く外反し、頸部に半裁竹管による横位の沈線および刺突を伴う隆起線が配される。口唇部は内側へ肥厚し、上部に太沈線が巡る。3~5は同一個体の深鉢胴部で、炉埋設土器である。円形の交互刺突を伴う平行沈線が横位に配され、3本一組の沈線によるいわゆる連弧文が上部に施される。6は炉埋設土器の一つである。口縁部が無文の大形の深鉢で、口唇部が内側に肥厚する。7・9・10は加曽利E式のキャ



第71图 SI-037 (1)





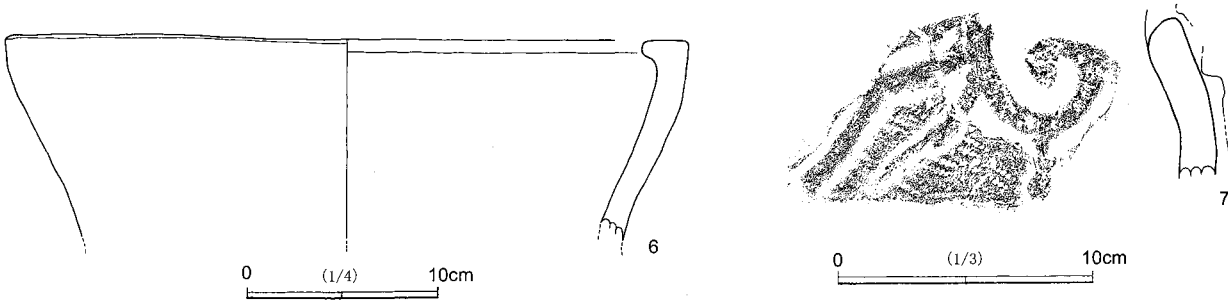
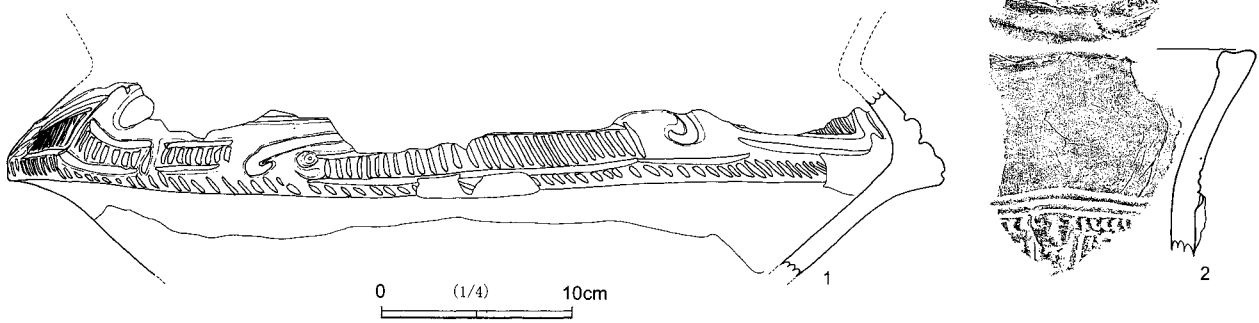
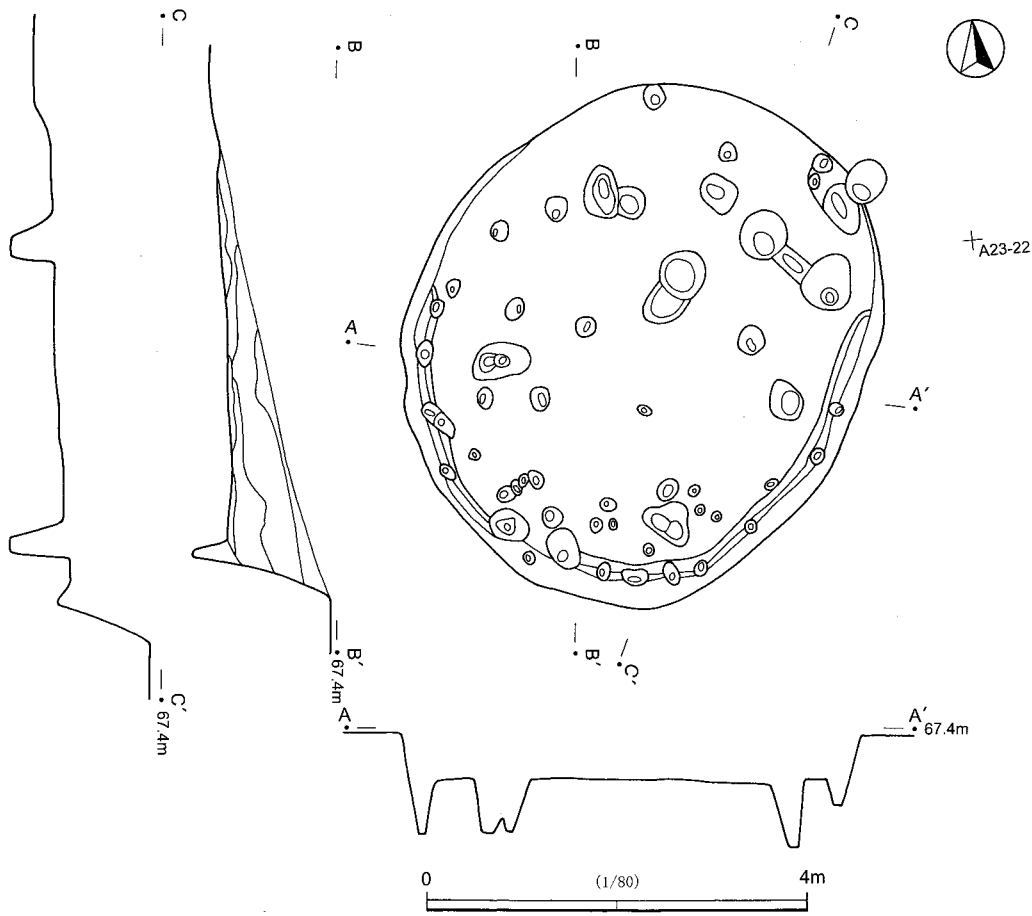
第72図 SI-037 (2)

リパー形深鉢で、7と10は同一個体である。7は口縁部で、波状口縁の波頂部下に隆起線による渦巻きを配する。10は胴部で、横位の隆起線から半裁竹管による平行沈線が垂下される。9は小形の深鉢で、沈線による渦巻きが施される。8・11～14は曽利系土器である。8は深鉢胴部で、半裁竹管による縦位の平行沈線を地文とし、蛇行隆起線と直線の隆起線が交互に配される。11は深鉢の頸部で、半裁竹管による縦位の平行沈線を地文として、やはり半裁竹管による刺突を伴う隆起線が横位に配される。14はよく似ているが、沈線および刻みは棒状工具を使用する。12・13は深鉢頸部で、くびれ部に交互刺突を伴う隆起線が配される。15は土製円盤で、打ち欠き成形後粗い研磨調整が行われる。

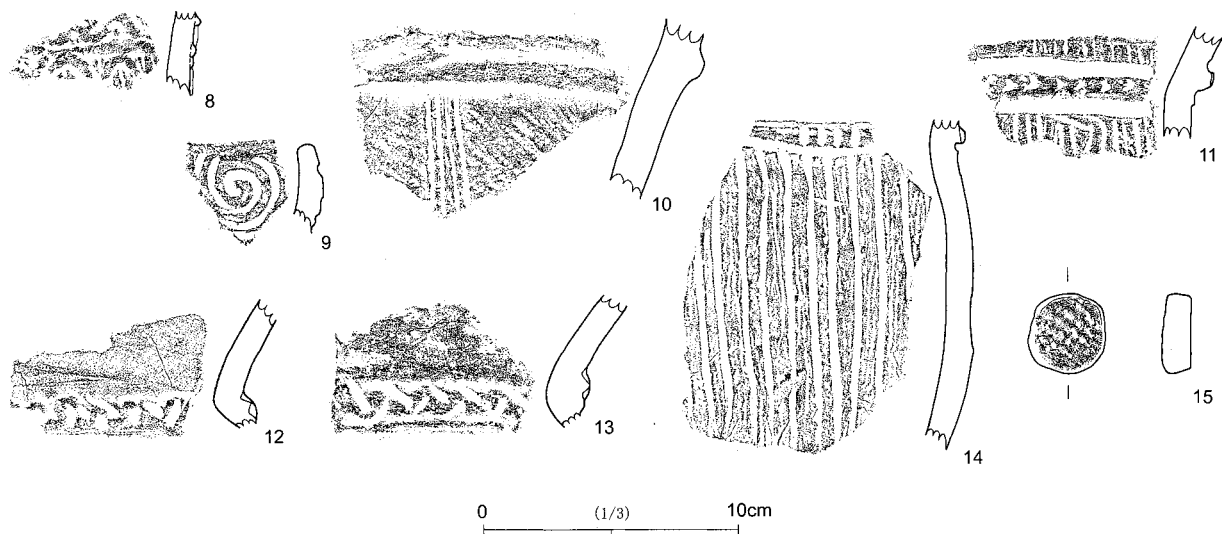
#### SI-039 (第75図, 図版57・63)

J20-99, K20-90, J21-09・19, K21-00・01・10・11グリッドに位置する。北側が斜面で壁が流失しているため、全体規模は不明である。SI-047住居跡を切っている。主軸長4.5m, 横軸長約4.7m, 主軸方位N-90°-Wと推測される。覆土は記録がないため詳細は不明であるが、確認面からの深さは20cm程度と推測される。床面から直径25cm～50cmのピットが6～7基検出されているが、炉跡脇の2基を除く5基が柱穴と考えられる。深さは40cm～70cmである。南側の壁に沿って周溝が巡るが、壁柱穴などは検出されていない。炉跡は住居中央より西側に構築され、直径60cm程度の浅い皿状を呈する。床面硬化はほとんど観察されなかった。

土器は中期後半と、後期後葉の2つの時期に大きく分かれる。本住居跡が切っているSI-047住居跡は中期後半に属するため、その遺物が混入したとみられる。ここでは後期後葉の遺物についてのみ記述する。後期後葉の土器は加曽利B3式を中心とする。1はミニチュア土器である。内・外面でミガキ調整が施される。3・8は同一個体で、いわゆるソロバン玉形土器である。口縁部の立ち上がりは低く短い。4・18は口縁部に斜行沈線が配される精製深鉢で、4は口唇に沿って刻みが巡り、沈線はそのすぐ下を起点とする。18は刻みが無く、沈線は頸部側を起点とする。5は小突起がある精製深鉢口縁部で、口唇直下の沈線に区画された刻みの下は無文である。6は精製深鉢の胴部で、文様は弧線と磨消縄文により構成される。



第73图 SI-038 (1)



第74図 SI-038 (2)

7は瓢形と考えられる精製深鉢で、帯状の縄文帯が口縁に沿って巡る。9・10はソロバン玉形土器で、9の屈曲から上側はかなり直立する。11・12はいわゆる遠部第2類型の浅鉢である。11は波状口縁で、沈線は鋭く規則正しく描かれる。12は頸部に屈曲をもち、沈線は細く、配置も不規則になっている。13は波状口縁の浅鉢で、頸部の屈曲から口唇までの幅は狭い。14は小形の浅鉢で、頸部屈曲に沿って3本の沈線が巡る。15は波状口縁の浅鉢で、口縁部は無文である。16はSI-047住居跡から出土したもので、口縁部が屈曲する無文の浅鉢である。19～21はいわゆる粗製土器である。19は縄文地文に横位沈線が配され、口縁内側にも太沈線が巡る。20は、縄文地文は残るが紐線文がかなり細くなり、条線も極めて密になる。21は大形の個体で、紐線文が断面三角形を呈し斜行条線がかなり密に施される。

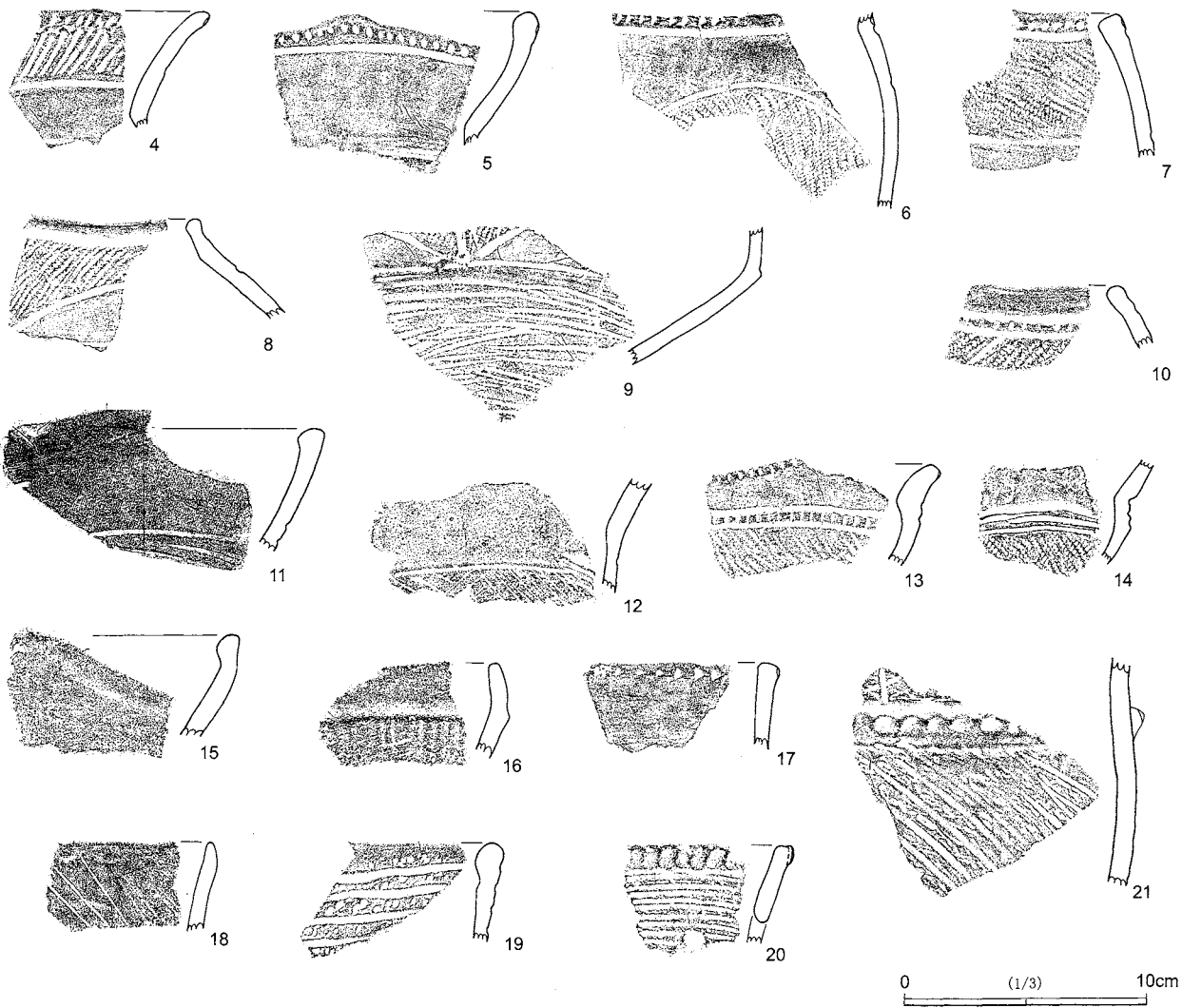
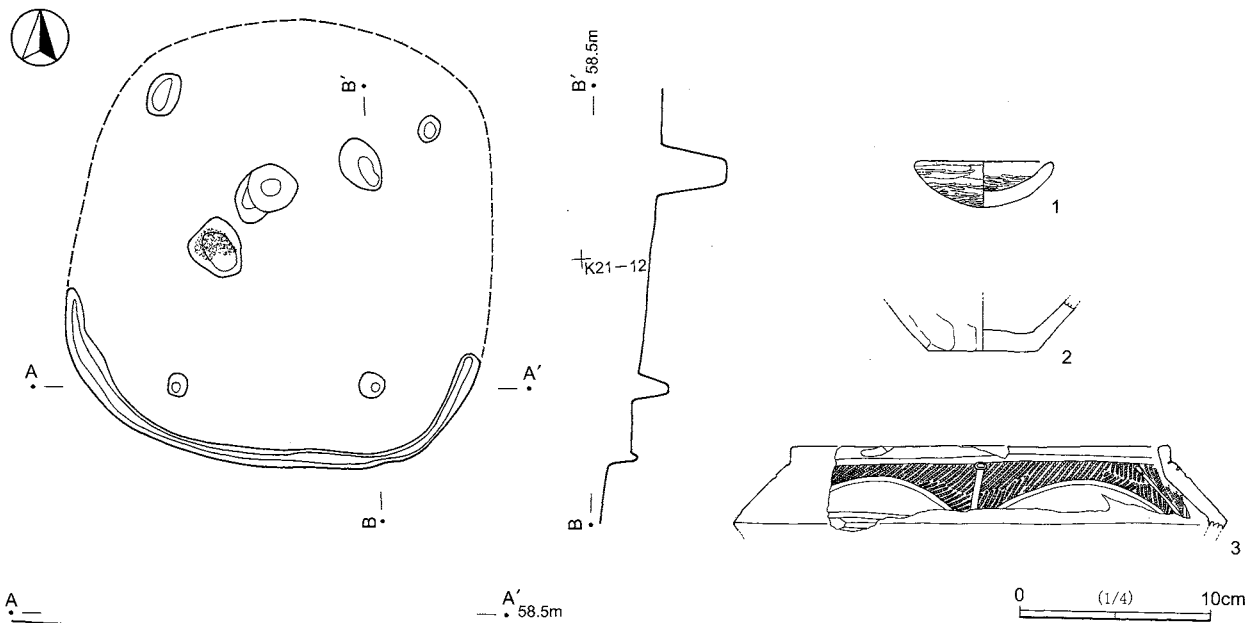
#### SI-040 (第76図, 図版63)

範囲は確定できないが、J21-39・49・59, K21-30・31・40・41・50・51グリッドに位置するとみられる。壁などは検出されなかったため、形状などは不明である。残されたピットなどから推定復原した。形状は円形もしくは楕円形、主軸長約6.2m, 横軸長約6.4m, 主軸方位N-110°-Wと推測される。SD-016溝に切られる。直径30cm~70cm, 深さ45cm~110cmの柱穴とみられるピットが検出されている。中央部に炉跡が検出されている。直径90cm, 深さ20cmの皿状を呈する。

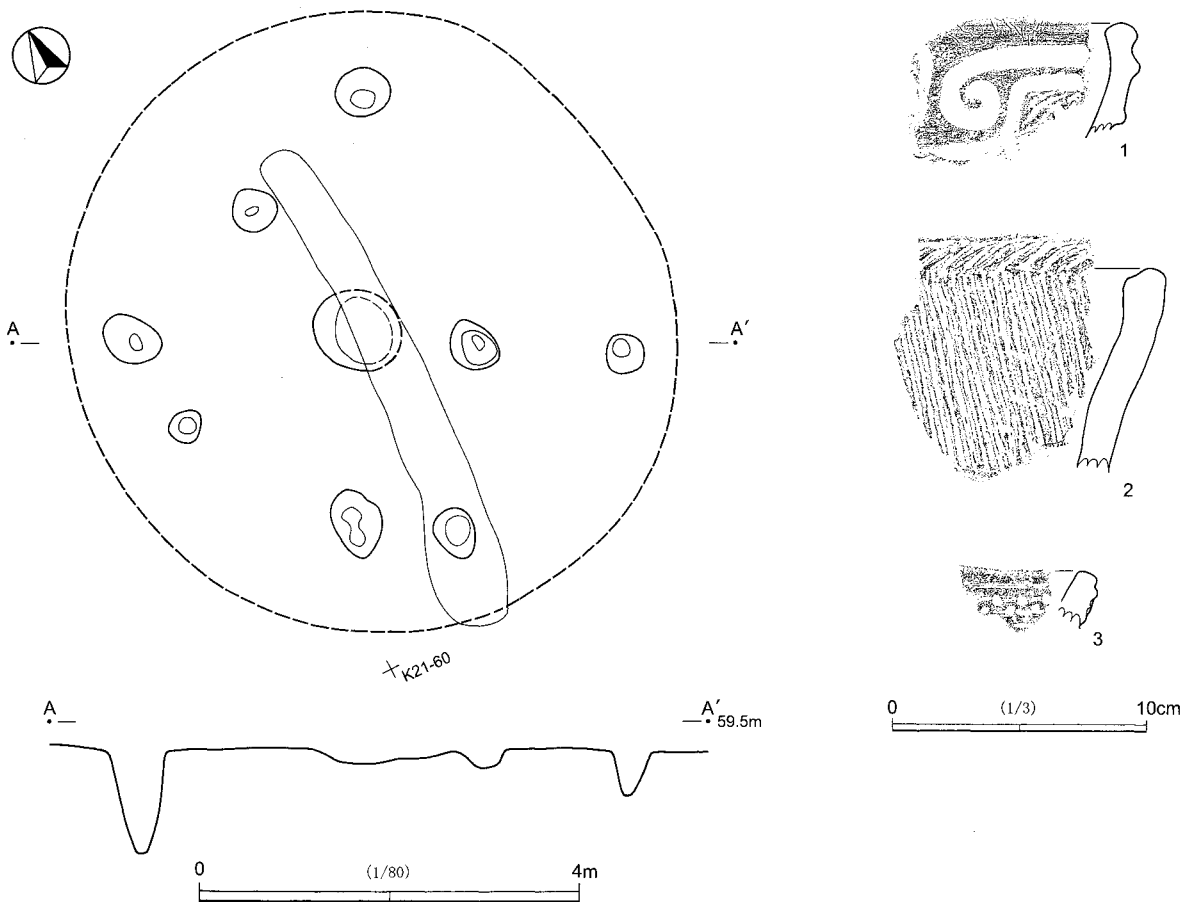
遺物はごく少ない。1はキャリパー形深鉢で、隆起線による渦巻き文が配される。2は籠目文土器で、口唇はあまり肥厚しない。3は深鉢口縁で、口唇に沿った平行沈線に円形の交互刺突が伴う。

#### SI-041 (第77・78図, 図版37・57・63)

K22-88・89・98・99, L22-80・81・90・91, K23-08・09・18・19, L23-00・01・10グリッドに位置する。やや大形の住居跡であるが、切り合いが激しく全容は不明である。とりあえず直径9.5m程度の円形に復原したが、出土遺物の時期を考慮すると隅丸方形になる可能性もある。主軸方向は不明。SI-001・SI-005の各住居跡, SK-001・SK-003・SK-018の各土坑, SD-002・SD-005の各溝に切られる。特にSI-001・SI-005住居跡はいずれも同じかもしくは近い時期の遺物が出土しており、相互の遺物が混在している可能性がある。主軸方位は判断できない。床面からは直径20cm~40cmのピットが多数検出されている。中央側のピットが支柱穴, 壁際のピットが壁柱穴と考えられるが、個別に特定するのは難しい。また、壁柱穴と考えら



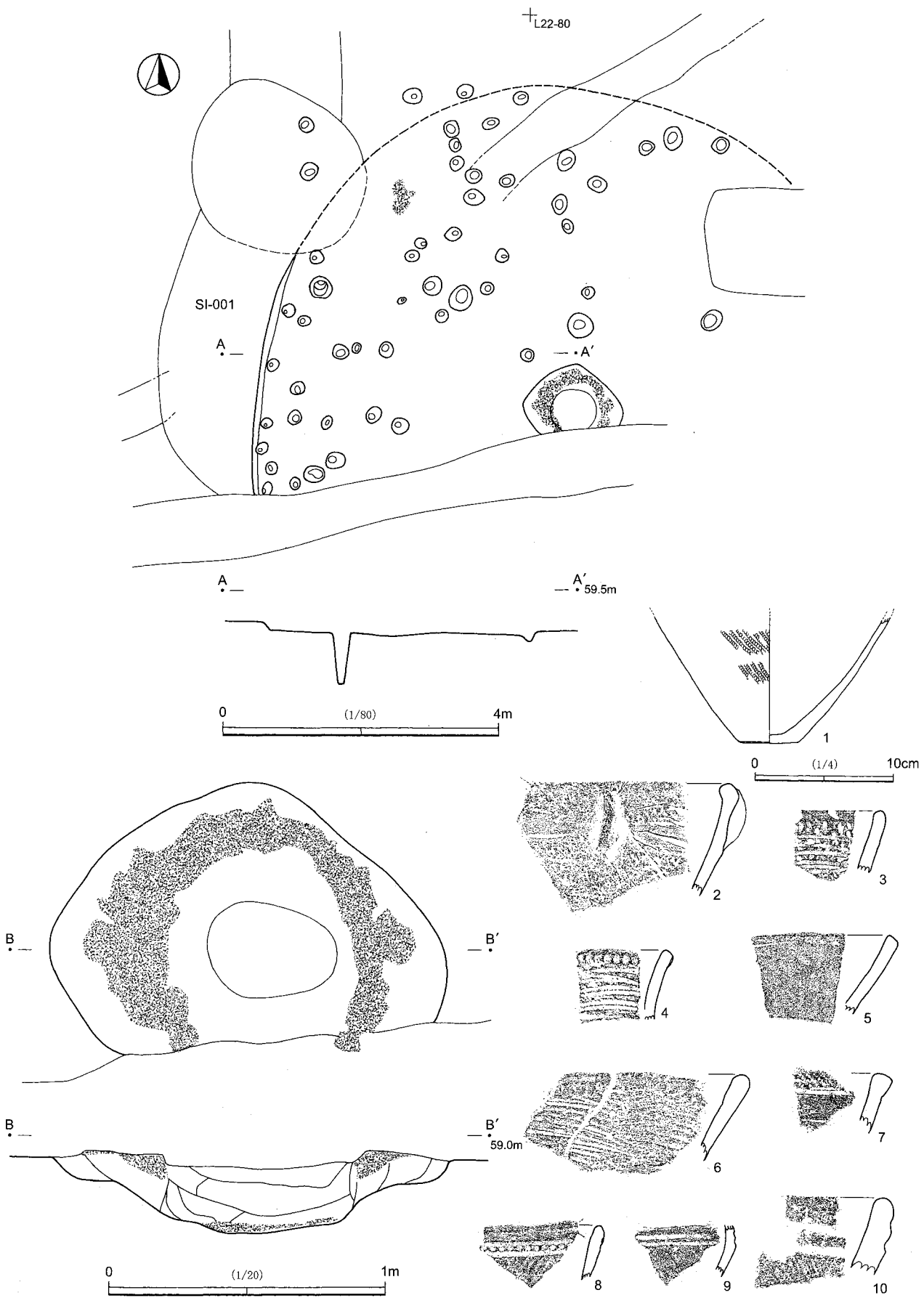
第75图 SI-039



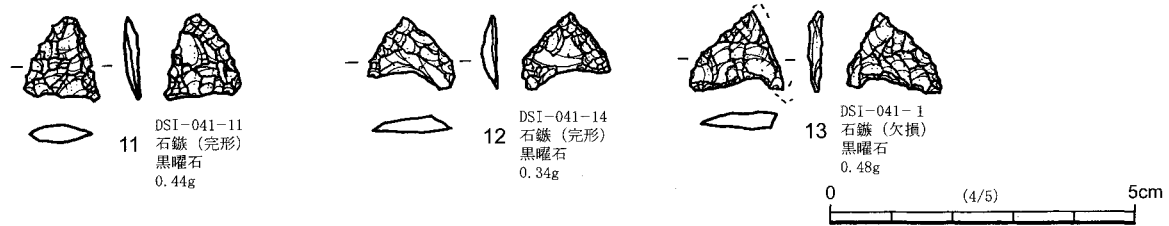
第76図 SI-040

れるピットの配置から、1回か2回の建て替えを想定できる。炉跡は直径140cmの浅い椀形の掘り方中に、幅10cm～30cmの硬化した焼土が環状に囲む。その内側が直径60cm、深さ20cmの円筒形に掘り抜かれ、焼土や灰が混入した土層が堆積する。長期かつ高頻度の使用を想定させる。このほか北西側にも、火床部のような状況を呈する焼土の集積が検出されている。

遺物は少ないが、この付近のグリッドから出土した遺物で、ある程度良好な資料も存在する。特に第126図568・569の2点の土器は、出土域も全く重なっており、当住居跡に帰属する可能性が高いことを指摘しておく。確実に当住居跡から出土した遺物の多くは曾谷から安行1式である。1は精製深鉢底部である。摩耗顕著で文様は分かりにくい。2・7は平口縁精製深鉢で、2の口縁に沿った隆起縄文帯はほとんど剥落している。3・4・6は粗製土器である。3・4は紐線文系であるが、3は紐線を伴わない。5は無文の浅鉢である。8は加曾利B式の波状口縁の深鉢である。9は浅鉢胴部であろう。10は縄文地文に2本の沈線が配されるもので、中期末～後期初頭か。11～13は小型の黒曜石製の石鏃である。11は正三角形を呈し脚部の挟りはほとんどみられない。12・13は幅広の形状で脚部の片側が短い。おそらく、脚部の再生加工を行った最終形状であると考えられる。



第77图 SI-041 (1)



第78図 SI-041 (2)

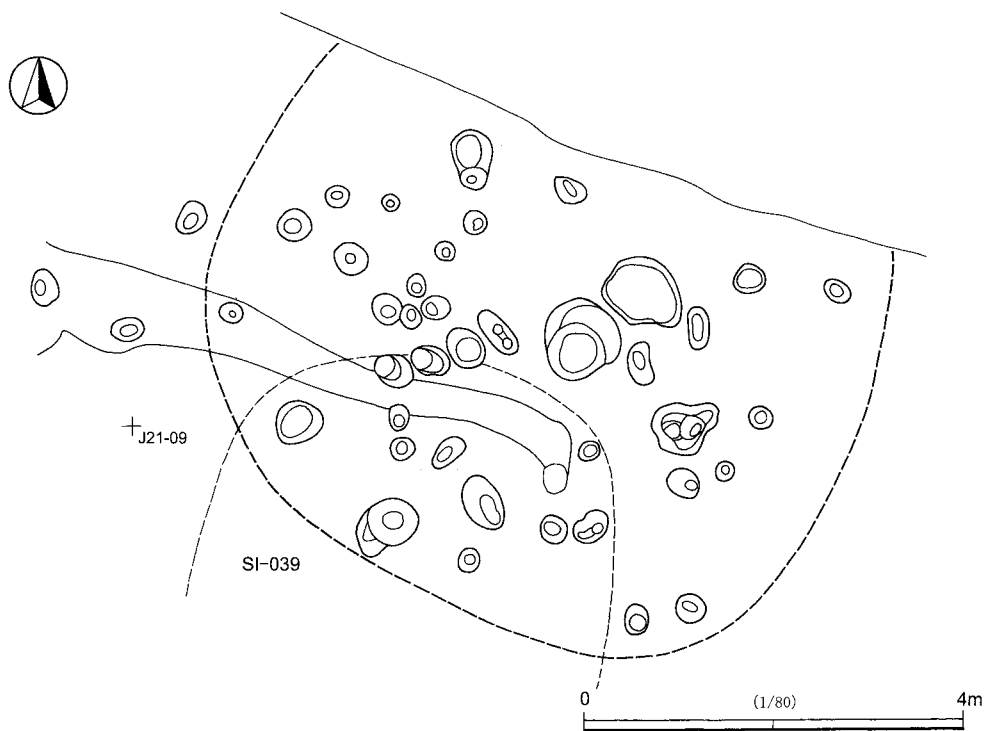
SI-047 (第79・80図, 図版37・56・57・63)

範囲を確定できないが, J20-89・98・99, K20-80・81・82・90・91・92, J21-09, K21-00・01・02・11 グリッドに位置するとみられる。調査当初は住居跡とは認識されず, 炉跡の検出に至って竪穴住居跡と認定されたものである。とりあえず炉跡周辺のピットを図化しているが, 西側のピットは伴うものか疑わしい。形状は円形もしくは楕円形, 主軸長は残存部で約7.0m, 横軸長約5.5m, 主軸方位N-120°-Eと推測される。SI-039住居跡, SZ-001に切られる。床面からは多数のピットが検出されているが, 特に直径60cm程度の大形のピットを中心に, 直径20cm~30cmの小形のピットが円形に配置されるのが観察できる。ピットを柱穴とするならば, 建て替えを想定させるような状況も観察される。ただし, 南側はSI-039住居跡と重なっており, どちらに帰属するか判断できないピットも存在する。炉跡は住居中央部に構築され, 直径80cmの皿状の土坑の壁に沿って, 土器片と礫が並べられる。炉の北東側には直径70cmの浅い皿状の土坑が近接するように存在し, 深鉢上半部が横転した状況で出土している。

遺物は少ないが, これは遺構にほとんど覆土が残されていなかったからであろう。また, SI-039住居跡中にも混入しているのは, 先述したとおりである。ここではSI-039住居跡出土分も含め, 中期後半の遺物を全て記述する。主体は加曽利E式で, 数は少ないが良好なものが多い。また, 曽利系土器や連弧文土器などがほとんどみられない点も目を引く。なお, 1・2・5・7はSI-039住居跡出土である。1~6はキャリパー形深鉢である。1の口縁部文様帯は横一列に渦巻き文と区画が配されるもので, 隆起線も細く低い。また, 文様帯下側は沈線で区画される。2は4対の突起をもち, その下側に隆起線による渦巻き文が配される。図正面側は渦巻き文が上下2段になっているが, 他の突起では下側は円文化されている。突起の間にも渦巻き文が配され, その間が2本の隆起線で結合されており, 結果として口縁部文様帯の幅広さが強調される。3は土坑中に横転していたもので, ほとんど直線状に口縁部が立ち上がる器形を呈し, 極めて太い隆起線が波状に口縁部を巡り, 口唇に接した部分には小突起が形成される。4はやや小形の口縁部であるが, 例外的に遺存状況は良好である。6はかなり大形の胴部で, 炉に埋設されていたものである。7は籠目文土器で, 蛇行する隆起線を縦位に貼り付けられる。

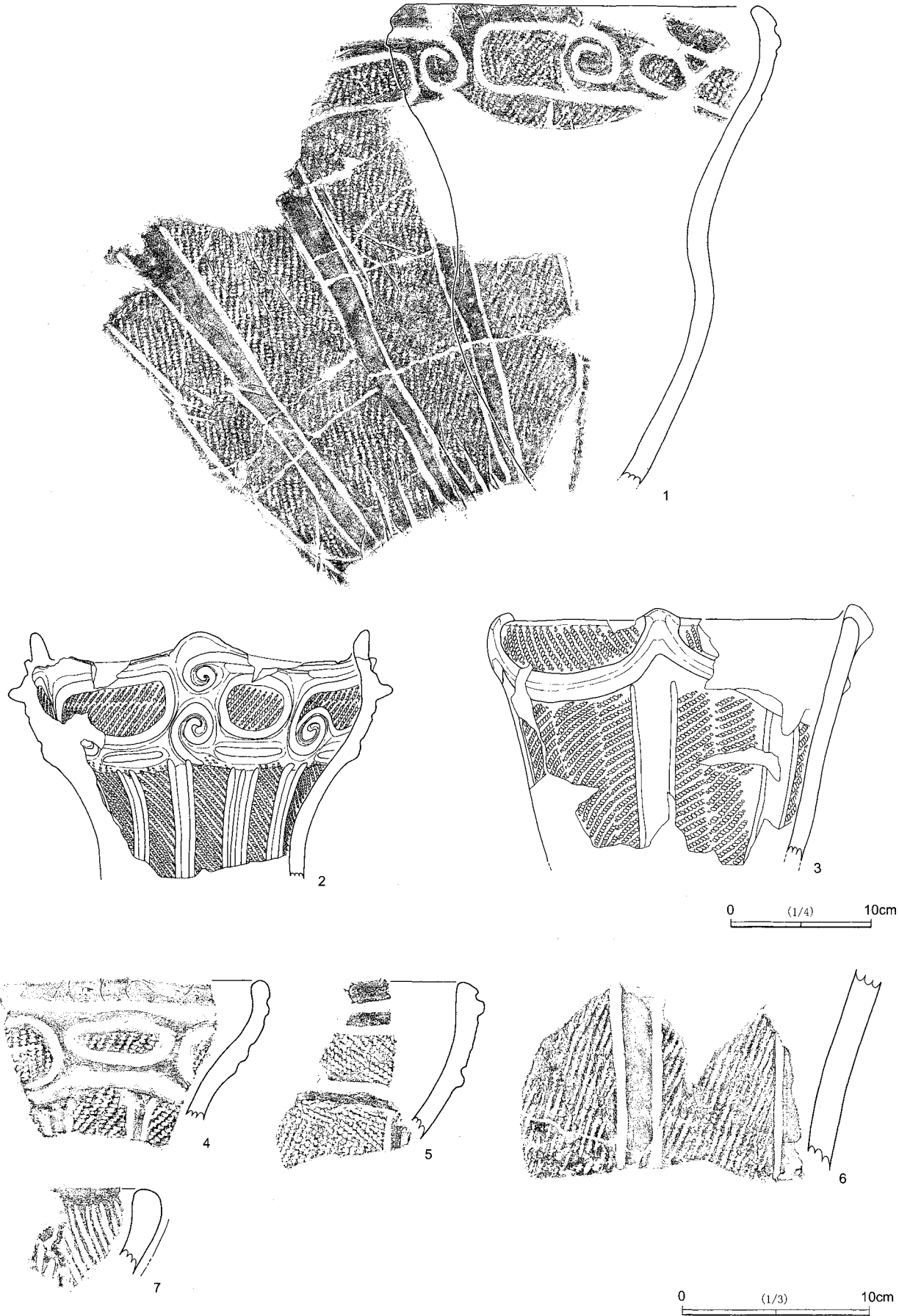
SI-054 (第81図, 図版37・57・63・64)

J21-35・36・37・45・46・47・55・56・57グリッドに位置する。北側は斜面のため流失するが, ほぼ全体が復原できる。楕円形を呈し, 主軸長4.7m, 横軸長約4.8m, 主軸方位N-171°-Wである。覆土は確認面からの最深20cm弱と浅く, 自然堆積と考えられる。床面の南側半分に硬化が認められる。住居中央4カ所に, 直径40cm~60cm, 深さ80cm~90cmのピットが配され, 支柱穴と考えられる。南側の壁に沿って周溝が巡り, 壁柱穴と考えられる小ピットが検出されている。住居中央よりやや西側に直径90cmの炉が構築される。軟質砂岩と円礫を構築材として使用するが, 砂岩は形状をとどめていないものが多い。西側の壁

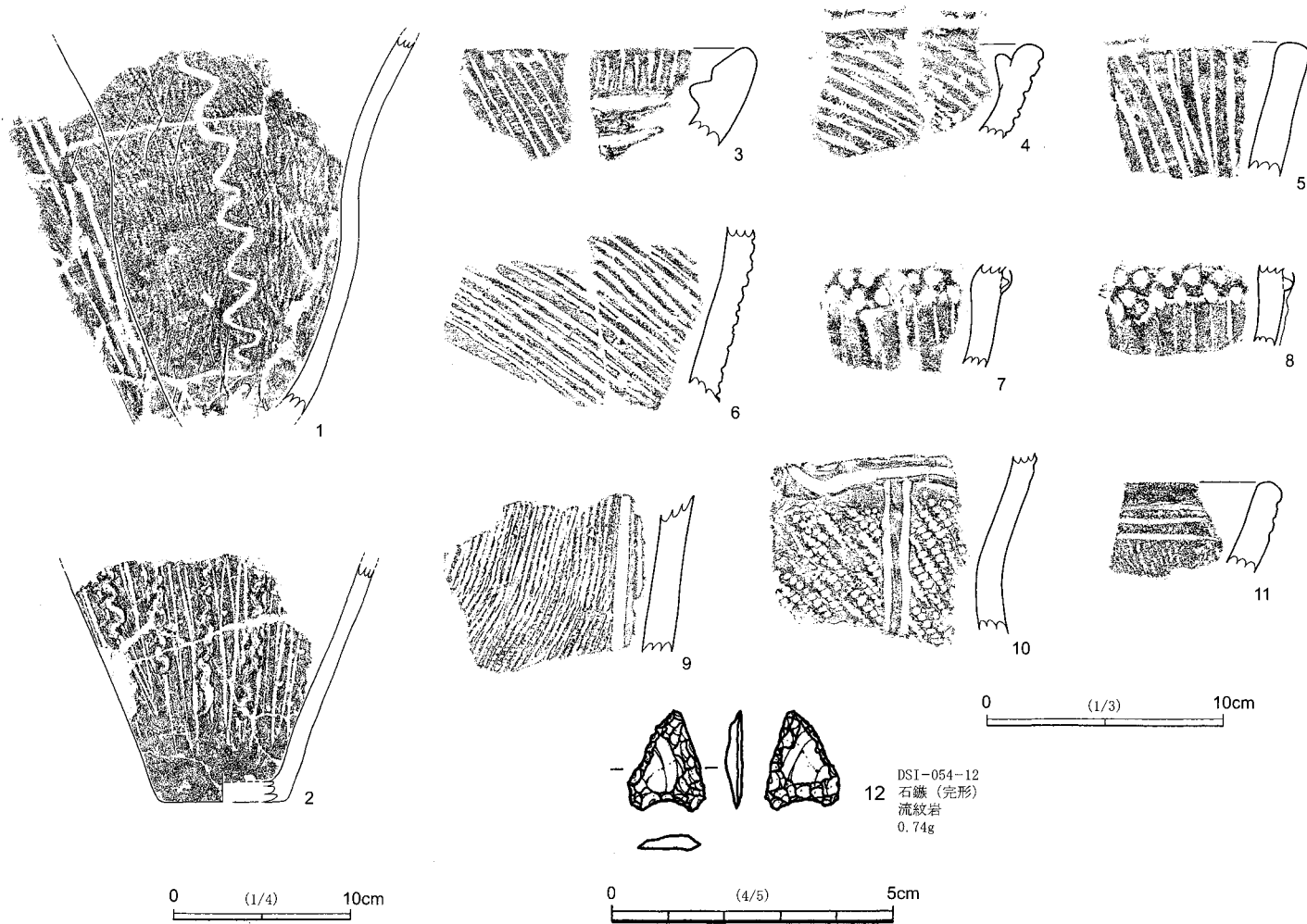
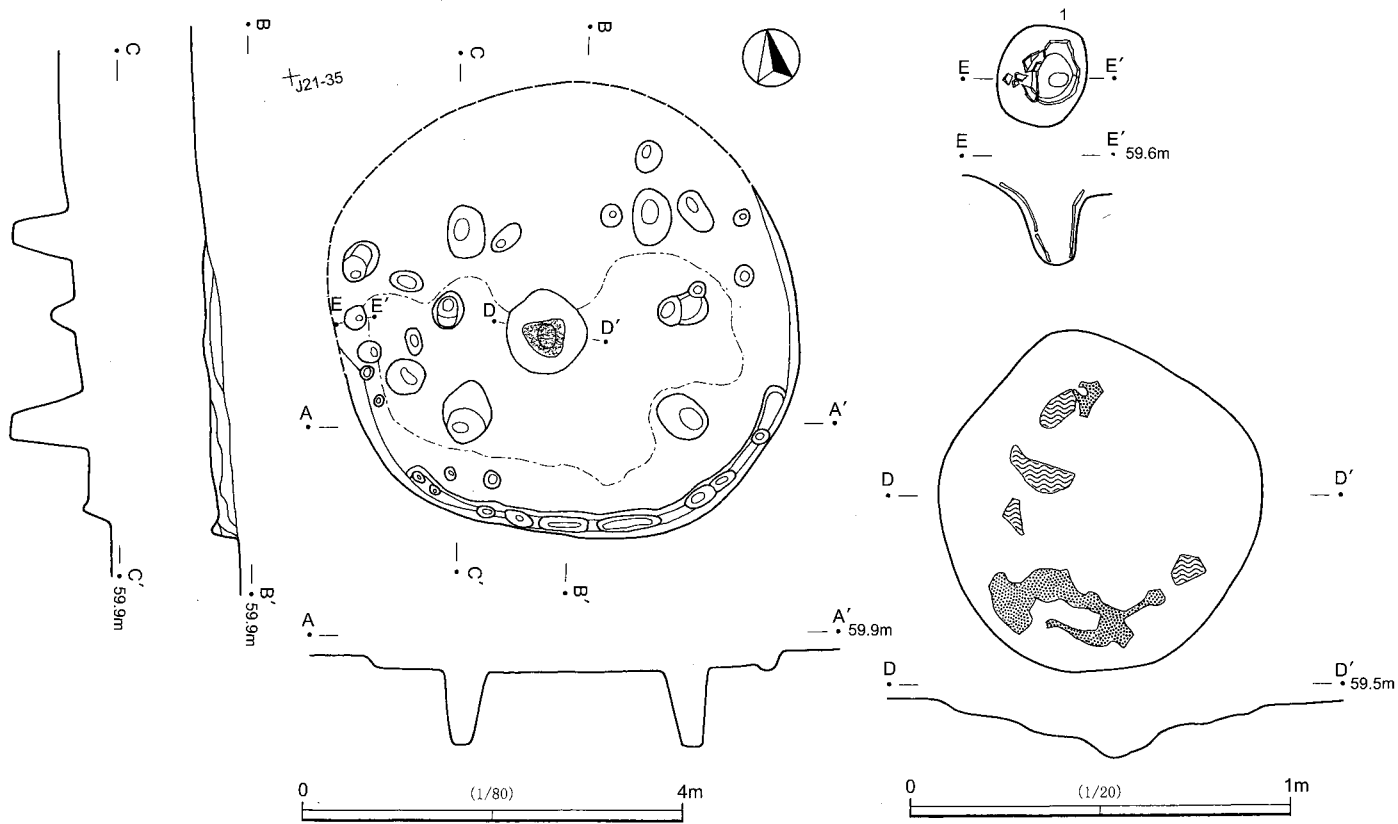


第79図 SI-047 (1)





第80图 SI-047 (2)



第81圖 SI-054

付近には土器が埋設されたピットが検出されており、出入口にあたる可能性が強い。

遺物は少なく、加曽利E式と曾利系土器が出土する。1・9～11は加曽利E式のキャリパー形深鉢である。1は西側ピットに埋設されていたもので、3本一組の沈線と蛇行する沈線とがそれぞれ3単位ずつ垂下される。9・10は胴部、11は口縁部で、10では沈線に区画された幅の狭い磨消縄文が垂下される。2～8は曾利系土器である。2は深鉢の胴部から底部で、半裁竹管による縦位の沈線を地文として蛇行沈線が垂下される。3～8は籠目文土器である。3・4は口縁内側に隆起線が貼り付けられ、口唇上にも半裁竹管が施されるが、5は直線状に立ち上がるのみで、口唇上も無文である。6は口縁直下であろう。7・8は胴部で、円形の交互刺突を伴う隆起線が横位に配され、その下は縦位の沈線を地文として蛇行隆起線が配される。12は石鏃で、厚みのない剥片を素材として、周縁部に調整加工が施されている。脚部の抉りは浅い。

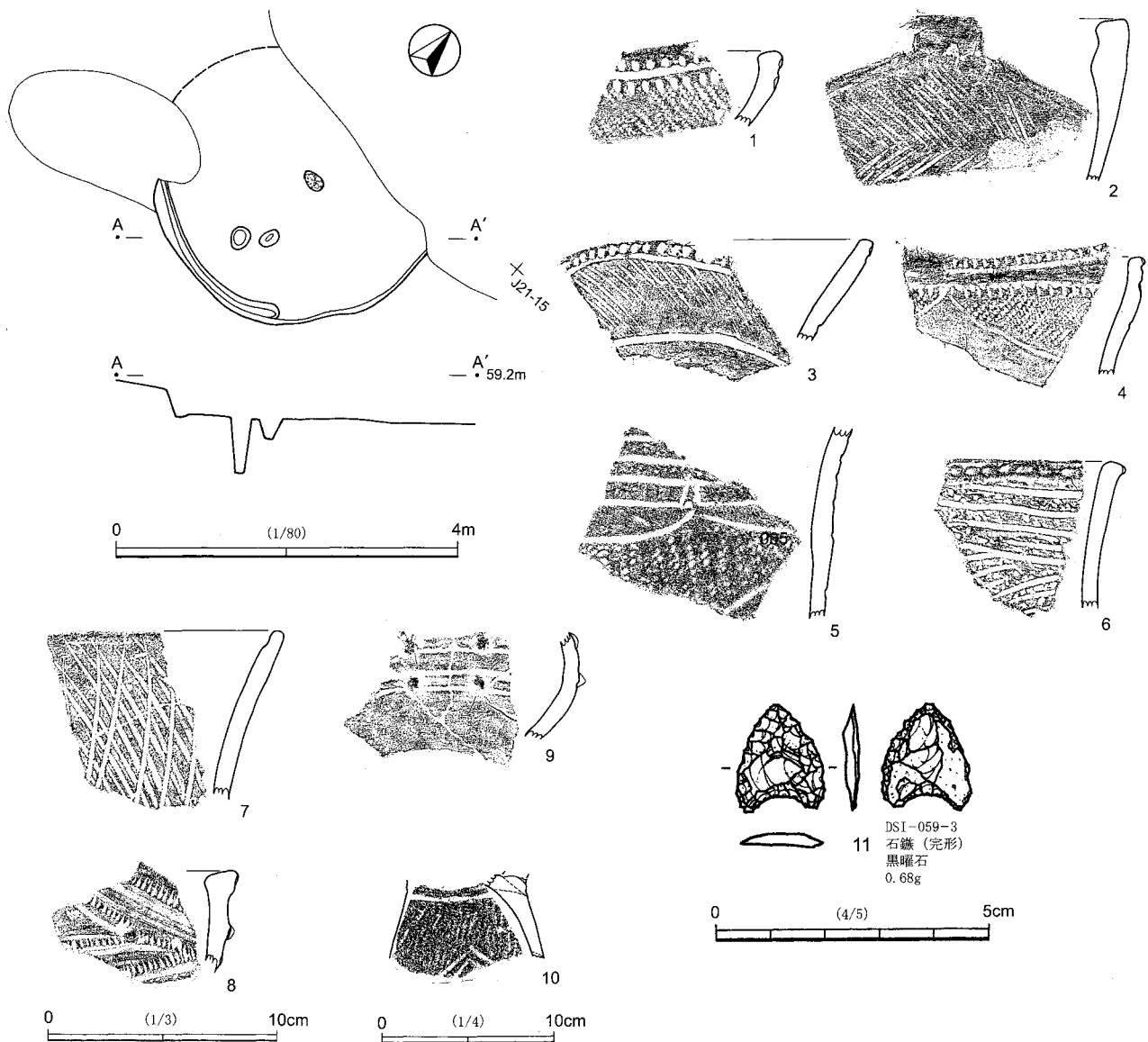
#### SI-059 (第82図, 図版64)

J21-13・14・23・24グリッドに位置する。斜面に位置するため床面のほとんどが流失している。SI-064住居跡、SK-040土坑に切られるが、全体の3/4程度が遺存しており、ある程度復原が可能である。楕円形を呈し、主軸長は残存部で2.6m、推定3.2m、横軸長は3.4m、主軸方位はN-167°-Wである。覆土は記録されていないため詳細は不明であるが、確認面から最深30cm程度と推測される。住居南側に直径20cm、深さ70cmのピットが存在するが、他に柱穴らしいピットは検出されない。南側の壁に沿って周溝が検出されるが、全周しないようである。炉跡は住居中央よりやや北側に構築されるが、大部分が流失しており、25cm×15cm程度の範囲に焼土が散布するのみである。

遺物は少ない。加曽利B3式を中心とする。1～4は波状口縁の精製深鉢である。1は口唇直下に沈線をはさんで2列の刺突列が巡る。2は方形突起をもつ深鉢口縁で、横位の羽状沈線を口縁部に配する。3は口唇に沿って沈線で区画された刺突列が巡り、その下にやはり沈線で区画された斜行沈線が配される。4は口唇に沿って無文帯をはさんだ2列の刻みが巡り、その下側に弧線で区画された磨消縄文が配される。弧線と刻みが接する部分の口唇上に、小さな瘤が貼り付けられる。5は深鉢頸部で、口縁側に横位の平行沈線と「ハ」の字状刺突、胴部側に弧線で区画された磨消縄文が配される。6は粗製土器で、縄文地文に斜行条線が施される。紐線は断面三角形で指頭押圧は小さく浅い。5・6は加曽利B2式であろう。7は斜格子状沈線が配される深鉢口縁で、沈線は頸部側を起点とする。8は波状口縁の深鉢で、刻目文帯が口唇唇いおよび三角形区画状に配される。刻目文帯の合流点には円形瘤が貼り付けられる。安行2式である。9は2本一組の沈線が横位に2組配され、等間隔で円形瘤が貼り付けられるもの。壺形土器か（上下逆かもしれない）。10は台付土器の脚部で、連弧状の沈線に区画された磨消縄文が施される。11は厚みのない剥片を素材として、周縁部に調整加工が施され、脚部の抉りは浅い。

#### SI-061 (第83・84図, 図版37・57・64・65)

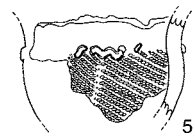
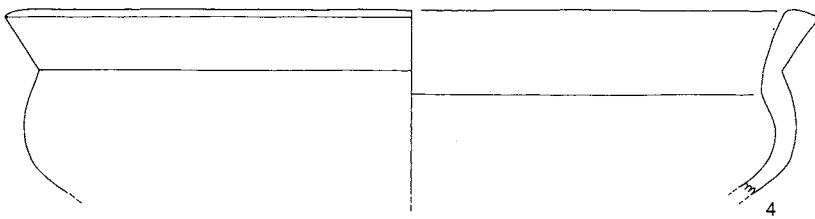
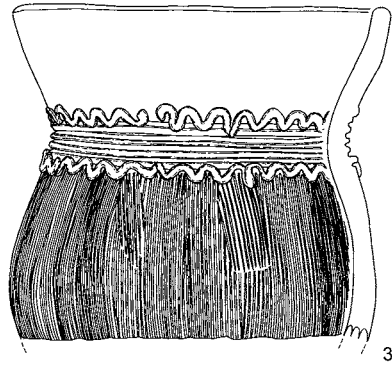
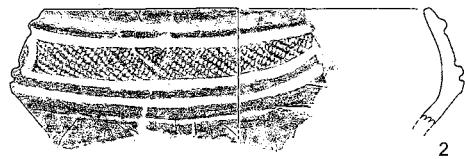
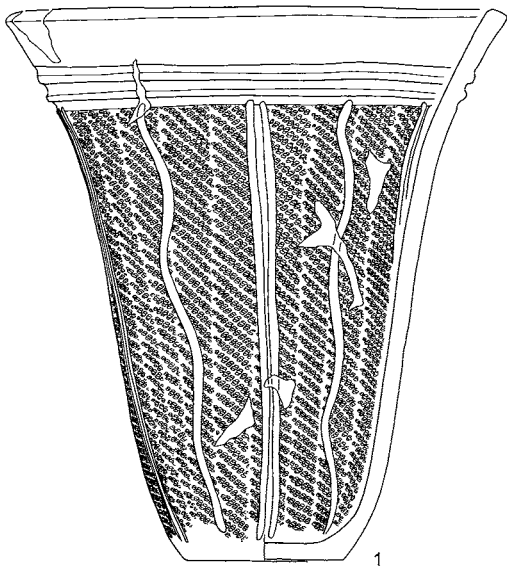
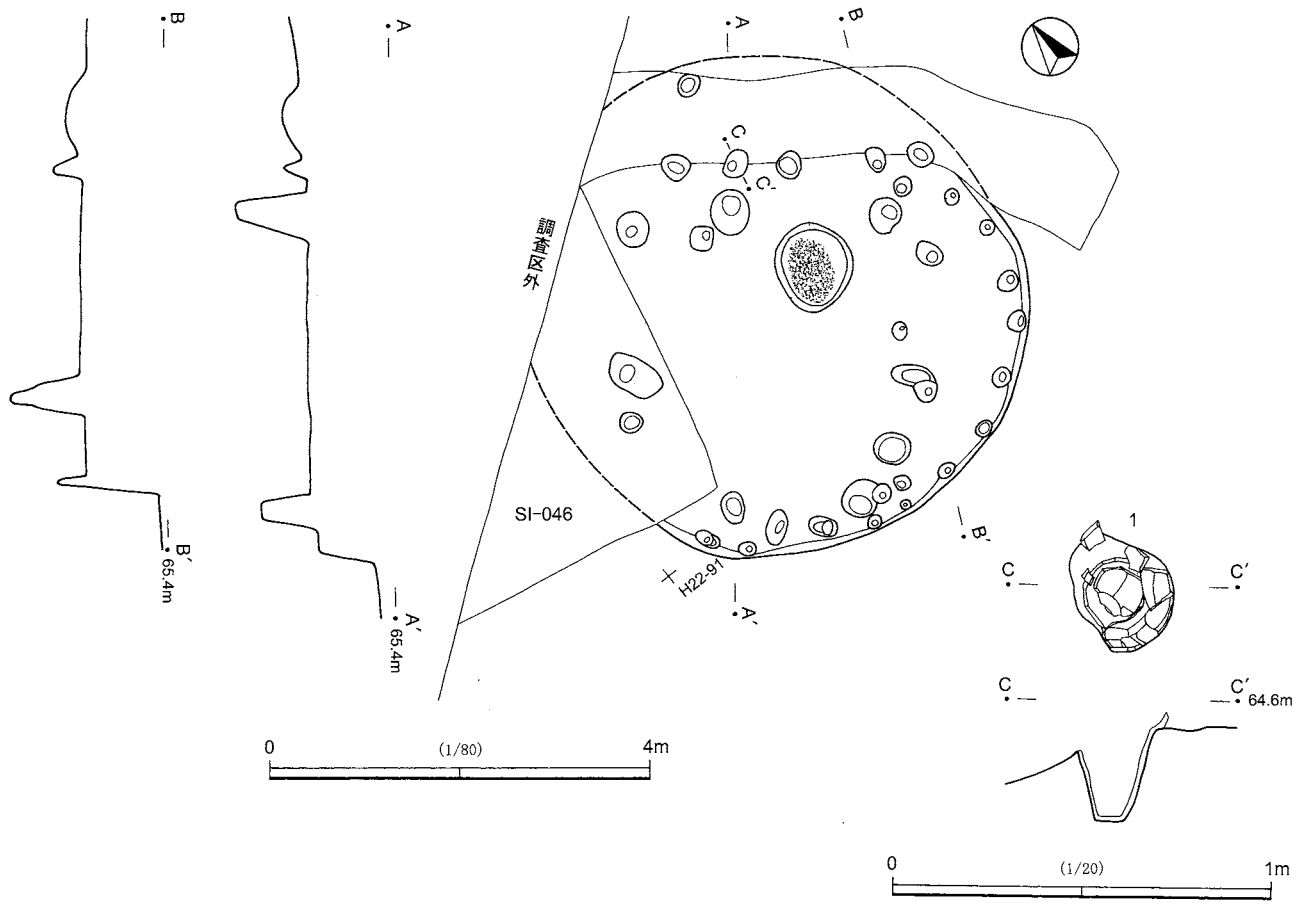
H22-71・72・73・81・82・83・91・92・93グリッドに位置する。SI-046住居跡や近世の柵列に切られるほか、北側は斜面で流失するが、ある程度復原が可能である。楕円形を呈し、主軸長約5.4m、横軸長約5.1m、主軸方位N-170°-Eである。覆土は記録されていないため詳細不明であるが、確認面からの深さは70cmを測るところもある。床面からは直径40cm、深さ60cm～80cmのピットが数基検出されており、主柱穴と考えられる。壁に沿って小ピットが多数検出されており、壁柱穴であろう。炉跡は住居中央やや東側に構築され、直径90cmの皿状を呈する。炉跡の北側には埋設土器が検出されているが、柵列構築時に一



第82図 SI-059

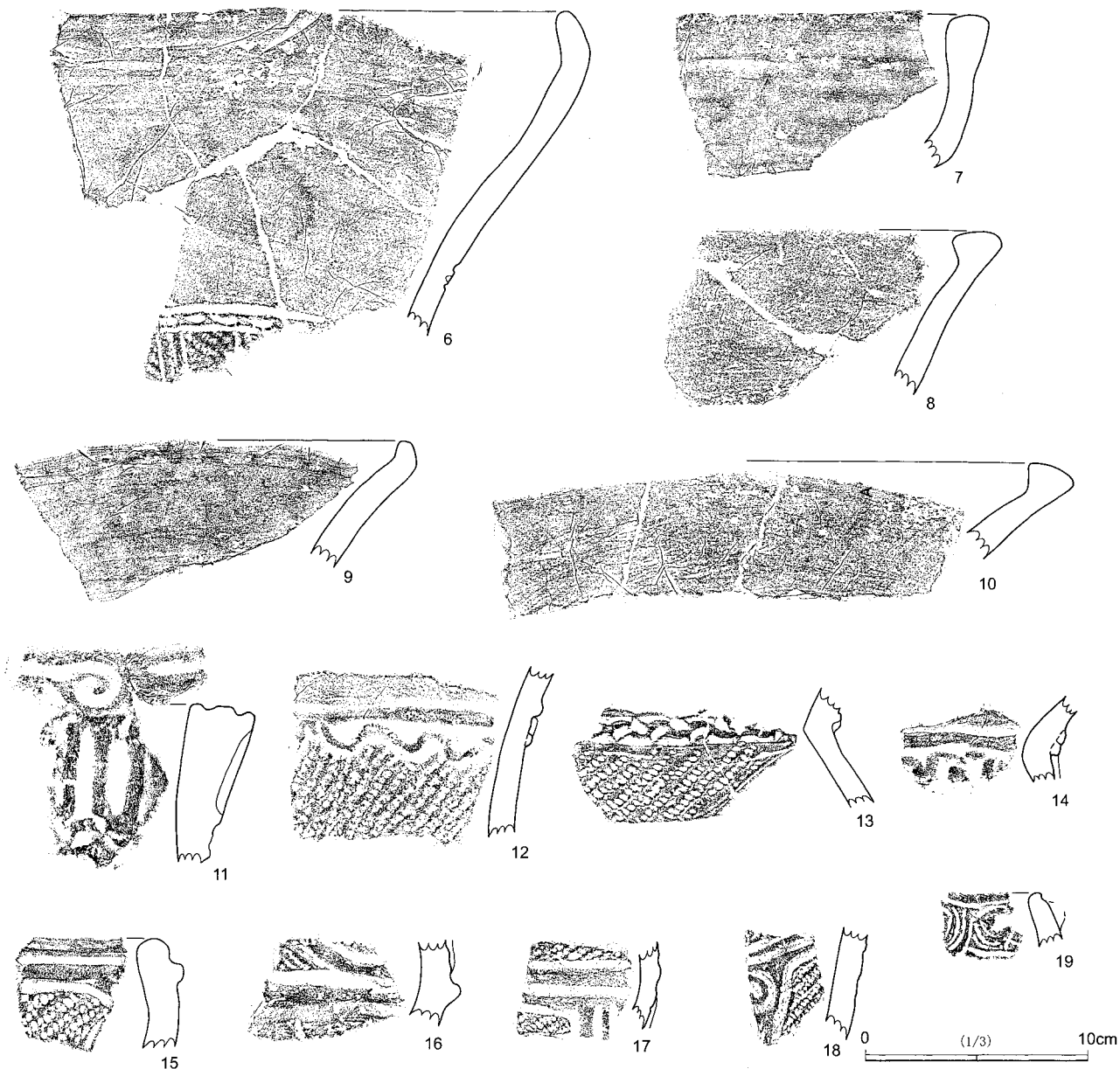
部破壊されている。

遺物は比較的多く出土した。加曽利E式および曾利系の土器が主体である。加曽利E式も典型的なキャリパー形土器が極めて少ないのを特徴とする。石器は石鏃製作に関連する遺物が1,053点出土しており、3. 石鏃製作関連遺構において記載する。1は埋設されていた深鉢で、口縁が外反する器形を呈する。口縁部は無文帯となっており、下側は2本の隆起線で区画される。胴部側は、縄文地文に2本一組の沈線と蛇行沈線が5対垂下される。6は同様の器形を呈する深鉢口縁部で、頸部に沈線で区画された刺突列が横位に巡り、胴部は縄文地文に縦位の沈線が施される。2は加曽利E式の浅鉢で、内傾する口縁部に隆起線で区画された縄文帯が配される。3・5・12~14は曾利系土器である。3は頸部がやや強くくびれ、胴部が強く張る器形を呈する深鉢である。口縁部は無文となっており、頸部は半裁竹管による4条の沈線が横位に巡り、それをはさんで蛇行隆起線が上下に2条配される。胴部側は櫛羽状工具による条線が縦位に施される。5は小形深鉢で、頸部に蛇行隆起線が1条横位に巡る。12~14は深鉢の頸部で、12・14は水平の



0 (1/4) 10cm

第83図 SI-061 (1)



第84図 SI-061 (2)

隆起線と蛇行する隆起線が1本ずつ貼り付けられる。12は1のような直立し外反する器形を、14は3のようなくびれをもつ器形を呈すると推測される。13は交互刺突を伴う隆起線が横位に配される。4・7は大形の浅鉢である。4は頸部が強く屈曲し口縁部が外反する。7は屈曲がやや弱い。8～10は深鉢口縁部で、いずれも無文の口縁部が強く外反し、口唇が内側へ肥厚もしくは内傾する。11・15～17・19はキャリパー形深鉢の口縁部文様帯で、隆起線による区画が発達する。11は突起で、表側に3本の隆起線が縦に貼り付けられ、上には沈線で渦巻きが描かれる。19は円形の貼付瘤を中心に、同心円状に沈線が配される。18は胴部で、渦巻き文が確認される。

SI-067 (第85図, 図版65)

J20-44・45・52～56・62～66・73～75グリッドに位置する。壁・床面が検出されず、炉跡とピットの配置から住居跡のプランを推定復原したものである。規模や形状は不明なため、部分的な所見を記述するにとどめたい。遺構は南北5.0m、東西7.8mの範囲に分布する。西側は調査区外、北側はSI-058、SI-060の各住居跡に切られるため、規模はさらに大きい。直径25cm～90cmの大小様々なピットが検出されているが、具体的に柱穴を特定するのは困難である。焼土の集積が2カ所から検出されている。いずれも直径40cm程度を測るが、炉跡か否かは不明である。

この遺構に供伴することが確実な遺物を抽出することは、極めて困難であった。1は土製円盤の破片とみられる遺物で、全体の約3分の2を欠損する。打ち欠きによる成形の後研磨調整されているが、研磨は一部にとどまっている。

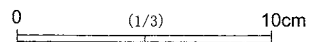
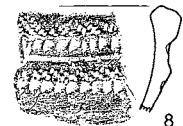
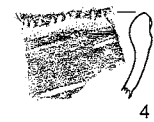
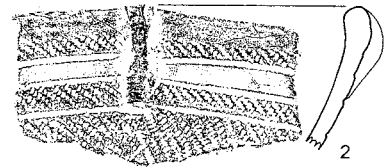
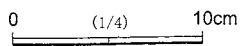
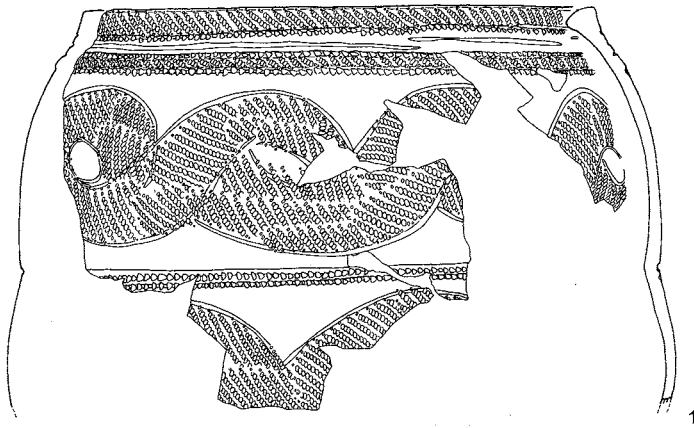
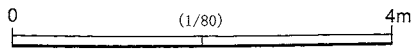
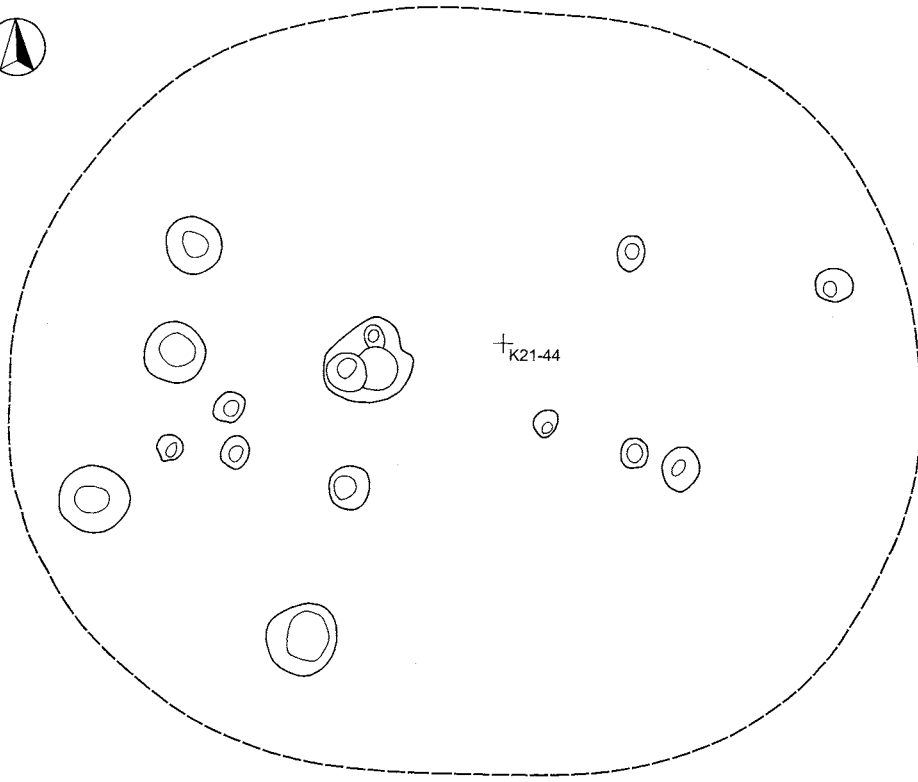
SI-069 (第86図, 図版57)

この住居跡は、調査時SK-023～028・030～037とされた小ピットを統合し、1軒の竪穴住居跡としたものである。グリッド名でいえばK21-32～35・41～45・51～53にあたる。ピットは南北5.0m、東西9.0mほどの範囲に分布する。とりあえず主軸長9.7m、横軸長8.2mの楕円形に復原した。ピットの規模や配置はやや不規則で、支柱穴を特定することはできない。炉跡は検出されなかった。

遺物はそれぞれのピットから出土したもので、後期後葉の安行1式が主体である。1は安行1式のいわゆる瓢形の深鉢である。口縁部に2段の隆起縄文帯、その下側に樽掛け状の磨消縄文を配する。胴部中央に2列の刻み目を巡らせ、その下側はおそらく相互入り組み状の磨消縄文を配する。2・5は平口縁精製



第85図 SI-067



第86图 SI-069



深鉢，7・8は瓢形の深鉢で，これらも安行1式である。3は遠部第2類型の浅鉢で，加曾利B2式に相当するもの。4は口唇部がやや屈曲し刻み目が配されるもので，加曾利B3～曾谷式か。6は縄文地文に斜格子状沈線が施されるもので，加曾利B2式に相当する粗製土器であろう。9は籠目文土器の口縁部である。

## 2. 土坑

### SK-011 (第87図, 図版38・65)

K22-83・84・93・94区に位置する。長軸170cm×短軸140cmの楕円形を呈し，主軸方向はN-40°-Wである。覆土は確認面からの深さ45cmを測るが，堆積状況は記録がないため不明である。

遺物のごく少ない。1は後期中葉の粗製深鉢で，小波状を呈する。縄文地文にやや密な条線が横位に施される。2はやはり粗製深鉢の胴部で，くびれない胴部に紐線文が横位に配される。紐線文上側は剥落が著しく文様は不明であるが，形状からは後期後葉と推測される。

### SK-014 (第87図, 図版65)

J22-07・08区に位置する。長軸150cm，短軸70cmの長楕円形を呈し，主軸方向はN-63°-Wである。深さは確認面から125cmと深く，底面にはさらに直径10cm，深さ40cmの小ピットが2基検出される。形状などから陥穴と考えられるが，覆土の堆積状況は記録がないため不明である。

遺物は少ない。1～3はいずれも撚糸文土器である。いずれも口縁形状はほぼ直線であり，肥厚もほとんどみられない。撚糸原体はかなり間隔があいており，また，施文単位もかなり間をおいている。夏島式であろう。

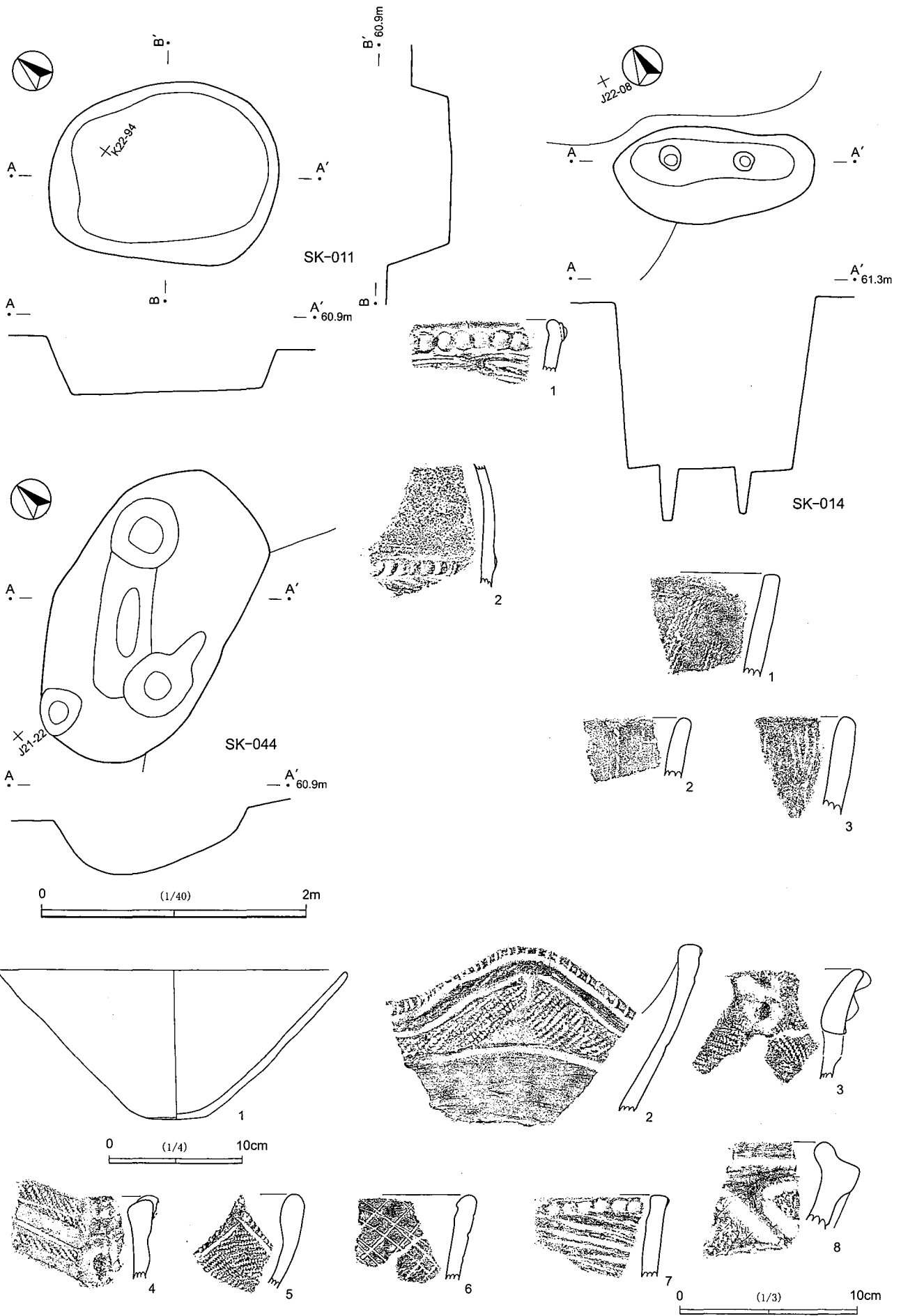
### SK-044 (第87図, 図版38・65)

J21-12・22区に位置する。長軸235cm，短軸130cmの長楕円形を呈し，主軸方位はN-70°-Eである。深さはエレベーション図では45cmであるが，坑底に起伏が多く安定しないため正確には不明である。覆土の堆積状況は記録がないため不明。

遺物は後期後葉を中心としている。1は無文の浅鉢で，小振りな底部からほぼ直線状に開く器形を呈する。2は波状口縁の深鉢で，口唇に沿って沈線区画の刻目列が巡り，無文帯をはさんで縄文帯が配される。波頂部直下に沈線や縄文を消すように，ケズリ状の調整痕が観察される。瘤状の物体を剥がしたようにもみられるが，性格は不明である。3・4は安行1式の波状口縁深鉢で，同一個体であろう。5は波状口縁の深鉢で，波頂部は尖頭状を呈する。口唇に沿って沈線区画の刺突列と縄文帯が配される。6は斜格子状の沈線文が施される平口縁深鉢である。沈線の起点は頸部である。7は紐線文の粗製深鉢で，縄文は施されず条線のみが密に施される。8は加曾利E式の深鉢口縁部で，摩滅が顕著である。混入品であろう。

## 注

- 1 この住居跡および釣手土器の記載に関しては，小林清隆他2002「縄文後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器―鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介―」『研究連絡誌第63号』財団法人千葉県文化財センターを参考にした。



第87图 SK-011 · 014 · 044

### 3. 石鏃製作関連遺構

住居跡覆土中から多量の石鏃と碎片・剥片が出土した遺構が、調査区南西部に6軒まとまって出土した。出土状況は、床面直上から出土したものはほとんどなく、壁際や床面に覆土が堆積した上から出土している。また、南西から北東に傾斜したやや急な斜面に立地しており、遺物分布は斜面上部にあたる南西側に集中して出土している傾向がみられる(第88図)。住居の構築時期は、埋設土器等の特徴から、中期の加曽利E1~2期に比定される。さらに、本遺跡の土器分類によると、中期仮II期・III a期・III b期の3期に細分される。その時期別の内訳は、仮II期がSI-014・017・036・061の4軒、仮III a期がSI-038の1軒、仮III b期がSI-037の1軒である(第221・224図)。出土状況や遺物組成から、これらの6軒の石器は、石鏃製作に関連した遺構である可能性が高いので、石鏃製作関連遺構としてまとめて石器の記載をすることにする。詳細な検討と総括については、第4章の第2節において記載した。

6軒の遺物組成は第4~6表のとおりである。遺物総数3,943点で、石器3,587点・土器356点出土し、圧倒的に石器の出土点数が多い。器種組成の特徴は、まず、石鏃(完形)33点・石鏃(欠損)49点・石鏃未製品58点で、石鏃製品に関連する器種が140点であり、欠損品と未製品の割合が高いことがあげられる。次に、剥片1,863点(51.94%)・碎片1,436点(40.01%)で剥片・碎片の点数組成は91.95%もの高い割合を示す。これらの器種組成からも石鏃製作に関連する遺物のまとまりとしてとらえられる。その他の器種の特徴は、石核が5点しか出土しておらず、しかも、SI-061のみからの出土であることがあげられる。礫石器は打製石斧6点・磨製石斧4点・敲石5点できわめて少ない。石材組成の特徴は、黒曜石が3,407点で94.98%もの高い割合を示すことがあげられる。原石産地の同定は行っていないが、肉眼観察によるとほとんどのものが神津島産のものと思われる。石鏃に関連する石材は、玉髓(メノウ含む)・チャート・

第4表 石鏃製作関連遺構遺物組成表

器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製品	二次加工のある 剥片	石核	剥片	碎片	打製 石斧	磨製 石斧	敲石	礫	礫片	石器 総数	石器 組成比 (%)	土器	遺物 総数
	黒曜石	32	46	55	11	5	1824	1434						3,407	94.98	
流紋岩	16.86	24.22	54.12	31.79	16.62	635.88	45.53						825.02	5.33		
安山岩			1			7.14			1	2	8	34	47	1.31		47
頁岩			10.88						23.76	679.4	973.98	4,617.34	6,312.50	40.79		
真岩				1		12		2	1			1	17	0.47		17
ホルンフェルス				6.47		39.07		224.43	22.94			13.49	306.4	1.98		
チャート						5						2	7	0.20		7
玉髓(メノウ含む)				4.91								10.26	15.17	0.10		
砂岩			1	1		12	1	2	1	1		12	31	0.86		31
石英斑岩			6.31	14.13		169.99	0.23	120.38	34.33	50.67		1,799.31	2,195.35	14.19		
蛇紋岩		2	1			5				1	12	9	30	0.84		30
銅数合計		1.94	6.12			10.79				460.38	1,382.54	264.9	2,126.67	13.74		
重量合計		2.17	1.34							2.52			6.03	0.04		
石器点数組成比(%)	0.92	1.37	1.62	0.36	0.14	51.94	40.01	0.17	0.11	0.14	0.75	2.48	100.00			
石器重量組成比(%)	0.12	0.18	0.50	0.34	0.11	5.66	0.30	3.48	1.75	13.12	18.21	56.24	100.00			

[上段: 点数、下段: 重量(g)]

ホルンフェルスがあげられる。このうち、玉髓（メノウ含む）は総数3点のうち2点が石鏃であることから、製品として搬入されたことが推定され、黒曜石が本遺跡において製作されたことが推察されることと、対照的な様相を示す。6軒それぞれの出土遺物の特徴を明記し、各遺構で対比させ、共通点と相違点を検討することにする。

第5表 石鏃製作関連遺構別器種組成表

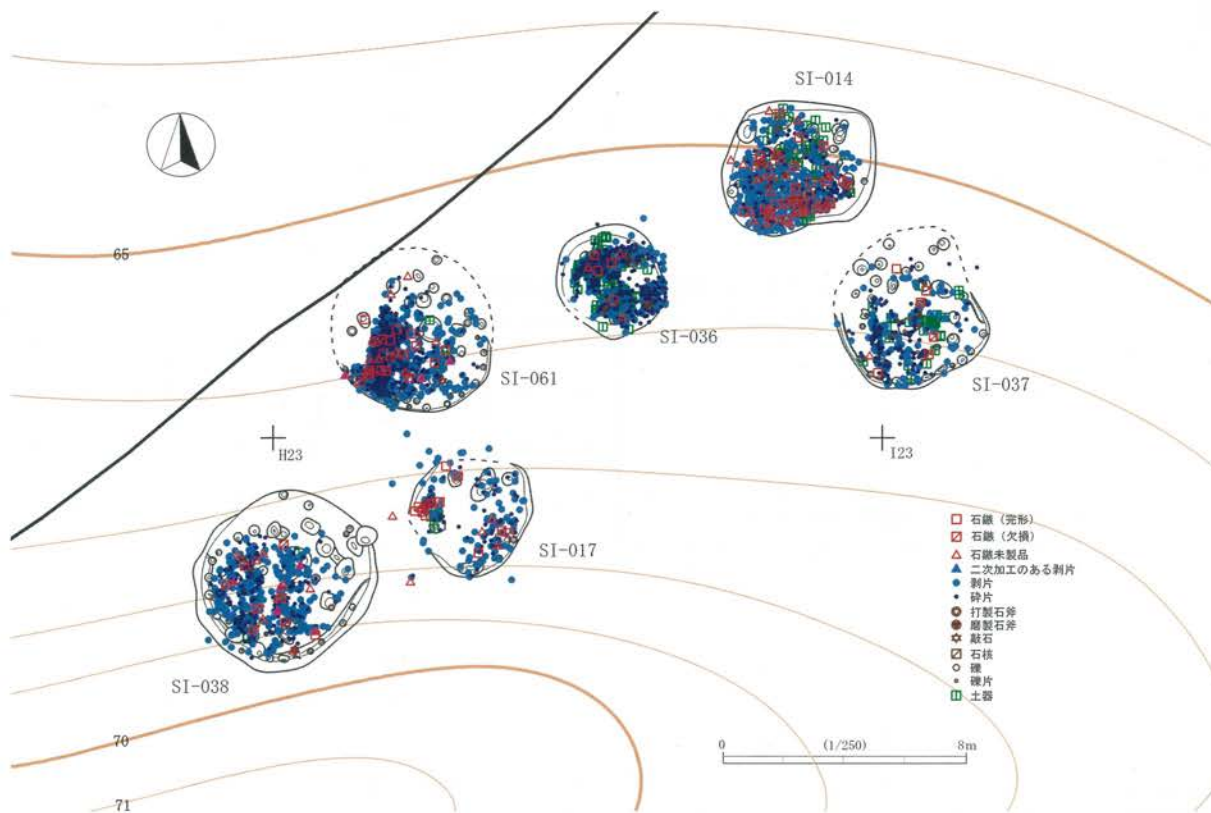
器種 遺構	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製品	二次加工 のある剥片	石 核	剥 片	砕 片	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	敲 石	礫	礫 片	石 器 総 数	石器 組成比 (%)	土 器	遺 物 総 数	
S I - 0 1 4	11 4.42	22 10.73	25 25.72	3 21.36		599 251.32	317 14.41	2 133.43	2 58.09	2 406.83	12 513.35	29 2,369.97	1,024 3,809.63	28.55 24.62	99	1,123	
S I - 0 1 7	5 2.97	6 2.98	9 8.7			146 45.13	115 2.97					2 42.08	283 104.83	7.89 0.68	8	291	
S I - 0 3 6	3 1.19	1 0.28	3 6.97			165 43.36	322 5.62	2 121.72		1 460.38	7 234.07	7 568.66	515 1,442.25	14.36 9.32	206	721	
S I - 0 3 7	3 1.34	3 1.68	1 0.47			116 47.72	124 2.07	1 142.82	2 213.02			3 449.59	27 3,053.27	280 3,911.98	7.81 25.28	30	310
S I - 0 3 8	2 1.25	8 6.19	9 23.71	6 17.45		269 247.84	134 4.59	1 140.51		1 323.24	3 1,290.15	5 773.37	438 2,828.30	12.21 18.27	7	445	
S I - 0 6 1	9 7.86	9 5.64	11 11.86	4 13.58	5 16.62	568 240.3	423 16.1			1 840	2 331.45	15 1,896.07	1,047 3,379.48	29.19 21.84	6	1,053	
個数合計	33	49	58	13	5	1,863	1,435	6	4	5	27	89	3,587	100.00	356	3,943	
重量合計	19.03	27.5	77.43	52.39	16.62	875.67	45.76	538.48	271.11	2,030.45	2,818.61	8703.42	15,476.47	100.00			
石器点数組成比 (%)	0.92	1.37	1.62	0.36	0.14	51.94	40.01	0.17	0.11	0.14	0.75	2.48	100.00				
石器重量組成比 (%)	0.12	0.18	0.50	0.34	0.11	5.66	0.30	3.48	1.75	13.12	18.21	56.24	100.00				

[上段：点数、下段：重量 (g)]

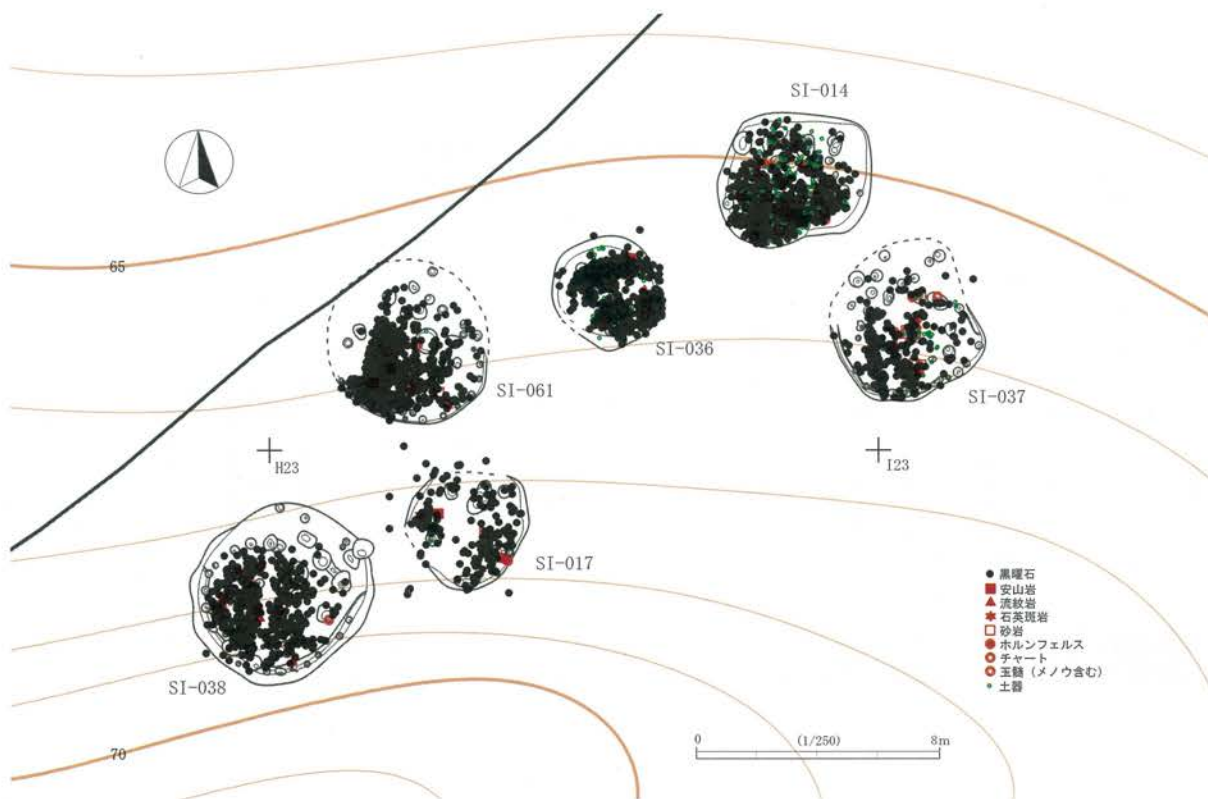
第6表 石鏃製作関連遺構別石材組成表

石材 遺構	黒 曜 石	流 紋 岩	安 山 岩	頁 岩	ホル ン フ ェ ル ス	チ ヤ ト	玉 髓 (メ ノ ウ 含 む)	砂 岩	石 英 斑 岩	蛇 紋 岩	石 器 総 計	石器 組成比 (%)	土 器	遺 物 総 数
S I - 0 1 4	959 266.88	23 2,166.91	4 25.75	2 0.39	13 569.25	12 276.88	1 2.52	10 501.05			1,024 3,809.63	28.55 24.62	99	1,123
S I - 0 1 7	276 54.18		1 1.34		3 5.8			1 1.43	2 42.08		283 104.83	7.89 0.68	8	291
S I - 0 3 6	490 44.89	5 422.09	4 90.14	1 0.82	3 48.5	6 677.38		5 150.11	1 8.32		515 1,442.25	14.36 9.32	206	721
S I - 0 3 7	237 34.5	6 1,343.55	2 36.43	4 13.96	6 832.05	5 228.1		19 1233.31	1 190.08		280 3,911.98	7.81 25.28	30	310
S I - 0 3 8	421 139.3	6 1,398.28	3 141.77		1 140.53	4 727.39	1 1.34	2 279.69			438 2,828.30	12.21 18.27	7	445
S I - 0 6 1	1,024 285.27	7 981.67	3 10.97		5 599.22	3 216.92	1 2.17	4 1,283.26			1,047 3,379.48	29.19 21.84	6	1,053
個数合計	3,407	47	17	7	31	30	3	41	3	1	3,587	100.00	356	3,943
重量合計	825.02	6,312.50	306.4	15.17	2,195.35	2,126.67	6.03	3,448.85	50.4	190.08	15,476.47	100.00		
石器点数組成比 (%)	94.98	1.31	0.47	0.20	0.86	0.84	0.08	1.14	0.08	0.03	100.00			
石器重量組成比 (%)	5.33	40.79	1.98	0.10	14.19	13.74	0.04	22.28	0.33	1.23	100.00			

[上段：点数、下段：重量 (g)]



器種別分布図



石材別分布図

第88図 石鏃製作関連遺構遺物分布図

SI-014 (第89~91図, 図版33・66, 第7表)

**遺物組成** 遺物総数1,123点で, 石器1,024点・土器99点出土した。中期仮Ⅱ期に比定される。SI-061に次いで二番目に出土点数が多い。石鏃製品に関連する遺物は, 石鏃(完形)11点・石鏃(欠損)22点・石鏃未製品25点で総計58点出土しており, 石材はそのうち黒曜石が57点用いられており, チャートが1点のみである。礫石器は, 打製石斧2点・磨製石斧2点・敲石2点であり, 流紋岩・ホルンフェルス・砂岩が主に用いられている。

**出土状況** 平面分布は, 住居跡の南西部に集中して分布している。垂直分布状況は, EPB~EPB'において, 南側の壁際と床直上からは遺物が出土しておらず, 覆土下部から上部にかけてほぼ均質に出土している。他のセクションにおいても, 同様の垂直分布を示す。また, 石鏃などの製品と剥片・碎片の分布状況も混在した状況で出土しており, 器種や石材によって偏った分布状況を示していない。土器の分布は, 住居跡中央部に集中地点がみられ, 垂直分布もやや下部に集中しており, 石器とやや異なる出土状況である。これらの出土状況から, 石器は住居の機能時に残されたものではなく, 住居廃絶後に, 壁際と床面に土壌が堆積した後に, 廃棄されたものである可能性が高い。廃棄方向は, 斜面上部の南西部から投棄されたものと推定される。他の5軒の遺物の出土状況も同様の傾向がみられる。

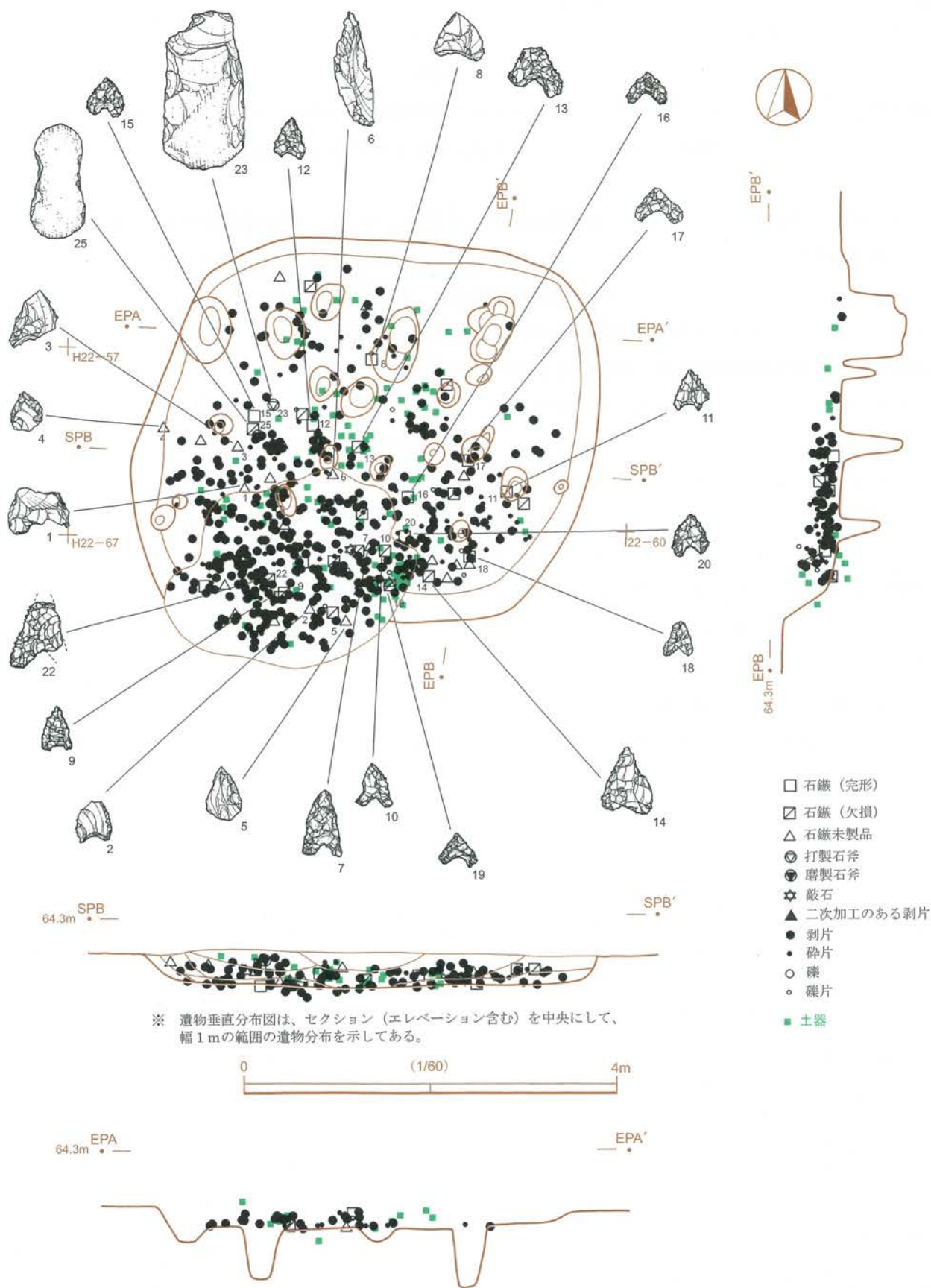
また, 南西部に風倒木とされる約2m前後の不定形な掘り込みがみられるが, 遺物がこの掘り込み内全域にほぼ均等に出土していることから, 人為的な掘り込みである可能性もある。風倒木痕であるとしたら, 遺物分布が均等にはならず, 片側半分では, 倒木に伴う下層の土壌が巻き上げられることで, 通常は遺物空白部となる。この掘り込みが人為的なものとするれば, 住居内に投棄された石器を再度利用するために, 掘りおこした可能性もある。

**出土石器** 1~7は石鏃未製品である。1~5は厚みのない小型幅広剥片を素材として, 打面部付近を折断により成形後に, 厚みを減少するような調整加工が施されている。特に2~4の素材の用い方は, 斜軸に素材を用いて, 右側縁に素材の末端部を用いて, 細かい調整加工を施して, 先端を尖らせている。また, 左下部に素材の打面部を用いている。サイズも小型で共通している。この素材の用い方と製作技術が

第7表 SI-014遺物組成表

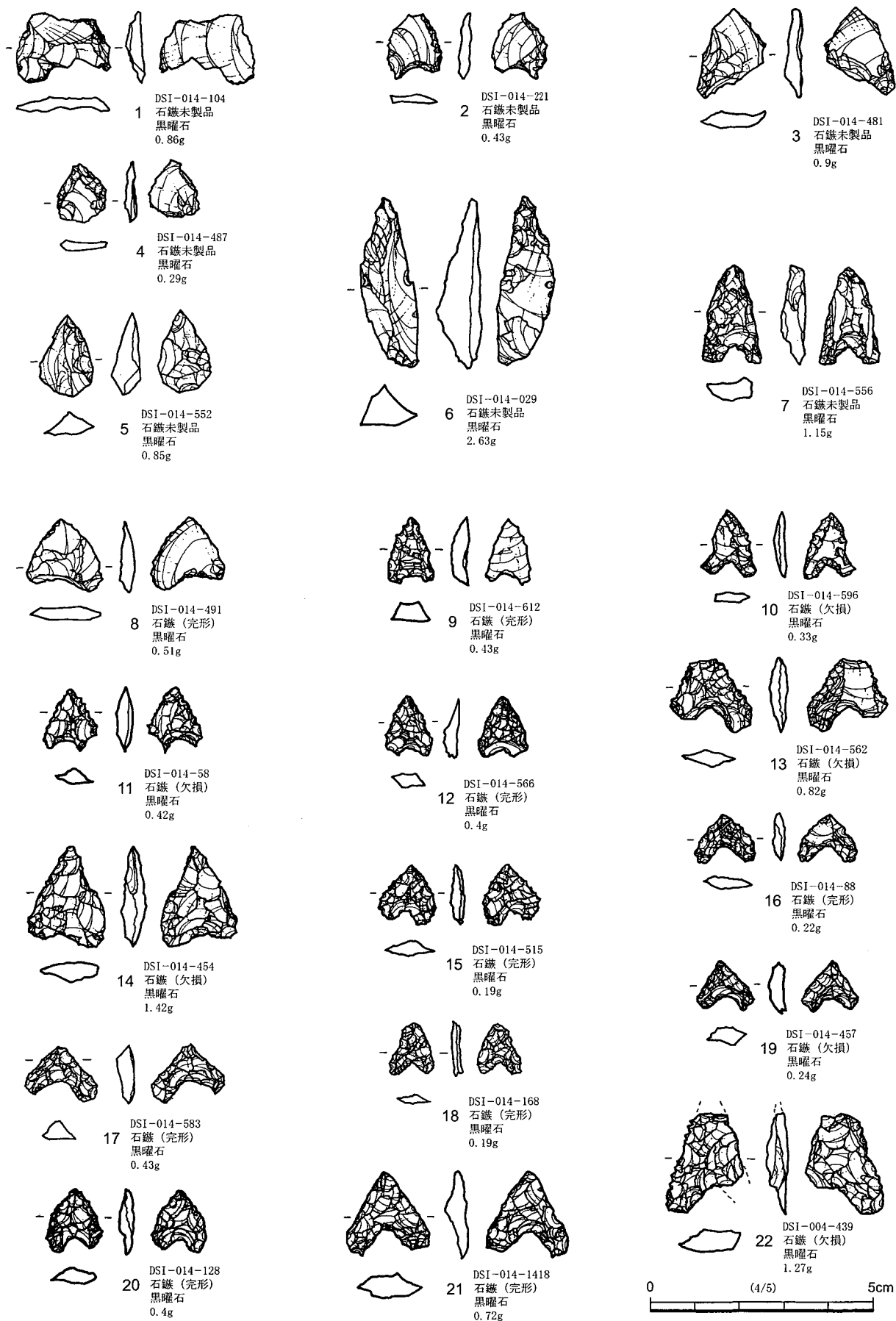
器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製品	二次加工 のある剥片	剥片	碎片	打製 石斧	磨製 石斧	敲石	礫片	石器 総数	石器 組成比 (%)	土器	遺物 総数
黒曜石	11 4.42	21 10.39	25 25.72	2 7.23	584 204.94	316 14.18					959 266.88	93.65 7.01		959 266.88
流紋岩					1 7.14			1 23.76	1 356.16	5 386.43	15 1,393.42	23 56.88		23 2,166.91
安山岩					4 25.75						4 25.75	0.39 0.68		4 25.75
頁岩					2 0.39						2 0.39	0.20 0.01		2 0.39
ホルンフェルス				1 14.13	5 8.73	1 0.23	1 82.58	1 34.33	1 50.67		3 378.58	13 569.25	1.27 14.94	13 569.25
チャート		1 0.34			3 4.37					3 54.15	5 218.02	12 7.27		12 276.88
玉髄(メノウ含む)										1 2.52		0.10 0.07		1 2.52
砂岩							1 50.85			3 70.25	6 379.95	10 13.15		10 501.05
個数合計	11	22	25	3	599	317	2	2	2	12	29	100.00	99	1,123
重量合計	4.42	10.73	25.72	21.36	251.32	14.41	133.43	58.09	406.83	513.35	2,369.97	100.00		
石器点数組成比(%)	1.07	2.15	2.44	0.29	58.50	30.96	0.20	0.20	0.20	1.17	2.83	100.00		
石器重量組成比(%)	0.12	0.28	0.68	0.56	6.60	0.38	3.50	1.52	10.68	13.48	62.21	100.00		

[上段: 点数, 下段: 重量(g)]



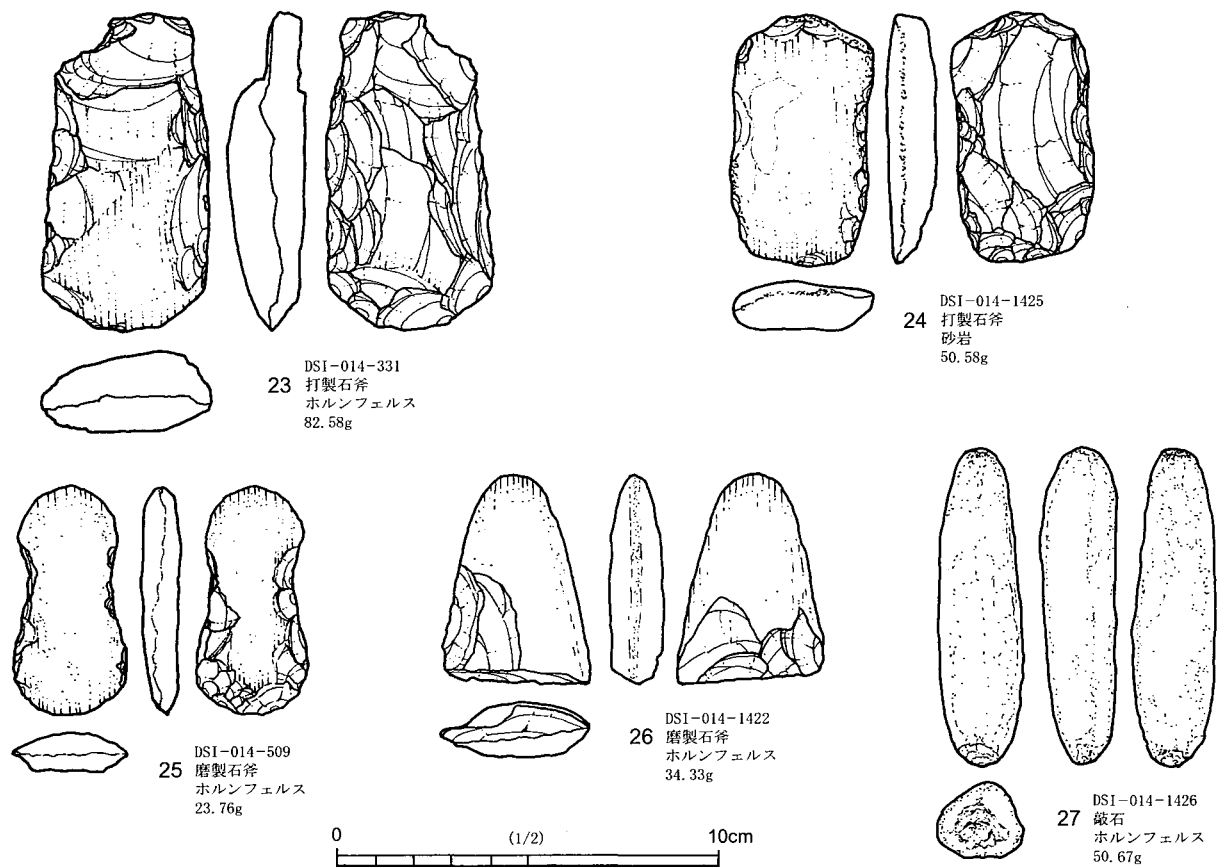
第89図 石鏃製作関連遺構SI-014遺物分布図





第90圖 石鏃製作関連遺構SI-014出土石器 (1)





第91図 石鏃製作関連遺構SI-014出土石器（2）

類似するものは、石鏃製品では、8があげられる。6は錐器の可能性もあるが、素材面が下半部に残存していることから、石鏃未製品としてとらえた。7は素材の主要剥離面が波状を呈し、右側縁に厚みがあることから石鏃未製品とした。

8～22は石鏃である。8～10は裏面に大きく素材面が残っている。8は石鏃未製品の2～4の製作技術と共通するものである。9・10は脚部の抉りに素材末端部が利用されている。8～20はサイズが小型のもので、1～5のような厚みのない小型幅広剥片を素材として製作されたものと思われる。9～12は二等辺三角形を呈し、抉りが浅い。13～21は正三角形を呈し、13・16・17・19・21は抉りが深い。石鏃のうち、欠損品は10・11・14・19・22で、このほか図示しなかったものを含めると22点で完形品の割合が低い。完形品は8・9・12・15～18・20・21を含む11点であるが、このなかでも、脚部の形状が左右非対称のものが8・9・15～18で、左右対称のもの割合が極めて低いことが特徴である。素材が厚みのない小型の幅広剥片が用いられていることから、製品も小型で厚みのないものが製作されたことにより、製品を作成する際に失敗したか、あるいは、製品の使用時の耐久性が低いために破損した可能性がある。

23・24は打製石斧である。小型の短冊形の形態を呈する。23・24ともに、上部が破損後に再生加工が施されており、表面の自然面を研磨して刃部を作出している。25・26は磨製石斧である。25は分銅形を呈する。大半が研磨されていることから、磨製石斧としてとらえたが、打製石斧に分類可能である。26は撥形を呈する。下部が破損後に下端部から裏面に調整加工が施されている。27は細長の楕円形礫を素材として上下両端に敲打痕のみられる敲打石である。

SI-017 (第92・93図, 図版33・66, 第8表)

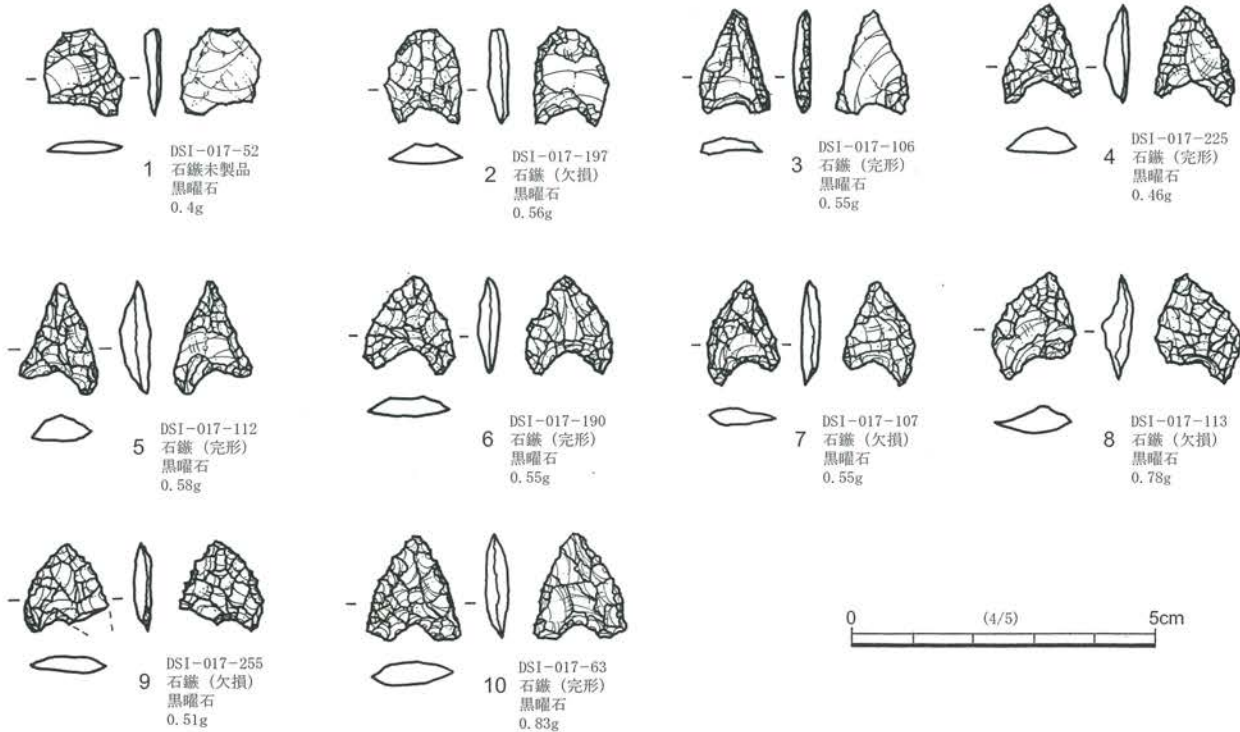
**遺物組成** 遺物総数291点で, 石器283点・土器8点出土した。中期仮Ⅱ期に比定される。遺物出土点数が最も少ない。石鏃製品に関連する遺物は, 石鏃(完形)5点・石鏃(欠損)6点・石鏃未製品9点で総計20点出土しており, すべて黒曜石が用いられている。礫石器は出土していない。黒曜石製の石鏃製作にかなり密接に関連した遺物のまとめりといえよう。

**出土状況** 平面分布は, 住居跡の南東部・北東部・西部の3箇所に集中地点がみられる。南東部・北東部の集中部は, 石鏃等の製品と剥片・碎片が混在した状態で出土している。これに対して, 西部の集中部

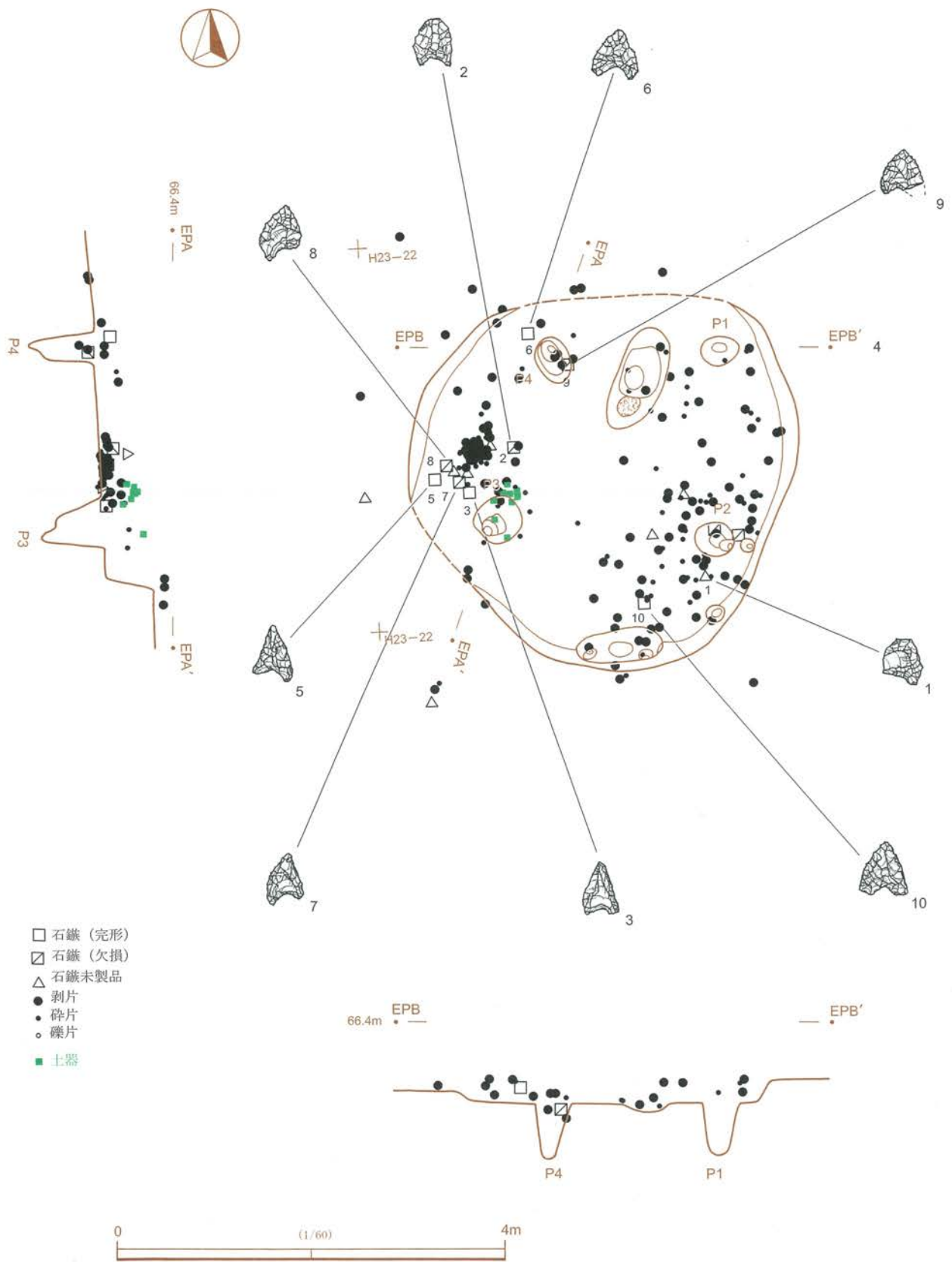
第8表 SI-017遺物組成表

器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製 品	剥 片	碎 片	礫 片	石 器 總 数	石 器 組 成 比 (%)	土 器	遺 物 總 数
黒曜石	5 2.97	6 2.98	9 8.7	141 36.56	115 2.97		276 54.18	97.53 51.68		276 54.18
安山岩				1 1.34			1 1.34	0.35 1.28		1 1.34
ホルンフェルス				3 5.8			3 5.8	1.06 5.53		3 5.8
砂岩				1 1.43			1 1.43	0.35 1.36		1 1.43
石英斑岩						2 42.08	2 42.08	0.71 40.14		2 42.08
個数合計	5	6	9	146	115	2	283	100.00	8	291
重量合計	2.97	2.98	8.7	45.13	2.97	42.08	104.83	100.00		
石器点数組成比(%)	1.77	2.12	3.18	51.59	40.64	0.71	100.00			
石器重量組成比(%)	2.83	2.84	8.30	43.05	2.83	40.14	100.00			

[上段: 点数、下段: 重量(g)]



第92図 石鏃製作関連遺構SI-017出土石器



※ 遺物垂直分布図は、セクション (エレベーション含む) を中央にして、幅 1 m の範囲の遺物分布を示してある。

第93図 石鏃製作関連遺構SI-017遺物分布図

は、南端に石鏃が4点（3・5・7・8）と北端に石鏃が2点（6・9）まとまって出土している。垂直分布においても、南東部・北東部の集中地点は覆土に満遍なく分布し、床面直上から出土したものがみられないのに対して、西部の集中部は、床面直上にまとまって出土する傾向がみられる。また、西部の集中地点の南側のピット周辺から土器がまとまって出土している。これらのことから、南東部・北東部の集中地点は、住居が廃絶された後に、南側と北東側から遺物が投棄されたことが推定される。これに対して、西部の集中地点は、住居が機能時に遺棄された可能性がある。

**出土石器** 1は石鏃未製品である。小型の厚みのない横長幅広剥片を素材としている。2～10は石鏃である。すべて小型で正三角形を呈し、脚部の抉りが浅い。石鏃の形態に斉一性がみられる。2・3は素材面が大きく残っており、1の石鏃未製品と製作技術が対応すると思われる。特に3は素材を斜位に用いており、SI-014の2～4・8と類似する。また、SI-014の9～20ともサイズや調整加工の方法が類似している。

SI-036（第94・95図、図版35・36・66、第9表）

**遺物組成** 遺物総数721点で、石器515点・土器206点出土した。土器の点数の割合が、28.6%でもっとも高い比率を示す。中期仮Ⅱ期に比定される。遺物総数は三番目に多い。石鏃製品に関連する遺物は、石鏃（完形）3点・石鏃（欠損）1点・石鏃未製品2点で総計6点出土している。出土点数が多いにもかかわらず、石鏃製品の点数が、もっとも少ない。剥片165点・碎片322点で94.56%もの高い点数組成比を示すことが特徴といえよう。礫石器は、打製石斧2点・敲石1点出土している。

**出土状況** 平面分布は、住居跡の北部・東部・南部部の3箇所集中地点がみられる。石器の器種別にみた分布のまとまりはみられず、各器種が混在した状況で出土している。垂直分布は、EPE～EPE'でみられるように、主に下部に石器が分布し、上部に土器が分布する傾向がみられる。他のセクション分布状況もほぼ同様の傾向がみられる。また、地形の傾斜方向とほぼ一致するSPA～SPA'やEPD～EPD'では、上位傾

第9表 SI-036遺物組成表

器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製品	剥片	碎片	打製 石斧	敲石	礫	石器 総数	石器 組成比 (%)	土器	遺物 総数	
黒曜石	3 1.19	1 0.28	2 0.66	162 37.14	322 5.62				490 44.89	95.16 3.11		490 44.89	
流紋岩								2 17.07	3 405.02	5 29.27		5 422.09	
安山岩				3 6.22		1 83.92				4 90.14		4 90.14	
頁岩									1 0.82	1 0.06		1 0.82	
ホルンフェルス			1 6.31			1 37.8			1 4.39	3 3.36		3 48.50	
チャート							1 460.38	5 217		6 46.97		6 677.38	
砂岩									5 150.11	5 10.41		5 150.11	
石英斑岩									1 8.32	1 0.58		1 8.32	
個数合計	3	1	3	165	322	2	1	7	11	515	100	206	721
重量合計	1.19	0.28	6.97	43.36	5.62	121.72	460.38	234.07	568.66	1,442.25	100.00		
石器点数組成比 (%)	0.58	0.19	0.58	32.04	62.52	0.39	0.19	1.36	2.14	100.00			
石器重量組成比 (%)	0.08	0.02	0.48	3.01	0.39	8.44	31.92	16.23	39.43	100.00			

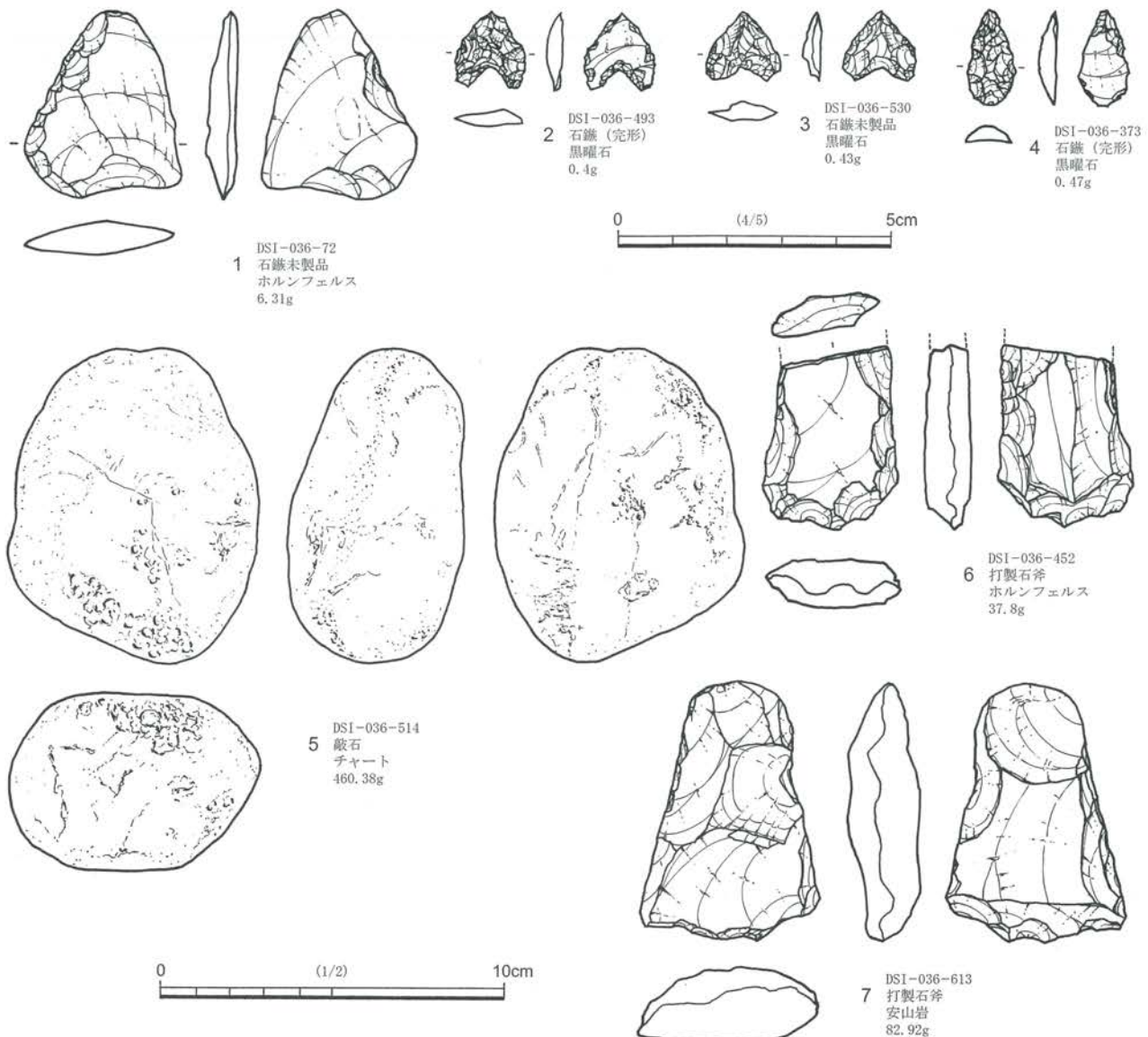
[上段: 点数、下段: 重量 (g)]





斜のSPAやEPD側の壁際に土が堆積後に、遺物が分布し、床面直上からは遺物は出土していない。これらの出土状況から、住居が廃絶された後に、壁際と床面直上に土が堆積し、その後、当初は主に石器を廃棄し、次には主に土器を廃棄したことが推察される。

**出土石器** 1は石鏃未製品である。最大長4 cm程度の中型の大きさのもので、ホルンフェルスが用いられており、他の住居跡から出土した石鏃とは大きく形態が異なる。ホルンフェルスは、6の打製石斧においても使用されており、石材組成では製品のみが単品で出土していることから、1と6は製品として搬入されたものと考えられる。2～4は黒曜石製の小型の石鏃である。2・3は、正三角形を呈し、脚部の抉りが浅く、形態的に類似しており、SI-014・017から出土した小型の石鏃とも類似する。4は無脚の円基鏃に分類されるものと思われるが、おそらく、基部が破損したものを再生加工したものと思われる。5は敲石である。楕円形礫を素材として、部分的に突出した箇所へ敲打痕がみられる。6・7は打製石斧である。6は短冊形、7は撥形を呈するが、再生加工を頻繁に行った痕跡がみられる。



第95図 石鏃製作関連遺構SI-036出土石器

SI-037 (第96・97図, 図版36・68, 第10表)

**遺物組成** 遺物総数310点で, 石器280点・土器30点出土した。他の遺構に比べて, 土器の点数の割合が9.7%で比較的高い。中期仮Ⅲb期に比定される。遺物総数は二番目に少ない。石鏃製品に関連する遺物は, 石鏃(完形)3点・石鏃(欠損)3点・石鏃未製品1点で総計7点出土しており, すべて黒曜石である。礫石器は, 打製石斧1点・磨製石斧2点出土している。

**出土状況** 平面分布は, 住居跡の南部に集中地点がみられる。器種別分布は, 中央やや北側に4～6の石鏃がややまとまりをもって出土し, 南壁際に2・3の石鏃がまとまっている。このように, 石器集中部の周辺に石鏃が出土する傾向がみられる。また, 土器と石器の分布状況は, 中央部南側付近に土器がまとまり, 南西部に石器がまとまる傾向がある。ただし, このような分布域は, 明確に区別できるものではなくモザイク状に重複して分布している。この傾向は, 垂直分布において顕著にみられ, 壁際に土が堆積後に, 土器と石器が混在した状態で出土している。ただし, 床面直上からは遺物はほとんど出土していない。

**出土石器** 1は剥片である。両極剥離によって作出された縦長剥片である。2は石鏃未製品である。素材を斜位に用いて, 打面部を脚部に設置している。3～6は石鏃である。点数が少ないが, サイズや形態が多様であることが特徴といえよう。SI-014・017・036の石鏃が, 斉一性な形態であったのとは対照的である。3は2のような素材の用い方をして作出されたものと思われるが, 非常に小型である。4は正三角形の形態を呈し脚部の抉りはやや深い。5は二等辺三角形と呈し, 脚部の抉りは浅い。6は中型の石鏃欠損品である。7・9は磨製石斧である。7は定角式磨製石斧の頭部残存品である。9は短冊形に類する形態を呈する。良質の蛇紋岩が用いられており, 頭部と刃部には再生加工が行われたことが観察される。特に, 頭部においては, おそらく, 器体中央部から破損した後に再生をしたものと思われる。このような繰り返し再生加工をした結果, 全体形状が短冊形の形態を呈するものと思われる。8は打製石斧である。

第10表 SI-037遺物組成表

器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未 製 品	剥 片	砕 片	打 製 石 斧	磨 製 石 斧	礫	石 器 総 数	石 器 組 成 比 (%)	土 器	遺 物 総 数
黒曜石	3	3	1	106	124				237	84.64		237
流紋岩	1.34	1.68	0.47	28.94	2.07				34.5	0.88		34.5
安山岩								6	6	2.14		6
頁岩								1,343.55	1,343.55	34.34		1,343.55
ホルンフェルス								1	2	0.71		2
チャート								22.94	13.49	0.93		36.43
砂岩				3	4.52				1	4	1.43	4
蛇紋岩				2	1.38				9.44	13.96	0.36	13.96
個数合計	3	3	1	116	124	1	2		3	27	100.00	310
重量合計	1.34	1.68	0.47	47.72	2.07	142.82	213.02	449.59	3,053.27	3,911.98	100.00	
石器点数組成比(%)	1.07	1.07	0.36	41.43	44.29	0.36	0.71	1.07	9.64	100.00		
石器重量組成比(%)	0.03	0.04	0.01	1.22	0.05	3.65	5.45	11.49	78.05	100.00		

[上段: 点数, 下段: 重量(g)]



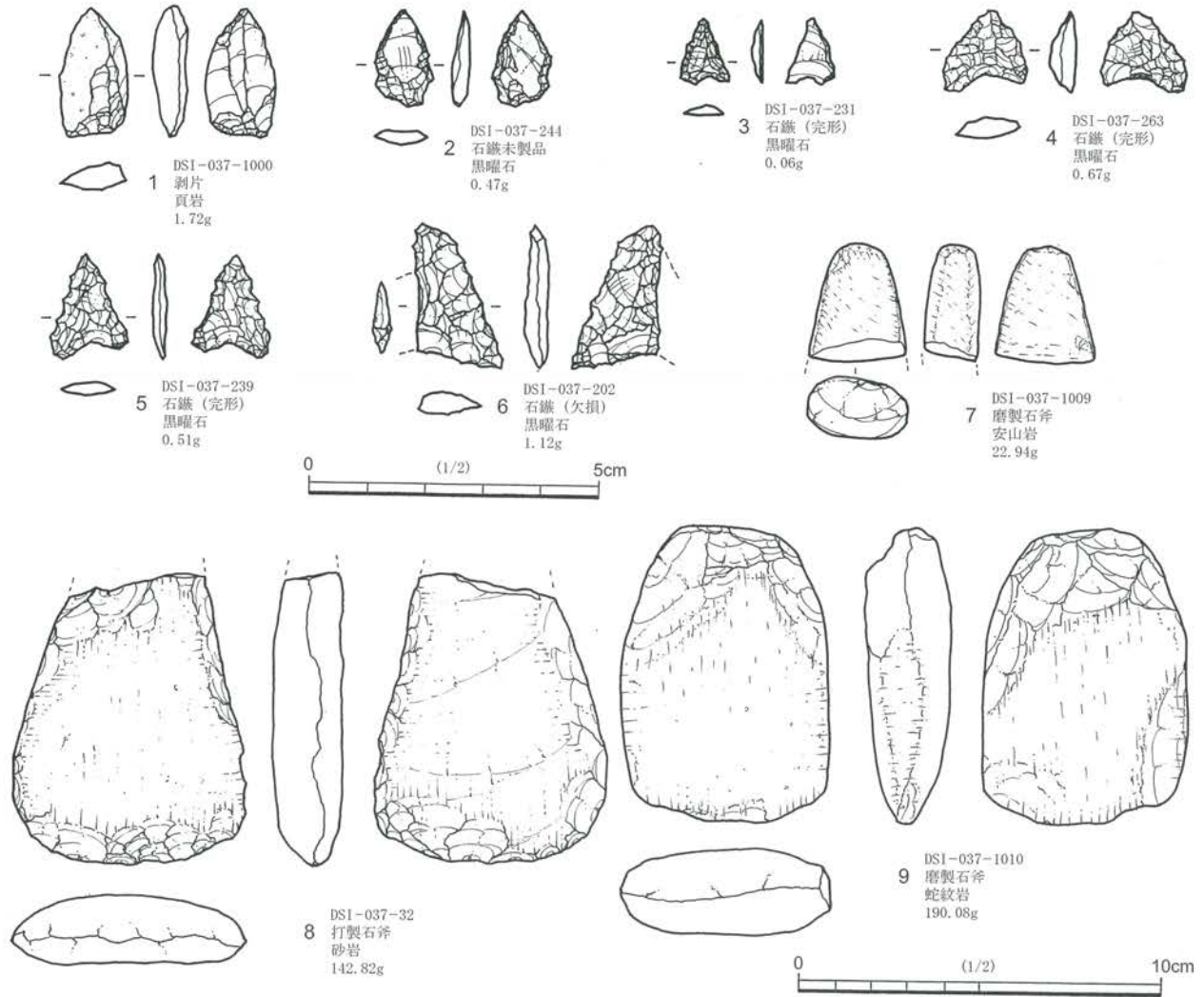


※ 遺物垂直分布図は、セクション (エレベーション含む) を中央にして、幅 1 m の範囲の遺物分布を示してある。

第96図 石鏃製作関連遺構SI-037遺物分布図



粗悪な石質の砂岩を用いている。円礫を分割した礫片を素材としており、周辺部を加工し、最終的に研磨によって成形している。磨製石斧に分類できるかもしれない。上部は破損した後に再生加工が行われている。おそらく、全体形状が分銅形を呈したものが、器体中央部から破損した後に、修正加工され最終形状が撥形になったものと思われる。

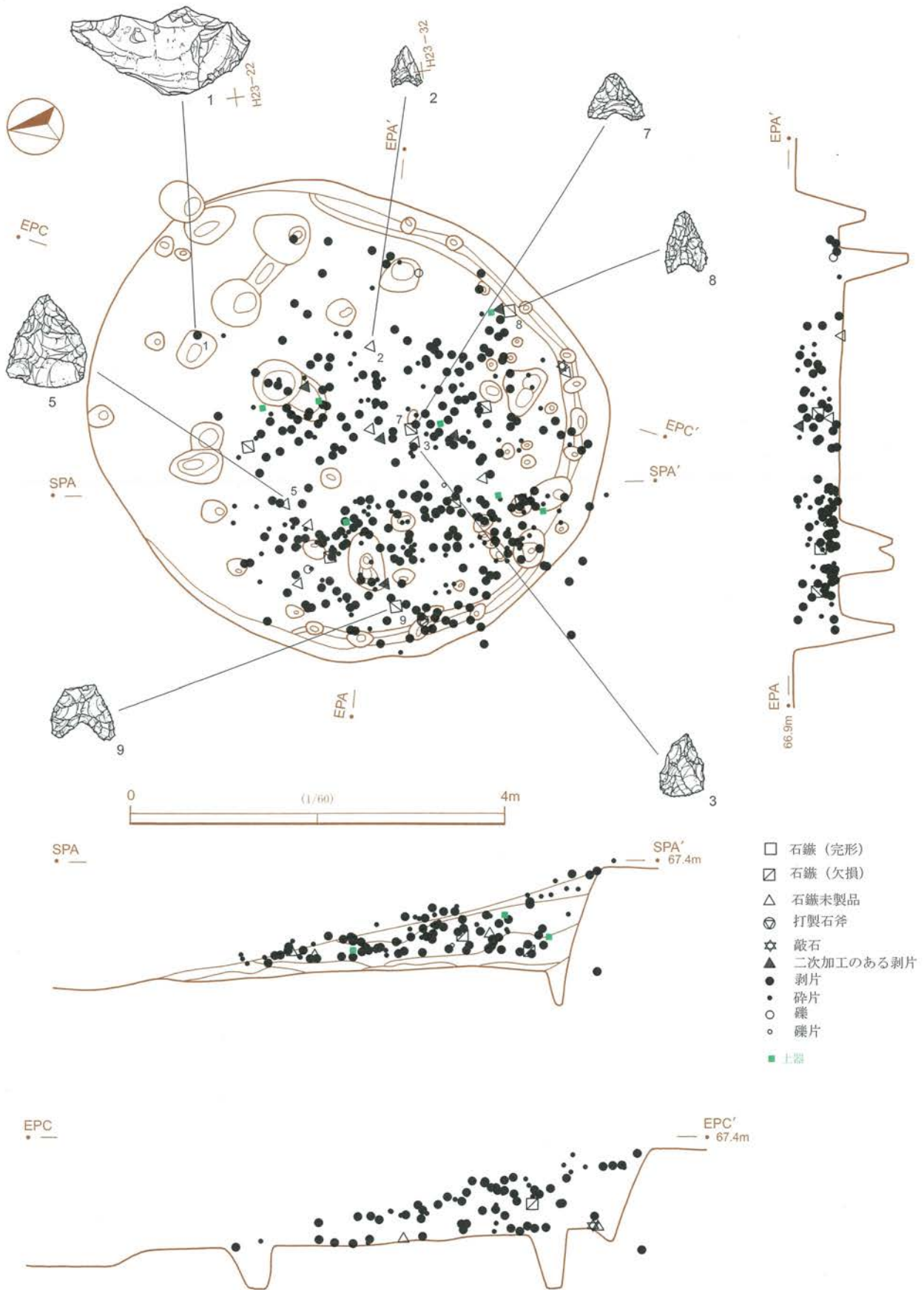


第97図 石鏃製作関連遺構SI-037出土石器

SI-038 (第98・99図, 図版36・68, 第11表)

**遺物組成** 遺物総数445点で、石器438点・土器7点出土した。土器の点数比率が極めて少ない。中期仮III a期に比定される。石鏃製品に関連する遺物は、石鏃(完形)2点・石鏃(欠損)8点・石鏃未製品9点で総計19点出土しており、石材はチャート2点と玉髓(メノウ含む)1点が含まれることが特徴である。礫石器は、打製石斧1点・敲石1点出土している。

**出土状況** 平面分布は、住居の南西部から中央部にかけてまとまって出土している。集中地点中央部には帯状の遺物空白帯がみられるが、発掘調査時にSPA~SPA'のセクションベルトが存在した場所にあたり、セクションベルト部分の遺物取り上げ精度が低かったことによるものと思われる。器種別分布は、器種に



※ 遺物垂直分布図は、セクション（エレベーション含む）を中央にして、幅1mの範囲の遺物分布を示してある。

第98図 石鏃製作関連遺構S1-038遺物分布図

よる分布のまとまりはみられず、各器種が混在した状態で出土している。垂直分布は、壁際と床面直上に土が堆積後に、遺物が出土しており、覆土上部にまで満遍なく分布している。斜面上位にあたる南西部から住居内へ、遺物が投棄されたことを示すと推察される。

**出土石器** 1は剥片である。石器組成において、ほとんどのものが碎片や小型の剥片であるなかで、大型で厚みのある剥片はほとんど出土していないので図示した。石材消費過程について、若干の考察を試みよう。多量に石器が出土しているにもかかわらず、石核が1点も出土していない状況は、分割した厚みのある剥片を遺跡内に持ち込み、さらに分割・折断を繰り返して、1のような厚みのある剥片を作出し、小型の厚みのない幅広剥片を作出して石鏃を製作したと思われる。このような分割・折断が頻繁に行われたために、1のような大型の剥片がほとんど残存しなかったと推察される。このような状況は、このほかのSI-014・017・036・037の4軒の住居内出土の石器においても、同様の石材消費過程が推察される。これに対して、SI-061は石核が5点出土しており、異なる石材消費過程が推察される。

2～6は石鏃未製品である。このなかで、4は素材剥片の縁辺が大きく残存していることから、未製品と考えられるが、この他のものは、周縁部に調整加工が施されていることから、石鏃の製品の可能性もある。2は厚みのない横長幅広剥片を素材としており、SI-014の8やSI-017の3などの石鏃と同様の製作技術で作成されたものと思われる。3は円基鏃に分類可能である。5は流紋岩、6はチャートが用いられており、大型の円基鏃として分類可能である。

7～10は石鏃である。石材は7が玉髄（メノウ含む）、8がチャート、9・10が黒曜石である。サイズにも中型から小型のものまでである。石鏃の点数は少ないが、石鏃未製品に分類した2・3・5・6を石鏃として含めてとらえると、石材・サイズ・形態が多様である。この点が、他の住居跡出土の石鏃とは大きく異なる。7は正三角形を呈し抉りが浅い。8は中型で、正三角形を呈し抉りが深い。9は二等辺三角形を呈し抉りが浅い。10は小型で、正三角形を呈し抉りが浅い。

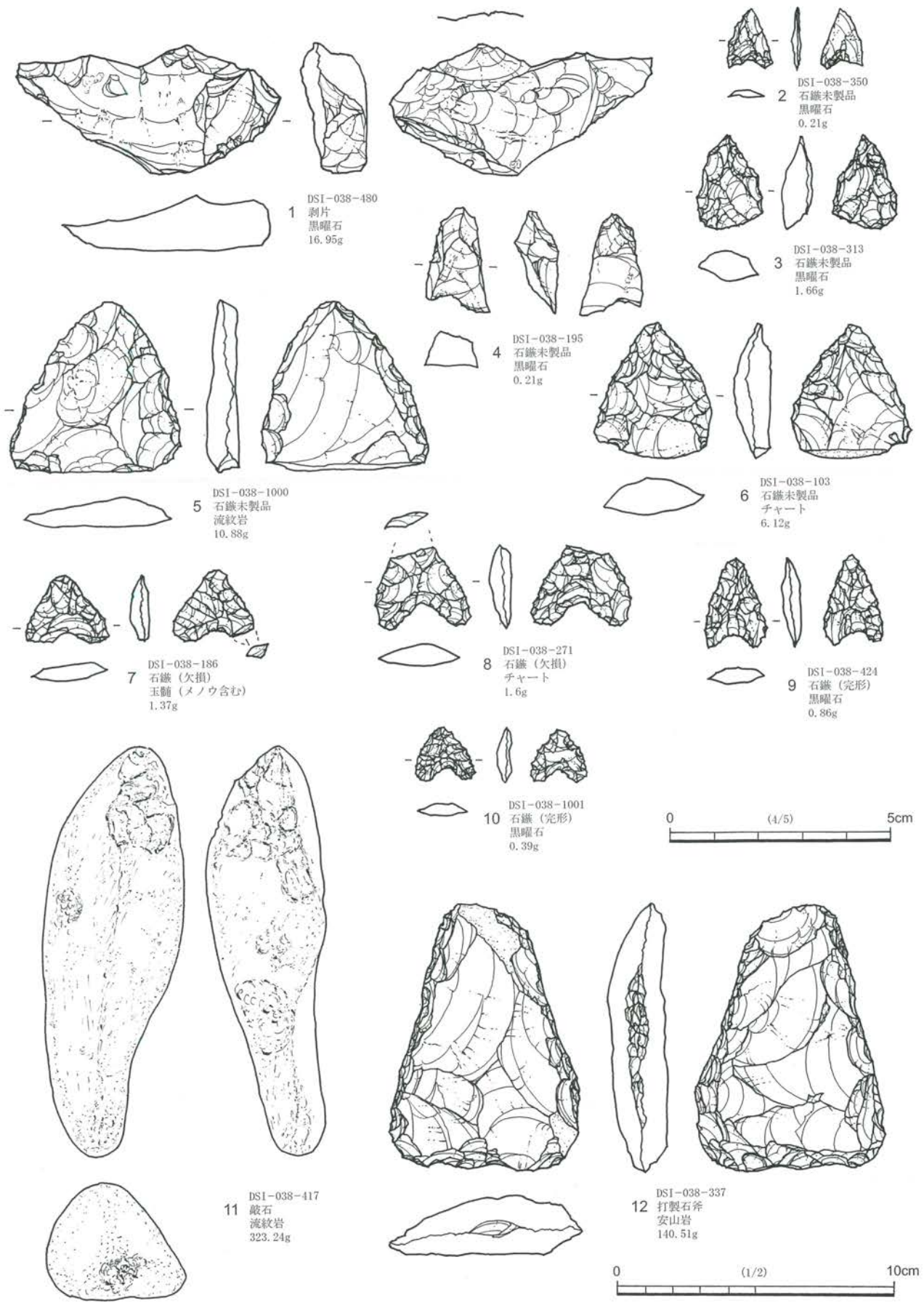
11は下端部が突出した長楕円形の円礫を素材とした敲石である。下端部に顕著な敲打痕が認められる。12は撥形を呈する打製石斧である。良質の安山岩が用いられており、器体の中央部まで及ぶ調整加工が入念に施されている。刃部再生が行われたことが観察される。

第11表 SI-038遺物組成表

器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製品	二次加工 のある剥片	剥片	碎片	打製 石斧	敲石	礫	石 器 總 数	石器 組成 比 (%)	土 器	遺 物 總 数
黒曜石	2 1.25	6 3.25	7 6.71	6 17.45	266 106.05	134 4.59				421 139.3	96.12 4.93		421 139.3
流紋岩			1 10.88					1 323.24	1 570.48	3 493.68	6 1.37		6 1,398.28
安山岩					2 1.26		1 140.51			3 141.77	0.68 5.01		3 141.77
ホルンフェルス					1 140.53					1 140.53	0.23 4.97		1 140.53
チャート		1 1.6	1 6.12						2 719.67	4 727.39	0.91 25.72		4 727.39
玉髄(メノウ含む)		1 1.34								1 1.34	0.23 0.05		1 1.34
砂岩									2 279.69	2 279.69	0.46 9.89		2 279.69
個数合計	2	8	9	6	269	134	1	1	3	5	438		7
重量合計	1.25	6.19	23.71	17.45	247.84	4.59	140.51	323.24	1,290.15	773.37	2,828.30		100.00
石器点数組成比(%)	0.46	1.83	2.05	1.37	61.42	30.59	0.23	0.23	0.68	1.14	100.00		
石器重量組成比(%)	0.04	0.22	0.84	0.62	8.76	0.16	4.97	11.43	45.62	27.34	100.00		

[上段：点数、下段：重量(g)]





第99図 石鏃製作関連遺構S1-038出土石器

SI-061 (第100~102図, 図版37・67, 第12表)

**遺物組成** 遺物総数1,053点で, 石器1,047点・土器6点出土した。石器の出土点数がもっとも多く, 石器の占める割合が99.4%で圧倒的に高い。中期仮Ⅱ期に比定される。石鏃製品に関連する遺物は, 石鏃(完形)9点・石鏃(欠損)9点・石鏃未製品11点で総計29点出土している。また, 鋸歯状の縁辺を有する石鏃が5点まとまって出土しており, 石鏃の形態が他と大きく異なる。また, 他の住居跡からは1点も出土していない石核が, 5点出土していることが大きな特徴である。二次加工のある剥片が4点出土している。礫石器は, 敲石1点のみの出土している。石材は, 黒曜石が97.8%もの高い数量比率を示している。この遺物組成から, 6軒の石鏃製作に関連する住居跡において, 黒曜石による石鏃製作が, もっとも集中的に行われた痕跡がうかがえる遺物のまとまりであるといえよう。

**出土状況** 平面分布は, 南西部に濃密に分布している。南東部がやや散漫に分布している。垂直分布は, 壁際と床直上に土が堆積後に, 石器が分布しており, 覆土上面まで出土しており, 覆土最上部に石器が集中して出土している。このことは, 住居跡の北西部がSI-046によって, 攪乱された際に, 南西部に石器が廃棄されたためと推察される。これに対して, 土器は床面直上から出土している。器種別分布は, 器種により分布のまとまりはみられない。これらのことから, 土器は住居跡が機能時に遺棄され, 石器は住居廃絶後に斜面上位にあたる南西から住居内へ投棄されたと推察される。

**出土石器** 1~7は石鏃未製品である。1~3は石鏃製作工程が観察できる資料で, 厚みのない幅広い剥片を素材としている。素材を斜位に用いており, 他の住居跡出土の石鏃と同様の工程で石鏃製作が行われたことがうかがえる。4~7は脚部が欠損した石鏃を再生加工した可能性がある。

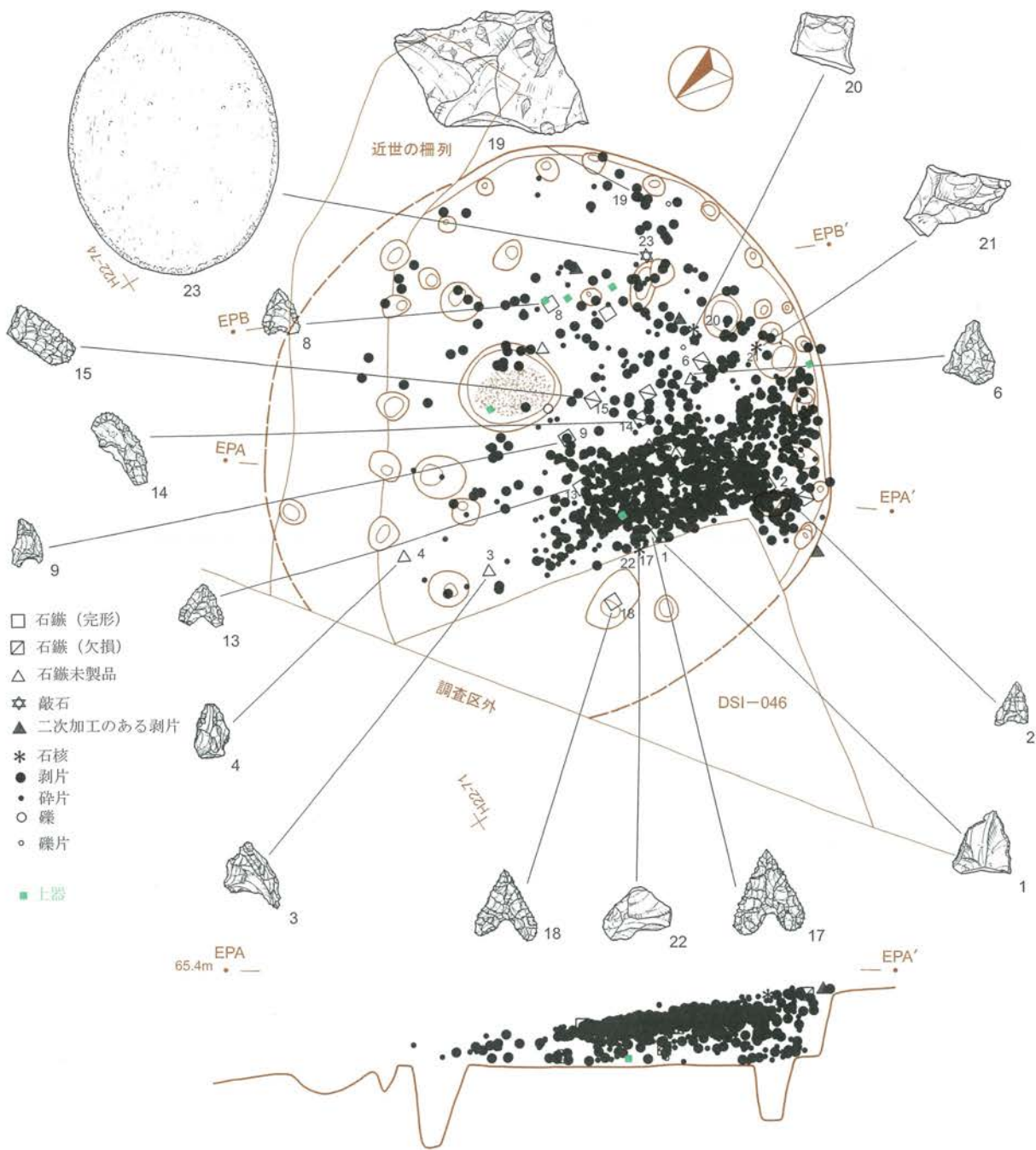
8~18は石鏃である。このなかで, 14~18の5点は, 縁辺のほぼ全周が鋸歯状を呈し, 中型で脚部の挟りが深い石鏃で, 形態的にまとまり, 注目される。他の住居跡では出土しておらず, SI-061のみからまとまって出土している。最終調整加工において, 先の細い加工工具を用いて調整加工が入念に行われたと思われる。8・9・12・13は小型で挟りが浅い。10は玉髄(メノウ含む)が用いられており, 石鏃製品において唯一の黒曜石以外の石材である。大型で, 二等辺三角形を呈し脚部の挟りは深い。石材組成では玉髄

第12表 SI-061遺物組成表

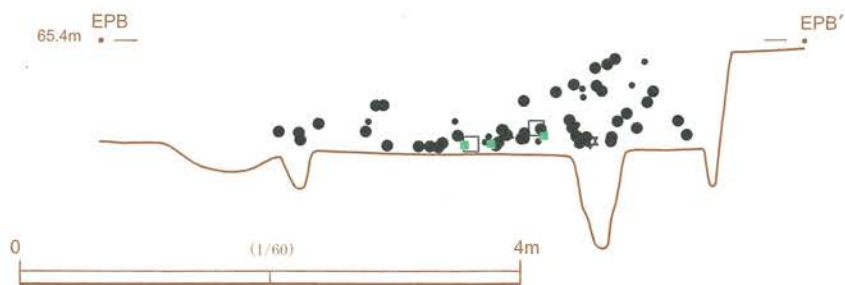
器種 石材	石鏃 (完形)	石鏃 (欠損)	石鏃 未製品	二次加工 のある剥片	石核	剥片	砕片	敲石	礫片	石器 総数	石器 組成比 (%)	土器	遺物 総数
黒曜石	8 5.69	9 5.64	11 11.86	3 7.11	5 16.62	565 222.25	423 16.1			1024 285.27	97.80 8.44		1024 285.27
流紋岩									7 981.67	7 981.67	0.67 29.05		7 981.67
安山岩				1 6.47		2 4.5				3 10.97	0.29 0.32		3 10.97
ホルンフェルス						1 13.55			4 585.67	5 599.22	0.48 17.73		5 599.22
チャート									1 200.71	2 16.21	0.29 6.42		3 216.92
玉髄(メノウ含む)	1 2.17									1 2.17	0.10 0.06		1 2.17
砂岩								1 840	1 130.74	2 312.52	0.38 37.97		4 1,283.26
個数合計	9	9	11	4	5	568	423	1	2	1,047	100.00		6
重量合計	7.86	5.64	11.86	13.58	16.62	240.3	16.1	840	331.45	1,896.07	100.00		1,053
石器点数組成比(%)	0.86	0.86	1.05	0.38	0.48	54.25	40.40	0.10	0.19	1.43	100.00		
石器重量組成比(%)	0.23	0.17	0.35	0.40	0.49	7.11	0.48	24.86	9.81	56.11	100.00		

[上段:点数、下段:重量(g)]

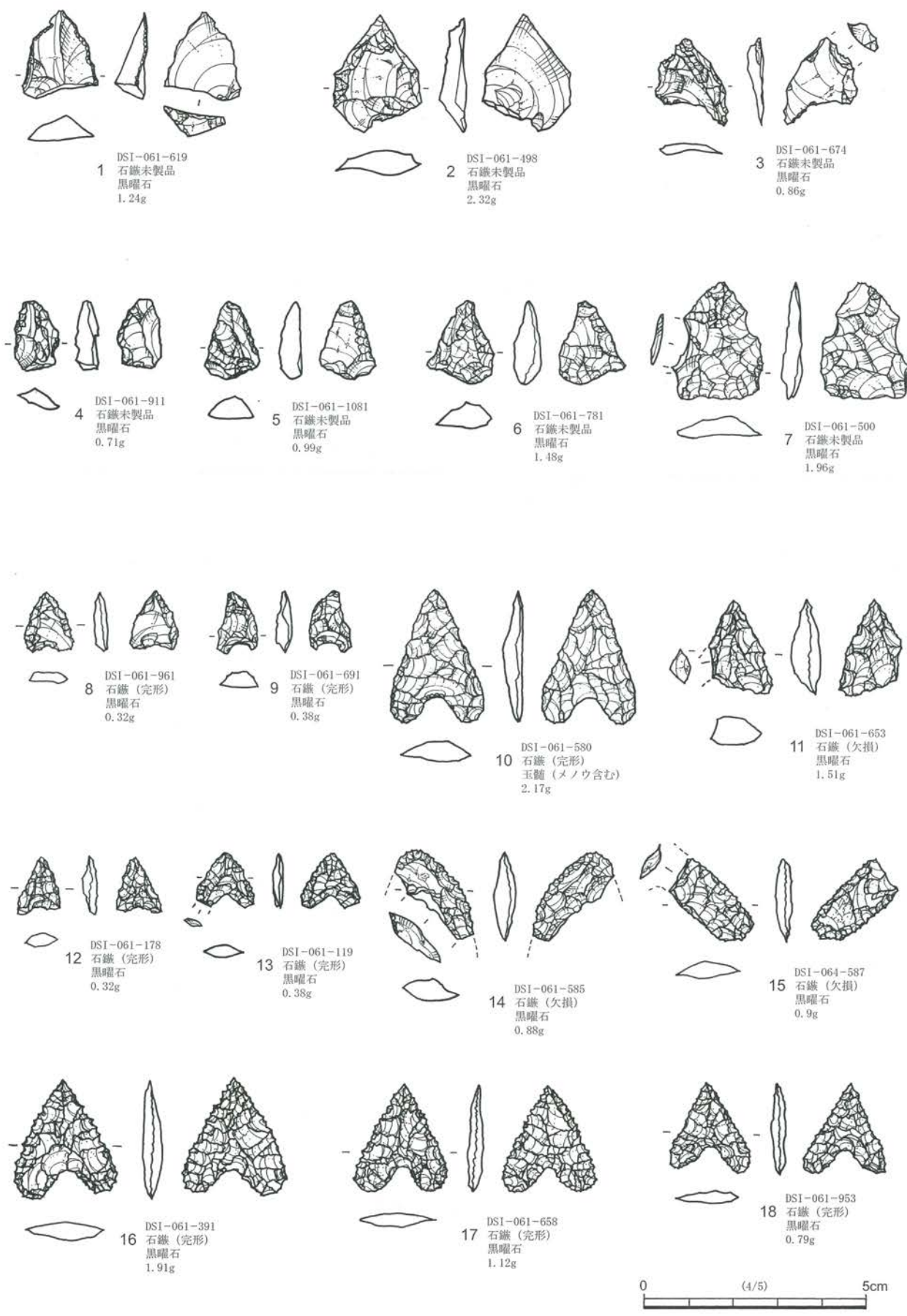




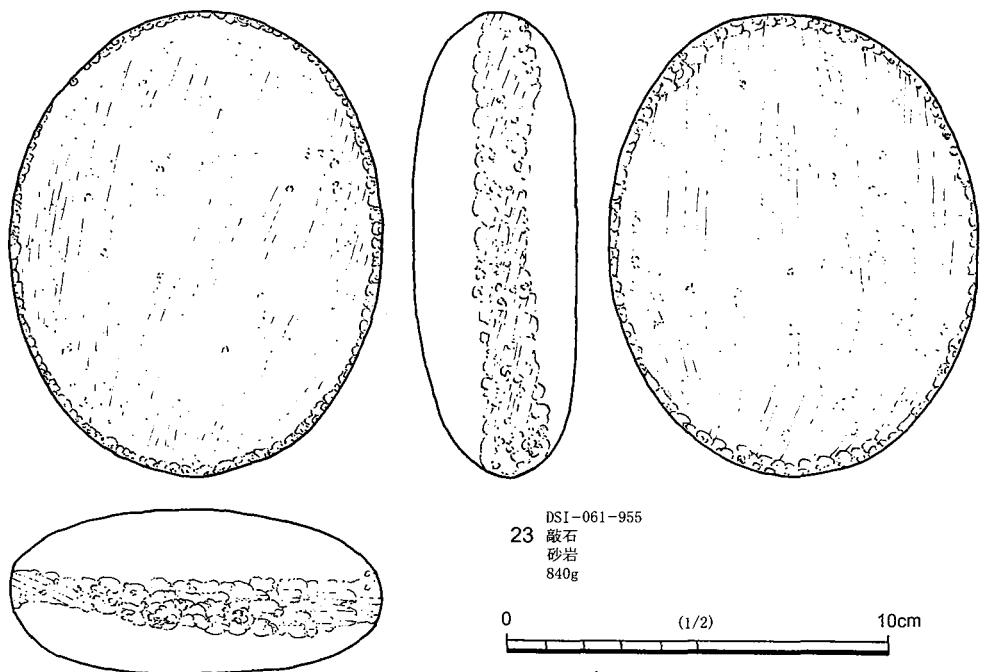
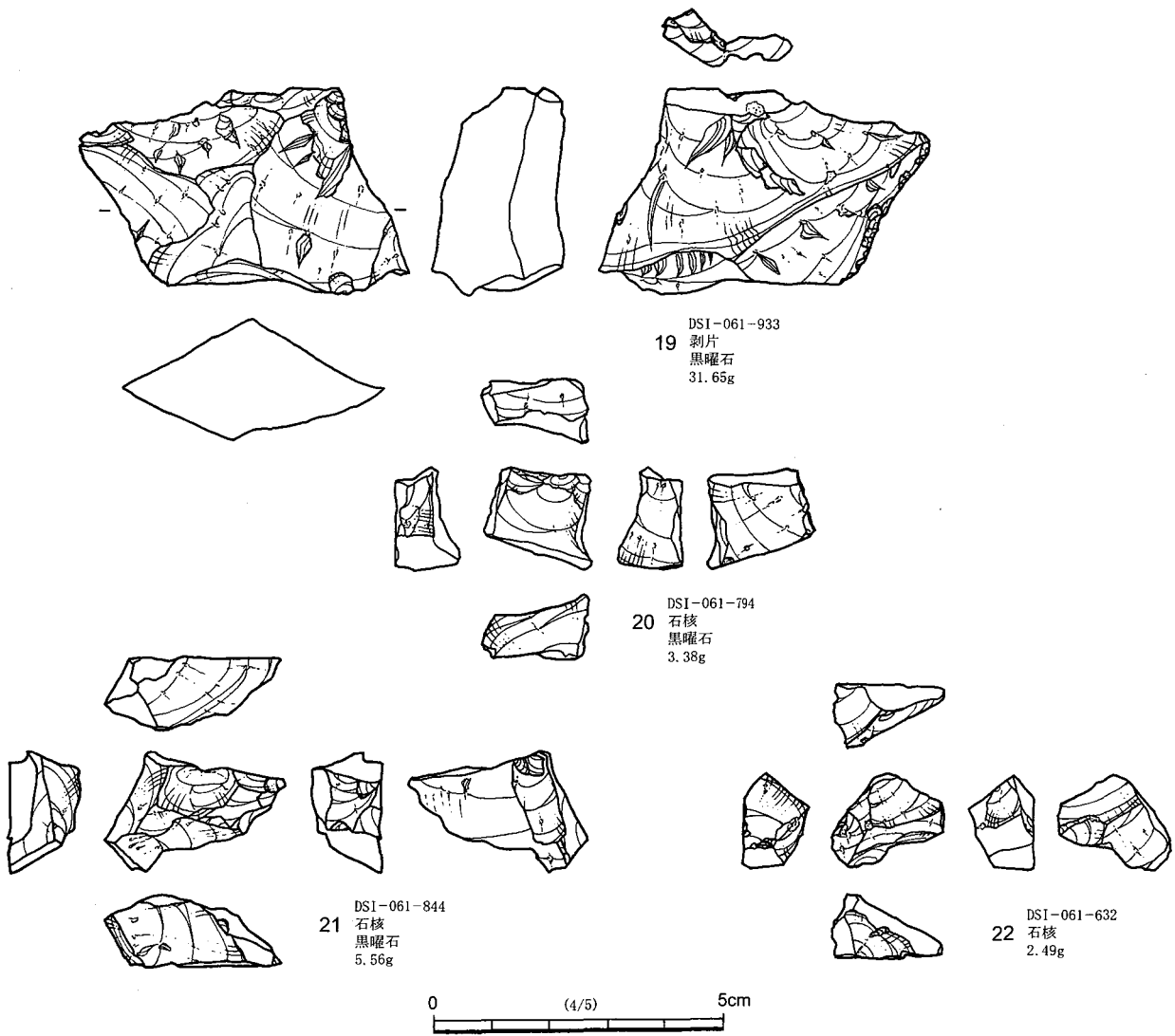
※ 遺物垂直分布図は、セクション（エレベーション含む）を中央にして、幅1mの範囲の遺物分布を示してある。



第100図 石鏃製作関連遺構SI-061遺物分布図



第101図 石鏃製作関連遺構SI-061出土石器(1)



第102図 石鏃製作関連遺構SI-061出土石器 (2)



(メノウ含む)は、剥片・碎片等の石器が出土しておらず、製品として本遺跡に搬入されたものと思われる。

19は厚みのある剥片である。黒曜石の大半が1g未満の重さであるなかで、31.65gでかなり大きいものである。本遺跡に、このような厚みのある大型の剥片を持ち込んで、石鏃製作の母岩として用いたものと思われる。

20～22は石核である。20は分割剥片を素材として、表面上部から小型剥片を剥離後に、下面と右側面を折断している。21は分割剥片を素材として、表面上部と裏面上部から厚みのない剥片を剥離後に、左側面と下面を折断している。22は分割剥片を素材として、表面上部から厚みのない剥片を剥離後、左側面と下面を折断している。6軒の住居跡のうち、本住居跡からのみ出土している。20～22の石核は、いずれも、19のような厚みのある大型の剥片を分割して、小型の厚みのない剥片を剥離した後に、最終的に分割して小型剥片を剥離している。石鏃の素材剥片を生産したものと思われる。おそらく、他の住居跡出土の石器群では、20～22のような小型石核本体を石鏃の素材とするか、あるいは、さらに分割して、石鏃を製作したために石核が残存しなかったことが推察される。

23は敲石である。扁平な楕円形礫を素材として、周縁部に敲打痕がみられる。

#### 4. グリッド・遺構外出土土器・土製品 (第103～130図, 図版70～84)

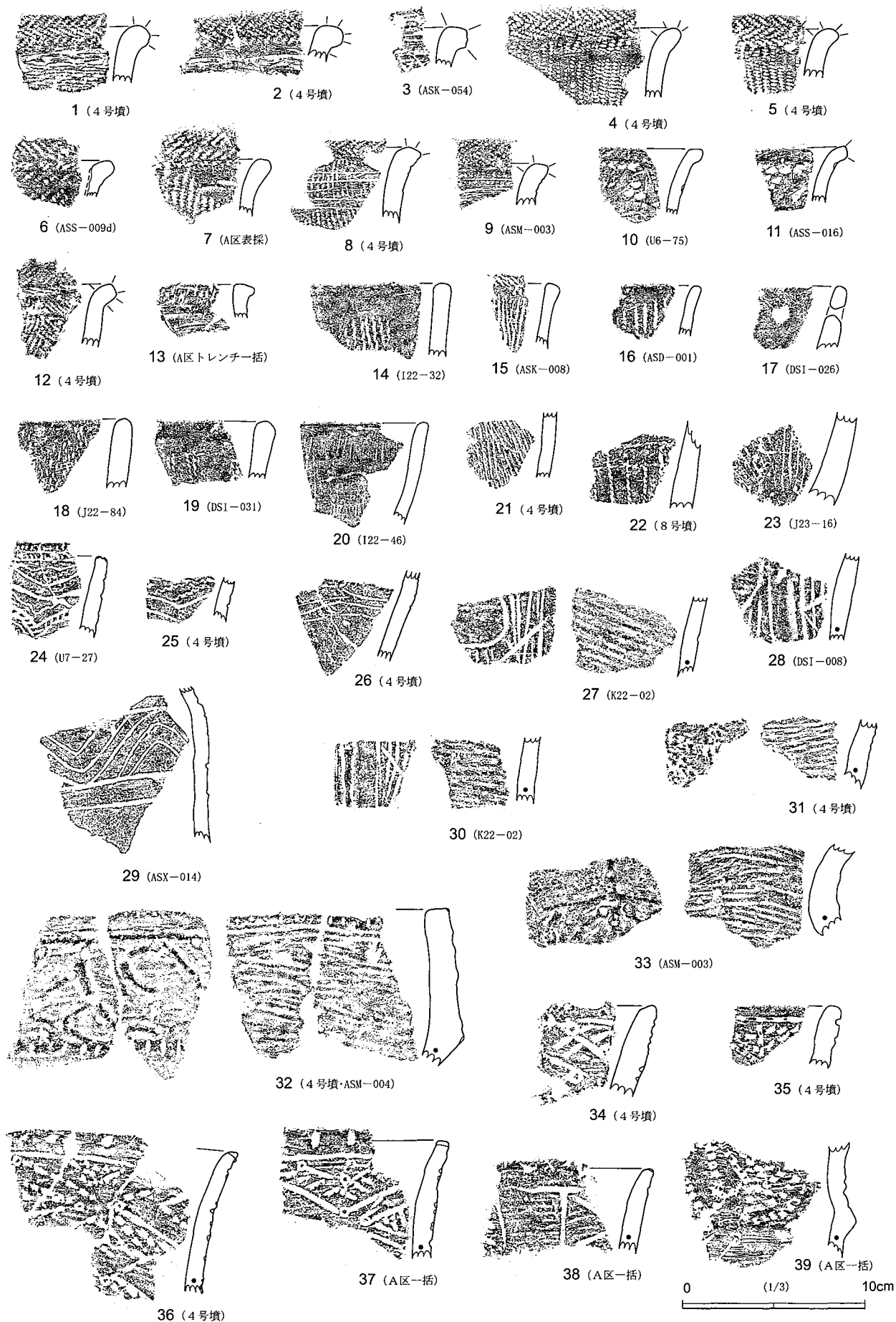
縄文時代の遺構以外から出土した土器については、概要を簡単に述べるにとどめたい。挿図中の括弧内は、出土遺構名もしくはグリッド番号を示す。遺構出土土器と同様、遺存状況が悪いものが多く、細部の状況が不明なものも多い。なお、当調査区は安定した平場が少なく、包含層も斜面では流失している可能性が大きい。現在把握できるのは、残存した平場から出土した土器の量であり、これをもって、この遺跡の全体傾向を反映しているとは言えないことを、あらかじめ断っておく。

1～23は燃糸文土器である。井草式から夏島式までが多数を占める。井草式はほとんどがA区出土であるが、夏島式になるとD区からも出土するようになる。10・11は口唇直下に棒状工具による刺突が施される。24～26・29は沈線文土器である。田戸上層式の属するもので、A区出土が多い。24は口唇上に沈線と、それをはさむように刺突列が巡る。27・28・30～100は条痕文土器である。鵜ヶ島台式以降がほとんどである。53と54, 59と61, 85と91は、それぞれ同一個体である。時期の不明瞭な資料も含め、ほとんどがA区出土である。

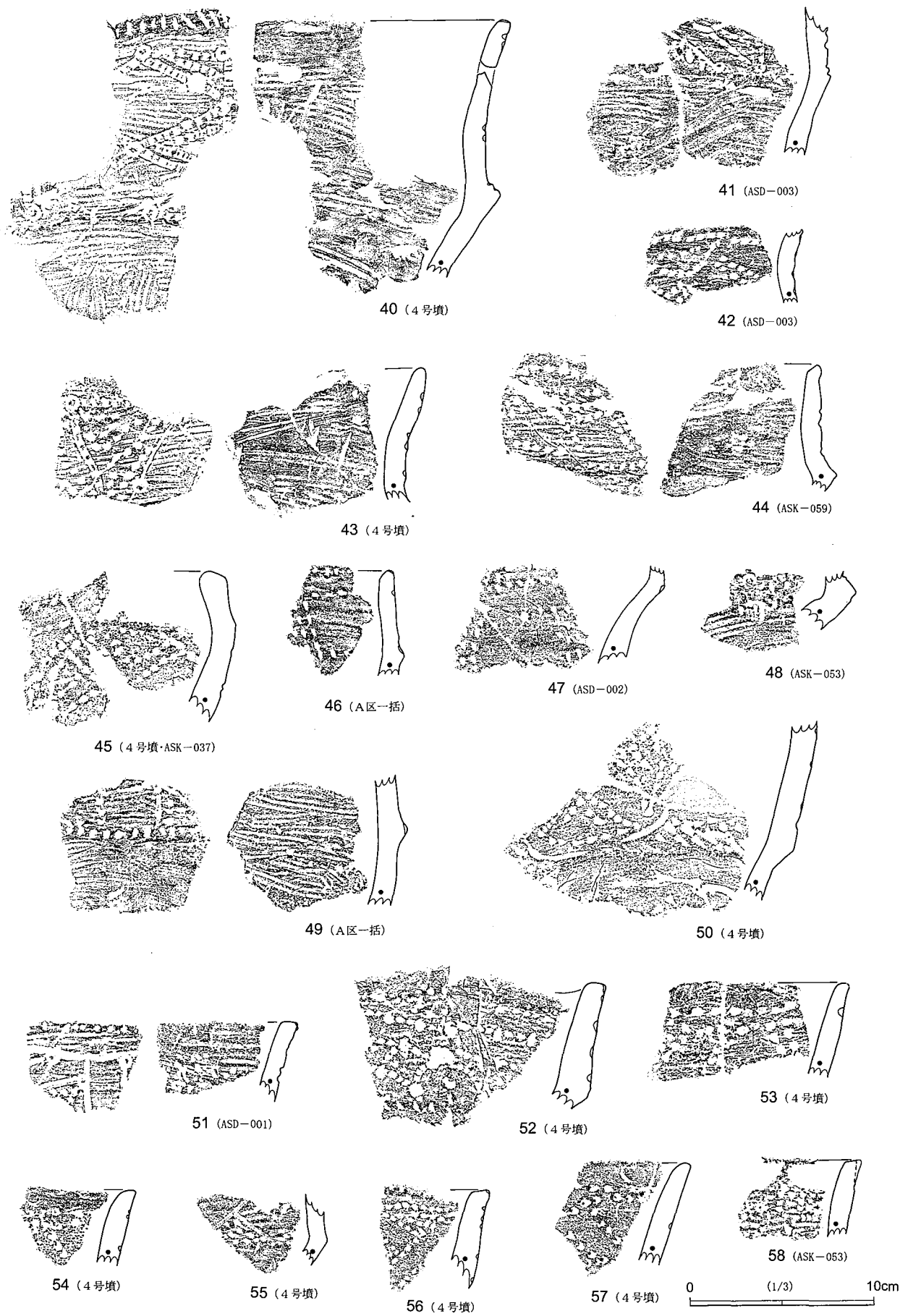
前期前半はほとんど出土していない。101～149は前期後半の資料である。111と112, 115と116, 130と131, 141と142, 148と149は、それぞれ同一個体である。101～109は浮島Ⅱ式を中心とする。110～145・148・149は諸磯式を中心とするもので、主体は諸磯a式である。115・116・140は細い貼り付け粘土紐上に刻みが施されるもので、諸磯b式に相当する。146は興津式である。これらの資料はほとんどA区出土である。

150～171・174・176は中期前半の資料である。154は阿玉台Ⅰb式, 150・155・157・163は阿玉台Ⅱ式, 160は阿玉台Ⅲ式に相当する。153・156・158・159・161・165・168・171は西関東・中部系の土器である。A区出土が多いが、D区からの出土も増加する。

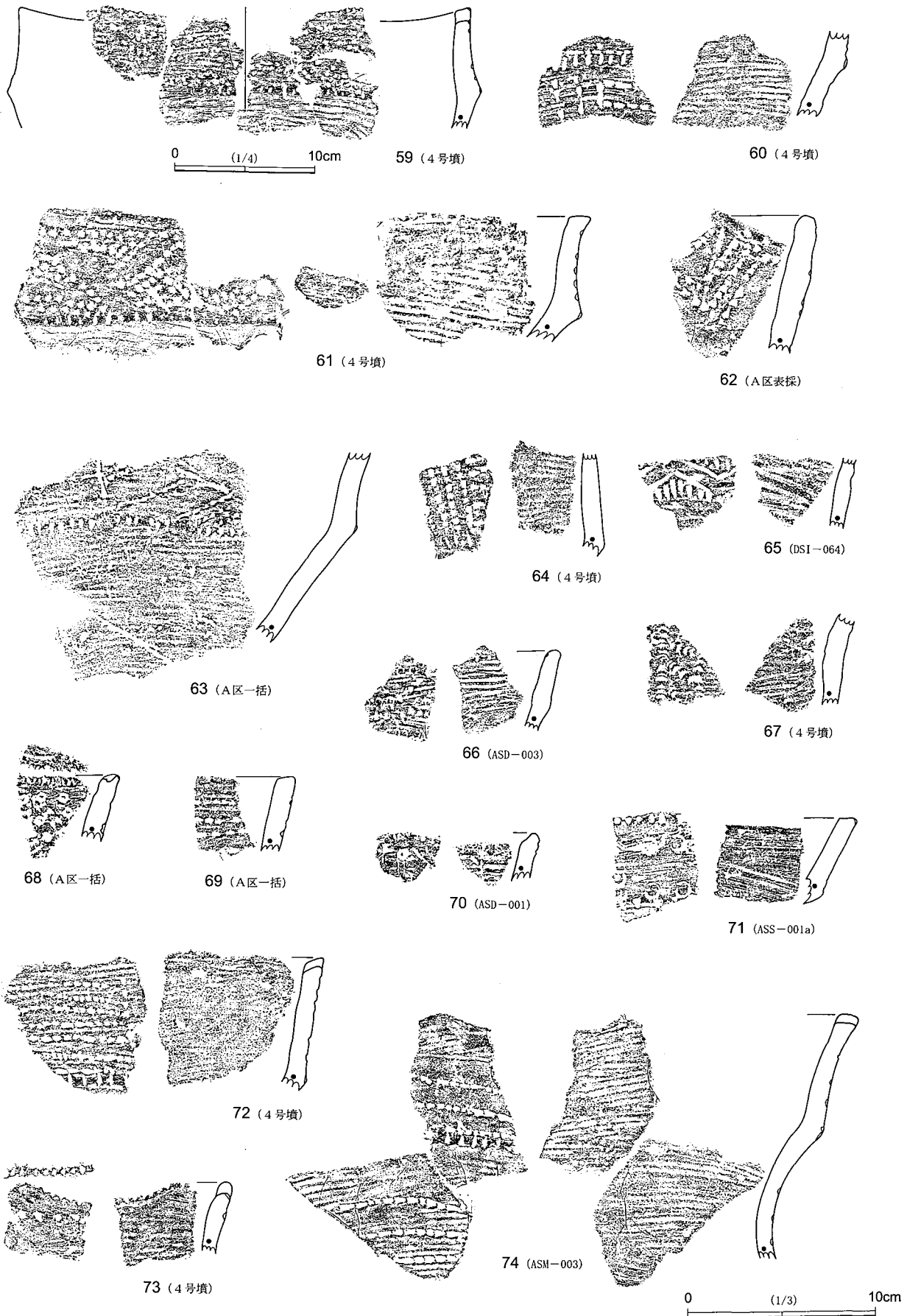
172・173・175・177～312・333・478・479・648は中期後半の資料である。加曾利E式を中心とするが、曾利式の影響を受けた土器も多く見られる。遺構の出土土器と、類似する傾向を示す。214と215, 224と



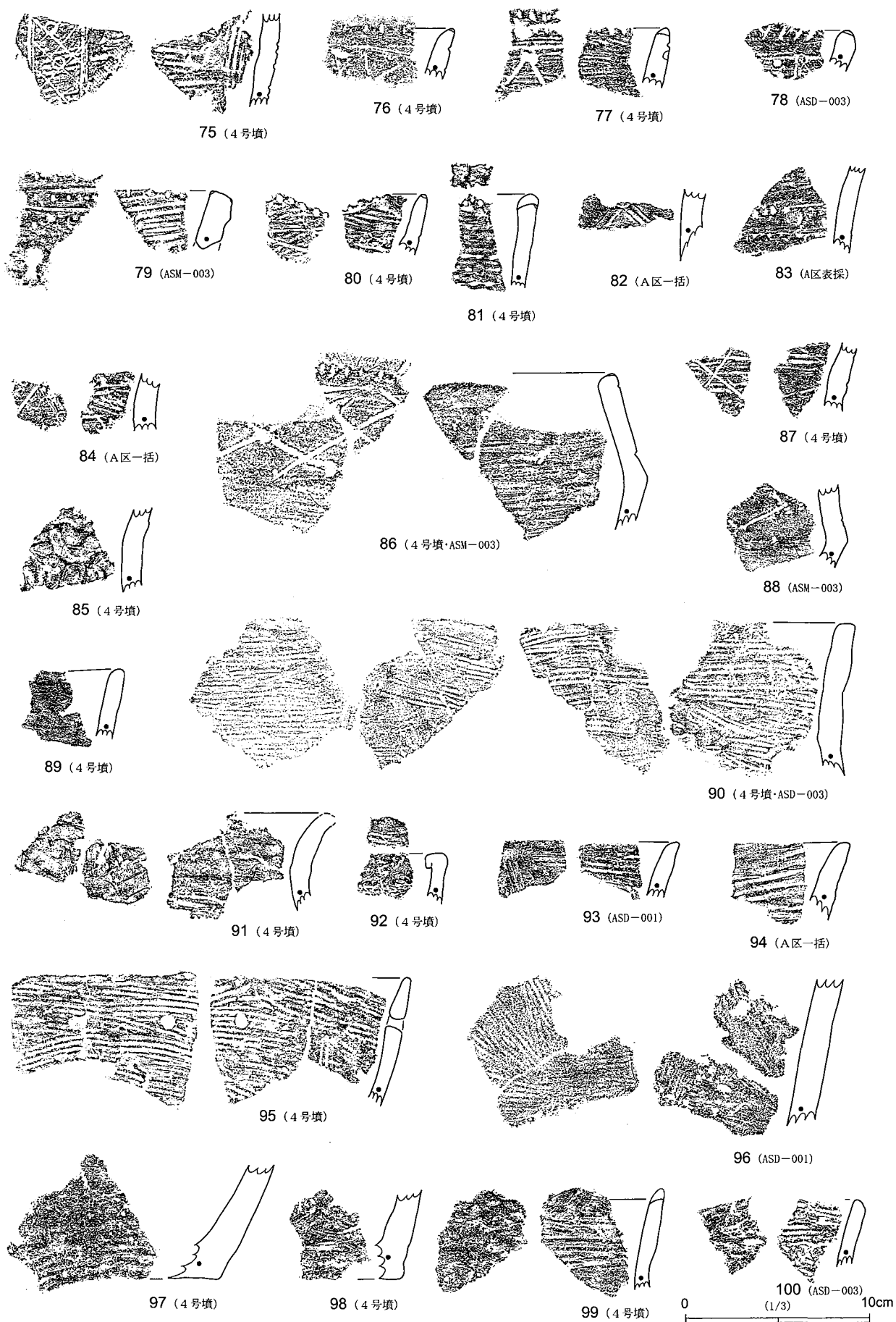
第103図 A・D区遺構外出土縄文土器(1)



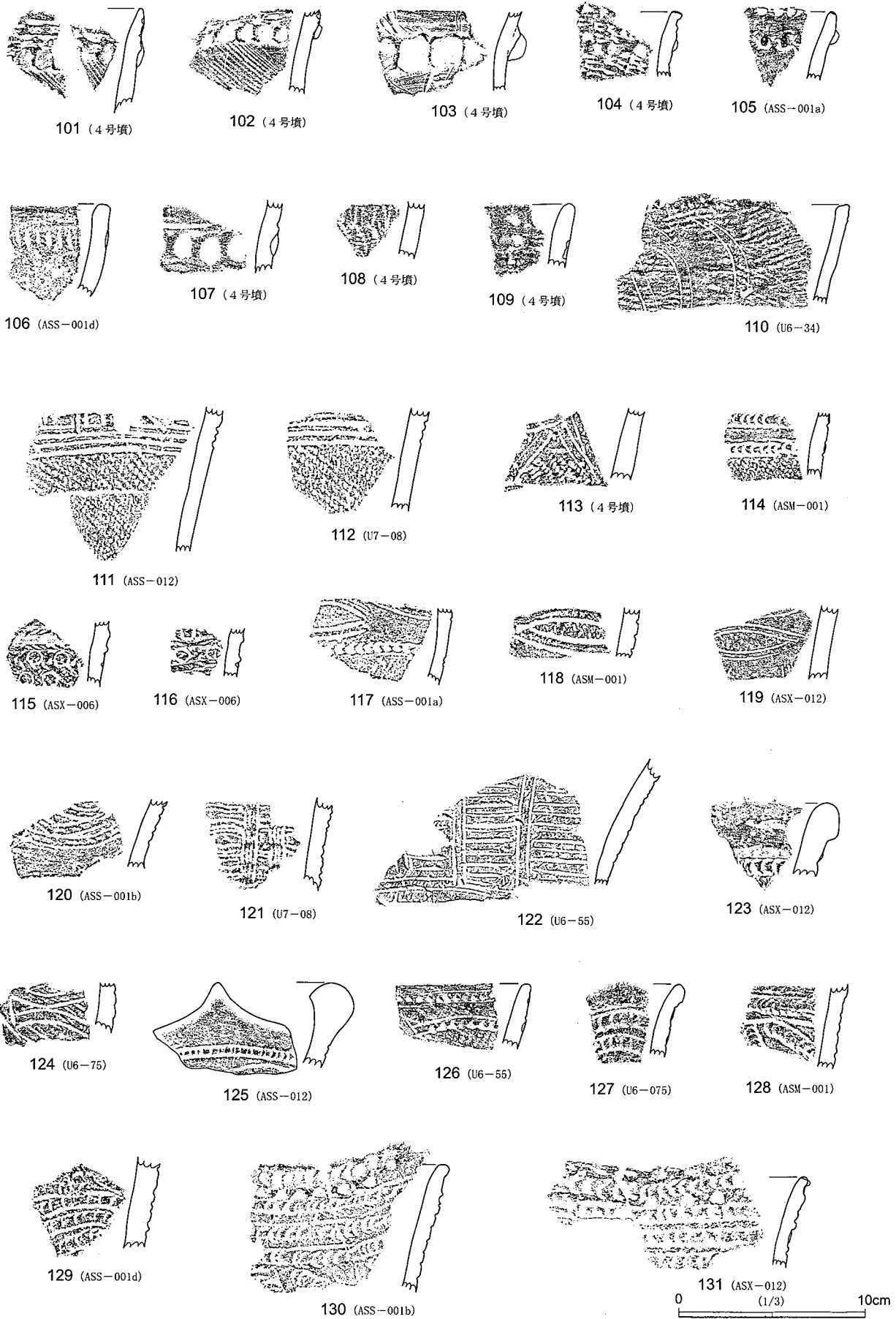
第104図 A・D区遺構外出土縄文土器 (2)



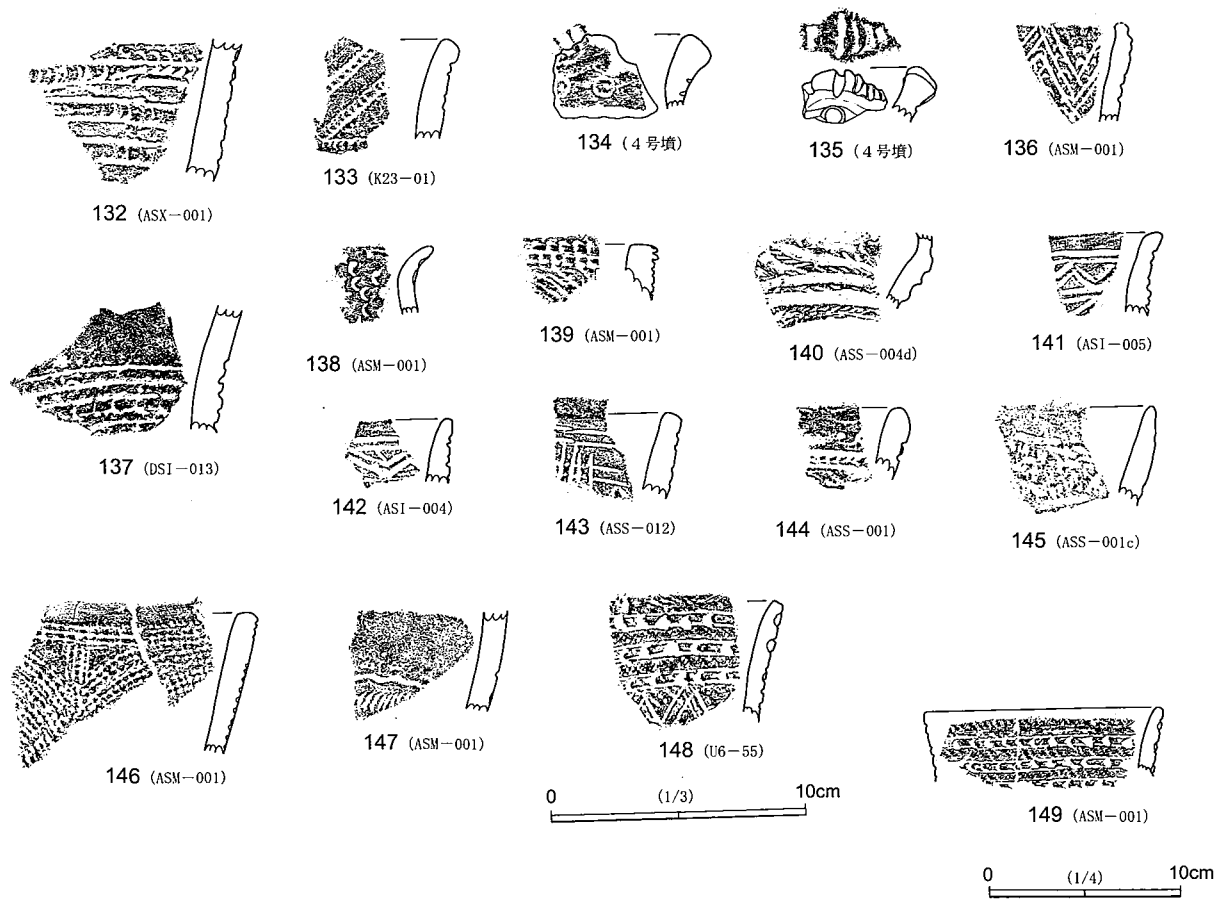
第105図 A・D区遺構外出土縄文土器(3)



第106図 A・D区遺構外出土縄文土器(4)



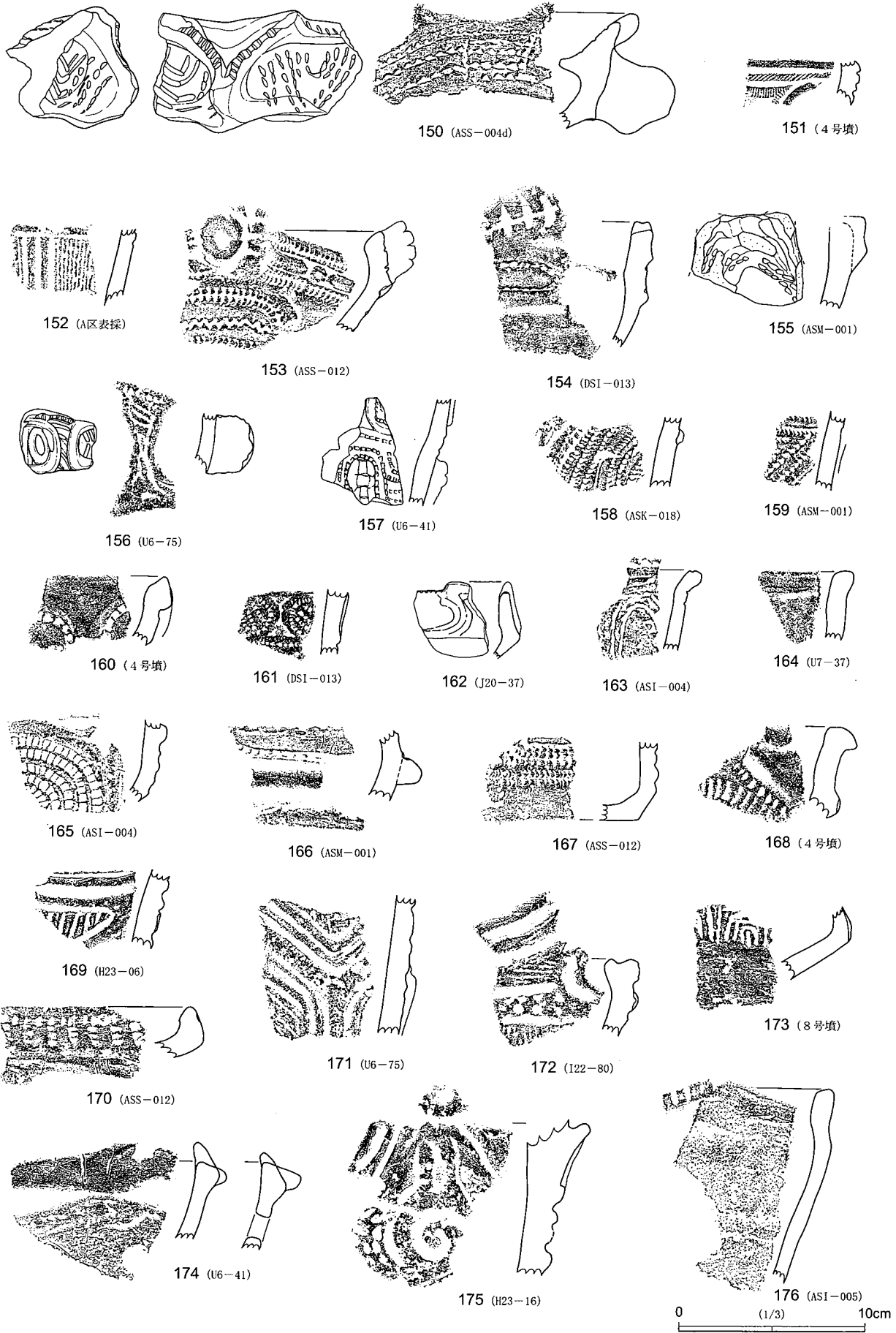
第107図 A・D区遺構外出土縄文土器(5)



第108図 A・D区遺構外出土縄文土器(6)

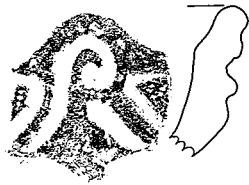
225, 254と256~258, 265と266, 288と289は, それぞれ同一個体である。177~228・305・312は, 口縁部横位文様帯と胴部文様帯から構成される, 典型的な加曾利E式の資料である。229~233・237~239は口縁部文様帯が失われるもので, 加曾利E式後の資料もみられるようになる。幅広の磨消懸垂文がみられる220なども同時期とみられるが, 中期末から後期初頭の資料は極めて少ない。196・478・479・648は大形の鉢形土器, 246は有孔鏝付土器である。248・252~258・260~269・297~300・302~304はいわゆる連弧文土器の範疇に含まれる資料である。地文は櫛羽状工具による条線もしくは撚糸文が多い。259・270~278・282~296・301・306・311は曾利式もしくはその影響を受けた資料である。311が出土した地点は, SI-029・SI-033の両住居跡に極めて近い。中期後半になってからは, それまでとは一変して, D区から多量に出土するようになる。多くは同時期の遺構が集中する, 調査区中央の平坦地から出土しているが, 最も標高が高く痩せ尾根状を呈する, 調査区西端部からもまとめて出土しているのは注目される。

313~328・330~332・334~338, 351・352・450・452は, 後期前葉の堀之内式~加曾利B1式に相当する。堀之内2式と加曾利B1式とは分類が難しい点が多いため, 一括した。堀之内1式は少なく, だんだん増加していく傾向を示すが, 全体としては少ない。317と318, 450と452は同一個体である。326~328・332・336・337・351・352は浅鉢である。450・452は口縁が内傾する, 壺形を呈する土器である。330は中期後半かもしれない。

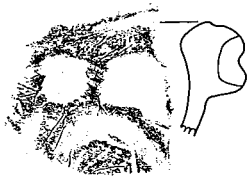


第109图 A·D区遺構外出土縄文土器(7)

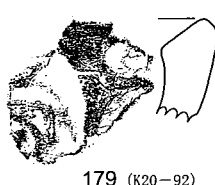




177 (K21-92)



178 (DSI-016)



179 (K20-92)



180 (H23-51)



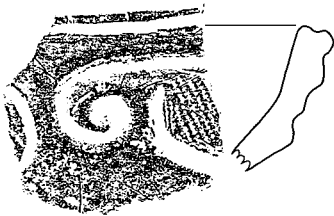
181 (9号墳)



182 (DSI-025)



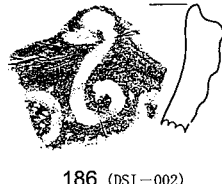
183 (D区トレンチ一括)



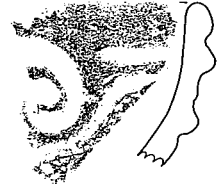
184 (J22-90)



185 (K21-70)



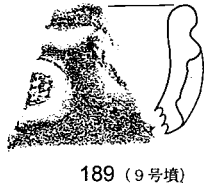
186 (DSI-002)



187 (DSI-002)



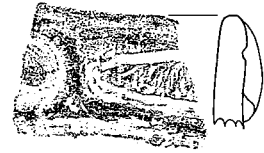
188 (DSI-012)



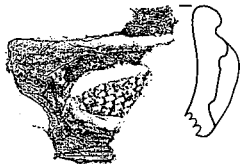
189 (9号墳)



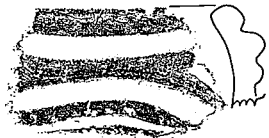
190 (J21-17)



191 (J22-23)



192 (9号墳)



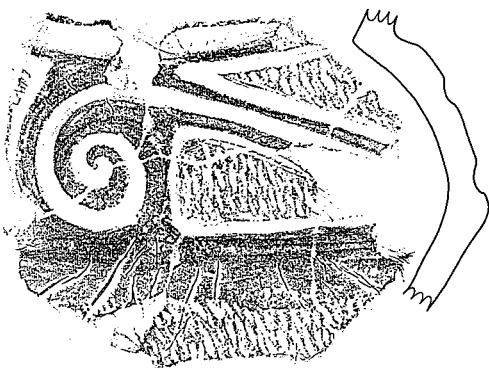
193 (D区トレンチ一括)



194 (DSI-063)



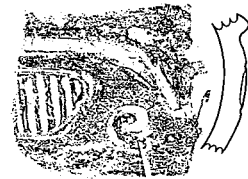
195 (9号墳)



196 (ASK-059)



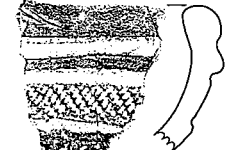
197 (9号墳)



198 (DSS-001)



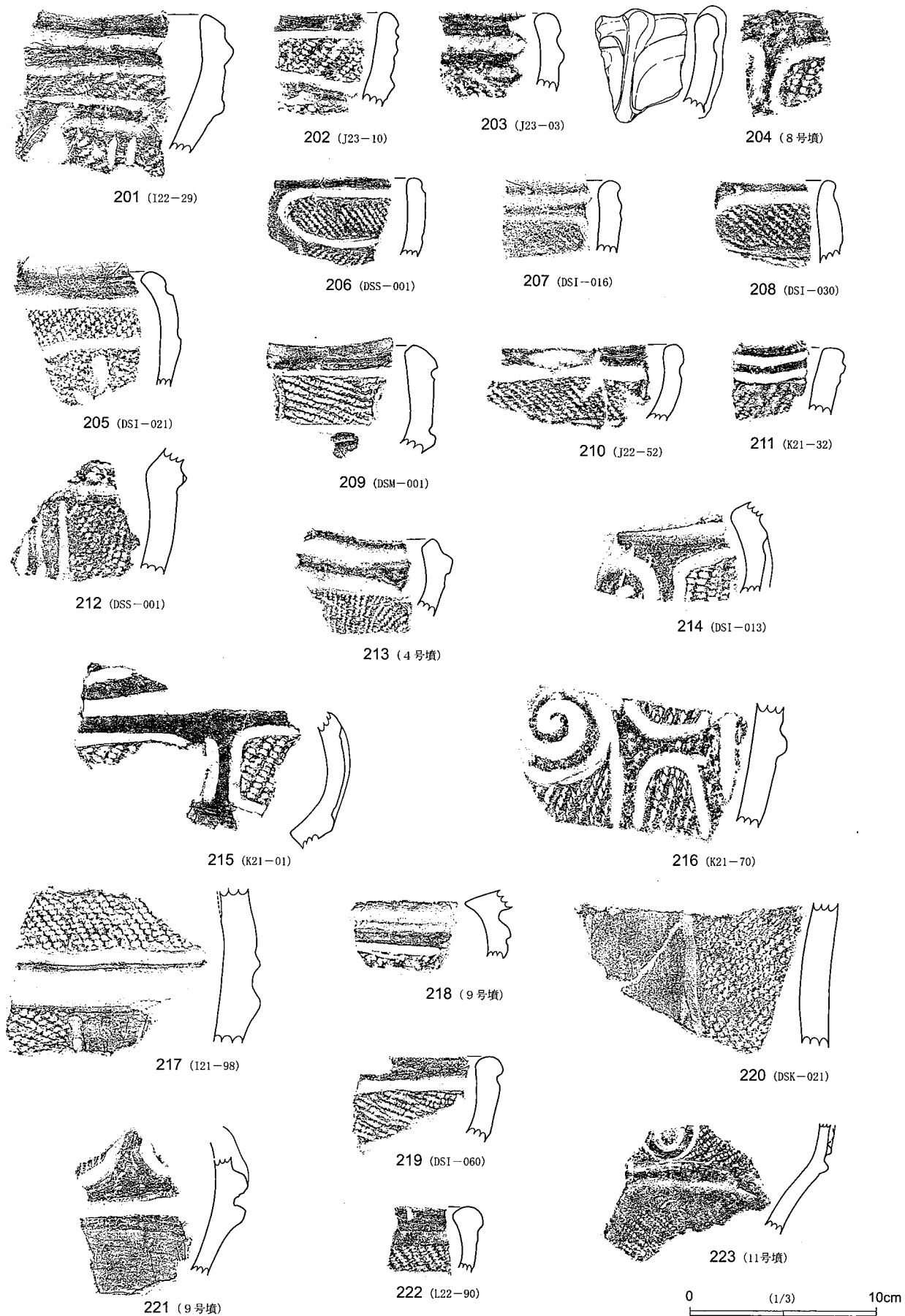
199 (DSI-030)



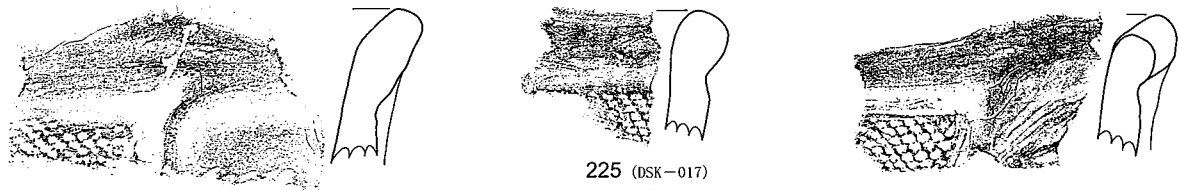
200 (I22-78)

0 (1/3) 10cm

第110図 A・D区遺構外出土縄文土器(8)



第111图 A·D区遺構外出土縄文土器(9)



224 (DSI-021)

225 (DSK-017)

226 (I21-98)



227 (DSI-063)



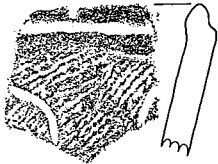
228 (DSI-025)



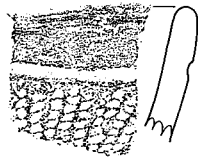
229 (L22-90)



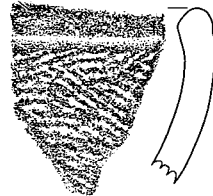
230 (I22-67)



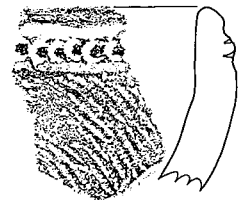
231 (DSI-063)



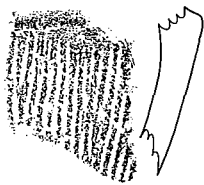
232 (DSI-021)



233 (DSI-063)



234 (I22-93)



235 (DSI-035)



236 (8号墳)



237 (DSI-063)



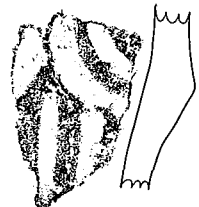
238 (DSI-031)



239 (L22-90)



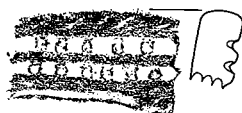
240 (9号墳)



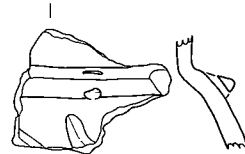
241 (K20-39)



242 (8号墳)



243 (DSI-058)



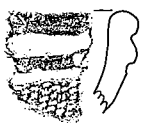
244 (I22-58)



245 (DSK-029)



246 (DSI-010)



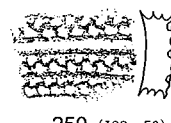
247 (9号墳)



248 (DSS-001)



249 (I22-72)



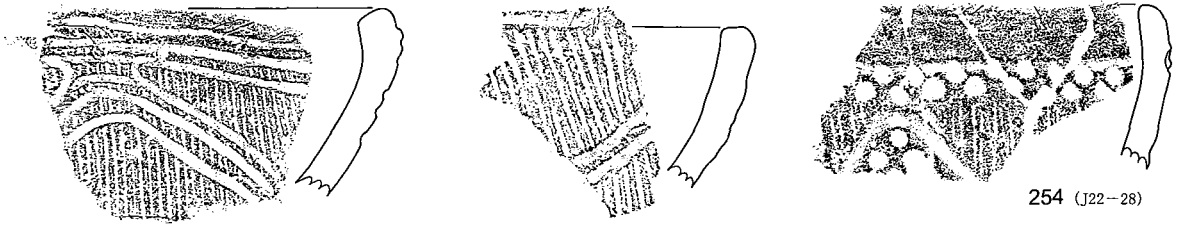
250 (I22-50)



251 (DSS-001)

0 (1/3) 10cm

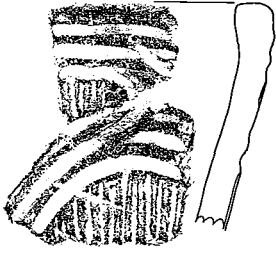
第112图 A·D区遺構外出土縄文土器 (10)



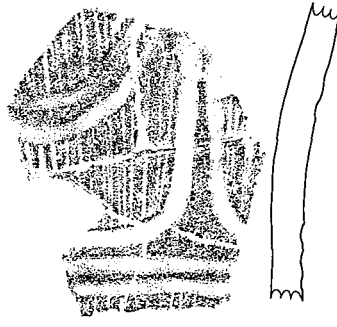
252 (122-78)

253 (DS1-010)

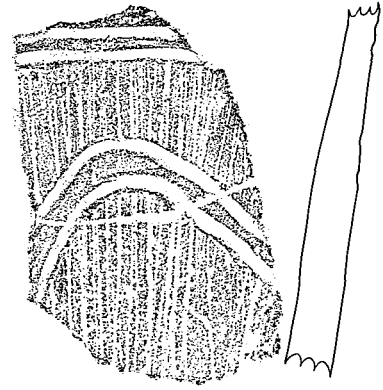
254 (J22-28)



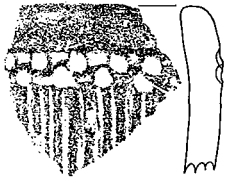
255 (122-68)



256 (J22-28)



257 (DS1-002)



258 (J22-38)



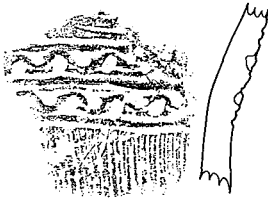
259 (DS1-013)



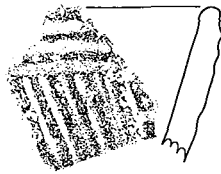
260 (8号墳)



261 (DSS-001)



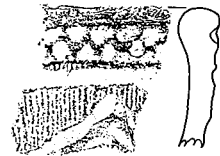
262 (DS1-035)



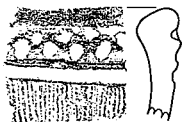
263 (DS1-016)



264 (9号墳)



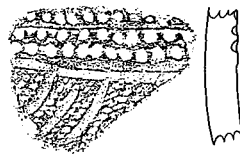
265 (DS1-024)



266 (DS1-024)



267 (DS1-030)



268 (9号墳)



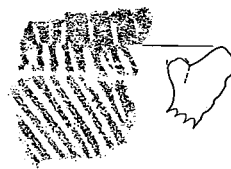
269 (J21-96)



270 (DS1-015)



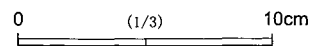
271 (DS1-016)



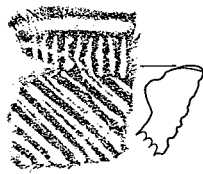
272 (DS1-062)



273 (122-17)



第113図 A・D区遺構外出土縄文土器 (11)



274 (J22-34)



275 (DSK-017)



276 (DSI-031)



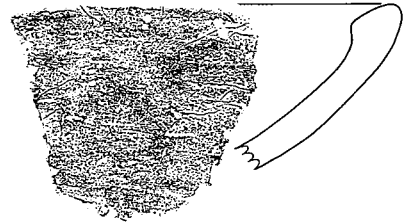
277 (D区トレンチ一括)



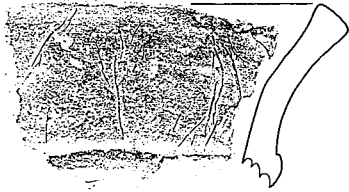
278 (K20-94)



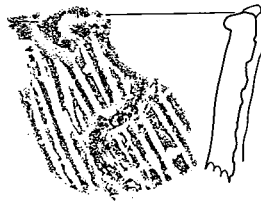
279 (9号墳)



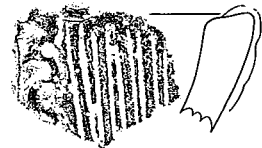
280 (DSS-001)



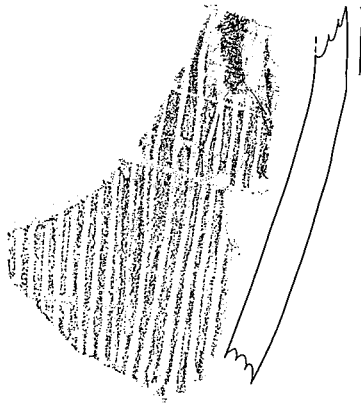
281 (DSI-035)



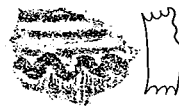
282 (I22-78)



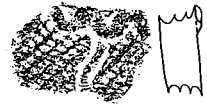
283 (H23-16)



284 (4号墳)



285 (J22-24)



286 (9号墳)



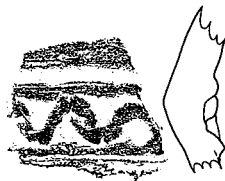
287 (9号墳)



288 (4号墳)



289 (4号墳)



290 (4号墳)



291 (8号墳)



292 (8号墳)



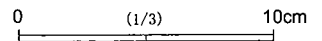
293 (9号墳)



294 (9号墳)



295 (9号墳)



第114図 A・D区遺構外出土縄文土器 (12)



296 (DSI-063)



297 (DSI-006)



298 (I21-58)



299 (D区トレンチ一括)



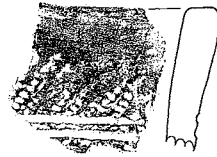
300 (DSS-001)



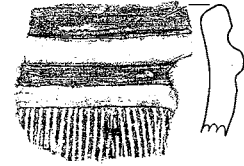
301 (I22-25)



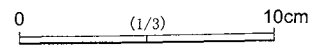
302 (DSI-013)



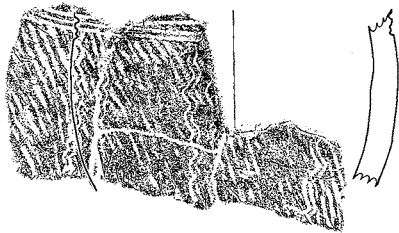
303 (J22-13)



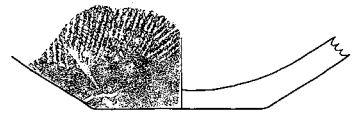
304 (9号墳)



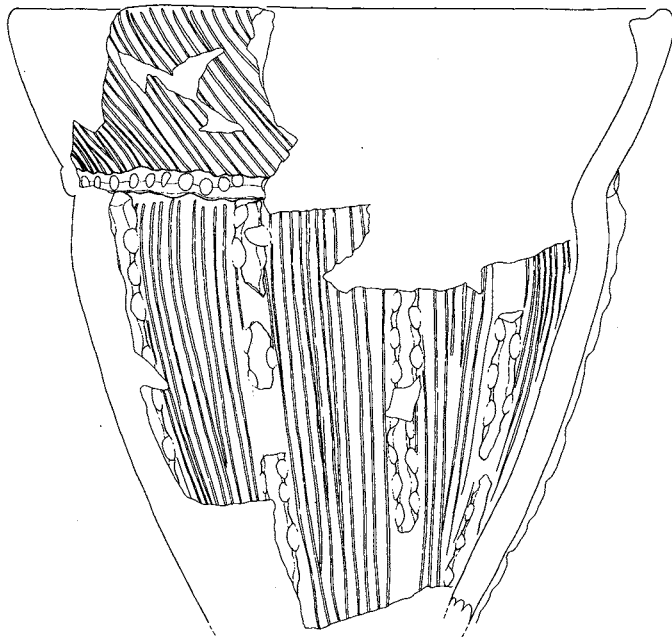
305 (DSI-010)



306 (DSS-001)



307 (J22-90)



311 (DSI-057・I22-67)



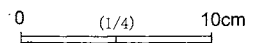
308 (J22-90)



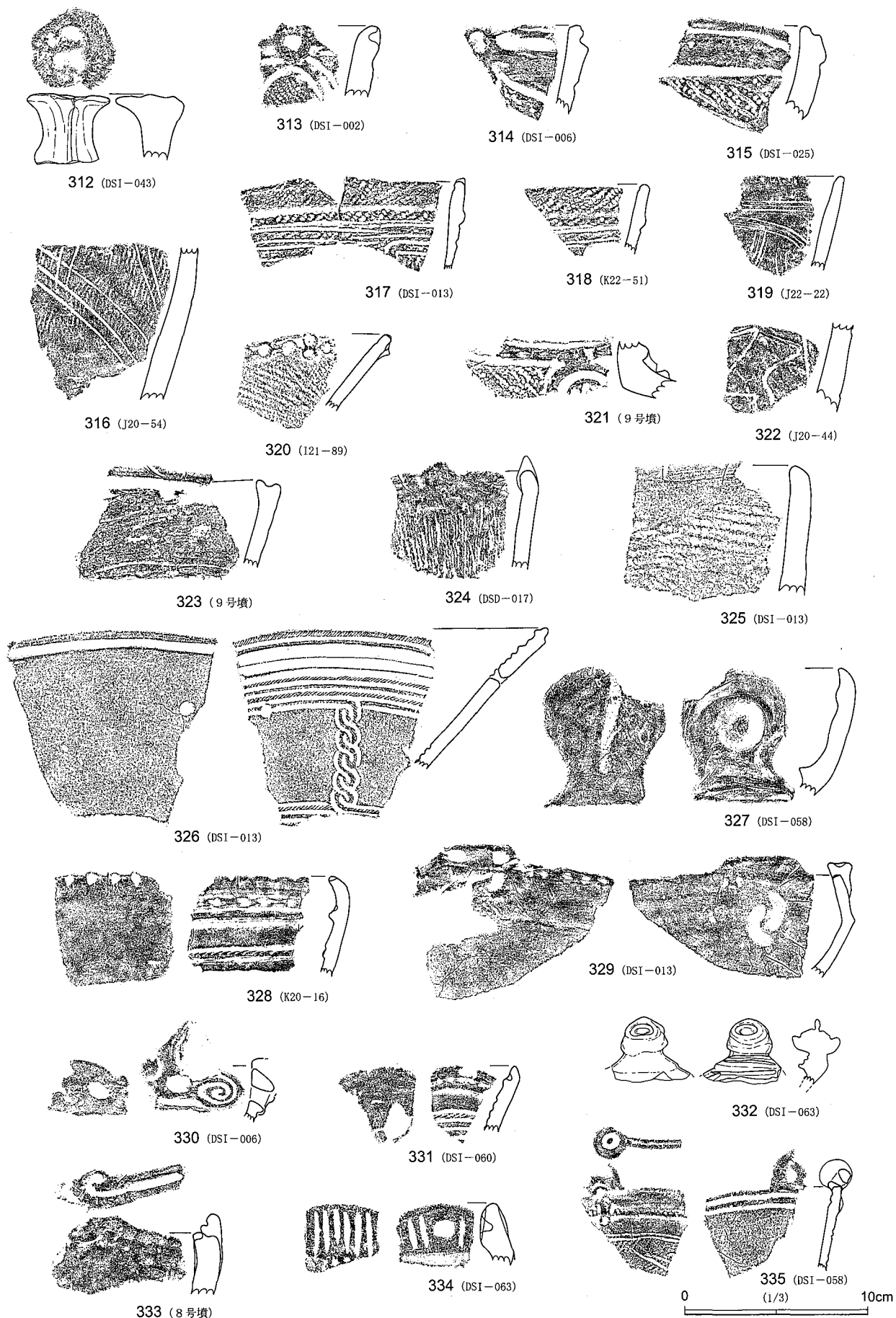
309 (8号墳)



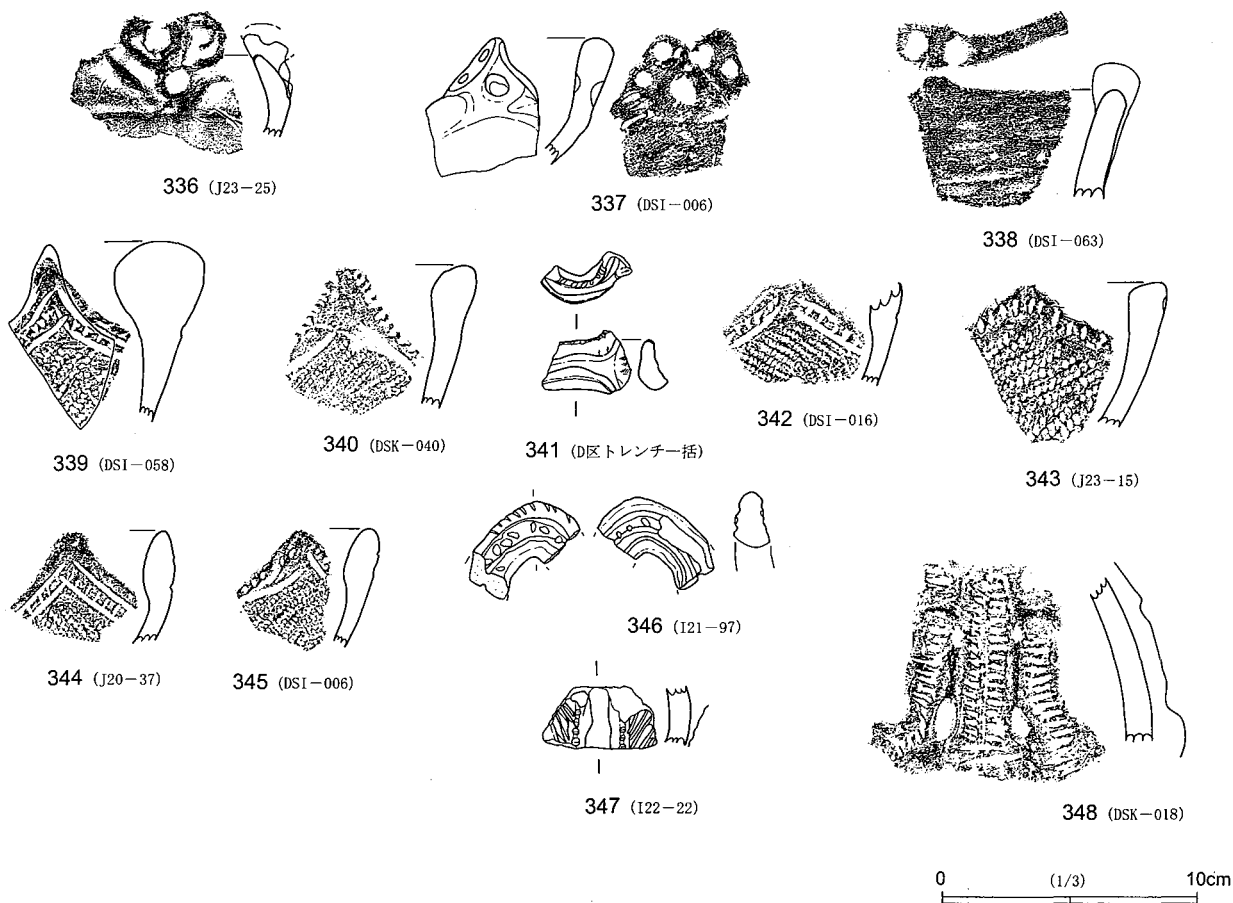
310 (J22-23)



第115図 A・D区遺構外出土縄文土器 (13)



第116図 A・D区遺構外出土縄文土器 (14)



第117図 A・D区遺構外出土縄文土器 (15)

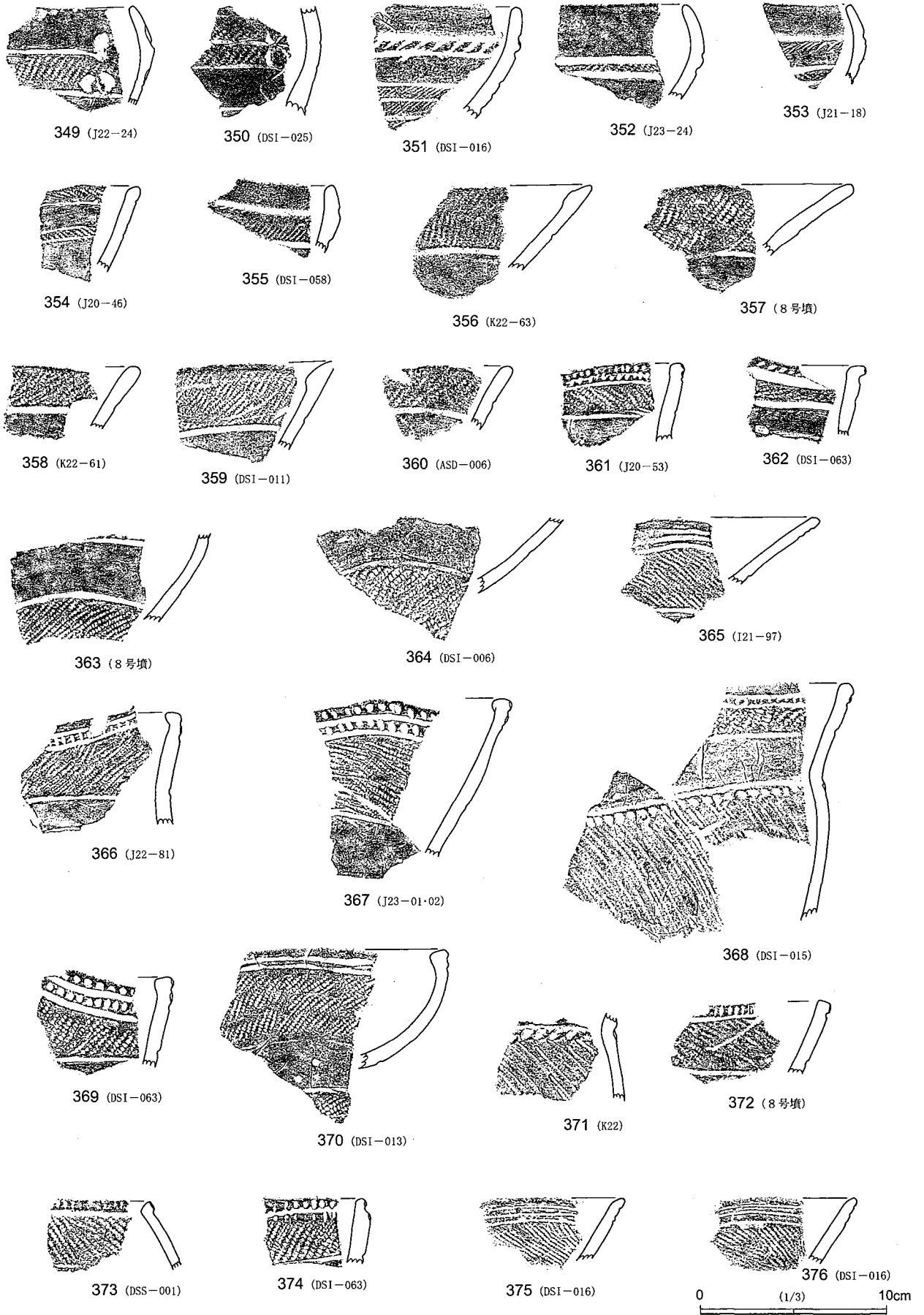
329・339～350・353・355～376・378～389・391～449・451・453～456・458～477・480～482・484・547・562・563・570・571・588・589・646・647は、加曾利B 2式・B 3式の精製土器である。中期後半とならんで遺物量は多い。358と360, 375と376, 407と408, 444～446は、それぞれ同一個体である。383・388・427はソロバン玉形の深鉢である。329・349・353・355～365・370・375～377・404・407～418・421・426・443・456・458～460・462～475・481・482・570・571は浅鉢である。特に570・571の2点は遺存状況も良好であるが、いずれも遺構に伴っていない。341・347・348・431・461・480は釣手土器である。370・380・589の時期はやや微妙で、曾谷式まで下るかもしれない。

354・390・546・548～561・564～567・569・572～587・590～600は、曾谷式から後期安行式の精製土器である。先行する時期に比べ遺物量は減少していき、後期末はほとんど出土しなくなる。576・577・579は同一個体である。354・558は浅鉢である。390は壺形もしくは注口土器で、文様などから曾谷式の可能性が強いと判断した。564は東北系の土器と考えられる。569はいわゆる高井東式に相当するものであるが、文様は極めて不鮮明である。なお、遺構の部分でも述べたが、この土器の出土地点はSI-041住居跡に重なる。

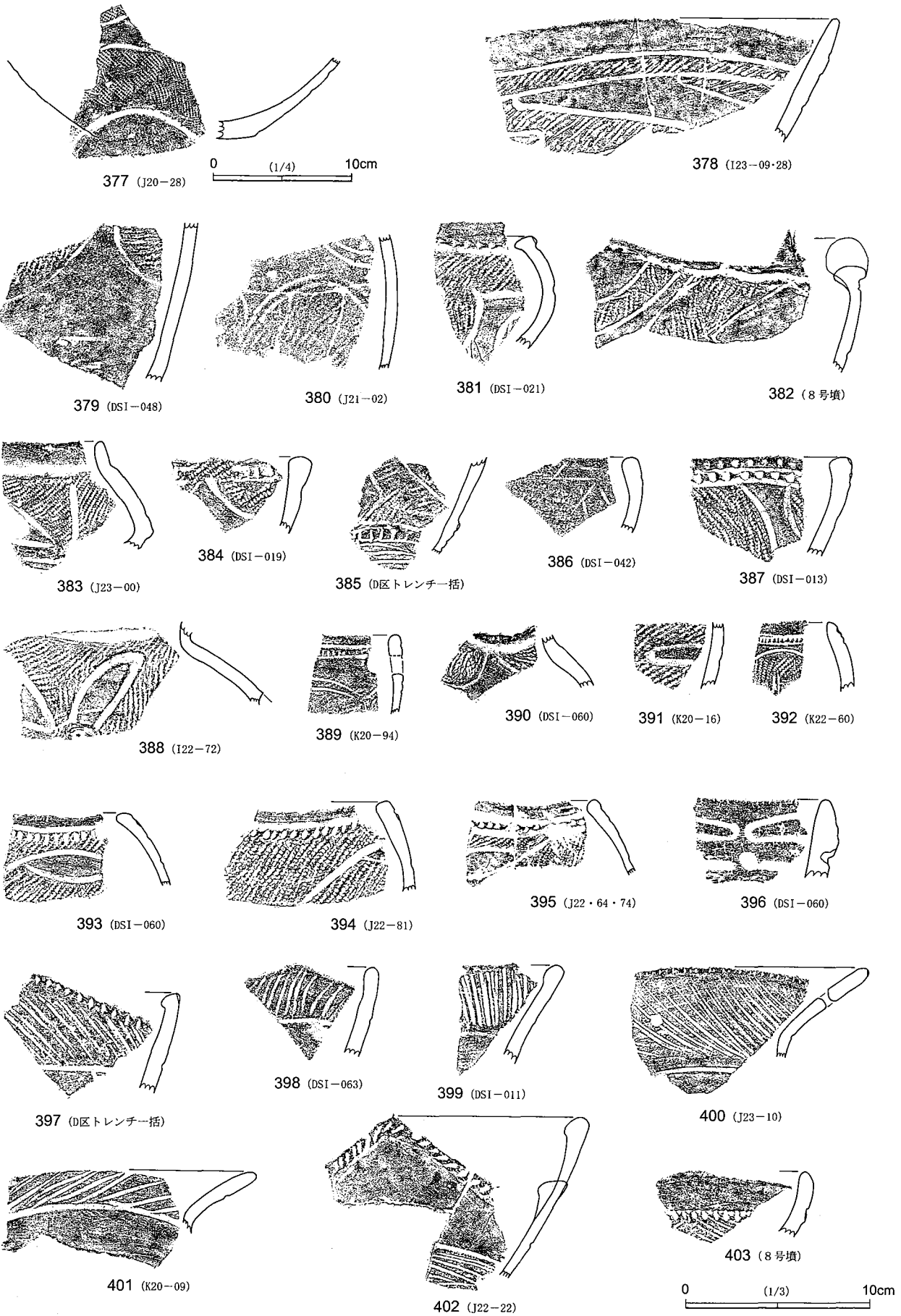
457・483・485～545・568・601～624・626・627は、後期中葉から末にかけての粗製深鉢形土器である。485と487, 604と606, 607と611は、それぞれ接合する。544と545は同一個体である。568も出土地点はSI-041住居跡に重なる。

628～644は後期土器の底部である。加曾利B式が主体となろう。

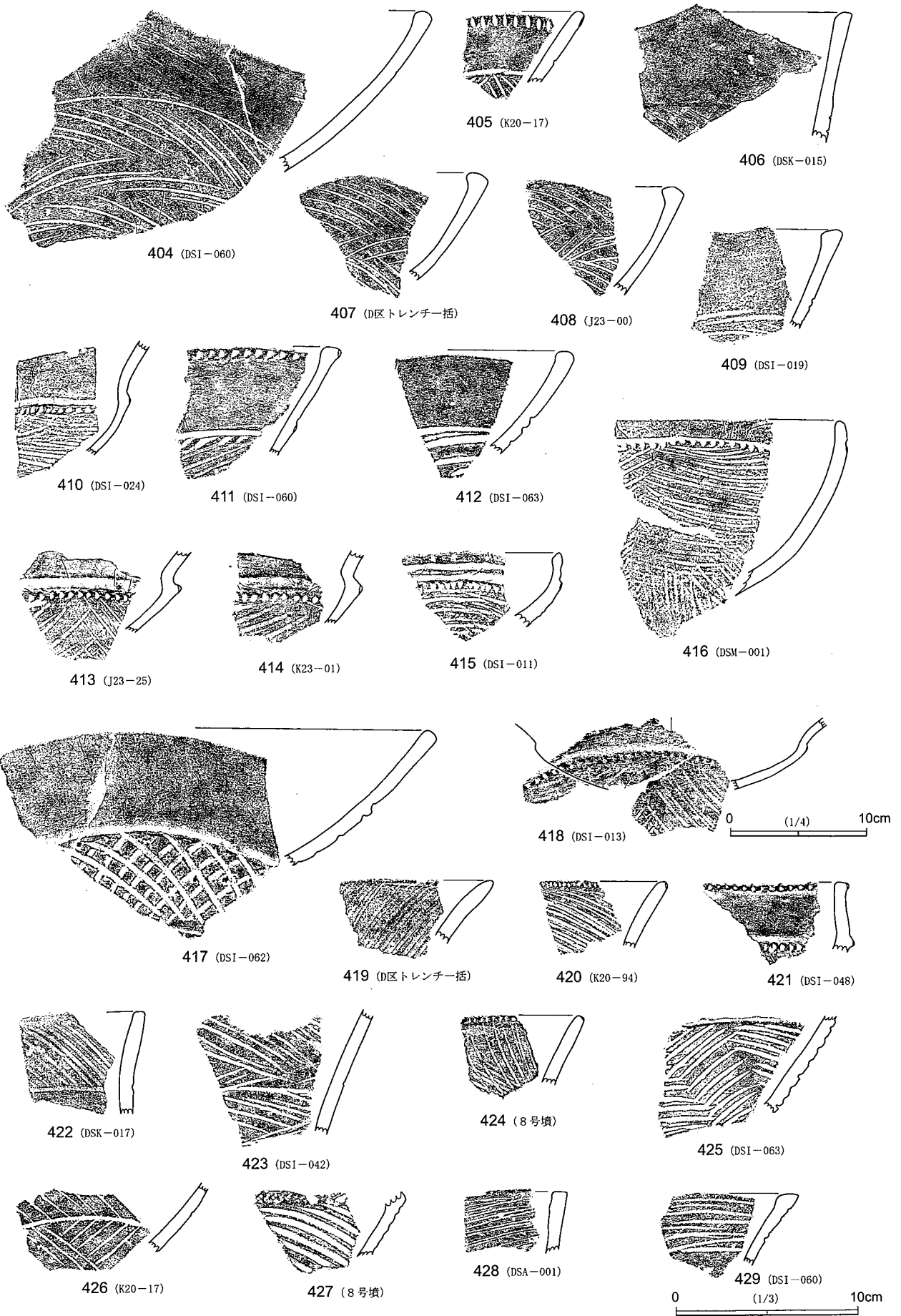




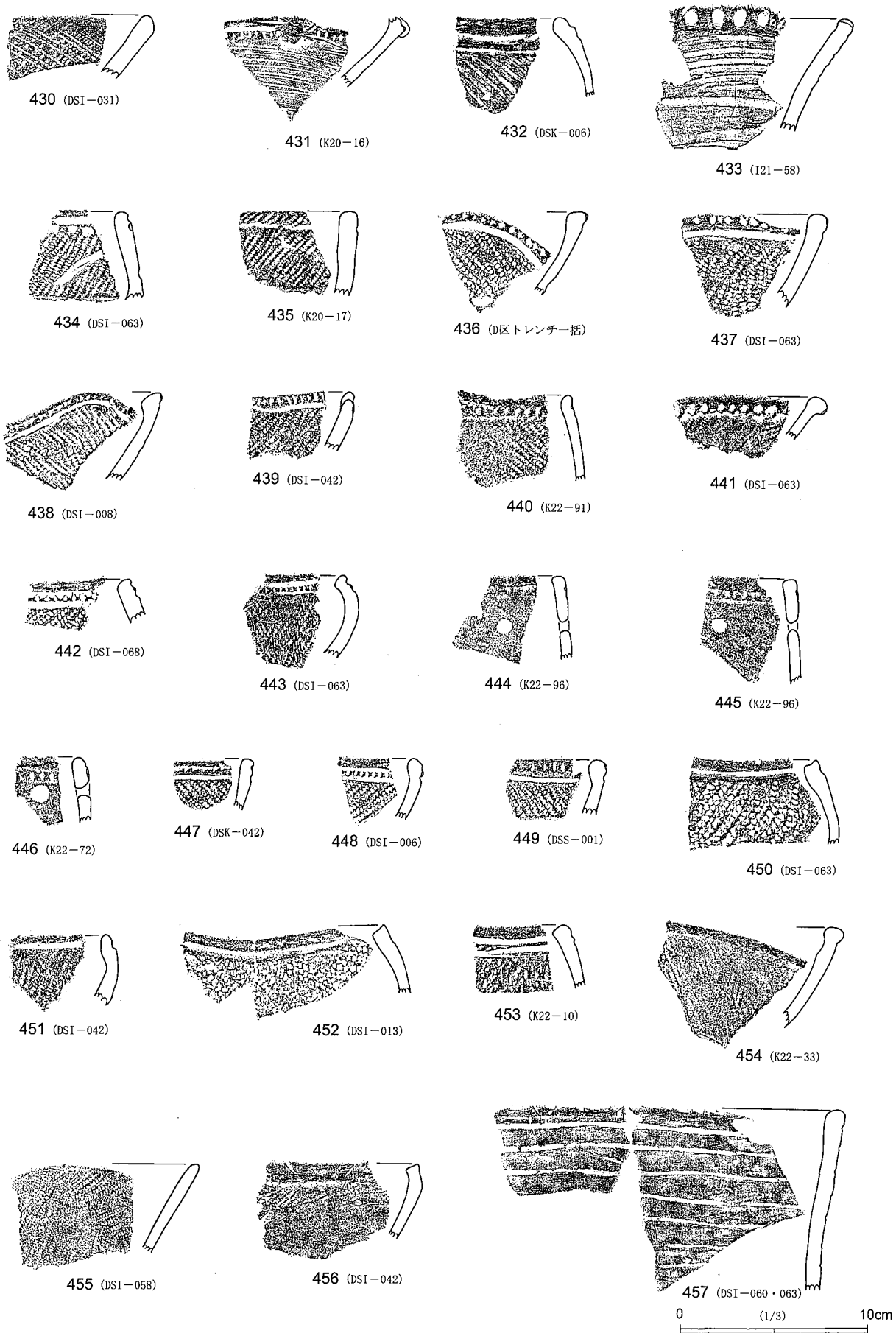
第118図 A・D区遺構外出土縄文土器 (16)



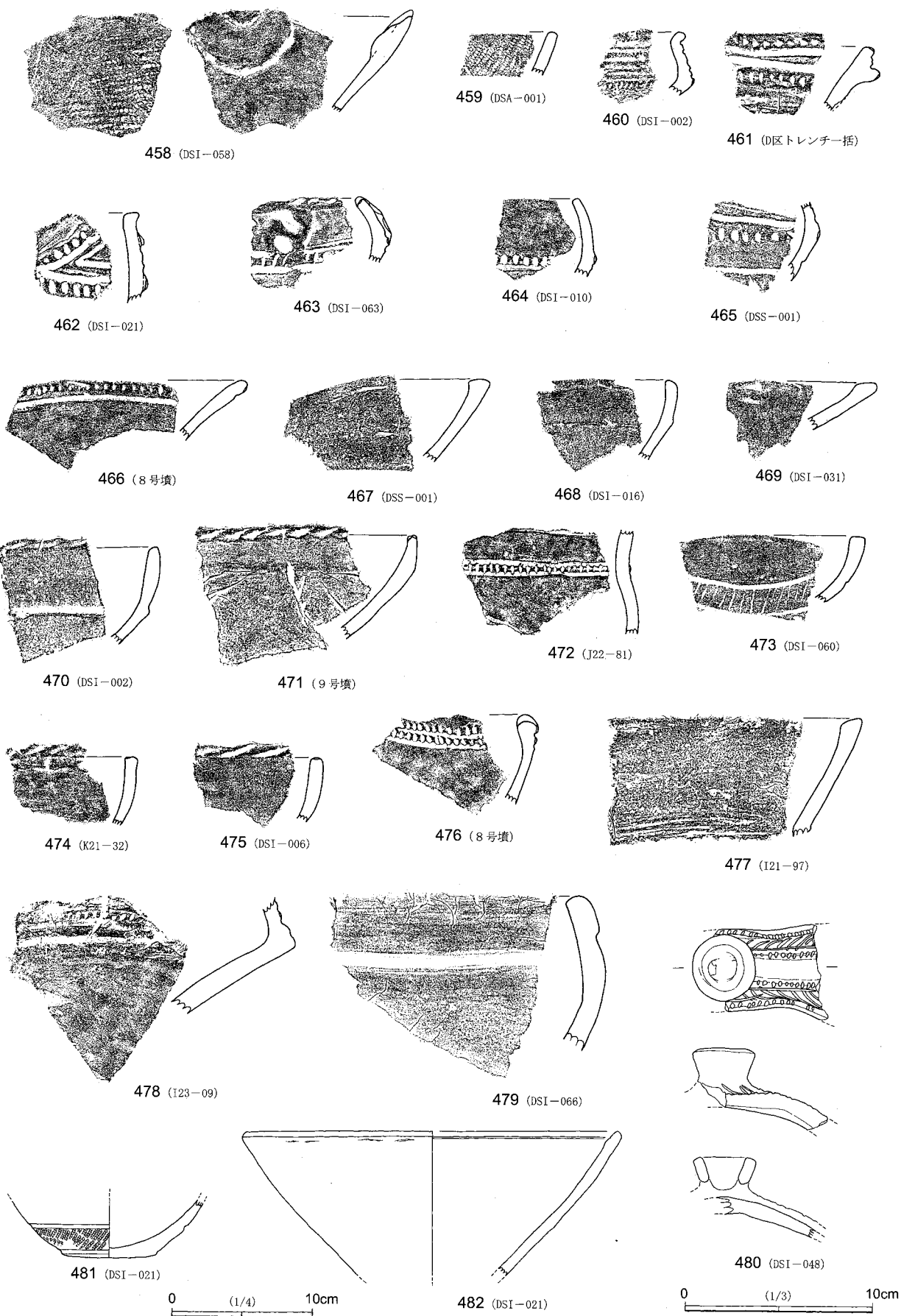
第119図 A・D区遺構外出土縄文土器 (17)



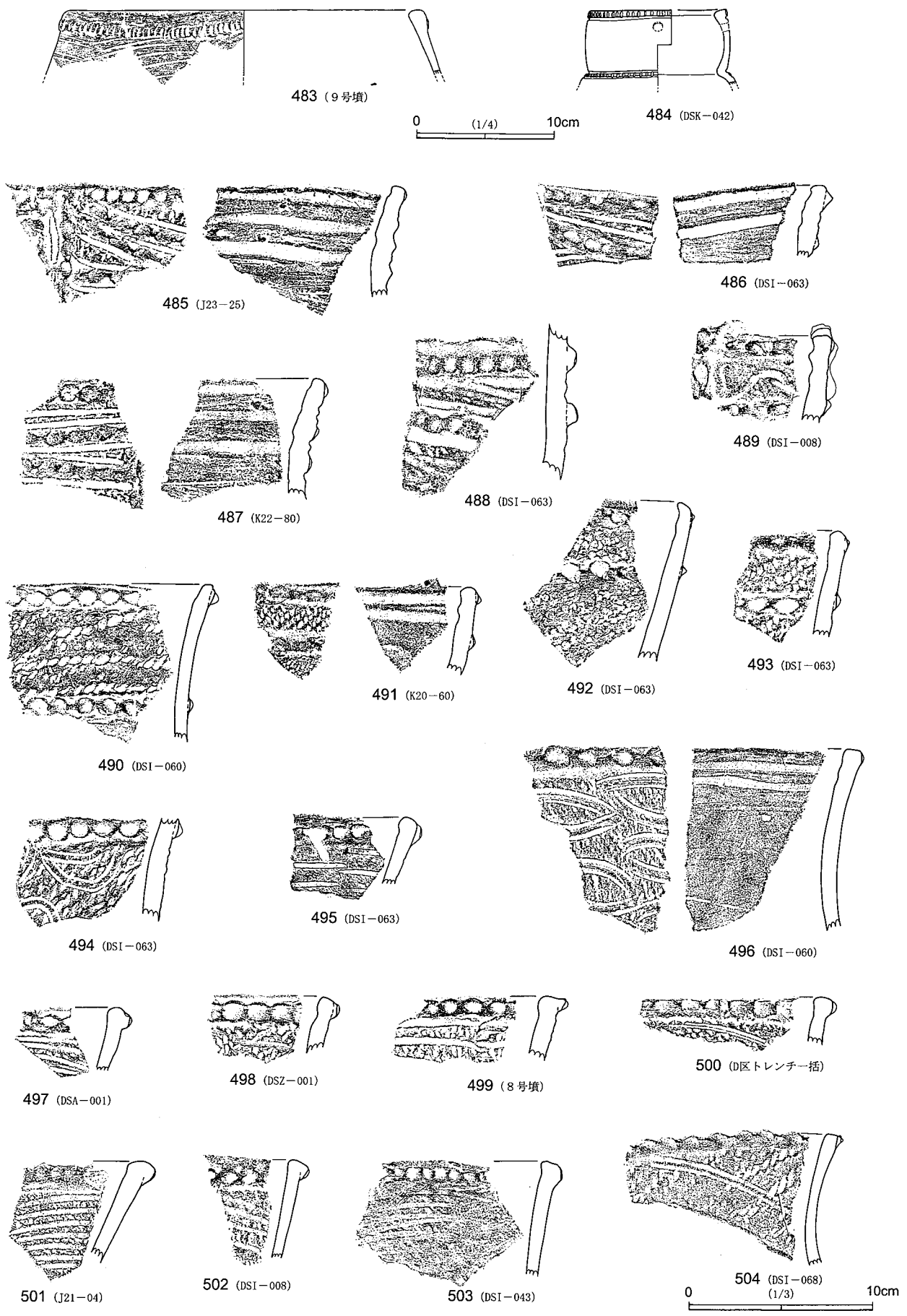
第120図 A・D区遺構外出土縄文土器 (18)



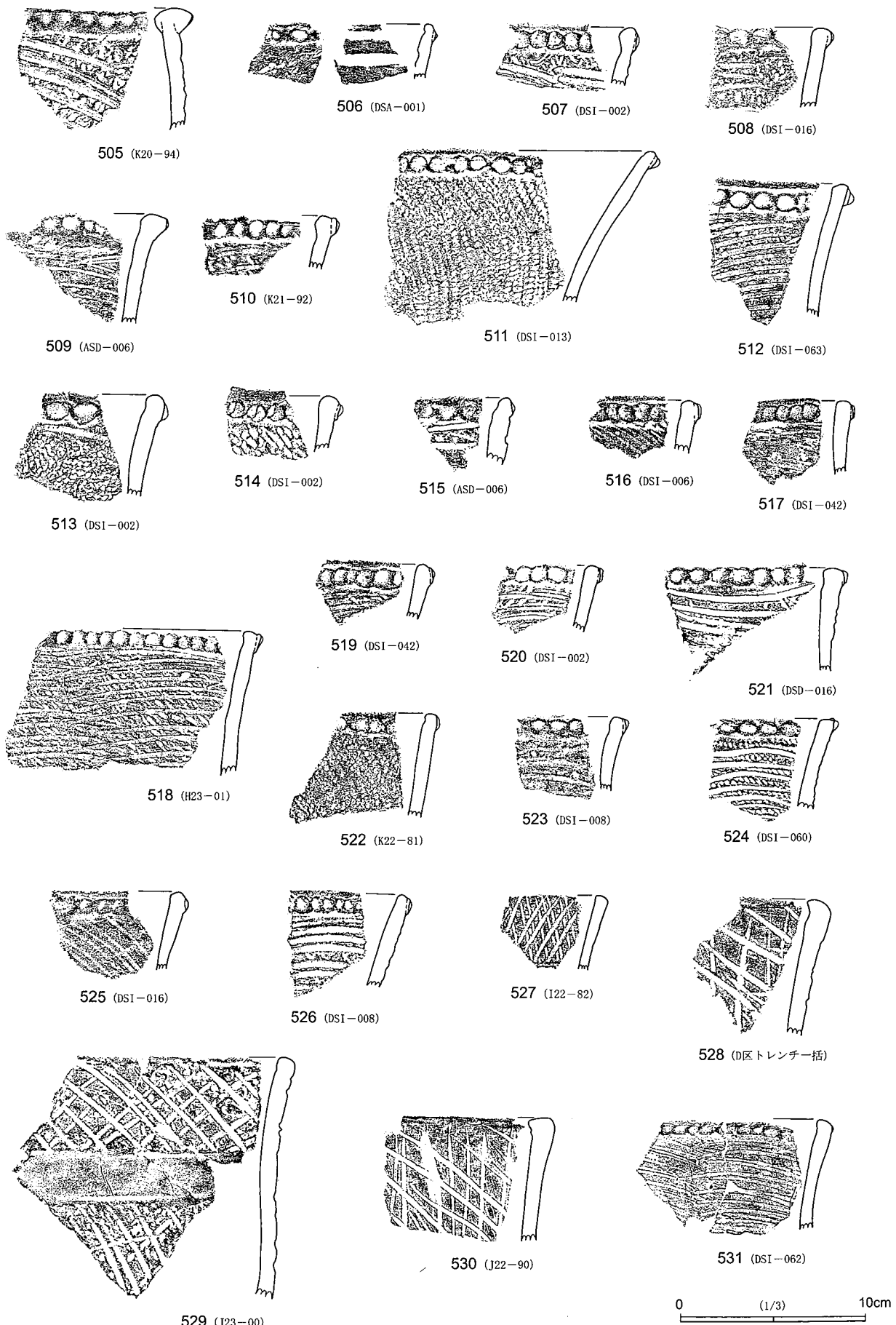
第121図 A・D区遺構外出土縄文土器 (19)



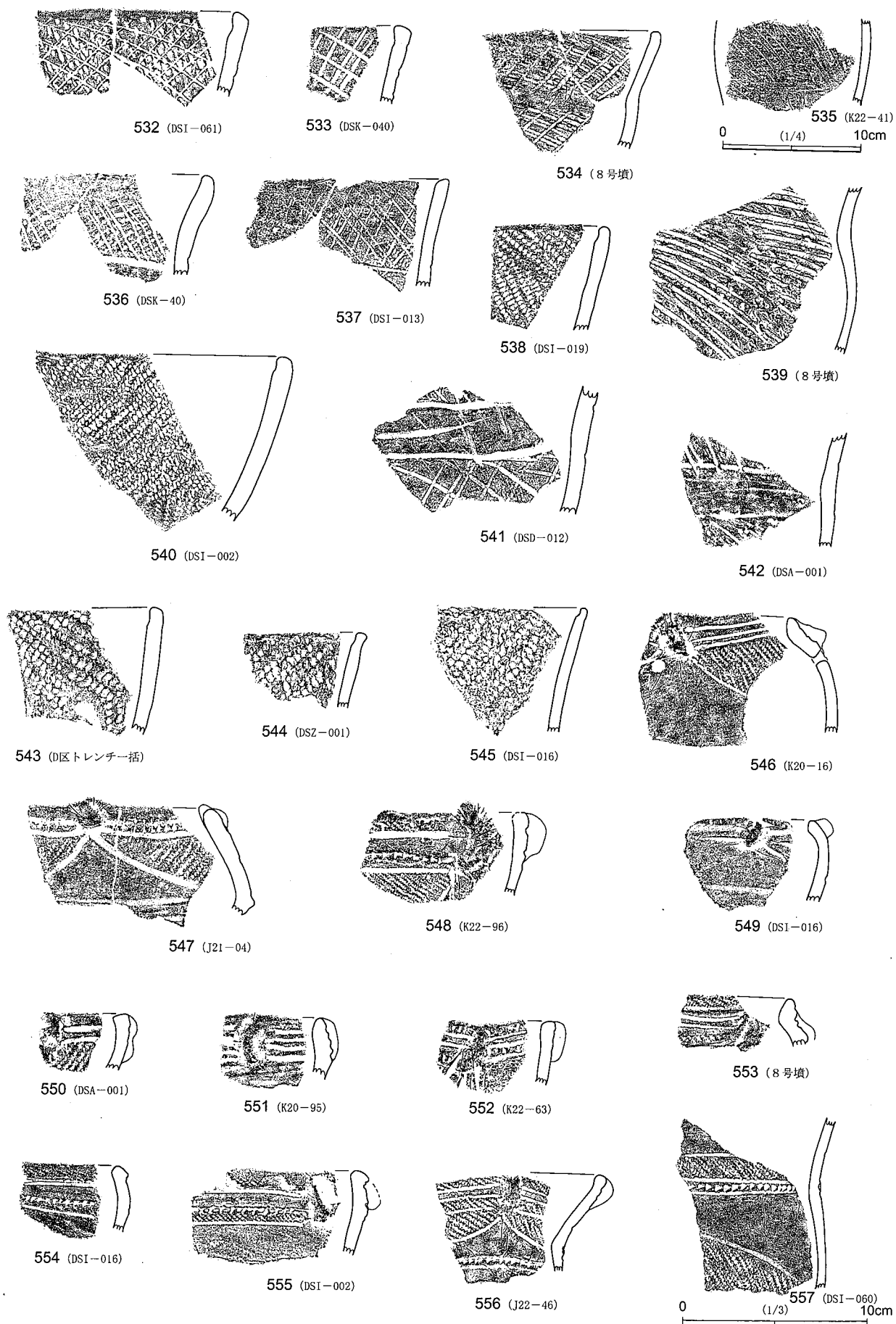
第122図 A・D区遺構外出土縄文土器 (20)



第123図 A・D区遺構外出土縄文土器 (21)

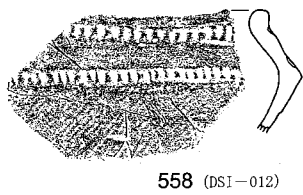


第124図 A・D区遺構外出土縄文土器 (22)



第125図 A・D区遺構外出土縄文土器 (23)





558 (DSI-012)



559 (9号墳)



560 (DSD-020)



561 (DSI-063)



562 (DSI-008)



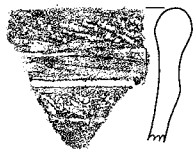
563 (DSK-018)



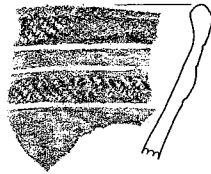
564 (K20-16)



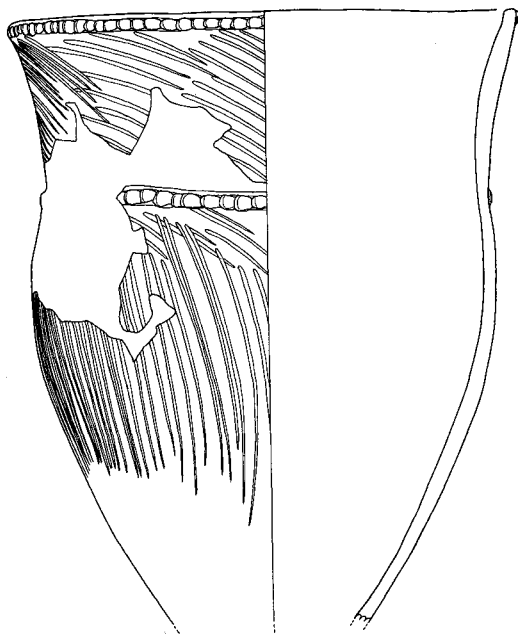
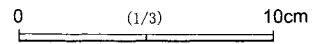
565 (D区トレンチャー括)



566 (K20-16)



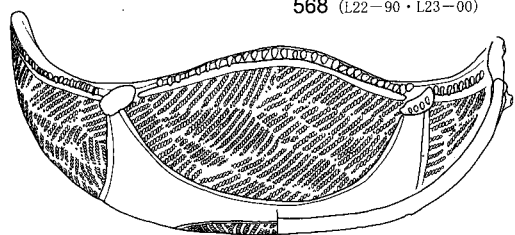
567 (DSI-058)



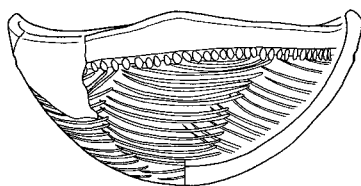
569 (L22-90・L23-00)



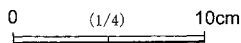
568 (L22-90・L23-00)



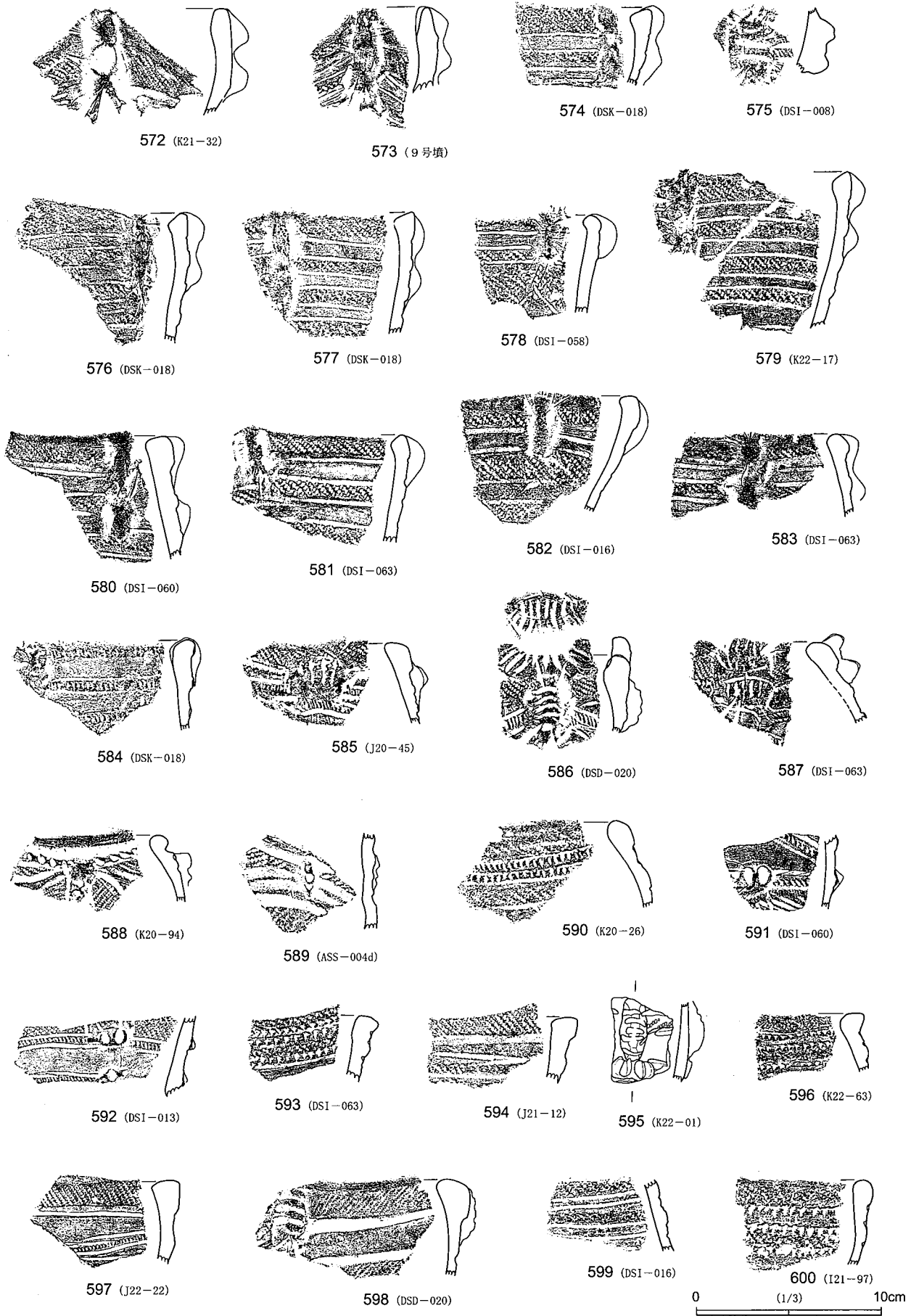
571 (DSI-021)



570 (8号墳)



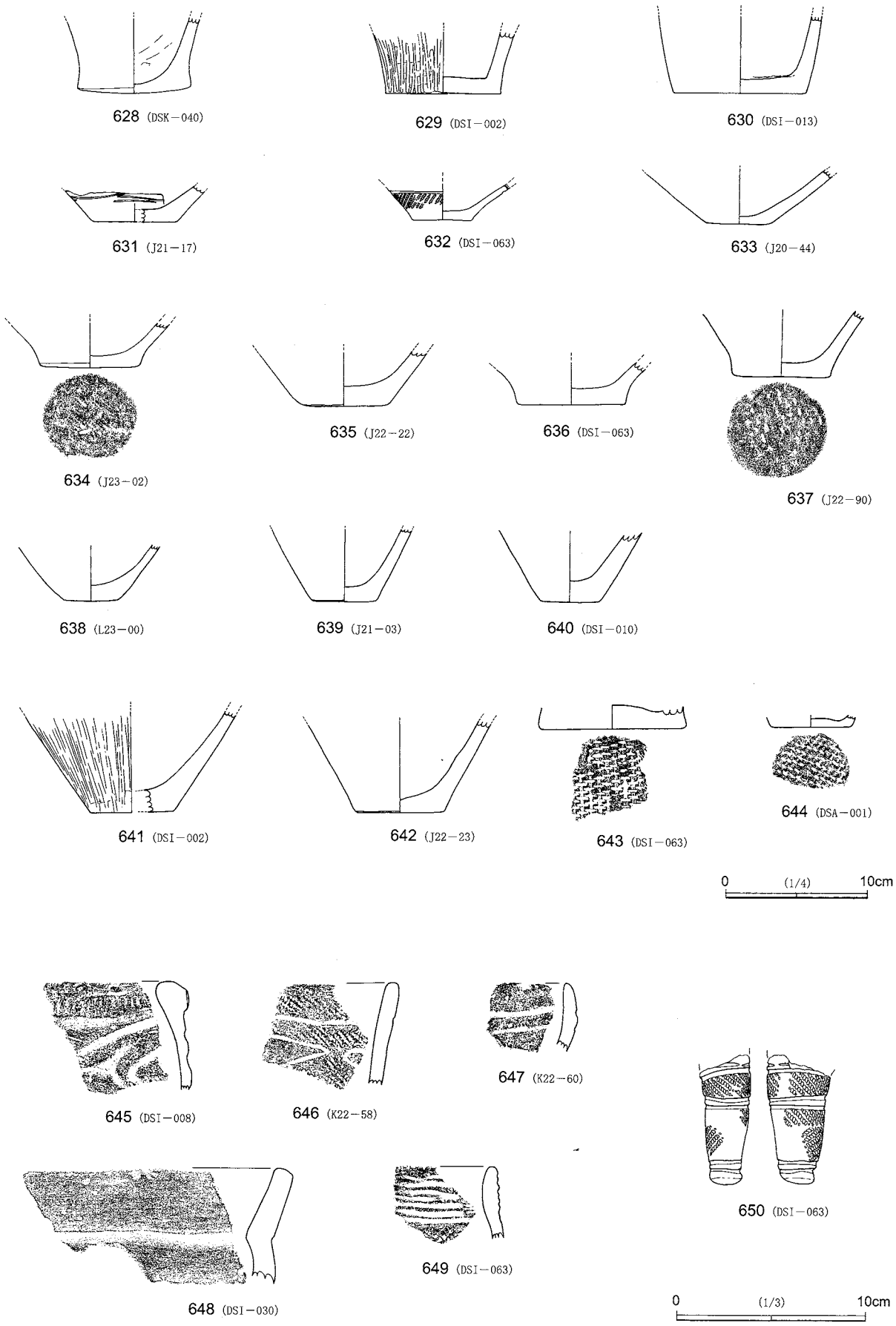
第126図 A・D区遺構外出土縄文土器 (24)



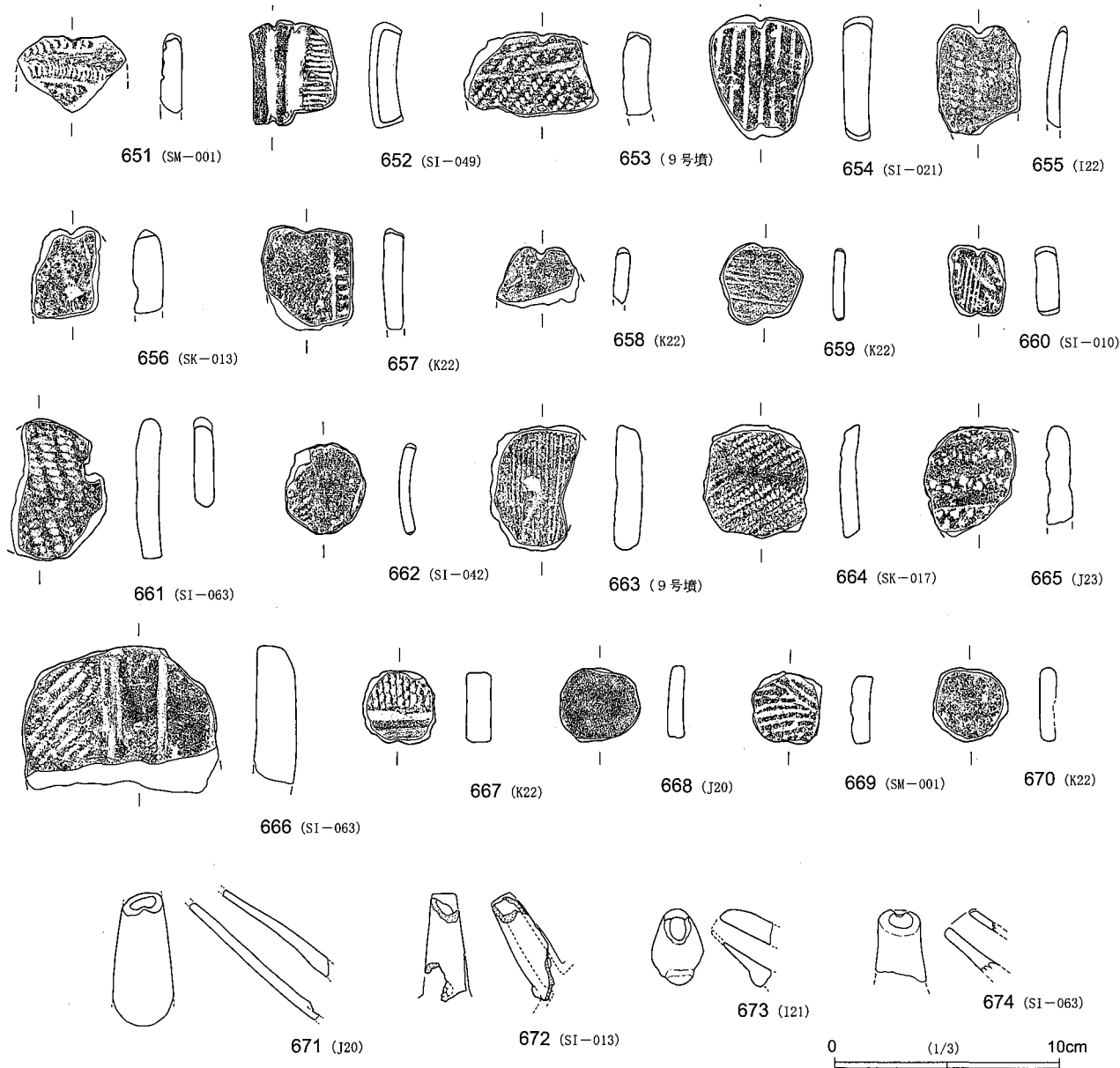
第127図 A・D区遺構外出土縄文土器 (25)



第128図 A・D区遺構外出土縄文土器 (26)



第129図 A・D区遺構外出土縄文土器 (27)



第130図 D区出土土製品

後期はD区出土がほとんどとなり、また、中期に比べ相対的に調査区の東側の出土が多くなる。大形住居跡を中心とする中葉から後葉にかけての遺構の分布域と、ある程度重なるのは当然とも言えるが、調査区西端部の尾根地形からの出土が大きく減少することは、中期に比べ土地の利用法が変化したことを物語っているとも言える。

377・625・645・649は晩期に属する資料である。377は分かりにくいですが、調整や焼成などから晩期初頭とみなした。645は紐線文の粗製深鉢に三叉文が施されるもの。649は口縁部に撚糸文が横位に施されるもので、晩期後葉にあたる。晩期の資料は、D区北西部のごく限られた地点から出土するのみとなる。

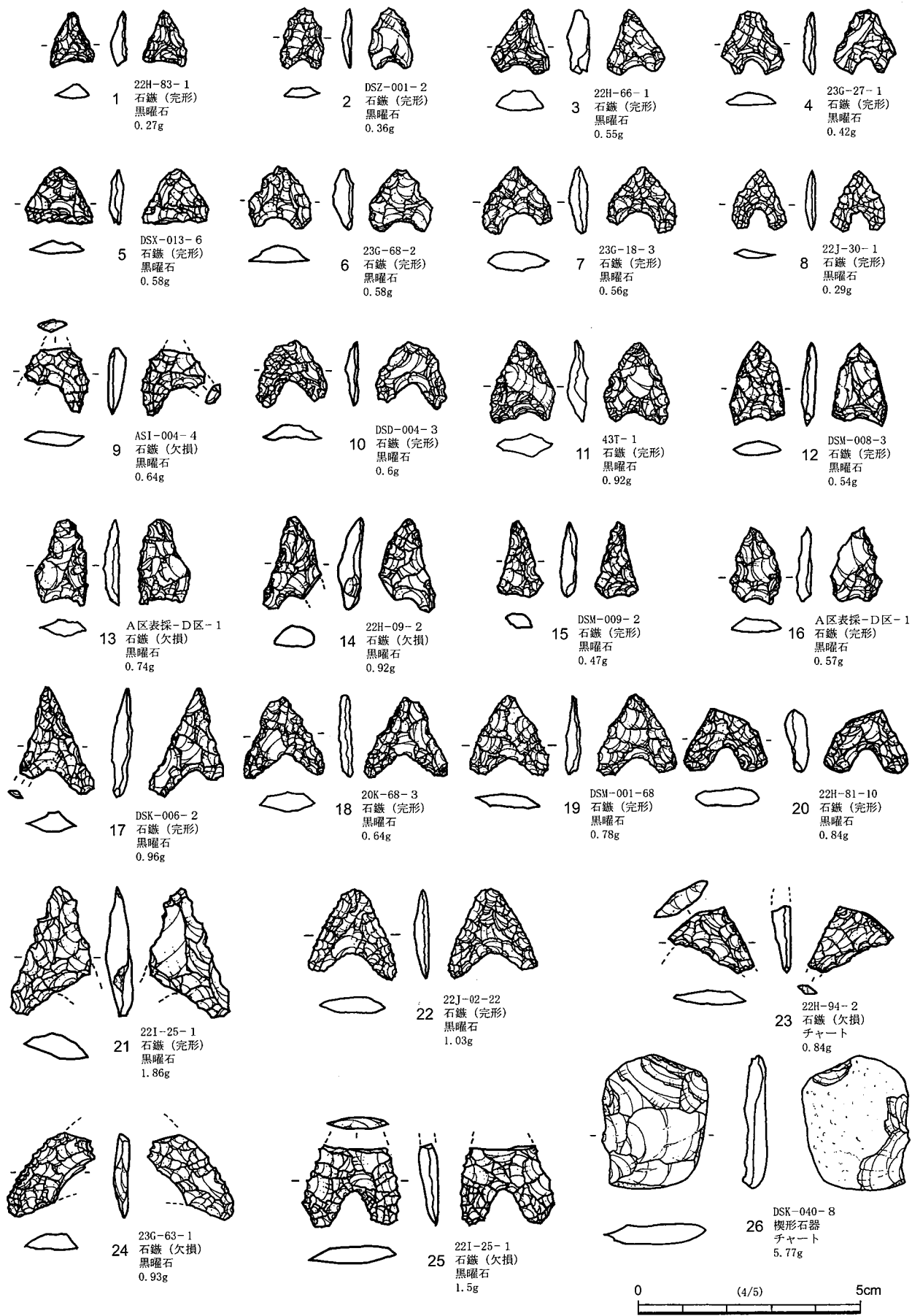
土製品はごく少ない。650は山形土偶の脚部である。651～662は土器片錘、663～670は土製円盤である。671～674は注口土器の注口部で、後期前～中葉のものが主体であろう。

## 5. 遺構外出土石器 (第131～140図, 図版85～89・91)

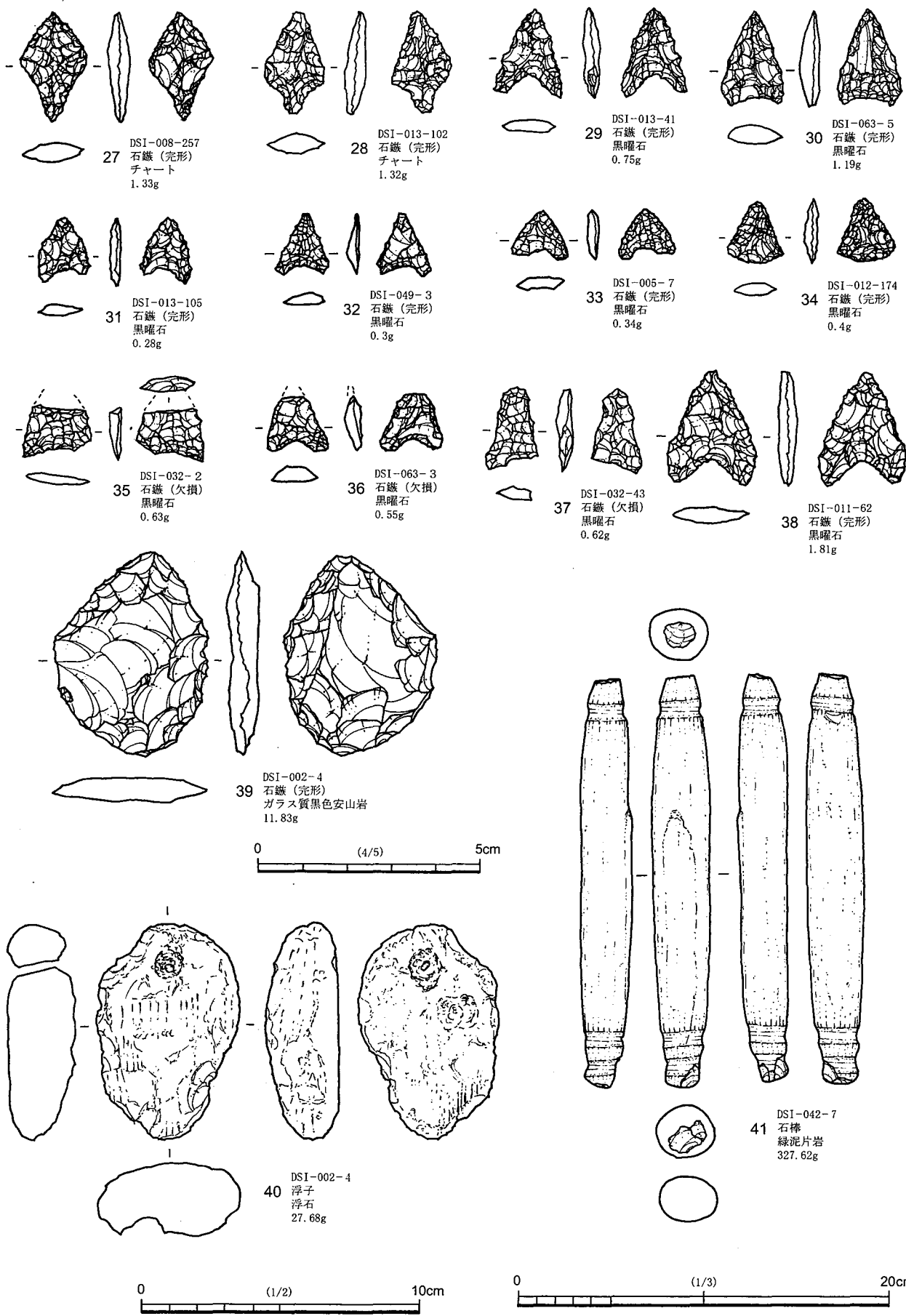
遺構外出土石器の所産時期は、形態の特徴や石材構成や分布状況から、ほとんどのものが、遺構の所産時期とほぼ一致し、中期後半の加曽利E I～II式と後期中葉～後葉の二時期であると思われる。これらの石器を第131～139図に図示した。このほかに、縄文時代草創期石器、あるいは、旧石器時代所産の石器である可能性のあるものを第140図に図示した。

1～25・27～39は石鏃である。1～25・29～38は黒曜石が用いられており、サイズや形態もまとまりを持ち、同一の時期の所産のものである可能性がある。加曽利E I～II式を主体とする石鏃製作関連遺構から出土している石鏃も黒曜石が主体でサイズや形態も類似していることから、これらの大半が加曽利E II式および曾利系の時期の所産である可能性が高い。これに対して、27・28・39は、石材や形態が異なり、他の時期の所産のものである可能性が高い。1～10・31～34は小型で正三角形を呈するもので、脚部の扱りは1～6・32・33が浅く、7～10・31がやや深い。34は基部が突出している。11～16・37は小型で二等辺三角形を呈するもので、脚部の扱りが浅い。17～25・35・36・38は中型で正三角形を呈するもので、脚部の扱りが深い。29・30は中型で二等辺三角形を呈するもので、脚部の扱りは29が深く、30が浅い。27・28はチャートが用いられており、基部が突出する凸基有茎鏃である。後期・晩期によくみられる形態を呈する。39はガラス質黒色安山岩を用いた円基鏃である。40は軽石製の浮子である。平坦面上部は両面から穿孔されている。41はほぼ完形の両頭の石棒である。頭部のくびれは弱く、頭部の溝状の窪みは、上部が1条、下部が2条みられる。42～54・68・69は打製石斧である。42～45が撥形、46・47が分銅形、48～54・68・69が短冊形を呈しており、短冊形の割合が高い。ほとんどのものが、使用時の磨痕や刃部再生が行われた痕跡がみられる。55～58・70は磨製石斧である。55・58は刃部の研磨はそれほど顕著ではなく、礫石斧に分類できる可能性もある。56は下端部と表面平坦部と敲打痕が顕著にみられ、敲石に転用された可能性がある。57・70は刃部の研磨が顕著に行われており、定角式磨製石斧である。59～63は礫器である。楕円形の礫の一端に粗い調整加工が加えられている。64～67・71～73は敲石である。64・65は長楕円形礫の上下両端に敲打痕がみられる。67は扁平で三角形をした円礫を素材として、下端部の突出部と裏面の平坦面中央部に敲打痕がみられる。71は厚みのある楕円形礫の下端部に顕著な敲打痕がみられる。72は下端部の突出部に敲打痕がみられる。73は扁平な楕円形礫を素材として、下端部と左側縁下部に顕著な敲打痕がみられる。66は凹石である。表面の平坦面上部に凹痕がみられる。75は浮子である。長方形を呈し、平坦面上部に両面から穿孔されている。全体形状はSI-018出土の67と類似している。74・76～79は墨形石製品である。砂岩製で全面が研磨されている。典型例は、SI-018出土の64～66であるが、76が最も類似する。75のような長方形を呈する浮子と76などの墨形石製品との共伴事例に着目して、墨形石製品の機能等を分析する必要があるように思われる。77・78は板状の形態を呈するが、全体形状は長方形を呈しておらず、77・78を素材として、左右上下を分割して、76のような長方形の形態をした墨形石製品が製作された可能性がある。74・79は厚みのある砂岩を素材としている。76や77・78と近接した地点から出土しており、石質や研磨の方法が類似していることから、墨形石製品として分類したが、典型例ではなく、墨形石製品とは別の分類をする必要があるかもしれない。80は石棒である。下端部に顕著な敲打痕がみられる。81・82は石皿である。81は多孔質の安山岩を用いている。82は大型の石皿で、粒子の粗い流紋岩を用いている。約1/3程度の残存品であるが、全体形状は隅丸方形を呈すると思われ、器体中央の凹みは楕円形を呈する。

縄文時代草創期、あるいは、旧石器時代の所産の可能性のある石器を第140図に図示した。SI-061出土

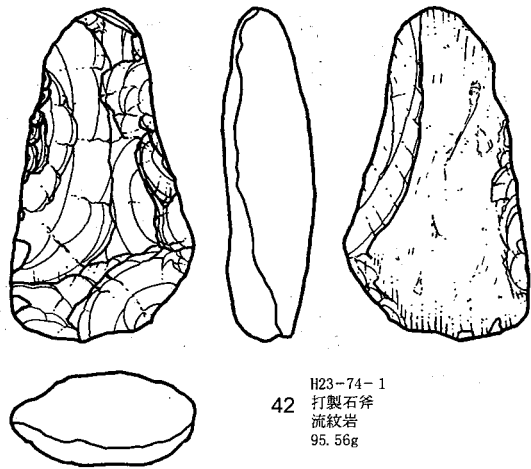


第131図 D区遺構外出土石器 (1)

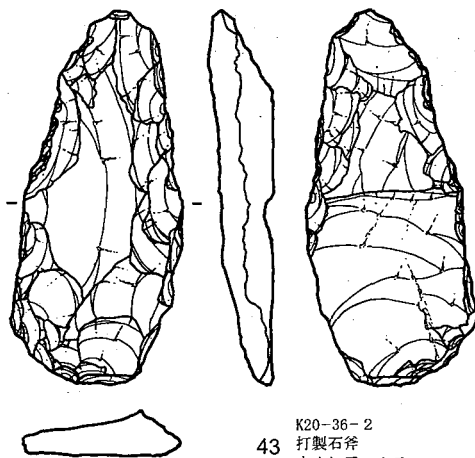


第132図 D区遺構外出土石器 (2)

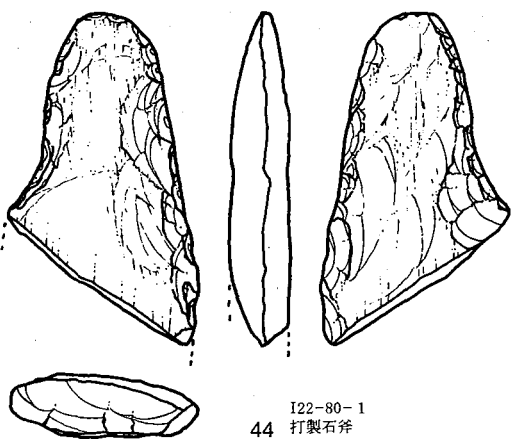




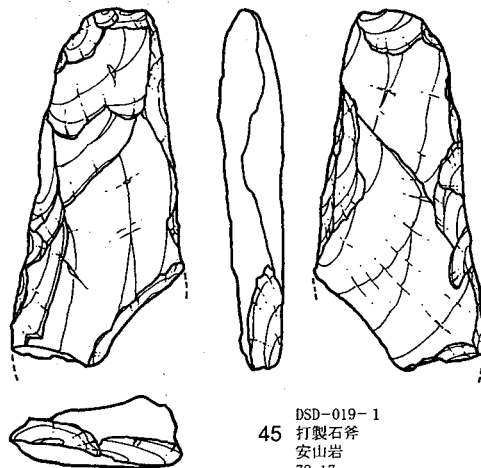
42 H23-74-1  
打製石斧  
流紋岩  
95.56g



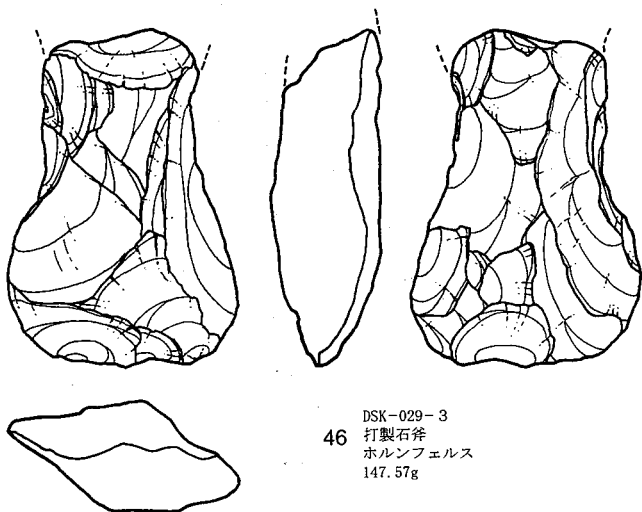
43 K20-36-2  
打製石斧  
ホルンフェルス  
66.54g



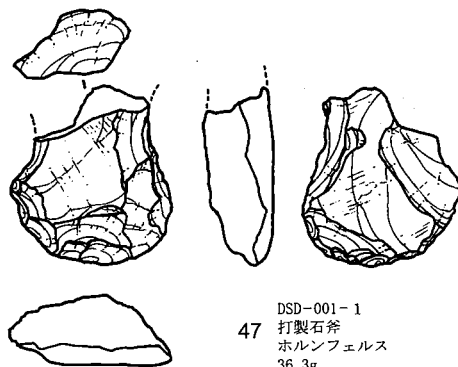
44 I22-80-1  
打製石斧  
ホルンフェルス  
66.85g



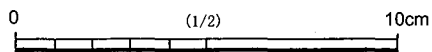
45 DSD-019-1  
打製石斧  
安山岩  
78.17g



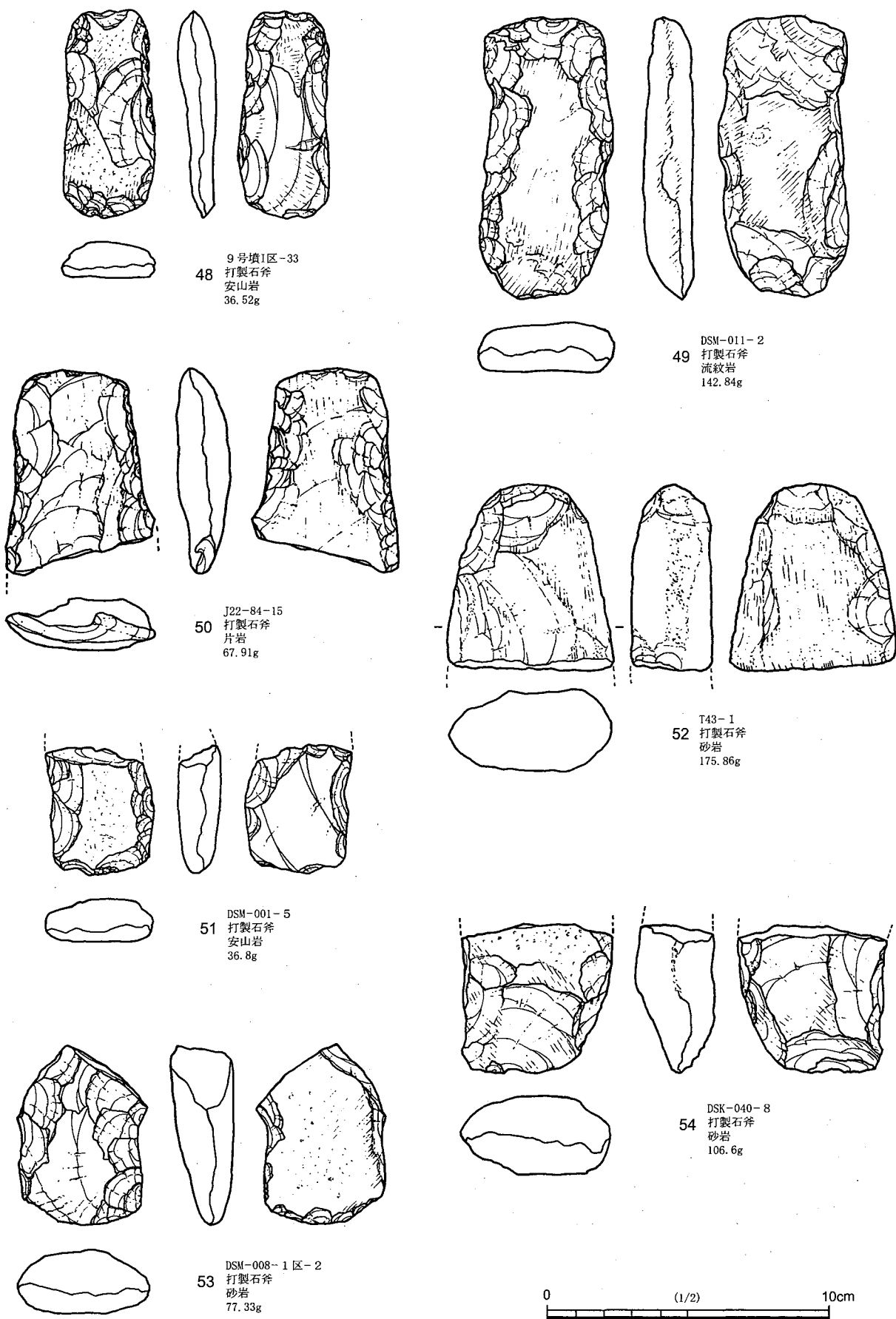
46 DSK-029-3  
打製石斧  
ホルンフェルス  
147.57g



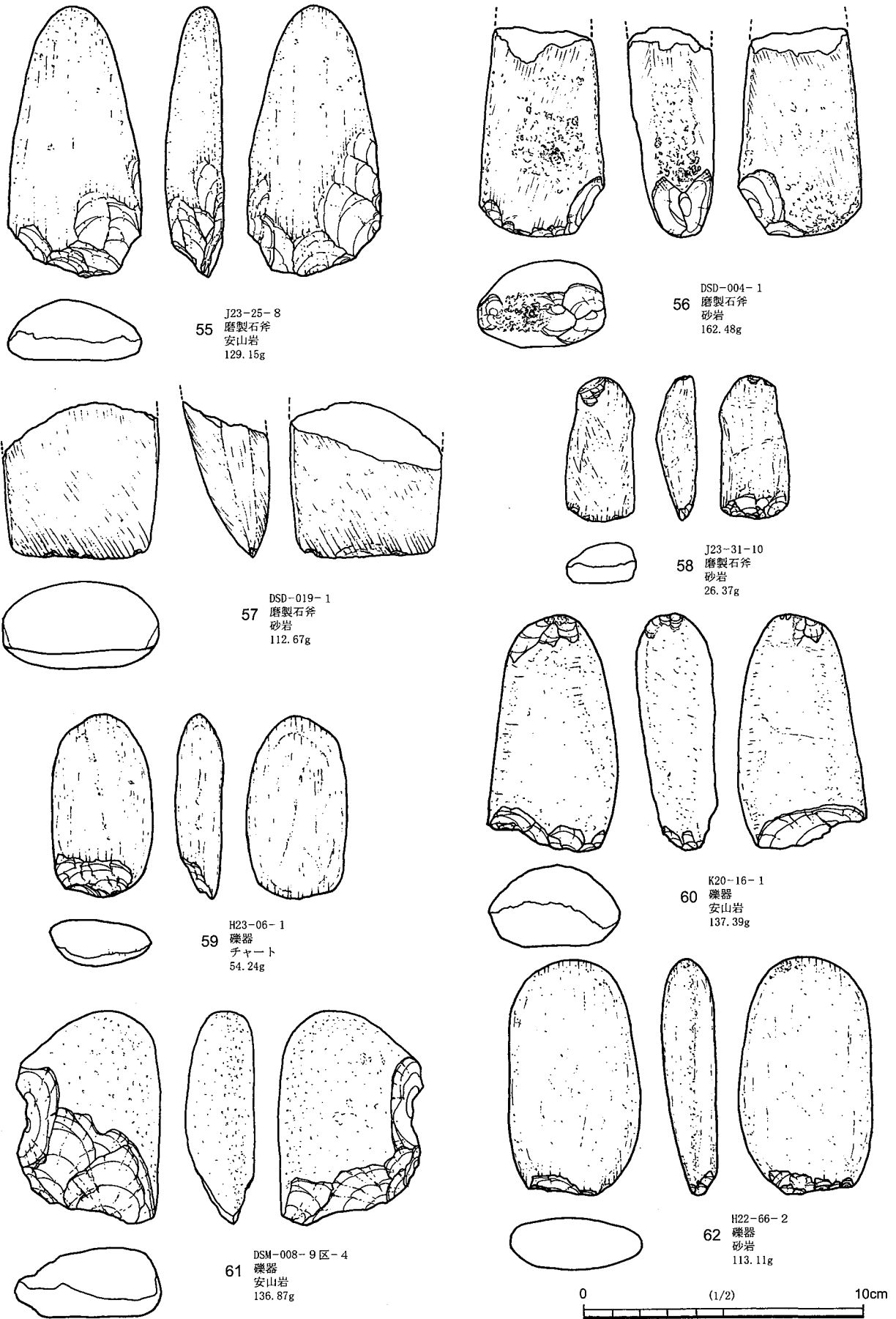
47 DSD-001-1  
打製石斧  
ホルンフェルス  
36.3g



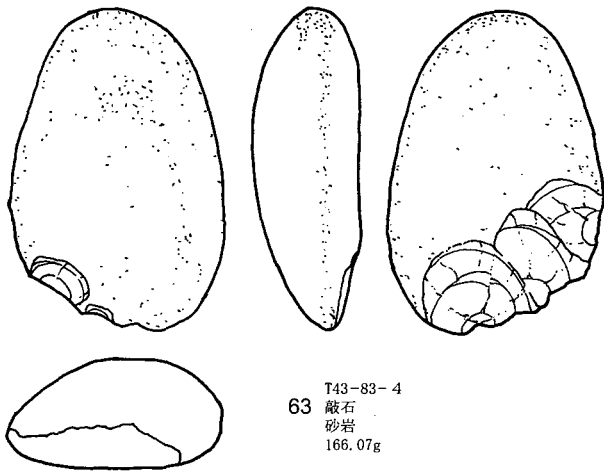
第133図 D区遺構外出土石器(3)



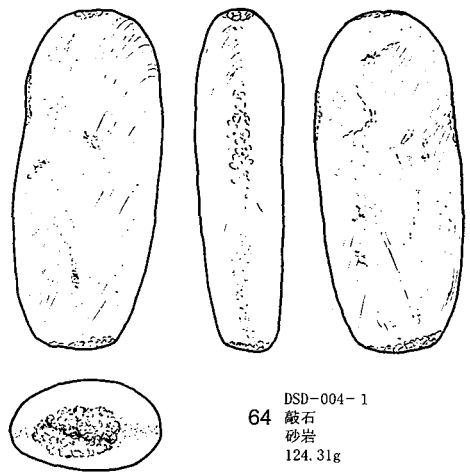
第134图 D区遺構外出土石器(4)



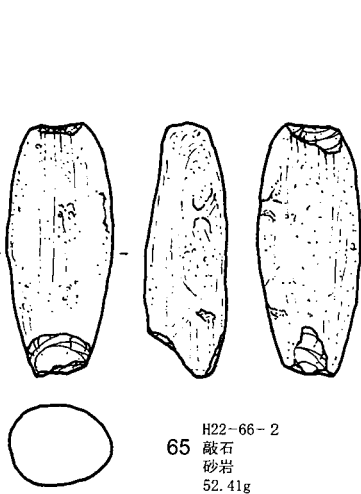
第135图 D区遺構外出土石器(5)



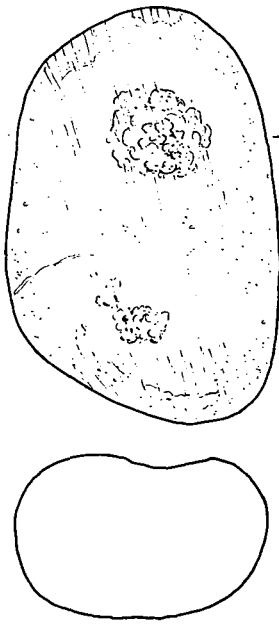
63 T43-83-4  
敲石  
砂岩  
166.07g



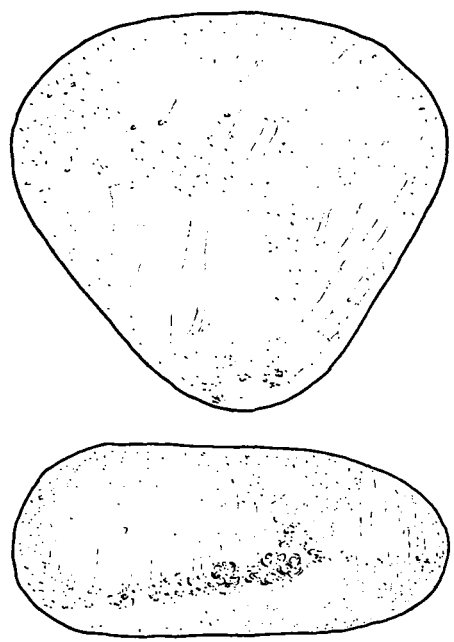
64 DSD-004-1  
敲石  
砂岩  
124.31g



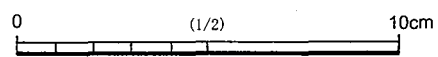
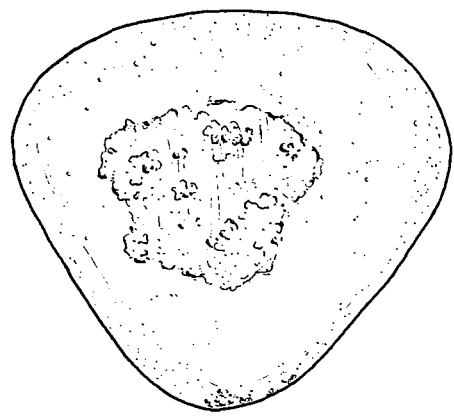
65 H22-66-2  
敲石  
砂岩  
52.41g



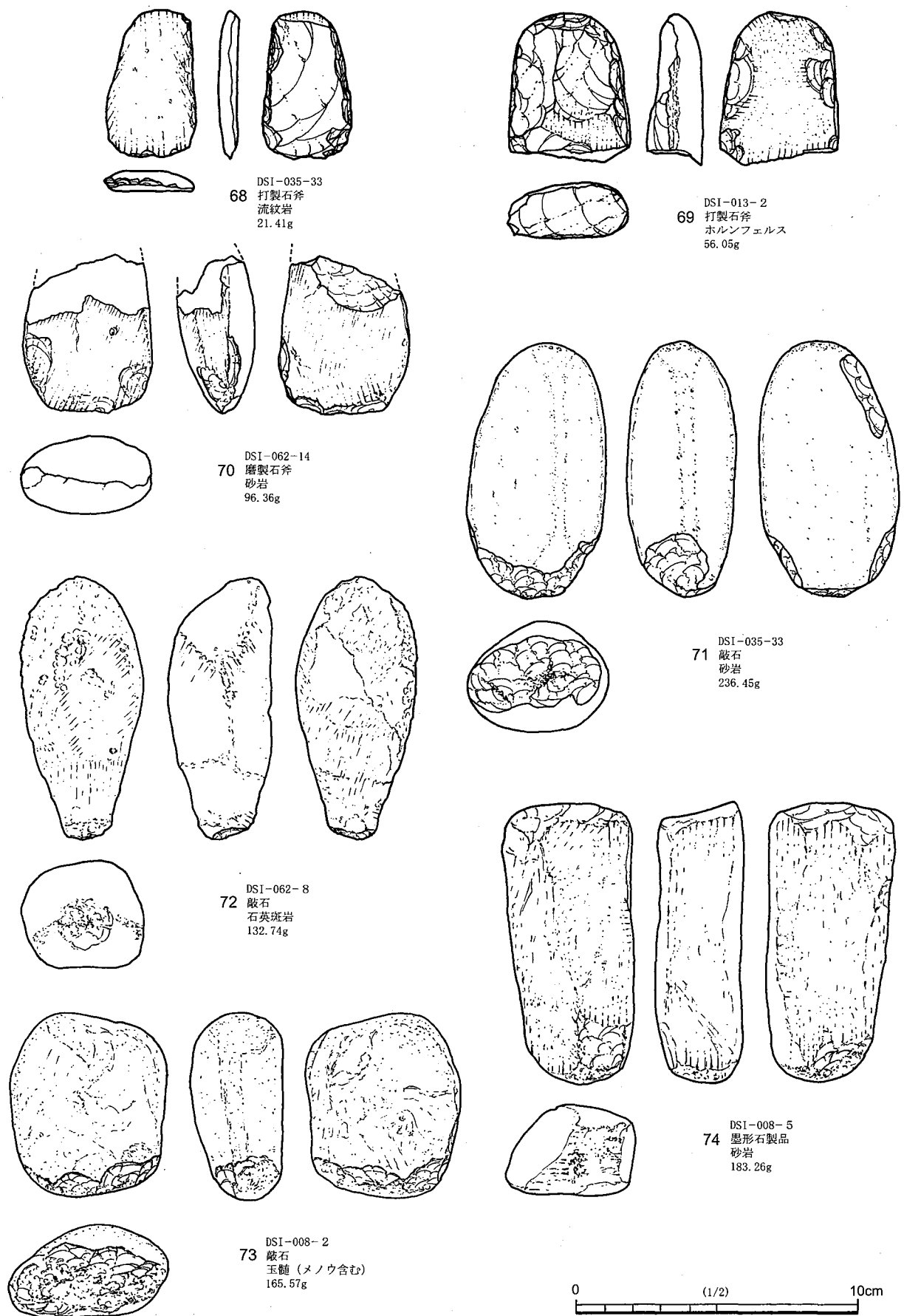
66 I22-94-1  
凹石  
安山岩  
539.35g



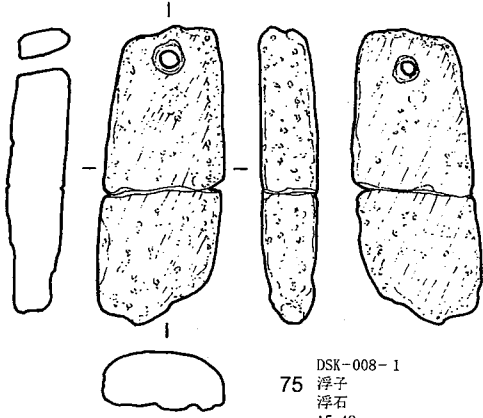
67 J22-83-2  
敲石  
砂岩  
750.7g



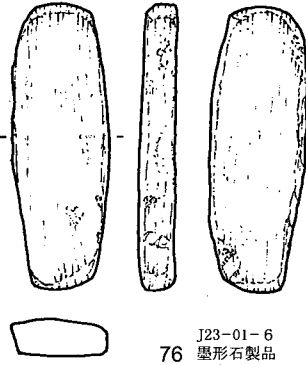
第136图 D区遺構外出土石器(6)



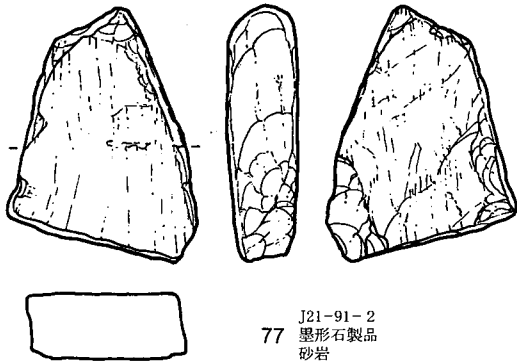
第137図 D区遺構外出土石器(7)



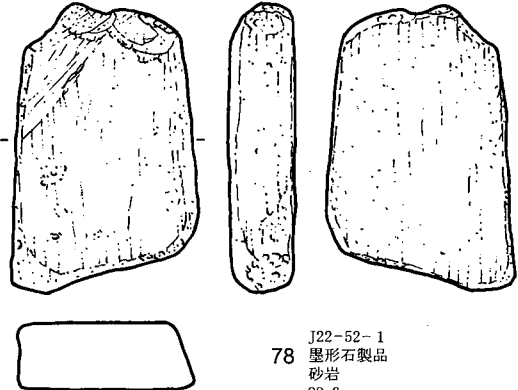
75 DSK-008-1  
浮子  
浮石  
15.42g



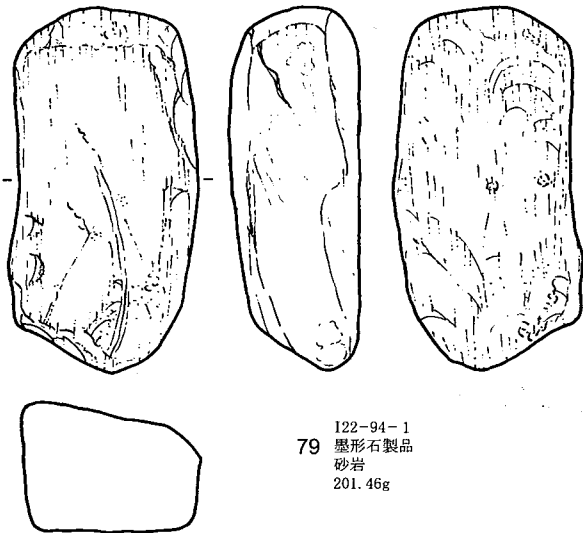
76 J23-01-6  
墨形石製品  
砂岩  
27.71g



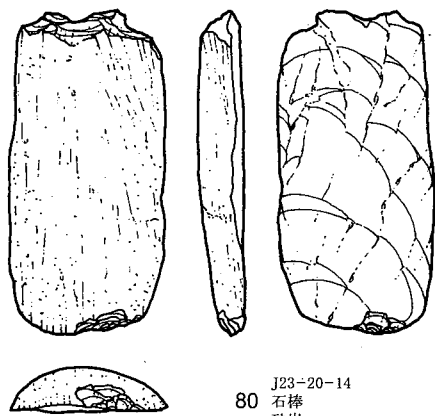
77 J21-91-2  
墨形石製品  
砂岩  
68.94g



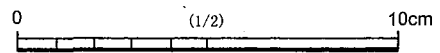
78 J22-52-1  
墨形石製品  
砂岩  
99.3g



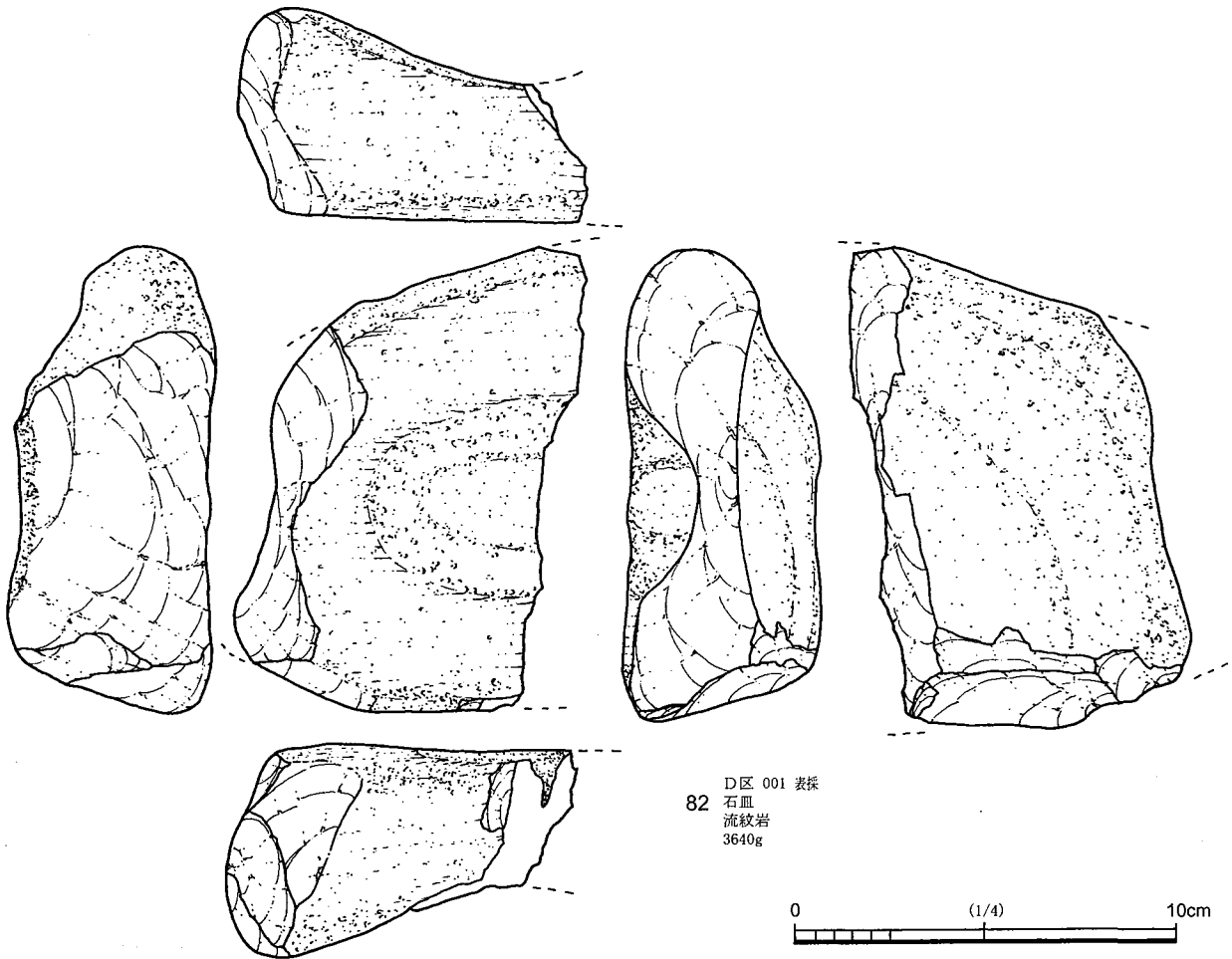
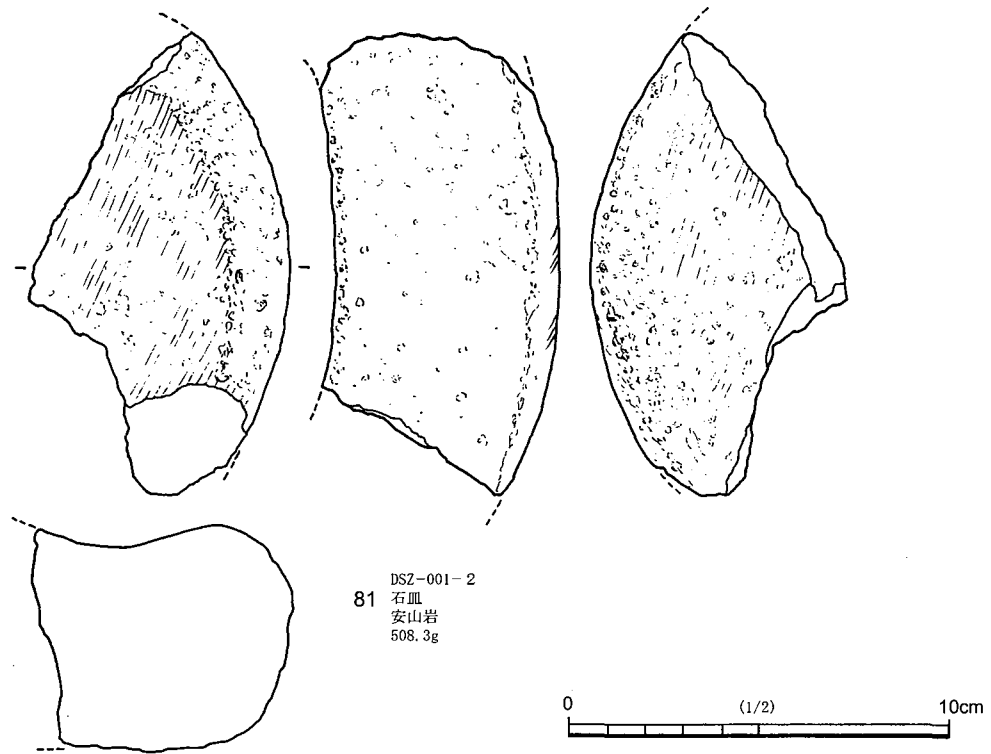
79 J22-94-1  
墨形石製品  
砂岩  
201.46g



80 J23-20-14  
石棒  
砂岩  
53.67g

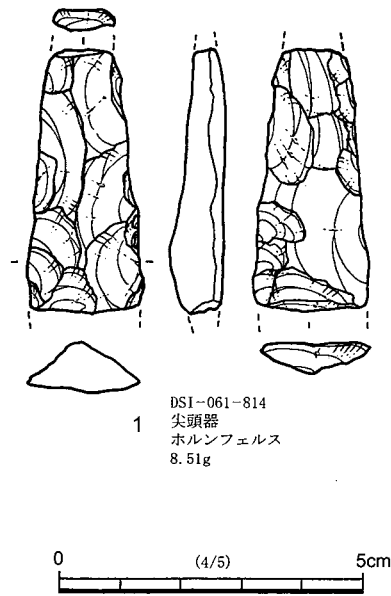


第138图 D区遺構外出土石器(8)



第139图 D区遺構外出土石器(9)

であるが、形態からみて縄文時代中期後半の所産のものとは思われないので、他の時期の所産のものとして単独で図示した。1は尖頭器である。ホルンフェルスを用いており、剥離面は風化している。器体の中央部から破損しており、先端部も破損している。幅広の剥片を素材として、粗い調整加工が施されている。



第140図 D区縄文時代草創期石器



## 第2節 弥生時代

### 1. 竪穴住居

#### SI-004 (第141図, 図版38)

調査区北側, K22-04グリッド付近に所在する。西壁のみの遺存であるため住居全体のプランは明確ではないが, 柱穴の位置などから隅丸長方形を呈すると思われる。壁溝が2重に巡っていることから, 拡張された可能性が考えられる。推定長軸6.4m, 短軸5.4mを測る。床面はほぼ平坦であるが, 南西側が攪乱を受けている。柱穴は, 対角線上に4本検出された。径は0.4m~0.9m, 深さ0.45m~0.77mを測る。北側の2本の柱穴には抜き取りの痕跡が認められる。炉はやや北西よりに位置し, 炉の中心部に焼土が遺存している。

遺物の出土は少なかった。

#### 出土遺物

1は壺の胴部片で, 外面に赤彩が施されている。撚り糸による施文が若干みられる。

#### SI-007 (第141図, 図版39)

調査区東側, K22-02グリッド付近に所在し, 東側をSI-004に切られる。長軸4.0mほどの小形の住居と思われる。主軸方向はN-58.0°-Wを指し, 壁溝は幅0.1m~0.15mで遺存部の西壁に残されている。床面はほぼ全体に硬化面が認められる。柱穴は1本のみ確認された。炉はやや北西に寄った位置に設けられる。

遺物の出土は少なかった。

#### 出土遺物

1は壺の頸部片と思われる。下端に結節文のような施文が認められる。

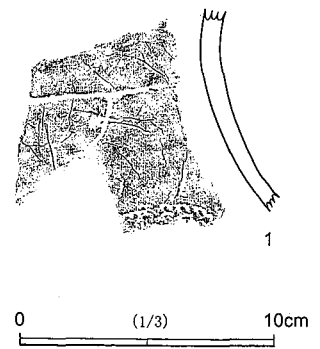
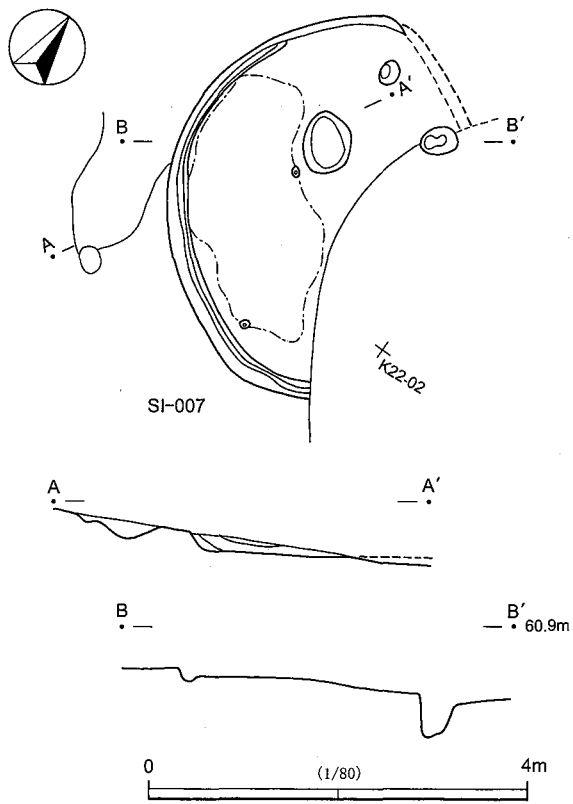
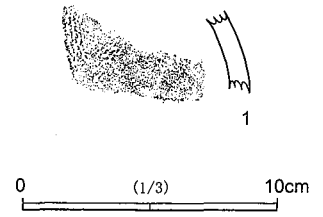
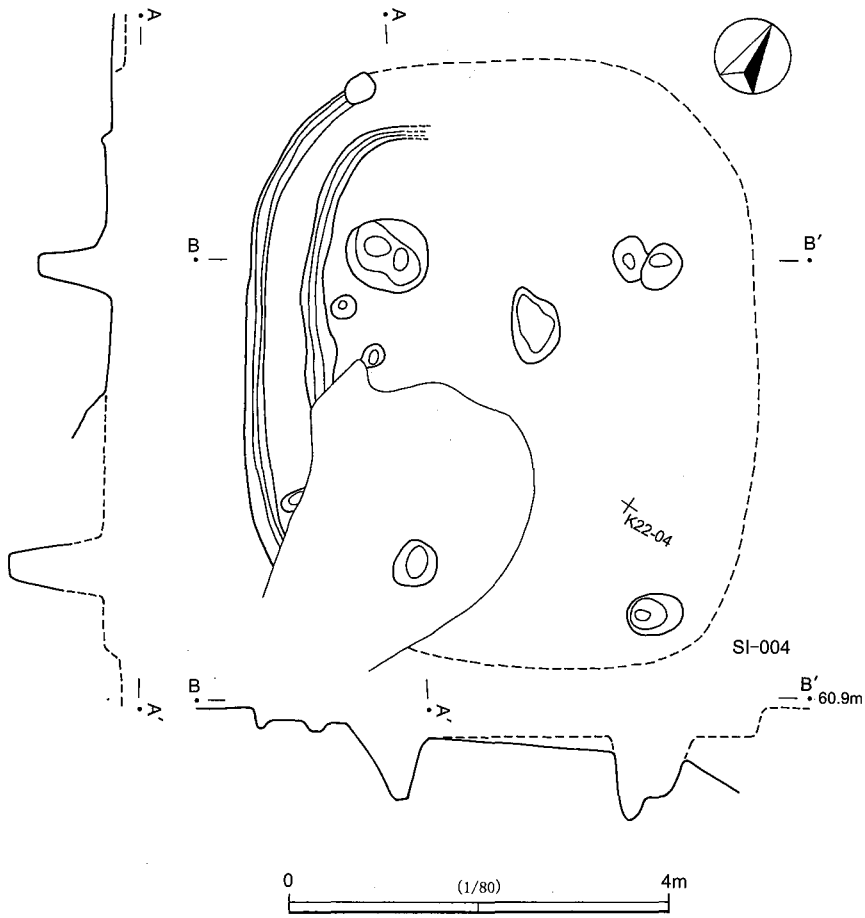
#### SI-008 (第142・143図, 図版39)

調査区東端, L21-63グリッド付近に所在する。北壁の一部が近世の溝により削平されている。長軸80m, 短軸6.5mほどのやや不整な隅丸長方形を呈する。確認面からの深さは, 南西壁で0.6mを測る。主軸方向はN-43.1°-Wを指し, 床面積は約43.1㎡を測る。床面は, 一部攪乱されるがほぼ平坦である。壁溝は, 西側壁を除き, 壁から離れた位置に掘り込まれる。西側壁では溝を共有することから, 東側や南側に住居を拡張した可能性が考えられる。床面上にピットが多く検出されたが, 支柱穴は対角線上に存在する4本であろう。炉は西壁寄りに設けられる。覆土は自然堆積の様相を呈する。

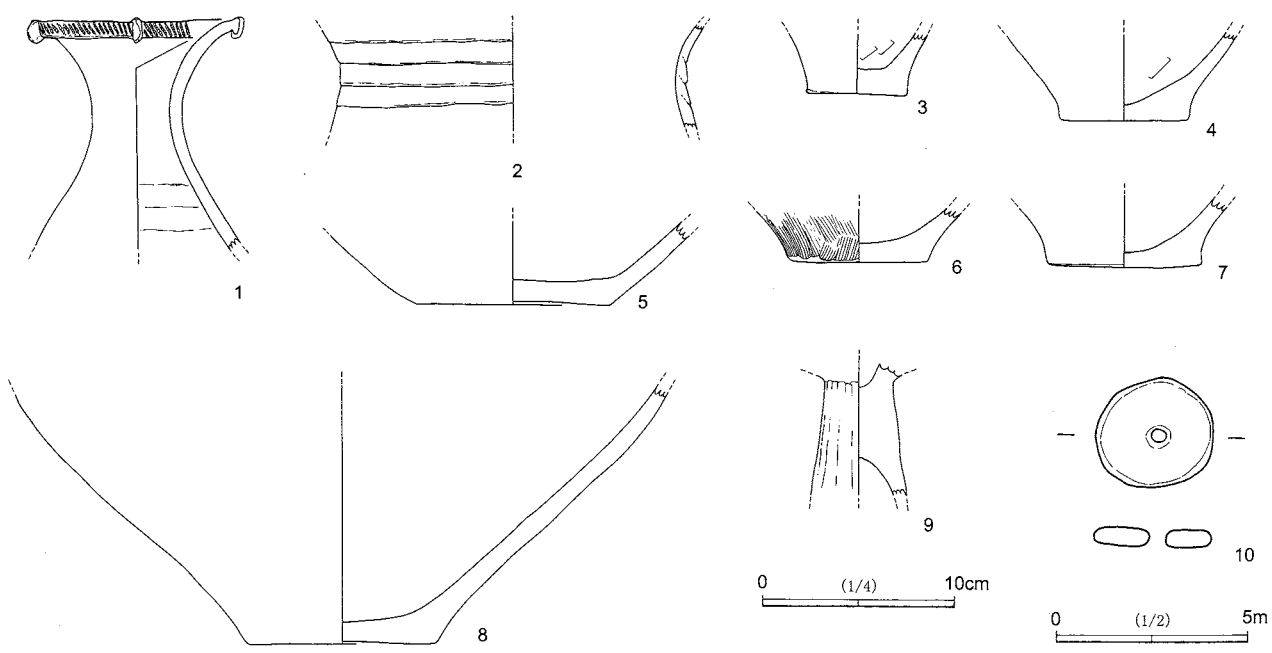
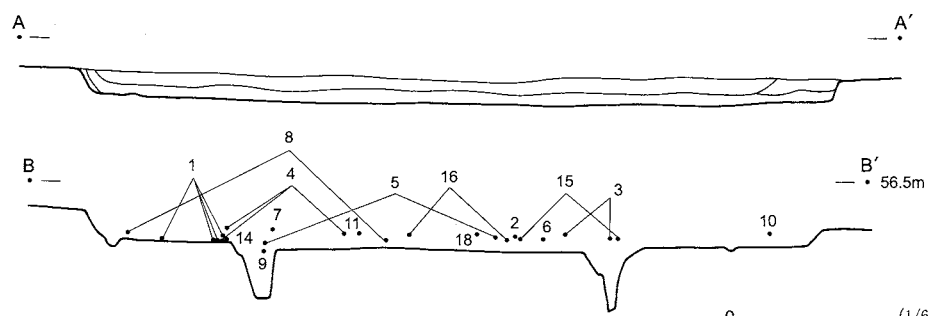
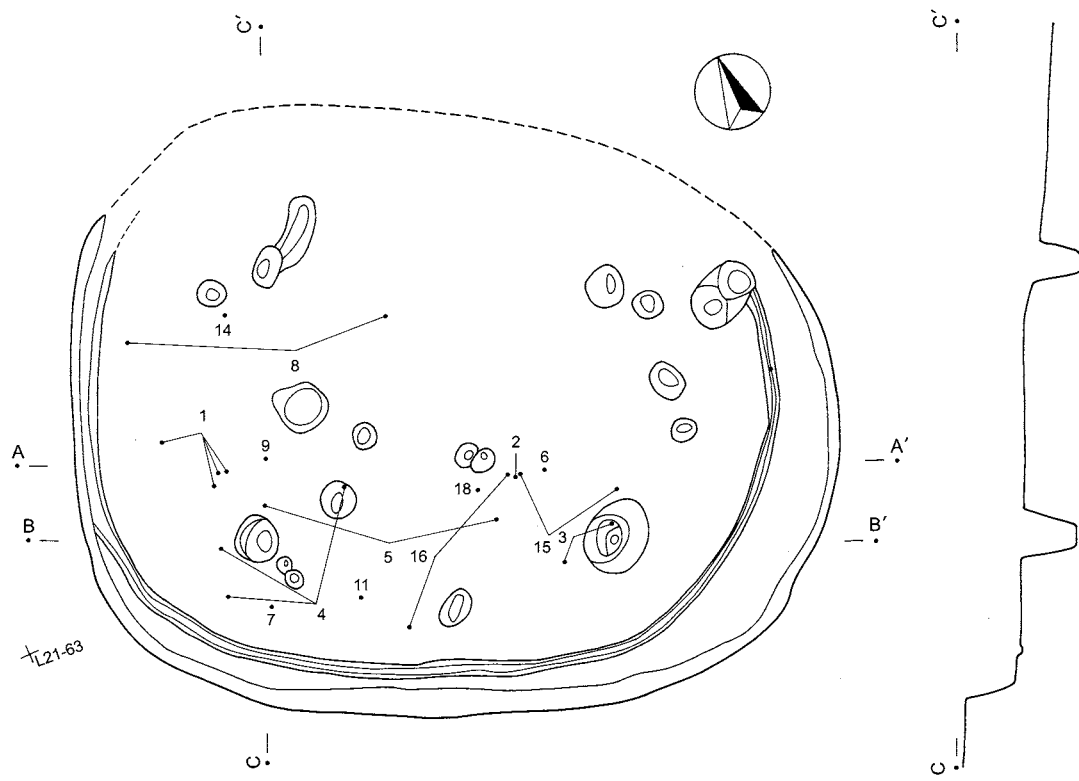
遺物は, 床面南西側を中心に散在している。1の壺が床面直上からの出土であるが, 多くはやや浮いた状態である。

#### 出土遺物

1は壺の口縁から頸部の遺存で, 磨滅が著しいが口唇部にRLの単節縄文を施し, 5単位の貼付文がつけられる。2は頸部に接合痕を残すタイプの甕片である。磨滅が著しく, スコリアや石英などの混入物が非常に多い。3~7は壺又は甕形土器の底部である。殆ど磨滅が激しく調整の詳細は不明であるが, 6は外面にハケが施されている。8は壺の底部から胴部中位までの遺存である。9は高杯の柱状部のみで, 上面に臍穴が残る。10は土製の円盤である。径3.1cm, 孔径0.4cm, 厚さ0.42cmである。11~19は弥生の壺または甕片である。14は口唇部に単節LRの施文を施している。15は胴部上位で単節RLを施文している。16は沈線区画内にRL・LRの単節縄文を充填している。17はS字結節文間に重三角文を配する。18はS字結節文が無文帯を挟んで2段に施文されている。19は頸部に棒状工具の押圧痕がみられる。



第141图 SI-004 · 007



第142图 SI-008 (1)

#### SI-015 (第144図, 図版39)

調査区中央, I22-42グリッド付近に所在する。長軸5.1m, 短軸5.0mのやや歪んだ円形を呈している。確認面からの深さは, 南壁で0.4mを測る。主軸方向はN-32.0°-Eを指し, 床面積は約21.2㎡を測る。床面はほぼ平坦で, 全体に硬化面が残る。柱穴は対角線上に4本配置される。径0.35m~0.58m, 深さ0.38m~0.52mを測る。東壁に接して確認されるピットは出入り口に伴うものと思われる。炉は南東の柱穴間に位置する。長径1.0mと比較的大形で, 底面は良好に焼けている。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

1は高杯の杯部で, 明瞭な稜を有して口縁部が大きく外反する。内外面赤彩で縦方向の丁寧なヘラミガキが施されている。2は甕の口縁部で, 胎土中に石英や長石などの混入物が目立つ。3は壺の胴部片である。単節の羽状縄文で, 無文帯に赤彩が加えられる。

#### SI-023 (第145図, 図版40・90)

調査区中央, I22-78グリッド付近に所在する。SI-028を切り, 北西コーナー部をSI-024に切られる。長軸4.1m, 短軸3.9mを測る正方形状を呈し, 確認面からの深さ0.47mを測る。主軸方向はN-10.0°-Wを指す。床面はほぼ平坦で, 中央から南側にかけて広い範囲で硬化面が認められる。柱穴は対角線上に4本配置される。径は0.2m程度と小規模で, 深さも0.14m~0.26mと浅い。炉は中央やや西側に位置し, 底面が良く焼けている。

遺物は, 炉を中心に分布し, ほとんど床面直上の状態である。

#### 出土遺物

1は壺の口頸部である。折り返し口縁部にはRLの単節縄文が施文され, 頸部下端にS字状結節文がみられる。内外面とも赤彩が施される。2は壺の肩部片で, 羽状縄文が認められる。3~6は甕である。3は小形で, 口唇部は棒状工具による押圧により小さな波状となっている。口縁部は二段の接合痕が明確で, 粗雑にナデられている。4~6は口縁から頸部にかけて数条の接合痕を残すタイプである。口唇部は外面からの指による押圧が行われている。5の外面には煤の付着が目立つ。7は壺の口縁部で, 内外面とも赤彩される。古墳時代の所産で混入品であろう。

#### SI-026 (第146図, 図版40)

調査区西側, L22-02グリッド付近に所在する。長軸3.8m, 短軸3.4mの略正方形を呈し, 確認面からの深さ0.5mを測る。主軸方向はN-71.5°-Eを指し, 床面積は10.2㎡と小形である。床面はほぼ平坦であるが, 明瞭な硬化面は確認されなかった。柱穴は不規則に配置される。径0.25m程度で, 深さも0.25m~0.3mと比較的浅い。南東壁に寄った位置に炉が構築されている。

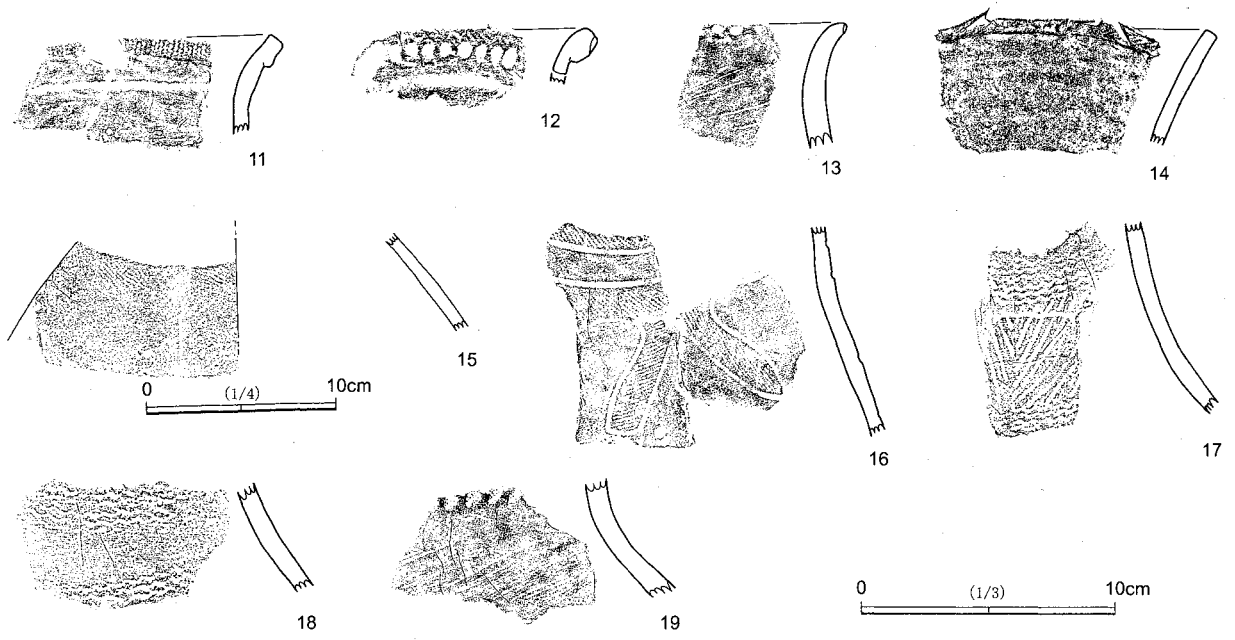
遺物の出土は少なかった。

#### 出土遺物

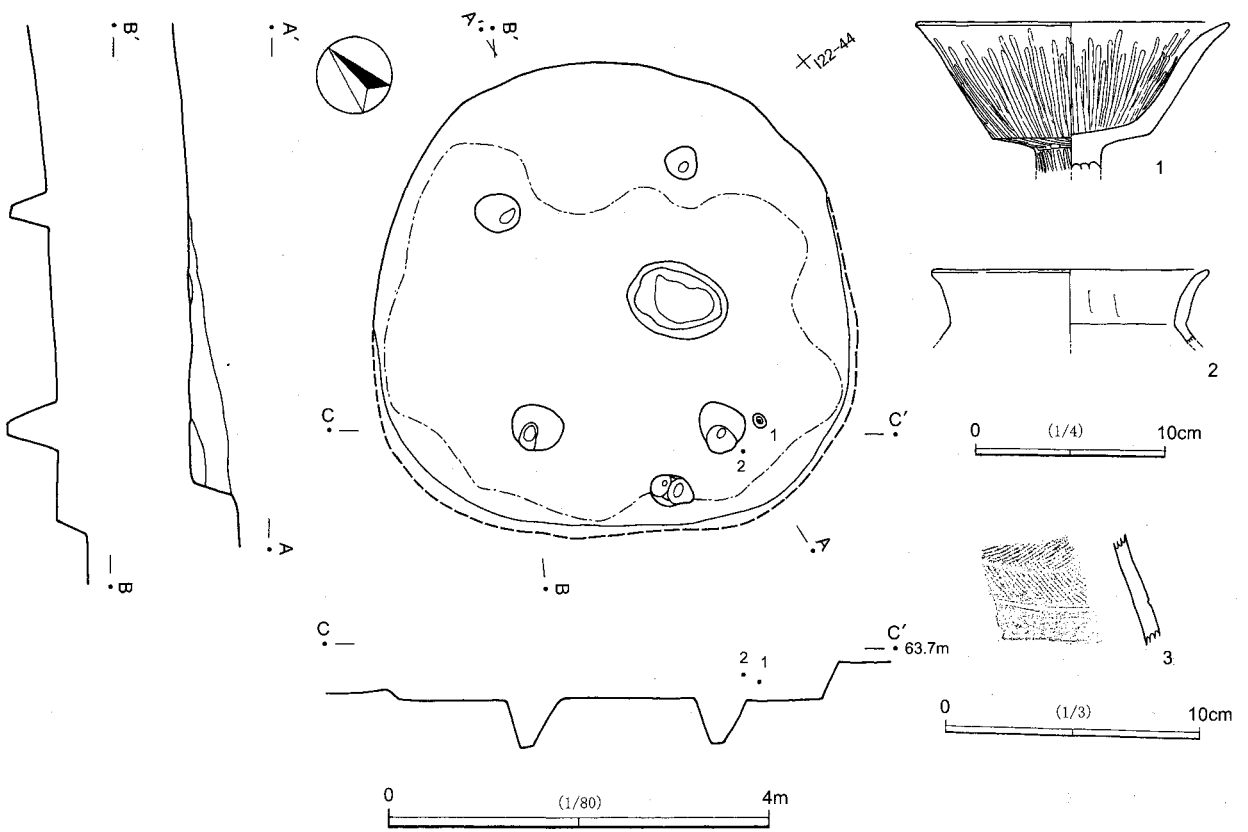
1・2とも甕の口縁部片で, 2には粘土の接合痕が明瞭にみられる。3は磨製石斧のミニチュアであるうか。

#### SI-027 (第146図, 図版41)

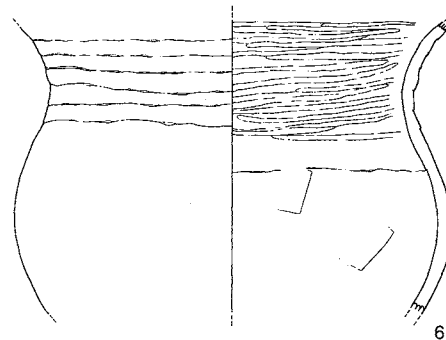
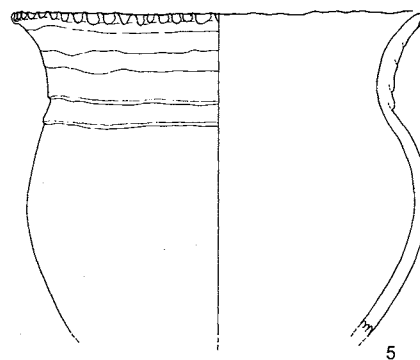
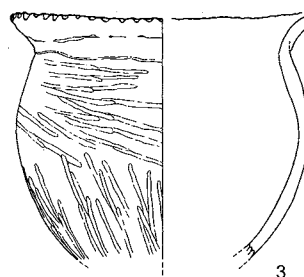
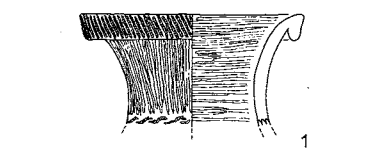
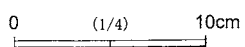
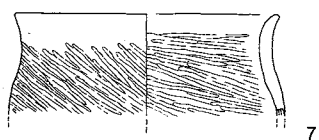
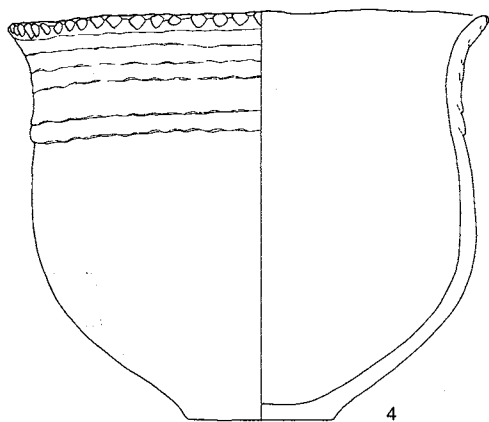
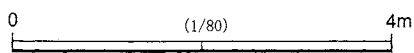
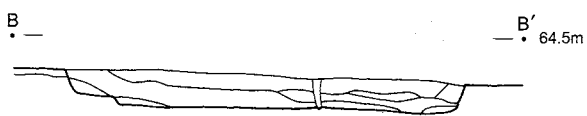
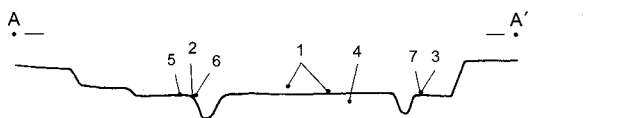
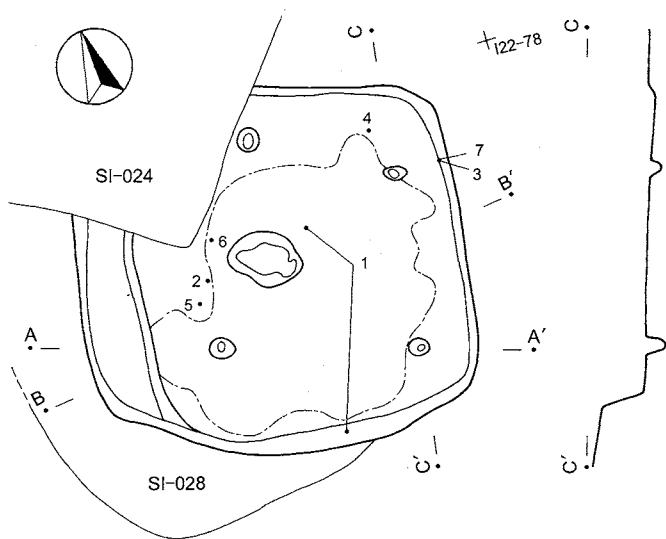
調査区中央, I22-17グリッド付近に所在する。掘り込みが浅く, 南側の壁のみの遺存である。推定長軸4.9m, 短軸4.4mを測る隅丸長方形のプランを呈すると思われる。主軸方向はN-41.0°-Eを指す。



第143图 SI-008 (2)



第144图 SI-015



第145图 SI-023

床面はほぼ平坦で、中央付近に硬化面が認められる。柱穴はほぼ対角線上に4本配置される。径は0.3m程と小規模で、深さは0.36m～0.54mを測る。炉はやや北西側に寄った位置に設けられるが、遺存はあまりよくない。

遺物の出土は少ないが、ほぼ中央の床面直上から小片が出土している。

#### 出土遺物

1は壺の頸部片で、羽状縄文が施されている。2は鉢となるうか。口唇部に刻み、下位にS字状結節文が施文される。

#### SI-028 (第146図)

調査区中央、I22-86グリッド付近に所在する。大半をSI-023・SI-024に切られており、南西コーナーのみの遺存のため詳細は不明である。

#### 出土遺物

1は鉢の口縁部片で、口唇部にはLRの単節縄文、口縁部には羽状縄文が施されている。

#### SI-030 (第147図)

調査区中央よりやや北側、J22-07グリッド付近に所在する。北東側をSS-001とSI-031に切られ、部分的に攪乱を受ける。長軸約5.2mのやや不整な楕円形状を呈する。主軸方向はN-48.0°-Eを指す。床面はやや凹凸がみられ、部分的に硬化面が認められる。床面上には小ピットが多数検出されているが、比較的規模の大きなピットが主柱穴となるう。

遺物の出土はなかった。

#### SI-031 (第147図, 図版41)

調査区中央、K22-00グリッド付近に所在する。南西側をSS-001に切られ、SI-030の床面を切っている。全体に掘り込みが浅く、北側壁が残存していない。主軸方向はN-32.0°-Wを指し、床面積は約15.8㎡を測る。床面はほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。主柱穴と思われるピットは3本検出されたが、深さ11.0cm～15.0cmと浅い。炉は床面中央より北西側に位置し、良好に焼けている。炭化材が出土している。焼土は床面中央に遺存し、炭化物も含まれる。

遺物は、全体に散在している状況で検出された。

#### 出土遺物

1～3は胴上部から口縁部にかけて明確な接合痕を残す甕である。口唇部は、棒状工具による押圧によって細かい波状を呈している。2はナデつけが比較的丁寧で器面は比較的平滑である。3にも接合部のナデつけが部分的に見られる。

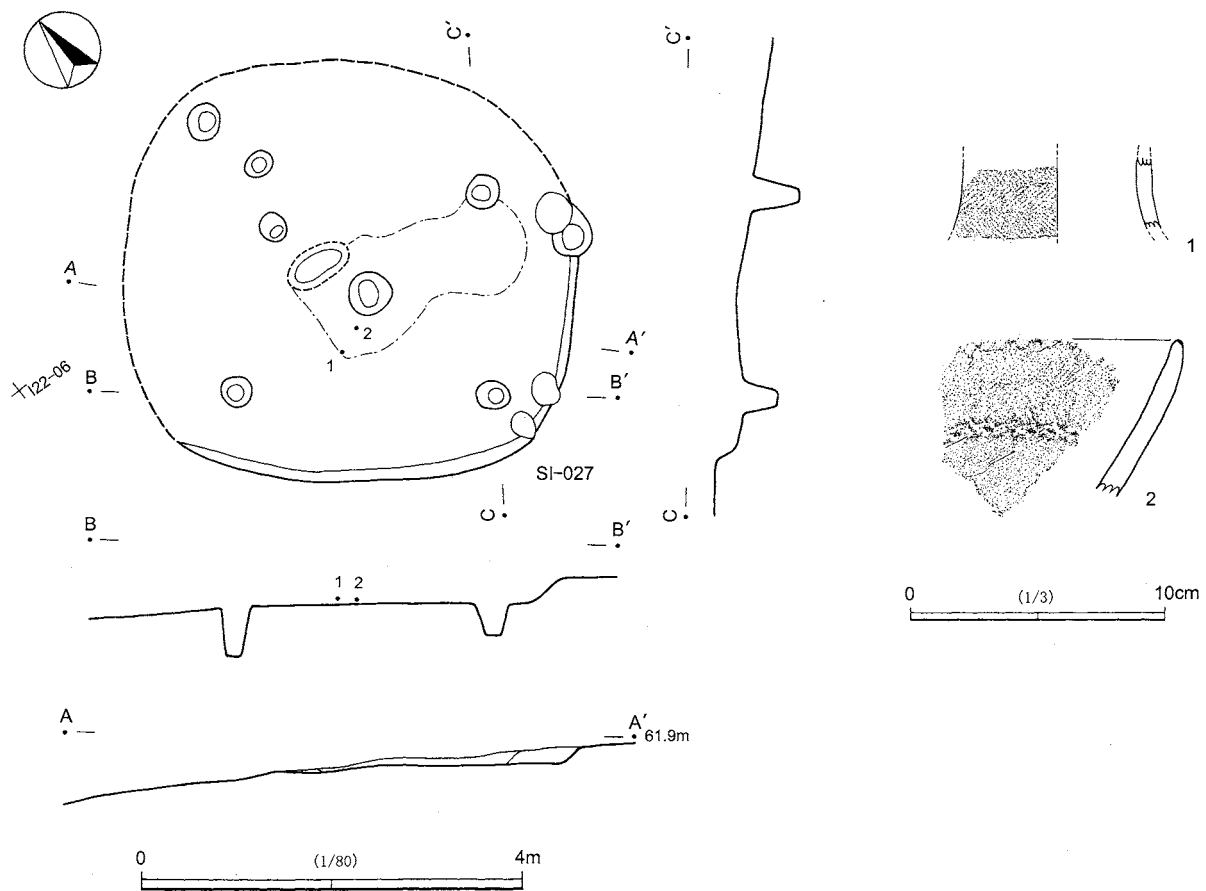
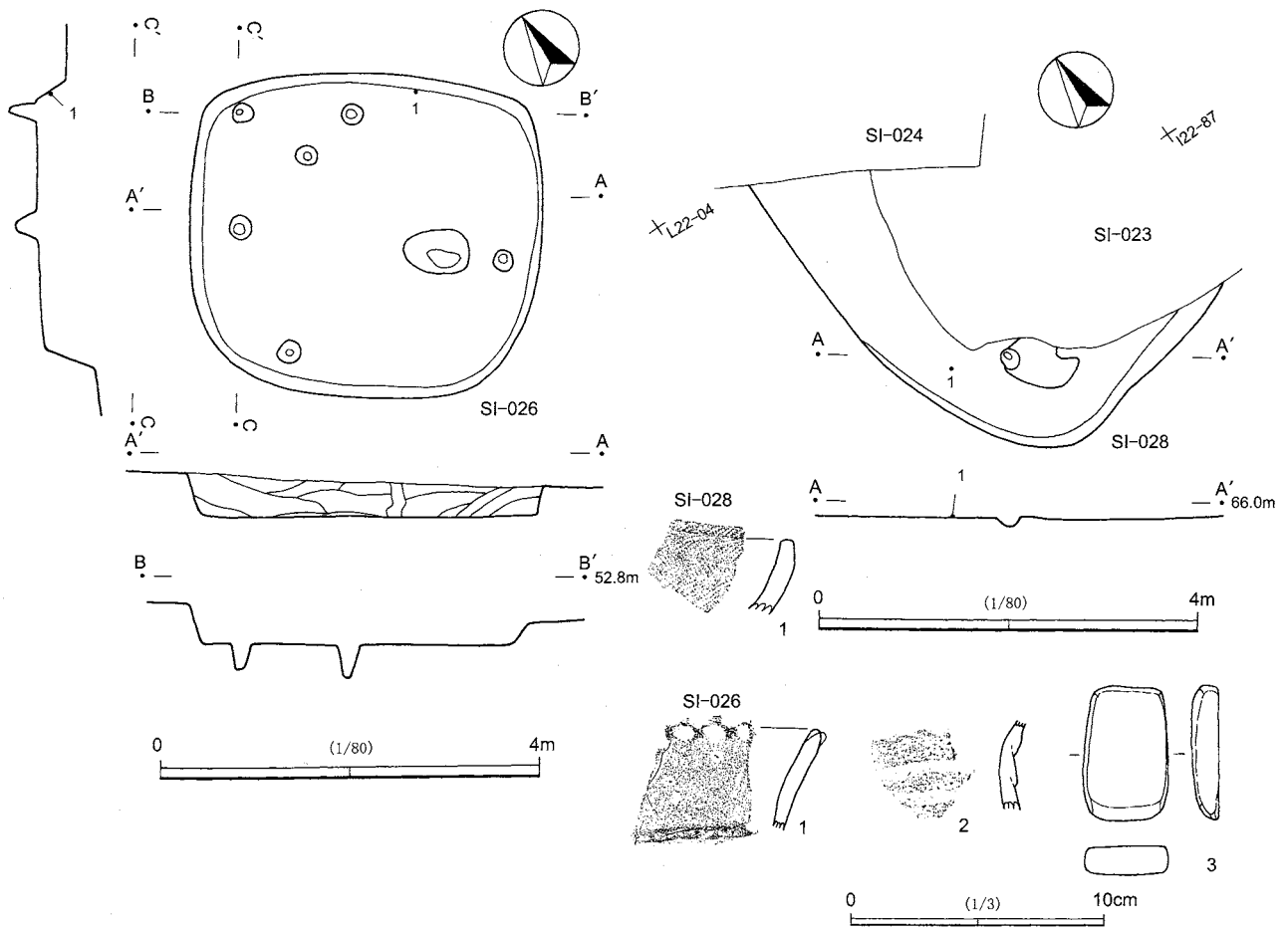
#### SI-034 (第148図, 図版42)

調査区西端、G23-73グリッド付近に所在する。大部分をSI-053に切られ、南側の一部を確認したのみである。床面は平坦であるが、現存部分では硬化面がみられない。ピットが2本掘り込まれているが、主柱穴ではなく、壁柱穴となるう。炉は西側に寄ったところに位置するが、上部はSI-053に削平され、底面近くのみ遺存であるが、良く焼けている。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物の出土は少ないが、1の壺は壁際から出土している。

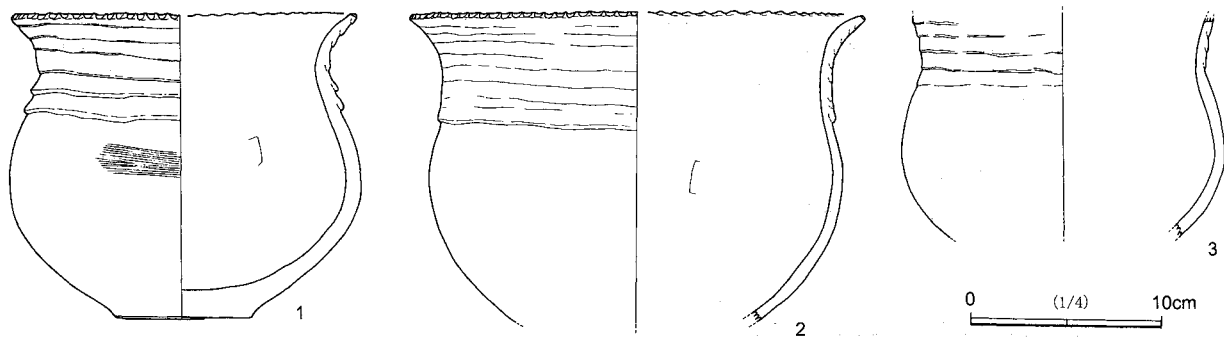
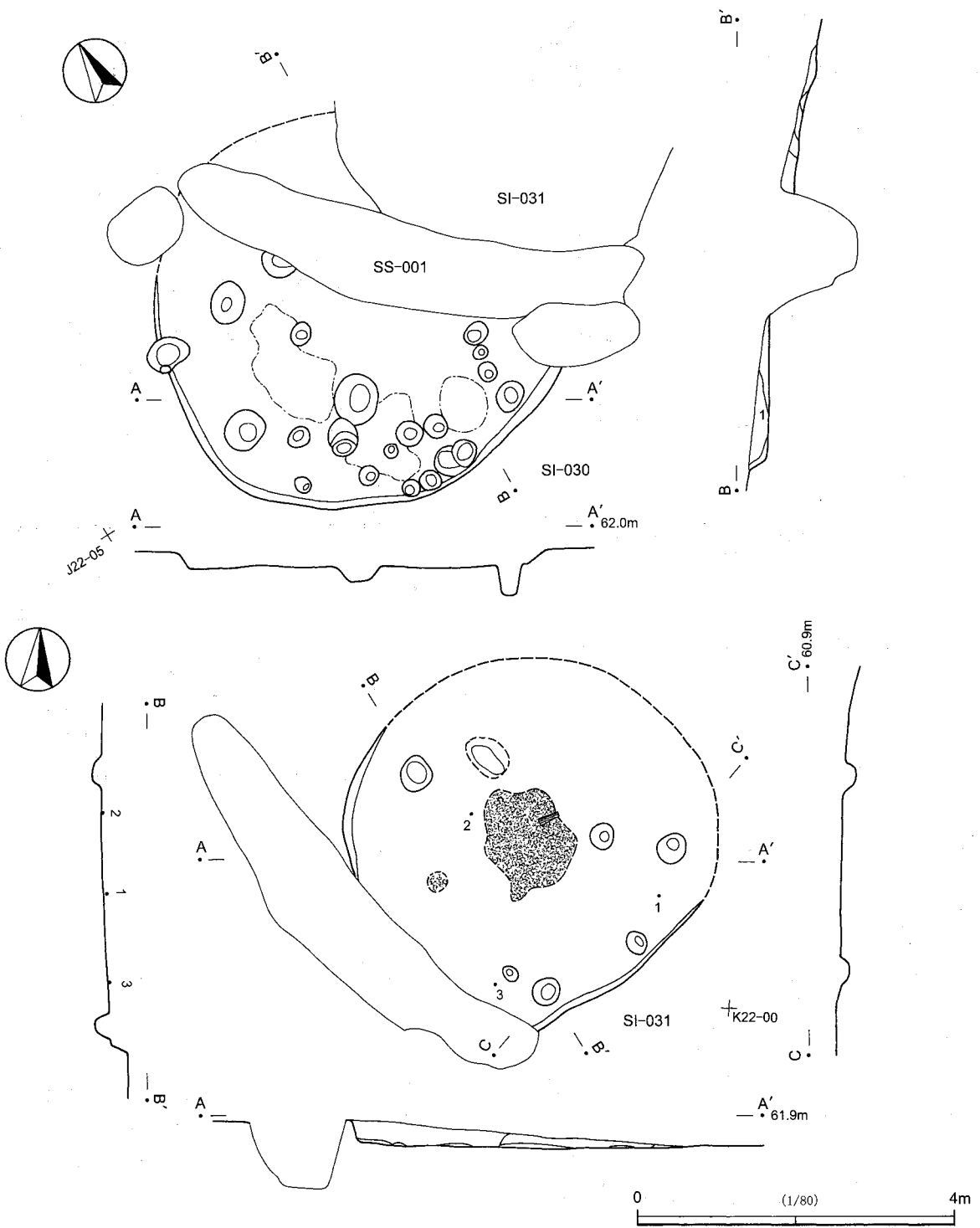
#### 出土遺物

1は壺の口縁部片である。複合口縁の外面に羽状縄文を施文した後、3本1単位の棒状浮文が貼り付け

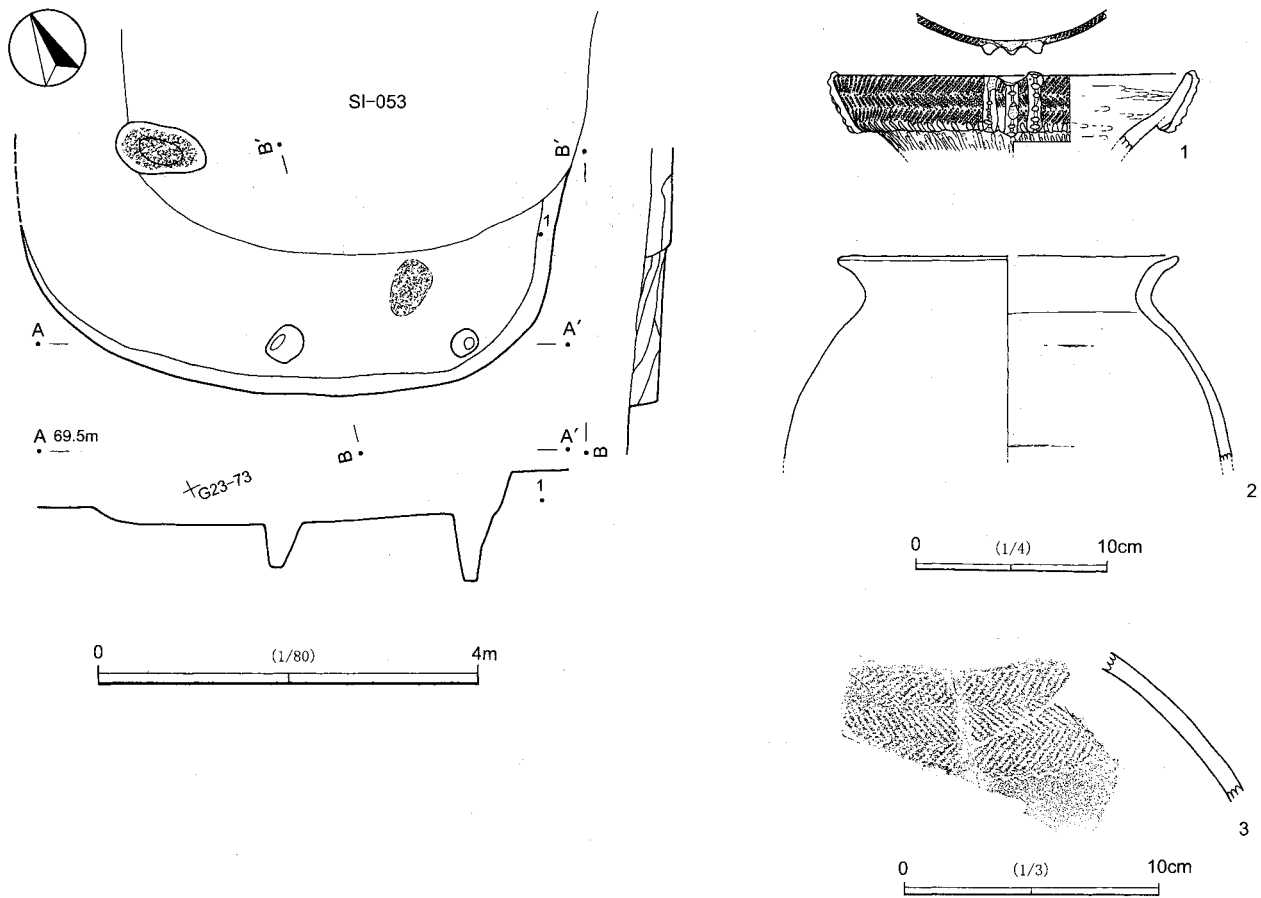


第146図 SI-026~028





第147图 SI-030・031



第148図 SI-034

られ、頂部をへら状工具で横方向に刻んでいる。内面は丁寧なミガキである。2は古墳時代の甕である。3は壺の胴部片である。S字状結節文間に羽状縄文が充填されている。

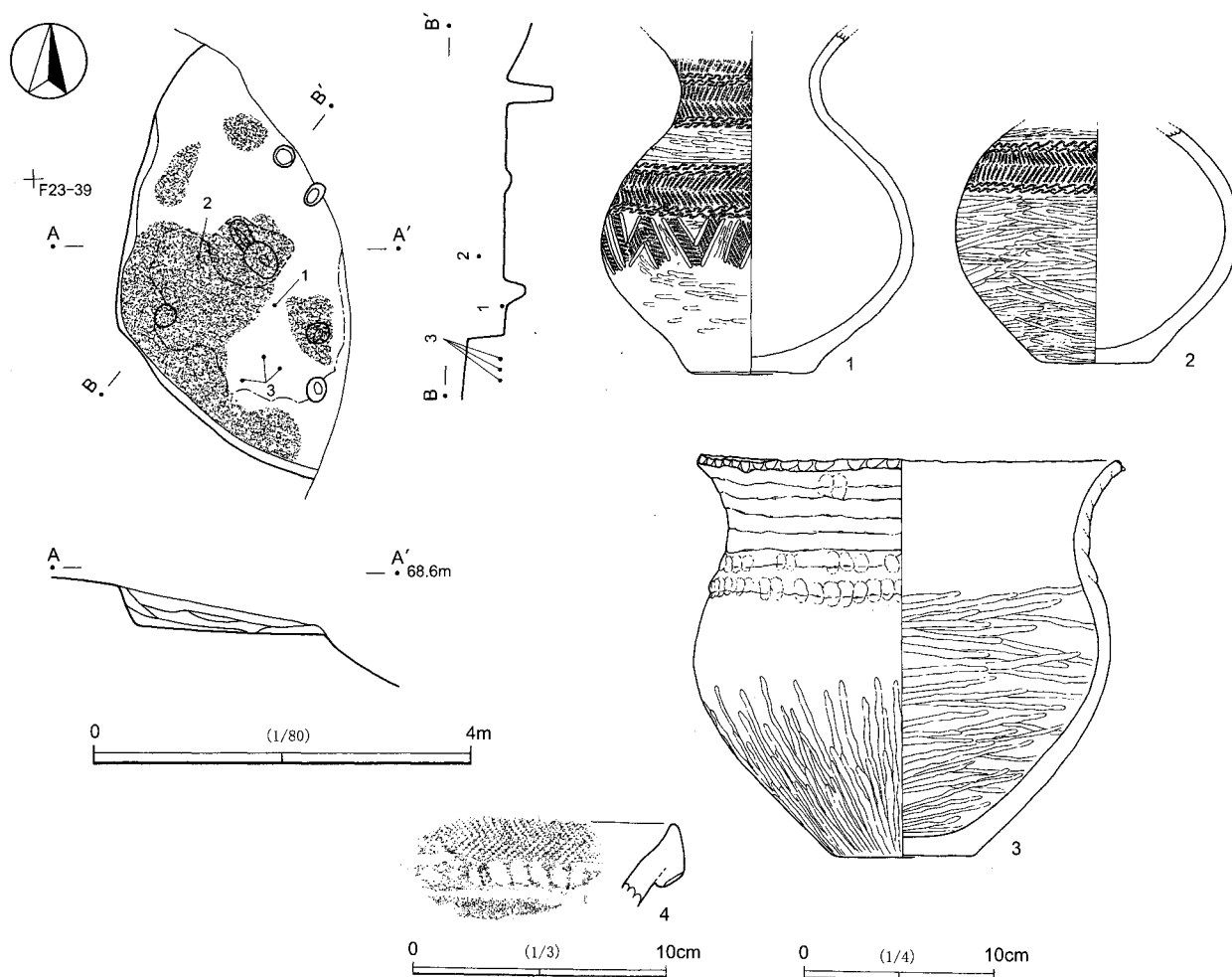
#### SI-035 (第149図, 図版41・90)

調査区最西端, F23-49グリッド付近に所在する。11号墳の墳丘下で検出されたが、東側を周溝で切られている。炉の位置から、主軸方向はN-37.0°-Wを指すと思われる。確認面からの掘り込みは0.4mである。床面はほぼ平坦で、全体に硬化している。床面上にピットが5本検出されたが、小規模ながら3本が支柱穴になると思われる。炉は中央よりやや北西側に位置する。床面上に焼土や炭化材が5cm~10cm程堆積していることから焼失住居となるであろう。覆土中に焼土やローム粒を多く含んでおり、人為的に埋め戻された可能性が高い。

遺物は床面直上からの出土である。

#### 出土遺物

1・2は壺である。1は頸部から胴部にかけて4条のS字結節文に区画され、内部に羽状縄文が配される。肩部にはミガキによる無文帯があり、その部分は赤彩が施される。結節文以下は、沈線による山形の区画内にLR・RLの単節縄文が充填される。胎土中に白色粒子を多く含む。2は口縁部を欠く。肩部に結節文と羽状縄文が一段施文され、文様帯以外に赤彩が加えられる。3は口縁部から肩部にかけて粘土紐の接合痕を残すタイプの甕である。指による押圧が接合部に部分的に観察される。口唇部は棒状工具によりキザミが入れられ、波状口縁となる。4は壺の口縁部片である。羽状縄文と棒状工具によるキザミがみられる。



第149図 SI-035

SI-042 (第150図)

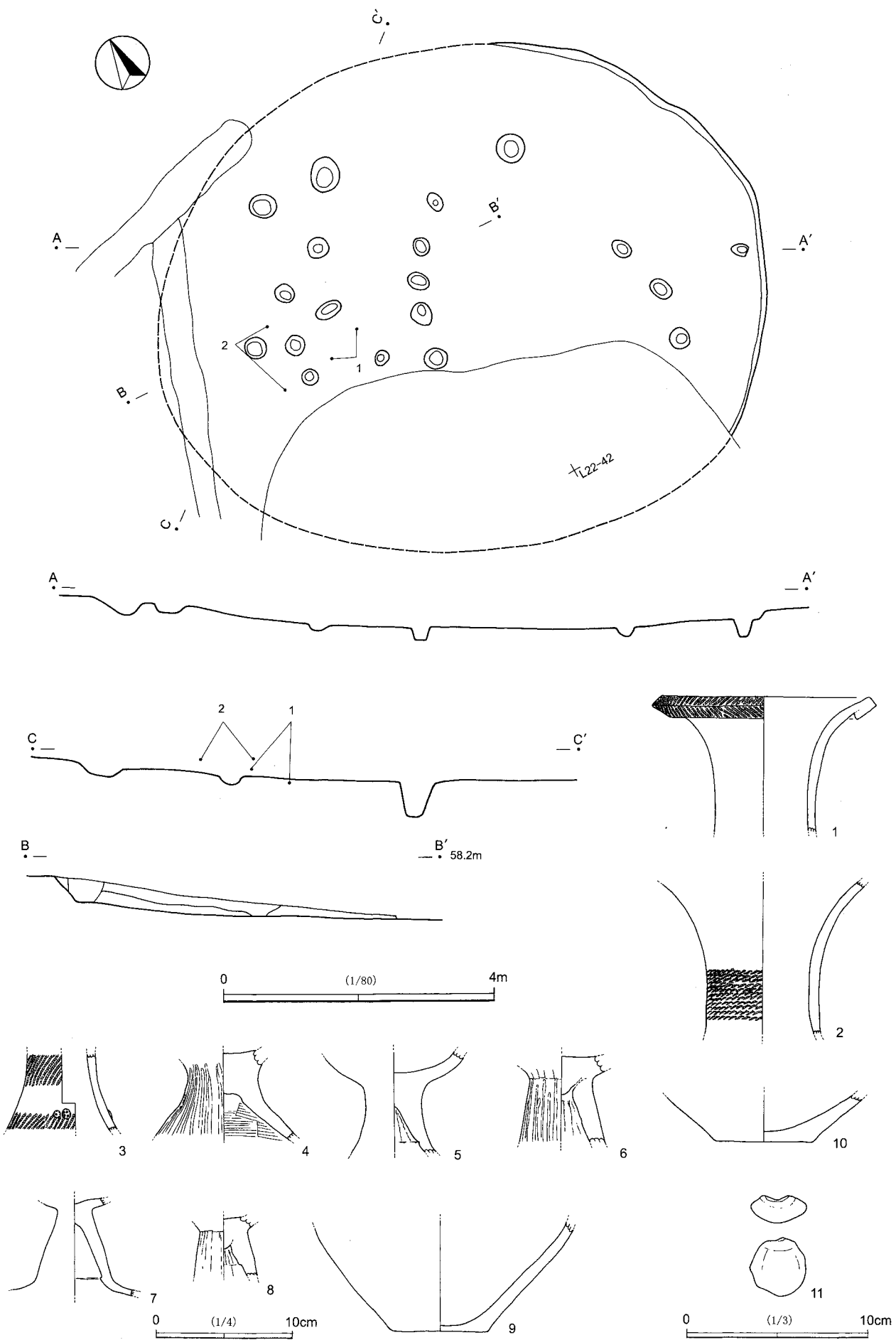
調査区東端, L22-42グリッド付近に所在し, 南側をSI-016に切られる。確認面からの掘り込みは浅く, 東側の壁が僅かに確認されたのみで, 全体のプランはピットの配置から推定した。長軸9.0mの大形の住居と想定されるが, 2軒の重複の可能性もある。ピットは多数検出されたが, 柱穴を判断することは困難である。炉に相当する施設も確認されなかった。

遺物の出土は比較的多いが, 混入品も含まれる。

出土遺物

1~3は壺である。1は口頸部で, 折り返し口縁部に羽状縄文が施文されている。2は頸部のみの遺存で中位にS字結節文が多条施文される。3には2段のLRの単節縄文に刺突を施した2個1単位のボタン状円形浮文が認められる。3個体とも磨滅が著しい。4は台付甕の台部であろう。外面にミガキ, 内面にハケ目が残る。5~8は高杯である。5の杯部は稜を持たず, 碗状に上方へ開くタイプである。6は内面に絞り目と臍が確認できる。7は若干中膨らみながら下方に大きく開く形状を呈している。9・10は甕あるいは壺の底部である。磨滅が著しく調整の詳細は不明である。11は土玉片である。

1~3は弥生時代後期, 4~8は古墳時代の所産であり, 重複した2軒の住居の時期を示すものかもしれない。



第150图 SI-042

#### SI-048 (第151図, 図版42)

調査区やや西寄り, 122-40グリッド付近に所在する。北西コーナーをSK-039に切られる。規模は長軸3.9m, 短軸3.5mとやや小形で, 床面積は11.0㎡程である。確認面からの深さは0.5mである。主軸方向はN-67.0°-Wを指す。床面はほぼ平坦で, 中央部分に硬化面が広がる。柱穴は確認されないが, 北壁近くのピット内から炭化材が検出された。東壁近くのピットは入り口に伴うものと思われる。炉は西寄りに位置し, 底面は赤く変色し硬化している。

図示できるような遺物の出土はなかった。

#### SI-051 (第151図, 図版42・90)

調査区西端, 122-12グリッド付近に所在する。遺存はあまり良くなく, 北側半分は床面も残っていない。規模は, 東西方向で3.6mとやや小形で, やや不整な長形状を呈すると思われる。主軸方向はN-75.0°-Wを指し, 床面積はほぼ12.0㎡と推定される。残存部分の床面は広範囲に硬化面が認められる。柱穴は検出されなかった。炉は西に寄った位置に設けられ, 底面は良好に焼けている。

東壁付近から炭化材がまとまって検出され, 土器は炉の周辺からの出土である。

#### 出土遺物

1は胴上半部に接合痕を残すタイプの甕で, 下端部を指先で押圧している。最大径付近にススの付着がみられる。2は壺の底部である。器面が荒れているため調整は不明であるが, 外面に赤彩が施されている。

#### SI-052 (第151図, 図版42・90)

調査区西端, 121-84付近に所在するが, 北西部分は調査区域外となる。住居跡中央をSK-038に切られる。主軸方向はN-49.0°-Wを指し, 規模は南北方向で約4.5mを測る。床面は平坦であるが, 硬化面は確認されなかった。南西壁近くのピットは柱穴, 南東壁中央のピットは入り口に伴うものと思われる。壁溝は一部確認された。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

1は壺の底部である内外面ともナデ調整で, 外面に赤彩がみられる。

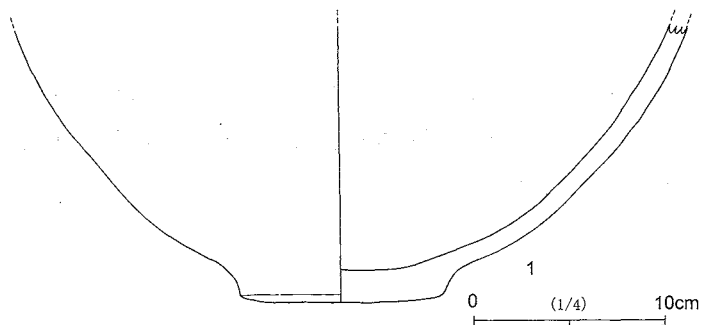
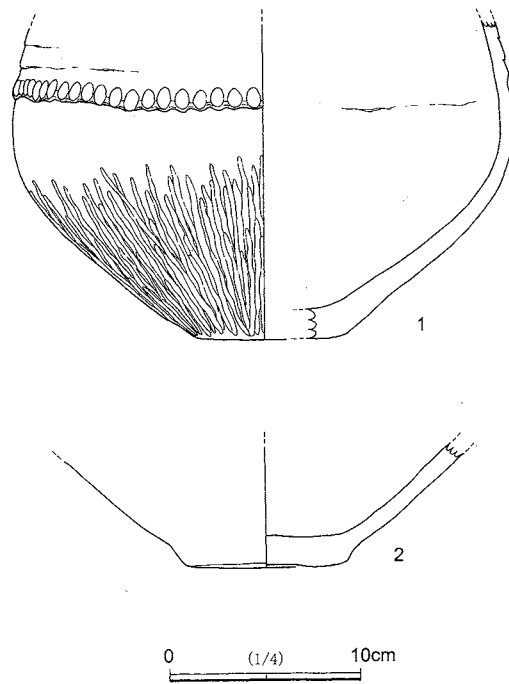
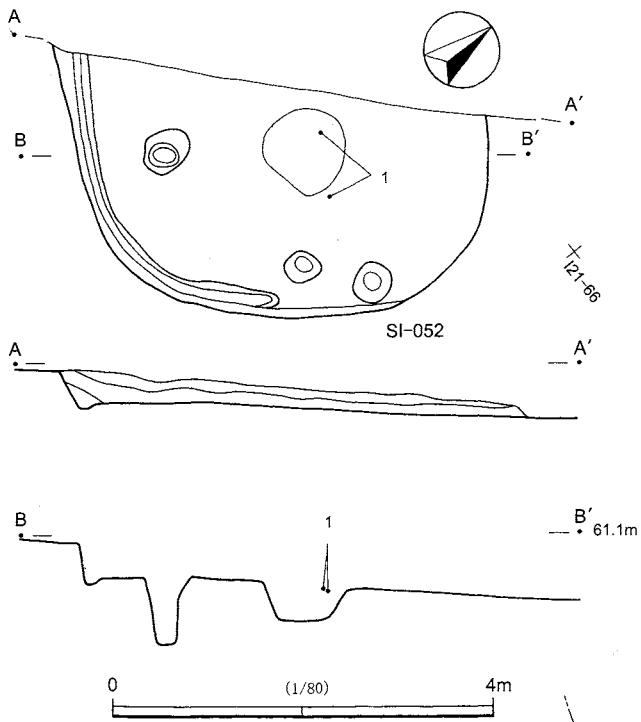
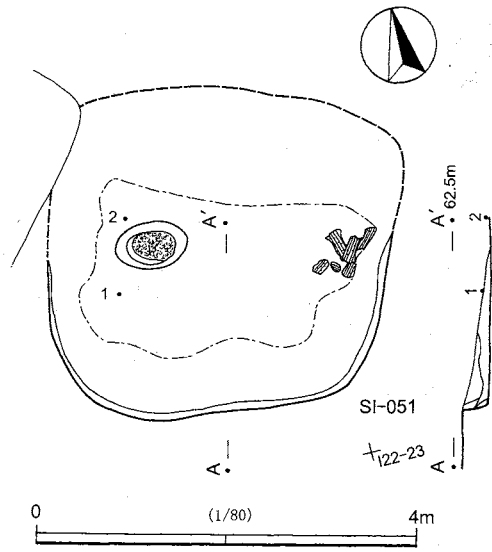
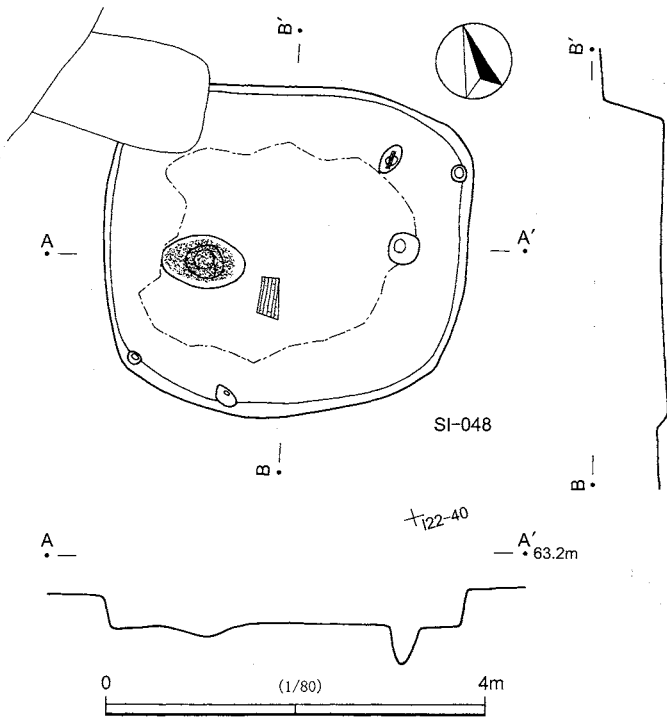
#### SI-053 (第152図, 図版42・43・90)

調査区西端, G23-66グリッド付近に所在する。SI-034の床面下から検出され, SK-045が床面を切っている。規模は長軸5.1m, 短軸4.9m, 確認面からの深さ0.4mを測る。主軸方向はN-67.0°-Wを指し, 床面積は19.4㎡を測る。床面は全体に平坦であるが, 硬化面は炉の周辺に認められるのみである。主柱穴は, 対角線上に配置される4本のピットが相当する。径26cm~30cmと小規模であるが, 深さは70cm程と深い。東側の壁中央部に位置するピットは入り口に伴うものであろう。炉はやや西寄りに位置し, 比較的良好に使い込まれている。床面には, 焼土と炭化物が広く遺存しており, 焼失住居と思われる。

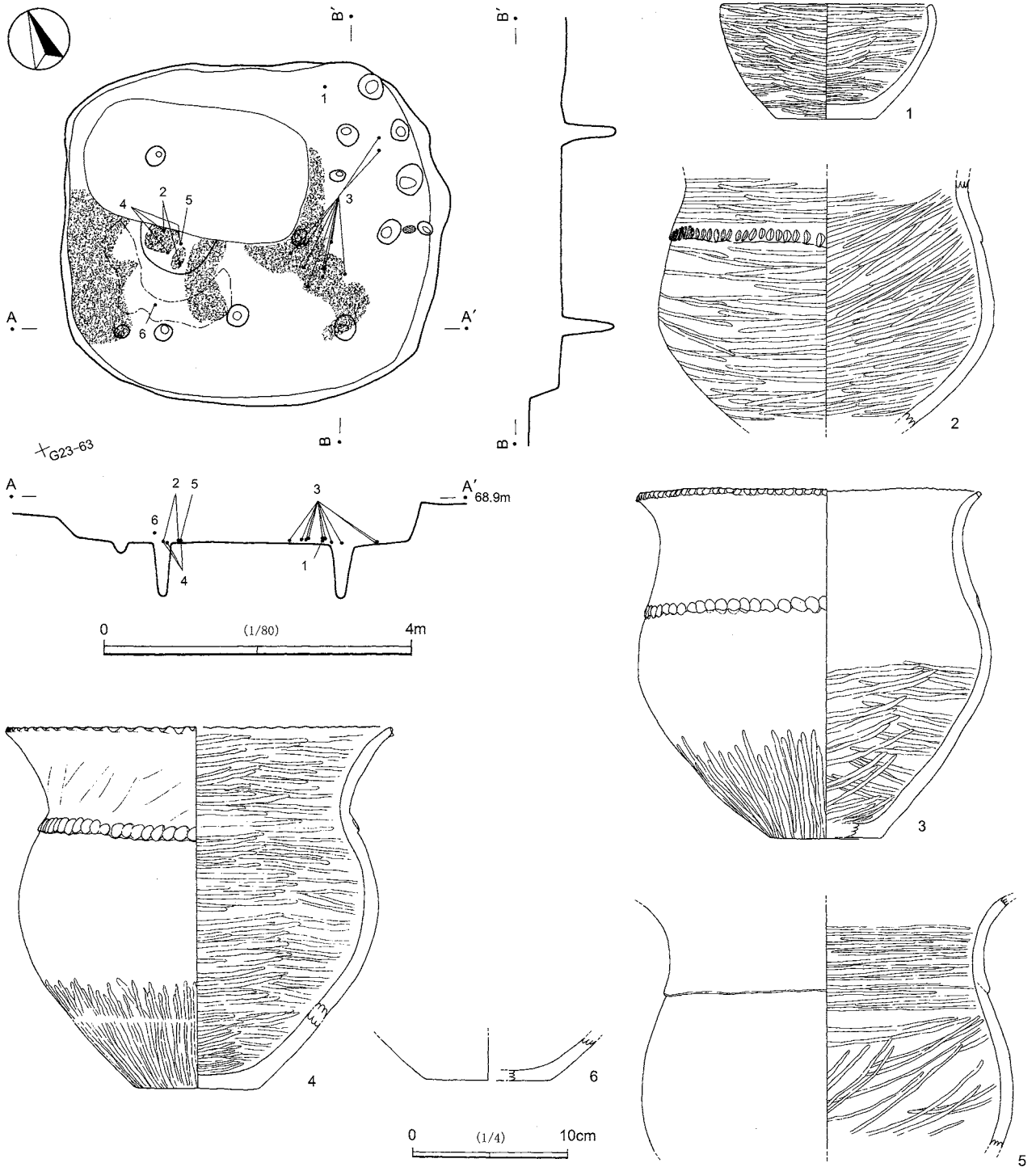
遺物は, 炉内を中心に出土している。

#### 出土遺物

1は鉢で, 内面の剥離が著しいが内外面とも丁寧なミガキが施されている。口唇部は平坦に面取りされる。2~5は甕である。ほぼ同様のタイプで, 肩部に明瞭な接合痕を残している。2~4の接合部には押圧が施される。2は縄文原体, 3・4は指頭によるものと思われる。3・4の口唇部は, 押圧により小波状を呈する。3は棒状工具, 4は指による押圧であろう。3は, 煮炊きで使用されたのか二次的な焼成に



第151图 SI-048·051·052



第152図 SI-053

より胴部下位が変色し、煤の付着もみられる。内面にも何らかの付着物がみられる。5は胴部の一部のみの遺存で、胴部上位に明確な接合痕を残しているが、押圧は加えられていない。6は壺の底部片で、外面に赤彩が認められる。

SI-056 (第153図, 図版43)

調査区北側, J21-20グリッド付近に所在する。遺存はあまり良くなく, 南側壁が一部残っているのみである。北側は, 床面が遺存していないため, ピットから範囲を推定した。規模は, 長軸4 m程, 主軸方向はN-33.5°-Wを指すと推定される。床面は南側の一部のみを検出であるが, 柱穴間に硬化面がみられる。柱穴は4本検出され, 深さは0.6m~0.7mと比較的深い。

遺物の出土は少なかった。

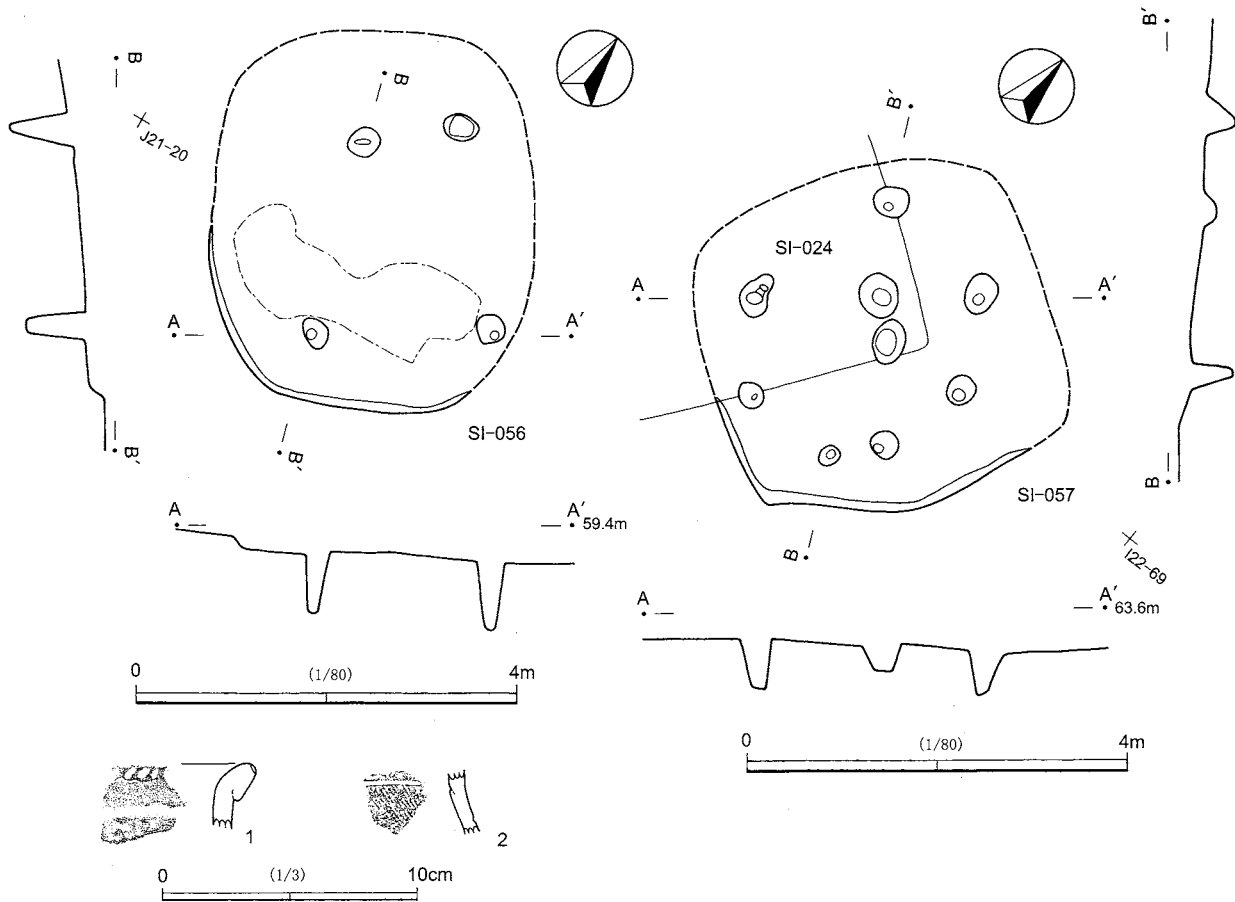
出土遺物

1は壺の口縁部片で, 折り返し口縁の頂部に棒状工具によるキザミが認められる。2は頸部片で, 沈線下にRLの単節縄文が施文される。

SI-057 (第153図)

調査区北側, I22-69グリッド付近に所在する。西側をSI-024に切られ, 全体的に遺存は不良である。壁の確認も一部のみで, プランはピットの配置から推定した。柱穴は, 対角線上に位置する4本のピットが相当するものと思われ, 他は補助柱穴ないしは出入りに伴うものであろう。炉は確認されない。

遺物の出土はなかった。



第153図 SI-056・057



#### SI-058 (第154図)

調査区北端, J20-44グリッド付近に所在する。北西側が調査区外のため, 詳細は不明であるが, 他の弥生時代の遺構とは異なり, 方形のプランを呈するようである。SI-067を切り, SI-060に北東部を切られる。現存部分では壁溝が巡る。柱穴は南側コーナー部に1本検出されている。北東部に掘り込まれたピットは貯蔵穴となる可能性が高い。

出土した土器は弥生時代後期の所産であるが, 住居の形態からは古墳時代前期となる可能性も指摘できる。その場合, 土器はSI-067から流れ込んだものとなる。

#### 出土遺物

1は鉢あるいは高杯の杯部で, 口縁部から体部中位にかけて文様帯が巡る。2段の羽状縄文下端にZ字状結節文が3段施文される。文様帯以外はミガキ調整され, 赤彩が加えられる。2は肩部に紐状の接合痕を残す甕である。

#### SI-062 (第154図, 図版90)

調査区北側, J21-03グリッド付近に所在する。斜面部に位置し, 攪乱や他遺構との重複があるため, 遺存状況は良くない。東側でSI-064と重複しており, 明確ではないが, 本遺構の方が先行する時期と思われる。規模等詳細は不明であるが, 焼土の堆積と硬化面が確認される。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

1は壺の底部で, 外面はミガキ調整後赤彩が施されている。

#### SI-064 (第154図)

調査区北側, J21-05グリッド付近に所在する。南壁のみの遺存で, 壁溝が幅0.2m~0.31mで確認された。おそらく全周していたのであろう。柱穴と思われるピットも存在する。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

1は壺の頸部であろう。磨滅が著しく詳細は不明である。2は高杯のミニチュアで, 内外面ともナデ調整される。3はLRの単節縄文が施される甕片である。

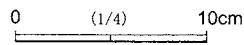
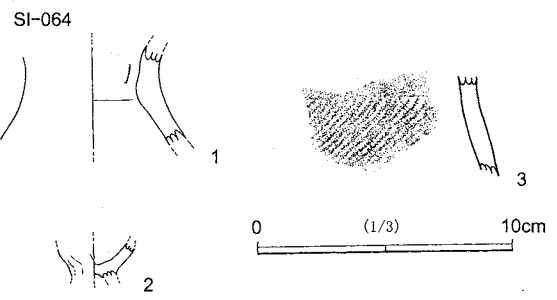
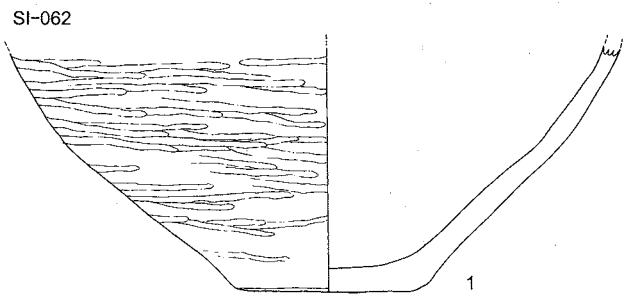
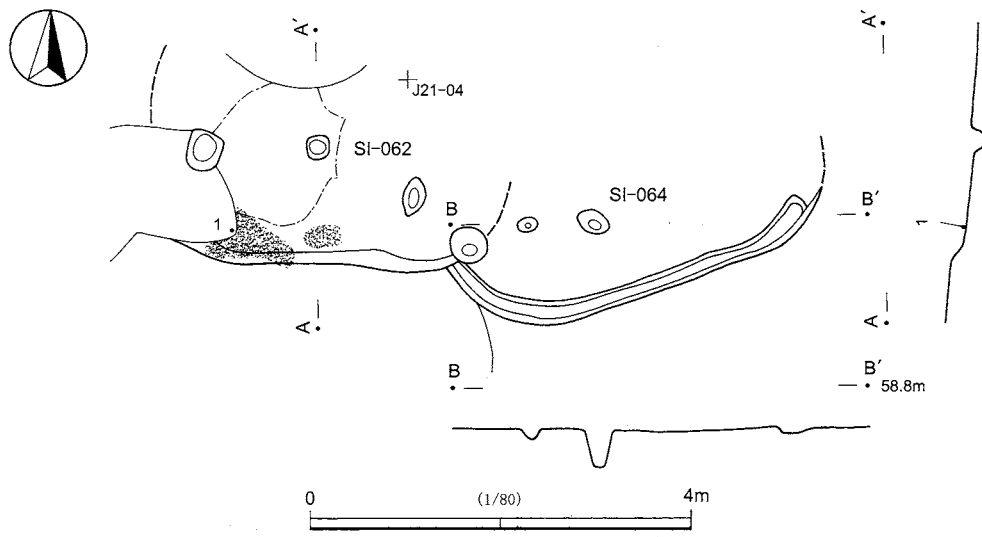
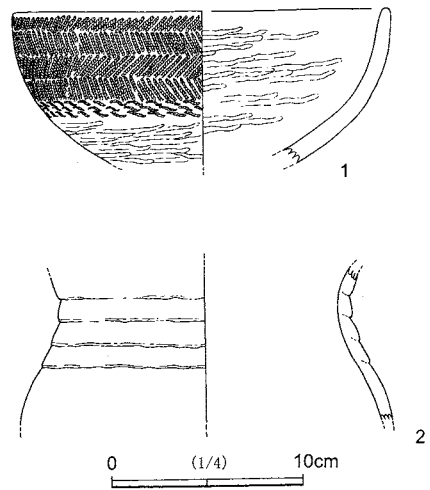
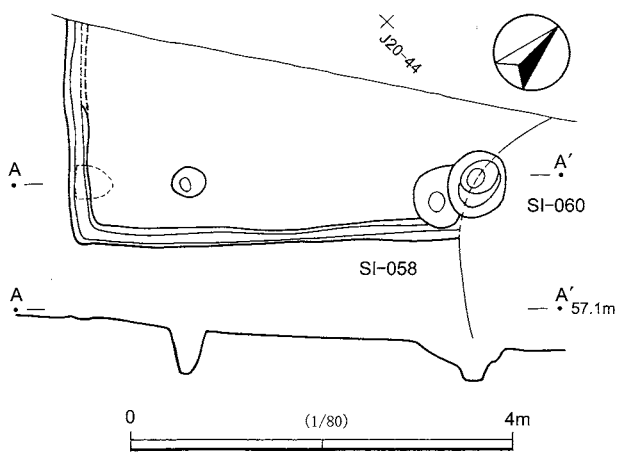
#### SI-065 (第155図, 図版90)

調査区中央西端, H22-47グリッド付近に所在する。大部分が北西側の調査区域外にあるため, 詳細は不明である。SI-045の床面下から検出された。床面の硬化面はなかったが, 全体に平坦でよく締まっている。柱穴は確認されない。壁際のピットは貯蔵穴に相当すると思われる。

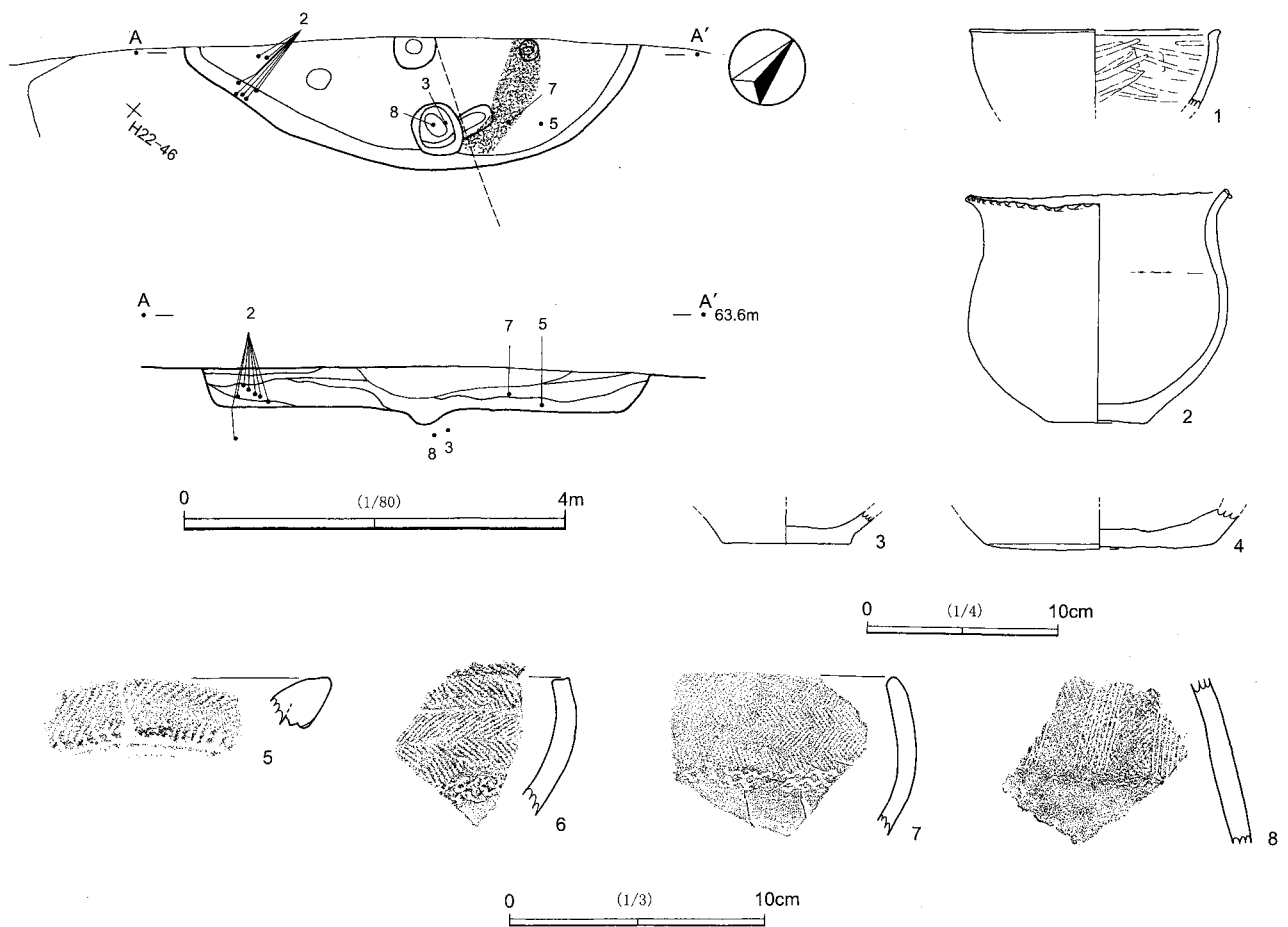
遺物は多くないが, 貯蔵穴内及びその周辺からの出土が目立つ。

#### 出土遺物

1は鉢あるいは高杯の体部片であろう。口縁部が短く外方に屈曲する形態を示す。内面に丁寧なミガキが施される。古墳時代前期の所産と思われ, 混入品であろう。2は小形の甕で, 口唇部を指により押圧し, 小波状を呈する。内外面ともナデ調整される。3・4は甕あるいは壺の底部片である。5~8は壺あるいは鉢片である。5は複合口縁で, LRの単節縄文と下端のキザミがみられる。6・7は羽状縄文下にS字状結節文を配する口縁部である。8は地文の羽状縄文上に集合沈線を加えている。



第154图 SI-058 · 062 · 064



第155図 SI-065

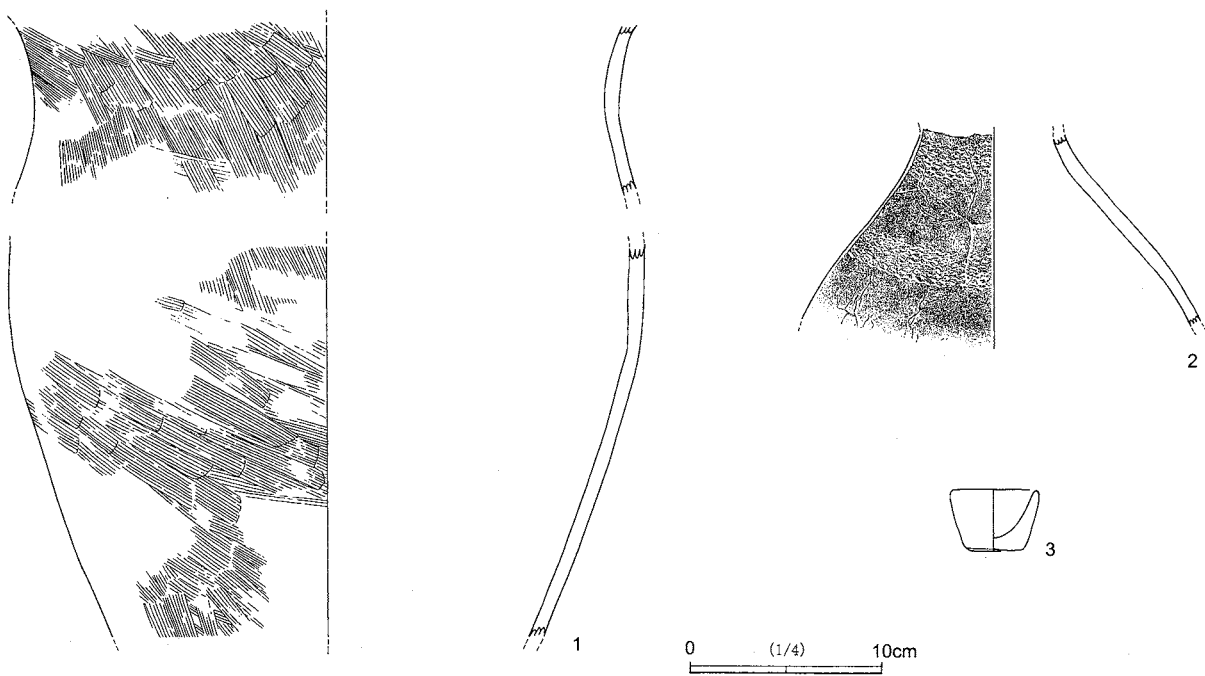
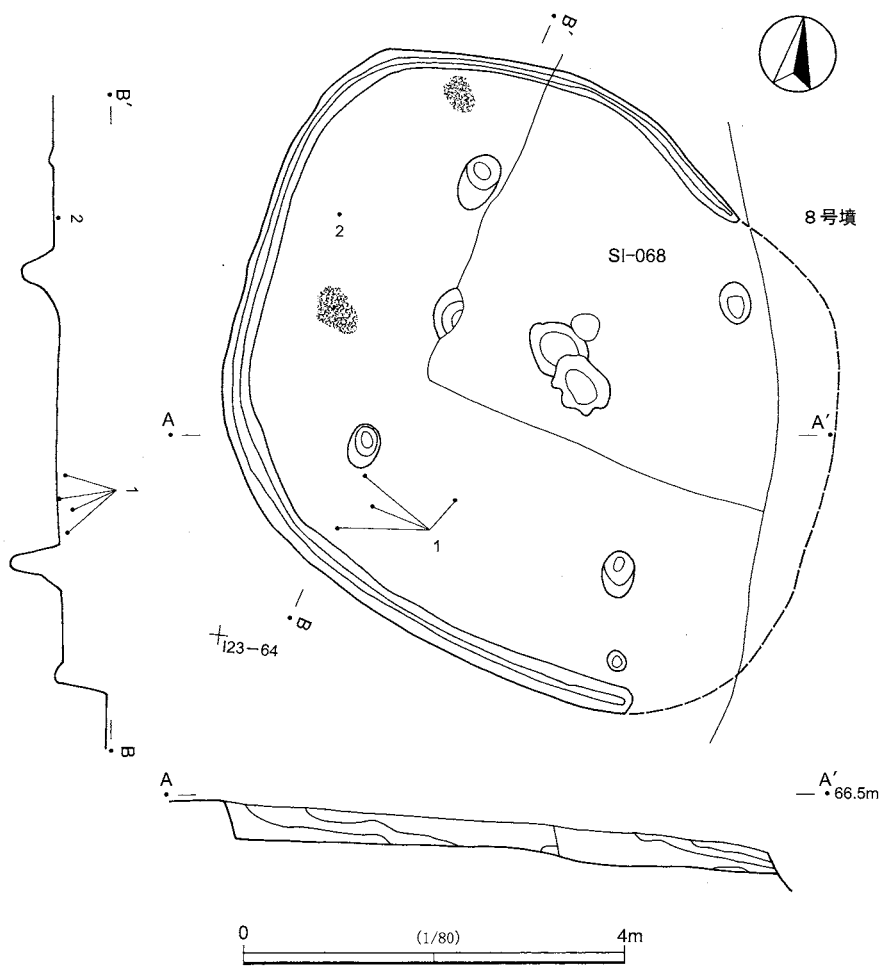
SI-066 (第156図, 図版43)

調査区南側, 123-64グリッド付近に所在する。8号墳墳丘下に位置し, 東側をSI-068と8号墳の周溝によって切られる。規模は, 長軸約6.5m, 短軸6.1mを測り, 隅丸長方形を呈する。主軸方向はN-14.0°-Eを指す。確認面からの深さは0.5mと比較的深く, 床面積は約32.6㎡を測る。壁溝は残存部については幅0.28m~0.32mで確認されているが, 本来は全周していたようである。柱穴は対角線上に4本配置され, 深さ0.4m~0.6mを測る。炉は3基検出されている。中央部の炉は複式炉のような形態で, かなり使い込まれたような状況である。北西側の炉は半分程度の遺存で詳細は不明である。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物の出土は少ないが, ほぼ床面上からの出土である。

出土遺物

1は甕の胴部片である。全体に目の細かいハケが横方向または斜位に施されている。2は壺の胴部上位から中位までの遺存である。肩部から胴上部に2段のS字状結節文帯がみられる。3はミニチュア土器である。



第156図 SI-066

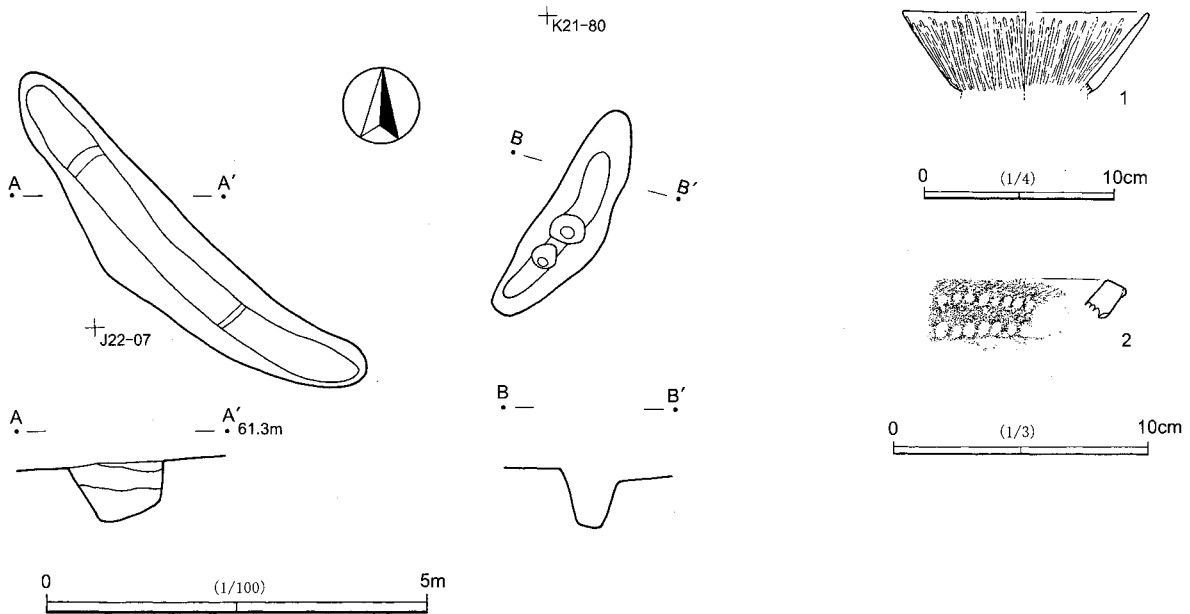
## 2. 方形周溝墓

### SS-001 (第157図)

調査区ほぼ中央、22J-07グリッド付近に所在する。西側と南側の溝のみの残存で、溝間には陸橋部が形成されている。西側溝は長さ3.0m、幅0.6m、南側溝は長さ1.53m、幅0.45mを測る。やや不整な舟形を呈し、覆土は自然堆積と思われる。

### 出土遺物

1は壺の口縁部である。内外面とも縦方向のミガキが丁寧に施されている。古墳時代前期の所産で、混入品であろう。2は壺の口縁部片である。複合口縁で、口唇部には細かいLRの単節縄文が施文され、棒状工具によるキザミが加えられる。

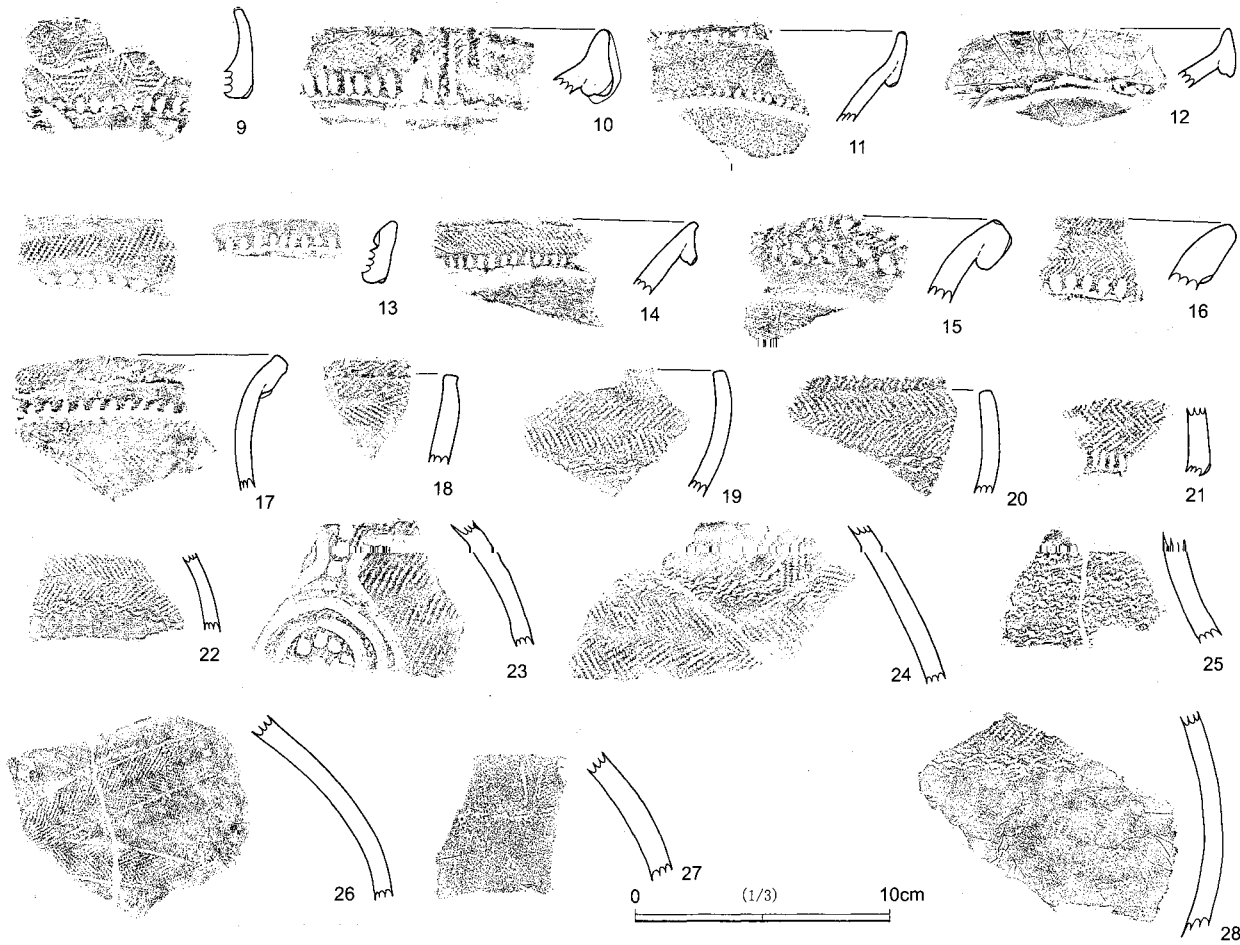
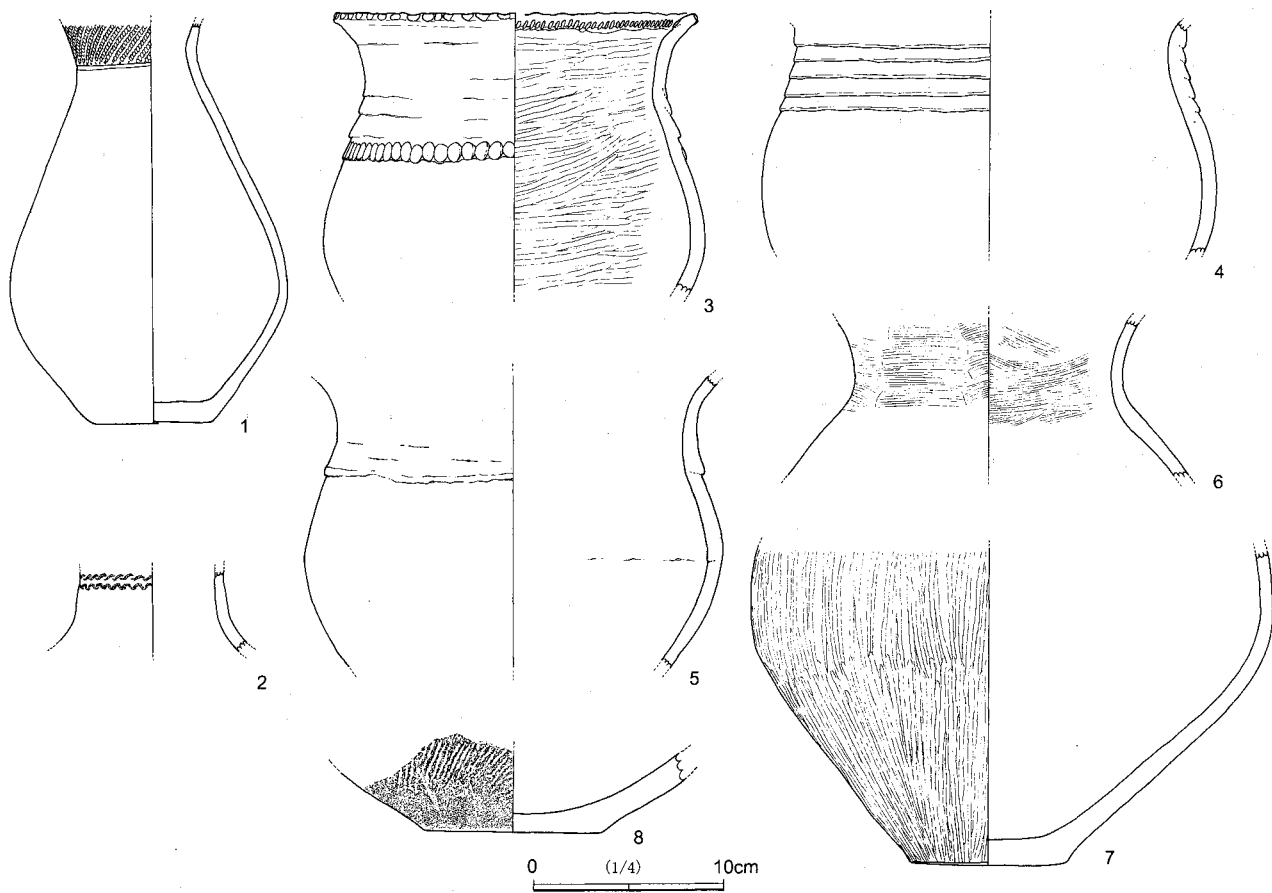


第157図 SS-001

## 3. 遺構外出土遺物

### 出土土器 (第158図, 図版90)

1・2は壺である。1は胴部下半に最大径を有するタイプで、頸部にLRの単節縄文を施し、下端を沈線で区画している。胴部外面はミガキ調整されるが、器面が荒れているため不明瞭である。口頸部内面及び文様帯以下の胴部に赤彩が観察されるが、鮮明ではない。2は頸部片で、S字結節文が認められる。3～5は頸部から肩部にかけて輪積み痕を残すタイプの甕である。3の口唇部と輪積み痕下端には、指による押圧が施される。また、口縁部内面に折り返しがあり、ヘラ状工具によるキザミが加えられる。6～8は壺である。8には燃糸文が確認され、7の外面には赤彩が観察される。9～16は壺の口縁部片である。複合または折り返し口縁となる。9の外面には単節縄文を充填した山形文が施文される。10には3本1単位の棒状浮文が貼り付けられる。17は甕の折り返し口縁である。18～20は鉢あるいは高杯の口縁部であろう。羽状縄文が施される。22～28は壺の胴部片である。23は中期の所産で、沈線による区画内に刺突が充填される。他はS字状結節文が主体となる。



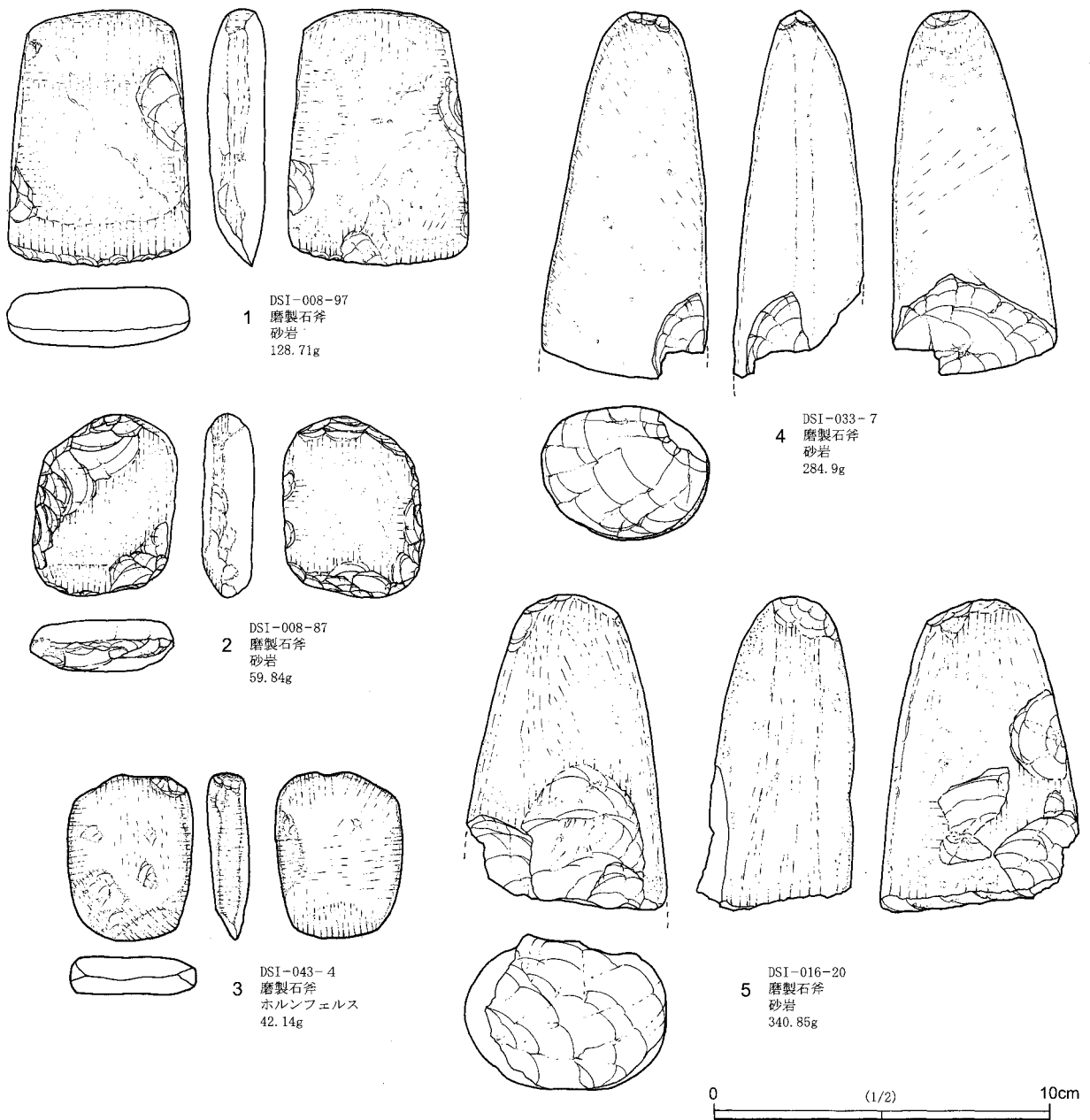
第158图 遺構外出土土器

弥生時代以降出土石器（第159・160図，図版91）

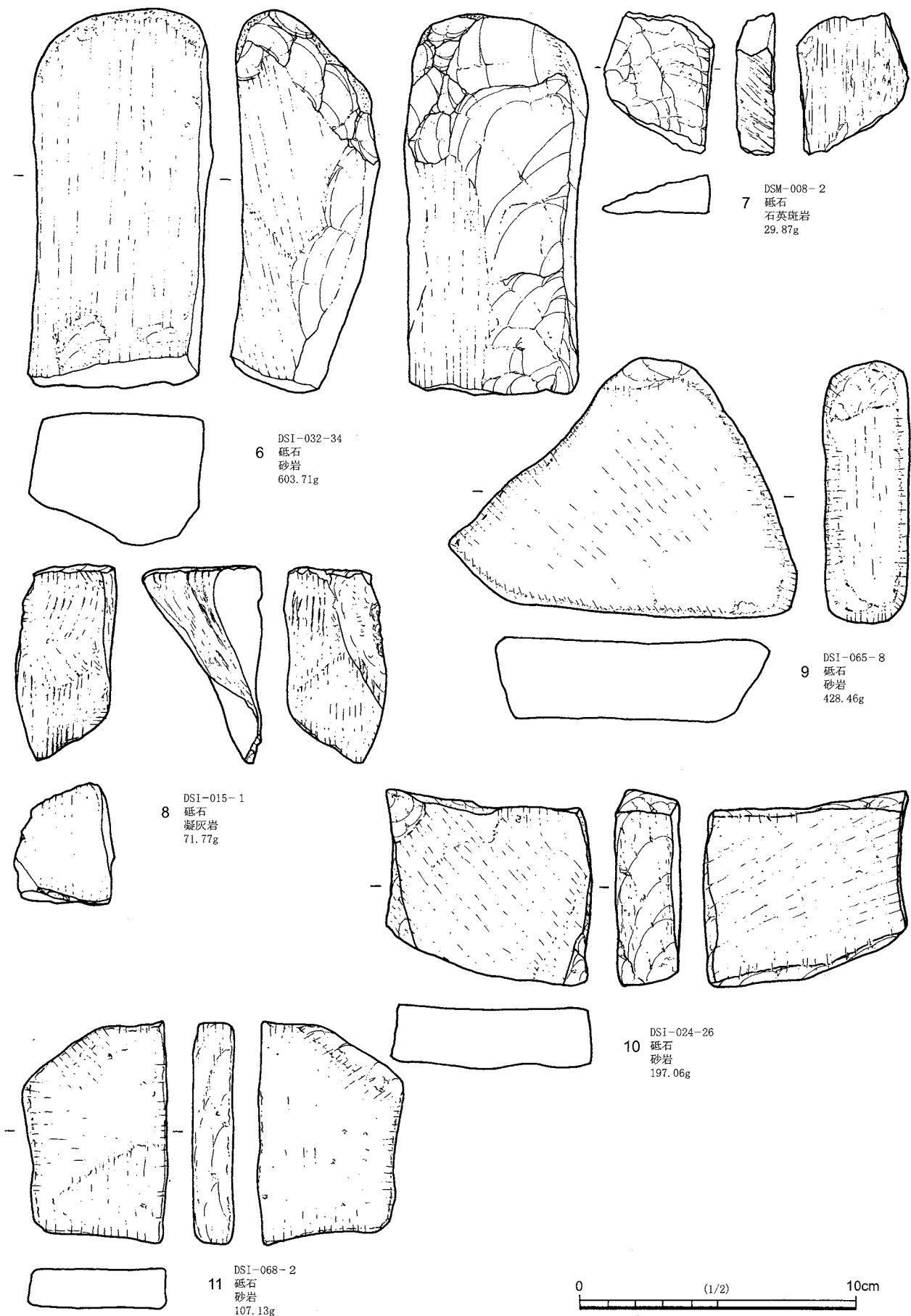
弥生時代以降の所産と思われる石器を弥生時代以降出土石器として第159・160図に図示した。

このなかで，弥生時代の遺構に伴う石器は，SI-008出土の1・2である。石器の形態から，弥生時代の所産のものと思われるものは，1～5は磨製石斧である。それ以外の6～11の砥石については，時期を特定することができなかった。

1は薄手で刃部幅が広い扁平片刃石斧で，完形品である。刃部再生が行われたことが観察され，最終的な刃部の刃こぼれは，ほとんどみられない。2・3は小型の扁平片刃石斧である。刃部再生が頻繁に行われたことが観察される。4・5は太型蛤刃石斧の頭部残存品である。6は厚手で研磨面は湾曲している。7・8は砂岩以外の石材が用いられており，小型の手持ちの砥石と考えられる。9～11は扁平な板状の砂岩が用いられている。



第159図 弥生時代以降出土石器（1）



第160图 弥生时代以降出土石器(2)



### 第3節 古墳時代

#### 1. 古墳

D区からは、墳丘を有する3基の円墳と、墳丘が確認されなかった2基の方形周溝墓及び単独の埋葬施設が検出された。

#### 8号墳（第161～164図，図版51・98・99）

8号墳の位置する台地北部の西側は、かなり急な崖状の斜面になっている。北東から南西に続く台地上の南西縁辺に立地し、南西側で9号墳、北西側でSM-001に隣接している。

#### 墳丘と埋葬施設

8号墳の南側一部は遺跡範囲外に位置しており全長は不明であるが、現況で墳丘長東西24m、南北21mを測る円墳である。周溝は、幅4m、深さ0.8mで比較的良好に掘り込まれている。墳丘の西から東にかけて近世の道跡、墳丘下からは、弥生時代後期のDSI-066、古墳時代中期のDSI-068が検出されている。住居の覆土からは土器がまとまって出土しており、この住居の埋没後に、盛土をして墳丘を構築していることは明らかである。盛土の高さは1mで、周溝からの見かけの墳丘高は2.4mを測る。墳丘裾部は、地山整形によって墳端を成形している。墳丘は、DSI-066・068が埋没して表土がある程度堆積した段階で、旧表土上に盛土をして構築している。盛土の法則性は見出し難いが、墳丘の外周から盛土して、内側に盛土していく方向性が窺える。

#### 埋葬施設

8号墳からは、掘り込みを持つ埋葬施設は検出されなかった。根の攪乱付近から鉄鏃が出土していることから、本来、墳丘上部に埋葬施設が存在していた可能性が高いと思われる。

#### 出土遺物

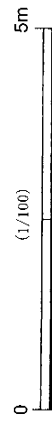
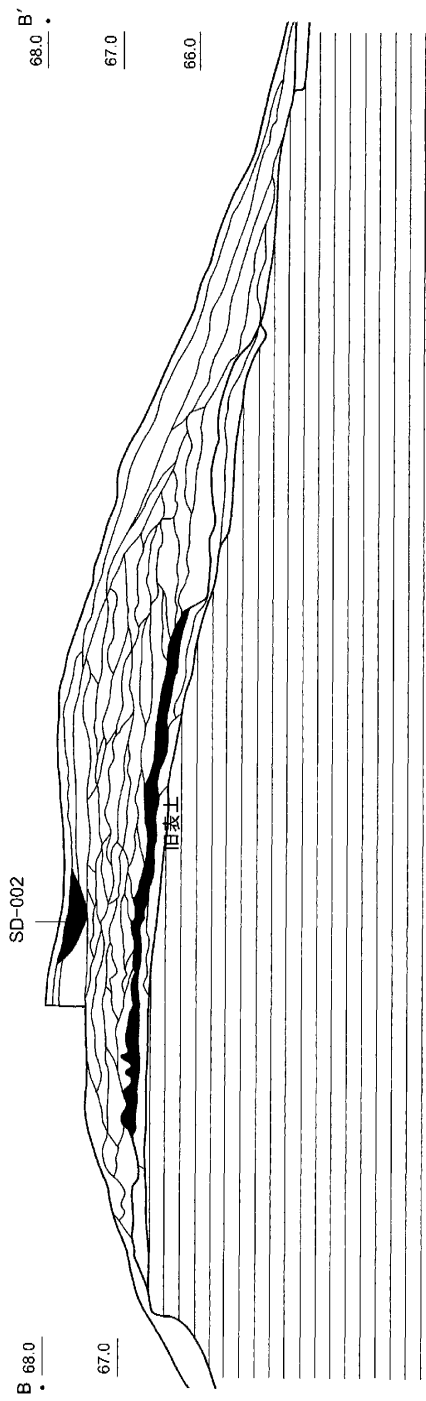
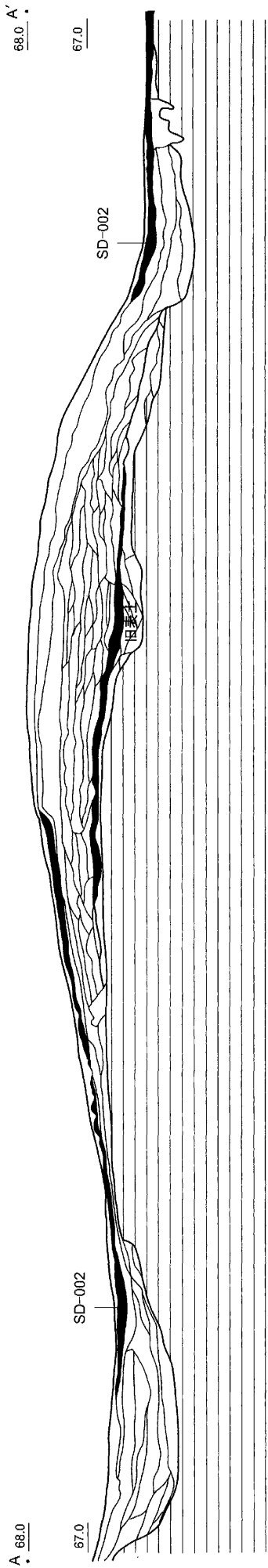
墳丘から、土器や鉄製品などが出土している。墳丘の北西部から杯3点と甕2点がまとまって出土している。1～3は土師器の杯である。1は口径14cmとやや大形である。口唇部に面取りを施し、口唇部が垂直に立ち上がるように整形している。底部外面は丁寧なヘラケズリが施され、広範囲に黒斑がみられる。また、「十」の焼成後の線刻が加えられる。体部外面以外に赤彩が施されている。2の体部にはヘラケズリ後ナデ調整が施される。段状の稜を有して口縁部がやや外反し、口唇部は丸みを帯びる。内外面ともに赤彩が施されている。3の底部外面にはヘラケズリが施され、口縁部は外反気味に内傾する。1同様体部外面以外に赤彩されている。4～7は高杯で、脚柱部のみの遺存である。臍によって杯部と脚部を接合するタイプが主体である。6の杯部内面に赤彩が認められる。8・9は壺である。8は口縁部を欠く。肩部に調整時についたヘラの当たり痕が認められる。9は壺の口縁で、口径約15cmを測る。ハケ目整形後ナデが加えられ、口縁部内面から胴部外面にかけて赤彩が施されている。10は鉢で、口径18.8cm、器高14.6cmを測る大形品である。口縁部はヨコナデ、胴部はヘラケズリ調整で、底部がやや突出する。底部付近に黒斑が認められる。11は甕であろう。口縁部を欠くが、外面にススが付着している。胴部内面に輪積み痕が部分的に認められる。12・13は壺の底部であろう。14はミニチュアで、内外面ともに器面が荒れている。15は双孔円盤である。石材は滑石で、孔は両側穿孔である。部分的に側面を面取りしている。両面とも丁寧に研磨している。

16～25は鉄製品である。鉄鏃8点、直刀1振り、鉄斧1点が出土している。16～23は鉄鏃である。16～18は腸袂状の逆刺を有する長三角形鏃で、片丸造りである。19は片刃箭式の鏃身を呈している。20～22は

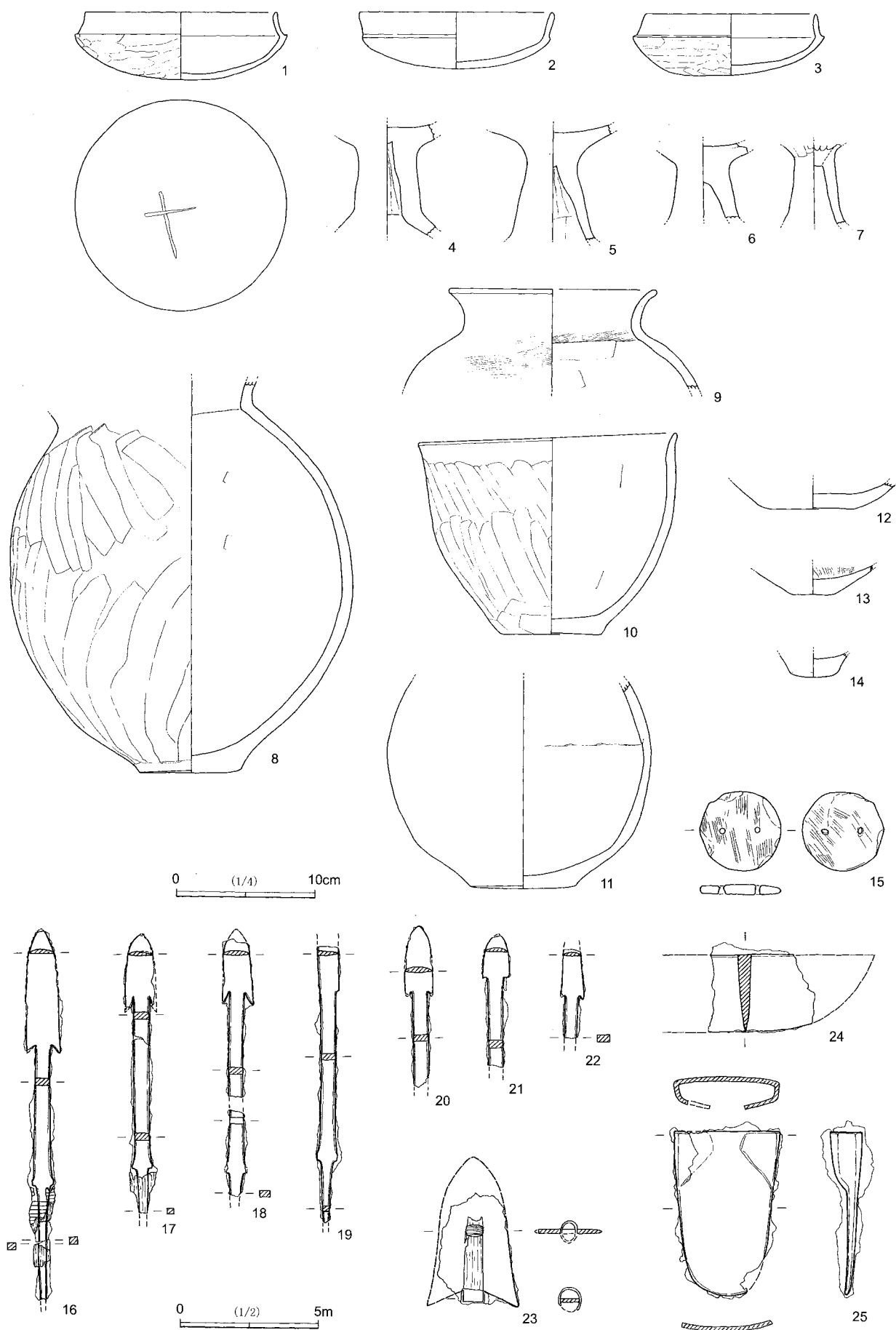


第161图 8号墳墳丘現況图





第162图 8号墳填丘測量図



第164图 8号墳出土遺物

逆刺をもたない三角形である。23の鉄鏃は広身の鏃身部で、極めて短い扁平な篋被ぎを有するタイプである。鏃身中央に孔があり、矢柄で挟み込むものであろう。24は直刀の破片である。25は鉄斧で、上端部を折り返して挿入部を形成している。全長6.5cmと小形であり、不明瞭であるが刃が作出されていない可能性が高く、実用品というより鉄製模造品として捉えておきたい。

8号墳からは、埋葬施設に相当する掘り込みは検出されなかったが、鉄斧・直刀・鉄鏃など多数の鉄製品が出土しており、これらの遺物は本来埋葬施設に副葬されるものである。また、鉄鏃がまとまって出土していることから、明確な掘り込みを持たない直葬の埋葬施設があったものと思われる。

構築時期については、赤彩された土師器の杯や鉄製品などから6世紀前半に位置付けられよう。

### 9号墳（第165～168図、図版51・98・100）

9号墳は、北東から南西に続く台地上に立地し、鹿島台古墳群の中で最も南側に位置している。台地の縁辺に位置し、南西側で8号墳、北西側で11号墳に隣接している。南東側はかなり急な崖状の斜面になっている。

#### 墳丘と埋葬施設

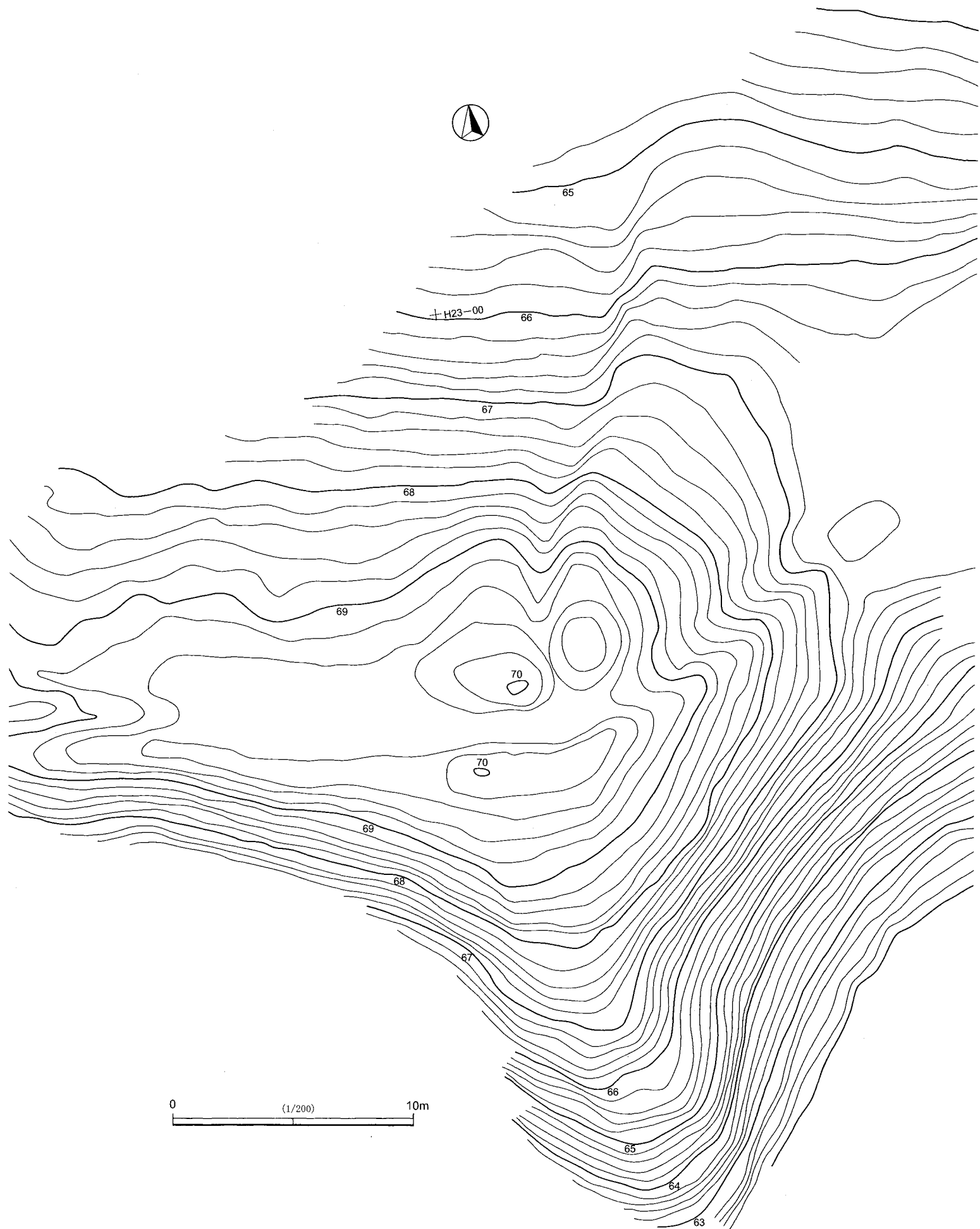
9号墳は、東西23m、南北18mを測るやや不整で横長の方墳である。周溝は幅3m、深さが最深0.8mを測る。墳端部はローム層を削り出して構築している。西側の周溝底は平坦になっているが、南東の周溝は攪乱を受けており詳細は不明である。北側周溝の外側は浅く明確な立ち上がりを持たない。墳丘下からは、北側で古墳時代中期のDSI-032、西側で古墳時代中期のDSI-044がそれぞれ周溝付近から検出されている。この住居の埋没後に盛土をして墳丘を構築している。墳丘の西から東にかけて近世の道跡が検出されており、盛土の遺存度は高くない。残存している盛土高は、最大で0.5m、周溝からの見かけの墳丘高は3.5mを測る。

#### 埋葬施設

9号墳からは鉄鏃が出土しているが、出土位置は不明である。埋葬施設が存在していた可能性はあるが、掘り込みなどは確認できなかった。

#### 出土遺物

墳丘からは、高杯8点、器台1点、壺6点、ミニチュア1点、鉄鏃2点が出土している。1・3・5・6・7・10・12・13は墳丘南側から集中して出土している。1～7は高杯で、1以外は脚柱部のみの遺存である。1は口径17.5cm、裾径13.6cm、器高13.5cmで、杯部の下部外面に粘土を付加して突帯状に成形している。脚部内面に絞り目が確認でき、杯部と脚部をソケット状に接合している。2の外面には赤彩が認められる。4の外面には未貫通の孔が1か所確認される。7の脚柱部内面には積み痕が残っている。8は器台であろう。この古墳に伴う土器ではない。9～13は壺である。9は二次焼成を受けている。口縁部はヨコナデ、胴部外面はヘラナデ、内面はナデのちミガキ調整が施される。10の胴部内面にはハケ調整が施される。内外面ともに器面が荒れており、使用した痕跡が伺える。11の外面には赤彩が施されている。14の壺は底部穿孔土器である。底部の厚みは1.6cmで、内面にハケ調整が施されている。15は手捏ね土器の底部であろう。16・17は2段鏃の鉄鏃で、鏃身部は剣身を呈し、断面は片丸鏃である。1段目の逆刺は短く、2段目の逆刺の方が長い。18は石製紡錘車で、半分を欠損する。最大長3.3cm、厚さ1.1cmを測る。滑石製で、上面と側面の境はあまり明瞭ではないが、下面と側面の境は丁寧に研磨されていて明瞭である。出土遺物からみた築造時期については、高杯の様相と鉄鏃から5世紀末から6世紀初頭頃と思われる。

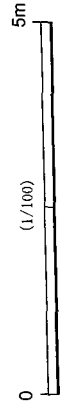
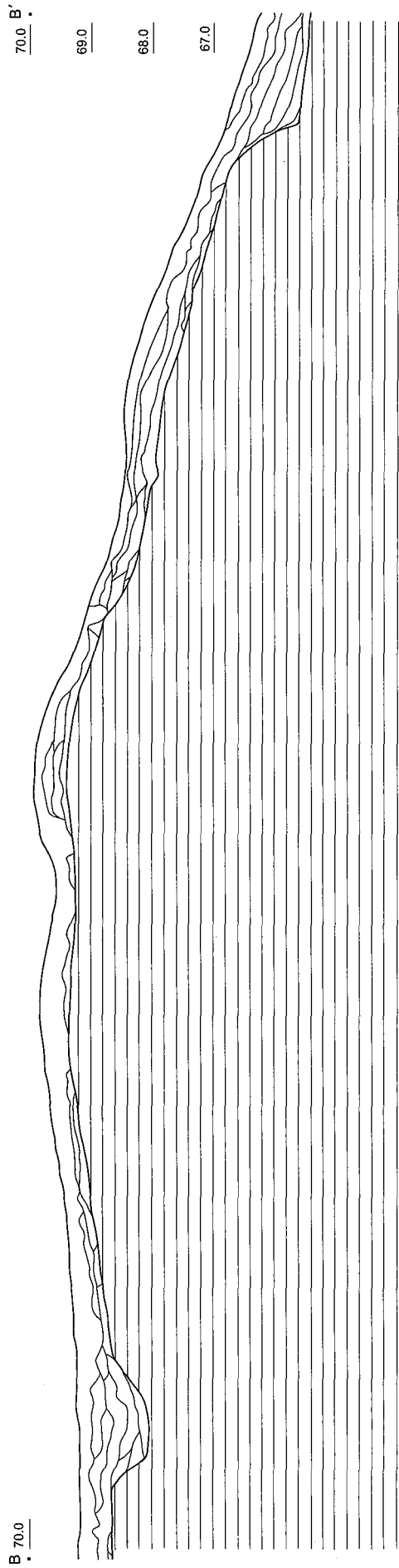
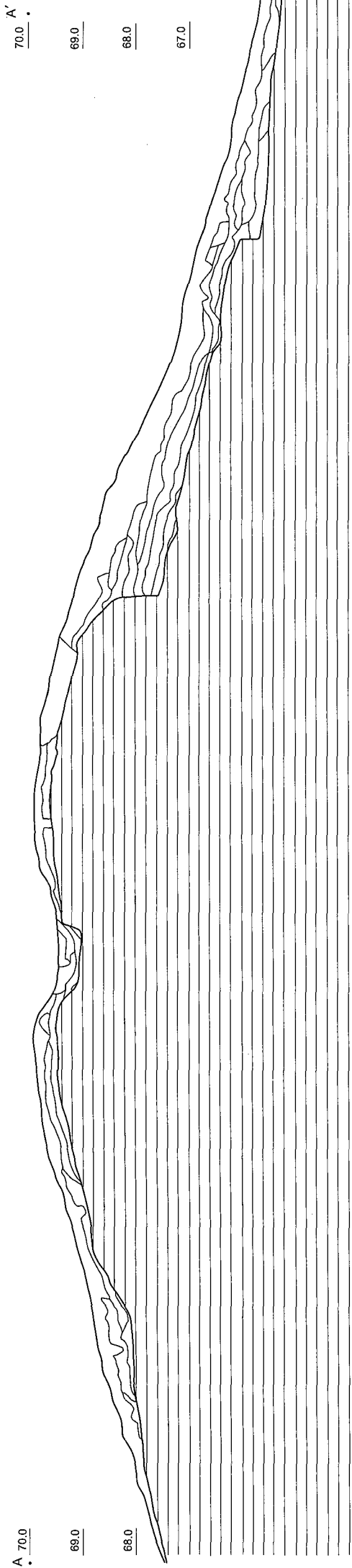


第165図 9号墳墳丘現況図

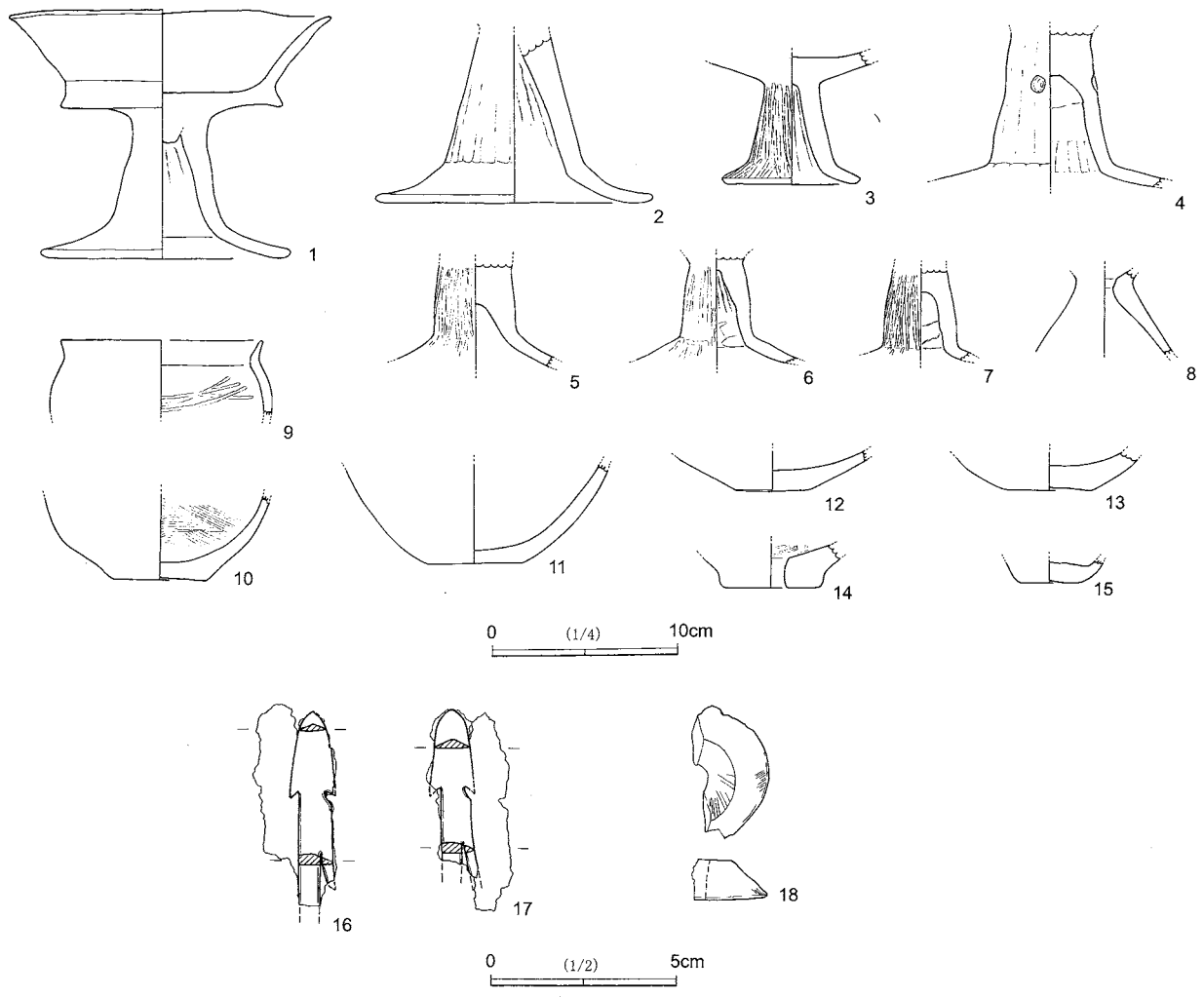


第166图 9号墳墳丘測量図





第167图 9号填墳丘断面图



第168图 9号墳出土遺物

## 11号墳（第169図，図版52）

11号墳は、北東から南西に続く台地上に立地し、鹿島台遺跡の南側に位置している。台地は南西にいくに従って標高が高くなっており、鹿島台古墳群中最も高い場所に位置している。台地の南側縁辺に築造され、南側はかなり急な崖状の斜面になっている。東側で9号墳に隣接する。

### 墳丘と埋葬施設

11号墳は3/4ほどが調査範囲外に位置しているので、全体の規模は不明である。南側コーナー付近のみが検出されている。墳形は方墳であろう。周溝は、東溝が南溝よりも広く、東溝で幅4.5m、深さ1.1m、南溝で幅2m、深さ0.8mを測る。ソフトロームまで掘削して周溝を構築している。墳丘下からは、東周溝で弥生時代後期のSI-035が検出されている。この住居の埋没後に、黒褐色土の地山の上に盛土をして墳丘を構築している。旧表土は墳丘外側ほど厚く、最大で0.6mを測る。墳丘の大半は調査範囲外であるが、盛土高は0.6m、周溝からの見かけの墳丘高は1.1mを測る。

### 出土遺物

墳丘からは、高杯2点と甕2点が出土している。1・2は高杯の脚柱部である。1の杯部内面はミガキで、脚柱部外面はヘラナデを施している。2の内面には粘土の絞り目が残る。3は甕の口縁部で、外面にはススが付着している。4の底内面にもススがみられる。

出土土器からみた古墳の時期は、高杯や甕の様相から、8・9号墳とほぼ同様の6世紀前半頃に位置づけられると思われる。

## SM-001（第170・171図，図版52・97・98）

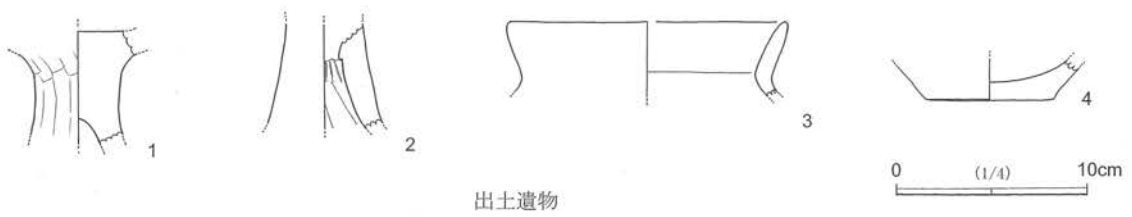
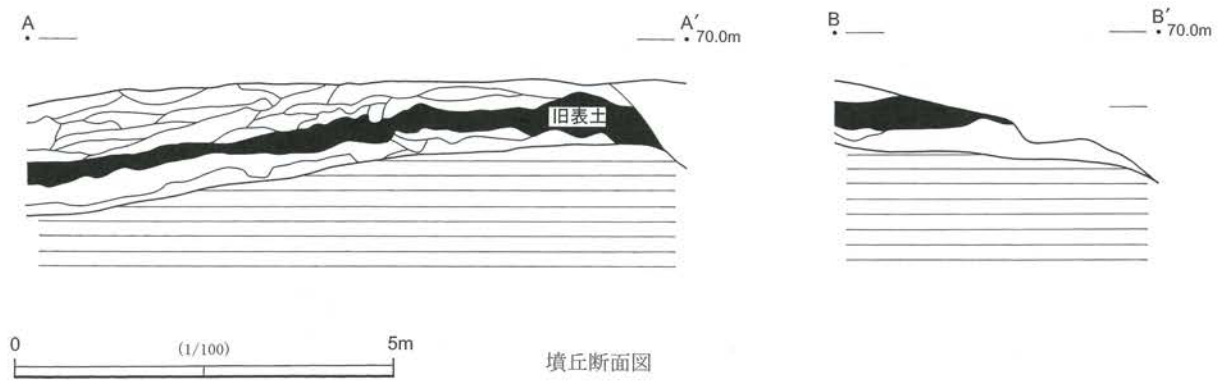
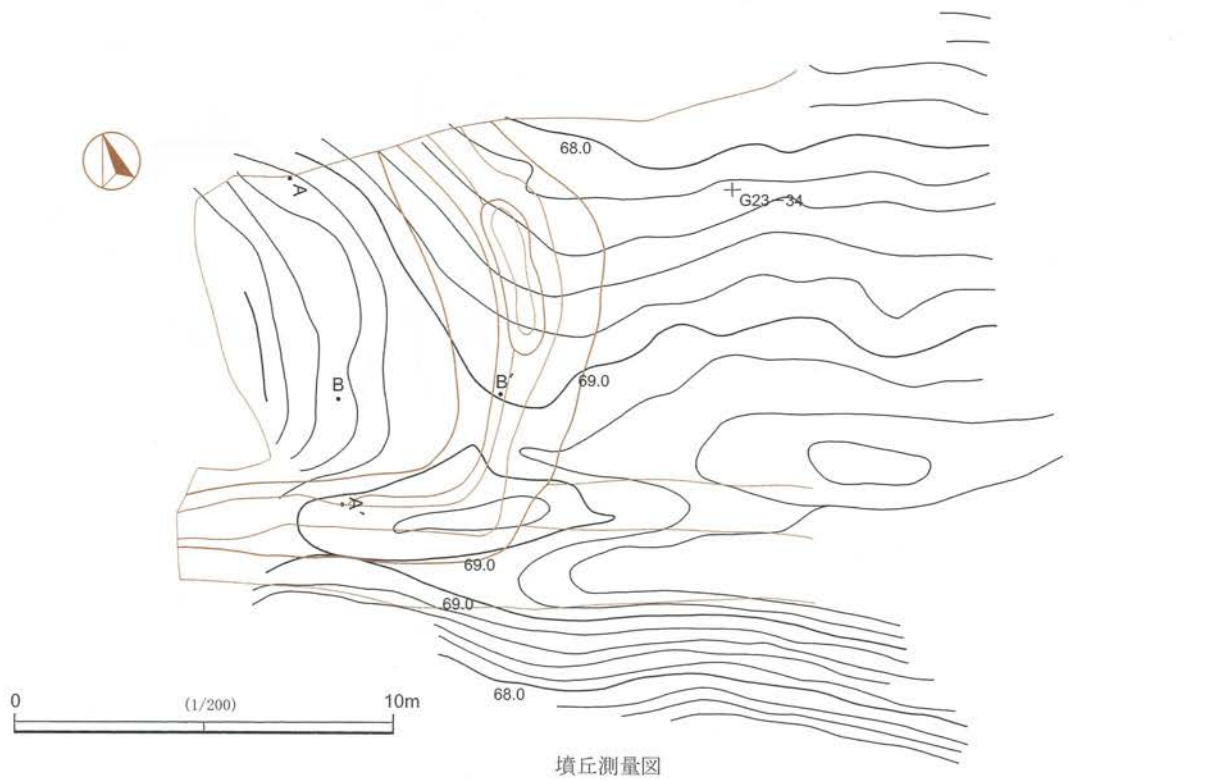
調査区西側に位置し、H23-05からI23-00付近で検出された方形周溝墓である。北西コーナー近くの北溝の一部が途切れる。全体にやや不整な横長の長形状を呈し、規模は、周溝外側で東西10m、南北7.5mを測る。周溝は、幅0.8m～1.4mを測り、東周溝を除いて各周溝の中央部が一段深く掘り込まれている。

### 出土遺物

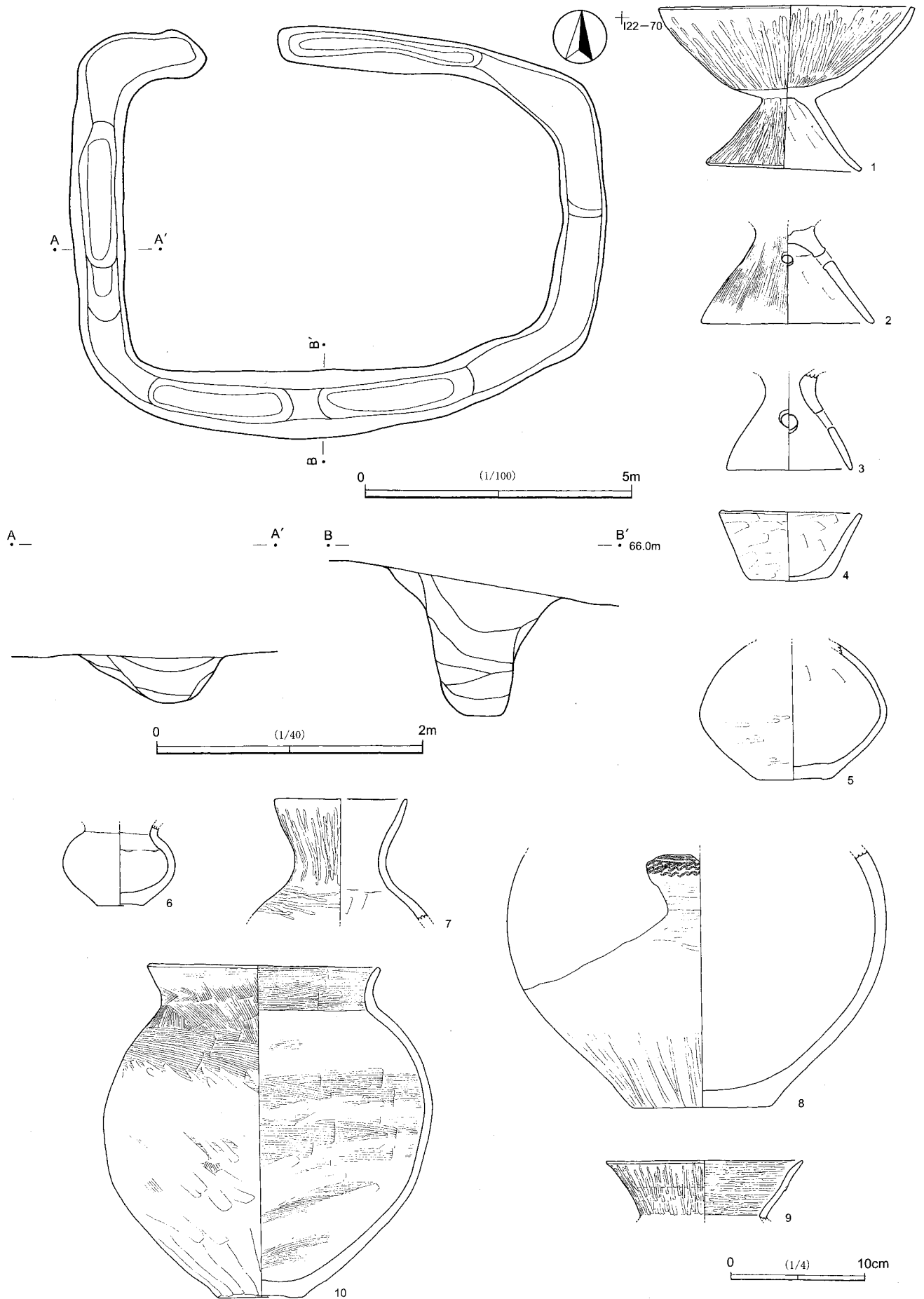
1は高杯である。口唇部は比較的平坦な面を形成し、杯部内外面及び脚部外面に丁寧な縦方向のミガキが施されている。脚部内面以外に赤彩が加えられる。2・3は器台の台部で、2は直線的に開き、3は内湾気味に開くタイプである。透かし孔は2が4個、3が2個と思われる。4はほぼ完形の鉢であろう。内外面ともナデ調整される。5～9は壺である。5は胴部中位に最大径があり、算盤玉状の器形を呈する。6は小形で口縁部を欠損している。7は口縁部が内湾気味に開き、外面にはミガキが施されている。口縁部内面から胴部外面にかけて赤彩がみられる。8には3条のS字状結節文が施文され、ミガキが加えられているが、器面が粗く明瞭ではない。9の口縁部中央には弱い稜が形成される。10～12は甕で、10は胴部中位に最大径を持ち、口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにハケ調整が施され、外面は胴部中位から下位にヘラケズリが加えられる。底部には木葉痕が残る。12は最大径がやや下位にあり、下膨れの形状である。13～18は甕または壺の底部である。

## SM-002（第172・175図）

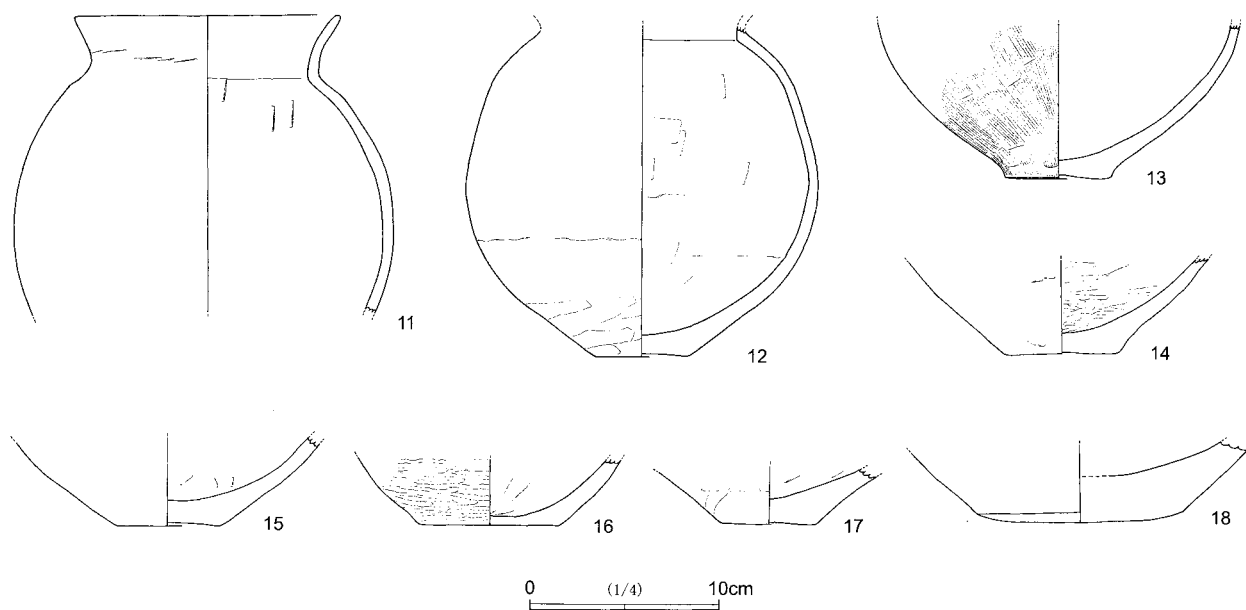
調査区北東側、I22-07からL22-00グリッド付近に所在し、SI-019を切る。北西コーナー付近が攪乱を受けている。規模は、南北方向の周溝外側で8.5mを測る。周溝は、幅0.5mほどと全体に狭く、東側には掘り込みがないため、コの字状を呈する。部分的に一段深く掘り込まれている。中央に位置するSK-016は、明確ではないが埋葬施設になると思われる。長軸3.0m、短軸0.9mを測り、確認面からの深さ0.5m～0.8



第169図 11号墳墳丘測量図・断面図・出土遺物



第170图 SM-001 (1)



第171図 SM-001 (2)

mと比較的深い。

#### 出土遺物

埋葬施設と思われるSK-016から3点の土器が検出されているが、伴出するものかどうかは不明である。1は弥生後期の壺の頸部片である。ボタン状の円形浮文と単節縄文が施されている。2・3は壺あるいは甕の底部片である。

#### 2. 埋葬施設

##### SK-013 (第173図)

調査区中央、I22-35グリッド付近に所在する。長軸3.5m、短軸2.4mを測る隅丸の長方形を呈している。底面中央に、長軸2.3m、短軸0.7mの規模で一段深い掘り込みがあり、木棺の大きさを示している。

#### 出土遺物

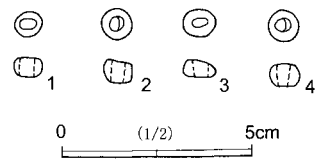
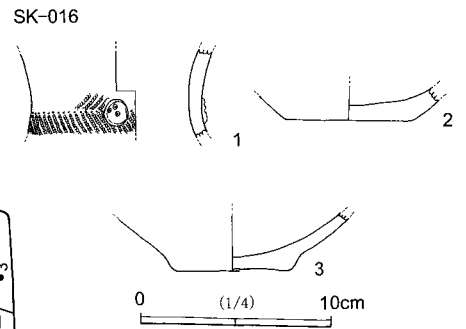
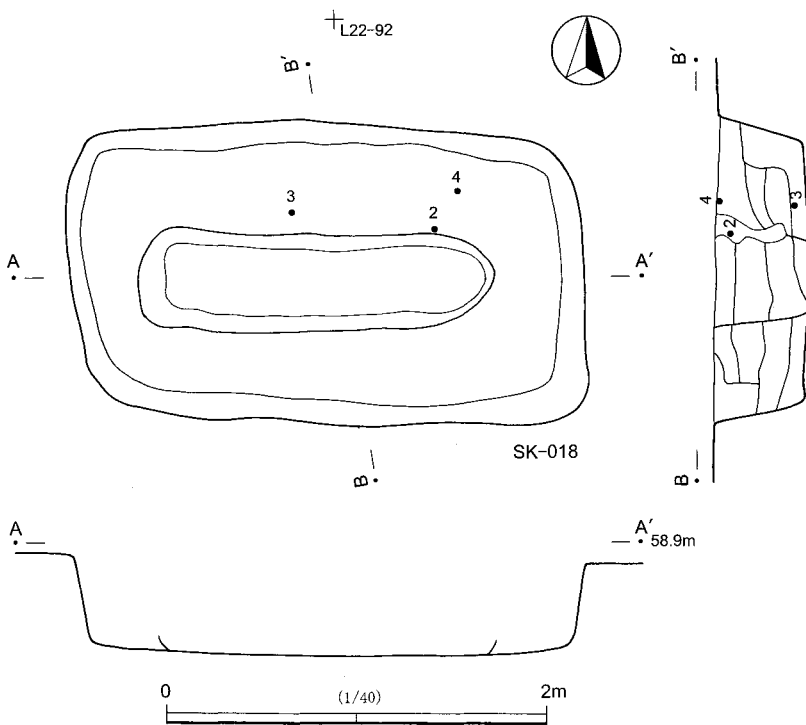
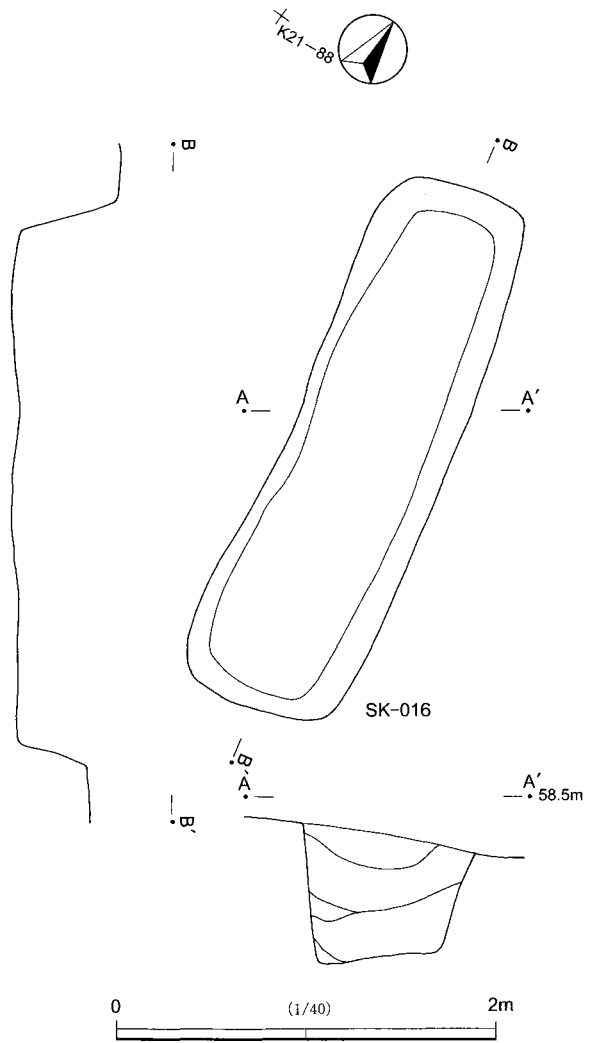
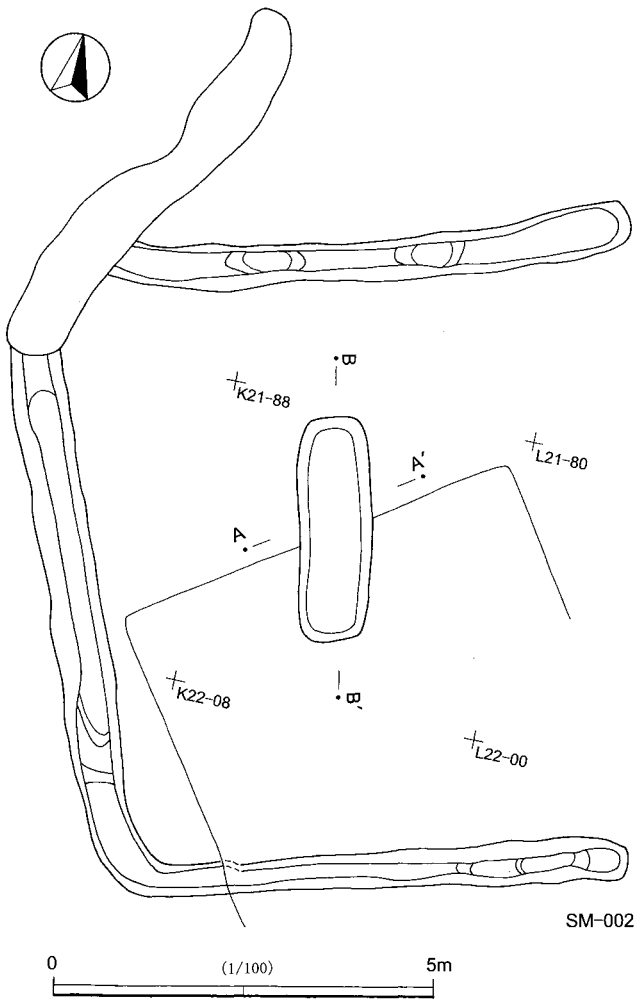
弥生後期の壺の小破片と底部片が出土しているが、混入品であろう。

##### SK-018 (第172図, 図版100)

調査区東端、L23-02グリッド付近に所在する。長軸2.7m、短軸1.6mの長方形を呈し、底面は平坦で確認面からの深さ0.5mを測る。中央部に、長軸1.9m、短軸0.5mの木棺痕が確認される。東側小口部が突出し、全体に砲弾状の形態を呈する。

#### 出土遺物

ガラス玉が4個出土しているが、棺外でレベルにも開きがあるため、攪乱を受けたものと思われる。空色が3点と緑色が1点である。



第172图 SM-002, SK-016 · 018

### SK-042 (第173図)

調査区南端，K23-06グリッド付近に所在する。長軸2.8m，短軸1.1mを測る長方形を呈している。底面は平坦で確認面からの深さ0.5m～0.7mを測る。遺物の出土はないが，形状から埋葬施設になると思われる。

### 3. 竪穴住居

#### SI-002 (第174・175図，図版43・44・92・99・100)

調査区東側，K22-26グリッド付近に所在する。東側に緩く傾斜する面にあるため，東側コーナー付近の壁は消失している。規模は長軸5.7m，短軸5.6mを測り，ほぼ正方形を呈する。北西壁の中央部分をSK-009で切られている。主軸方向はN-42°-Wを指し，床面積はほぼ32.0㎡を測り，ほぼ平坦である。壁溝は南西部分と北東部分に幅0.16m～0.2mで一部認められる。柱穴は対角線上に4本配置される。南コーナーに設けられたピットは貯蔵穴と思われる。1辺0.6mほどの正方形を呈し，深さ0.5mを測る。炉は北西の柱穴間に位置しており，長軸0.8mの楕円形を呈している。床面全体に焼土と炭化材が遺存していることから，焼失住居と思われる。

遺物は，比較的豊富に出土している。壁際に沿って分布しているが，ほとんどが床面からかなり浮いており，一括廃棄された可能性が高い。

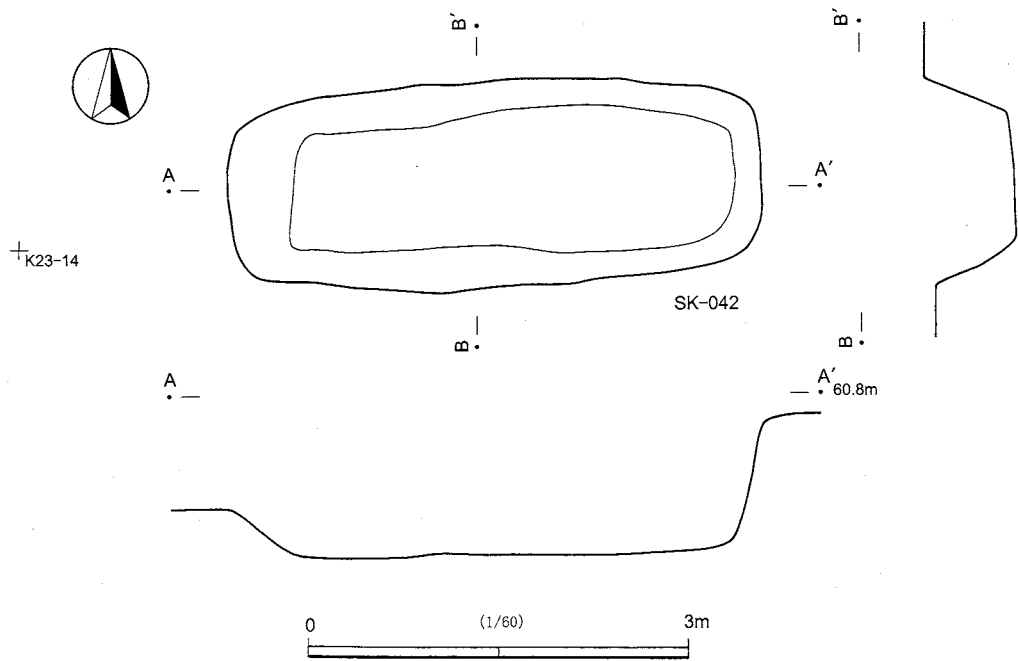
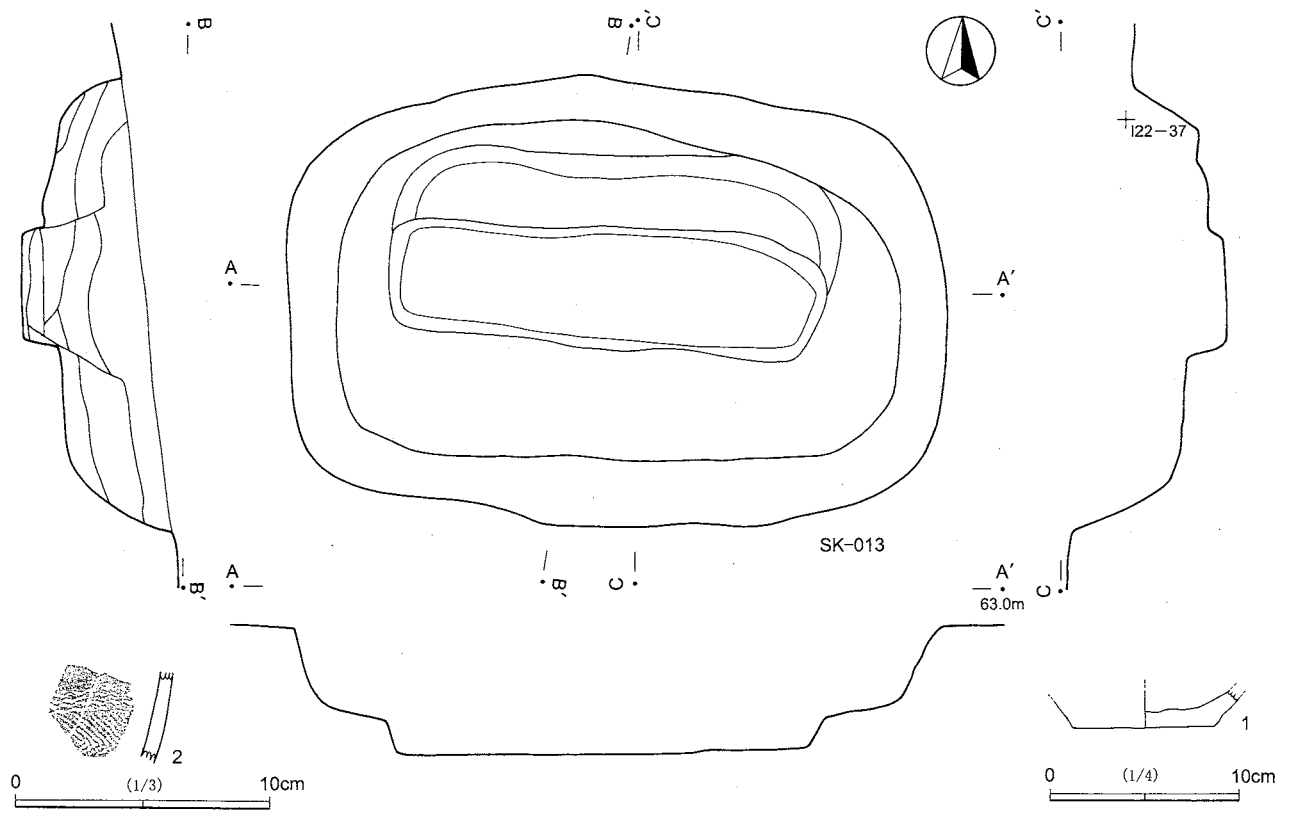
#### 出土遺物

1～4は杯である。1～3は口唇部を小さく摘み上げるタイプで，球形胴となる。3は平底気味となる。1の内外面，2の外面に赤彩がみられる。4は小片であるが，杯となろう。5・6は歪みのある鉢で，5は内外面とも粗いミガキ，6はヘラケズリが施されている。7は手捏土器である。8～15は高杯である。杯部の形状から，下部に稜を有して口縁部が直線的に開くタイプ(8・11・12・13・14)と内湾気味に開くタイプ(9・10)に分けられる。8の脚部は裾部が大きく開く。11・13の杯部にはハケ目痕が残る。9は裾部が大きく開き，焼成後の穿孔が一ヶ所みられるが，貫通していない。10は脚部が直線的に開き，口径の割に深い杯部を有する。14と15の外面には赤彩が施される。16は台付甕の台部であろうか。内外面ともハケ目が明瞭に観察される。17・18は小形の壺である。17は埴形を呈し，底部中央が窪む。全体にナデ調整される。18は胴部内面に輪積み痕が残る，口縁部内面から胴部外面にかけて赤彩される。19～24は甕である。19・20・24は小形品で，19はヘラケズリ，以外はナデ調整される。21は口縁部にやや歪みがみられる。23はハケ目痕が残る。25は鉢となろうか。内外面赤彩され，縦方向のミガキが施されている。26は壺で口縁部を欠く。胴部には，横方向の粗いミガキが明瞭にみられる。27～29は甕の底部である。30は鉄製刺突具である。完形品で，全長28.5cmを測る。先端に逆しが形成されているが，若干欠損している。31も鉄製品であるが，用途不明である。32は滑石製の剣形模造品である。やや粗雑な作りで，研磨もそれほど丁寧ではない。33は土玉，34は土錘である。

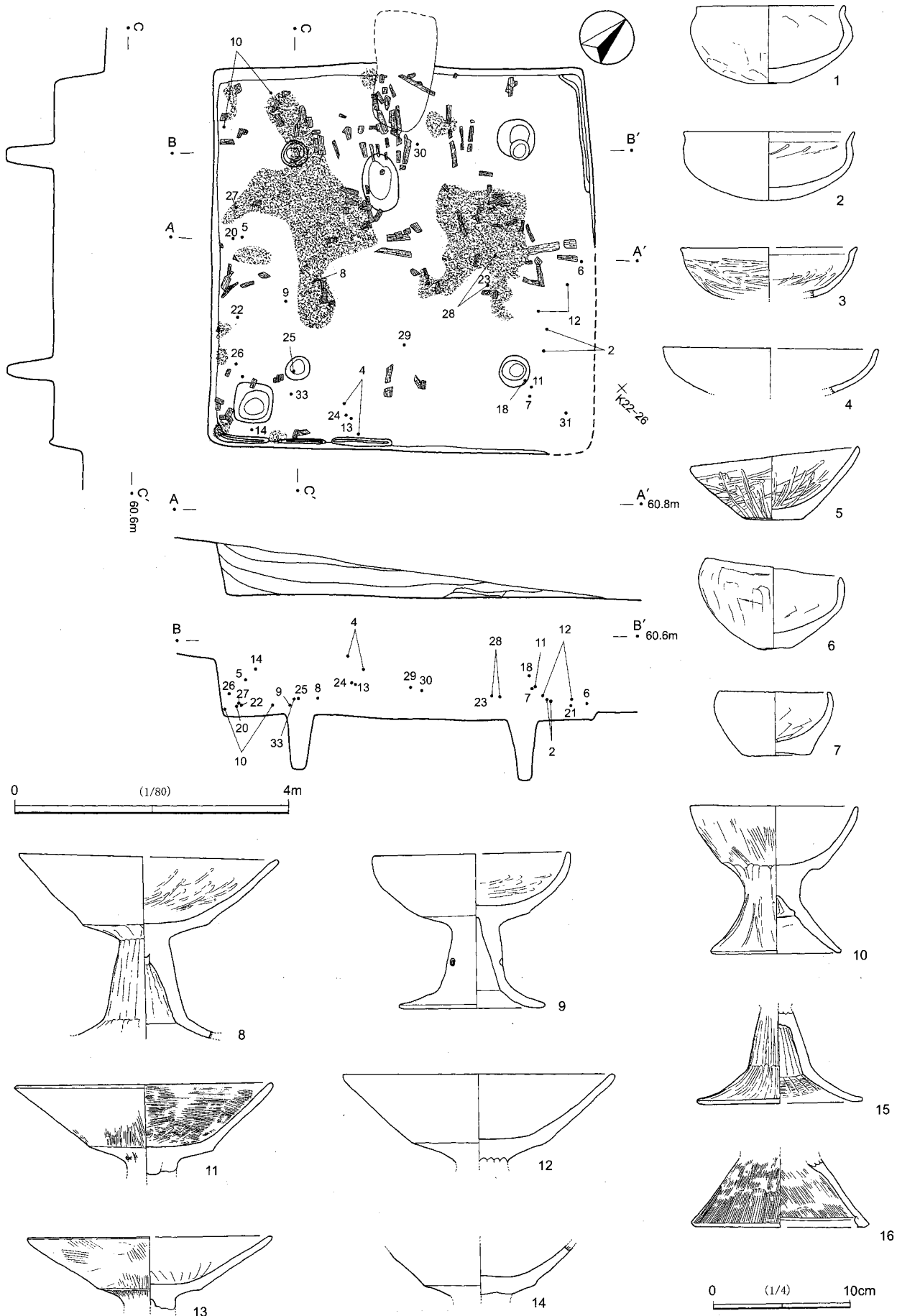
#### SI-010 (第176図，図版44)

調査区南東側，K22-60グリッド付近に所在する。縄文の大形住居であるSI-018の北西部を切る。規模は1辺3.5mを測り，やや歪んだ正方形を呈している。主軸方向はN-14.0°-Eを指し，床面積は12.6㎡を測る。床面はほぼ平坦で，南側を中心に硬化面がみられる。壁溝は西側に0.2m程の幅で遺存しているが，東側はSI-018の覆土中にあるため検出困難で，本来は全周してとも思われる。柱穴は対角線上に4本配置される。北側柱穴間のピットは性格不明である。炉は検出されなかったが，北側床面が一部攪乱され

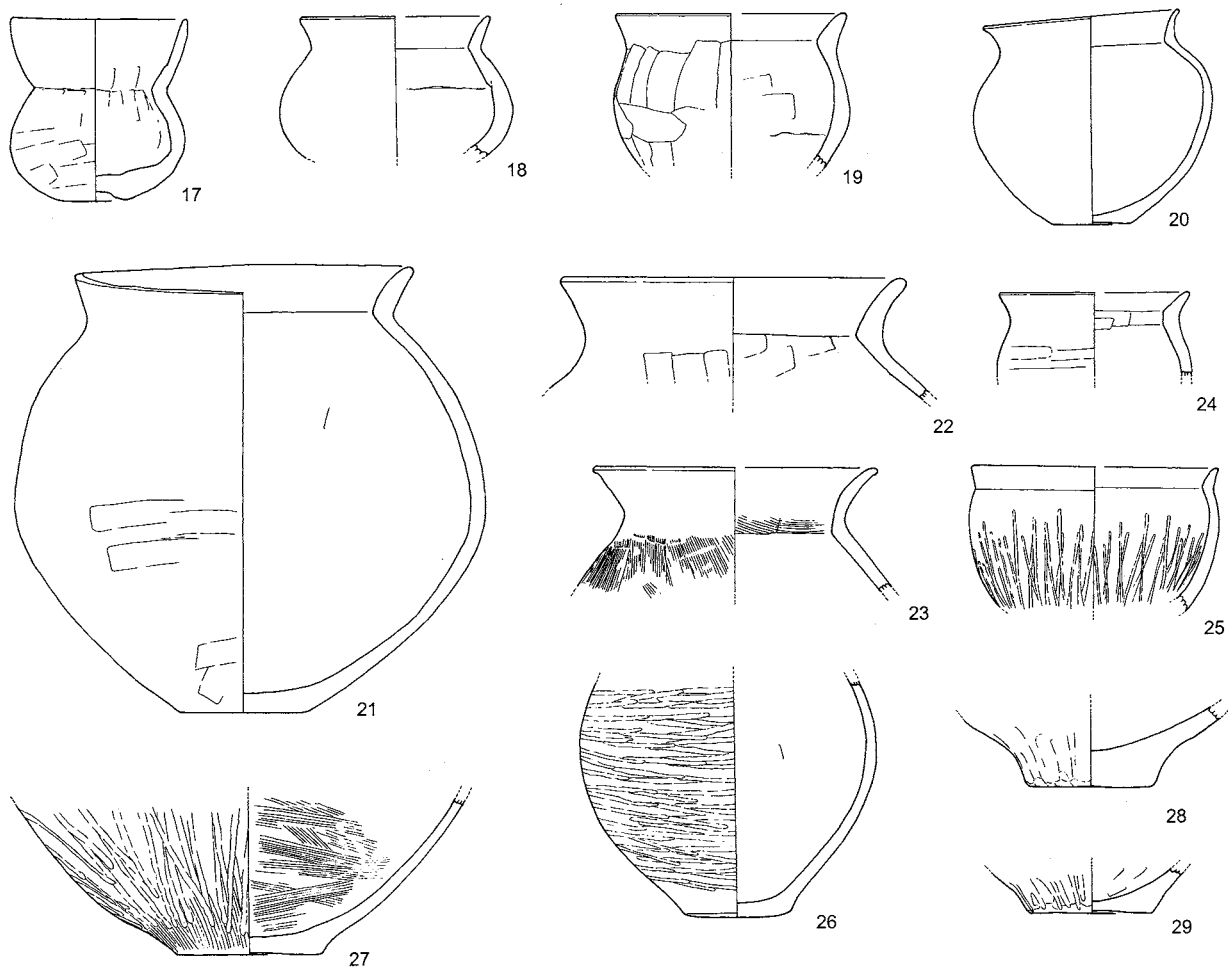




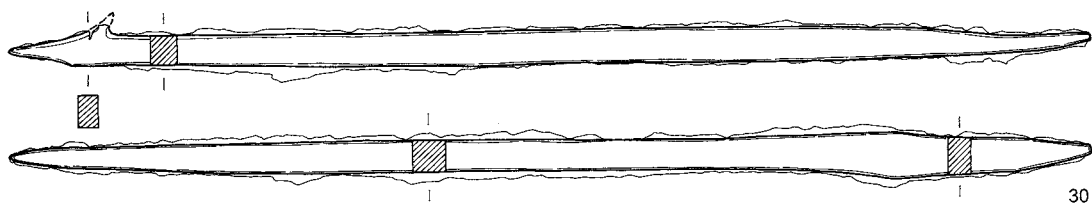
第173图 SK-013 · 042



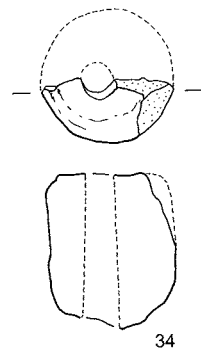
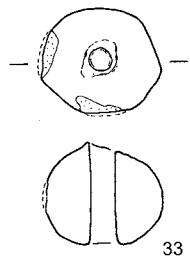
第174图 SI-002 (1)



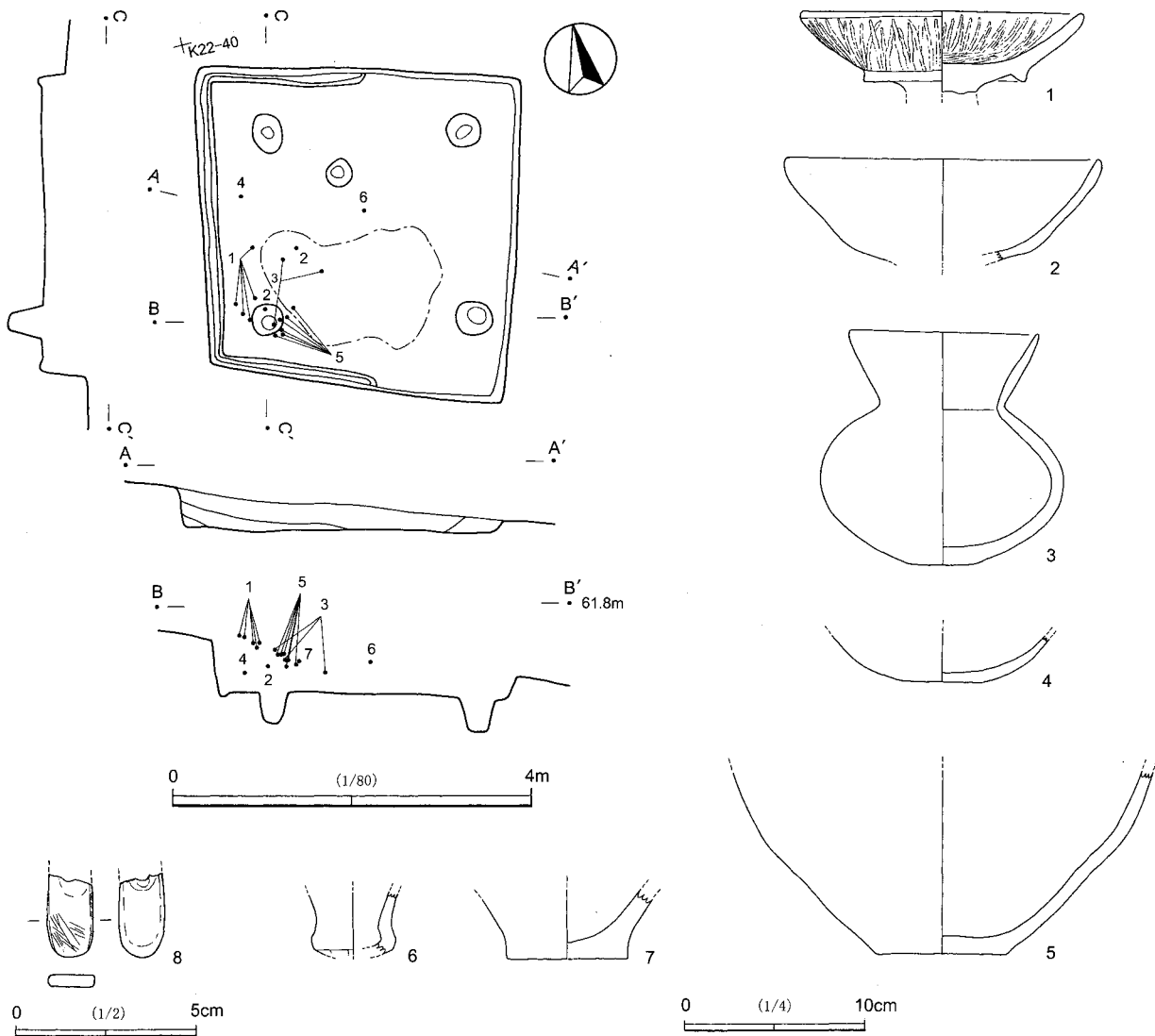
0 (1/4) 10cm



0 (1/2) 5cm



第175图 SI-002 (2)



第176図 SI-010

ており、そこにあったものと推定される。覆土は自然堆積である。

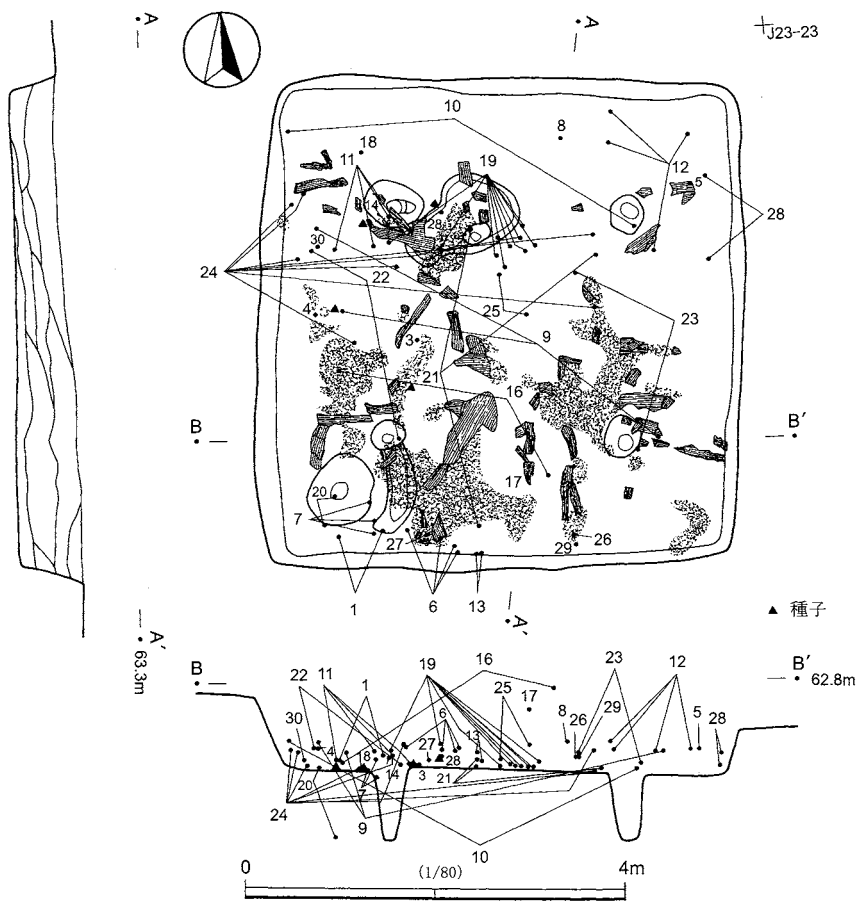
遺物の出土はそれほど多くないが、南西側に集中し、床面からかなり浮いた状態である。埋没後に廃棄された可能性が高い。

#### 出土遺物

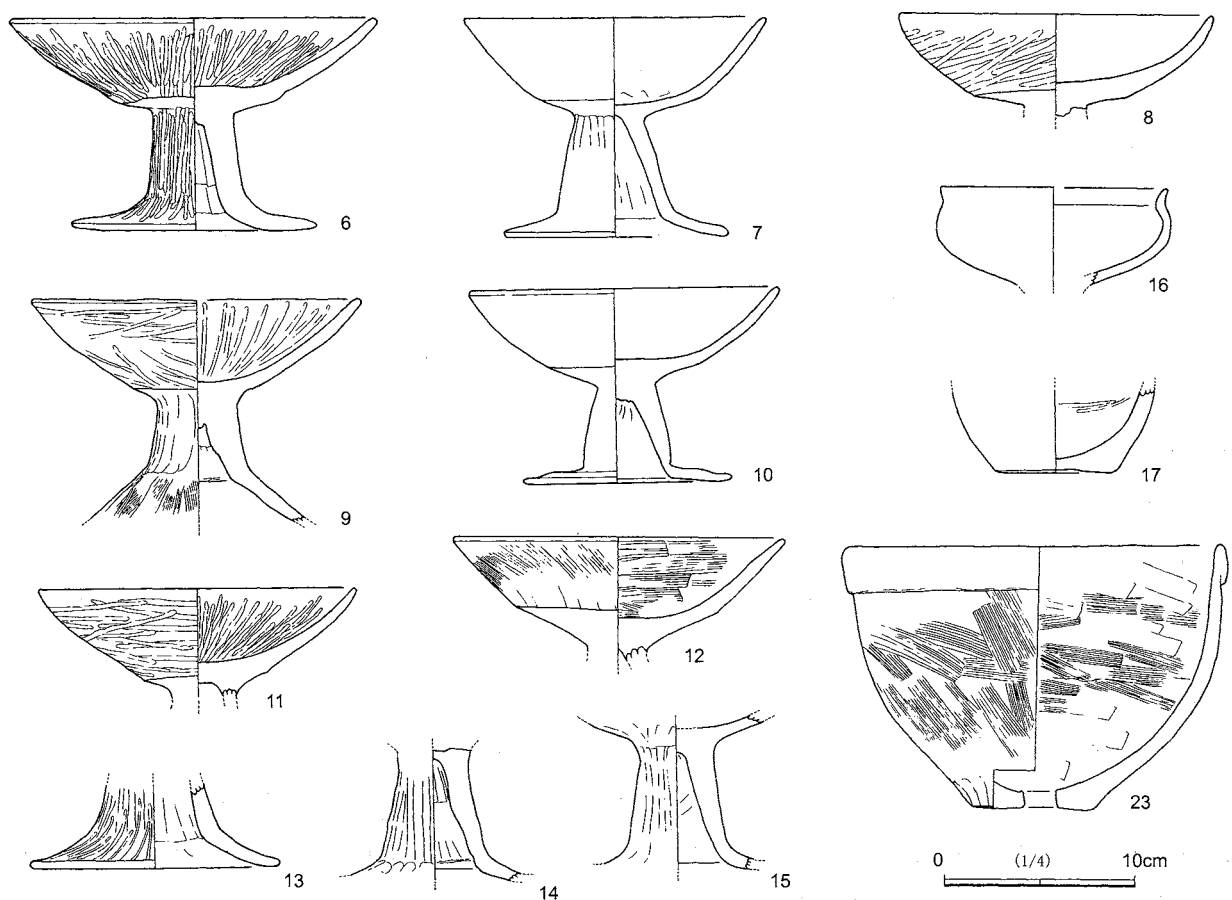
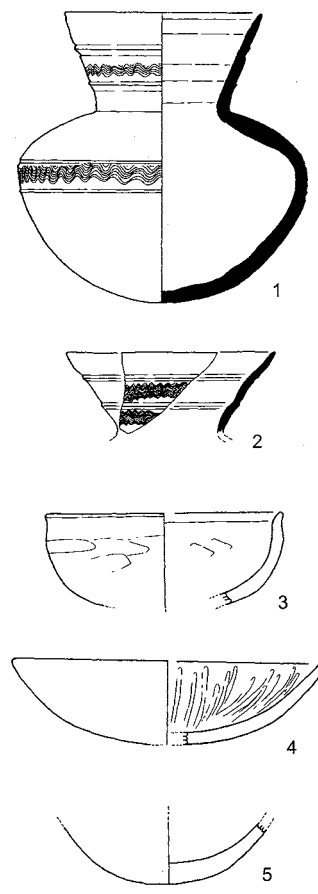
1・2は高杯の杯部である。1は下部に突出した稜を有し、内外面ともミガキ調整される。2の下部の稜は弱く、全体にナデ調整される。3は小形の壺で、内外面とも磨滅が著しく調整などは不明瞭である。4は壺、5・7は甕の底部である。6はミニチュア土器と思われる。8は石製模造品と推定されるが、用途不明である。

SI-011 (第177・178図, 図版45・92・93・99・100)

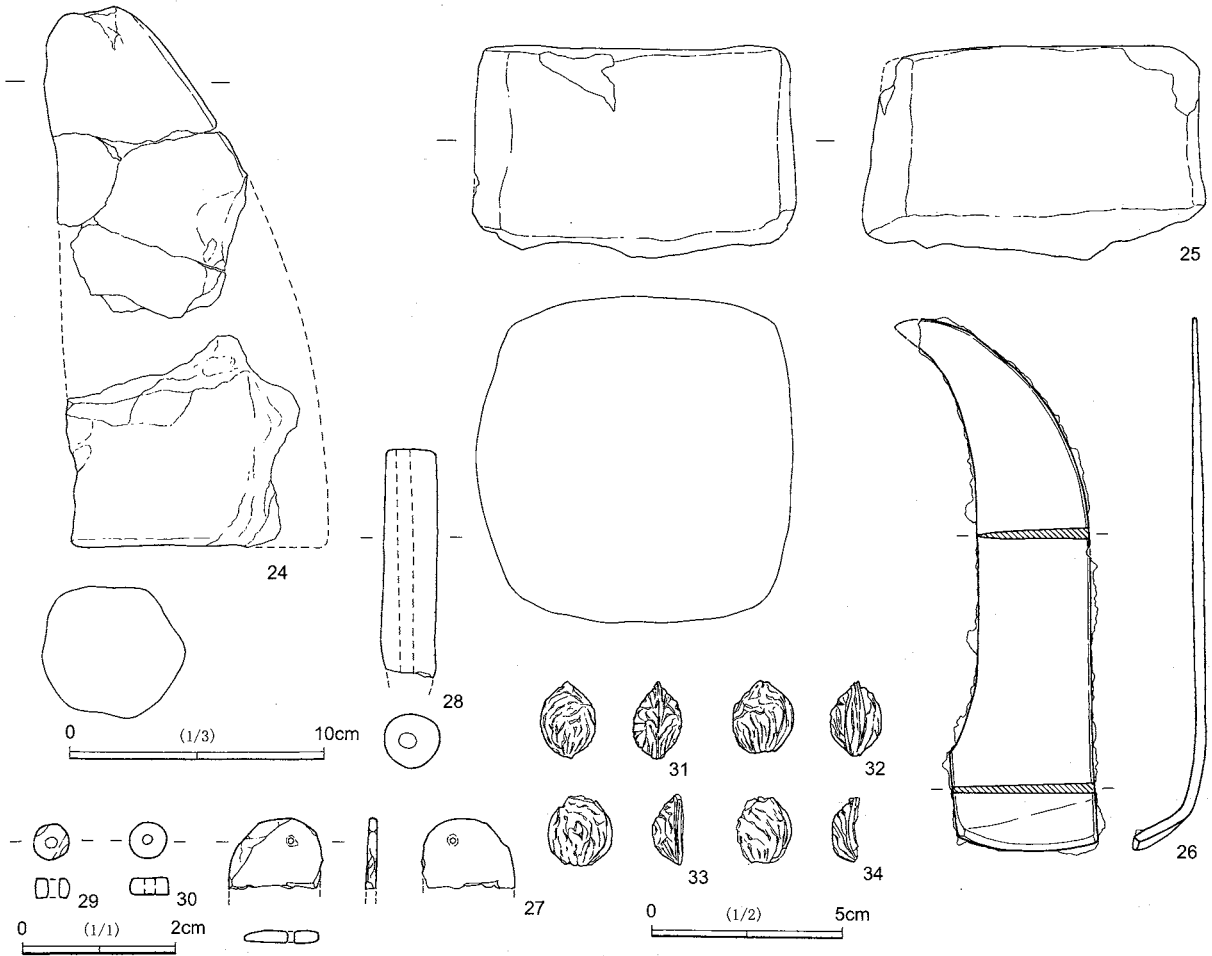
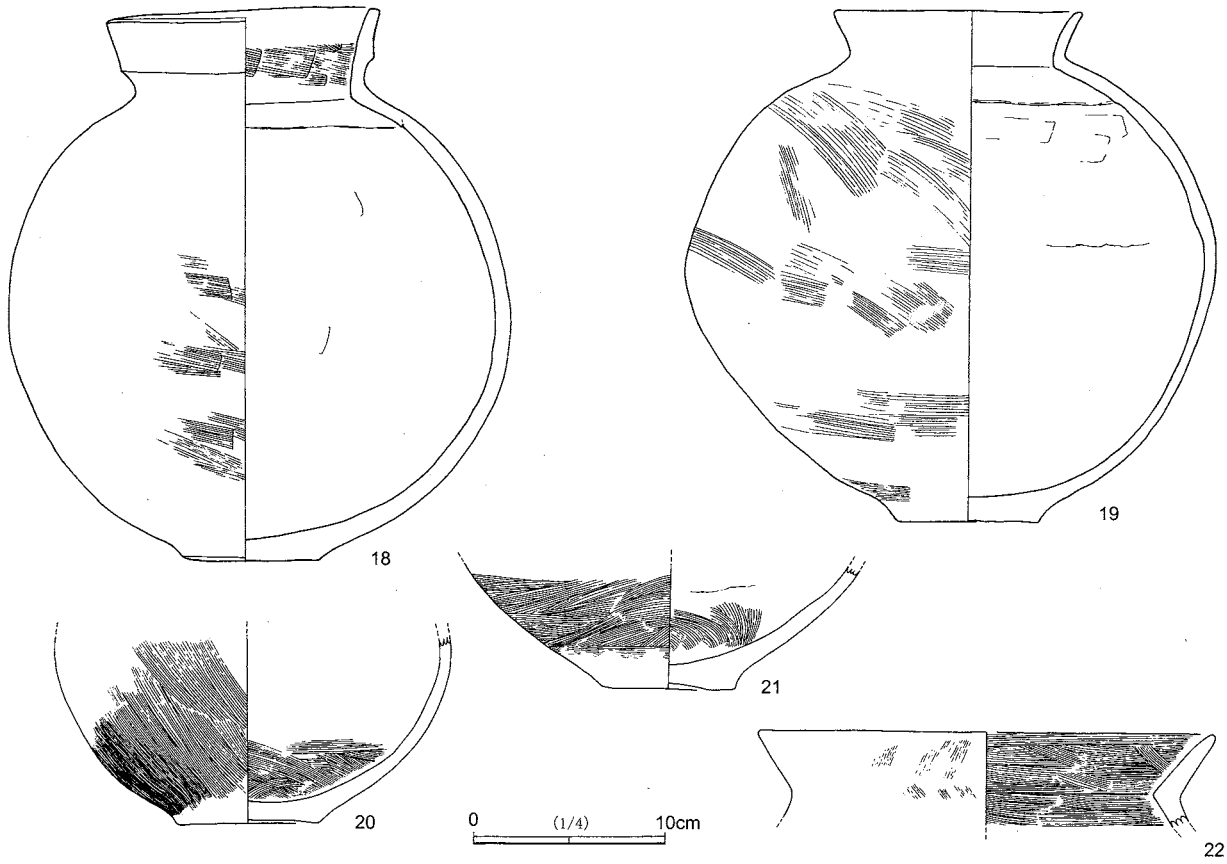
調査区南側, J23-41グリッド付近に所在する。規模は1辺5.2mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-7.0°-Eを指し、床面積は26.2㎡を測る。確認面からの深さは、東側に緩く傾斜する面に位置するため、西側で0.8m, 東側で0.3mとなる。床面はほぼ平坦で、硬化面は確認されないが、全体によく締まっている。柱穴は対角線上に4本配置されるが、径の割にかなり深くなっている。南西コーナーにある



J23-23



第177图 SI-011 (1)



第178图 SI-011 (2)

ピットは貯蔵穴と思われる。やや不整な円形で、径0.7m、深さ0.95mと深くなる。炉は北側に寄って位置する。炉に接して、粒子の粗い砂岩の切石(25)が検出された。上面が平坦に整形されており、意図的に置かれたものと思われるが、用途は不明である。床面全体に焼土と炭化材が検出されたことから本住居は焼失したものと考えられる。覆土中にローム粒や焼土粒を多く含んでおり、埋め戻された可能性が高い。

遺物は豊富で、多くは床面ないしは中層以下からの出土である。1の須恵器壺は貯蔵穴南側、26の鉄製鎌は南側焼土の上面、種子は西側床面、の大形管玉は東壁沿いの床面上からの出土である。

#### 出土遺物

1・2は須恵器の壺である。1はほぼ完形で、口縁部の突帯間と胴部中位の浅い沈線間に櫛描波状文が施されている。全体にナデ調整され、肩部に自然釉がみられる。胎土断面がセピア色を示していることなどから、陶邑産の可能性が高いと思われる。2は口縁部の小片である。二条の突帯と櫛描波状文がみられる。3～5は杯である。3は口唇部が小さく外側に摘み上げられ、器高が深くなる。4は器高の低い皿に近い形状である。内面に放射状のミガキが施される。6～15は高杯である。6の杯部は底部と口縁部との境に若干の稜を有し、口縁部はやや内湾気味に開く。内外面とも丁寧なミガキが施される。脚柱部は筒状に近く、裾部は大きく開く。7の杯部も6とほぼ同様である。脚柱部は下方に開く円錐形で、裾部との境に稜を有し大きく開く。9の杯部は底部が小さく、口縁部との境の稜も弱くなる。脚柱部は筒状で内面に稜を有し裾部が大きく開く。10の杯部は6、7と同様で、脚柱部は中膨らみを呈し、裾部はほぼ水平に開く。この高杯のみ胎土が異なり、砂粒を多量に含む。外面には赤彩が加えられる。11・12は杯部のみで、11は9と同様な形状である。12は底部と口縁部の境に稜を有し、口縁部は直線的に開く。13～15は脚部みの遺存である。13は6と同様の形状、14・15は7と同様の形状である。16は扁平な椀状の器形を呈し、脚ないし台が付くものと思われる。全体にナデ調整され、内外面とも赤彩される。台付き椀のような形状と推定される。17は小形甕の底部であろうか。18～22は甕である。18は特徴的な形態を示す。直立する口縁部は5の字状に近く成形され、口唇部は平坦となる。胴部は、最大径をやや下位におく球形胴を呈する。19は球形の胴部で、口縁が短くくの字状に外反する。胴部内面に接合痕がみられる。外面全体にススの付着も観察される。20・21は底部片、22は口縁部片で、いずれもハケ目痕が明瞭に残る。23は折り返し口縁を持つ小形の甕である。底部には、焼成前に径1.7cmの孔が穿たれている。全体に、ハケ調整後ナデが加えられ、胴部中位に部分的に布目痕が残る。24は烏帽子形の支脚である。25は砥石である(確認)。27は緑灰色の滑石の白玉である。

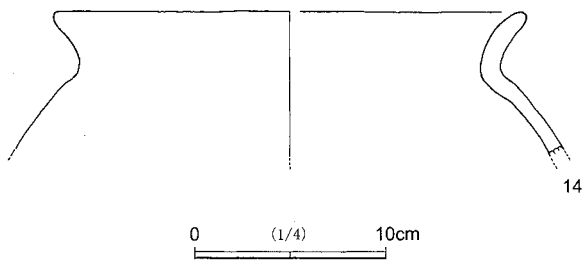
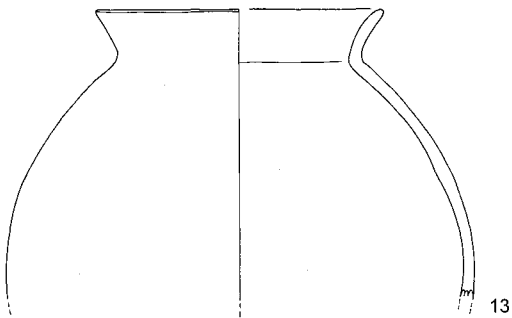
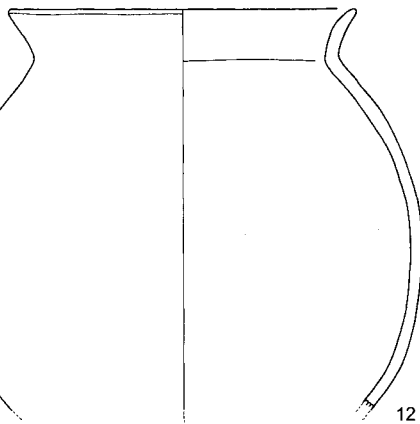
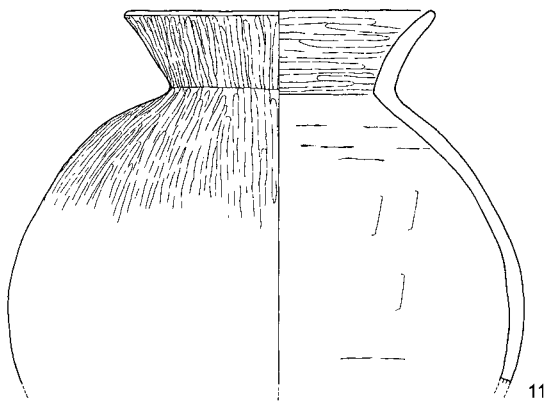
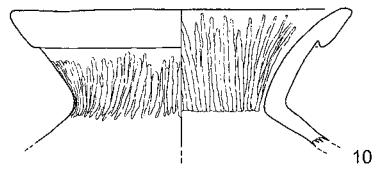
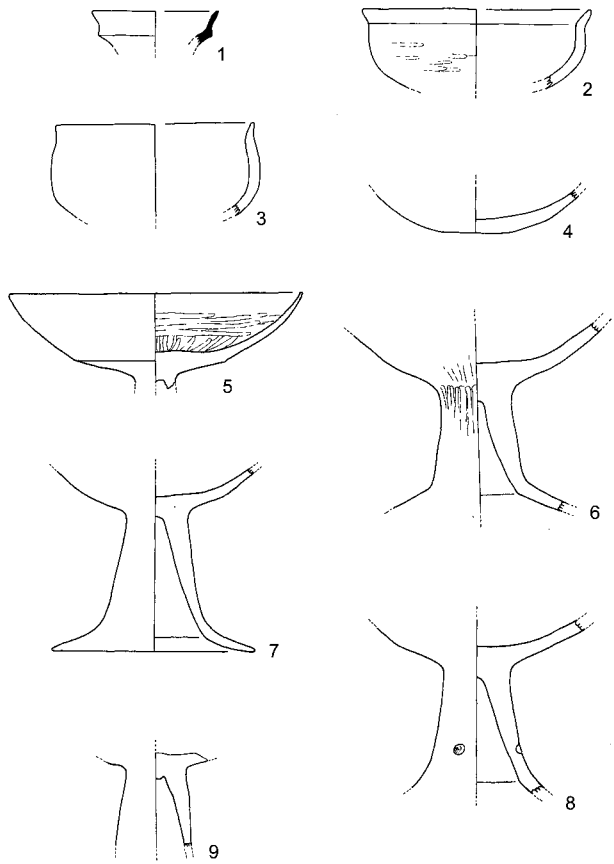
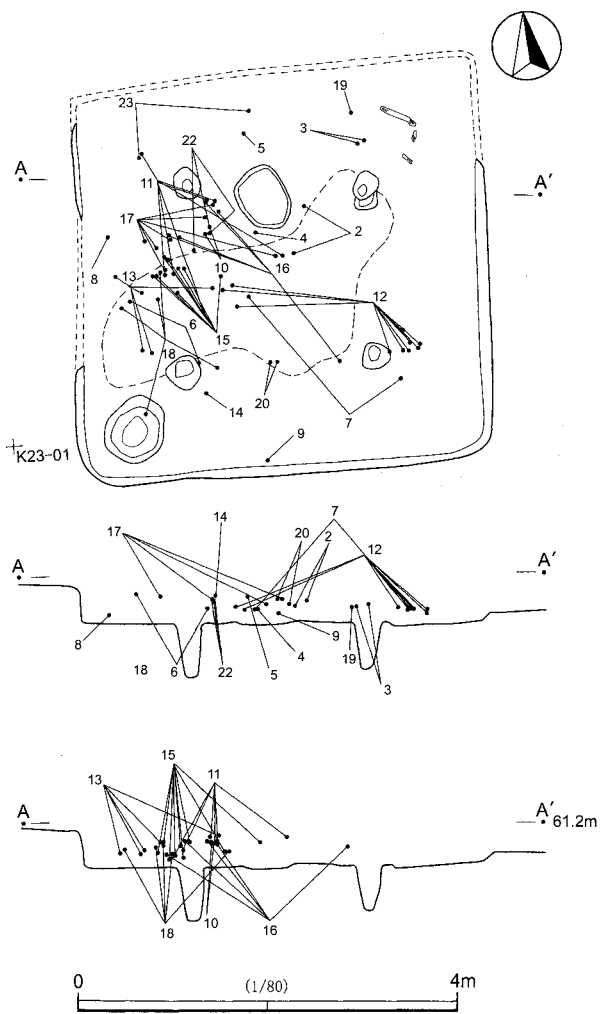
#### SI-012 (第179・180図、図版45・46・93・100)

調査区南東側、K23-01グリッド付近に所在し、SI-018を切っている。平面形は、1辺ほぼ4.3mの正方形を呈している。主軸方向はN-6.0°-Wを指し、床面積は約18.5㎡を測る。床面はほぼ平坦で、中央に硬化面が広がる。柱穴は対角線上に4本配置されている。径は0.25m～0.3mと小規模であるが、深さは0.5m～0.8mと深くなる。南西コーナーにあるピットは貯蔵穴と考えられる。径0.71m×0.66mのやや楕円形を呈し、深さは0.52mである。北東部に若干炭化材を検出し、東南コーナーに焼土が確認されている。

遺物は比較的多く出土しているが、床面よりやや浮いた状態のものが多い。

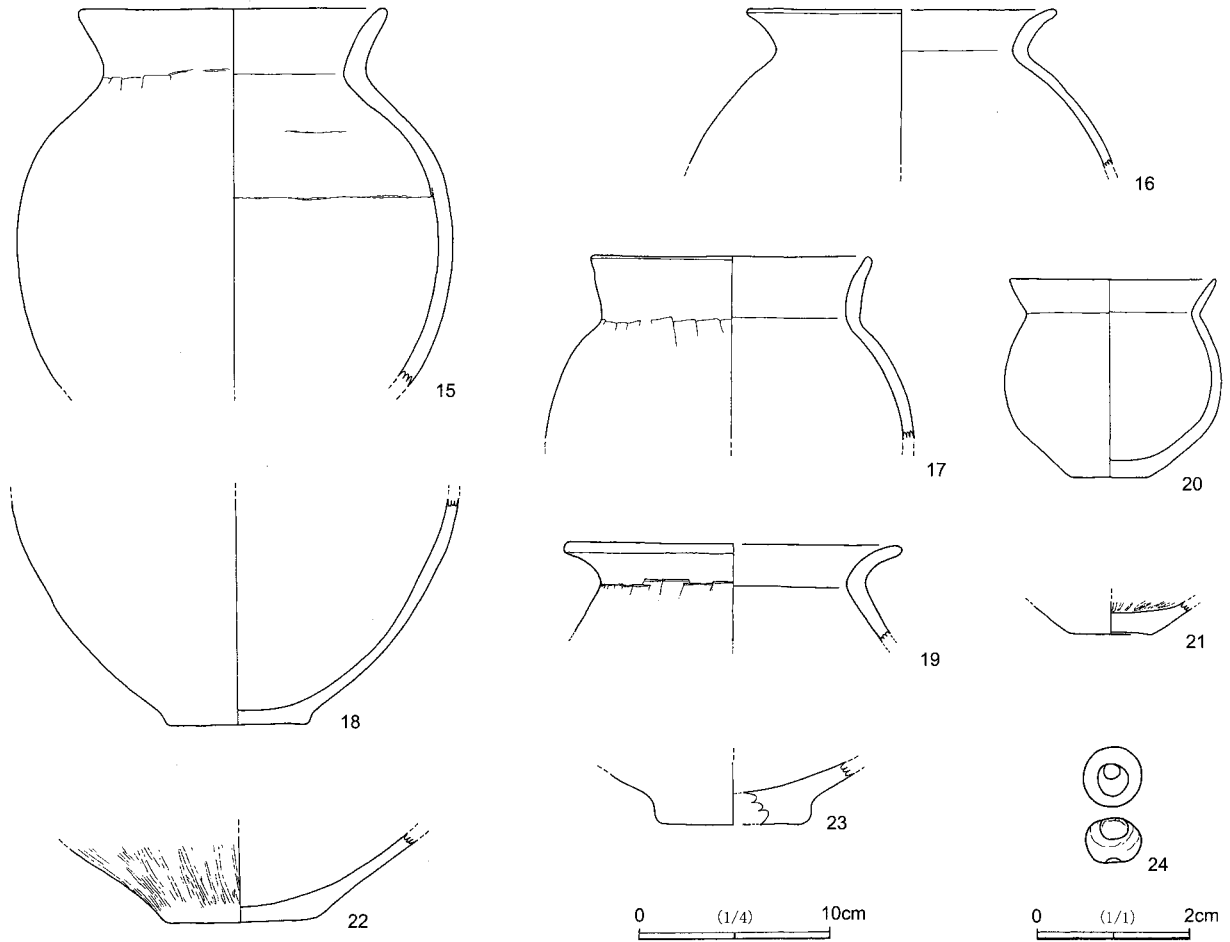
#### 出土遺物

1は須恵器ハソウの口縁部片である。小片のため詳細は不明であるが、全体に丁寧に仕上げられている。2・3は鉢である。口唇部を小さく外側に摘み上げている。いずれも摩耗が激しく調整は明瞭でない。5



第179图 SI-012 (1)



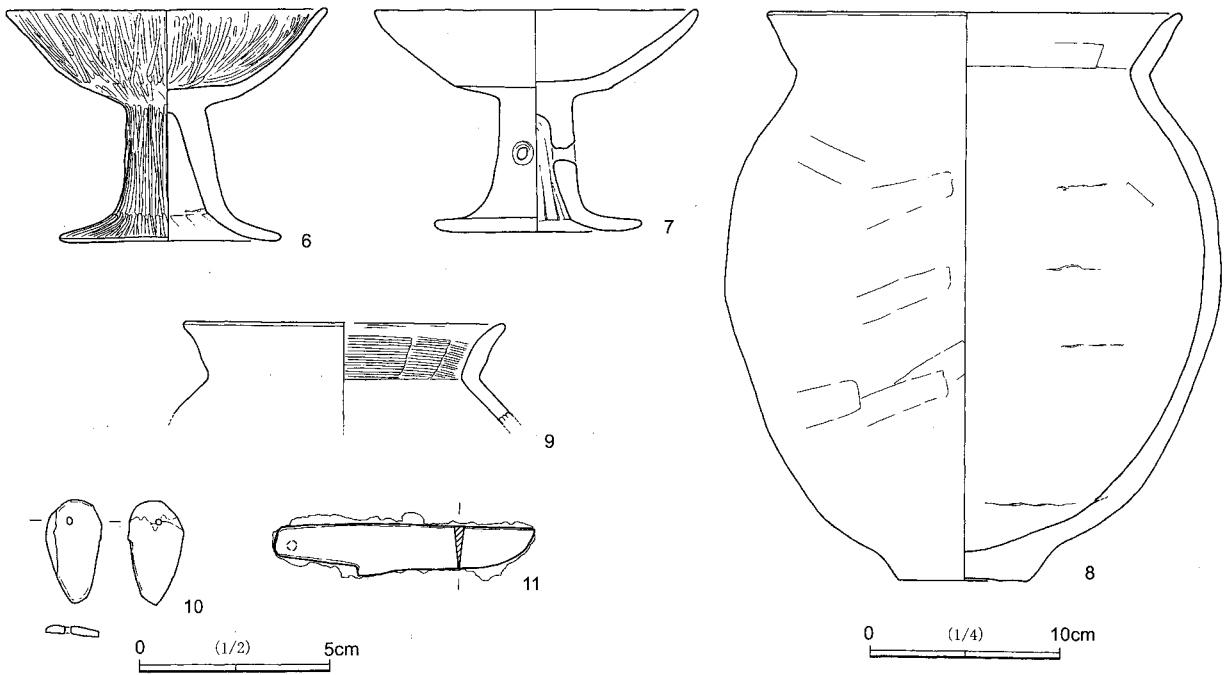
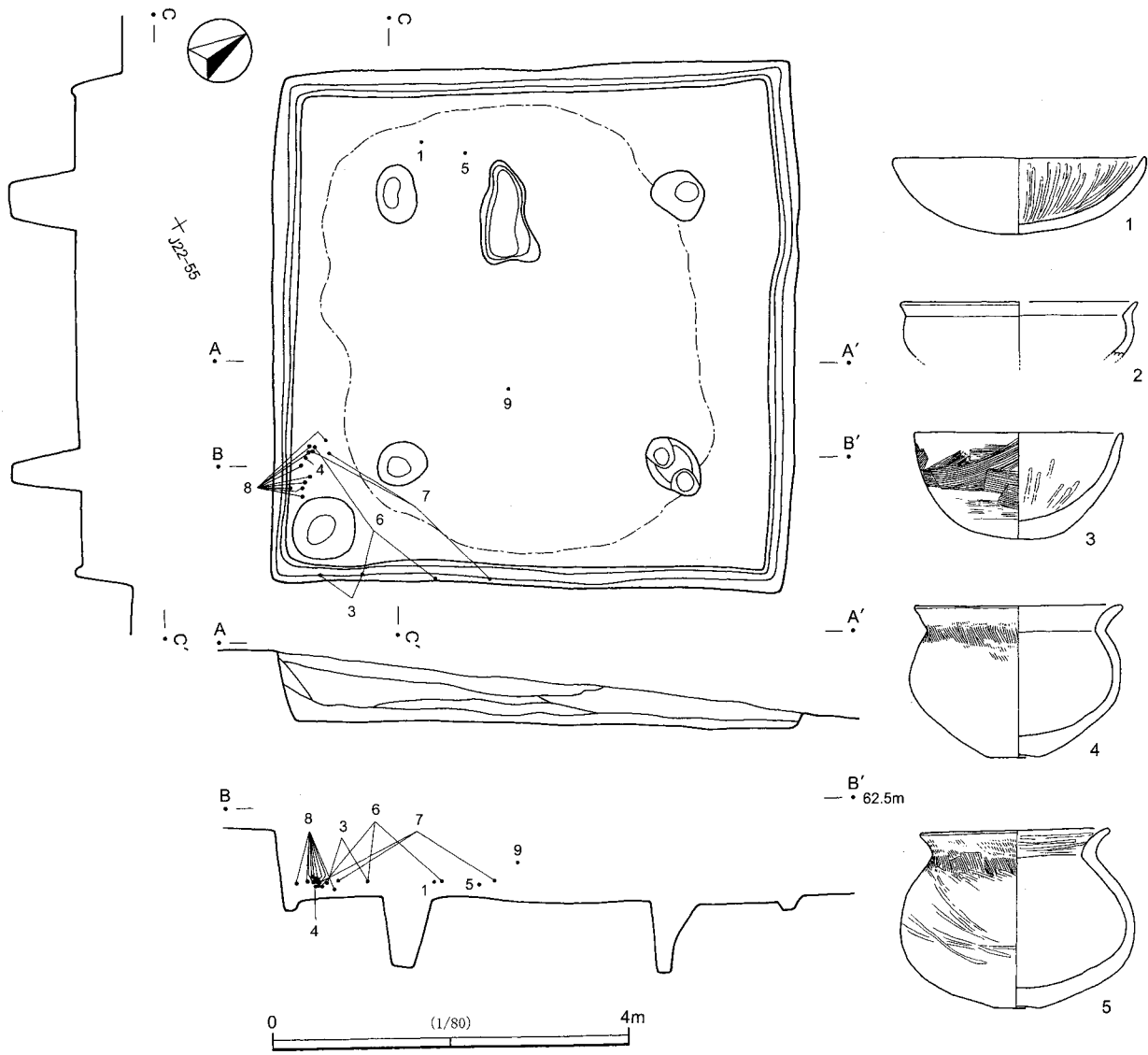


第180図 SI-012 (2)

～9は高杯である。5は杯底部と口縁部との境に稜を有し、緩やかに内湾しながら立ち上がる。内面ミガキ、外面ナデ調整される。6～8はほぼ同様の形状を呈する。杯部は底部と口縁部との境に明瞭な稜はなく緩やかに開きながら立ち上がる。脚部は下方の開く円錐形で内面に稜を作り裾部は大きく開く。8は脚柱部下位に焼成後の小孔が穿たれるが、貫通していない。9は筒状で中膨らみの脚柱部である。10・11は壺である。10は折り返し口縁で縦方向のミガキが丁寧に施されている。11は球形に近い胴部で、中位に最大径を持ち、口縁部はくの字状に強く開く。磨滅がみられるが全体にミガキが施されている。12～23は甕である。12・13・15は胎土や形状が類似している。球形に近い胴部で中位に最大径を持つ。口縁部はくの字状に外反する。胴部には煤の付着がみられる。20は小形品で、器面の荒れが激しい。24は丸玉である。一方向の径が他方に比べ非常に大きい片側穿孔となる。

SI-013 (第181図, 図版46・93・94・99・100)

調査区中央, J22-55グリッド付近に所在する。規模は長軸6.9m, 短軸5.9mを測り, 本遺跡の当該期の住居では大きい。平面形はやや縦長の長方形を呈している。主軸方向はN-54.0°-Wを指し, 床面積34.6㎡を測る。床面はほぼ平坦で, 全体に硬化面が確認できる。壁溝は幅0.2mほどで全周する。柱穴は対角線上に4本配置されている。深さ0.7m~0.8mと比較的深い。南東壁中央にあるピットは入り口に伴うものと考えられる。南東コーナーに存在する径0.7mほどのピットは, 略円形で貯蔵穴と思われる。これを囲むように土手状の高まりがみられる。炉は北西の柱穴間に位置する。長軸1.2m, 短軸0.5mと細長



第181图 SI-013

い楕円形を呈する。かなり使い込まれており、底面は赤く硬化している。覆土中にローム粒を多く含み、人為的に埋め戻されたようである。

遺物の出土は比較的多いが、床面よりやや浮いた状況である。

#### 出土遺物

1はほぼ完形の丸底の杯である。内面はナデ後丁寧な放射状のミガキが施されるが、外面は摩耗が激しく調整不明である。2・3は鉢である。2は口縁部が短く外反し、体部は扁平なものとなる。内外面とも赤彩される。3は半球状で、分厚い作りである。外面にハケ目が認められる。4・5は小形の甕である。いずれもハケ後ナデ調整されるが、最大径が4は胴部上位、5は胴部中位にあり、プロポーシオンが異なる。6・7はほぼ同様の形態を呈する高杯である。6は、杯部内外面・脚部外面とも丁寧なミガキが施される。7は磨滅が著しく調整は不明瞭であるが、焼成前の穿孔が脚柱部の中位に一ヶ所認められる。8・9は甕である。8は作りが粗雑で、器面の凸凹が目立つ。底部は突出し、口縁部はくの字に外反する。胴部外面にススの付着がみられる。10は滑石製の剣形模造品である。板状で粗雑な作りである。11は鉄製の刀子である。茎端部に孔が開けられている。

#### SI-016 (第182・183図, 図版94・100)

調査区東側、L22-63グリッド付近に所在し、弥生時代の住居SI-042を切る。長軸9.2m、短軸7.6m、床面積は60.6㎡を測り、D区の前古墳時代の住居としては最大の規模であるが、やや不整な小判形を呈している。方形を呈する住居がほとんどであるが、本住居のみ特異なプランである。主軸方向はN-12.0°-Eを指す。床面はほぼ平坦で、硬化面はみられないが、比較的良好に締まっている。柱穴は対角線上に4本配置される。径は0.5m~0.84m、深さ0.28m~1.18mと一定していない。炉は検出されなかった。覆土は自然堆積の様相を呈する。

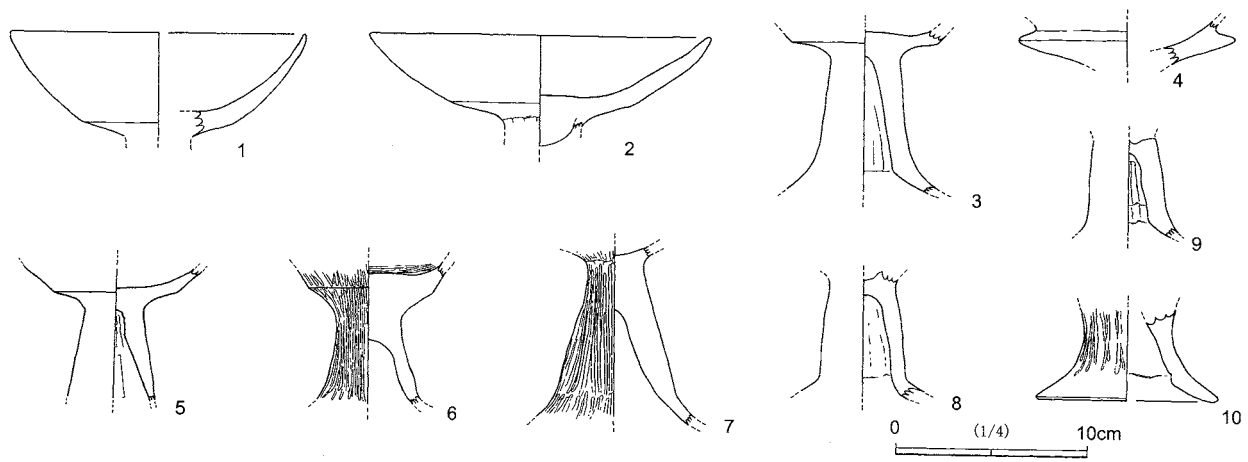
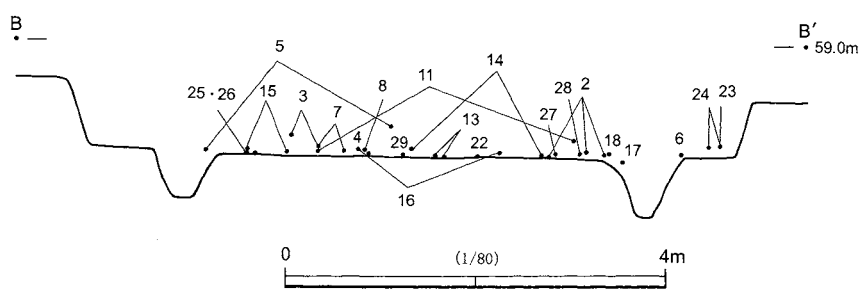
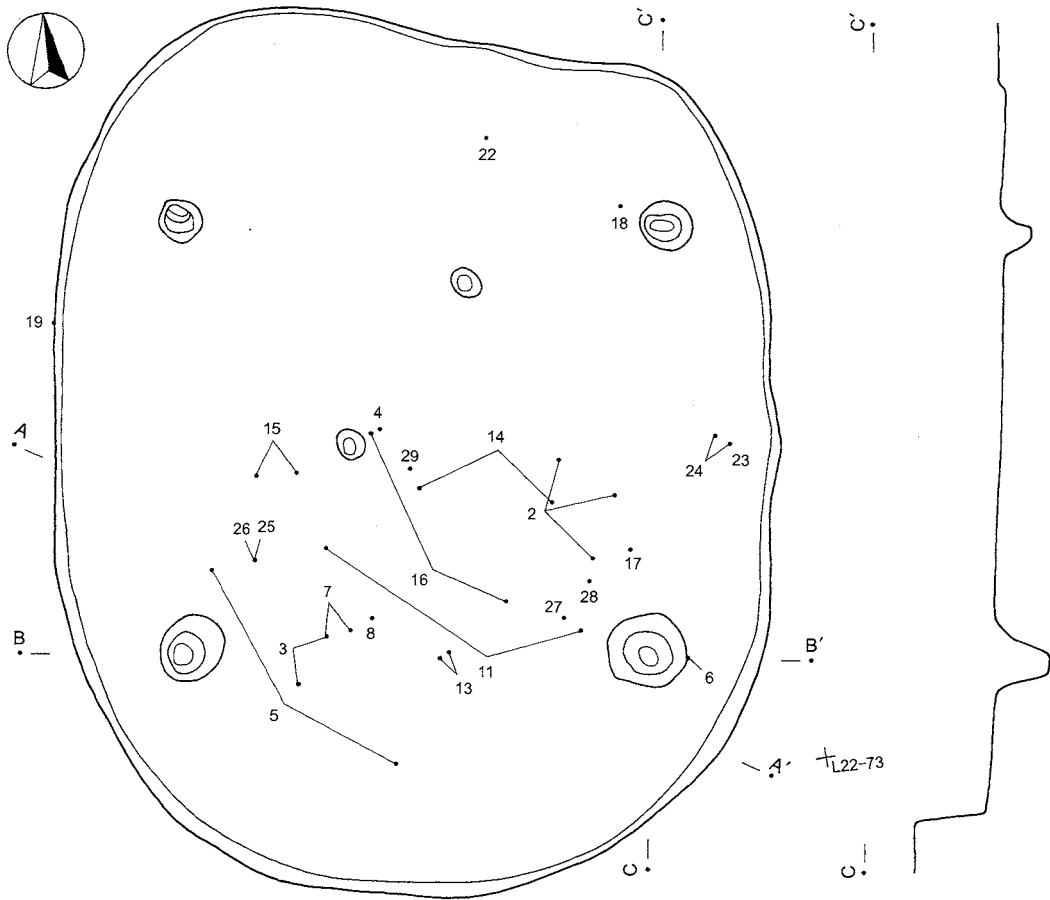
遺物の出土は比較的多いが、南半に集中する傾向がある。

#### 出土遺物

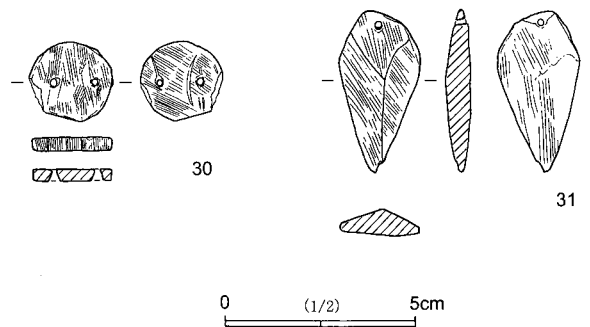
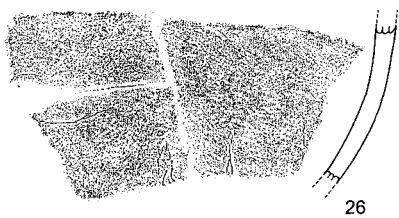
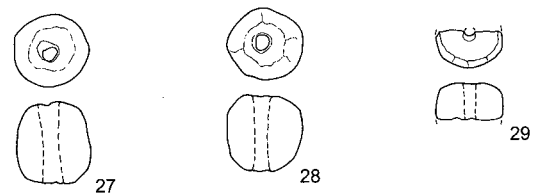
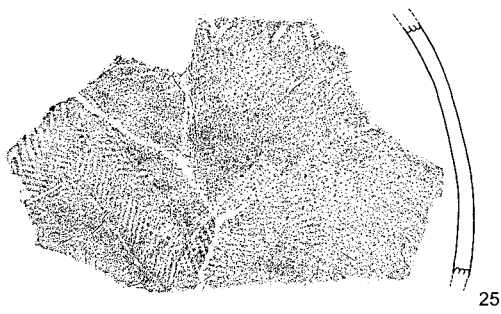
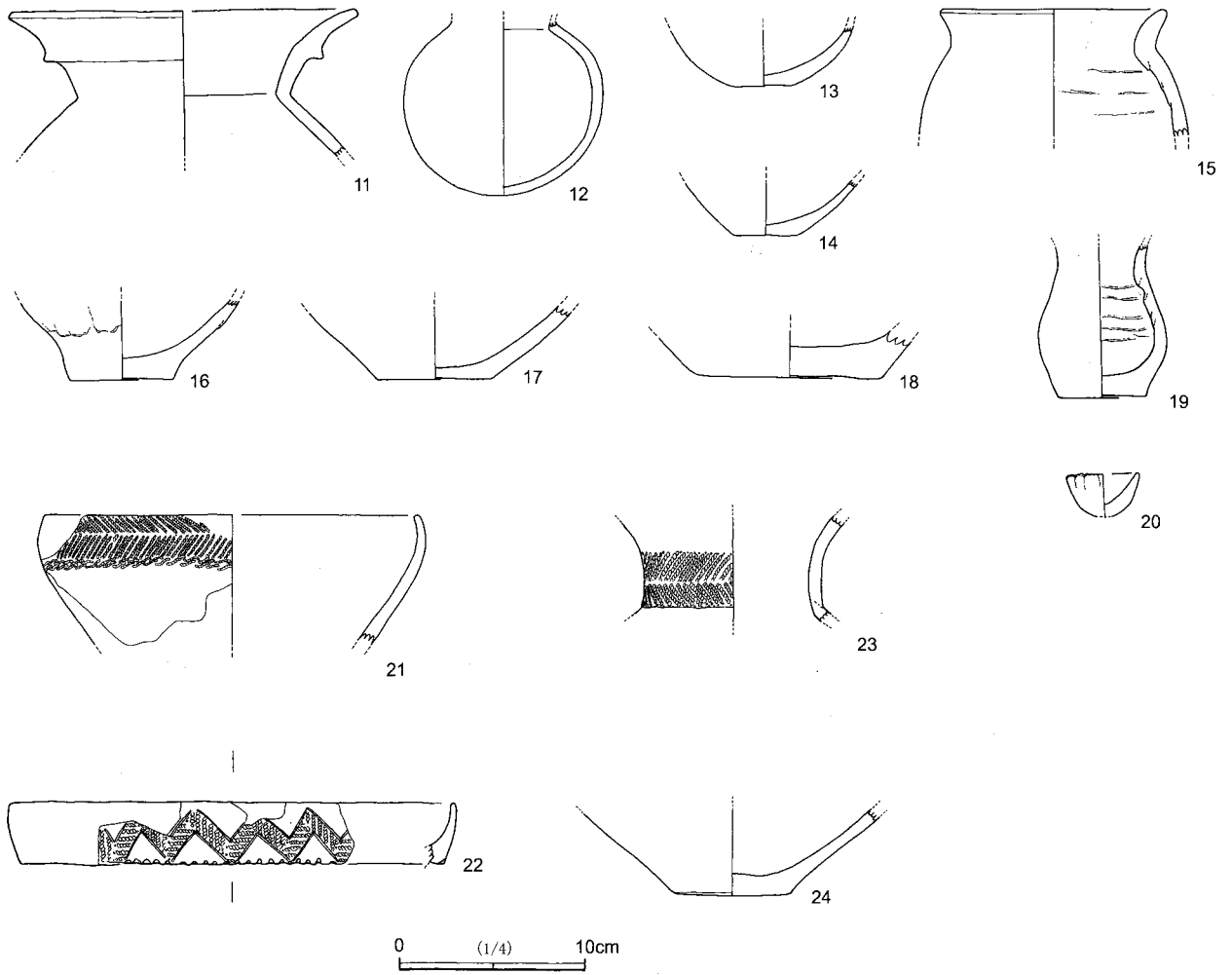
1~10は高杯である。1・2・4は杯部のみの遺存である。1・2とも底部と口縁部の境に若干の稜を持つが、1の口縁部は僅かに内湾しながら立ち上がり、2は直線的に大きく開く。4は外方に大きく突出した稜を有する形状である。3・5~10は脚部のみの遺存である。3・5~7は下方に開く円錐形で、裾部は3が内面に稜を持ち、5~7は漸次広がっている。8・9は筒状の脚柱部である。10は柱状部から裾部にかけてハの字状に開く形状である。11は壺の口縁部で、有段口縁となる。12~14は小形の壺である。いずれも器面の摩耗が激しく、調整不明である。15~18は甕である。15は厚手の作りで、内面に輪積痕が残る。19・20はミニチュア土器であろう。19の内面には接合痕が明瞭に残る。21~26は弥生後期の土器で、混入品であろう。21は鉢の小破片で、口縁部には羽状縄文、直下にS字結節文が施されている。22は壺の複合口縁部で、鋸歯状の沈線間に単節縄文が充填される。文様帯以外に赤彩される。23は壺形土器の頸部のみの遺存で、羽状縄文が施されているが全体に磨滅が著しい。24は23と同一個体となる可能性がある。25・26は壺の胴部片である。27~29は土玉である。27の側面は丁寧に面取りが行われている。30・31は滑石製の石製模造品で、30は双孔円盤、31は剣形品である。いずれも比較的丁寧な研磨が施されている。

#### SI-019 (第184・185図, 図版46・47・94・99)

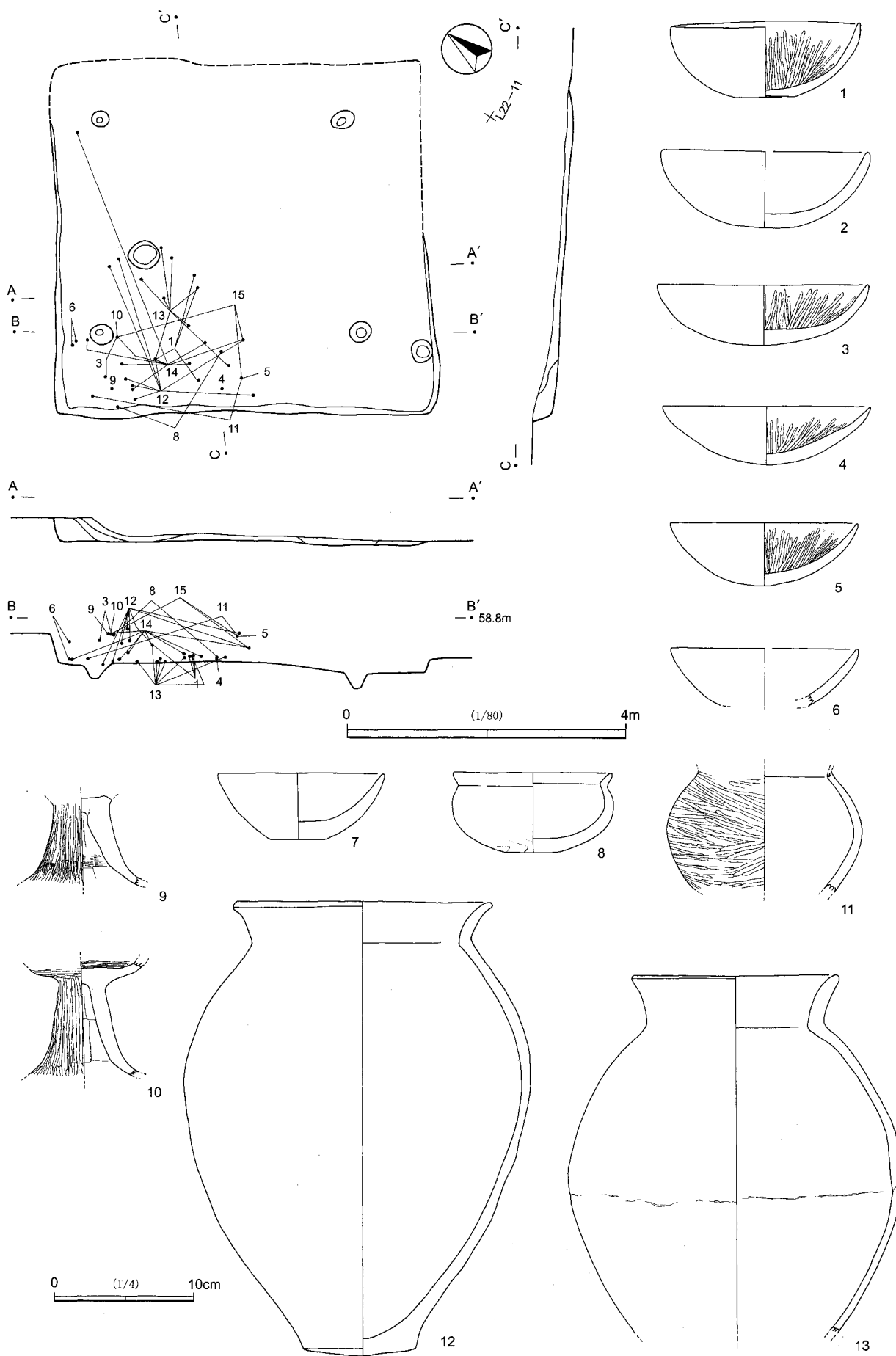
調査区東側、K22-18グリッド付近に所在し、部分的にSM-002に削平されているが、床面までは及んでいない。北東側の壁が残っていないが、長軸5.4m、短軸約5.0mを測るほぼ正方形プランを呈すると思わ



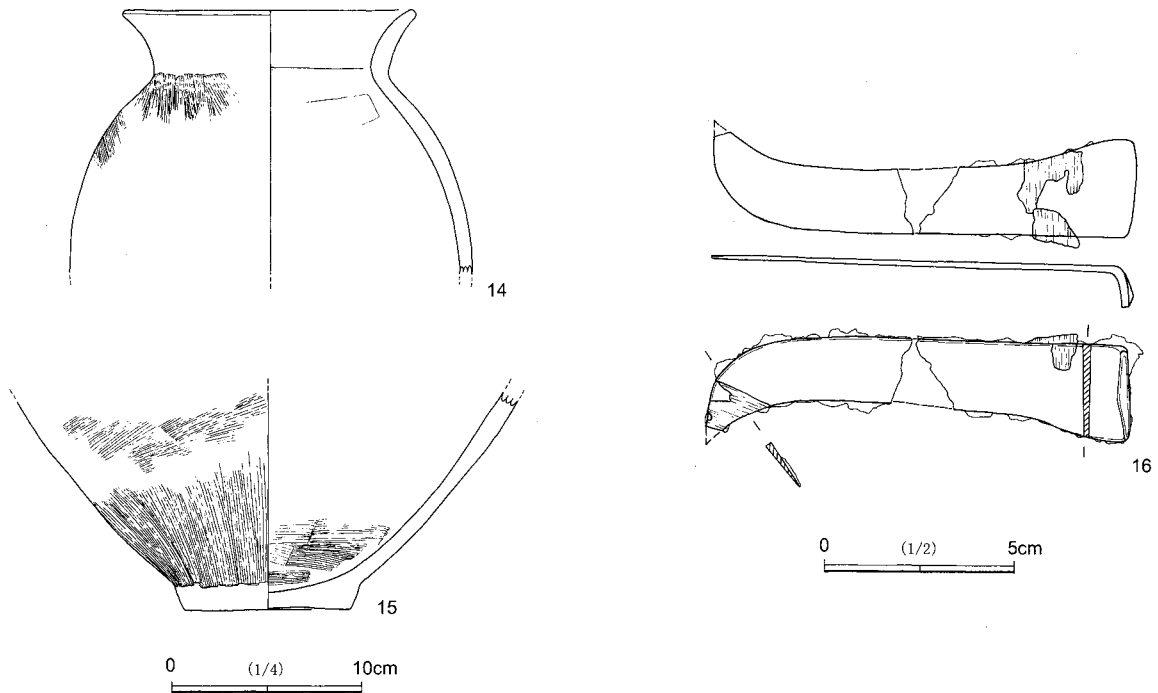
第182图 SI-016 (1)



第183图 SI-016 (2)



第184图 SI-019 (1)



第185図 SI-019 (2)

れる。主軸方向はN-55.5°-Eを指し、床面積約18.7㎡を測る。床面はほぼ平坦で、比較的堅緻である。柱穴は対角線上に4本配置される。径0.3mほどと小規模で、深さも0.2mほどと浅い。炉は北西の柱穴間に位置する。径0.42mの円形を呈しているが、焼土の堆積はほとんどみられない。

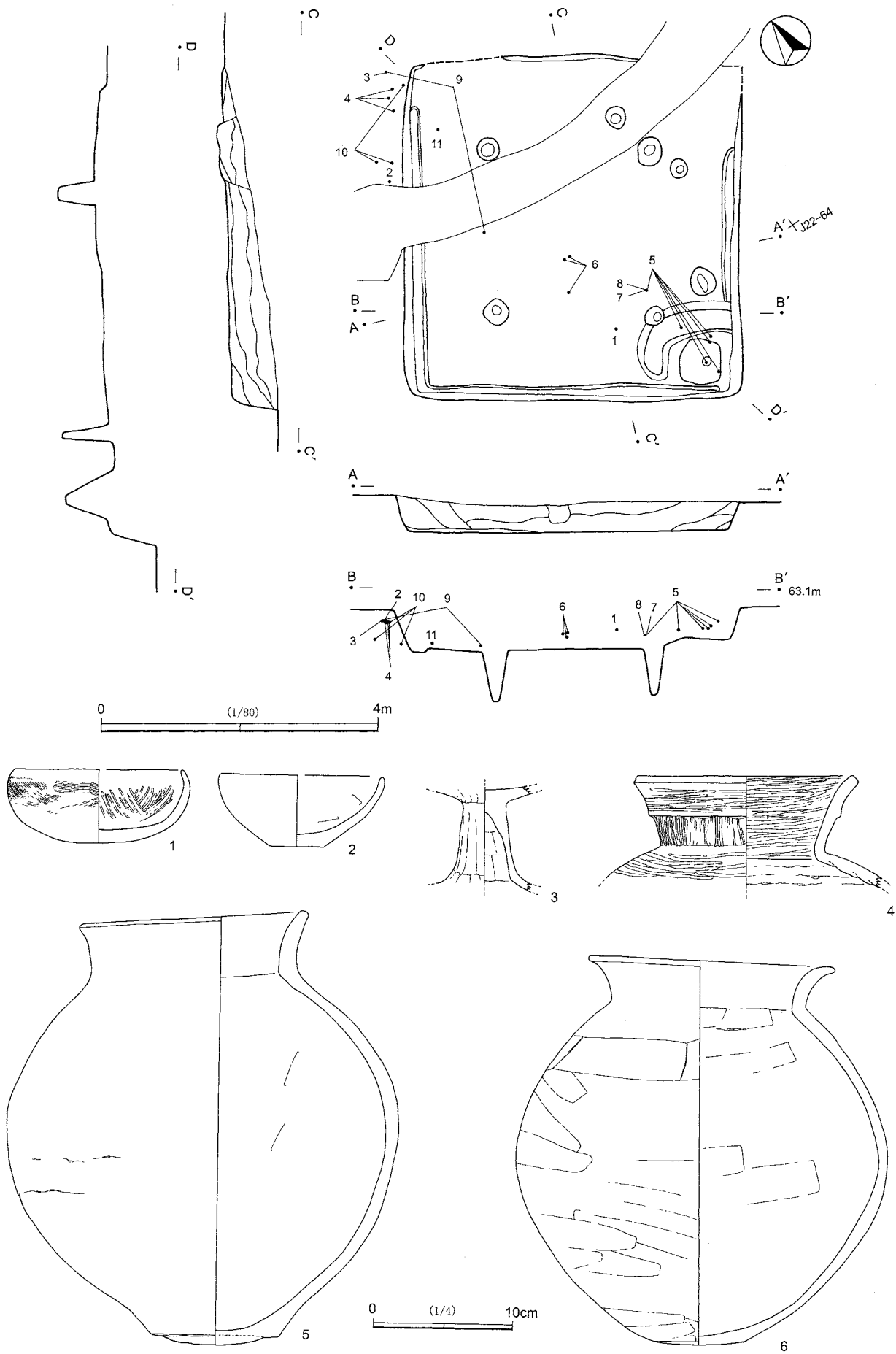
遺物の出土は多く、西コーナー付近に集中しているようであるが、他の部分は覆土がほとんどないため遺物が残らなかったものと思われる。

#### 出土遺物

1~7は杯である。1・2は器高の深い半球状の器形を呈する。1は比較的丁寧な作りで、内面に細かいミガキが施される。1は平底、2は丸底となる。3~6は器高が低くなり、すべて丸底である。内面に放射状のミガキが加えられる。7は厚手の作りで、調整は器面が摩耗しているため不明である。8は口縁部が短く外傾する椀である。体部外面は、ヘラケズリ後ナデが加えられる。9・10は高杯の脚部である。下方の開く円錐形で、内面に稜を持たずに裾部が漸次開く形態と思われる。11は小形の壺の胴部片である。外面に細かいミガキが施される。12~15は甕である。12・13は長胴で、12は胴部上位、13は胴部中位に最大径を有している。14・15はハケ目調整される甕である。16は、全長11.0cm前後を測る鉄製の鎌である。直線的な棟から、先端部が急激に屈曲する形態である。基部と先端部に木質が遺存している。

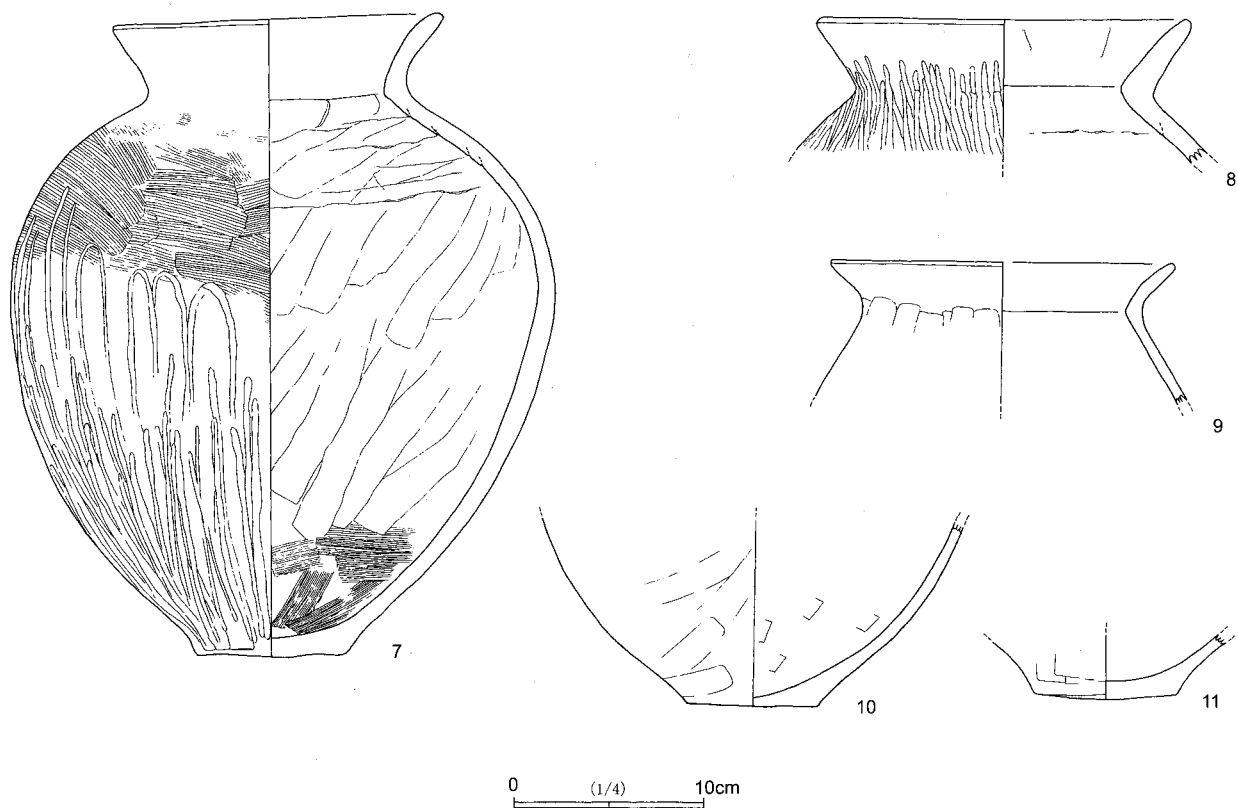
#### SI-020 (第186・187図, 図版47・94・95)

調査区中央、J22-61グリッド付近に所在し、SI-025の東側を切り、北側を溝に切られている。規模は長軸5.0m、短軸0.49mを測り、正方形を呈する。確認面からの深さは、南側で最も深く、約0.7mである。主軸方向はN-37.5°-Eを指し、床面積は約24.4㎡を測る。床面はほぼ平坦で、硬化面は確認されないが、全体に堅緻である。壁溝は、北側を除いて幅0.2m~0.5mで巡っている。柱穴は、対角線上に4本配置される。径0.3m前後と小規模であるが、深さ0.7mほどと比較的深い。南東コーナーにあるピットは貯蔵穴と考えられる。長軸0.45m、短軸0.41mのほぼ正方形を呈し、SI-013と同様、貯蔵穴を囲むように土



第186图 SI-020 (1)





第187図 SI-020 (2)

手状のものが構築されている。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物は、北コーナー及び貯蔵穴付近に集中する。

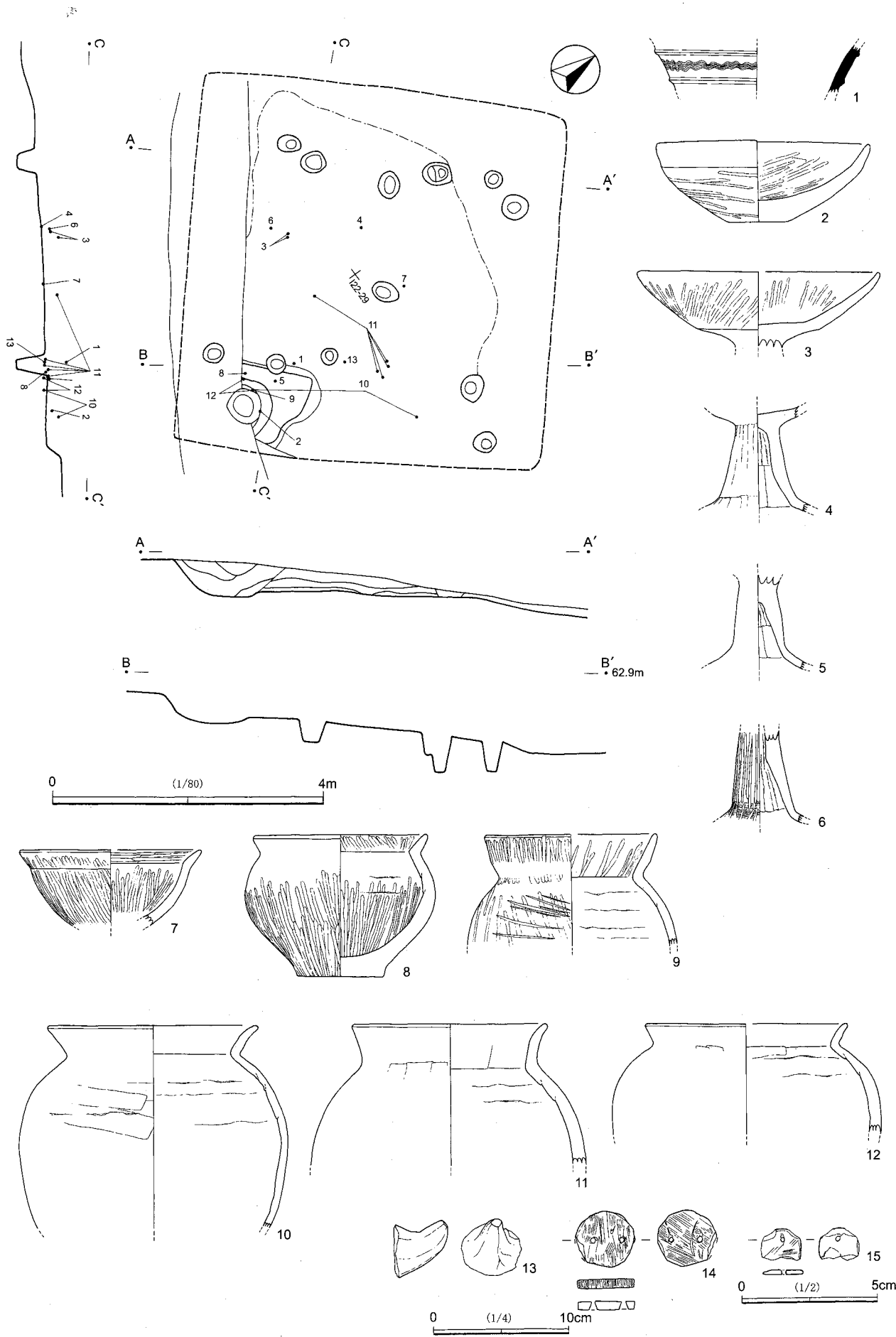
#### 出土遺物

1・2は杯である。1は平底気味の丸底で、口縁部が短く内屈する。内外面にハケ目痕が残る。2は平底を有する鉢状を呈する。内外面ともナデ調整される。3は高杯の脚部である。脚柱部は下方がやや開く円錐形で内面に若干の稜を有して裾部が漸次開く。4は有段口縁の壺で、口唇端部は面取りされる。口縁部内外面とも丁寧なミガキが施され、胴部内面には接合痕が明瞭に観察される。5～11は甕である。いずれも胴部に最大径を有し、口縁部はくの字状に外反するが、5のみほぼ直立する口縁部となる。5の底部には粘土が貼り付けられているようで、突出している。二次的に火を受けており、底部付近は赤く変色する。7は胴部上位に最大径があり、上部はハケ調整、下部は粗いミガキが施される。口縁部から胴部下位にかけて、広範囲に煤の付着がみられる。8は器肉が厚く、外面にミガキがみられる。10・11は底部から胴部下位の遺存である。

#### SI-021 (第188図, 図版47・95・100)

調査区ほぼ中央、I22-18グリッド付近に所在するが、壁は確認されず、床面の状況や柱穴の位置などからプランを推定した。推定した規模は、長軸5.5m、短軸5.1mで、ほぼ正方形を呈すると思われる。主軸方向はN-43.0°-Wを指す。床面は明瞭ではないが、部分的に硬化面が確認される。柱穴は対角線上に4本配置されるが、小規模である。南東コーナーのピットは貯蔵穴と考えられ、径0.8m×0.9mのやや楕円形を呈する。周囲を土手状のもので囲っているようである。炉は北西の柱穴間に位置する。

遺物の出土は、確認された床面の範囲に散在している。



第188图 SI-021

## 出土遺物

1は須恵器壺の頸部と思われる。突帯間に櫛描き波状紋が一段充填される。2は小さな平底を形成している杯である。口縁部にヨコナデの際の凹線が一条走っている。3～6は高杯である。3は弱い稜をもって口縁部が内湾気味に大きく開くタイプで、内外面ともミガキと赤彩がみられる。4～6は脚柱部の遺存である。4・5はヘラケズリ、6はミガキ調整である。裾部が大きく開くタイプと思われる。7は内面黒色処理の碗である。内外面とも丁寧なミガキが施される。8・9は壺である。8は口縁部が短く外反し、内外面ともに縦方向のミガキが施されている。9は有段口縁状の口縁部を有し、ミガキ調整される。胴部内面には粘土の接合痕がみられる。胴部上位に横または斜め方向の研磨痕が残っている。10～12はタイプの異なる甕である。12は肩部に最大径を有する。13は甕の突起であろうか。14は滑石製の剣形模造品の頭部である。小形品で、板状に薄く仕上げられている。

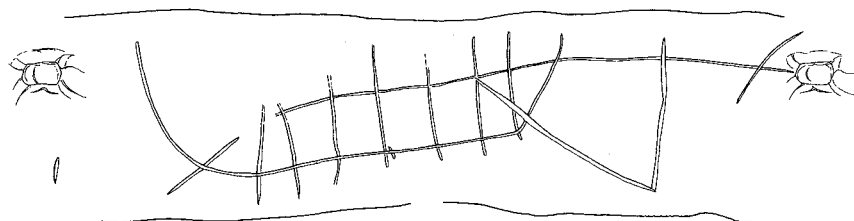
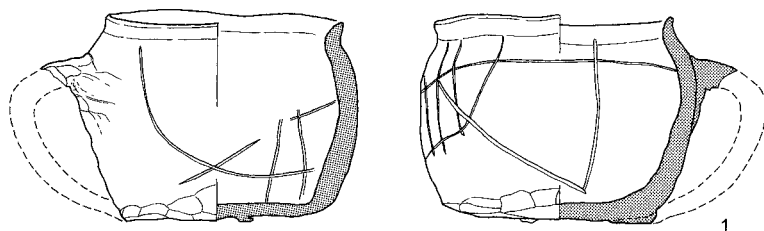
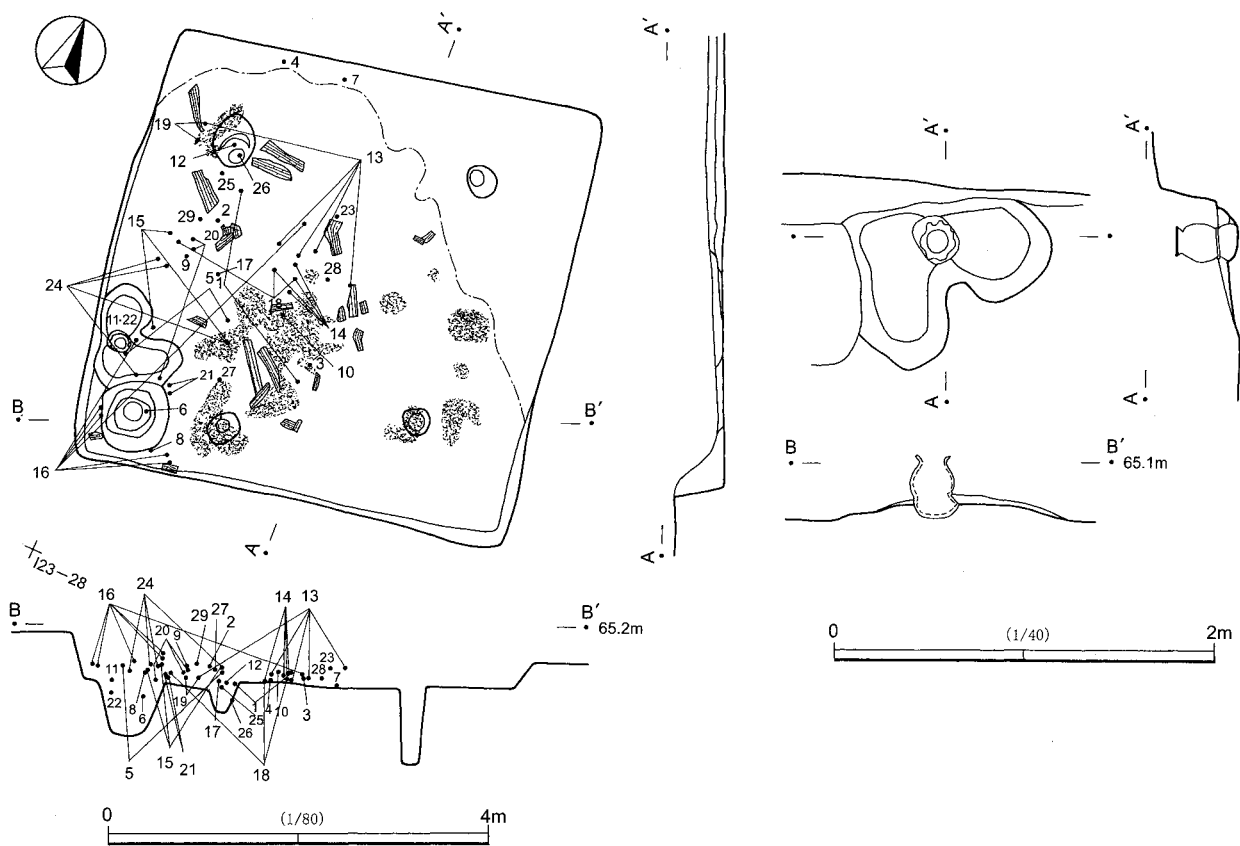
### SI-022 (第189～191図, 図版47・48・95・96・99)

調査区中央よりやや南側, J23-00付近に位置する。SI-029を切っているが、遺存はあまり良くない。規模は長軸4.8m, 短軸約4.6mを測り、ほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-11.0°-Eを指し、床面積は約22.3㎡を測る。床面はほぼ平坦で、北側の床の一部が残っていないが全体に堅緻である。柱穴は対角線上に4本配置される。3本が径0.3m程度と小規模であるにもかかわらず、深さは0.7m～0.8mと深い。南西コーナーには、1辺0.7mほどの貯蔵穴が掘り込まれている。本集落の古墳時代の住居の中では、唯一貯蔵穴に接してカマドが構築されている。白色粘土の袖の一部を残すのみで、詳細は不明であるが、壁を掘り込まずに構築している点からは、初期カマドの範疇に入るものであろう。燃焼部を一段深く掘り込んで甕を2個体正位で設置している。22が下, 11が上である。なお、22は胴下半部を意図的に打ち欠いて置いたものと思われ、支脚の代用品として使われた可能性が高い。床面上には、焼土及び炭化材が広範囲に分布しており、焼失住居と考えられる。

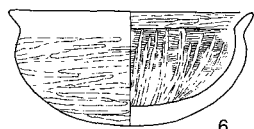
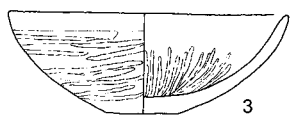
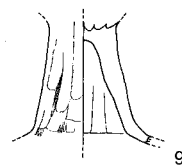
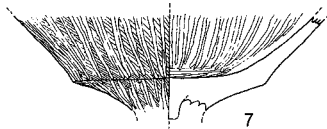
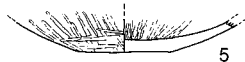
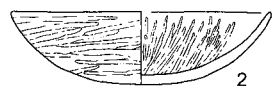
遺物の出土は多く、住居西側部分に集中する。1の須恵器把手付碗は、床面直上からの出土である。

## 出土遺物

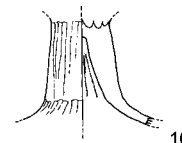
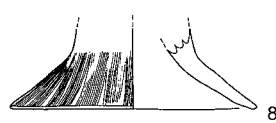
1は須恵器の把手付碗で、把手部分を欠損する。口縁部は水平ではなく、大きく歪んでいる。全体にナデ調整されるが、体部下端に手持ちヘラケズリを加える。底部も不定方向のヘラケズリが施されるが、平坦ではなく、粘土のひずみがみられる。体部内面上半には、指頭による圧痕が巡る。胎土中に、黒色粒と長石・石英粒を含む。色調は灰黄褐色、断面はチョコレート色を呈する。図に示したように、口縁部から体部下端にかけて焼成前の線刻がほぼ1周して描かれている。左に舳先、右に船尾、船体に櫓を表現した構造線と思われる。船尾に重なるようにV字状の線刻がみられるが、舟に付属するものかどうかは不明である。口縁部から体部外面に比較的厚く自然釉が付着している。2・3は杯である。いずれも内外面ヘラミガキされ、平滑に仕上げられる。2は浅い丸底、3は小さな平底が形成される。4・5は小さな平底を呈する杯であろう。やはり内外面ともミガキ調整される。6は口縁部が短く外傾する碗である。器肉が厚く、内外面ともミガキが加えられる。7～10は高杯である。7は杯部で、明確な稜が形成される。内外面とも縦方向のミガキが丁寧に施されている。9・10は脚柱部で、下方の開く円錐形を呈している。裾部との境には明確な稜はない。11～21, 23～24は甕である。11・12は球形胴で、胴部中位に最大径を有する。外面ヘラケズリ、内面ナデ調整が加えられる。12には煤の付着がみられる。13～17, 19～21は内外面とも細かいハケ調整が施されている。18は短い口縁部に球形状の胴部がつく小形の甕で、全体にナデ調整され



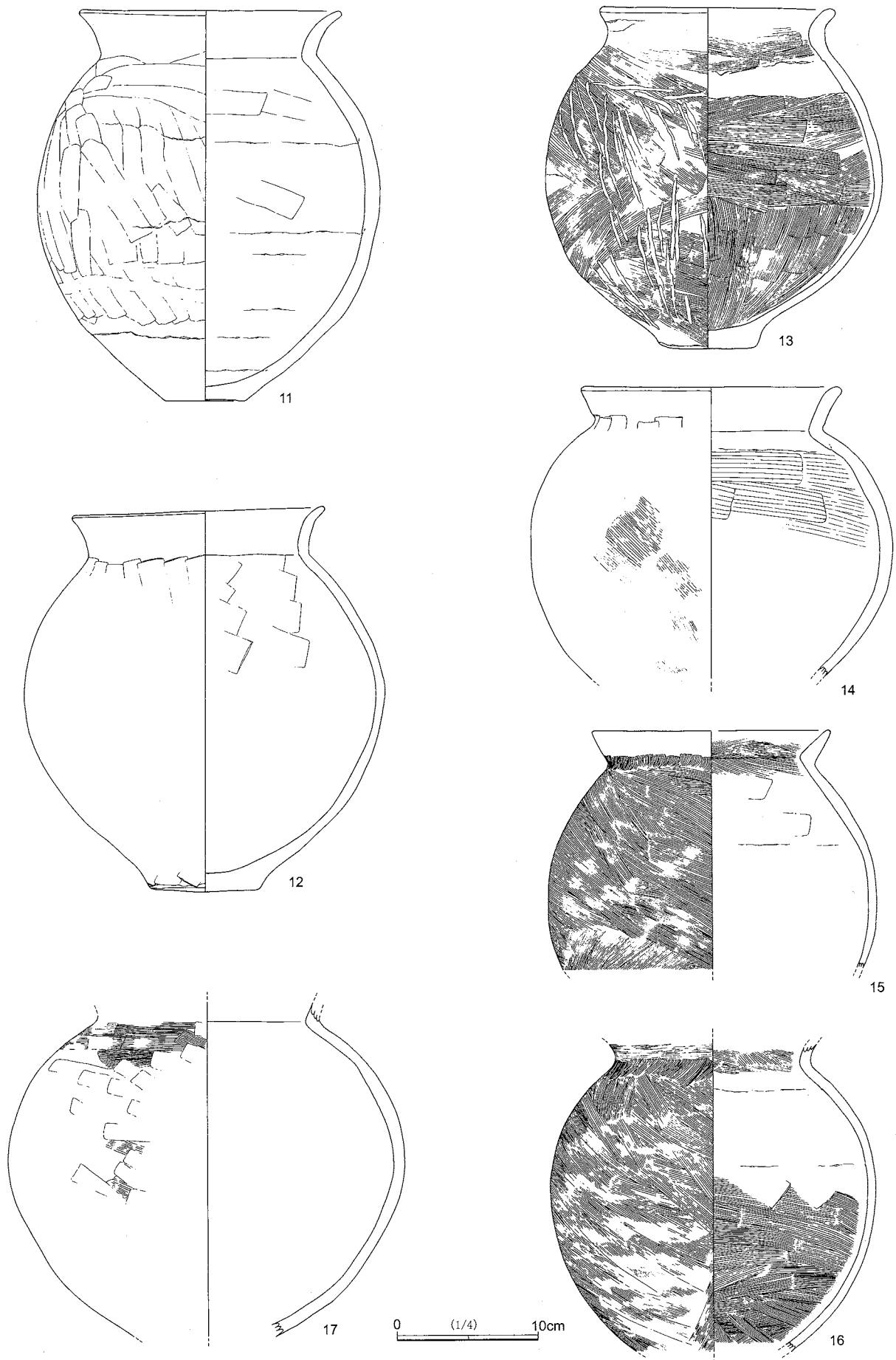
0 (1/2) 5cm



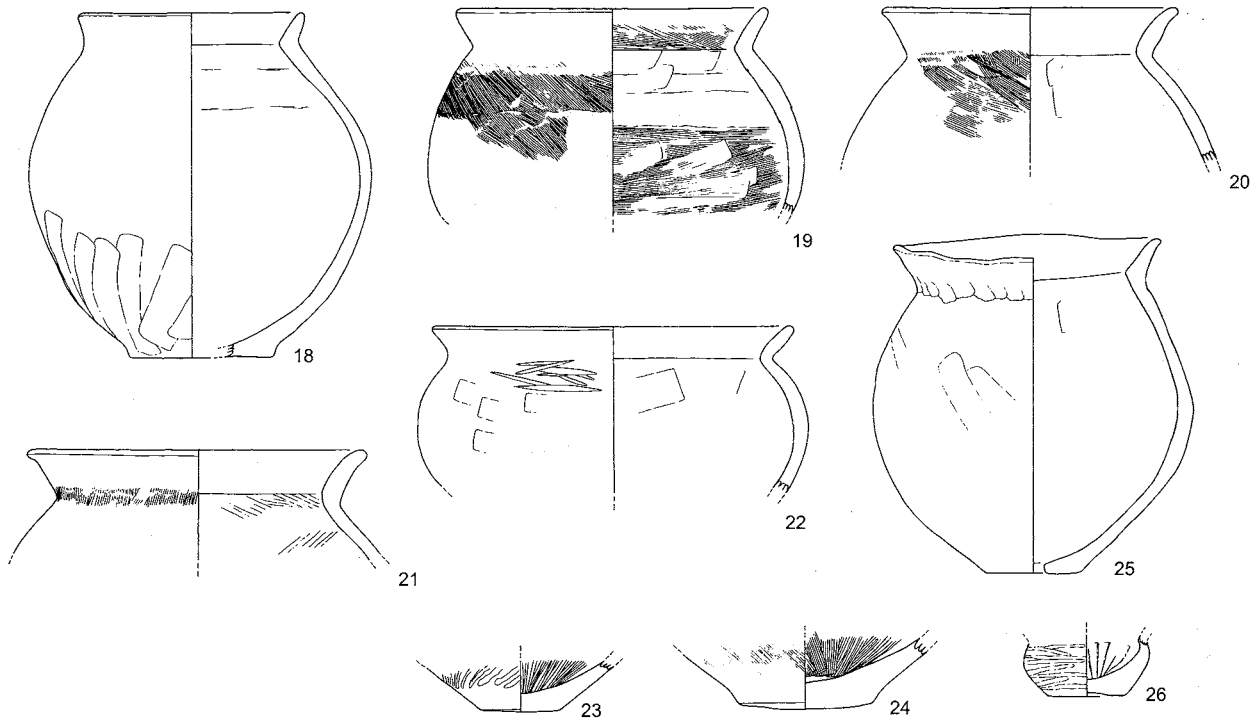
0 (1/4) 10cm



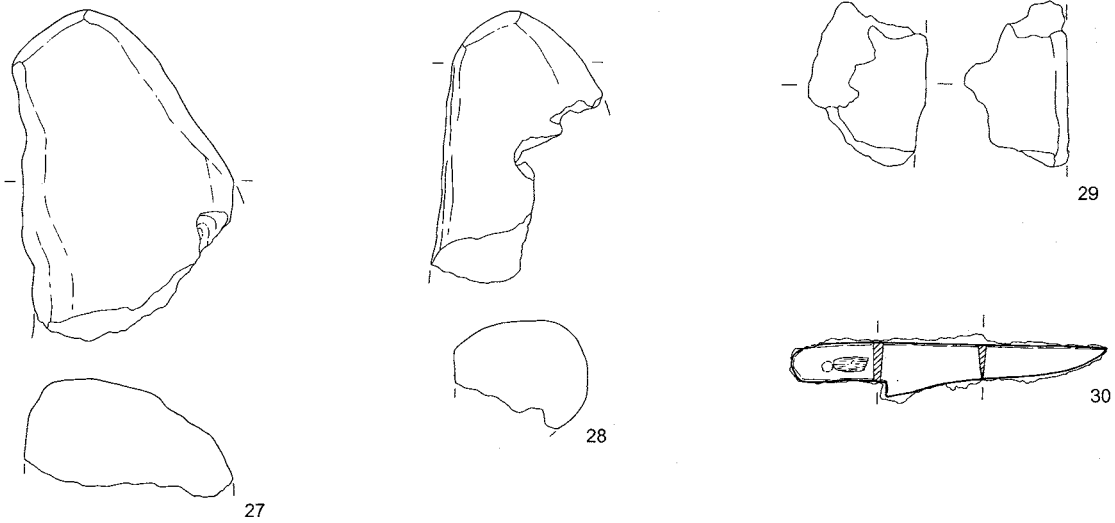
第189图 SI-022 (1)



第190图 SI-022 (2)



0 (1/4) 10cm



0 (1/2) 5cm

第191図 SI-022 (3)

る。22はくの字状の口縁に扁平な胴部がつく形状と思われる、広口の壺であろう。25は甑で、底部に径1.4 cmの小孔が穿たれている。胴部中位に煤の付着がみられる。26はミニチュア土器、27~29は支脚の一部である。30は完形の鉄製刀子で、全長8.4cmを測る。身部は細くなっており、かなり研ぎ返されたようである。茎には不鮮明ながら小孔が穿たれ、木質が部分的に遺存し、紐巻きの痕跡がみられる。

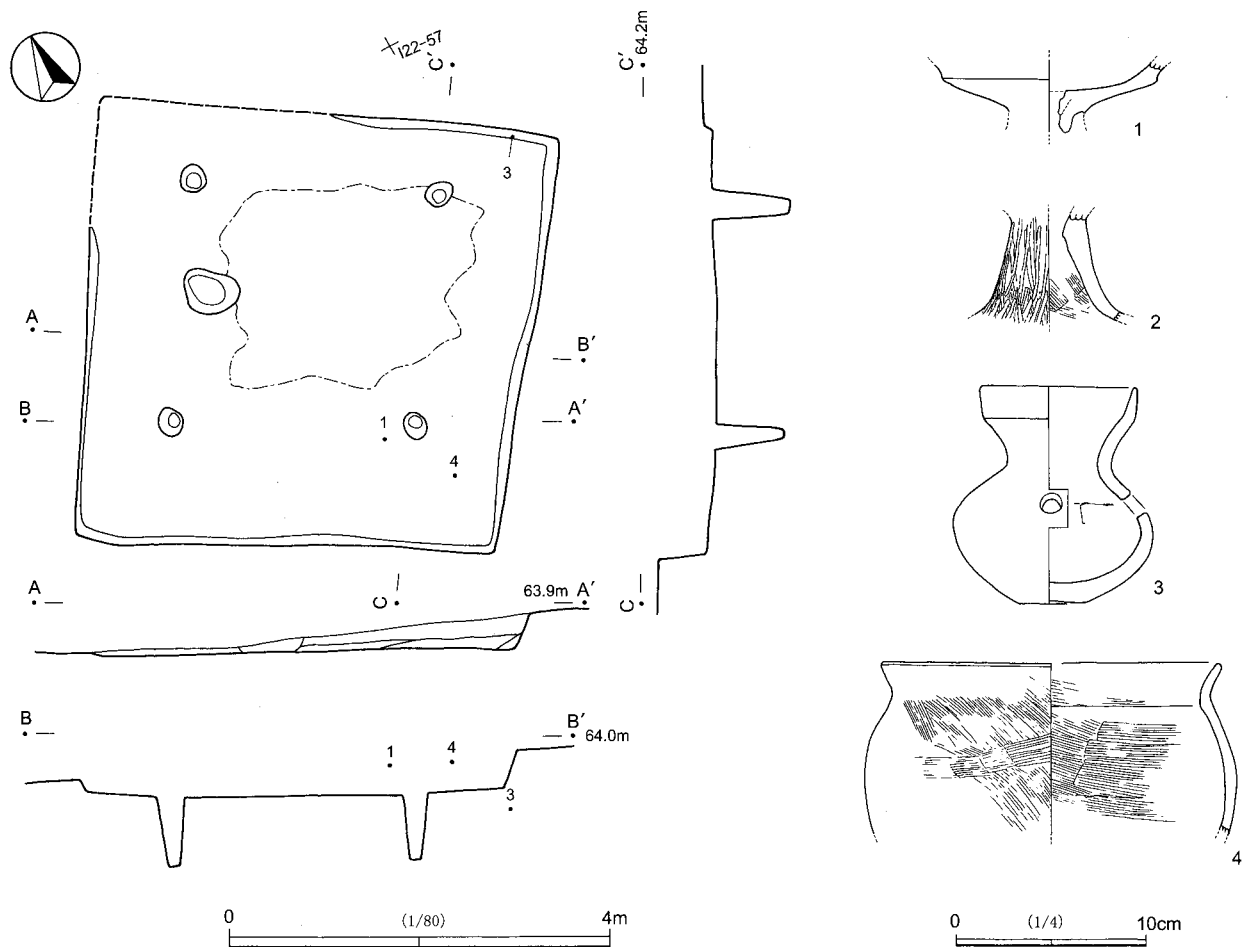
SI-024 (第192図, 図版48・96)

調査区中央やや西側, I22-66グリッド付近に位置し, SI-023・SI-033・SI-057を切る。規模は長軸4.7m, 短軸4.5mを測り, ほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-50.1°-Wを指し, 床面積は約19.9m<sup>2</sup>を測る。床面はほぼ平坦で, 中央部分に硬化面が認められる。柱穴は, 対角線上に4本検出された。径0.3m前後と小規模であるが, 深さは0.7mと比較的深い。炉は北西寄りの柱穴間に設けられる。底面は強く被熱しているようで, 赤く硬化している。覆土は自然堆積の様相を呈する。

遺物の出土は少ない。

出土遺物

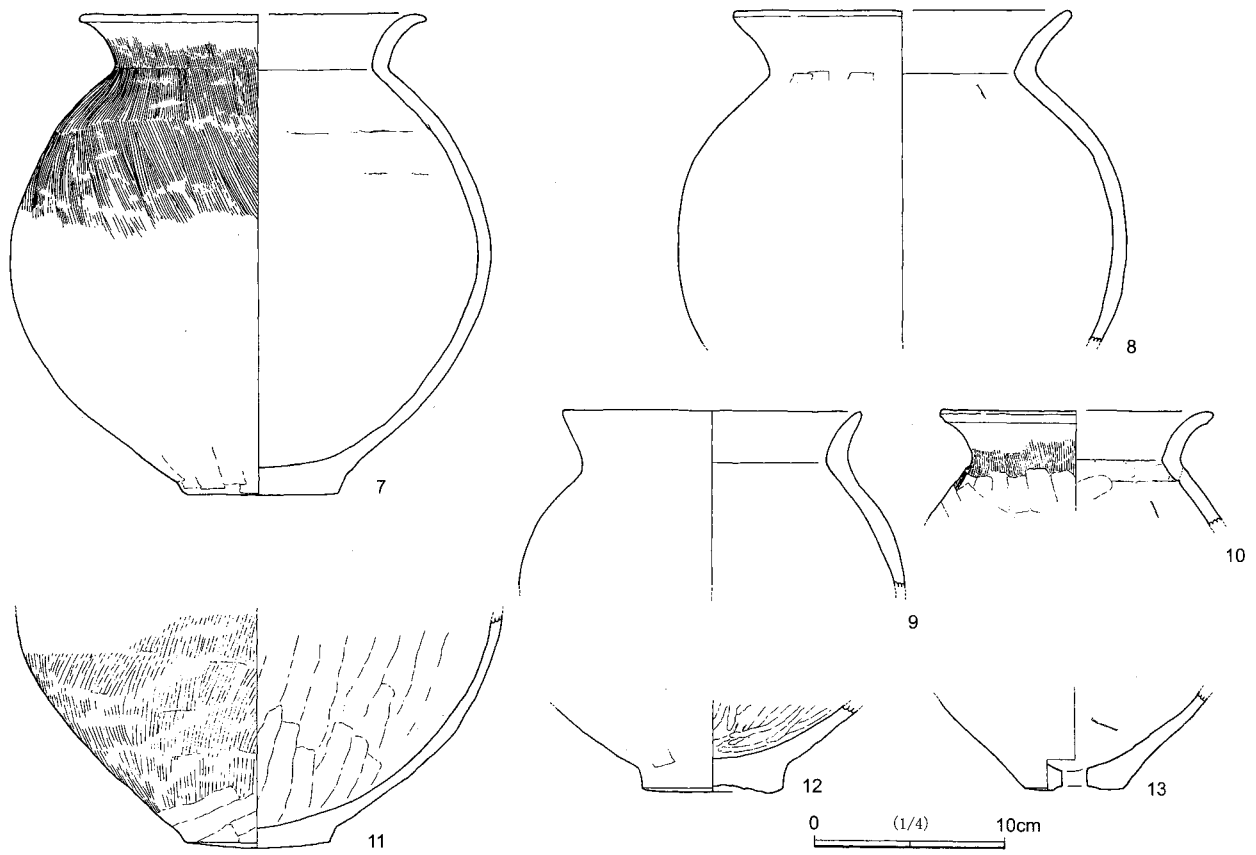
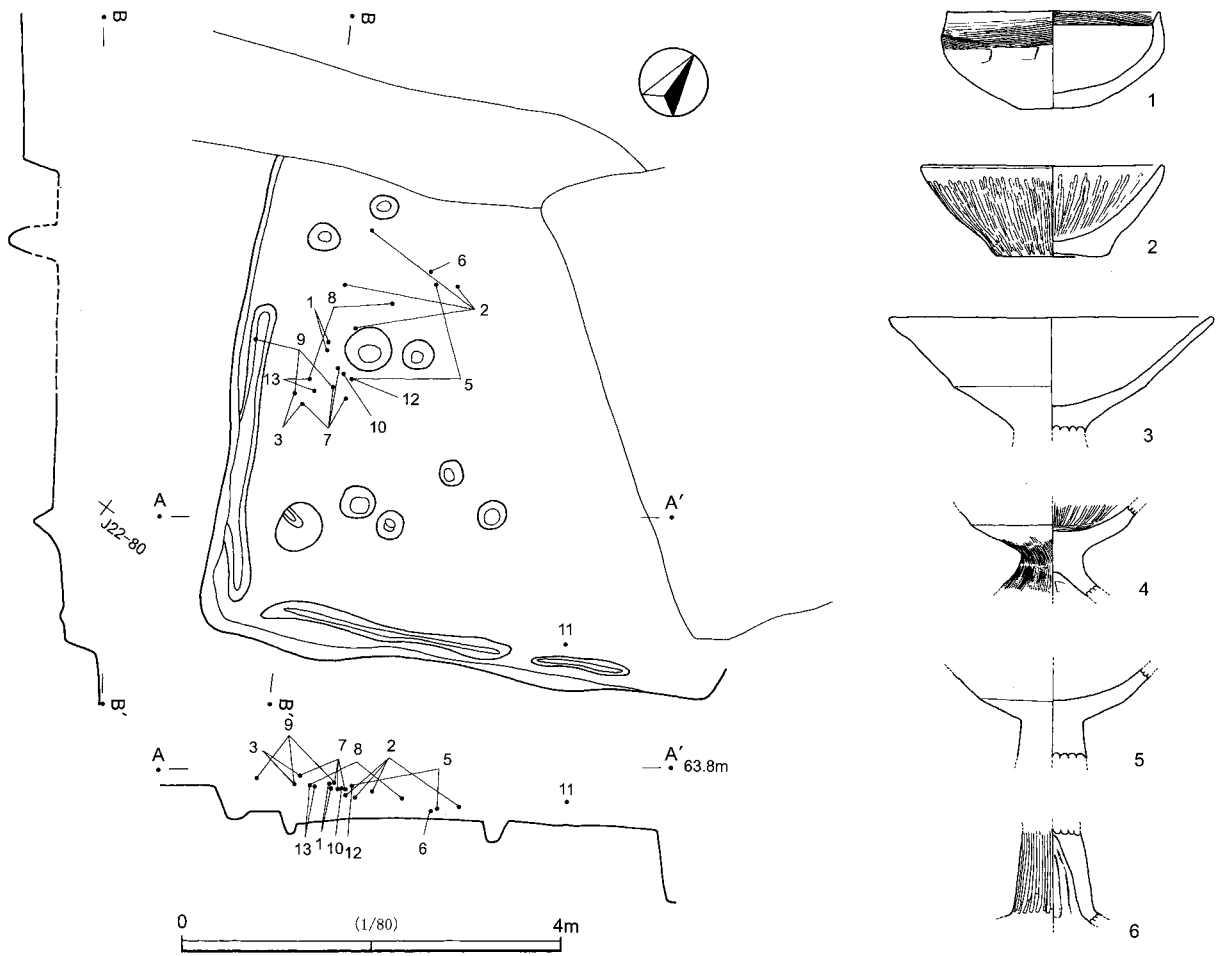
1・2は高杯である。1は杯部の一部で, 底部から大きく外反していく口縁部との境に強い稜を有している。臍の一部が残る。2は外面にミガキが施される短脚の脚部である。3は土師器のハソウである。内外面とも器面の摩耗が激しく, 調整は不明である。口縁部と頸部との境の稜は弱い。4は甕で, 内外面とも横または斜位のハケ目が残る。



第192図 SI-024

SI-025 (第193図, 図版50・96)

調査区ほぼ中央, J22-81グリッド付近に位置する。東側をSI-020に, 北側を溝に切られているため正確な規模は不明であるが, 東西方向で約6mを測ると思われる。主軸方向はN-20.0°-Wを指す。床面は, 残存部分ではほぼ平坦で, 全体に堅緻である。壁溝は部分的に検出された。ピットは西側に集中して



第193图 SI-025



多数検出されたが、西壁に沿った2本が柱穴と思われ、他は不明である。炉に相当するピットは確認されなかった。

遺物は北西側に集中して検出された。

#### 出土遺物

1は口唇部を短く摘み上げる杯で、小さな平底を形成する。口縁部内外面にハケ目調整痕が残る。2は鉢となろう。体部が底部からほぼ直線的に開く形状で、内外面とも縦方向のミガキが丁寧に施されている。3～6は高杯である。3は杯部のみの遺存で、底部と口縁部との境に若干の稜を有し、口縁部は直線的に開く。4～6は脚柱部である。4の杯部内面は縦方向のミガキが施され、外面も底部から脚部に縦方向のミガキが丁寧に加えられる。6はやや中膨らみで、下方がわずかに開く筒状の形状を呈している。7～12は甕である。7は遺存状態が良く、口縁部から胴部上位には細かいハケ目が残されている。8・10はくの字状に口縁部が外反する。10の口縁端部は平坦に近く、頸部にハケ目痕が残る。11・12は底部から胴部の一部である。11は縦方向のハケの後、底部付近はヘラナデが施されている。12の内面には丁寧なミガキがみられる。13は甕の底部片で、径1.4cmの孔が穿たれている。

#### SI-032 (第194図, 図版96・100)

調査区西側、H23-34グリッド付近に位置し、9号墳の周溝と重複する。新旧関係については明確ではないが、本住居の方が先行する時期の所産と思われる。規模については、北側壁が遺存していないが、長軸約4.3m、短軸3.9m前後を測ると推定される。主軸方向はN-10.0°-Eを指し、床面積は約17㎡であろう。床面はほぼ平坦で、南側半分に硬化面が認められる。壁溝は、現状では南側半分に確認されているが、本来は全周していた可能性が高い。柱穴は、対角線上に4本配置されるが、いずれも小規模である。北東コーナーには、長軸0.8mほどを測る貯蔵穴が検出された。覆土中にローム粒を多く含んでおり、人為的に埋め戻された可能性がある。

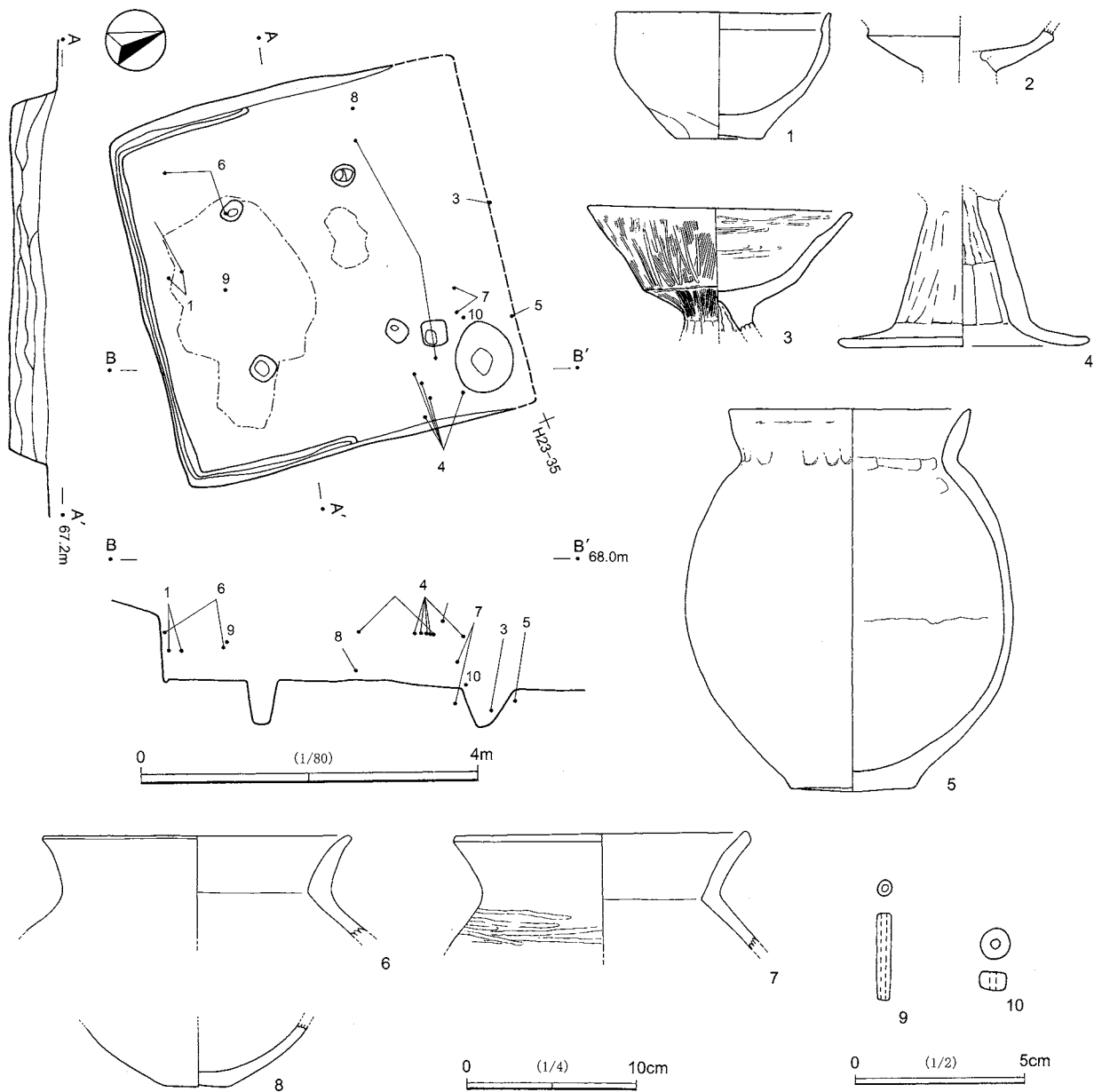
遺物は全体に散在しているが、貯蔵穴付近に集中する傾向がある。

#### 出土遺物

1は鉢であろう。作りが粗雑で、全体にナデ調整されるが、器表面に凸凹がみられる。口縁部内面に若干の稜を持っている。2～4は高杯である。3は杯部のみの遺存で、底部と口縁部との境に稜を有しており、口縁部は直線的に開く。二次的に火を受けているようで、器面の荒れが著しい。脚部内面上位には絞り目が認められる。4は脚部のみの遺存で、裾部は大きく開く。2の内外面、4の外面に赤彩が施される。5～8は甕である。口縁部の形態が異なり、5はやや受け口状、7の口唇部には平坦面が形成される。7の胴部外面にはミガキがみられる。9は、長さ26mm、幅4mmを測る滑石製の管玉で、全体に丁寧に研磨されている。10は径4.5mmを測る滑石製の白玉である。

#### SI-044 (第195図, 図版50)

調査区西側、G23-77グリッド付近に所在する。中央部分を9号墳の周溝が切っている。確認面からの掘り込みもきわめて浅く、遺存は不良であるが、東西長約4.3mを測るものと思われる。主軸方向はN-10.0°-Wを指す。床面はほぼ平坦で、いぞん部分に関しては全体に堅緻である。壁溝は残存部に確認されていることから、本来は全周していたものと思われる。柱穴は対角線上に4本配置される。掘り方の径は小さいが、深さ0.6m前後と比較的深い。南東コーナーに掘り込まれた方形の2つのピットは貯蔵穴と考えられる。南側のピットは長軸0.5m、短軸0.4m、北側のピットは長軸0.4m、短軸0.26mを測る。北



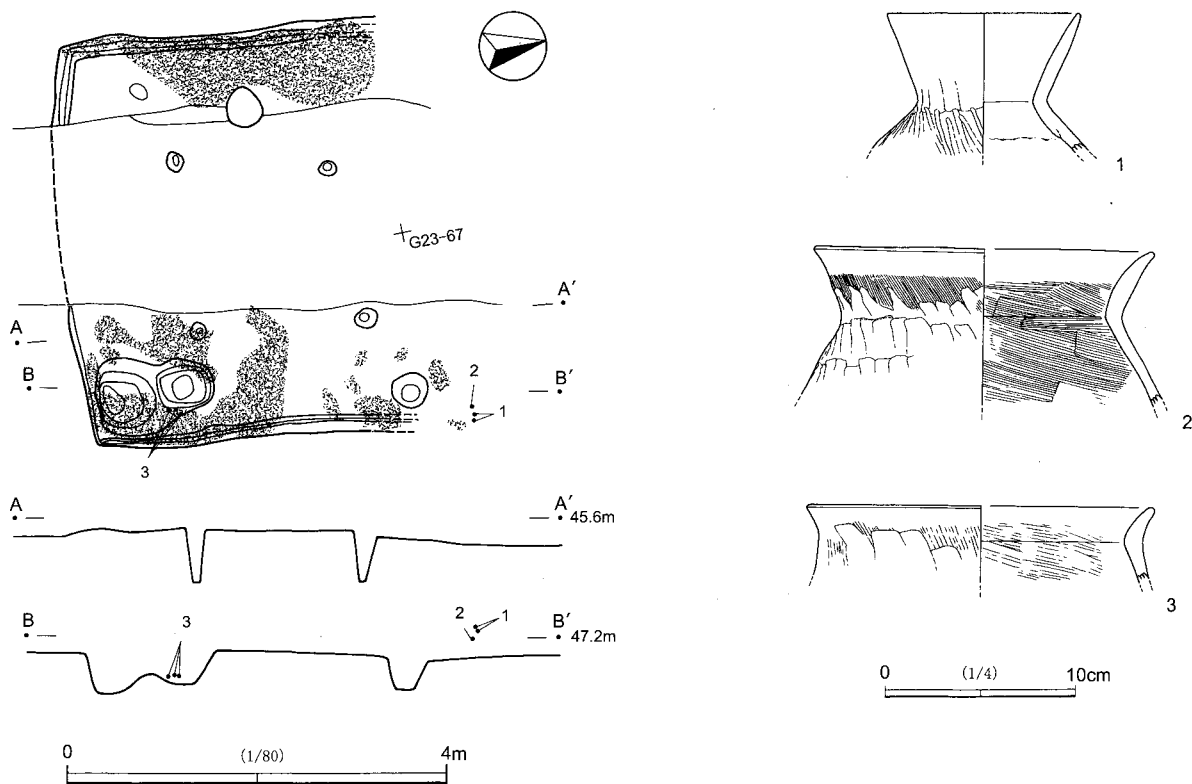
第194図 SI-032

側のピットの上面には堅緻な床面が存在していたため、北側から南側へ貯蔵穴を作り替えたものと推定される。炉は床面西側に設けられる。径42.0cm×38.0cmのやや楕円形を呈する。床面上には、焼土や炭化物が多く堆積していたことから焼失住居と思われる。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

1は壺で、口縁部ナデ、胴部外面は丁寧なミガキが施される。胴部内面には粘土の接合痕が残る。2・3は甕である。2は口縁部がくの字に外反し、外面は縦方向のハケ目調整、胴部には縦方向のヘラナデが施されている。内面は口縁部から胴部にかけて横方向のハケが明瞭に観察される。3は短い口縁部が緩やかに外反する。内外面の調整は2と同様である。



第195図 SI-044

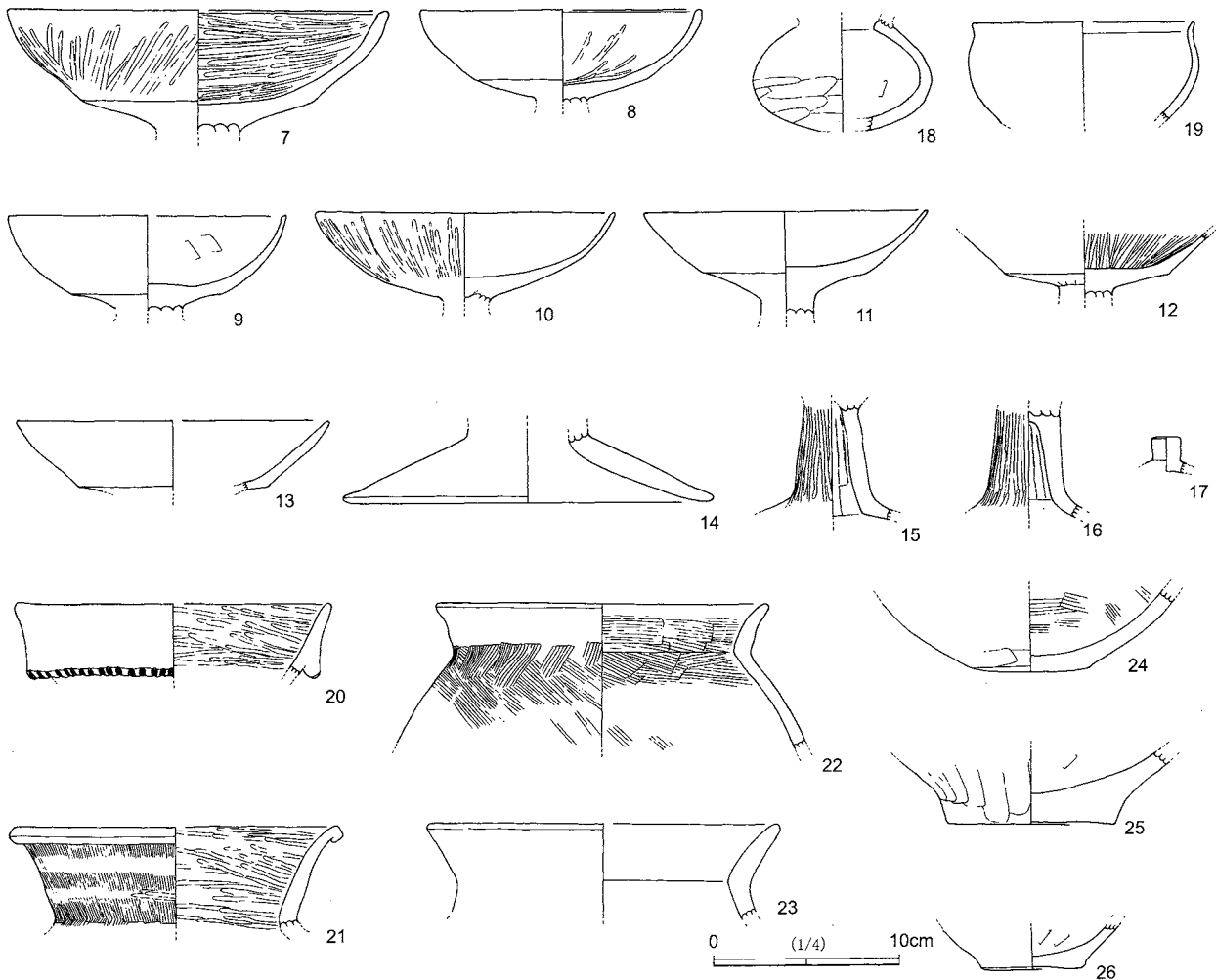
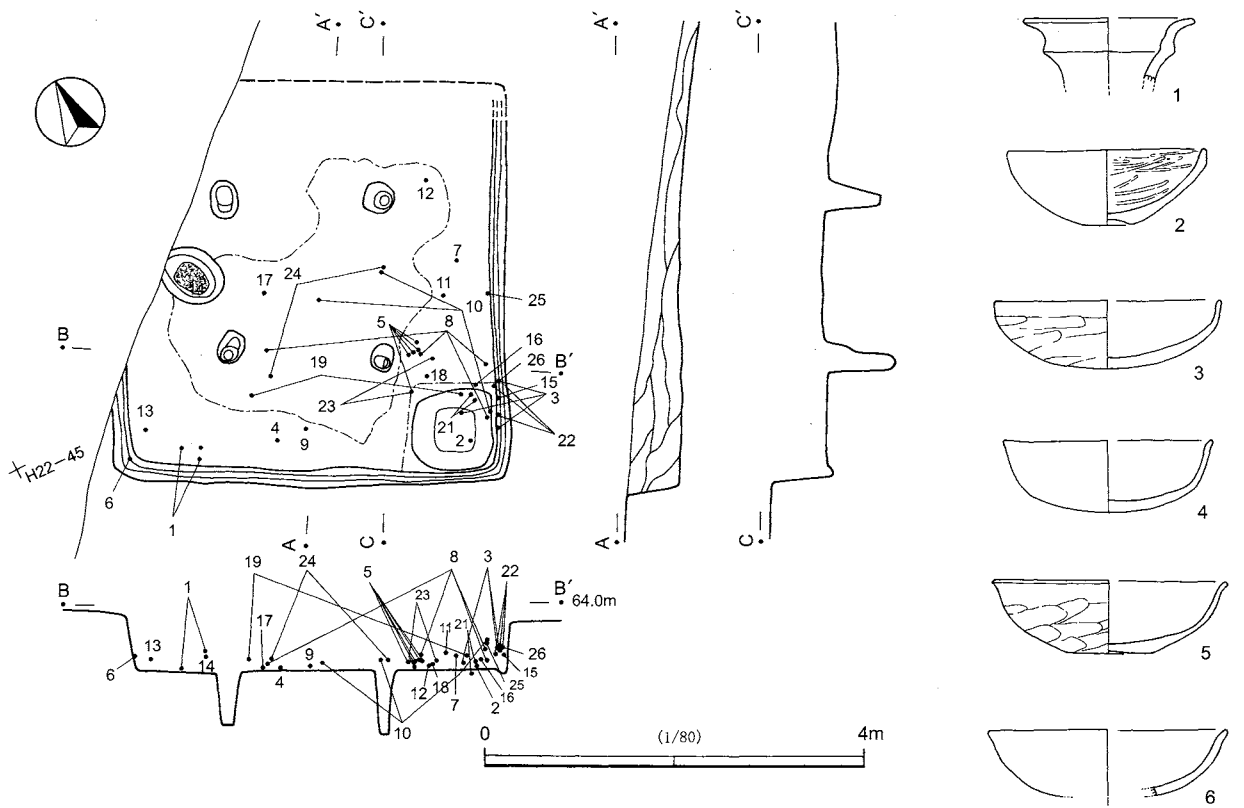
SI-045 (第196図, 図版50・96)

調査区北西側, H22-48グリッド付近に所在し, SI-065の覆土を一部切って床面が構築される。北側の壁はSI-065の覆土中にあるため, 確認できなかった。北西コーナーは調査区外となる。規模は長軸4.3m, 短軸4.1mと推測され, ほぼ正方形を呈している。主軸方向はN-31.0°-Eを指し, 床面積は約17.6㎡と推定される。床面はほぼ平坦で, 中央部分に硬化面が認められる。壁溝は北壁と調査区外の部分は不明であるが, おそらく全周するものと思われる。柱穴は対角線上に4本配置される。深さ0.6m前後で, 2段に掘り込まれる。南東コーナーには, 1辺0.85m, 深さ0.6mの方形を呈する貯蔵穴が検出された。周囲は床面より僅かではあるが方形に低くなっている。炉は北西の柱穴間に設けられ, 長軸0.56mの楕円形を呈する。中央部分が赤く硬化している。覆土中に小ロームブロックが多く含まれており, 人為的な埋め戻しが想定される。

遺物の出土は多く, 壁に沿った床面直上あるいはやや浮いた状態で検出された。

出土遺物

1は壺あるいはハソウの口頸部片である。口縁部は突出した稜をもって強く外反する。橙褐色の色調を呈し, 内外面ナデ調整される。2~6は杯である。2は上げ底の小さな底部が形成され, 内面ミガキ, 外面ナデ調整が加えられる。内外面とも赤彩が施される。3・4は丸底で, 口縁部が内湾しながら立ち上がる。4は器面の摩耗が激しく, 調整不明である。5は平底で, 口縁端部で僅かに外反し, 口唇部が平坦に整形される。他に比べて器壁が薄く焼きも良い。7~16は高杯である。7~13は杯部のみで, 10のように底部から稜を持たずに内湾しながら立ち上がるものと, 底部との境に僅かな稜を有する8・10, 明確な稜を有する7・9・13がある。12・13の口縁部は直線的に立ち上がるが, 他は緩やかに内湾しながら立ち上がる。ミガキ調整されるものが多く, 13の内外面には赤彩がみられる。14~16は脚部のみの遺存である。



第196图 SI-045

14は裾部がハの字状に大きく開く。17は蓋のつまみであろうか。外面に赤彩が施されている。20・21は壺の口縁部である。20は折り返口縁部に縄文原体による押圧が施される。21は口縁端部が小さく折り返され、外面ハケ目、内面ミガキが観察される。22～26は甕である。22は口縁部がくの字状に外反し、胴部外面は斜位のハケ目、内面は口縁部から胴部上位にかけて横方向にハケ目がみられる。24～26は底部付近のみの遺存である。

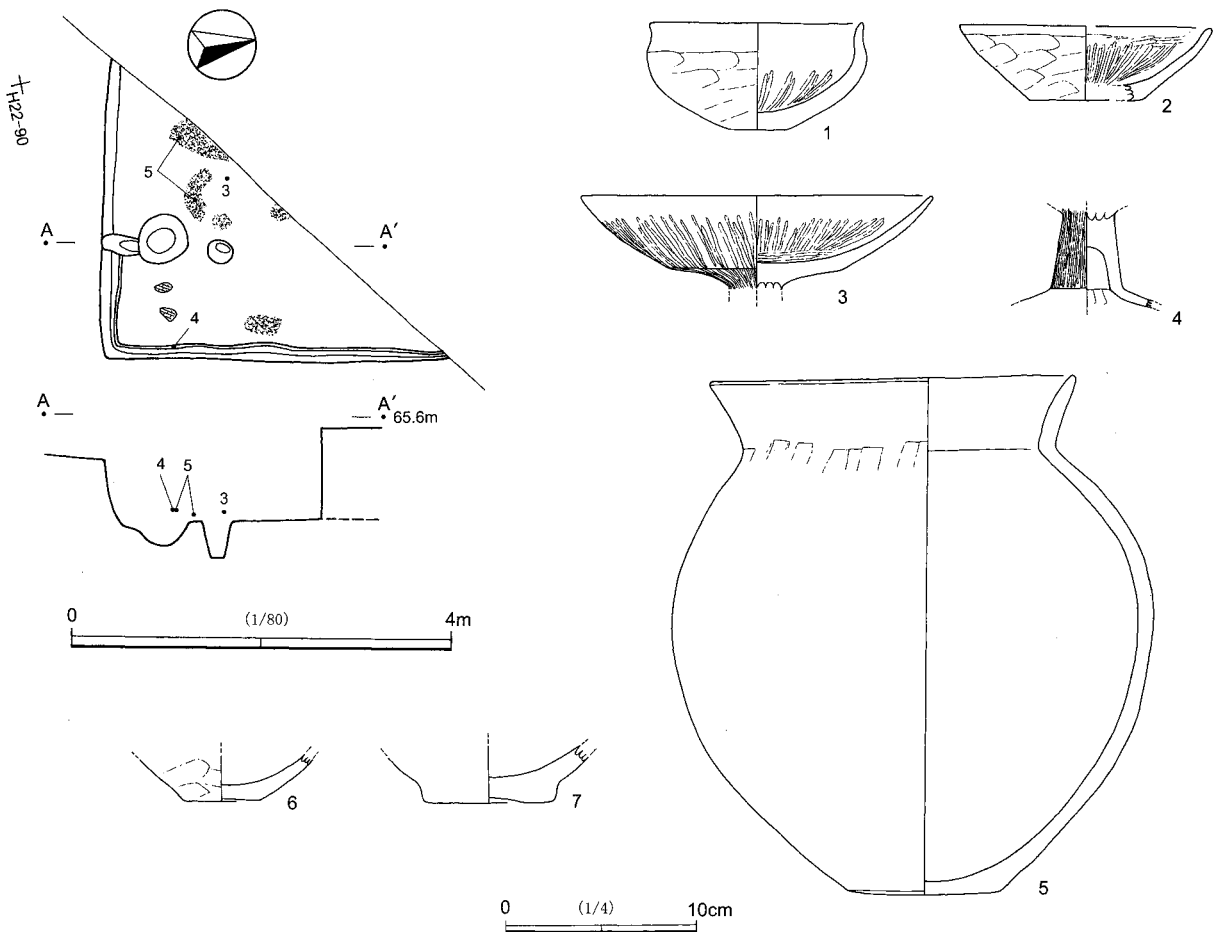
SI-046 (第197図, 図版48・96)

調査区西端, H22-90グリッド付近に所在する。北側の大部分は調査区外にあり, 東側で縄文時代のSI-061を切る。部分的な調査のため詳細は不明である。床面はほぼ平坦で, 全体に堅緻である。壁溝は東側部分に確認された。ピットが3ヶ所検出されているが, 北側のピットは柱穴, 柱穴南側のピットは貯蔵穴と考えられる。床面には焼土・炭化材が散在している。

遺物の出土は少ない。

出土遺物

1は内外面とも赤彩される椀である。小さな底部が形成されており, 内面ミガキ, 外面ヘラケズリ後ナデが加えられる。2は鉢となろう。体部が直線的に外側に開く形状を呈する。調整は1と同様である。3・4は高杯である。3は杯部のみで, 底部と口縁部との境に稜を有し, 口縁部は緩やかに内湾しながら外上方に開く。内外面赤彩である。5～7は甕である。5は胴部中位より若干上位に最大径を有しており, 口縁部はくの字状に外反する。胴部中位から底部にかけてススの付着が著しい。



第197図 SI-046

#### SI-049 (第198図, 図版49・96・97・100)

調査区中央よりやや北西側, 121-91グリッド付近に位置する。北西部分約半分が調査区外で, 北側は傾斜面にあるため, 住居の立ち上がりはほとんど確認されない。主軸方向はN-45.0°-Wを指すと推定される。床面は平坦で, 住居の中央部に硬化面の広がりが見られる。壁溝は, 調査された範囲では全周している。柱穴は2本検出された。径0.6m前後で比較的規模が大きく, 北側の柱穴は2段に掘り込まれる。柱穴間には入り口に伴うものと思われる小ピットが存在する。このピットは外側に傾斜している。東壁溝内には対峙するかのよう小ピットがあり, これも入り口に伴う可能性がある。東コーナーにある径0.8mほどの円形のピットは貯蔵穴である。覆土はほとんど黒色土の単一層である。

遺物はほとんど床面上からの出土で, 石製模造品は南側柱穴付近から検出された。

#### 出土遺物

1は杯で, 上げ底気味の底部が小さく作られ, 口縁部は直立気味に外反する。内外面とも丁寧なミガキが施される。2~6は高杯で, いずれもナデ調整が主体となる。6以外には赤彩がみられる。2は底部と口縁部との境に稜が形成され, 口縁部は大きく外反する。脚柱部は筒状, 裾部で大きく開く形状である。3・4は, 底部と口縁部との境に強く張り出した稜を持つ。7は甕で, 胴部中位に最大径を持ち, く字状に口縁部が開く。胴部内面に粘土の接合痕が残り, 外面にはススの付着がみられる。8・9は滑石製の石製模造品で, 8は剣形品, 9は有孔円盤である。8は全長5.7cmを測る大形品で, 表面には明瞭な稜が形成される。9は単孔で, 側面は研磨されるものの, 不整形を呈している。10~12は白玉である。

#### SI-050 (第199図, 図版42・96)

調査区中央より北側, 122-23グリッド付近に所在する。傾斜部に位置するため, 谷側の北半分は床面の遺存が認められなかった。SI-051と北側で重複するが, 本住居の方が新しい時期の所産である。規模は, 長軸約3.8m, 短軸3.8mを測り, ほぼ正方形を呈する。主軸方向はN-23.0°-Eを指し, 床面積は約14.3㎡と推測される。床面はほぼ平坦で, 残存する床面には硬化面が認められる。柱穴に相当するピットは検出されなかったが, 貯蔵穴と思われるピットが南コーナーで確認された。床面近くから焼土や炭化材の検出があったため, 焼失住居と思われる。

遺物の出土は少ない。

#### 出土遺物

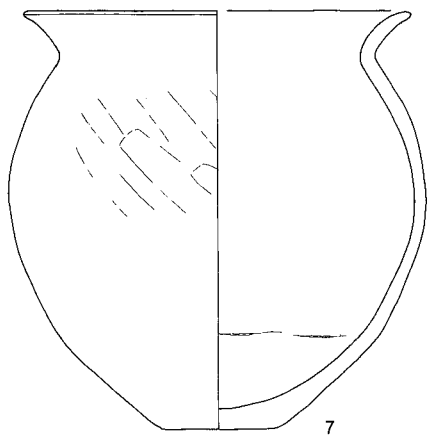
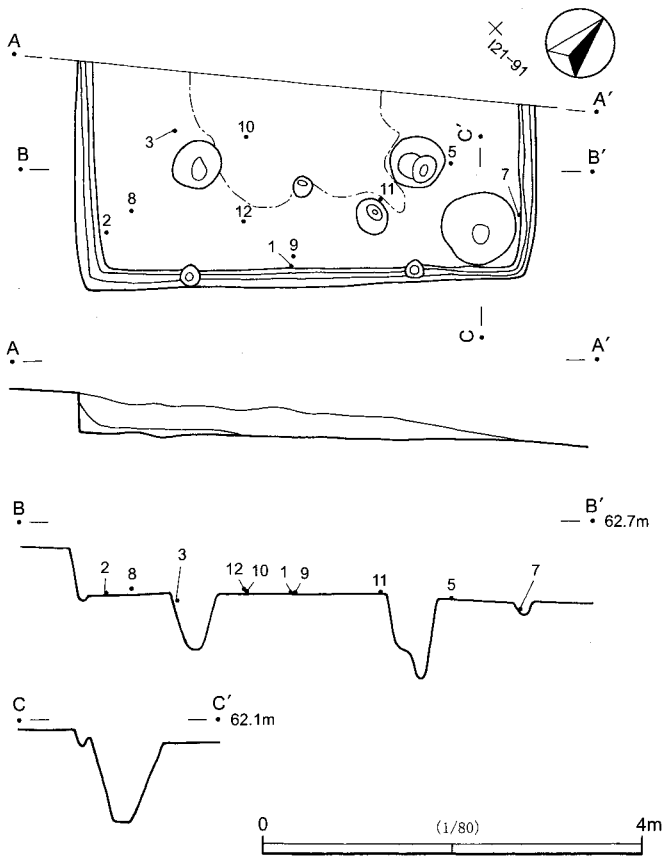
1は手捏ね土器で, 粘土の接合痕及び割れが残る。2は筒状を呈する高杯の柱状部で, 外面に赤彩がみられる。3は甕の口縁部で, 口縁下部をヘラケズリすることにより, 全体に有段状を呈する。ススの付着がみられる。4は甕の底部から胴部下位の遺存である。ススの付着が著しい。

#### SI-055 (第200図)

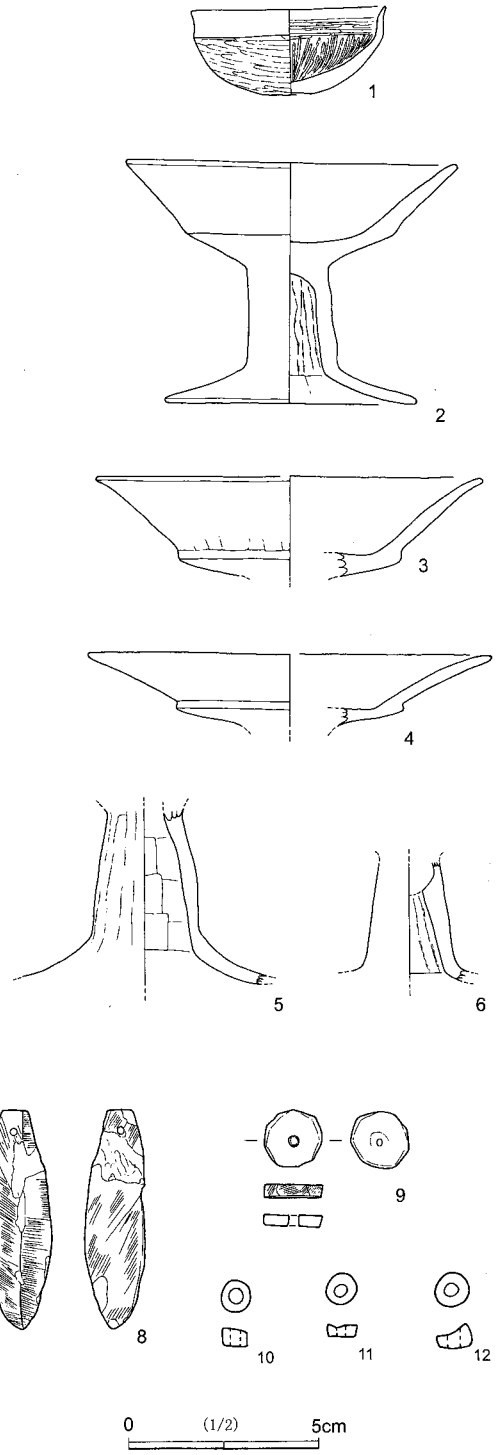
調査区J21-10付近に所在する。北西部約三分の一は調査区外であるため詳細は不明である。主軸方向はN-23.0°-Eを指す。壁溝は検出範囲では全周する。柱穴一本と南東角に方形の貯蔵穴が認められた。貯蔵穴の周囲は床面から一段下がっている。

#### 出土遺物

1は高杯の杯部である。外面の底部と口縁部の境に稜を持ち, 直線的に開く形状である。内外面赤彩を施している。

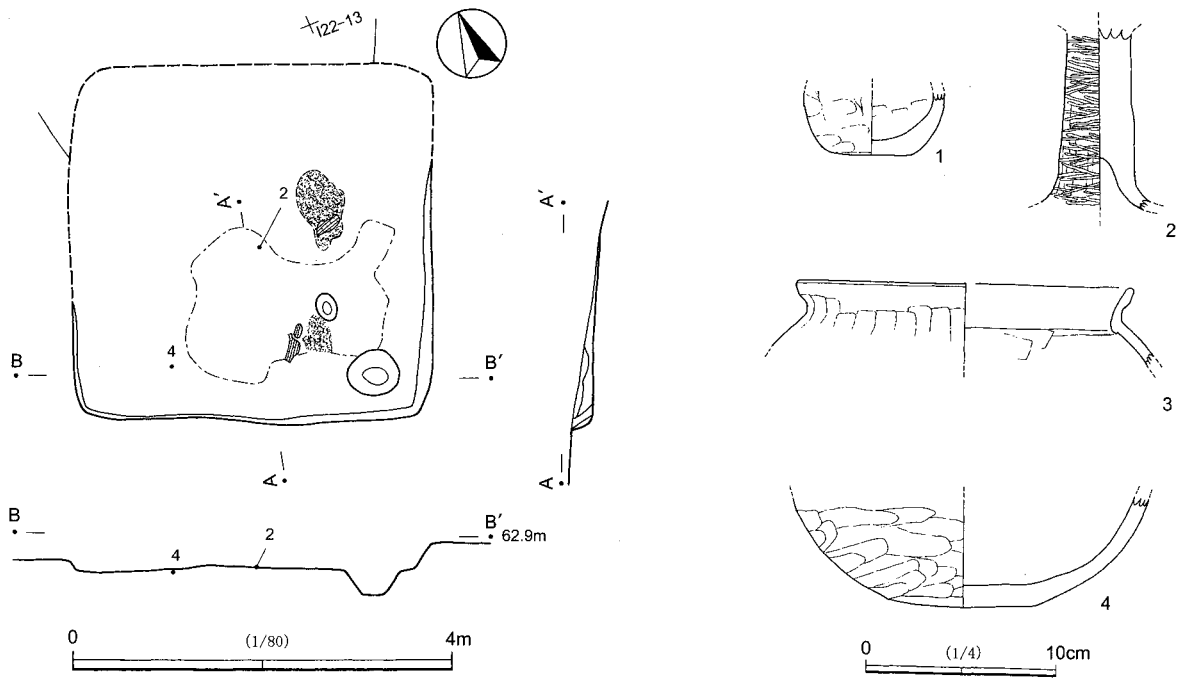


0 (1/4) 10cm

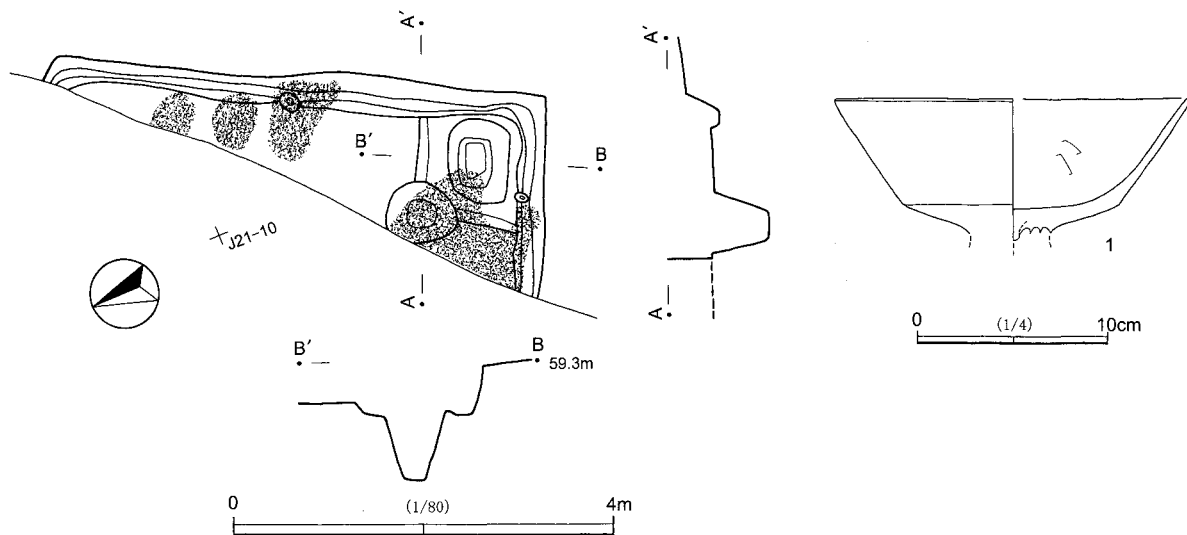


0 (1/2) 5cm

第198图 SI-049



第199図 SI-050



第200図 SI-055

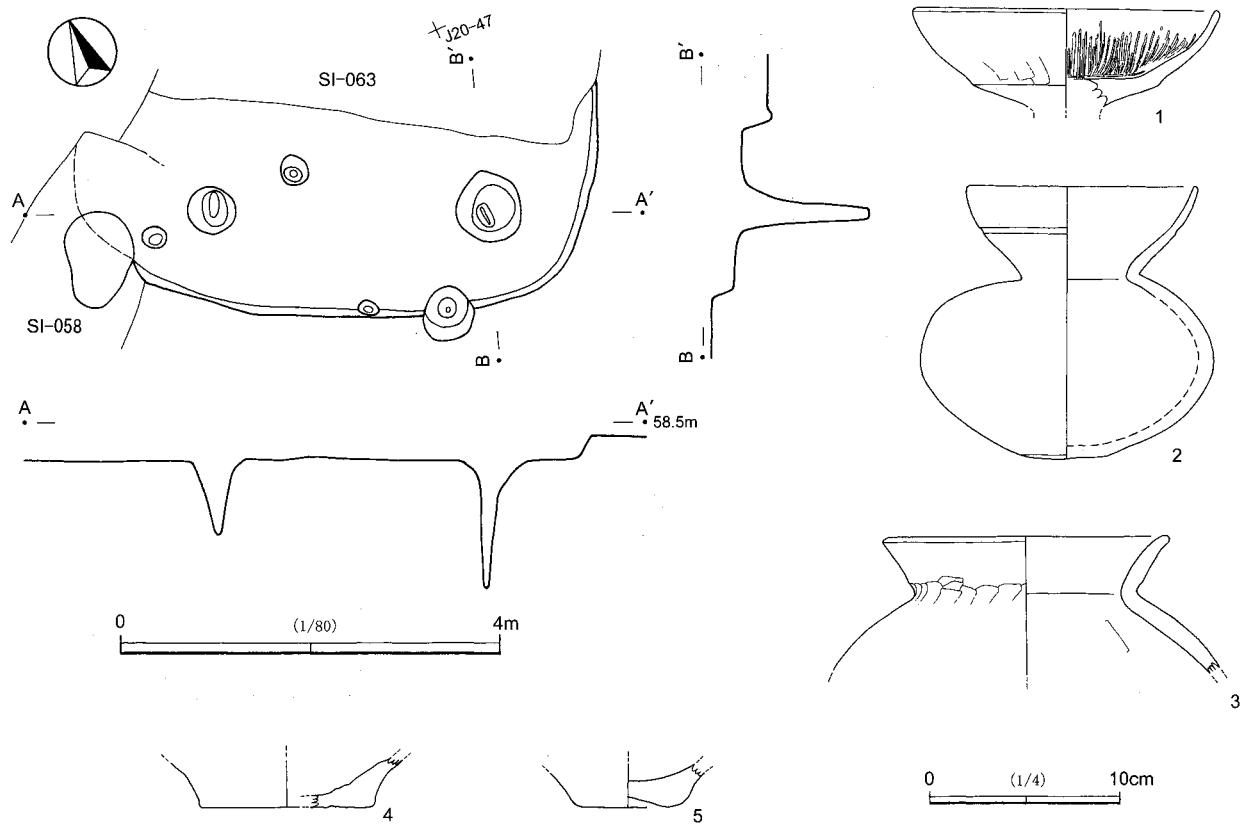
SI-060 (第201図, 図版49・97)

調査区J20-56付近に所在する。SI-058を切り、SI-063に切られる。主軸方向はN-30.0°-Eを指す。床面は平坦で全体的に硬さが認められる。柱穴は2本検出された。

出土遺物

1は高杯の杯部である。底部と口縁との境に若干の稜を有している。磨滅が著しく情報は少ないが内面のミガキが確認できる。2は小型の壺形土器である。磨滅も著しく、二次焼成を受けているため調整は詳細不明である。底部が形成されており、口縁部中位に一条の沈線が認められるのが特徴である。3は甕形土器で口縁から胴部中位の一部の遺存である。口縁はくの字状に強く外反する。4・5は甕の底部のみの





第201図 SI-060

遺存である。

#### SI-063 (第202図, 図版49・97)

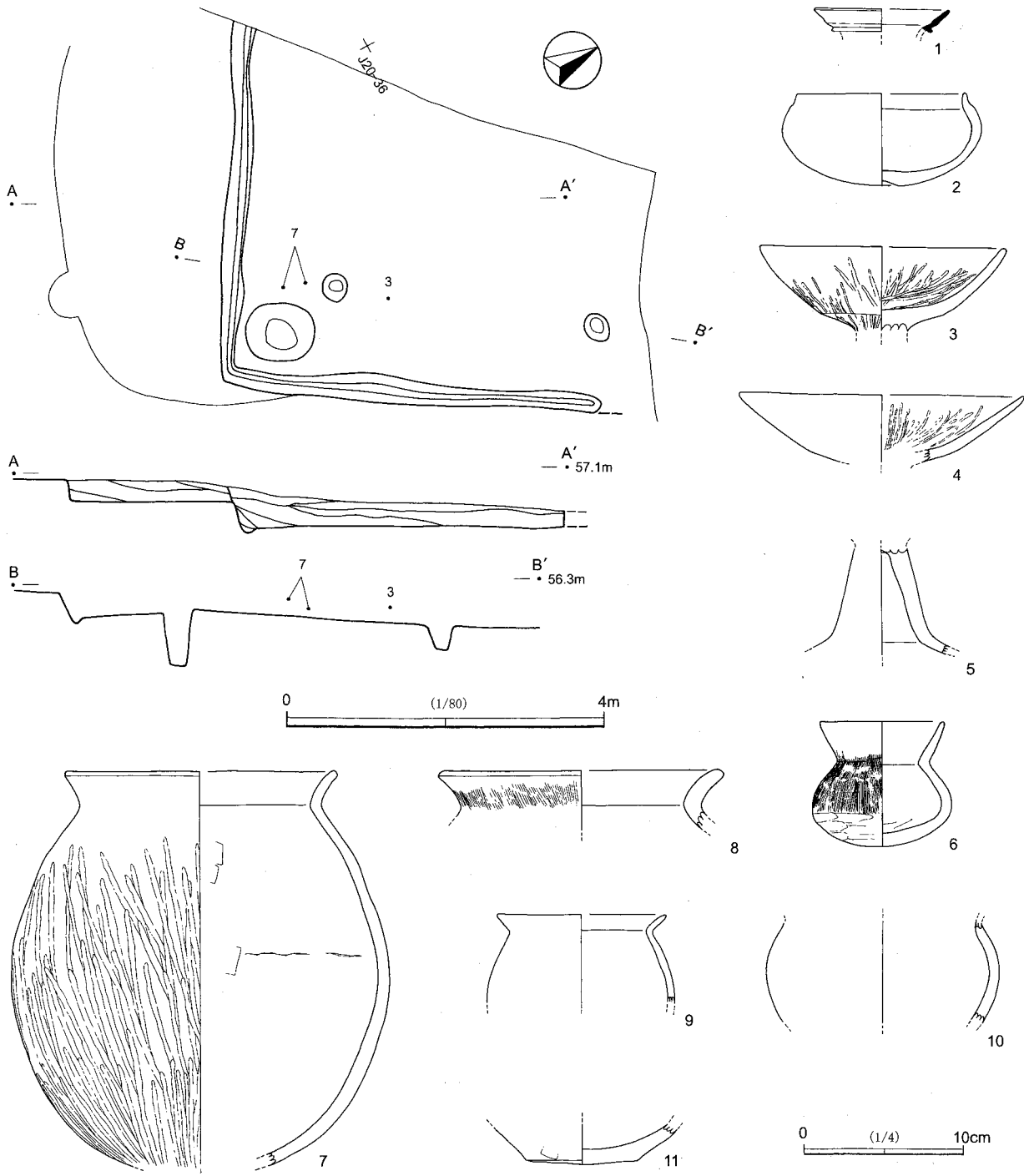
調査区J20-57付近に所在する。北東部は調査区域外で約三分の二の遺存である。主軸方向はN-52.0°-Wを指す。床面は軟質で東側では確認できなかった。壁溝は遺存している部分では全周する。柱穴は2本検出された。西角に丸みを帯びた方形のピットが確認され、貯蔵穴と思われる。

#### 出土遺物

1は須恵器の小型の壺形土器の口縁部の小破片である。内面に灰釉が付着している。2は杯形土器である。小さな底部を有している。最大径を体部上位に持ち、口縁部は内傾する。口唇部は上方に摘み上げられている。3・4は高杯の杯部のみの遺存である。3は底部と口縁部との境に緩やかな稜を有している。磨滅が著しく調整も不明瞭であるが、ミガキが若干確認できる。4は稜を持たず直線的に上方へ大きく開く。5は高杯の脚部のみの遺存である。下方の開く円錐形で内面に稜を有して裾部は大きく開く。6は小型の壺形土器である。磨滅が著しいが胴部にかすかなハケ目と底部付近のヘラナデ痕が確認できる。7から11は甕形土器である。7はやや長胴の胴部中位に最大径を有する。口縁部はくの字状に小さく外反する。

#### SI-068 (第203図, 図版43・97)

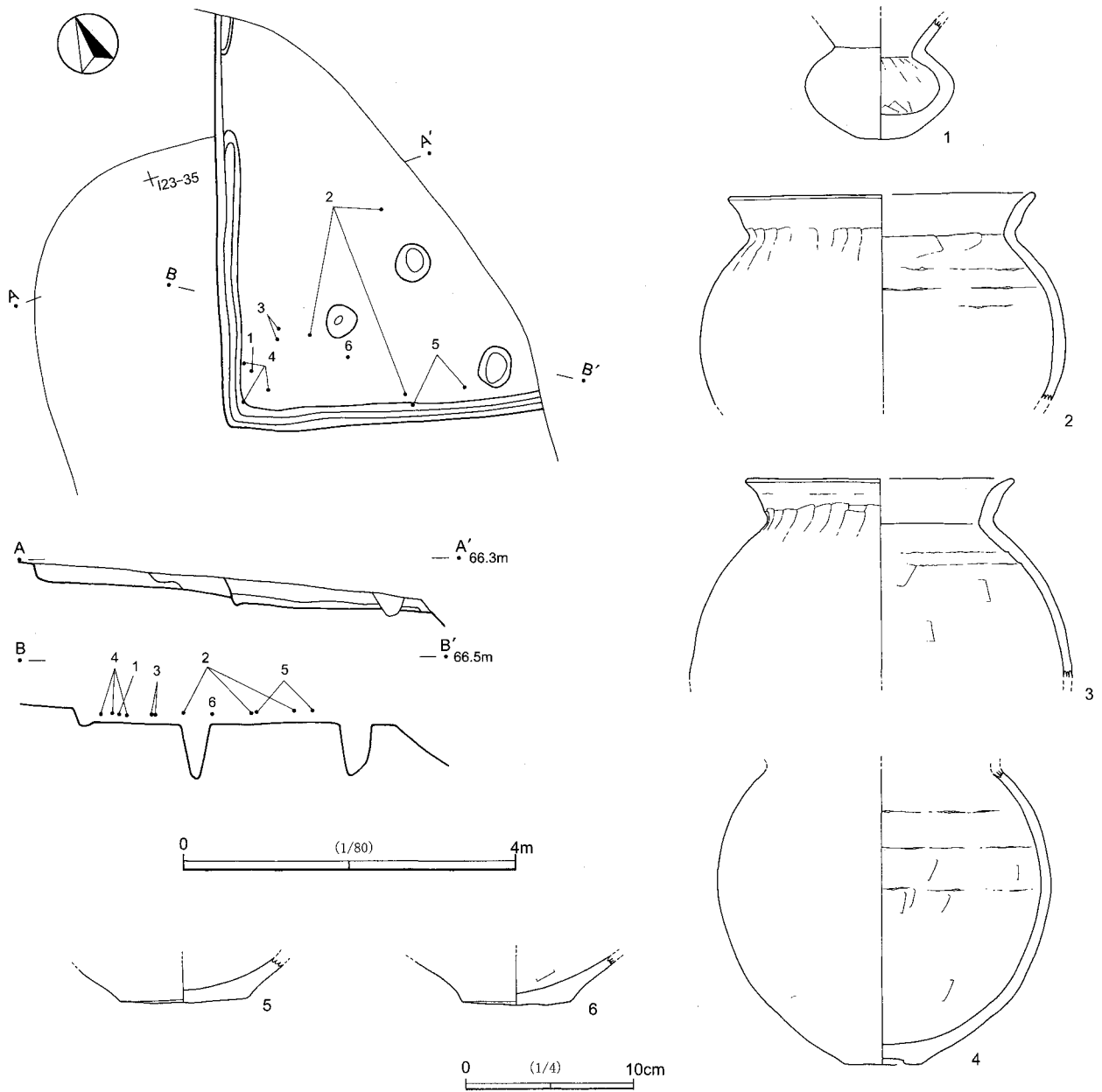
調査区I23-35付近に所在する。東側半分は8号墳の周溝により切られている。柱穴は1本検出された。南壁に近い位置にピットが存在するが、入り口に伴うものと思われる。炉はやや南寄りに認められる。貯蔵穴と思われる。



第202図 SI-063

出土遺物

1は小型の壺形土器である。磨滅が著しく調整不明瞭である。2から6までは甕形土器である。2・3は球形になると思われる胴部である。口縁部はくの字状に外反する。外面には煤の付着が見られる。4は口縁部を欠くやや長胴の甕である。5・6は甕形土器の底部のみの遺存である。



第203図 SI-068

#### 4. その他の土坑 (第204~206図, 図版53・54)

##### SK-004

調査区中央, K22-00グリッド付近に所在する。径0.8m×1.0mの楕円形を呈し、底面は平坦である。東側にやや傾斜し、確認面からの深さ0.1m程度と浅い。遺物の出土はなかった。

##### SK-009

調査区中央よりやや東寄りのK22-23グリッド付近に所在し、SI-002を切る。長軸1.7m、短軸0.85mを測る長方形を呈している。底面は平坦で、確認面からの深さ0.6mを測る。

## 出土遺物

土錘が1点出土している。

### SK-010

調査区の南端、J23-71グリッド付近に所在する。長軸1.8m、短軸1.0mを測る長方形を呈している。底面は平坦で、確認面からの深さ0.45mである。遺物の出土はなかった。

### SK-015

調査区中央、J22-06グリッド付近に所在する。SI-030を切り、径1.0m×0.8mの楕円形を呈する。遺物の出土はなかった。

### SK-017

調査区北側、J21-90グリッド付近に所在する。径3.3mほどの円形を呈し、確認面からの深さ3.5mとかなり深い。井戸状の形態である。

## 出土遺物

須恵器の壺形土器の頸部片であろう。突帯間に櫛描き波状文が施されている。

### SK-019・SK-020

縄文の大型住居SI-018の北部に接し、K22-42グリッド付近に所在する。SK-019は長軸1.2m、短軸0.7mで西端が若干低くなっているものの0.6m～0.7mの深さを測る。SK-020は長軸1.35m、短軸0.55mを測る。北端に0.85mの穴と南端に0.7mと0.75mの穴が存在している。遺物の出土はなかった。

### SK-021・SK-022

縄文時代の大型住居の中央に切り合って位置している。K22-73グリッド付近である。SK-021は長軸約1.5m、短軸0.7mを測る。底面は凸凹しており、1.0m～1.2mの深さである。SK-022は長軸1.3m、短軸約0.5mを測る。やはり底面は平坦ではなく確認面からの深さ0.85m～1.05mである。遺物の出土はなかった。

### SK-038

調査区の中央よりやや北に位置し、I21-75グリッド付近に所在する。SI-052の床面を切っている。直径0.85mのほぼ正円を呈している。底面は中央部が僅かに高くなっている。深さ約0.4mである。遺物の出土はなかった。

### SK-039 (図版98)

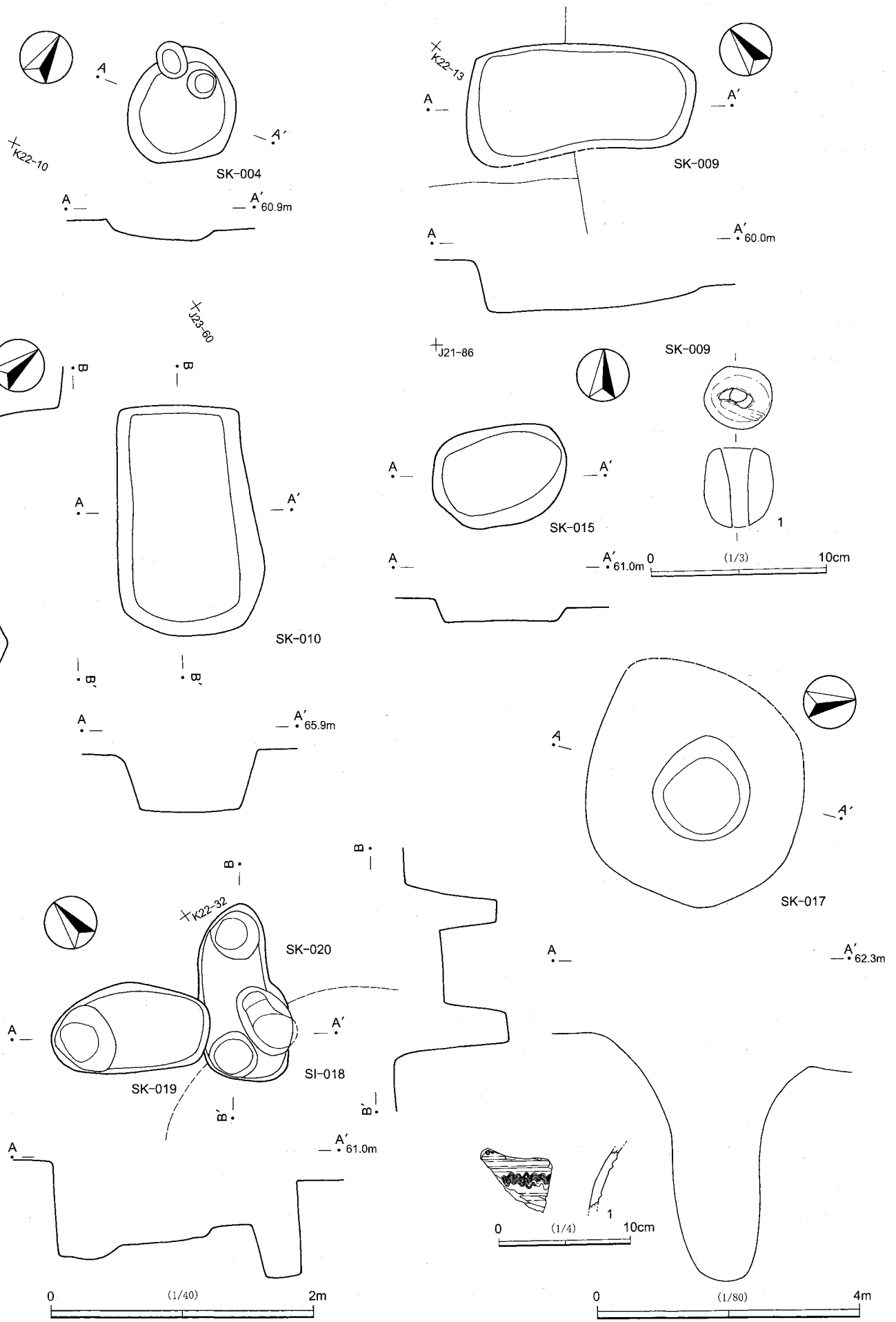
中央よりやや西に位置し、I22-10グリッド付近に所在する。底面はほぼ平坦で、深さ1.0m前後の長方形を呈している。墓坑の可能性も考えられる。

## 出土遺物

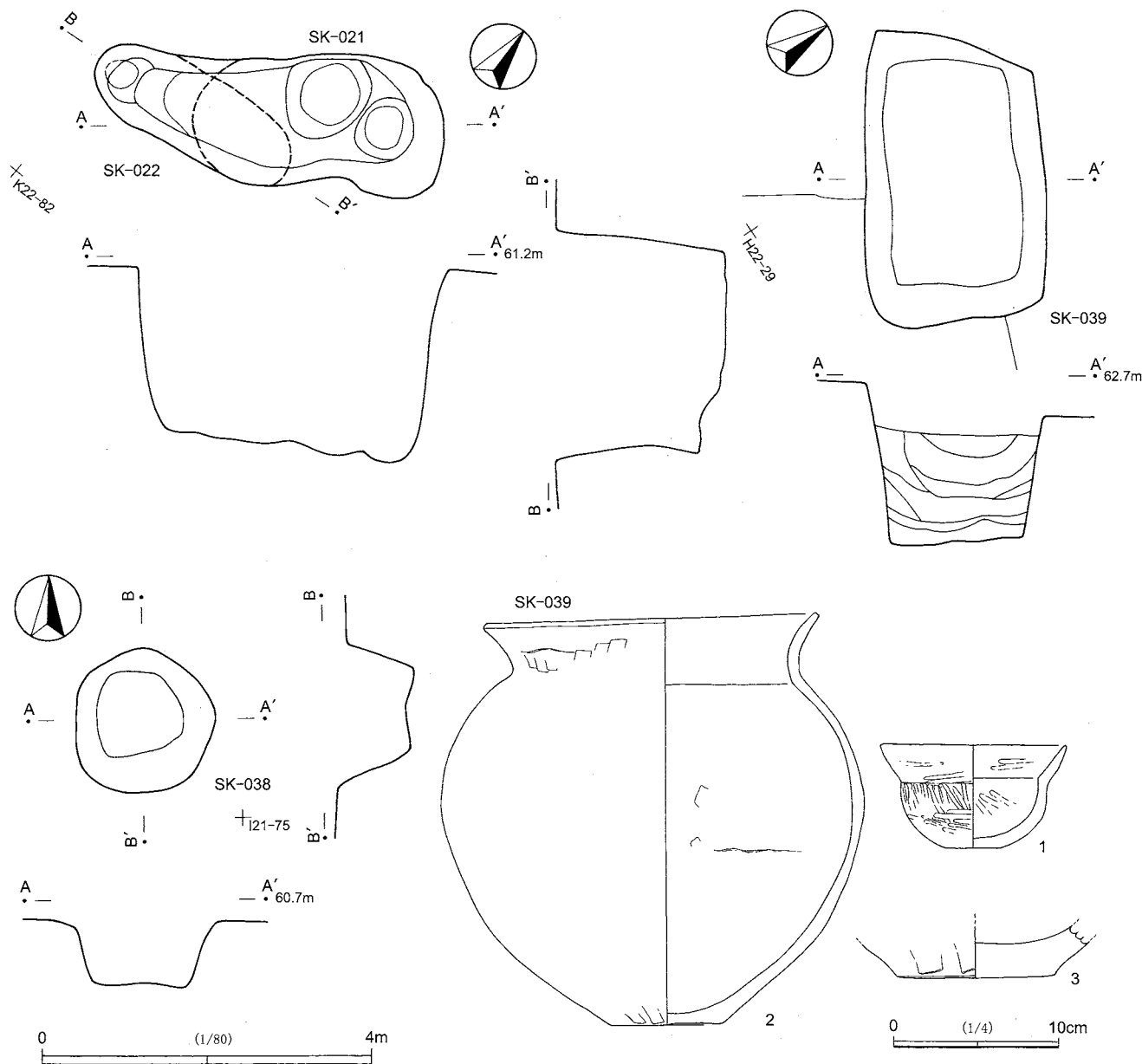
1は全体的に磨滅しているものの、ミガキが丁寧に施された埴である。2は甕で、口縁部がくの字状に外反する。口縁部から胴部にヘラナデが施されている。底部には木葉痕が若干残る。3は甕の底部である。

### SK-045

調査区西端、G23-55グリッド付近に所在する。弥生時代のSI-053を切っている。長軸2.9m、短軸1.7mの長方形を呈し、底面には長さ0.9m～1.2mの細長い溝状のピットが検出された。深さは底面から0.35m～0.5mである。底面の縁辺には、径0.1m～0.15m、深さ0.1m～0.2mの小ピットが規則的に並んで検出された。



第204図 その他の土坑 (1)



第205図 その他の土坑（2）

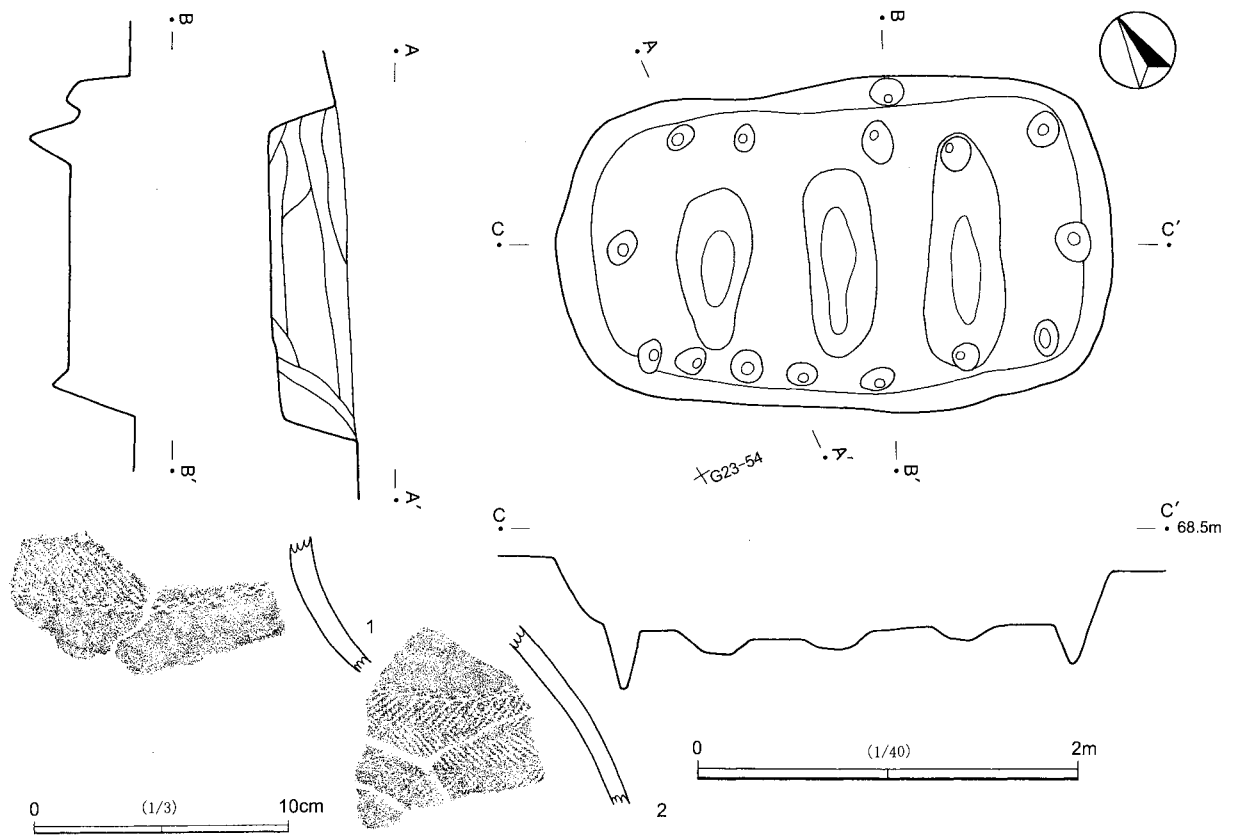
### 出土遺物

1・2とも弥生後期の壺形土器の胴部片である。1はRLの単節にS字状の結節文が二条施文されている。2はS字状結節文間に羽状縄文が施されている。遺構に伴うかどうかは不明である。

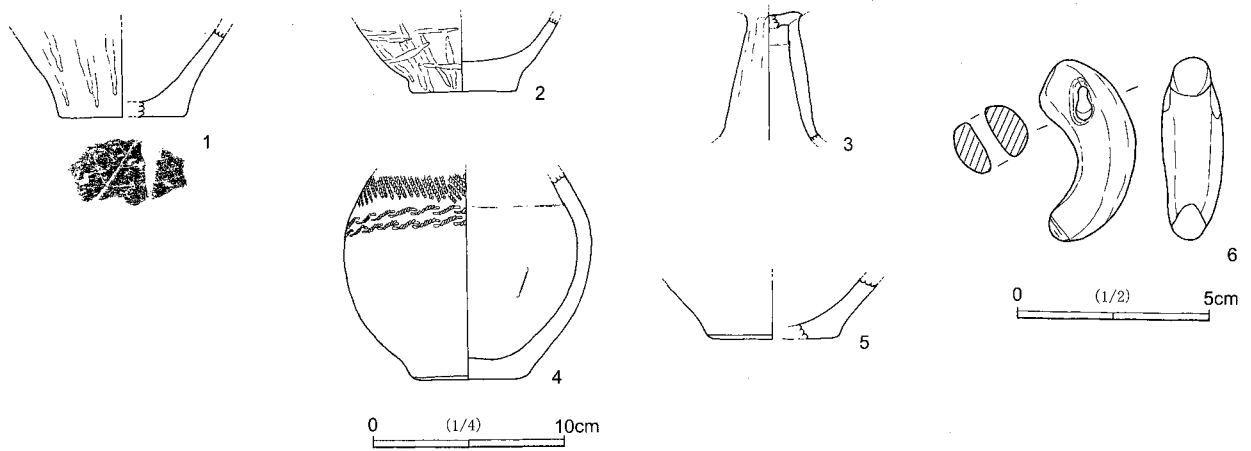
### 5. 溝出土遺物（第207図，図版101）

D区内で検出された溝は、近現代及び時期不明のものであるため遺構の個々については図示しない。

1・5は甕の底部，2は小形壺の底部であろうか。胴部下位のみ遺存である。3は高杯の脚部のみ遺存である。4は弥生の壺形土器の胴部上位から底部の遺存である。胴部上位にRLの単節，その直下にS字状回転結節文が施されている。6は滑石製の勾玉で，全長4.8cm，重さ24.7gを測る大形品である。孔は円形ではなく，頭部に向かって突出する形態である。



第206図 その他の土坑 (3)

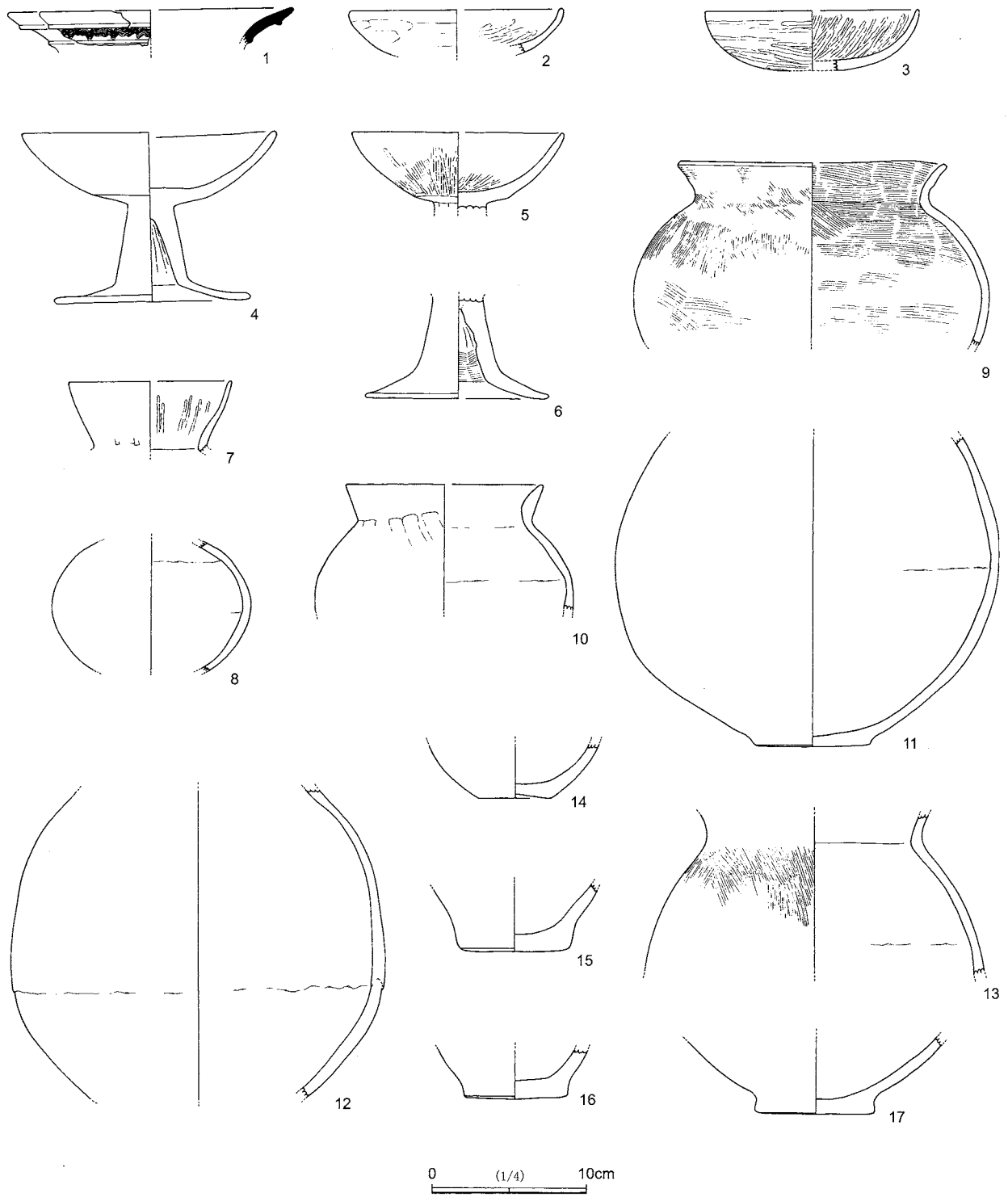


第207図 溝出土土器

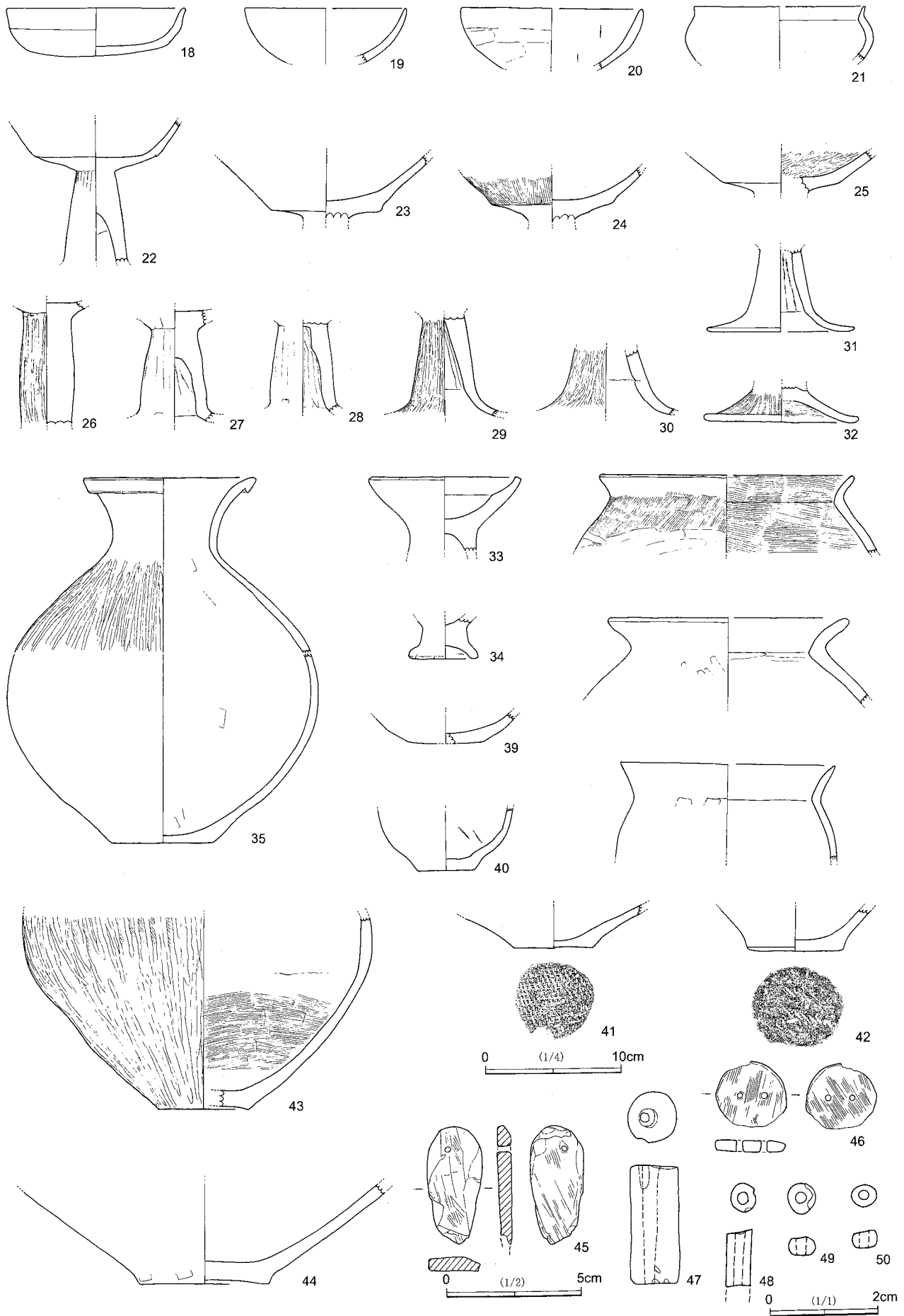
## 6. 遺構外出土遺物 (第208・209図, 図版101)

1は須恵器の壺の口縁部の極一部の残存である。折り返し口縁で直下に一段の波状文が施されている。2・3は杯形土器である。丸底で底部から口縁に向かって内湾しながら立ち上がり外方向を向いて収まる形状を呈している。内面には2は横方向の、3は縦方向のミガキが施されている。4～6は高杯形土器である。4の杯部は底部と口縁部の境に僅かながらの稜を有し、口縁部は上外方向にやや内湾しながら立ち上がる。脚部は柱状部は下方が開く円錐形を呈しており、裾部は外方向に大きく開く。内面には明確な稜が作り出されている。5は杯部のみの遺存である。4とほぼ同様な形状である。内外面縦方向のミガキ調整が僅かに残っている。6は脚部のみの遺存である。4の脚部と同様な形状であるが、裾部の開き方が緩やかである。7・8は埴である。7は口縁部のみの残存で、上外方向に開いていくが、中位に屈曲部分があり、やや上方を向くようになる。8は胴部のみの遺存である。球形状を呈していることがわかる。9～17は甕形土器である。9は口縁部から胴部の残存で、口縁部は短くくの字状に外反する。胴部は中位までの遺存であるが、全体に球形を呈すると思われる。内外面共にハケ目が確認される。内面には横方向の、外面には縦又は横方向調整が施されている。11はやや長胴の甕で口縁部を欠いている。底部が若干突出した形状を呈する。器面の調整はヘラナデであるが、粗雑なため凸凹感がある。12は胴部のみの遺存である。器面の荒れが著しく、調整不明である。胴部中位の内外面に明確な接合痕が残されている。下位を製作し、時間を若干おいて中位以上を積み上げたことが推測できる。13は口縁下位から胴部中位の残存である。口縁部は緩やかに外反していくようである。外面には縦方向のハケ目が僅かに確認できる。18～21は杯形土器である。18は丸底で底部が平らに広がり、体部は短く上外方向に立ち上がる。口縁部はやや外方向に開き境に僅かな稜を作り出している。21は体部上位に最大径があり、口縁部は外方向に摘み上げられている。22～33まで高杯形土器である。22の杯部は底部が外方向に伸び口縁部が大きく屈曲して外上方を向く。境には強い稜線が作り出されている。柱状部はやや下方の開く円錐状を呈している。裾部は大きく外方向に開く様相である。23～25は杯部のみの残存で、形状は22に類似している。26～32は脚部のみの残存である。26は筒状の柱状部である。27～31はほぼ同様な形状でやや下方の開く円錐形の柱状部である。31は円錐形の柱状部で裾部はスカート状に開く。32は裾部のみの残存で、筒状の柱状部に短くスカート状に大きく開く。35・41・44は壺形土器である。35は球形の胴部に緩やかに外反しながら立ち上がる頸部に折り返しの口縁がつく。胴部上位には縦方向のミガキ調整痕が確認できる。全体に施されていたと考えられるが、器面の荒れにより不明瞭である。36～39・42・43は甕形土器である。36～38は口縁部から胴部上位の残存である。36は短く外反する口縁部である。37はくの字状に強く外反する口縁部を持つ。43は胴部中位から底部にかけての残存である。内面胴部下位から底部には、横方向のハケ調整が施され、外面には丁寧に縦方向のミガキが施されている。41・42の底部外面には敷物痕が残されている。45・46は石製模造品である。45は剣形、46は有孔円盤である。47・48は石製の菅玉、49・50は白玉である。





第208図 遺構外出土遺物 (1)



第209图 遺構外出土遺物(2)

## 第4節 奈良・平安時代

### 1. 竪穴住居

SI-006 (第210図, 図版52・53)

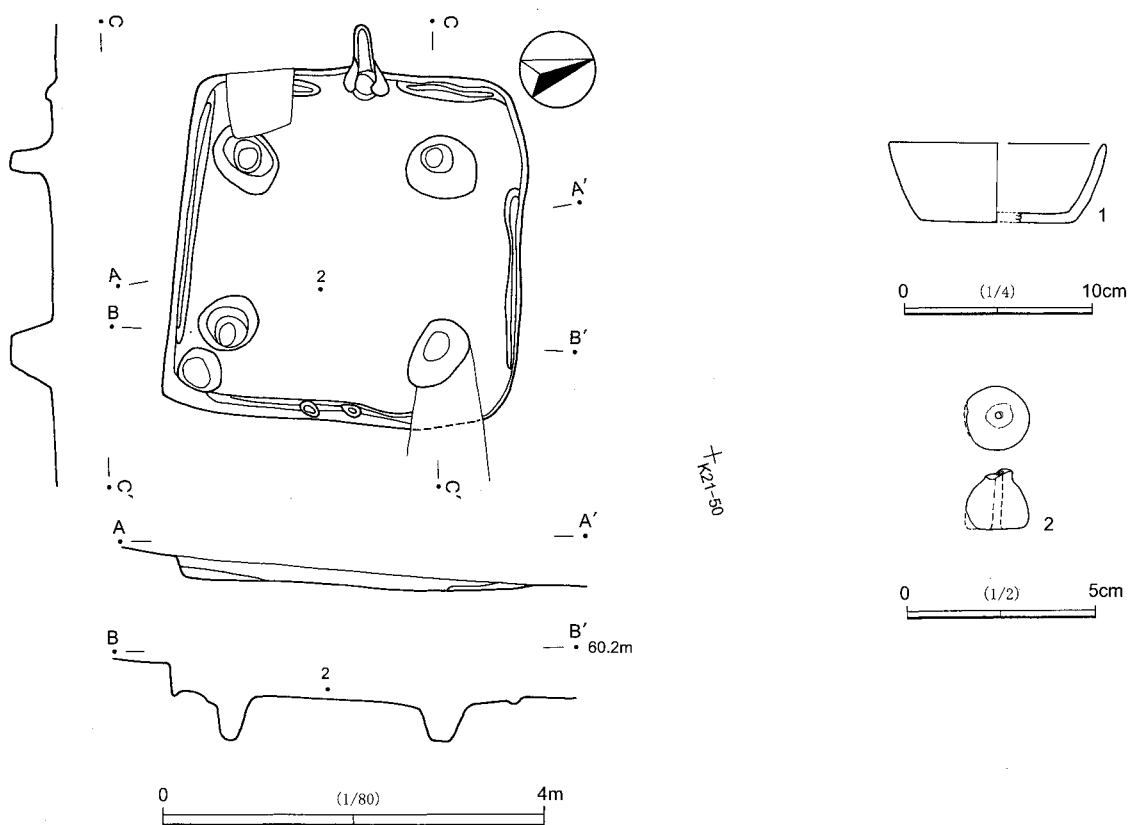
調査区中央部分よりやや北西側, J21-77グリッドに所在する。規模は長軸3.6m, 短軸3.6mを測り, ほぼ正方形を呈する。確認面からの深さはきわめて浅く, 北側の壁はほとんど確認されない。主軸方向はN-70.5°-Wを指し, 床面積は13.2㎡を測る。壁溝は幅10cm前後で全周するが, 部分的に切れている。床面はほぼ平坦で, 全体的に堅緻である。柱穴は対角線上に4本配置される。径0.6m前後, 深さ0.4m~0.5mと大きい掘り方である。抜き取りが行われたものと思われる。南東コーナーに接して掘り込まれたピットは貯蔵穴と想定される。カマドは西壁中央に位置する。遺存はあまり良くないが, 煙道部が壁より0.9mほど長く延びる。上総に特徴的なタイプのカマドである。

遺物の出土は少ない。

### 出土遺物

1は, 口径11.4cmを測る杯である。小片のため詳細は不明であるが, 全体に平滑に仕上げられ, ロクロ目はほとんど観察されない。2は土製品である。底面が平坦で, 上部は摘み状に突出し, 穿孔される。土錘の可能性が考えられる。

土師器の杯は, 8世紀後半段階の所産と思われる。

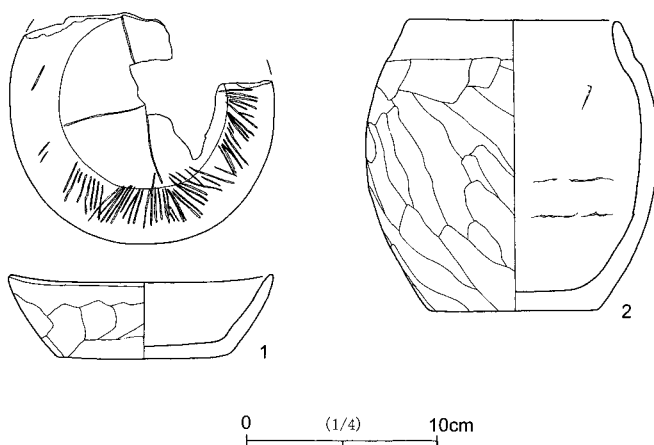


第210図 SI-006

## 2. 遺構外出土土器 (第211図, 図版101)

図示した2点の土器は、古墳時代のSI-011から出土しているが、時期が異なるため遺構外の扱いとした。ただ、組み合わせからして、蔵骨器となる可能性が高く、1は蓋、2は身となるであろう。本来は、住居の覆土中に容器を納める土壇が掘り込まれていたものと思われる。

1は土師器の杯で、口径13.9cm、器高4.0cmを測る。体部内面ミガキ、外面ヘラケズリ調整で、底部内面には「十」字形、体部内面には放射状の暗文がみられる。いわゆる上総型の杯である。8世紀中頃の所産であろう。2は完形の小形甕である。全体に丁寧な作りで、口径11.2cm、器高15.2cmを測る。内面に輪積み痕が部分的に観察される。



第211図 奈良時代出土土器

## 第4章 まとめ

### 第1節 縄文時代の集落について

今回の報告は、鹿島台遺跡のうち北端部A区と南端部D区を対象としている。その中間に当たるB区とC区については現在整理作業中であり、詳細な内容は不明である。しかしここからも縄文時代の遺構が検出されており、最終的にはその成果の報告を含めて遺跡全体の状況を検討する必要がある。今回はわかる範囲だけでまとめた、言うなれば中間報告の域を出るものではないが、その中で縄文時代の大きな状況について、簡単にまとめたい。

#### 1. 早期

早期の遺構は覆土に多量の礫を含む土坑が2基、いわゆる陥し穴が2基である。陥し穴1基がD区に存在する以外は、全てA区から検出されている。A区は弥生時代の方形周溝墓や古墳などが密集しており、縄文早期の遺構はこれらによって多くが破壊された可能性が強い。

炉穴や土坑の覆土、あるいは遺構としての体裁はなさないものの包含層中に礫が集積される状況は、縄文時代早期に多く認められる。礫の多くは熱を受けており、それが原因で破損していると思われる例も少なくない。君津郡域を中心とした房総半島南部におけるこのような礫群を集成した研究（浜崎 1993）によると、時期は撚糸文期から条痕文期に至る早期全般にわたるが、特に夏島式以降の撚糸文期後半に出現頻度が高いようである。出土状況としては、炉穴や土坑などの遺構覆土中の出土、包含層中での出土などに分類されるが、遺構覆土の出土例は意外に少なく、包含層中出土が多いとされている。ただし、炉穴や焼土跡に近接し、相互に関連があることをうかがわせる検出例も多い。礫群の機能として、熱した礫によって調理を行うための施設であるという点では、衆目一致をみていると思われるが、礫群が出土した遺構ないし地点が調理の場であったかどうかについては、問題が残るようである。炉穴の覆土や焼土跡から出土することももちろんあるが、土坑覆土や包含層中から、焼土などを伴わずに出土することも少なくない。

先の浜崎氏の分析では、礫群の形成に際しては、礫の採取、加熱、機能（調理）、再使用、廃棄という行為が想定され、そうした行為が一連の工程として遺跡内で繰り返されたことが推測されている。残された礫群は、最終的に廃棄・遺棄された姿であり、遺跡内の人間の行為の反映ではあっても、行為の場を直接示しているわけではない。鹿島台遺跡で検出された2基の集石土坑の場合、本文中で述べたように礫はいずれも土坑覆土中から流れ込みのような状況で出土しており、覆土中に焼土などは含まれていない。同じく本文中で類似例としてあげた木更津市久野遺跡では、礫が100点以上伴う集石土坑では土坑床面に据えた状態で出土しており、対して100点に満たない場合は覆土上層に遺棄されたような状況を呈していて、明らかな対照をなす2類型が確認されている。鹿島台遺跡は遺棄された状態であり、対して久野遺跡の大量出土例は、実際使用された状況がそのまま残されたと考えるのが妥当であろう。

鹿島台遺跡では陥し穴が2基検出されている。いわゆる陥し穴とされている遺構の時期については、草創期に出現し早期に盛行するという考え方が定説になっているようであるが、実際遺物の出土によって時期が判定できることは少ない。今回の事例ではいずれも土器が出土しており、直接遺構の時期を示すとは限らないとはいえ、重要な事例ではあろう。D区で検出されたSK-014は長さに比して幅が極めて狭い、いわゆるTピットと呼ばれるものである。出土している撚糸文土器は、覆土一括で出土位置は不明であるこ

と、小片であることから、遺構は燃糸文期よりある程度時間が隔たってから構築されたと考えられる。A区で検出されたSK-061は床面が平坦で長方形を呈し、中心に刺突具を据える穴が掘り込まれているもので、茅山下層式が出土している。この土器のかなりの部分は上層の方形周溝墓の覆土や包含層から出土しているが、それでも大きな破片の1点が覆土最下層から出土していることが明らかである。土器が廃棄されてからそれほど時間を隔てないうちに陥穴が構築されたことは間違いない。

関東地方の「溝型陥し穴」を分析した研究によると（中村 1998）、早期前半に構築される溝型陥穴は、長軸方向にオーバーハングするA型とされるものが草創期後半に出現し、早期中葉にかけて盛行する。当初は長軸2.5mを越す大型のものが多いが、やがて2.0m程度の小型のものが多くなるようである。オーバーハングがないB型も同様の傾向を示すが、逆茂木を装備しない点で共通する。一方で、坑底中央に小ピット（逆茂木痕？）がある「楕円形」陥穴が早期中葉に出現し、早期後葉に盛行するとしている。そして楕円形陥穴から逆茂木が導入された結果、逆茂木痕がある溝型陥穴（D型）が前期中葉以降中期にかけて出現・盛行するとしている。その分析を当てはめると、SK-061はいわゆる楕円形陥穴であり、早期後葉とする考え方と一致する。その一方でSK-014は、前期から中期に位置づけられることになる。確かに中期には集落も営まれ、前期の土器もグリッドから出土しているが、遺構からは燃糸文土器が出土しているという事実がある。遺構と遺物に時間差があると先述したが、では即座に前期ないしは中期と認定していいかどうかは別問題であり、慎重に判断する必要がある。今後は事例を積み重ね、分析を進める必要があるということになる。

## 2. 中期

中期の遺構は、竪穴住居跡14軒である。そのうち2軒がA区、12軒がD区から検出されている。A区の住居跡は早期と同じく弥生時代の方形周溝墓や古墳などによって破壊されており、さらに多くの遺構が失われたと思われるが、D区からは比較的まとまった遺構群が検出された。ここではD区の遺構群を中心に、鹿島台遺跡の縄文中期の状況を概観し、今後行われるB区・C区の整理作業への展望としたい。

### (1) 中期土器の分類

検出された遺構の時期を比定するにあたり、出土土器の分類を簡単に行っておく。中期の土器は後半の加曽利E式を中心とする。加曽利E式土器に関しては、これまで実に多種多様な編年観や細分案が提示されており、そこに至るまでの学史的経緯も実に重厚長大というべきものがある（戸田 1999）。現在ではそれらを統合するような試みはもはやほとんどなされず、それぞれの時期細分と、各編年同士の時期対比を追求する方向に重きが置かれているように思われる。今のところまとまった成果としては、神奈川考古同人会（神奈川考古同人会 1980、以下東京・神奈川編年と略す）によるもの、および谷井他（谷井他 1982、以下埼玉編年と略す）によるものが挙げられよう（注1）。千葉県においては、残念ながらこうした体系的な編年の構築は未だなされておらず、これら東京・神奈川編年や埼玉編年の援用に頼らざるを得ない状況であるが、一部ではそれらに準拠しながら独自の編年構築も試みられている（田川・小川 1982、山田他 1998）。今回はこうした成果に基づき、鹿島台遺跡の出土遺物の時期区分について、簡単にまとめておきたいと思う。

まず、中期の出土土器について、以下の様に分類しておく。

深鉢A 加曽利E式のキャリパー形を呈する深鉢。

深鉢B 加曽利E式のうち、口縁部が無文となる円筒形もしくはラッパ形を呈する深鉢。文様構成によっ

て便宜上独立した分類名を与えたが、後述するように深鉢Aの影響が強いものと、深鉢Dの影響が強いものがある。この種類は加曾利E式の初頭に出現するようで、客体的ではあるが一定の割合を占める土器群とされる（谷井他 1982）。県内の中期の大集落においても量的には少数派にとどまる事例が多いが、鹿島台遺跡では全体量に比してまとまった出土がみられた。

深鉢C いわゆる連弧文土器。

深鉢D 曾利式もしくはその影響が強い深鉢。頸部の強いくびれや大きく外反する口縁、頸部の貼付細隆線文や重弧文などを特徴とする。時期により影響の度合いが異なる。

その他 浅鉢、有孔罎付土器など。

分類に関しては、あまりに細かく区別するのは避け、器形・施文技法の双方をあわせてすぐに特徴が把握できる範囲でまとめるようにした。他地方からの影響下にある深鉢CやDなどは、本来あるべきセットが全てそろっている可能性は低く、今回の資料だけで系統の追うことが難しい器形や施文技法まで、あえて区分する必要性が低いと思われたからである。本来曾利式は多種多様な器形や施文技法を併せ持つのが特徴であるが、今回出土したものはその中では限定的である。そうした理由から一括扱いとして差し支えないと判断した。

## （2）仮設時期区分と出土遺物の特徴

第212～214図は、従来の成果をもとに前項の分類ごとに整理した、仮設時期区分である。仮設とした理由は、最初に述べたとおり今回はA区・D区の成果だけをもとに時期区分を行ったからで、整理中のB区・C区報告時には改めて時期設定を行う必要があるのは言うまでもない。横の軸に前項で説明した器種分類を配した。全ての器種が全時期にわたり存続しているわけではないので、消長に応じて適宜加えたり外したりしている。また、同じ遺構から出土したものがなるべく横並びでそろえるようにした。なお、時期区分の軸に据えたのは深鉢Aである。深鉢Dは、深鉢Aとの供伴は確実であるが、深鉢D同士の個別の時期については差がある可能性もある。今回は供伴の事実関係を押さえておくことが重要であると考えたので、そのあたりはあまり厳密に考慮せず配置した。

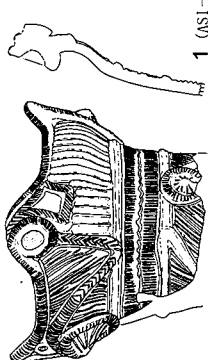
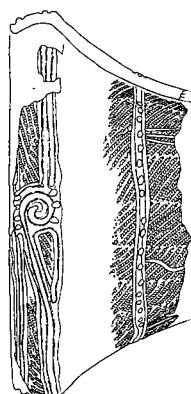
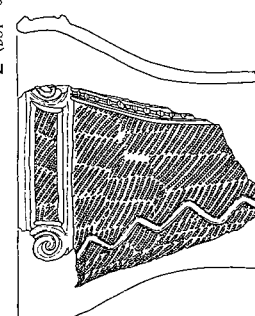
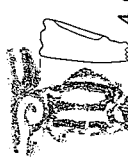
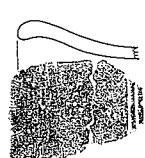
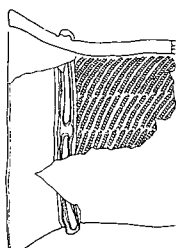

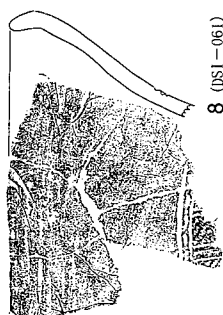
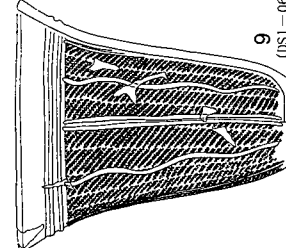

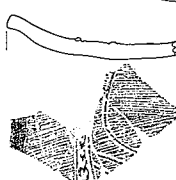
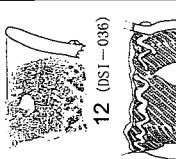


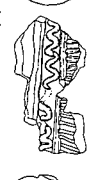
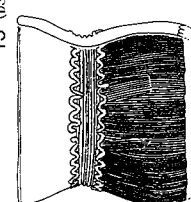

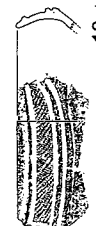
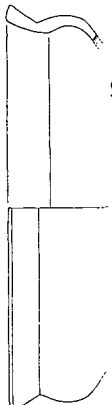
仮I期は、唯一中期前半に属すると考えられるものである。A区から検出されたSI-001住居跡に埋設されていた。

実測個体が1点しかいないため、深鉢という一分類しか行わなかった。この土器がこの地で出土したという事実は極めて重要な問題を提起していると思われるが、残念ながら同時期はおろか、直接前後すると思われる資料もグリッド出土を含め極めて少なく、系統をたどることは難しい。もちろん構成の攪乱や削平などで失われたものもあろうが、それを考慮しても孤立した存在と言える。

仮II期以降は加曾利E式にあたる。それも初頭に位置づけられるものはほとんどなく、多くは胴部の磨消縄文が成立する前後の時期に集中する。

仮II期は、加曾利E式のキャリパー形深鉢において頸部の無文帯が消失し、胴部の磨消懸垂文が成立する前の段階に位置づけられるものである。埼玉編年の第XI期、有吉北貝塚の第9群に相当する。深鉢Aは先行する段階の影響を残すものが多い。2は、頸部無文帯がまさに消失しようとしている状況を示している。24の口縁部文様帯は、やはり先行する段階に多用されるモチーフを想起させる。深鉢Bは大きく2種類に分けられる。5・8・30は口縁端部が内傾するもので、深鉢Aの器形の影響をうかがわせる。口縁部と胴部は横走る沈線によって区画され、胴部文様帯も深鉢Aに極めて類似する。6・7・9は口縁

深鉢

<p>鹿島台縄文中期 仮Ⅰ期</p>  <p>1 (AS1-001)</p>				<p>その他</p>
<p>鹿島台縄文中期 仮Ⅱ期</p>	<p>深鉢 A</p>  <p>2 (DS1-036)</p>  <p>3 (DS1-036)</p>  <p>4 (DS1-061)</p>	<p>深鉢 B</p>  <p>5 (AS1-002)</p>  <p>6 (DS1-036)</p>  <p>7 (DS1-036)</p>  <p>8 (DS1-061)</p>  <p>9 (DS1-061)</p>	<p>深鉢 D</p>  <p>10 (AS1-002)</p>  <p>11 (DS1-036)</p>  <p>12 (DS1-036)</p>  <p>13 (DS1-036)</p>  <p>14 (DS1-036)</p>  <p>15 (DS1-036)</p>	 <p>16 (DS1-061)</p>  <p>17 (DS1-061)</p>  <p>18 (DS1-061)</p>  <p>19 (DS1-061)</p>

第212図 縄文中期居住跡主要出土土器及び仮設時期(1)



	深鉢 A	深鉢 B	深鉢 D	その他
鹿島台縄文中期仮Ⅱ期	<p>20 (DSI-014) 21 (DSI-014) 22 (DSI-014) 23 (DSI-014) 24 (DSI-017) 25 (DSI-017)</p>	<p>30 (DSI-014)</p>	<p>34 (DSI-014) 35 (DSI-014) 36 (DSI-014) 37 (DSI-017) 38 (DSI-017) 39 (DSI-033) 40 (DSI-033)</p>	<p>49 (DSI-014) 50 (DSI-014)</p>
鹿島台縄文中期仮Ⅲa期	<p>26 (DSI-054) 27 (DSI-054) 28 (DSI-038)</p>	<p>深鉢 C</p> <p>31 (DSI-009) 32 (DSI-038) 33 (DSI-038)</p>	<p>41 (DSI-054) 42 (DSI-054) 43 (DSI-054) 44 (DSI-009) 45 (DSI-009) 46 (DSI-038) 47 (DSI-038) 48 (DSI-038)</p>	<p>51 (DSI-038)</p>

第213図 縄文中期住居跡主要出土器及び仮設時期(2)

	深鉢 A	深鉢 C	深鉢 D	その他
鹿島台縄文中期仮Ⅲ a 期	<p>52 (DSI-029) 53 (DSI-029) 54 (DSI-029) 55 (DSI-029)</p>	<p>62 (DSI-029) 63 (DSI-029) 64 (DSI-029) 65 (DSI-029)</p>	<p>66 (DSI-029) 67 (DSI-029) 68 (DSI-029) 69 (DSI-029)</p>	
鹿島台縄文中期仮Ⅲ b 期	<p>56 (DSI-037) 57 (DSI-037) 58 (DSI-037) 59 (DSI-047) 60 (DSI-047)</p>	<p>61 (DSI-047) 63 (DSI-029)</p>	<p>70 (DSI-037) 71 (DSI-037) 72 (DSI-040)</p>	<p>73 (DSI-037)</p>

第214図 縄文中期住居跡主要出土土器及び仮設時期 (3)

部が直線状に外反するもので、口縁部と胴部は横走する隆帯によって区画される。平らに削ぎ落とされた口唇断面形状などは、深鉢Dの影響をうかがわせる。ただし胴部文様体は、やはり深鉢Aに類似する。曾利式と加曾利E式との線引きに関してはいろいろ意見があろうが、仮Ⅱ期の深鉢Dは曾利式の特徴をかなりよく保持していることは間違いなからう。特に14は、頸部の強いくびれや斜格子状の貼付細隆線文など、曾利Ⅱ式の特徴をよく示している。34は器形や頸部文様を根拠としてここに置いたが、胴部文様は深鉢Aに類似する。

この時期に該当する遺構は、D区のSI-014、SI-017、SI-033、SI-036、SI-061の5軒の竪穴住居跡である。

仮Ⅲ期は、加曾利E式のキャリパー形深鉢において、胴部磨消懸垂文が成立した後に位置づけられるものである。山内編年（山内 1940）においては、加曾利E式を「古い部分」と「新しい部分」に分ける画期が磨消縄文の出現であるが、仮Ⅱ期と仮Ⅲ期はまさにそこで区分される。さらに仮Ⅲ期は新旧2段階に分けられると考え、仮Ⅲa期と仮Ⅲb期に区分した。仮Ⅲa期は連弧文土器が盛行し多数派となるのに対し、キャリパー形深鉢は少数にとどまる。仮Ⅲb期になると連弧文土器が変容、衰退するのに対し、キャリパー形深鉢が盛行するとともに規格化、画一化が進む段階である。仮Ⅲa期は埼玉編年の第ⅩⅡa期、有吉北貝塚の第10群、仮Ⅲb期は埼玉編年の第ⅩⅡb期、有吉北貝塚の第11群にそれぞれ相当する。

仮Ⅲa期の深鉢Aは数量的に乏しい。26のように胴部に沈線が狭い間隔で3本垂下され、すき間を磨り消している状況は胴部磨消懸垂文成立直後の様相を示している。29は口縁部文様帯が存在しないもので、深鉢Bの系統を引き、かつ中期末まで継続していく可能性がある。器形が直線状に開くことや、口縁部に沈線区画がみられないことから古相を呈していると考え、仮Ⅲa期とみなした。連弧文土器32・33は51の炉土器と一括で出土しており、同時期とみなしうる。62～65はSI-029住居跡一括出土あるが、それぞれ特徴が微妙に異なる。まず器形は、62がキャリパー形の深鉢Aの系統上に位置づけられるのに対し、63は口縁が直線状に開く深鉢Dとのつながりをうかがわせる。文様も62は口唇直下に交互刺突を配するのに対し、63は3本沈線を巡らせている。その一方で、同じく3本沈線を巡らせる64はキャリパー形を呈している。この例だけで一概には言えないが、西関東を本拠にするといわれる連弧文土器が、在地の加曾利E式やさらに西方の曾利式などと融合して、複雑な変化を見せている様子が垣間見える。深鉢Dは破片資料がほとんどとなり、いわゆる重弧文土器と頸部隆帯区画が主体となる。

ここに該当する遺構は、D区のSI-009、SI-029、SI-038、SI-054の4軒の竪穴住居跡である。

仮Ⅲb期は深鉢Aが圧倒的多数を占め、深鉢Cは衰退を乗り越えてほとんど消滅してしまう。ただし、未掲載の破片資料にどれほどの量が含まれていたかは不明である。深鉢Aは胴部磨消懸垂文が安定・拡大化し、口縁部文様帯は円文が多くなるほか、隆帯に代わり沈線が多用されるなど、より後出的な要素が大きくなる。56・58・61では口縁部と胴部の境もかなり曖昧になっている。深鉢Dはほぼ重弧文土器のみとなり、施文法も粗雑になっている。在地化が一層進んだと言え、曾利式とはもはや呼べない状況である。ここに該当する遺構は、D区のSI-037、SI-040、SI-047の3軒の竪穴住居跡で、鹿島台遺跡A・D区遺構群の終末にあたる。

この後、埼玉編年の第ⅩⅢ期、有吉北貝塚の第12群は、横位連繫弧線文の出現などによって定義付けられ（加納 1989）、鹿島台遺跡A・D区の後もその段階につながるものと考えられる。ただし、遺構はもちろんグリッドからもほとんど遺物の出土はなくなる。

これらの資料が埼玉編年や有吉北貝塚での分類のどこに対比されるか、さらに山内編年との対比についても触れたが、もう一つ付け加えるなら、岡本・戸沢編年（岡本、戸沢 1965）の、加曾利EⅡ式を中心にするといえる。ただし、当然のことながら各個体を個別に検討した場合、より古い要素や新しい要素を内包しており、より古い段階もしくは新しい段階に置く考え方もある。各器種別の出土構成比率について、他遺跡も含めた統計的な分析を行っていないため断定的なことは言えないが、典型的な加曾利EⅡ式というべき深鉢Aは、北部を中心とした県内他地域に比べ相対比率は低く、逆に千葉においては搬入もしくはその模倣と位置づけられる深鉢Dは、相対比率が高くなる傾向にあるとみられる。特に仮Ⅱ期段階においては双方ともそれぞれが本来有している特徴をかなり忠実に表しており、他型式からの影響は少ないが、それらが同一の竪穴住居跡から出土しているという現象も観察される。両者の中間的様相をもつ深鉢Bは、どこが出自にあたるか追求できていないため断定できないが、阿玉台式の系譜で捉えるのは難しいと思われる、やはり西関東や中部地方の系譜から追求すべきであろう。各地方における出土状況や供伴土器など解明すべき点も多く、今後さらに検討する必要がある。同じく西関東を本拠にするとされる深鉢Cの連弧文土器は、県内では小規模な遺跡でもまとまった出土がみられるが、鹿島台遺跡では逆に極めて限定的な出土にとどまっている。

以上、土器型式にして一型式分しかない時間においても、在地の土器と他地方からの影響を受けた土器とが混在し、影響を与え合いつつ変遷していく状況が読みとれる。こうした状況をどの程度人の動きと関連づけられるかどうかは今後検討すべき課題であるが、東京湾をはさんで西関東に面した遺跡の立地条件が背景にあるのは間違いない。

なお、前項で述べたとおり千葉県における該期の編年研究は未だ途上である。今回の分類案は極めて不完全なものであり、かつ、君津地域を中心とする南房総の土器の様相を網羅するにも至っていない代物であるが、ほんの少しでも資料の蓄積と今後の分析の一助になればと考えている。

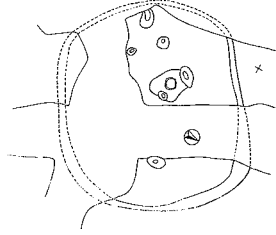
### （3）竪穴住居跡について

竪穴住居跡の分析を行う場合、本来ならば検出されたピットの大きさや深さ、覆土の堆積状況や遺物の出土状況、床面積などを詳細に比較検討する必要があるが、今回は時間の制約から全くできなかった。いささか消極的ではあるが、最低でも住居跡を一瞥できるような資料があればと考えて作成したのが第215図である。

はじめに、本項で用いる分類について、基本的認識を示しておく。居住のための施設は、土器以上に製作効率や使用時の機能性が重視される。そういった点を追求していくと、おそらくほとんど同じような構造のものでできあがると考えざるを得ない。もちろん、気象や立地条件などに対応した特殊仕様が存在することはあり得る。しかし、仮に目的・機能が同一であるにもかかわらず、同時期のムラの中に全く異なる仕様の住居が供伴するとなると、全く異なる建築法をムラの成員が理解し実践する必要があるわけで、さらにその折衷型式が存在するといった事態は想像し難い。遺構の仕様は機能によって規定されるものであり、それが通常の生活に密接に結びつけばつくほど、製作のプロセスは単純化・汎用化されると考えられる。すなわち、形状や使用状況、付属施設、遺物の出土状況などの違いは、使われた目的によって異なってくるものであると考えるべきであろう。ここではそういった前提に立ち、形状や使用状況が著しく異なるものは、おそらく機能が異なっていたであろうという想定をたてて検討することとした。従って、時期や遺跡が異なればそれぞれに対応した分類が生み出されるものであり、そうした意味でこの分類も今回の

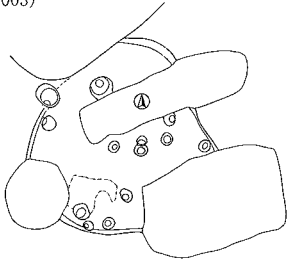
中期仮Ⅰ期

(ASI-001)

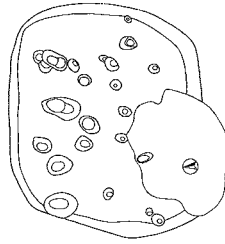


中期仮Ⅱ期

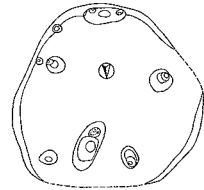
(DSI-003)



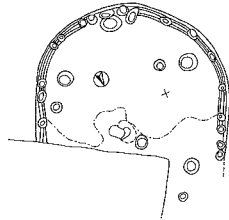
(DSI-014)



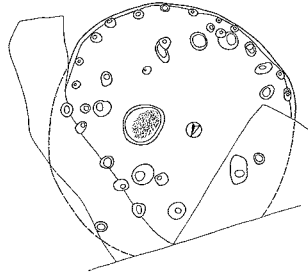
(DSI-017)



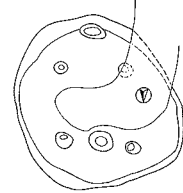
(DSI-033)



(DSI-061)

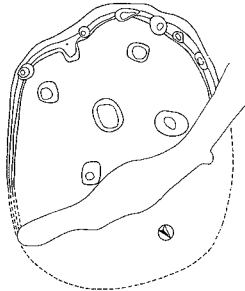


(DSI-036)

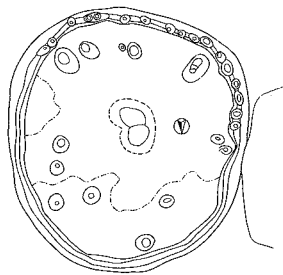


中期仮Ⅲa期

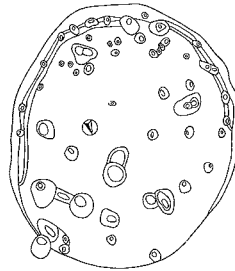
(DSI-009)



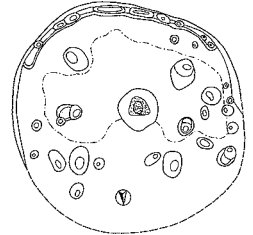
(DSI-029)



(DSI-038)

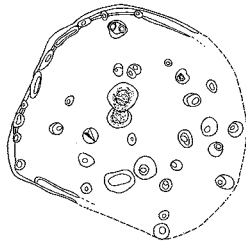


(DSI-054)

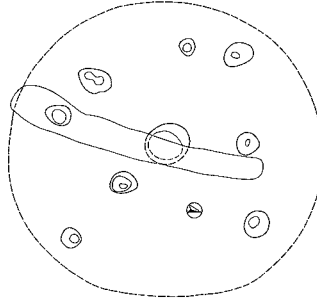


中期仮Ⅲb期

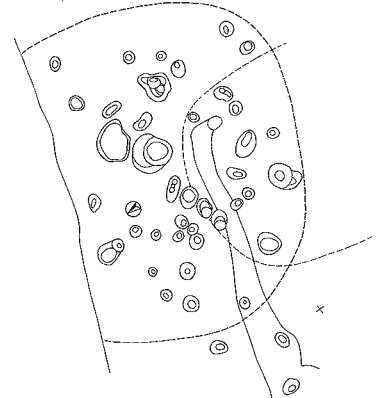
(DSI-037)



(DSI-040)



(DSI-047)



0 (1/160) 4m

第215図 縄文中期竪穴住居跡

み通用するものであると認識している（もちろん、同じ時期の近接した地域内における系統を見出すことは可能であろうが）。今後は、そうした諸属性と機能を結びつけた竪穴住居跡をはじめとする遺構の型式（ないしは形式）論を構築する必要がある。

中期仮Ⅰ期に相当するA区SI-001は破壊が著しく全容をうかがうのは難しいが、柱穴や壁ははっきりせず、中央から検出された埋設土器も、いわゆる炉体土器のように恒常的に熱を受けた痕跡はみられない。調査時の記録では覆土下層を掘り込んで埋設されているとあり、竪穴より時期が下る可能性もある。埋設土器は千葉では全くの異系統というべきもので、そのような土器を埋設するという行為に、この住居跡の特殊な性格を読みとることも解釈としては可能であろう。総じてこの住居跡は、後述するB類的な要素が強いが、断定はできない。いずれにしても通常の居住施設としては疑問が多い。

中期仮Ⅱ期に相当する6軒の住居跡は、大きく2種類に分けられる。一つは主軸もしくは横軸が5 m程度かそれ以上で、支柱穴以外に補助的に掘られたと思われる柱穴（壁柱穴を含む）が残存し、炉の使用頻度が高いもので、建て替え痕跡が認められる支柱穴も確認できるほか、床面硬化も認められ、居住施設として認識されるものである。この種類をここでは便宜的にA類と呼んでおく。D区SI-014、SI-033、SI-061が該当する。もう1種類は、主軸もしくは横軸が4 m程度と小さく、支柱穴以外のピットはほとんどなく、炉も使用痕跡が極めて少ないもので、床面硬化もほとんどみられず、居住施設としては疑問が多い。この種類をここではB類とする。SI-017、SI-036が該当する。SI-036は住居の大きさには不釣り合いな大形深鉢の口縁部を埋設しているが、炉としての使用痕跡はほとんどない。このような状況を見る限り、居住以外の用途を見出すのが妥当と考えられる。考えられる用途としては、収納や埋葬などがあるだろうが、決定的な証拠は現在のところ見いだせない。あるいは狩猟の際のキャンプのような機能も想定されようが、SI-036に比べ使用痕跡を残すSI-017は、そのようなものかもしれない。なお、A区SI-003は攪乱が大きく判断が難しいが、A類に分類されると思われる。

中期仮Ⅲ a 期に相当する4軒の住居跡は、いずれもA類に相当する。平面図を見る限りどれもほぼ同じ規模であり、ある種の規格性もうかがえる。周溝と壁柱穴が一般化し、支柱穴も建て替え痕跡が認められる。床面硬化もしっかりしており、居住施設とみなすのに問題はないと思われる。中期仮Ⅲ b 期の3軒は、遺存状況が悪く推測混じりとなるが、いずれもA類と判断される。そして中期仮Ⅲ期にはB類がみられなくなるのも特徴であるといえる。

以上をまとめると、D区では中期仮Ⅱ期から仮Ⅲ期にかけて、規模や形状がほぼ同一の竪穴住居跡が連続して構築されており、継続性をもって維持されたムラの姿を示していると考えられる。それと同時に、仕様が大きく異なるB類とした住居跡が存在する。これが居住施設とは考えにくいと先述したが、ではどのような施設であったか検討する必要がある。改めて調査区をみると、いわゆる貯蔵穴、墓壙などといった施設は検出されていないことに気づく。大形の環状集落ではごく当たり前に検出される、竪穴住居以外の貯蔵穴、墓壙などといった施設が、鹿島台遺跡のように小規模であるが継続性がある集落で存在していても当然と思われるが、ではそれが必ずしも環状集落でみられるような規模・形状を呈する必要があるかということ、そうとは限らないと思われる。そうした施設はムラの事情や規模に合わせて規模や形状が決められ、作られたとみるべきであろう。鹿島台遺跡の場合、限られた土地を有効活用するために、ある程度汎用性のある竪穴住居の規格で作ったのではないかと考えられる。ムラで行われる作業や行事などによって柔軟な利用が行われたであろうし、季節によって用途も変わったかもしれない。多目的な利用のために

は、竪穴住居という規格が適していたのではないかと推測される。また、このような「住居」が作られるのは中期仮Ⅱ期に限られているが、仮Ⅲ期以降は古い時期の廃屋がその役割を果たした可能性が強い。その最終的な姿は、別項で述べる石器製作の痕跡であろうと考えられる。もちろん、「廃屋墓」になった可能性も考えられよう。いずれにしてもこうしたやり方は、この地にムラを構築し維持していくために考えた方法であったのだろう。

#### (4) 遺構群の変遷

調査区内の立地をみると、中期仮Ⅰ期は台地先端の痩せ尾根（A区）に単独で構築される。生活の場とするには必ずしも適しているとは思えないが、この位置が重要であったのだろうと想像するしかない。

中期仮Ⅱ期には、一転して台地の最も標高が高い位置（D区）に竪穴住居がまとまる。これらが同時存在であったわけではないが、調査区の北西および南東側は急傾斜になっているため、調査区外へ広がっているとは考えにくく、この範囲に収束しているのは間違いない。また、前項で述べたとおり居住のための竪穴住居と、多目的な用途をもつ「竪穴住居」状の遺構とが合わせて構築され、それらをあわせてムラが成立・維持されたと考えられる。なお、A区にも竪穴住居跡が作られるが、仮Ⅰ期と違い平場が選ばれている。中期仮Ⅲ期になると標高が下がった地点にも竪穴住居を構築するようになる。各竪穴は強い類似性を示し、前時期および相互の強い関連をうかがわせるものであるが、占地範囲が広がったということは、より広範囲の土地利用を指向したとも考えられる。特に中期仮Ⅲb期に至って調査区北東側の平坦地に近いところにまで進出していく状況は、そうした指向が強くなっていったことを物語っているとも言える。

住居跡の構築に必ずしも適しているとは言えない尾根上の斜面に、土器一型式分の短期間とはいえ定住しムラを構え続けることは、食料採取や資源獲得など、様々な条件を勘案した結果であるの言うまでもない。そしてその短い時間の間にも、遺構の立地の変遷をとおして生業活動の姿とその変化を垣間見ることができる。今回報告する範囲内では、その後は遺構が作られず、短い期間で終息した形になっているが、最初に述べたとおり調査区北東部で現在整理中のB区・C区でも関連する資料が出土しており、その成果を分析することによって、鹿島台遺跡の縄文時代の様相がより明らかにされるであろう。

### 3. 後期（第216～220図）

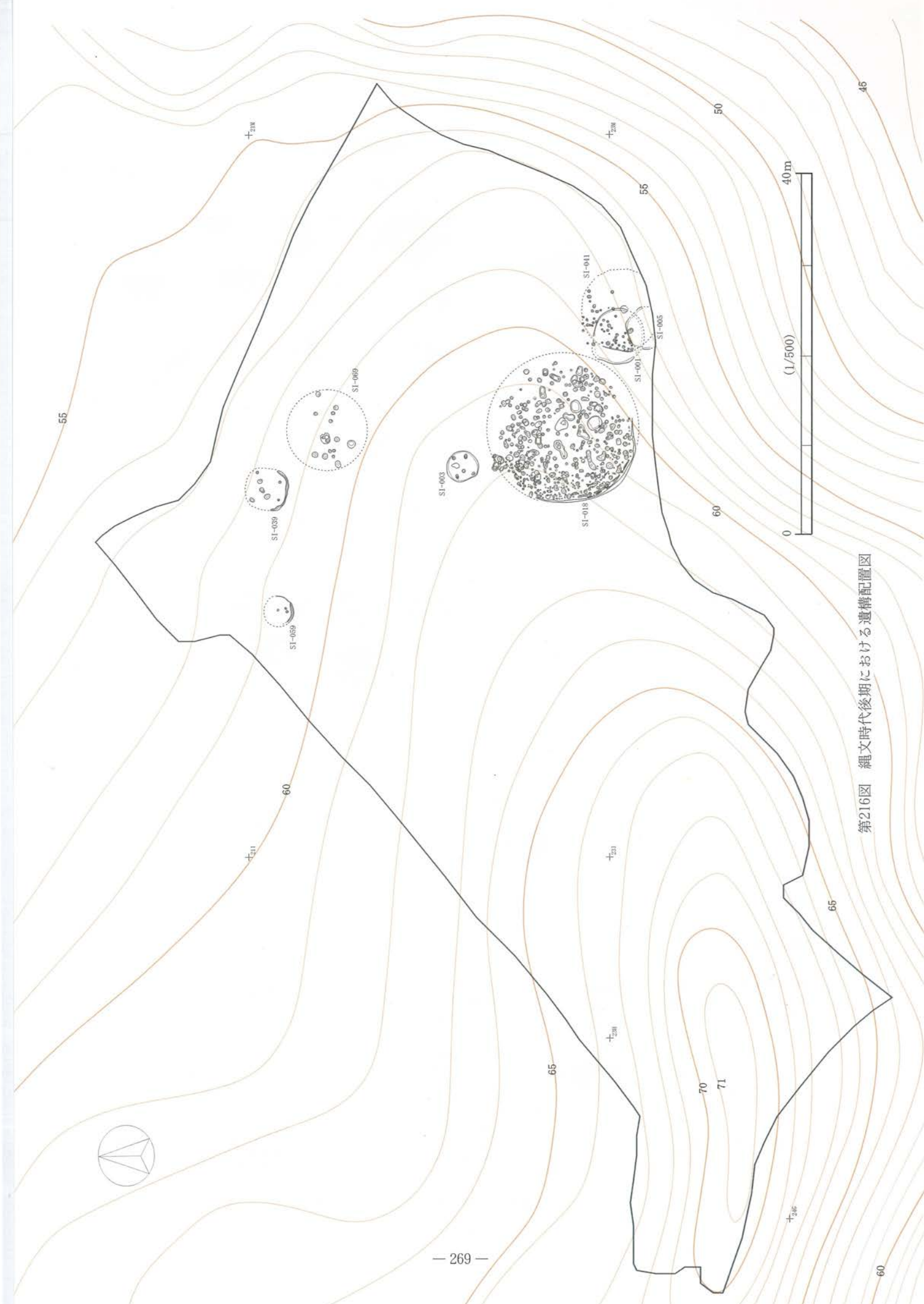
後期の遺構は竪穴住居跡8軒、土坑2基が検出されている。A区から検出されておらず、いずれもD区に位置する。ただし後期は中期と異なり、遺構も遺物も総じて貧弱で検証するには制約が多い。ここでは大まかに状況を把握するにとどめておく。

#### (1) 出土土器について

出土遺物とその大まかな変遷を第217図に示す。後期仮Ⅰ期は加曾利B3式を中心とするもので、SI-003、SI-018、SI-039、SI-059の4軒が該当する。SI-018以外は遺物が乏しいが、口唇部に沿って沈線で区画された刺突列を配する精製深鉢がいずれも遺構からも出土しており、安定して存在することがうかがえる。SI-039出土のソロバン玉型深鉢は口縁部の立ち上がりがほとんどなく、頸部の内傾も強くない。SI-059出土の口縁部に斜格子状の沈線を配する深鉢の沈線は、いずれも頸部側を始点とする。各住居跡から出土している粗製深鉢は、いずれも紐線の指頭押圧の間隔や条線の間隔が密で、地文の縄文が見えないものもある。これらの特徴はいずれも加曾利B3式の要素を示している。SI-018は、大形住居跡と紹介されたことは先述したが、出土遺物も釣手土器や異形台付土器などが他に比べて多い。

後期仮Ⅱ期は曾谷式を中心とするもので、SI-041が該当する。本文中で述べたとおり、グリッド出土と





第216図 縄文時代後期における遺構配置図



後期仮Ⅰ期

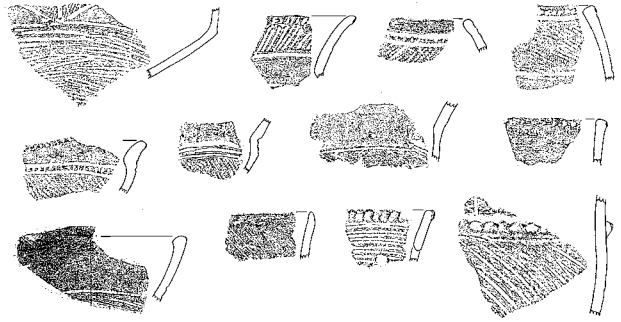
(DSI-003)



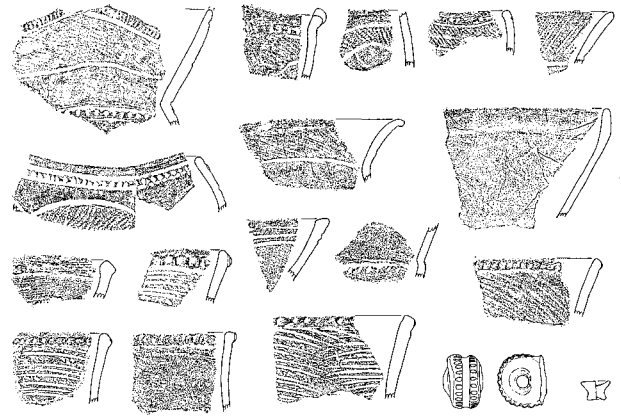
(DSI-039)



(DSI-059)

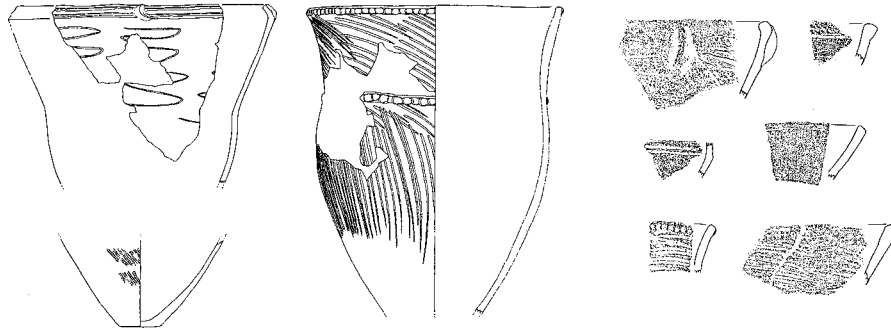


(DSI-018)



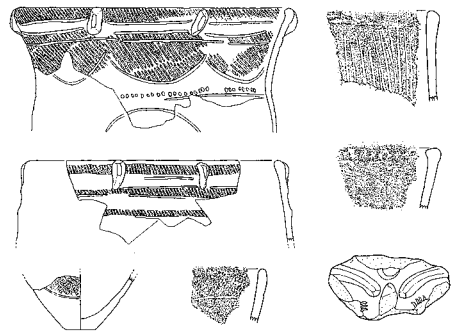
後期仮Ⅱ期

(DSI-041)

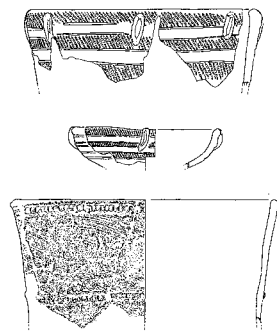


後期仮Ⅲ期

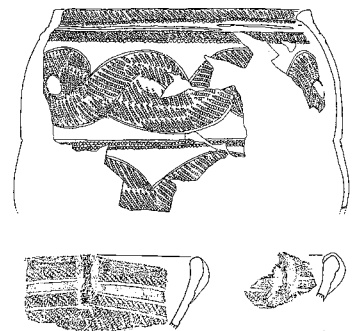
(DSI-001)



(DSI-005)



(DSI-069)



第217図 縄文後期住居跡主要出土土器及び仮設時期

された資料のうち、器形復原できる2点はこの住居跡の位置するグリッドから出土しており、この住居跡に伴うものとみなした。千葉県の前期の遺跡で主体的地位を占める、加曾利B式の系統を引く磨消縄文の精製深鉢は、口縁部小破片のみにとどまっている。代わりに、北西関東を本拠とするとされるいわゆる高井東式が出土している。中期の項で述べたが、東京湾をはさんで西関東に面した遺跡の立地条件をうかがわせるものである。供伴する粗製深鉢は、径に比して器高が高いこと、縄文は施文されず条線のみとなること、頸部のくびれの位置がやや高く、くびれ方も強くはないがはっきりしているなど、曾谷式の特徴を示している。

後期仮Ⅲ期は安行I式を中心とするもので、SI-001、SI-005、SI-069が該当する。ただしSI-001とSI-005は切り合っているため、遺物の帰属は不明な点が多い。調査の所見ではSI-001が古くSI-005が新しいとされているが、遺物からは断定的なことは言えない。いずれの遺構からも、口縁部帯縄文の精製深鉢が安定して出土しており、まとまった資料と認定できる。

資料数が少ないため多くは言えないが、少なくとも土器を見る限り、県内北部から中部にかけての該期の集落遺跡の様相と大きく変わらない。先の高井東式のような例外はあるが、中期に比べて西関東の影響は相対的に少なかったようである。

## (2) 竪穴住居跡について

後期の遺構群は、D区でも北東側の平坦面に近い場所に展開する。位置を見る限り調査区外にも広がっている可能性があるため、あまり結論めいたことは言えない。竪穴住居跡全体を第218図に示した。分類に関する基本的な考え方は中期と同様であるが、資料的な制約から積極的な類別はできない。

後期仮I期に属する4軒の住居のうち、大形住居跡とされたSI-018以外は極めて小規模なもので、中期での分類を適用するならば、ほとんどB類にしかならないような状況である。炉はもちろん使用されているが、頻度としてはわずかなものであり、床面硬化や建て替え痕跡も認められず、長期に継続して使用されたとは思われない。代わりにSI-018はしっかりした炉があり、何度か建て替えられているなど、ある程度の期間存続した痕跡を示している。

後期仮II期のSI-041は、規模はさすがにSI-018に比べ小さいが、それでも直径10m程度と大きく、しっかりした炉を有している。多数検出されたピットがどのような配置になるか不明であるが、何度か建て替えが行われた痕跡と考えられる。SI-018と共通する特徴を有していると言える。

後期仮Ⅲ期は遺存状況が悪いものばかりで判断が難しいが、規模はそれなりであっても使用痕跡は乏しい。SI-069は仮に住居跡になるならば、SI-041の系統を引く住居跡になる可能性があるが、ここでは判断できない。

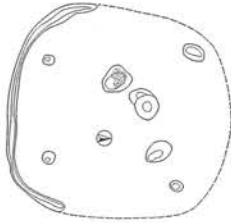
以上の後期の住居跡は2種類に分けられる。一つは主軸長10m前後のやや規模が大きいもので、しっかりした炉が構築され、柱穴など何度か建て替えられた形跡をもつ。SI-041が該当し、SI-069も住居跡ならばここに含まれる。SI-018はその規模に目が奪われがちであるが、その点を除けば特徴としてはここに分類できる。もう1種類は主軸長4～6m程度で炉の使用頻度は低く、建て替えられた形跡がないものである。SI-001、SI-003、SI-005、SI-039、SI-059が該当する。中期の竪穴住居跡の項でA・Bの2種類に分類したが、規模は違いが似たような分類が成立しそうである。もちろん中期で示した居住施設と居住以外の施設という想定を単純に適用することはできないが、両者の間に機能・用途の違いが存在したことは間違いない。

後期仮Ⅰ期

(SI-003)



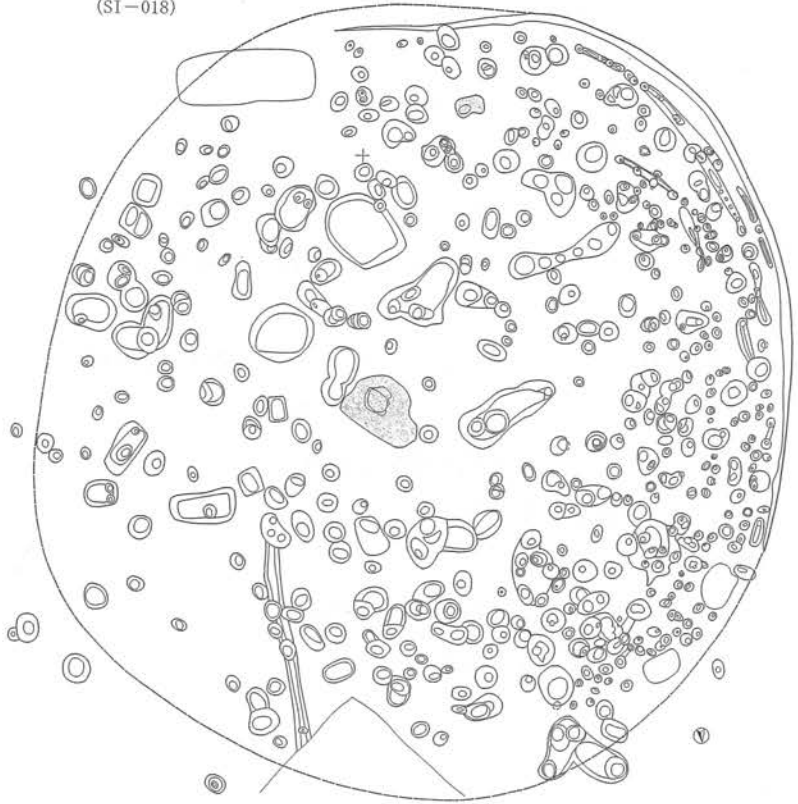
(SI-039)



(SI-059)

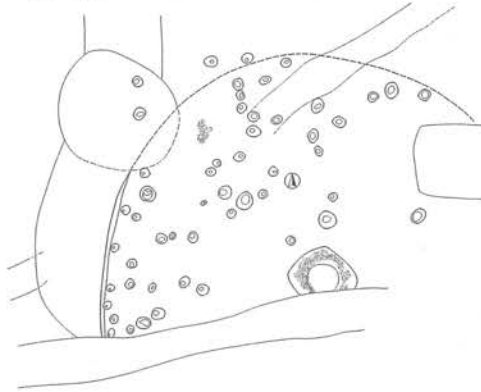


(SI-018)



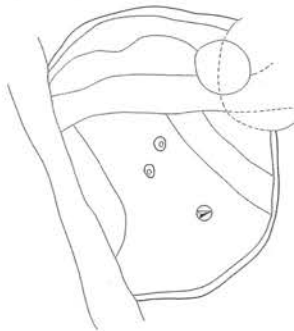
後期仮Ⅱ期

(SI-041)

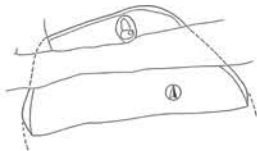


後期仮Ⅲ期

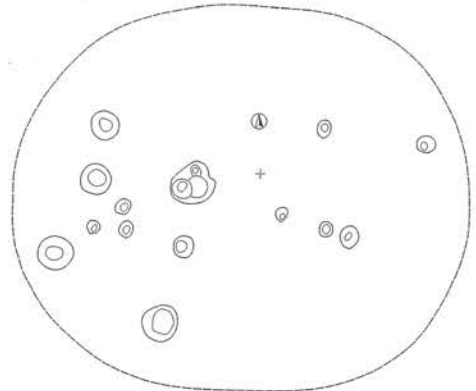
(SI-001)



(SI-005)



(SI-069)



0 (1/160) 4m

第218図 縄文後期堅穴住居跡

各時期を見ると、規模の大きな住居跡1軒が存続し、時期によっては小規模な住居跡複数軒が構築されるという状況が観察される。これらが同時存在であったかどうかは議論の余地があるが、使用目的にあわせて形状の異なる複数の種類の堅穴「住居」が使い分けられていた可能性が、中期と同様指摘できよう。

### (3) SI-018住居跡(「大形住居跡」)について

SI-018住居跡は、床面積の変更を伴う大規模な建て替えが行われている。その推移の試案を第220図に提示しておく。各段階の平面図を検討するに際し、2つの点に着目した。一つは柱穴の深さである。この住居の柱穴は総じて深く、中には2m近いものもある。上部構造物の荷重を考慮したためにそのような深さになったのであろう。そこで、床面から深さ1mを越す柱穴を抽出して、その深さを20cm区切りの深度図として提示した(第219図)。なお、柱穴の深さは標高で提示している。この住居跡は斜面に構築されており、特に東側の床面はかなり流失している。そのため床面からの深さでは、本来の深さを示していないからである。また、東側の床面に存在したと思われる浅いピット類はほとんど流失していると考えられ、深いピットも本来の形状をとどめていない。ちなみに最も遺存度のよい西壁際の床面標高は、約61mである。もう一つの着目点は、柱穴の平面配置である。中期の項でも述べたが、住居の製作プロセスは単純化・汎用化されると考えられ、資材の調達や労働力の集約・配置など、なるべく無駄がないような工程が組み込まれたとみるべきである。そうすると当然、設計という概念が存在したと考えるべきであろう(注2)。ここではそうした点を着想の基本点としている。基本点が異なれば全く異なる平面図が提示されるであろう。「試案」という位置づけを与えたのはそうした理由による。

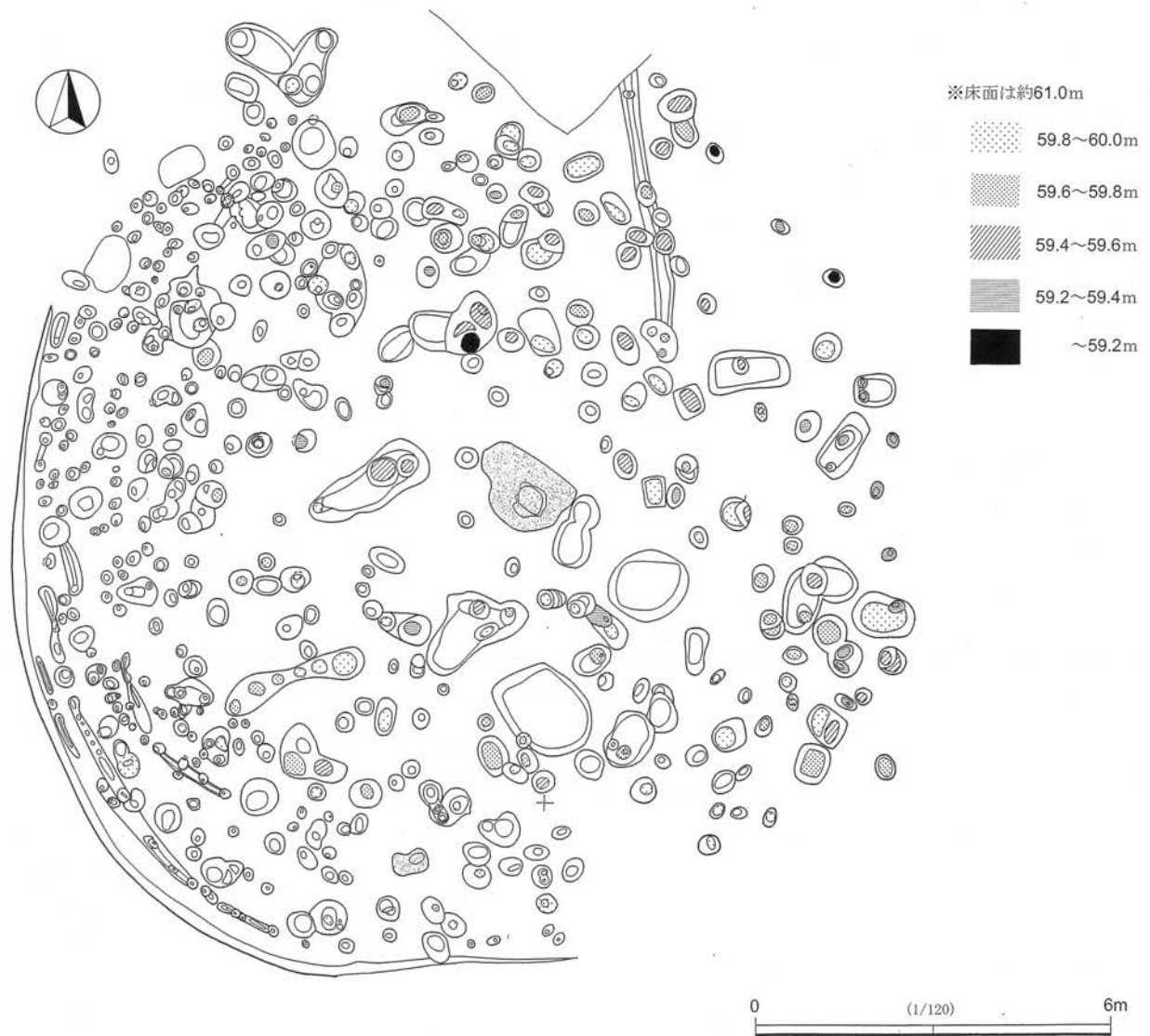
本文中で述べたとおり、覆土堆積状況の記録が残されていないため、拡張か縮小かを直接知ることはできない(注3)。手がかりの一つは炉の位置で、住居中央より東寄りにずれている。炉が主軸上に構築されると仮定した場合、出入り口の位置を北とすると、全体がかなり東に寄ったプランを想定する必要がある、設計する上でかなり不自然である。そこで、最初は東側に入り口がある平面を想定した。平面形状は円形か「D」字状か、いずれの可能性もあるが、東側に残るピット群を出入り口施設と考えると、円形の可能性が強い。主柱穴の数は4ないし5が想定されるため、両方を図示した。これが第220図の第一段階である。

第二段階は、出入り口を北側に移設したと推測した。理由としては、住居北側に密集するピット群は出入り口施設を構成すると考えたためである。平面形状は、北側の壁が直線となる「D」字状のプランを想定した。主柱穴の数は5ないし6が想定されるため、両方を図示した。また、炉は出入り口移設後も同じ場所で継続して使用したと考えられる。

第三段階は最大化した段階である。住居北側にある「く」の字状土坑は、この段階の出入り口施設と考えられる。平面形状は円形に見えるが、出入り口施設付近の壁は直線であったと考えられ、「D」字状のプランを想定した。主柱穴数は6が想定される。

ここで示した以外にも、建て替えの痕跡を示す主柱穴や壁柱穴を見出すことができる。部分的な補修や拡張を伴わない建て替えを行った可能性が強く、そうするとこの遺構はかなり長期間使用され続けたことになる。他の事例について比較検討する余裕はないため、類似例があるかここでは触れないが、鹿島台遺跡のこの住居の場合、恒常的に維持・使用され続けた施設であったことは間違いなく、一時的な施設であったとは考えにくい。

なお、「大形」住居跡について採り上げられる場合、特殊な性格が強調されることが多い。釣手土器や

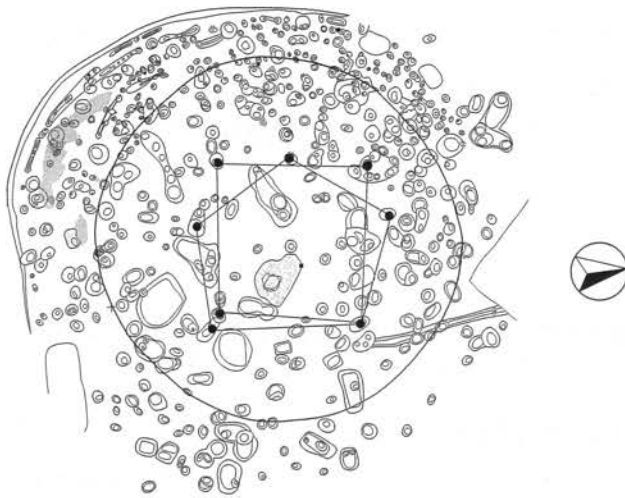


第219図 SI-018住居跡柱穴深度

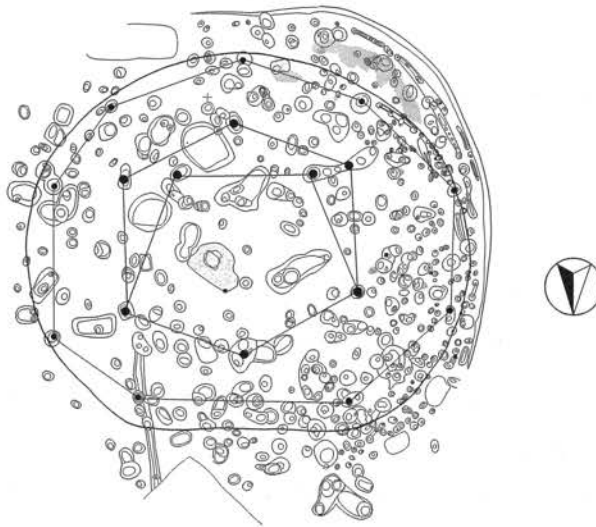
異形台付土器、土偶、石棒、石剣などといった、祭祀に関わるとされる遺物が出土する例が多く、特殊な用途を想定する考え方の根拠ともなっている。しかし、そうした状況は「遺物の廃棄は、遺構の機能と直接関連しない廃絶後に行われた行動である」（菅谷 1987）という指摘のとおり、住居の通常使用されていた状況を直ちに示しているものではない。少なくとも鹿島台遺跡の場合、継続使用された施設であったことに加え、「大形」住居以外の住居は小規模かつ使用頻度が低いものである点を考慮する必要がある。ムラを維持・運営するにあたり「大形」住居跡がどのような役割を果たしていたのか、見た目の規模や特殊な遺物などに惑わされることなく、検出された遺構の詳細な観察、全出土遺物の検証および他の遺構との関わりを通じて分析を重ねる必要がある。

東京湾岸や印旛沼周辺などでは、この時期に大規模な集落遺跡が多数出現する。それらは遺構群の激しい重複とおびただしい量の遺物の出土、そして遺跡によっては土偶や石剣などのような特殊な用途をもつとされる遺物が多数出土したり、「大形住居」のような規模の点では特異な遺構が検出される点で共通する。鹿島台遺跡の周辺をみても、小糸川をはさんで対岸には中期末から晩期にかけての大集落である三直貝塚が立地しており、やはり同様の特徴を示している。鹿島台遺跡の場合、もちろん規模や遺存状況では

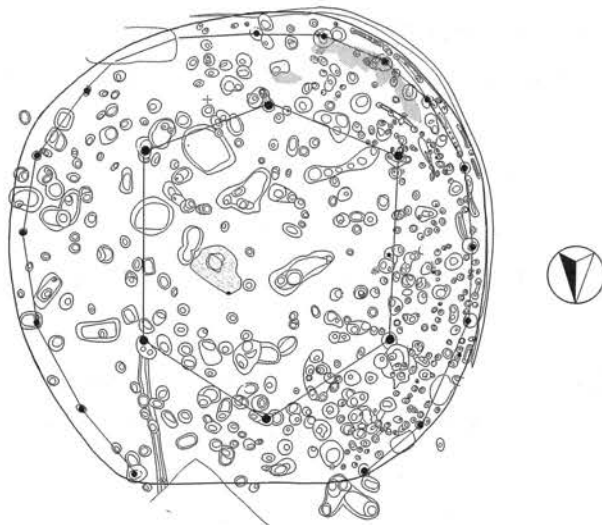
第一段階



第二段階



第三段階



0 (1/240) 6m

第220図 SI-018住居跡の推移試案

そうした遺跡とは比べるべくもなく、ムラの構成員や継続期間などははるかに小規模で短期間であったとみるべきであるが、こうした狭い丘陵上に立地し、かつ近隣に大規模な集落があるムラでも「大形住居」を構築するということは、それが小規模なムラであっても必要な施設であったことを物語っていると同時に、東京湾岸や印旛沼周辺の平地や海沿いの集落とも、共通する生活様式を備えていたことを示していると言える。

#### 注

- 1 近年はいわゆる新地平編年なども提唱されているが、今回は比較検討を加える時間的余裕がなかったため参照しなかった。今後の課題としたい。
- 2 これらの諸問題については、林田利之氏、渡辺新氏にご教示賜った。詳細については、機を改めて報告したい。
- 3 通常こうした住居跡は拡張と解釈されることが多いが、縮小した例も存在する。千葉県市原市西広貝塚66号住居跡が一例である（安井・鶴岡他 2005）。

#### 引用文献

- 山内清男 1940「第IX輯 加曾利E式」『日本先史土器図譜』先史考古学会（示人社1997年再刊版）
- 岡本 勇，戸沢充則 1965「3 関東」『日本の考古学Ⅱ・縄文時代』河出書房新社
- 神奈川考古同人会編 1980『シンポジウム'80 縄文中期後半の諸問題—特に加曾利E式と曾利式土器の関係について—』神奈川考古第10号
- 樋口昇一，鈴木保彦，能登 健 1981「関東・中部・北陸地方」『縄文土器大成2—中期』講談社
- 田川 良，小川和博 1982「千葉県における縄文時代中期土器の変遷（I）」日本考古学研究所集報IV
- 谷井 彪，宮崎朝雄，大塚孝司，鈴木秀雄，青木美代子，金子直行，細田 勝 1982「縄文中期土器群の再編」『研究紀要1982』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 菅谷通保 1987「縄文時代特殊住居論批判—「大形住居」研究の展開のために—」『東京大学文学部考古学研究室紀要第6号』東京大学文学部考古学研究室
- 加納 実 1989「千葉県」『第3回縄文セミナー 縄文中期の諸問題』群馬県考古学研究所
- 浜崎雅仁 1993「君津地域における縄文時代の礫群研究の現状」『研究紀要VI』財団法人君津郡市文化財センター
- 中村信博 1998「溝型落とし穴研究序説」『栃木県考古学会誌第19集』栃木県考古学会
- 山田貴久，田島 新，西野雅人，四柳 隆，小笠原永隆他 1998『千葉東南部ニュータウン19 有吉北貝塚1（旧石器・縄文時代）』財団法人千葉県文化財センター
- 戸田哲也 1999「関東地方中期（加曾利E式）」『縄文時代第10号』縄文時代文化研究会
- 小林清隆他 2002「縄文後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器—鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介—」『研究連絡誌第63号』財団法人千葉県文化財センター
- 安井健一，鶴岡英一他 2005『千葉県市原市西広貝塚Ⅱ』市原市教育委員会，財団法人市原市文化財センター
- 林田利之 2005「縄文時代晩期の大型住居跡の柱穴配置の規格性—佐倉市吉見台遺跡と井戸作遺跡の事例から—」千葉縄文研究会第3回例会資料



## 第2節 縄文時代中期後半における石鏃製作関連遺構について

D区において縄文時代中期後半の住居跡が12軒検出された。このうち南西側の最も標高の高い区域の6軒の住居跡から石鏃製作に関連したと思われる石器が多量に出土した。第3章第1節3の石鏃製作関連遺構において、これらの出土石器の特徴を記載した。

本節では、石鏃製作関連遺構を中心とした石器の分布状況や遺構の時期別変遷を分析検討の主軸にして、集落の変遷や集落内の空間利用について触れることにする。

### 1. 石鏃製作関連遺構の概要

本報告で使用している石鏃製作関連遺構とは、石鏃製作に関連したと思われる石器がまとまって出土している住居跡のことを示す。つまり、各住居内で石鏃製作活動を行ったという意味ではなく、石鏃製作を行った痕跡の認められる石器が多量に検出された遺構という意味である。縄文時代中期後半における遺構配置図（第221図）にみられるように、調査区南西側から石鏃製作関連遺構が6軒まとまって出土している。埋設土器を基準とした分類から、これらの遺構の構築時期は、仮Ⅱ期・Ⅲa期・Ⅲb期の3時期に分けられる（第224・226・227図）。ただし、出土石器の所属時期については、床面直上から出土したものがほとんどなく、大半が覆土中から出土しているため、遺構の構築時期とは必ずしも一致するものではない。

#### （1）石鏃の形態の比較（第221・222図）

出土している石鏃は、第221図の石器写真や第222図にみられるように、各遺構においてそれぞれサイズや形態や石材の用い方などに違いがみられる。なお、石鏃のサイズについては、本遺跡では、石鏃の主軸長（欠損のものは推定した）をもとに、小型（約1.5cm未満のもの）・中型（約1.5cm～2.5cm未満のもの）・大型（約2.5cm以上のもの）に分類した。各遺構から出土した石鏃を遺構構築時期別に比較してみよう。

##### ①仮Ⅱ期：SI-014・017・036・061の4軒である。

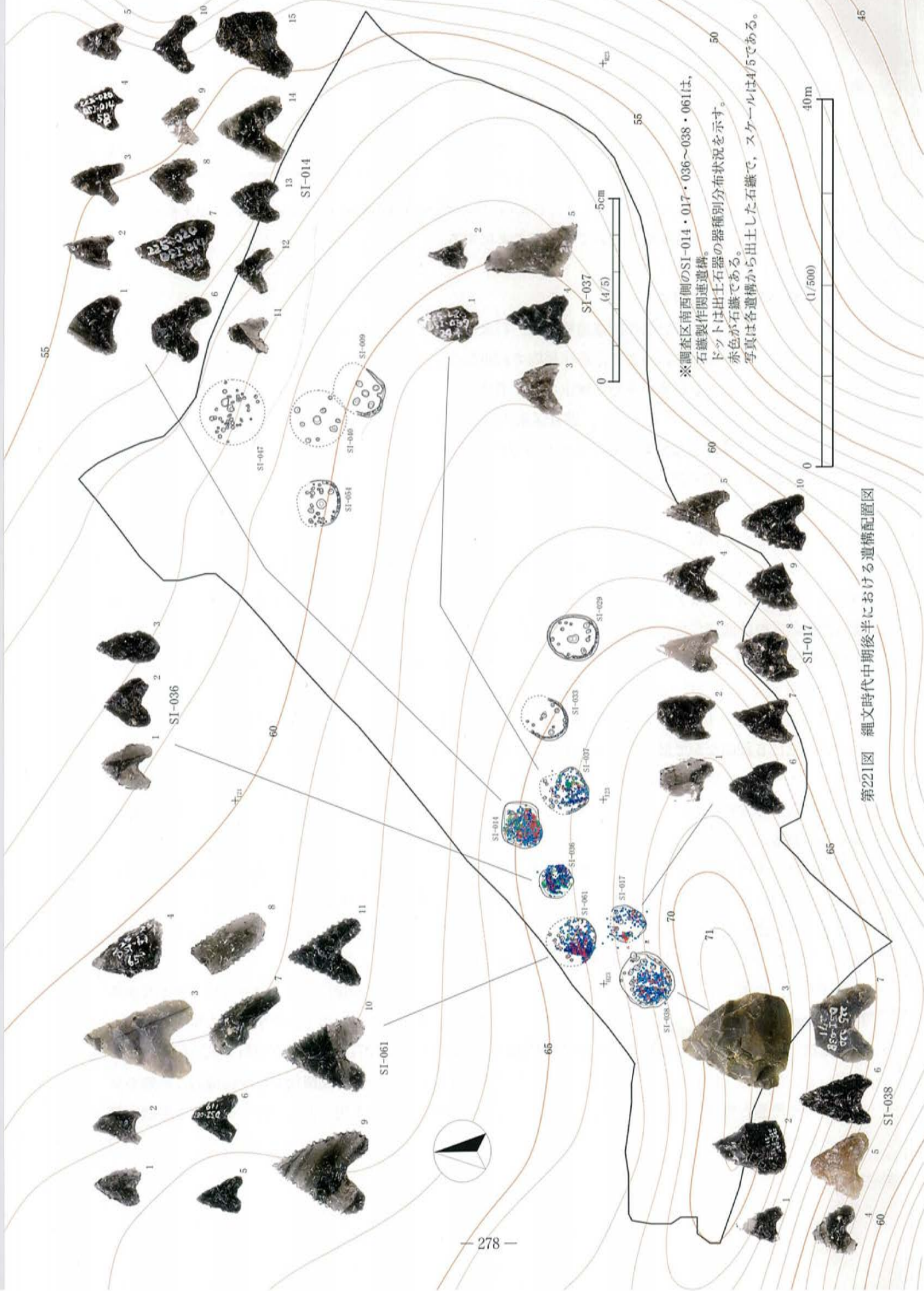
SI-014は、小型（1～5・8～13）が主体を占めるが中型（6・7・14）・大型（15）もみられる。これらの形態は6軒のなかで最もバラエティーに富むが、石材はすべて黒曜石が用いられている。9・10の脚部が大きく開いた形態のものは他の遺構では出土していない。また、3・7のように側縁部が内湾したものや脚部が非対称のもの（2・6・7・12・14・15）があり、再生加工が施された可能性のある石鏃が多くみられる。

SI-017は、すべてサイズが中型で、形態も正三角形を呈し、脚部の挟りが浅く、脚部が非対称なものであり、全体的に斉一性がみられるといえる。石材はすべて黒曜石が用いられている。

SI-036は、出土点数が少ないが、1・2はサイズが中型であり、形態はSI-014の石鏃と類似する。3は特異な形態を示すが、欠損した脚部を再生加工したものと思われる。

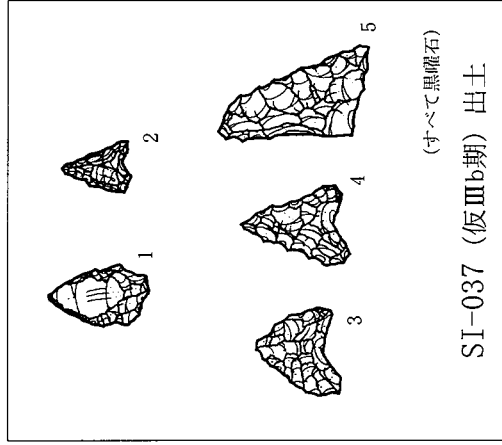
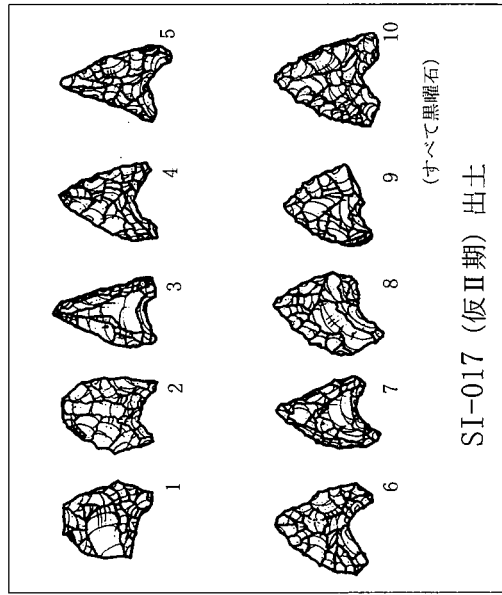
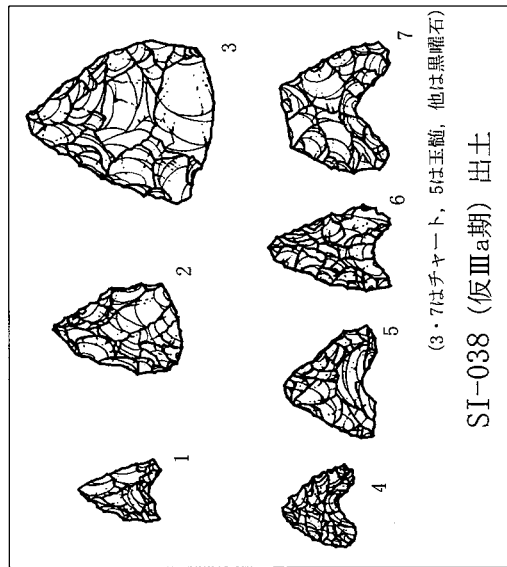
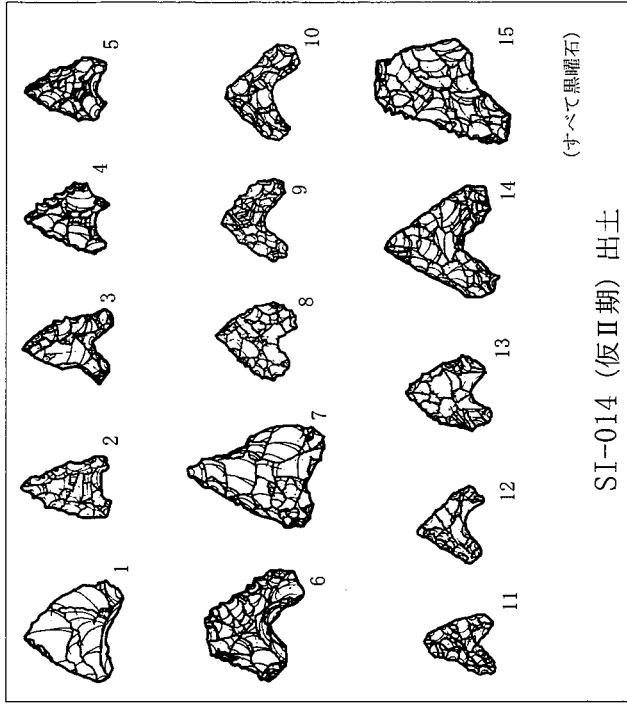
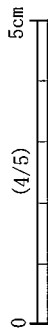
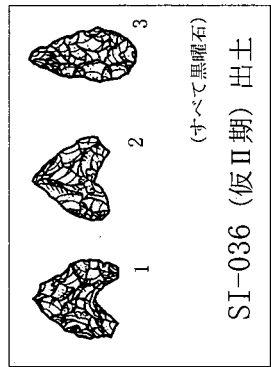
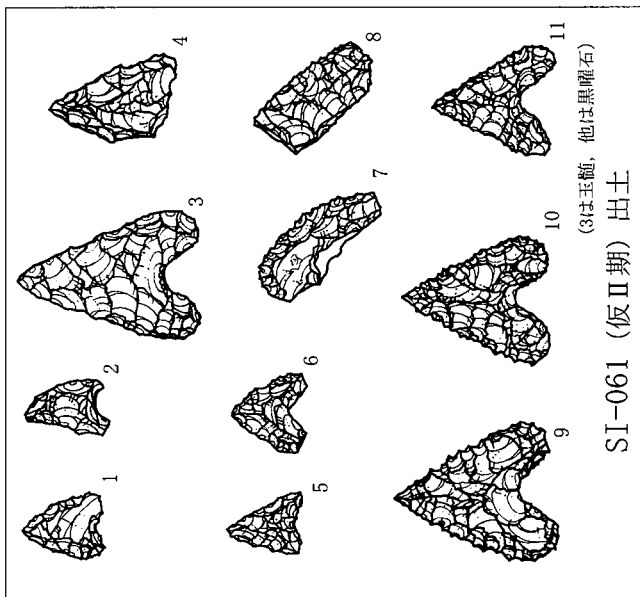
SI-061は、小型（1・2・5・6）・中型（4・11）・大型（3・7～10）のものがみられ、サイズが多様である。小型・中型のものは、他のSI-014・017・036の小型・中型のものと類似する。大型のものは、他の遺構とは形態が大きく異なる。3は玉髓が用いられており、黒曜石に比べてやや粗い調整加工が施されている。7～10（11も含む）は、脚部の挟りが深く、縁辺のほぼ全周が鋸歯状をした特徴的な形態を呈する。この形態と類似するものは、SI-014の15であり、大型の黒曜石を用いたものにこのような形態を呈するものがみられる。





※調査区南西側のSI-014・017・036～038・061は、  
 石鏃製作関連遺構。  
 ドットは出土石器の器種別分布状況を示す。  
 赤色が石鏃である。  
 写真は各遺構から出土した石鏃で、スケールは4/5である。

第221図 縄文時代中期後半における遺構配置図



第222図 縄文時代中期後半における遺構別石鏃実測図

②仮Ⅲa期：SI-038の1軒のみである。

SI-038は、小型（1・4）・中型（2・5・6）・大型（3・7）とサイズが多様である。また、石材構成は3・7がチャート、5が玉髄、他は黒曜石である。形態も2・3が円基鏃であり、他の石鏃も形態的なまとまりがみられない。このように、他の遺構に比べて、サイズ・石材・形態ともに多様であることが特徴であるといえよう。

③仮Ⅲb期：SI-037の1軒のみである。

SI-037は、点数が5点と少ないながら、サイズ・形態が多様である。また、1・3～5は調整加工がやや粗く、2は小型で調整加工が入念に施されている。石材はすべて黒曜石が用いられている。

## （2）石鏃の製作技術

本稿においては、遺構別の黒曜石重量ヒストグラム（第223図）や上述の形態比較や石鏃未製品などを分析要因として、石鏃の製作技術について検討する。

### ①遺構別の黒曜石重量別ヒストグラムの比較

6軒の遺構において、黒曜石が多量に出土し、石鏃の製作が行われていた痕跡がみられる。遺構別に黒曜石の重量別ヒストグラムをもとに比較する。重量別に分析したのは、重量が石器の大きさをあらかず上で重要な要素と考えられるからである。特に、多量に出土している碎片の大きさの出土頻度をみるには有効である。各遺構のヒストグラムを以下の3類に類型した。

A類：0.02g以下の非常に軽いものが40%以上を占め、1g以上の重いものがほとんどみられないもの。

SI-036・037。

B類：0.02g以下のものが15%以上を占め、1g以上のものが10%程度みられるもの。SI-017・061。

C類：0.02g以下のものが15%未満で、1g以上のものが20%程度みられるもの。SI-014・038。

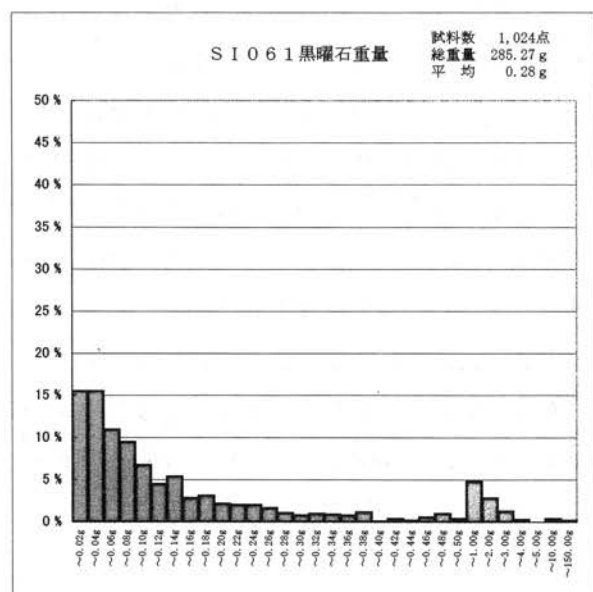
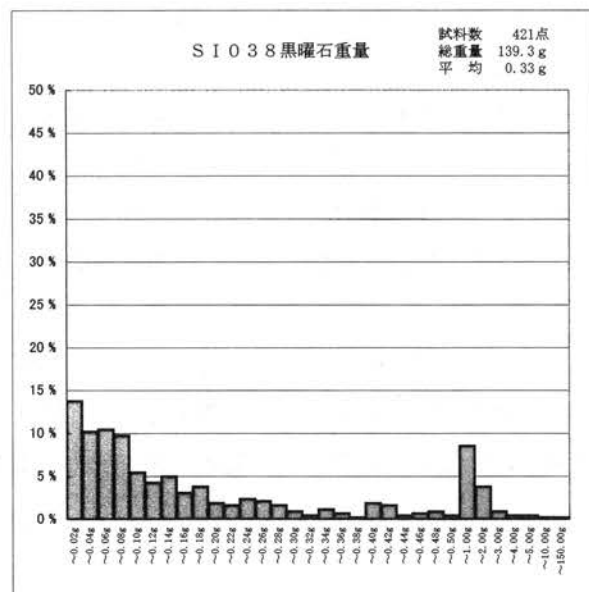
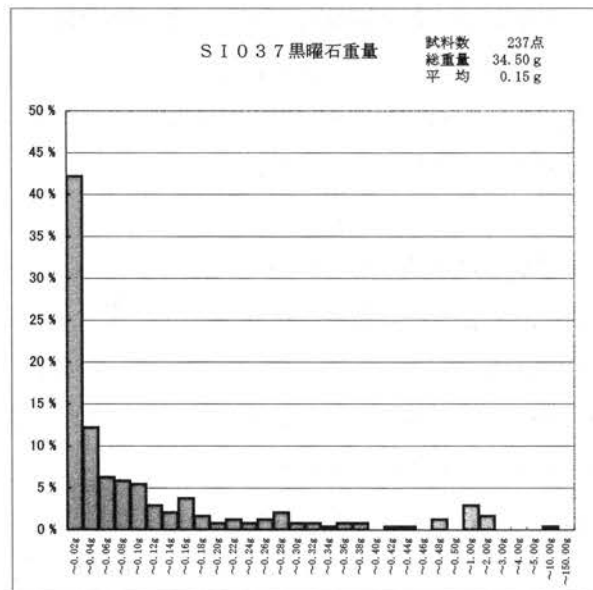
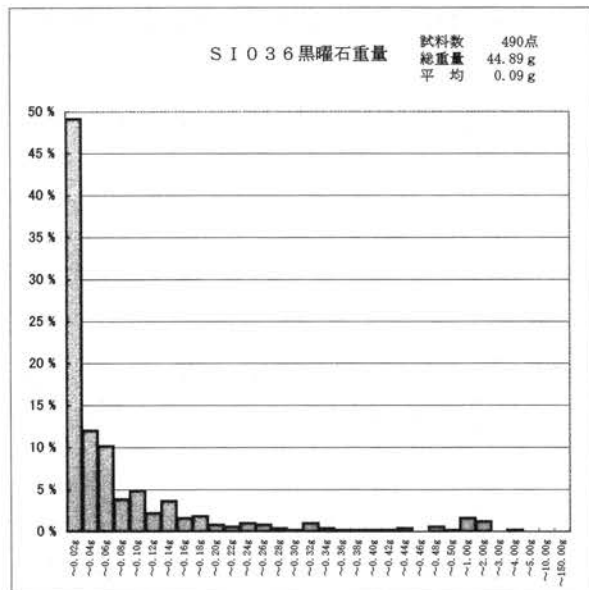
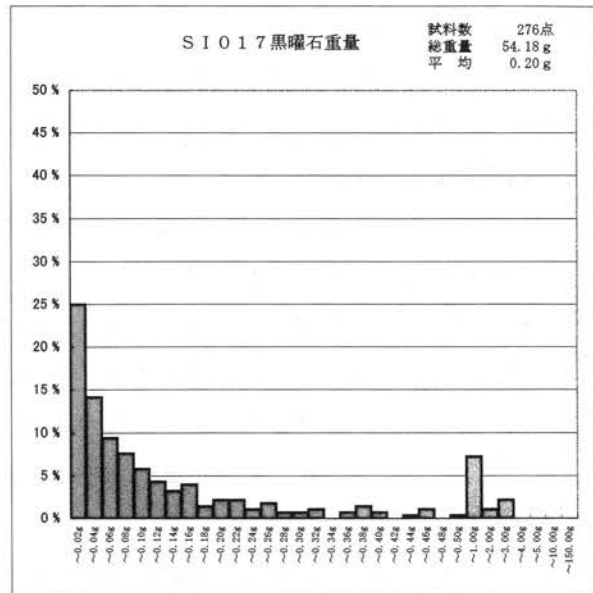
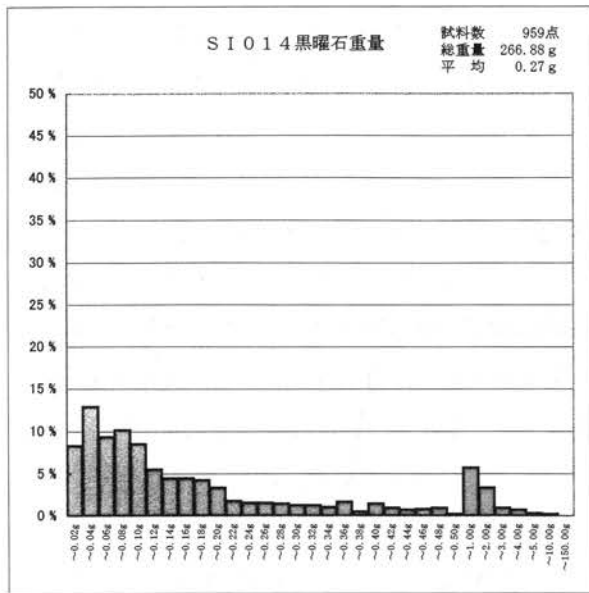
これらの3類うち、石鏃の最終調整、あるいは再生加工を集中的に行った頻度が最も高いと思われるものが、A類であり、次にB類、C類であると考えられる。反対に、石鏃の素材生産や成形加工を行った頻度が最も高いと思われるものが、C類であり、次にB類、A類であると考えられる。

### ②石鏃未製品・石核・剥片について

石鏃の未製品と思われるものは、できるだけ図示するようにした。厚みのない小型・中型の幅広剥片を素材として、素材を斜めに用いて、打面部付近を折断による成形後に、厚みを減少するような調整加工が施されているものが主体を占める。おそらく、これらは小型・中型の石鏃の未製品と考えられる。また、石鏃未製品・石核・剥片は器種組成において非常にわずかである。特に、石核は総数で5点しか出土しておらず、しかも、SI-061のみの出土である。剥片は折断面を持つものが多くみられ、小型のものが大半であった。黒曜石においては10g以上のものは、SI-038・061から各1点の総数2点のみであった。

### ③石鏃の製作技術について

最初に、石材の大半を占める黒曜石の石鏃製作技術について、検討してみる。遺跡に持ち込まれた母岩については、10～50g程度の重さで、厚みのある大型の剥片（第99図1，第102図19など）が用いられていると思われる。大型の石鏃の素材剥片は、この母岩から剥離されたことが推察されるが、大型の石鏃未製品や剥片の接合資料がないので不明な点が多い。小型・中型の石鏃は、分割された厚みのある石核（第102図20～22）を用い、厚みのない小型・中型の幅広剥片を剥離して、素材を斜めに用いて調整加工が施されるものが主体を占められると思われる。石核の出土点数が極めて少ないのは、石核自体が小型の分割剥片



第223図 石鏃製作関連遺構における黒曜石重量ヒストグラム

であり、石核から剥片が剥離できなくなると、石核を石鏃の素材として用いたことによるものと推察されるからである。その他の石材の石鏃は、剥片や碎片がわずかしか出土しておらず、製品として遺跡に搬入されたものと思われる。

### (3) 遺構別の石鏃の特徴

上述の事項から、各遺構における石鏃の特徴を遺構構築時期別にまとめると以下のとおりとなる。

仮Ⅱ期においては、黒曜石が多用されており、小型・中型・大型の3つのサイズの石鏃が出土しているが、各サイズにおいて形態が類似する。特に、大型の石鏃は縁辺が鋸歯状を呈する点が特徴的である。ただし、遺構ごとに、サイズの組成が異なる。SI-017・036は中型がまとまっている。SI-014は各サイズが出土しているが小型・中型が主体を占める。SI-061も各サイズが出土しているが、大型が主体を占める。このように、遺構ごとにサイズの差異がみられるのは、母岩の大きさや石鏃製作者のくせが反映されている可能性が高い。

仮Ⅲ a 期のSI-038においては、黒曜石以外のチャートや玉髄が用いられ、これらは搬入品の可能性が高い。黒曜石は、石器組成などから、本遺跡で製作されたものと思われるが、仮Ⅱ期とは異なる形態のもの(第222図SI-038の2)がみられる。

仮Ⅲ b 期のSI-037においては、黒曜石が用いられているが、仮Ⅱ期でみられたような調整加工がみられず、やや粗い調整加工が施されている。

## 2. 住居への遺物廃棄の検討

3章第1節3の石鏃製作関連遺構において、遺構ごとに遺物の出土状況を検討した結果、遺物は床面直上から出土したものはほとんどなく、壁際や床面に土が堆積した後に出土していた(第89・93・94・96・98・100図)。これらの分布状況から、ほとんどの遺物(埋設土器は除く)は、住居が廃絶された後に、住居内に廃棄されたものと思われる。

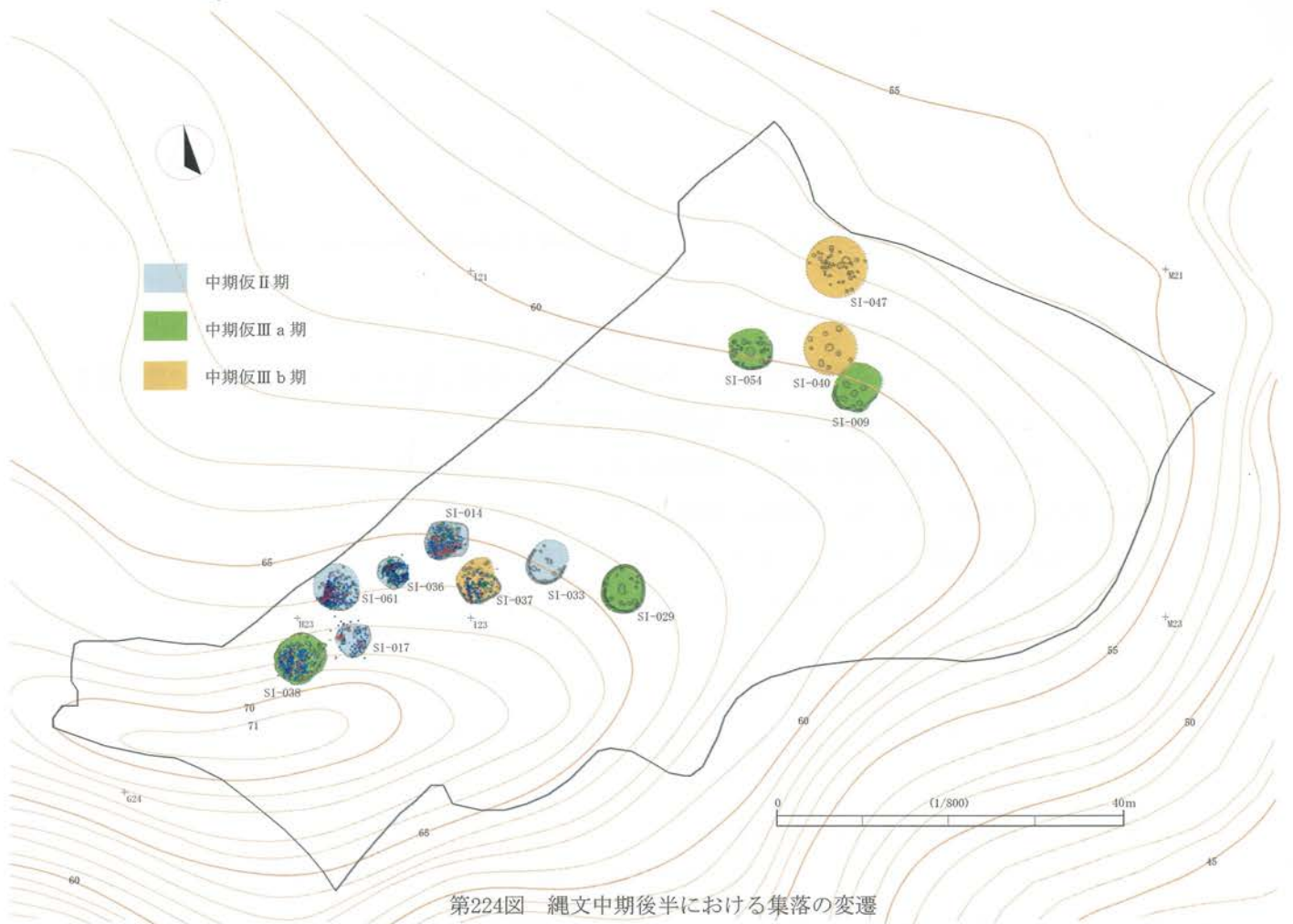
遺物がどのように廃棄されたかについて検討してみよう。遺物の平面分布は、住居跡の南西隅側にまとまって出土するものが多くみられた。南西側にはこの遺跡で最も標高の高い区域があり、南西から北東に向かって傾斜するところに住居が立地している。遺物集中部と地形の傾斜などから、第225図のとおり廃絶住居への遺物廃棄推定モデルを設定してみた。

ただし、SI-017においては、住居跡西側に石鏃が数点まとまって床面近くから出土しており(第93図)、石鏃が遺棄された可能性もある。すべての遺物が廃棄されたものではない可能性もある。

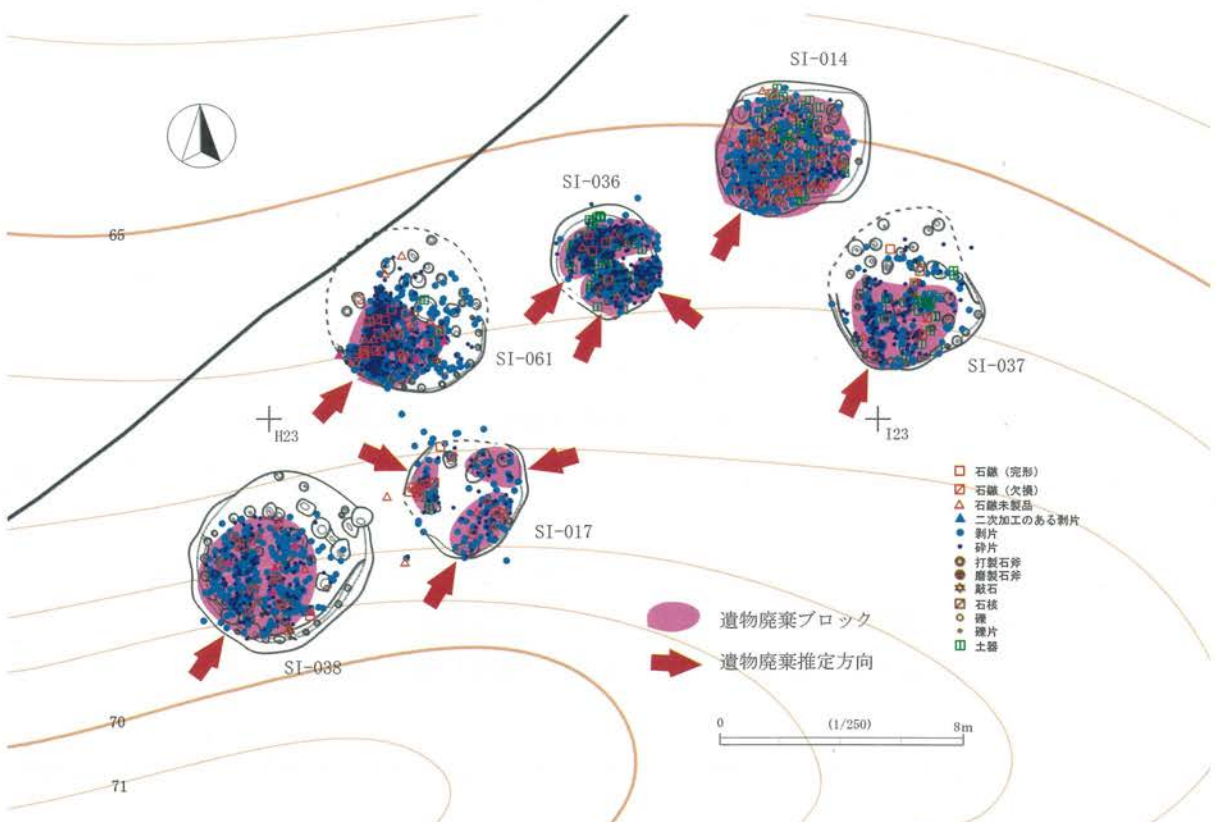
また、SI-014においては、住居跡南西部に住居跡より新しい不定形な掘り込みがみられ、掘り込み内から石器が均等にして出土している(第89図)。これらのことから、住居内に投棄された石器を再利用するために、掘りおこした可能性もある。

このように、遺物廃棄方法は複雑な様相が考えられる。SI-017とSI-036のように、3方向からの遺物廃棄が推定されるものもある。多方向からの廃棄については、隣接する住居において、機能している住居と廃絶された住居が隣接している場合、地形の傾斜に関係なく、距離の短い隣接した廃絶住居へ遺物を廃棄することも考えられる。





第224図 縄文中期後半における集落の変遷



第225図 廃絶住居への遺物廃棄推定モデル

### 3. 集落の変遷

D区における縄文中期後半は、前述のとおり仮Ⅱ期・仮Ⅲa期・仮Ⅲb期の3時期に分けることができる。これらを石器が少量しか出土していない住居跡（以下、石器少量出土遺構と呼ぶことにする）も含めて、遺構分布を示したものが第224図である。この時期別遺構分布状況と廃絶住居への遺物廃棄推定モデルをもとに集落の変遷を検討した。

集落の変遷を検討する前提として、次のようなことを考慮した。

- a. 同一時期（土器型式に基づく設定時期）に、各遺構が同時に存在したわけではなく、住居の建て替え等が行われた結果、複数の遺構が存在した可能性がある。
- b. 各時期の年代幅が異なる可能性が高く、各時期がどのくらいの期間であるのか。
- c. 集落に継続して居住したのか、季節的に回帰した結果、集落が形成されたのか。
- d. 各時期が連続的に継続しているか、あるいは、断絶期があるのか。
- e. 前段階の終焉時期と後段階の初源時期が併存しているかというように、各時期がモザイク状に時期が重複している可能性があるか。
- f. 住居の建て替えの時期（または、継続使用期間）と季節。
- g. 石鏃製作と住居の建て替えの時期（または、継続使用期間）・季節との関連。

### 4. 廃絶住居への遺物廃棄推定モデルの提示

集落の変遷を検討するにあたっては、上述の要因以外にも当然考慮しなければならないが、第226・227図に廃絶住居への遺物廃棄のパターンについて、二つのモデルを提示した。以下、そのモデルの概要について触れることにする。また、集落の作業空間を検討するにあたって、居住区域・石器製作区域（以下、ここでは主に石鏃製作区域をさす）・廃棄区域の三つの選地が行われたと想定することにする。

#### （Ⅰ）短期（断絶）廃棄モデル（第226図）

時期に断絶期があり、各時期に集落が展開したと推定したモデルである。各時期内において、遺構の建て替え等が行われ、複数の遺構が存在したと推定した。

仮Ⅱ期：石鏃製作関連遺構が4軒（SI-014・017・036・061）と石器少量出土遺構が1軒（SI-033）で構成される。石鏃製作関連遺構数の多寡が、狩猟の回数や頻度をあらわしていると想定した場合、仮Ⅱ期の集落が最も長く継続したことが推察される。

遺物廃棄推定方向についてみると、3方向のものが2軒（SI-017・036）みられ、後段階の石鏃製作関連遺構はすべて1方向である。このことは、仮Ⅱ期の遺構が隣接しており、隣接する機能状態の住居から、廃絶住居に遺物が廃棄された可能性が高く、SI-017とSI-036の2軒が、仮Ⅱ期の初期段階で廃絶された遺構と捉えることも可能である。

また、SI-014には南西部に石器素材を再利用したと考えられる掘り込みがみられ、この遺構も初期段階に廃絶された可能性がある。遺構廃絶の変遷を推定すると、[初期段階] SI-014・017・036⇒[中期段階] SI-061⇒[最終段階] SI-033が推定される。集落空間構成は、居住区域・石器製作区域・廃棄区域が南西部にまとまって展開している。

仮Ⅲa期：石鏃製作関連遺構が1軒（SI-038）と石器少量出土遺構が3軒（SI-009・029・054）で構成される。石器製作関連遺構のSI-038は、遺物廃棄推定方向が1方向のみであるが、仮Ⅱ期では3方向のも

のもみられる。この違いの要因として、仮Ⅲ a 期では隣接する遺構が立地していないことが考えられる。

石器少量出土遺構は、仮Ⅱ期よりも北東側のやや平坦面に展開しており、SI-029は石器製作関連遺構のSI-038からほど近い位置に立地し、SI-009・054はやや離れた位置に立地する。

SI-038の石鏃は、チャートや玉髓の石鏃を製品として持ち込んでいる様子がうかがえ、他の時期とは異なる内容を持つ。これらの搬入された石鏃は、仮Ⅲ a 期の初期段階に持ち込まれた可能性がある。黒曜石は、多量の碎片の存在や石器製作技術の共通性から、本遺跡で製作されたことが推察される。SI-038の遺物廃棄推定方向から、石鏃製作は、隣接する南西側の標高の高い区域で行われたと推定される。

遺構廃絶の変遷を推定すると、[初期段階] SI-038⇒[最終段階] SI-009・029・054が推定される。集落空間構成は、居住区域が北東側に移動し、石器製作区域・廃棄区域が仮Ⅱ期と同じ南西部に展開している。

仮Ⅲ b 期：石鏃製作関連遺構が1軒（SI-037）と石器少量出土遺構が2軒（SI-040・047）で構成される。石器製作関連遺構のSI-037は、遺物廃棄推定方向が1方向のみである。隣接する遺構が立地しないことが要因として考えられる。遺物廃棄推定方向から、石器製作区域は、隣接する南西側の標高の高い区域で行われたと推定される。石器少量出土遺構は、最も北西側に2軒隣接して立地している。

遺構廃絶の変遷を推定すると、[初期段階] SI-037⇒[最終段階] SI-040・047が推定される。集落空間構成は、居住区域がさらに北東側に移動し、石器製作区域・廃棄区域が仮Ⅱ期や仮Ⅲ a 期と同じ南西部に展開している。

## （2）長期（継続）廃棄モデル（第227図）

各時期が連続的に継続して、集落が展開・変遷したと推定したモデルである。集落の連続的な継続については、土器型式分類の前段階の終焉時期と後段階の初源時期が併存している場合もあり、各時期がモザイク状に時期が重複していることも想定される。これらのことから、長期にわたって継続して集落が展開・変遷したと推定した。短期（断絶）廃棄モデルとの違いは、前段階の時期の廃絶住居が、後段階の時期にも継続して、遺物廃棄されたと推定する点で、大きく異なる。

仮Ⅱ期：短期（断絶）廃棄モデルの第Ⅱ期の様相とほぼ同じである。

仮Ⅲ a 期：石鏃製作関連遺構が5軒（SI-014・017・036・061・038）と石器少量出土遺構が3軒（SI-009・029・054）で構成される。SI-038が住居として機能していた時期に、隣接する石鏃製作関連遺構である4軒（SI-014・017・036・061）に遺物を廃棄したことが想定される。SI-038が廃絶された後には、南西側の標高の高い区域において、石器製作を行い、SI-038に遺物を廃棄したものと思われる。

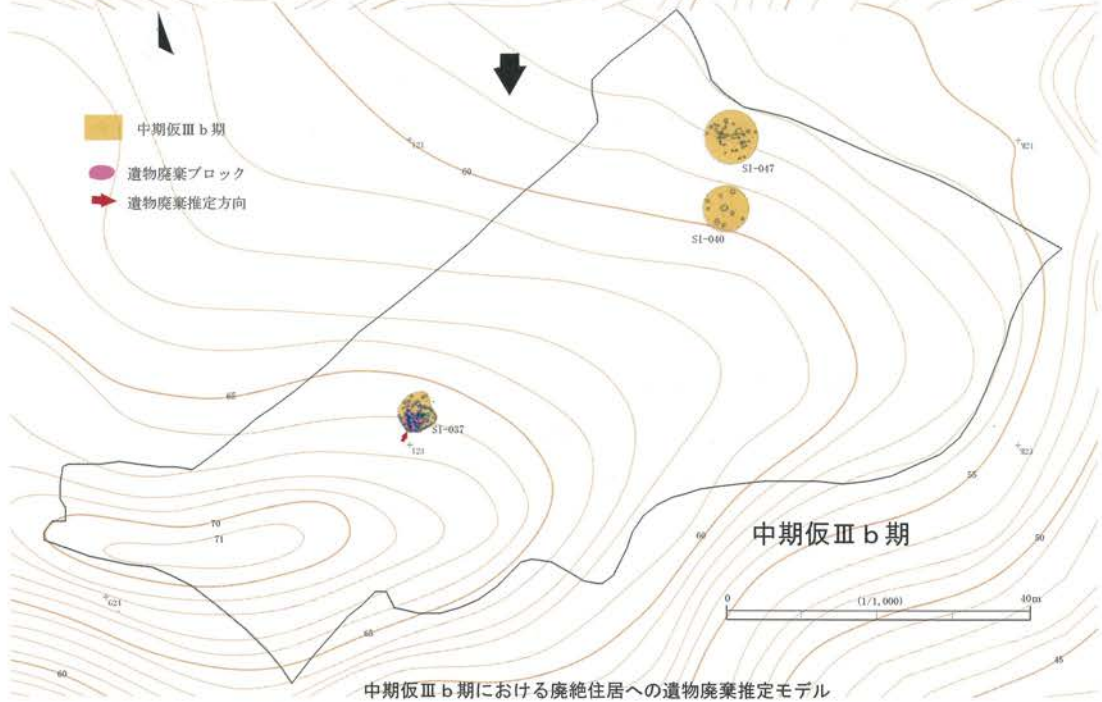
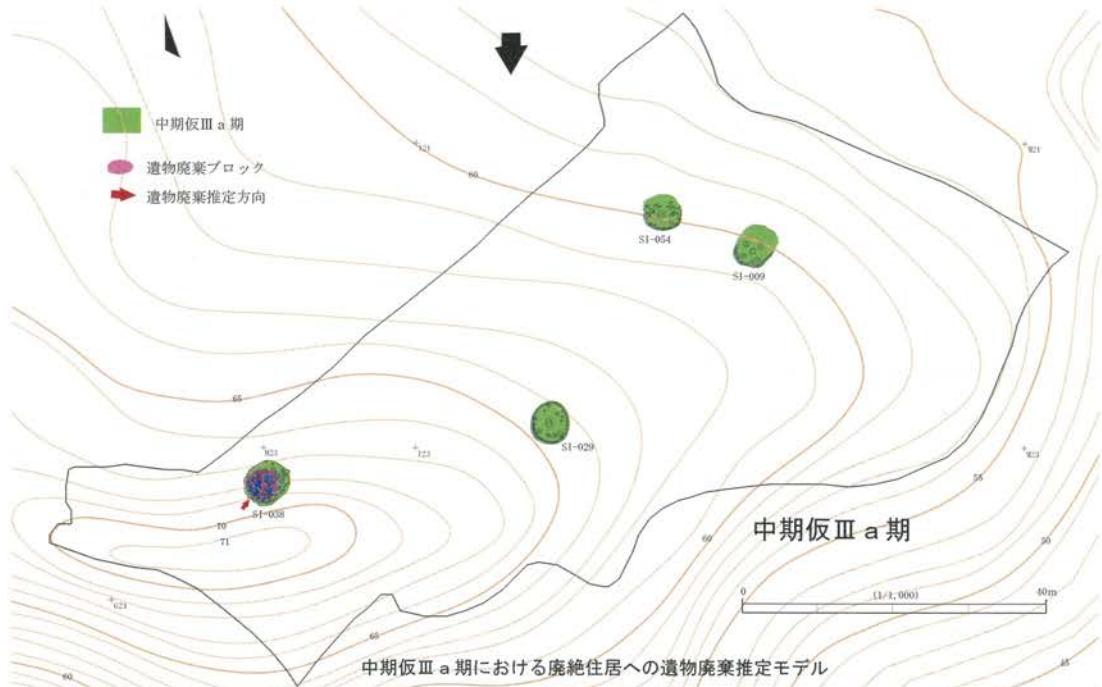
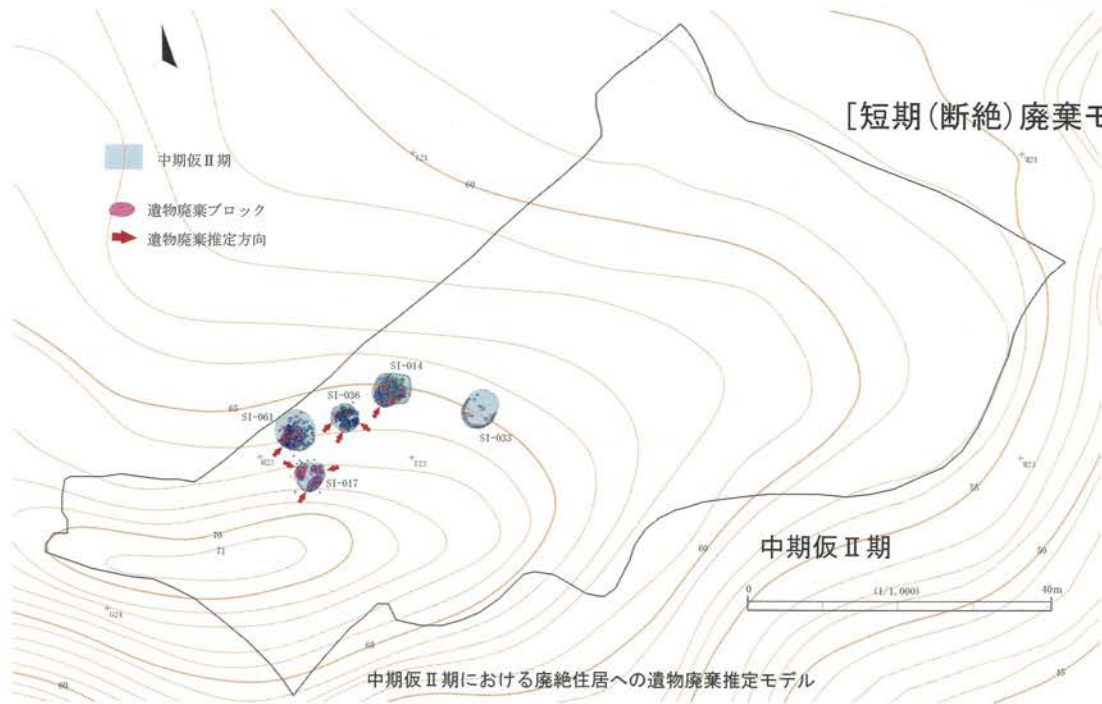
遺構廃絶の変遷を推定すると、[初期段階] SI-014・017・036・061⇒[中期段階] SI-038⇒[最終段階] SI-009・029・054が推定される。集落空間構成は、居住区域が北東側に移動し、石器製作区域・廃棄区域が仮Ⅱ期と同じ南西部に展開している。

仮Ⅲ b 期：石鏃製作関連遺構が6軒（SI-014・017・036・037・061・038）と石器少量出土遺構が2軒（SI-040・047）で構成される。SI-037が住居として機能していた時期に、隣接する石鏃製作関連遺構である5軒（SI-014・017・036・038・061）に遺物を廃棄したことが想定される。SI-037が廃絶された後には、南西側の標高の高い区域において、石器製作を行い、SI-037に遺物を廃棄したものと思われる。

遺構廃絶の変遷を推定すると、[初期段階] SI-014・017・036・038・061⇒[中期段階] SI-037⇒[最

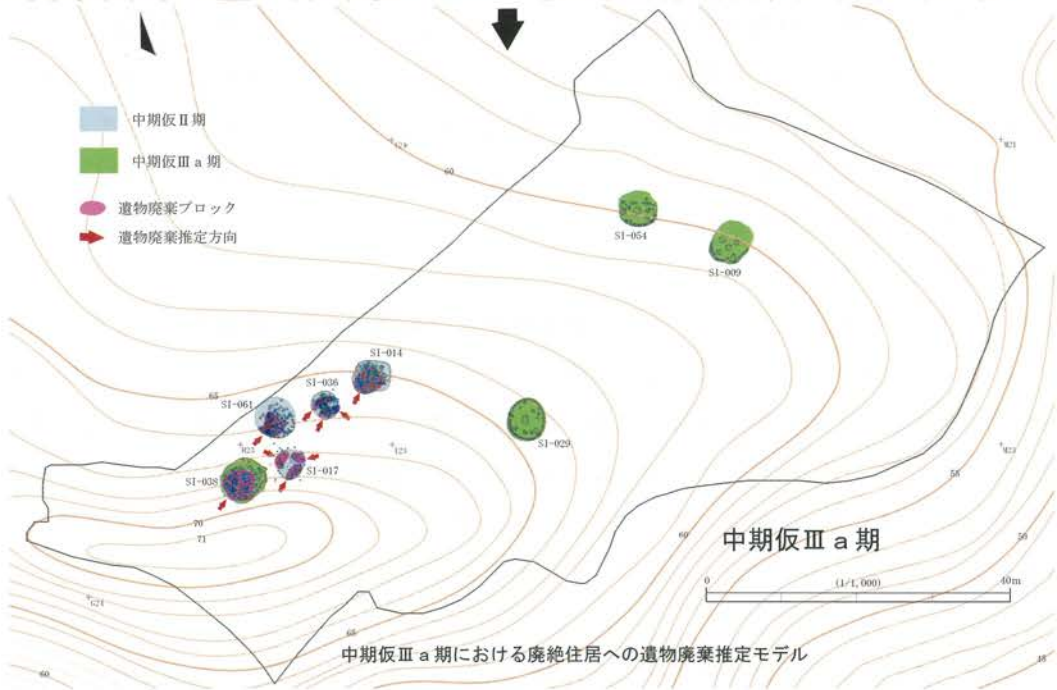
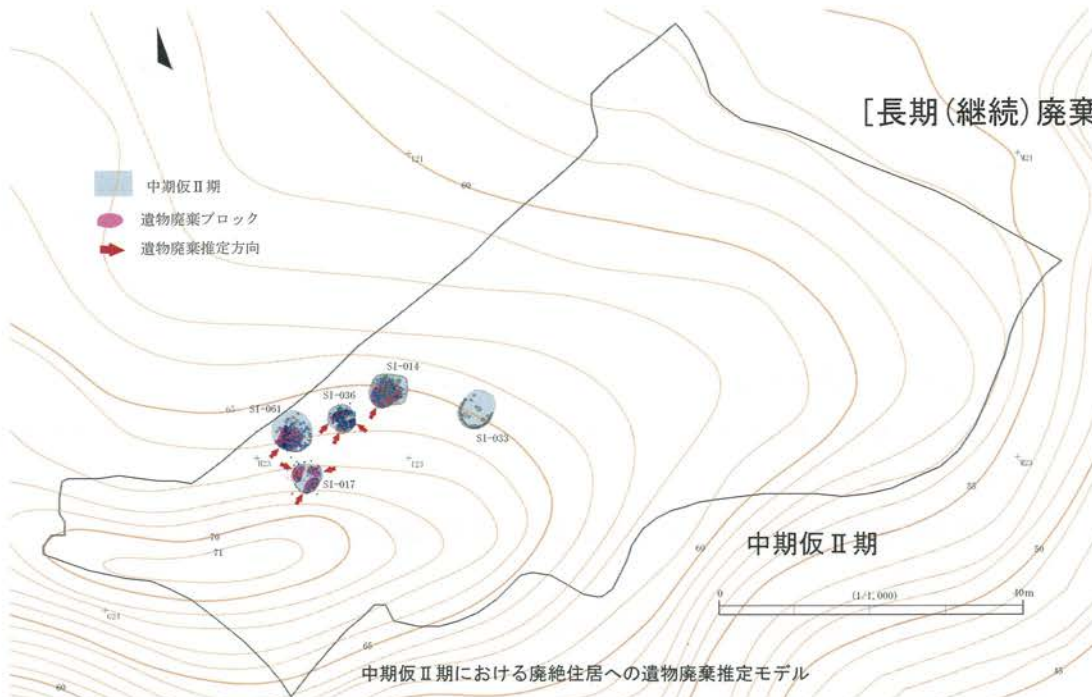


[短期(断絶)廃棄モデル]



第226図 縄文中期後半における廃絶住居への遺物廃棄推定モデル (1)

[長期(継続)廃棄モデル]



第227図 縄文中期後半における廃絶住居への遺物廃棄推定モデル (2)

終段階] SI-040・047が推定される。集落空間構成は、居住区域がさらに北東側に移動し、石器製作区域・廃棄区域が仮Ⅱ期と同じ南西部に展開している。

## 5. まとめ

以上のとおり、廃絶住居への遺物廃棄推定モデルを二つ提示して、集落の変遷を検討してきた。これらのモデルは、単純化されたものであるので、二つのモデルが複合されたモデルやさらに異なるモデルも当然、設定されるものと思われる。

ここでは、以上の検討の結果、提示できたことをまとめ、その問題点と課題を記載する。

### (1) 集落空間構成の変遷

集落空間構成を居住区域・石器製作区域・廃棄区域の三つの区域に分けて検討した。その結果、二つのモデルとも、当初の仮Ⅱ期においては、居住区域・石器製作区域・廃棄区域の三つの区域が南西側に隣接してまとまっていた。次の段階の仮Ⅲa期から仮Ⅲb期になるにつれて、居住区域が徐々に北東側に移動していく様子がみられるのに対して、石器製作区域・廃棄区域は仮Ⅱ期と同じ南西側の区域に継続されていた。これらの解釈の一例としては、初期の集落が小範囲に展開し、集落の空間機能が分離するにつれて、集落が広がったことが考えられる。集落の広がり、やせ尾根状の平坦面が狭い地形に立地していることから、仮Ⅲb期を最後に集落が終焉したものと思われる。

### (2) 廃絶住居の利用について

今回の分析では、住居が廃絶された後に、主に石鏃製作関連の遺物が多量に廃棄されたと解釈した。廃絶住居になぜこのように多量の石鏃製作に関連する遺物が廃棄されたかについては、以下の要因が想定される。住居が機能しなくなると建て替えを行う必要が生じる。建て替えの時期は、現在の木造建築の事例でも、冬季に行う事例が多い。石鏃が主に使用された季節は、猪や鹿などの哺乳動物を集中的に狩猟する冬季であると推定される(小林 2005)。建て替えの時期や狩猟の時期については、もっと慎重に事例を積み上げ検討を行う必要があるが、ここでは冬季にこれらの作業が集中的に行われたという前提で解釈を行う。

つまり、住居の建て替えを行う時期にあわせて、石鏃の製作を行い、その際に、廃絶された住居内に石鏃製作関連の遺物が廃棄されるという解釈である。住居を新たに建て替える際には、大変な労力がかかると想定される。それに伴い、狩猟具の装備品である石鏃などが新たに製作された可能性が高い。

また、住居の形態にも、居住施設以外の用途が考えられ、収納や埋葬、あるいは、キャンプの機能が想定される住居(B類で仮Ⅱ期のSI-017・036が相当)があり、集落内の住居跡の機能も複雑な様相を呈している。

さらに、廃絶住居の深さ・広さ・立地にも着目して、集落内において、廃絶する住居の選地が行われていることも検討する必要があるように思われる。

### (3) その他

この他に、検討される課題と問題点について記載してみよう。

#### ① 石器石材の再利用

仮Ⅱ期にSI-014に石器石材を再利用した可能性がある掘り込みがみられた。廃絶住居に遺物を廃棄するのみでなく、資源の再利用を前提として、遺物廃棄していることも検討する必要がある。

## ②デポ

仮Ⅱ期のSI-017の住居内の西側に石鏃がまとまって出土していた。埋納されたものではないが、住居内にまとめて置いておく行為も考えられる。

## ③立地条件による石器製作の位置

遺物廃棄推定モデルを設定した際に、遺物廃棄推定方向は、調査区域の最も標高の高い約70m付近から、北東側に傾斜する方向へ廃棄されていることが推定された。石鏃を製作した区域は、おそらく、この最も標高の高い南西区域で行われたと推察される。この解釈として、この南西区域は、最も見晴らしのよい地点であることから、狩猟を行う際には、動物を視界に入れ易い地点であり、集団で狩猟をする際に、狩猟者同士で合図を行う地点としても良好な地点と考えられる。

## ④居住区域と石器製作区域との分離の必要性

居住区域は、仮Ⅱ期において、調査区域南西部に位置するが、仮Ⅲ a期から仮Ⅲ b期にかけて、北東側に移動している。それに対して、石器製作・廃棄区域は南西側に位置を変えずに立地している。このように、集落が継続して営まれる場合、徐々に居住区域と石器製作・廃棄区域が分離されるのではないだろうか。その理由としては、例えば、石器製作に伴う剥片や碎片が、居住区域内に残存していると足の裏に石器が刺さったりするなど日常生活に支障が生じることなどが考えられる。

以上のとおり、想定できる事項を列挙したが、廃絶住居の機能について、今後は事例を蓄積して検討する必要がある。

## 引用文献

小林清隆 2005 「集落の形成と石鏃製作」『千葉県縄文研究会第9回例会発表レジュメ』



### 第3節 鹿島台遺跡周辺における弥生時代中期前半期の諸様相

#### 1. 中期前半期の土器について

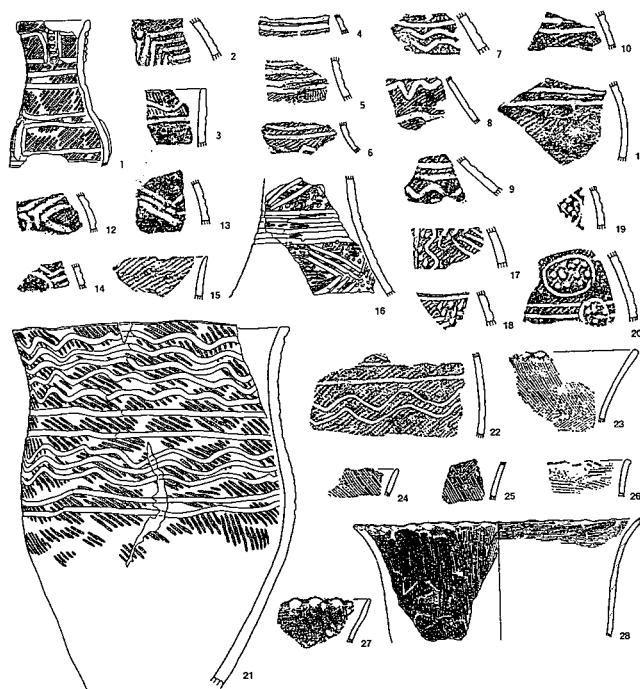
##### (1) 「須和田式」の視点

昭和10年、明治大学の杉原荘介氏らによる市川市須和田遺跡の試掘調査では、残念ながら断片的な土器しか出土しなかった。しかしその6年後に氏は千葉市新田山遺跡(杉原 1943)の調査で後に「完形を知りえたのは本資料の資料をもってはじめとする」(杉原 1961)と言わしめた壺形土器(おそらく第229図13)と巡り会い、これが「須和田式」の実質的な起点となったと考えられる。しかし、その後関東各地で昭和40年代までに「須和田式」と称した新発見が相次ぎ、現在では第229, 230図に見るよう最早、一つの型式名のみで解釈する状況ではなくなっている。そのため各地の研究者達は各地域の系譜を基に、新たな型式名で該期の土器を解釈し、現在に至っている。その一方で鈴木氏の主張をはじめ(鈴木 1984他)、最近では石川氏(石川 1996)や渡辺氏(渡辺 2001)の論考を機に「須和田式」は消滅し、「須和田遺跡」の内容や位置づけについても言及されることは無くなりつつある。したがって現在あえて「須和田式」「須和田期」を使用するのであれば、むしろその根拠を具体的に提示しなくてはならない。寂寥たる須和田式であるが今少し紹介すると、須和田遺跡出土資料において、壺形と甕形を合わせた「標準資料」は現在でも確実には見いだせない。1968年の「弥生式土器集成本編2」の段階においても「須和田遺跡の一部と新田山遺跡の一部」を合わせて「須和田式」とするなど、須和田遺跡の資料的限界が露呈され、「新田山遺跡」への依存を高めている。しかし、その新田山遺跡からは逆に甕形の良好な資料は出土しておらず、かつ後述するように時期的な疑問も見られるため、混乱が生じた。杉原氏はその後、甕形については第228図21の他には、埼玉県池上遺跡や千葉県岩名天神前遺跡等に求めていったことから、混乱に拍車がかかったと見ている。現在「須和田遺跡」資料は渡辺氏を中心とした千葉県史編纂の考古部会により整備され、編年的には中期中葉でも「池上式土器に対応されるもの」(渡辺 2001)としての位置づけがされ、多くの理解を得ていると思われる。

##### (2) 周辺遺跡の出土土器

縄文時代晩期から弥生中期前葉、中葉にかけては、地域的にも特に多くの研究者達が土器型式や再葬墓等を中心に論が交わされている。筆者がこうした中に加わる能力も無いことは百も承知であるが、失礼を顧みず論を進めたい。なお、第229～230図に紹介した遺跡は羅列にすぎず、学史的に重要な遺跡をすべて含んでいる訳でもない。また、示した土器も断片的であり、その遺跡を象徴しているとは言えないため、あくまで参考資料とさせていただきます。

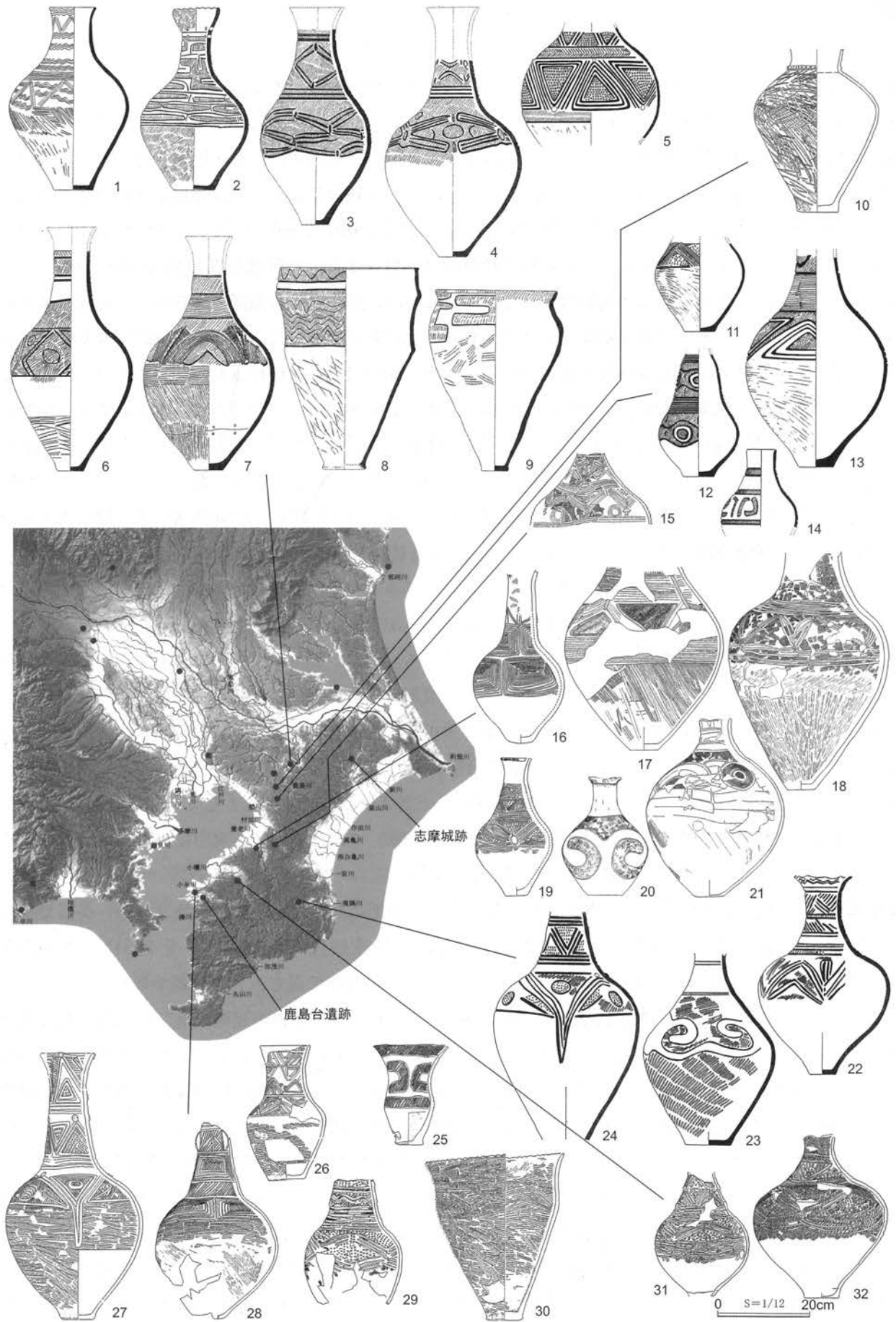
弥生時代「中期前半期」を初頭～中葉ま



第228図 須和田遺跡出土中期弥生土器  
(渡辺 2001より転載) S=1/6

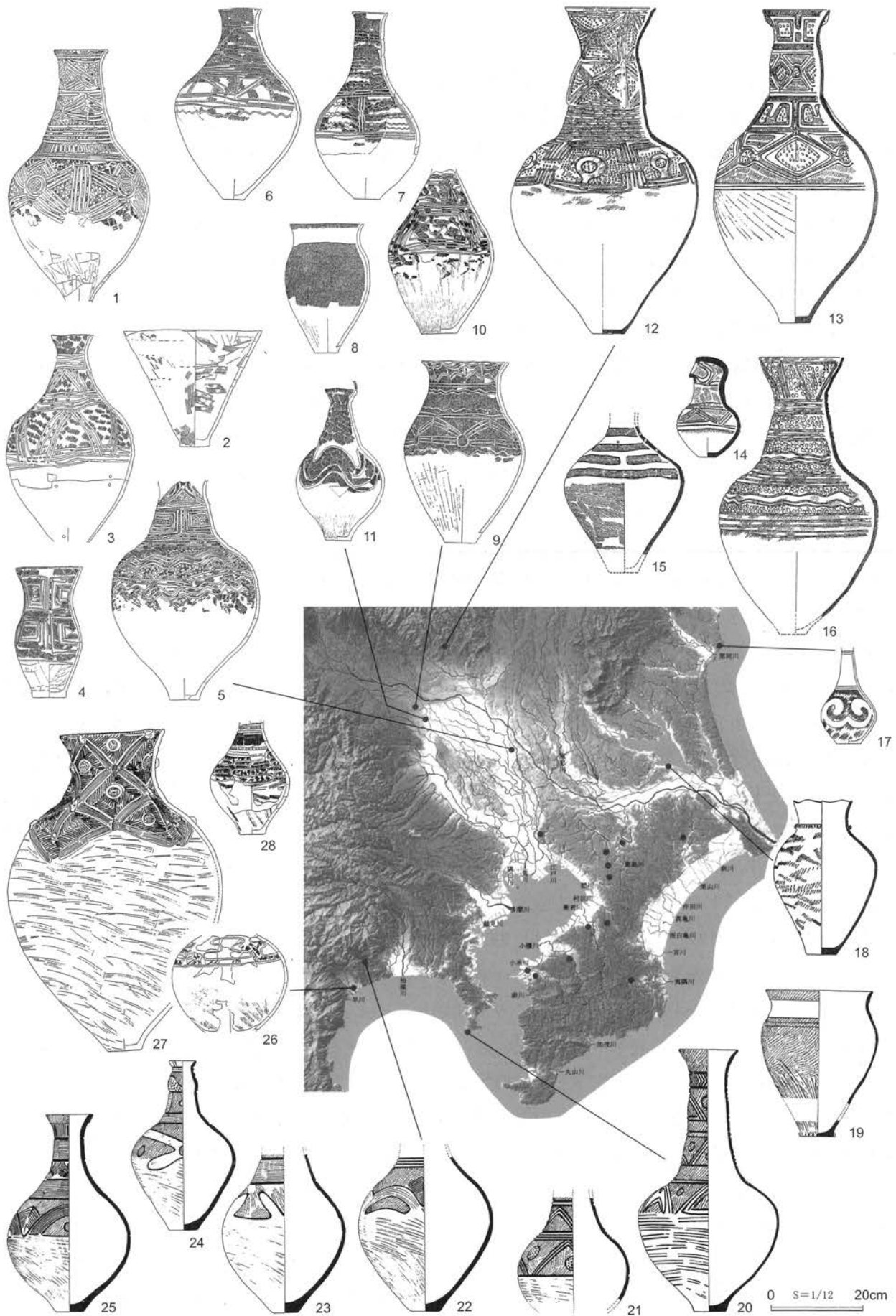
での範囲とし、まず県内の主な遺跡を概観する(第229図)。**常代遺跡**(甲斐 1996)(25~30)は小糸川流域の低地に位置し、「須和田期」(中期中葉)に位置づけられた四隅陸橋型方形周溝墓群が発見された。複数の墓域の変遷や(第235図参照)SD-220(旧河川跡)からの一括遺物に注目が集まった。27は3段の文様帯を有し、三角連繫文内部は刺突文が施されている。平沢式新段階の城ヶ島式に比定され(鈴木 1984)29は菱形連繫文内部を刺突するもので「出流原式か池上式か」微妙な判断(石川 2001)がされたものである。いずれにしても中期中葉の中でも新相の位置づけが提示され、方形周溝墓の開始時期について、甲斐氏の分析からさらに進んだ編年の細分がなされている。28の凸帯、29の頸部の膨らみには出流原式系を指摘するべきであろうが、条痕が胴下部に多用される常代遺跡の細頸壺は、比率的には27にみる平沢式系が多い感がある。また、25は北関東方面の筒型土器の搬入品の可能性も指摘され(石川 2001)、池上式に共通する。26も平沢式新相であろうが利根川中流域の広口壺の影響はないのであろうか。北関東の系譜の存在は武士遺跡20や船子遺跡23にも共通する。**船子遺跡**(渡辺 1970)には27と酷似する壺形24がある(出土遺構等は不明)。棒状工具の沈線区画構造は常代遺跡に共通するが、条痕が存在せず、破片を含めると渦巻縄文及び磨消縄文に野沢2式もしくは貉式(小玉 2004)(第230図17)の北関東系譜の優位性を強調しておきたい。**武士遺跡**(加納 1996)は4基の再葬墓を検出した遺跡である。17、21の横位文様について、報告者の加納氏は「集合凹線」と表現しているが、基本的には平沢式に特徴的な横位条痕文の系譜を想定すべきではないか。一方、18、19の胴下部には条痕文が施されず縄文が胴中位の横位区画文下側のみ施文され、天神前遺跡4等も含め、出流原式に共通する。なお、20、21は小形の鉢形を伴って同一墓坑から出土していることは興味深い。なお、渡辺氏は出流原式系壺形についてはいずれも「出流原式後半」とし、20の野沢2式が21の平沢式と共伴する事実を重視し、野沢2式が遡る可能性を示唆している(渡辺 2005)。**向神納里遺跡**(稲場 1995)の方形周溝墓出土の31、32は頸部の形状が明らかではない。特に31は頸部形状は出流原式的と言えようが、3段文様構成や刺突文への構造変化として(鈴木 1984)平沢式の新相を見るべきなのであろうか。**西国吉遺跡**(蜂谷 1999)では15をはじめ壺形にはすべて条痕が認められないと報告されているが、それを新相と見るか、系譜の違いと見るかは断片的資料からは不明である。**南屋敷遺跡**(梁瀬 2001)10は再葬墓から出土した壺形で頸部に凸帯が巡る。胴部地文は粗い条痕でその上を綾杉状の沈線文が施されている。第230図18の殿内式(弥生時代前期末葉)(小玉 2004)に類例があり、渡辺氏は中期前葉に位置づけられている(渡辺 2005)。千葉県で最も古い再葬墓であろう。

11~14が学史的にも著名な**新田山遺跡**(杉原 1943)である。11は櫛描の連続山形文の内部に刺突文を施してある。14の壺を含め千葉寺町出土土器(杉原 1968)として紹介されたものに近似する。千葉寺町の資料は、最近「中野台遺跡」として新たな報告がなされている(白井 2005)。(なお、鈴木氏は中野台遺跡については「王子台遺跡」の壺形の分析から、新田山遺跡直後で「須和田式直後」(鈴木 1984)と位置づけられている。)白井氏の報告では新田山遺跡は小田原式古式、中野台遺跡が新式と区分されている。こうなると当初「須和田式」の標徴ともされた新田山遺跡にはかなり時期差を有する土器が混在していたことになる。特に不明瞭なのは13であり、「千葉市史資料編」では頸部は比較的短径で復元実測されており、胴下半部や頸部無文帯部の調整記載(条痕の有無等)も明確でない。しかし、長頸の可能性もあり、渡辺氏の記載(渡辺 2005)では明確に条痕文とされており、平沢式の解釈となる。再度検討したい。1~9は弥生時代の「再葬墓」が初めて命名されたことで著名な**天神前遺跡**(杉原 1974)である。渡辺修一氏から「個々の土器に個性がありすぎて」という指摘(渡辺 1988)があるように、以前から系譜の複



第229図 弥生中期前半期の土器(1) (千葉県内)

1~9 岩名天神前遺跡 10 南屋敷遺跡 11~14 新田山遺跡 15 西国吉遺跡  
 16~21 武士遺跡 22~24 船子遺跡 25~30 常代遺跡 31~32 向神納里遺跡



第230図 弥生中期前半期の土器 (2) (千葉県外)

1~5 須釜遺跡 6~9 池上遺跡 10, 11 小敷田遺跡 12~16 出流原遺跡  
 19, 20 遊ヶ崎遺跡 21~25 平沢北開戸遺跡 26~28 中里遺跡 (第Ⅲ)

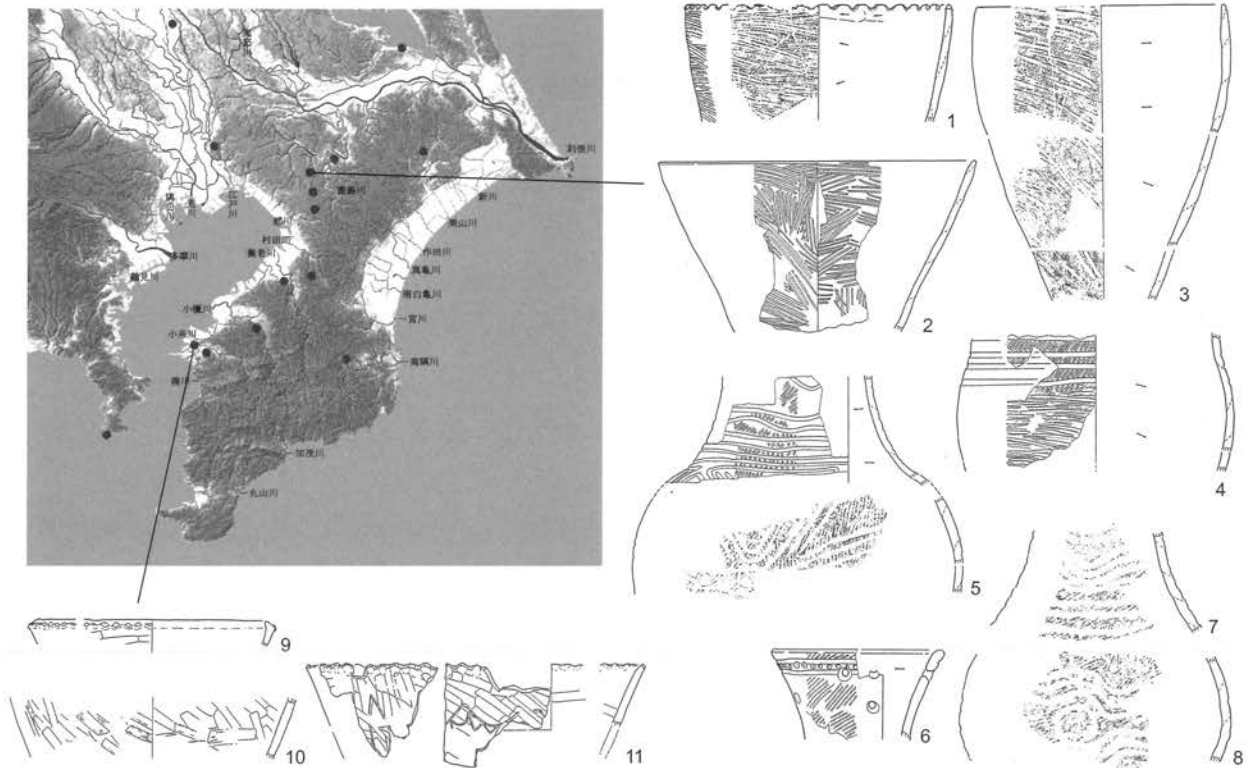


雑さが強調されている。2の変形工字文と付加条縄文を有する壺形が「天神前式」と標徴的に規定されたり(杉原 1984)、1の岩櫃山式系譜の櫛描波状文、9の甕形の磨消縄文等、北関東の東西各地域との接点が見出されている。7の条痕文を有する壺形は鈴木氏によって客体的な「1例」とされた「葉脈文」を有する平沢式である(鈴木 1984)(第230図25)。8は野沢Ⅰ式として位置づけられている(鈴木 1982)。須和田遺跡出土甕形(第228図21)や野沢Ⅱ式が「出流原Ⅲ式」(鈴木 1982)の出現に連なるのに対比させた野沢Ⅰ式の具体例と言えようか。この他、野田市勢至久保遺跡(飯塚 1982)(再葬墓)は池上式併行(鈴木 1984)として編年的にも極めて重要であるが、紙面の都合で掲載できない。市原市小谷田八木遺跡(藤崎 1983)(再葬墓)も合わせ詳細は原典を参照していただきたい。61基もの再葬墓群の発見で有名となった多古町志摩城跡は近刊予定である。荒井氏は「Ⅰ基を除きⅡ期ないしはⅢa期(出流原期)で・・・Ⅱ期は肩の張る壺形で羽状条痕文が施される・・・弧状や波状も見られⅢa期はX字や円形の平沢型、三角連繫文や山形文の出流原式、磨消縄文による渦巻文の南御山Ⅰ式、擦消や充填疑縄文による渦巻文の野沢Ⅱ式、工字文の所謂天神前式・・・」との中間発表をされている(荒井 2005)。

また、中期初頭に位置づけられる資料が常代遺跡他四街道市池花南遺跡(渡辺 1991)(第231図)から出土しているが、詳細については本稿では省略したい。

県外の主な遺跡を概観する(第230図)。殿内遺跡では前述した南屋敷遺跡出土土器に見られた頸部凸帯が型式要素として示されている。小玉氏によれば荒海式とほぼ同じ分布範囲で継続し、弥生前期末葉として紹介されている(小玉 2004)。野沢式の渦巻縄文が千葉県南部地域まで分布範囲を示すのに対し、猪遺跡17に見る無文渦巻文は船子遺跡例(第229図23)を除き確かな出土例は不明である。平沢北開戸遺跡(亀井 1961)(石川 2001)21~25は所謂「平沢型」(関 1983)の細頸球胴の条痕文壺である。なお、本稿では「式」に統一するが「型」とする根拠は原典を参照いただきたい。胴下半部の全面条痕を基調とし、上半部に縄文と横走条痕文を併用することが特徴である。刺突文の有無が「出流原型」との対比的区分要素とされたが、「充填刺突文」は平沢式内の型式変化との見方がある(鈴木 1984)。出流原型との系譜の混在から「平沢・出流原系」という呼称も使用されているが、頸部の横走条痕文の後退、消滅や頸部の長伸化は、石川氏も「平沢式の新相」と主張する(石川 2001)。その具体例が19~21の城ヶ島の遊ヶ崎遺跡(杉原 1968)で、古くは「須和田式」(神沢 1966)と提示された壺形20と甕形19が著名である。但し鈴木氏は甕形に見る「波状櫛目文帯」等の出自から平沢式の範疇とせず、城ヶ島式として明確な切り離しを主張されている(鈴木 1984)。中里遺跡は古くから明治大学による発掘が著名であるが(杉原 1959)現在では宮ノ台式と平沢式の間を埋め、相模地域における「池上式併行」の型式として提唱、資料提示されている(石川 1996, 2001)。但し完形品として把握される資料は、第Ⅲ地点の26~28である(呉地 1997)。平沢式、城ヶ島式とは大きく異なる広口の壺形27も特徴であるが、石川氏が最も強調されたのが濃尾平野の貝田町式や瀬戸内方面に繋がる「ハケメ」手法の導入であり、宮ノ台式への橋渡しである。

北に目を移すと、再葬墓群として歴史的に著名な出流原遺跡(杉原 1984)がある。出流原式は中村五郎氏(中村 1972)以後、「平沢式との論理和」(鈴木 1984)をもって「須和田式」に代る位置づけが確立している。出流原遺跡の多くの土器は、平沢式の新しい時期に併行する編年観があり(石川 1996)。当初から女方式の系譜が主張される他、第229図2の天神前遺跡に共通する壺形も出土しており、印旛沼から北関東東部地域一円の繋がりも確実である。14の人面土器や12のような(頸部の凸帯も含めた)膨らみある頸部や刺突文が特徴的である。地文の縄文はその直下位置で切られ胴下半部に及ぶことは無い。16は



第231図 弥生中期前半期の土器（3）（千葉県内古式）（S = 1～8は1/6 9～11は1/8）  
1～8 池花南遺跡南半部出土 9～11 常代遺跡

「出流原3式」とされ、野沢2式や小田原式の中野台遺跡（白井 2005）及び須和田遺跡（第228図21，出流原3式直後）に連なるとされた（鈴木 1982）。出流原遺跡のやや南の利根川中流域にある著名な遺跡が池上遺跡（中島 1984）である。弥生中期前半の環濠集落跡が検出された。池上式（鈴木 1984）として出流原3式直後に比定され、相模地方では中里式が、房総地域では勢至久保遺跡（飯塚 1982）が併行する。9の広口壺形が特徴であり、壺形の条痕文は消滅するが、出流原式の胴中位で切られる縄文や刺突文が継続するとともに、甕形8には当地域で伝統的な岩櫃山式等の系譜が認められている。このように池上式はより広域的な地域連動が見られる。また、中島氏は甕8を後続する吉ヶ谷式の、無文の甕形を宮ノ台式の祖型と見ている。小敷田遺跡（吉田 1991）は池上遺跡に隣接し、方形周溝墓の周溝端部から土器がまわって出土した。11は側面が穿孔されており、初期の方形周溝墓の埋葬型式を示唆している。常代遺跡に共通する現象である。小敷田遺跡については石川氏により詳細な分析がなされており（石川 2001）遺構の新旧関係や外来系土器を提示しながら、池上遺跡に連続する編年の位置を検証されている。近年の再葬墓発掘例としては須釜遺跡（長谷川 2003）がある。再葬墓としては珍しく甕形や鉢形の出土割合が高く、注目された。壺形、甕形の形状や文様構成からして池上式併行と考えられるが、全面ハケ整形の壺形も見られ、編年の位置に苦慮する。埼玉県にはこの他に再葬墓や住居跡の検出で著名な深谷市上敷免遺跡（1978 蛭間，瀧瀬 1993）がある。関氏の分析により「平沢型」「出流原型」が提唱されたが（関 1983）別掲した（第232図）。なお、以上の土器群の相互の編年観については、石川氏のとりまとめた次表を提示するに留めたい。また、研究者間で定着している畿内様式を前提としたⅠ期，Ⅱ期・・・という広域基準については自身の検討ができていないので省略させていただく。

	相模	埼・群／栃	
弥 生 時 代 中 期	堂 山	1 期	前 組
	平 沢 城 ケ 島	2 期	上 敷 免 出 流 原
	中 里	3 期	池 上 小 敷 田
	宮 ノ 台	竜 見 町	4 期 御 新 田

石川日出志 1996

「東日本弥生中期土器型式編年表」一部抜粋

### (3) 鹿島台遺跡再葬墓 (SK-13) 出土土器 (第26図1~3)

1~3については既に渡辺修一氏によって公表されている(渡辺 2004)。したがって詳細な説明は原典を参照していただきたい。なお、以下の説明の内『 』は渡辺氏の文章をそのまま引用したものである。1は器高53.8cm, 口径9.8cm, 胴部最大径26.7cm, 底径4.3cmを計り, 胴部中位に補修孔と思われる焼成後の穿孔が2カ所ある。全体的に茶褐色を呈し, 器面は荒れている。胎土に白色小石を多量に含み焼成は不良である。底部整形は不明。『口縁部と頸部中位に縄文帯, 頸部に2段の横位条痕帯, 肩部に主文様帯が』施されている。主文様は『V字状とI字状の区画に条痕を充填し, 間に刺突文を伴う円形区画を加える。胴部下半には斜位の条痕』があり『文様帯区分が平沢型土器の特徴をもっているものの, 平沢型土器の祖形に対して忠実でない部分もある』とされている。条痕原体は貝殻を用いたようであり, 頸部凸帯を含め, 出流原式の系譜が強調されようか。結論としては『出流原式古段階』の位置づけがされている。なお, 2段の横位条痕帯が存在するものの, 器面が荒れており, 本来的な条痕の深さ等も不明である。ほぼ消滅しているとすれば平沢式の範疇では新相と言えようか。

2は器高64.8cm, 口径10.1cm, 胴部最大径34.0cm, 底径7.1cmを計る。全体的に黒褐色を呈し1に比べると器面は荒れていない。胎土に小石を少量含み焼成は比較的良好である。1と比べ材料粘土の質が明らかに異なる感がある。縄文が充填されていない部分は器面の磨き上げが見られ, 底部辺部まで条痕文が及んでいる。『口縁部から肩部までを地文として縄文を施し, 太い沈線による重四角文を3段目には刺突文を伴う。胴部最大径付近は横位の条痕, 胴部下半部は斜位の条痕であるが後者には縦位の羽状条痕が意識されているのは疑いない』とされている。主文様は常代遺跡28に類似し, 出流原式に原型を見いだすものの『特に縦位の羽状条痕は西関東的』といえる。また, 頸部に3段の同じ区画文様があり, 条痕文が施されずに縄文が充填されるのを「条痕文の消滅」と見るならば, 遊ヶ崎遺跡20に共通し, 平沢式新相(もしくは城ヶ島式)となる。結論として『基本的には出流原型であるが・・・(平沢型との)折衷型』とされた。なお, 2の胴下半部の条痕文が, 上敷免遺跡での関氏の指摘にあった「平沢型の端部のそろった条痕」(第232図)(関 1983)なのかは判断できない。

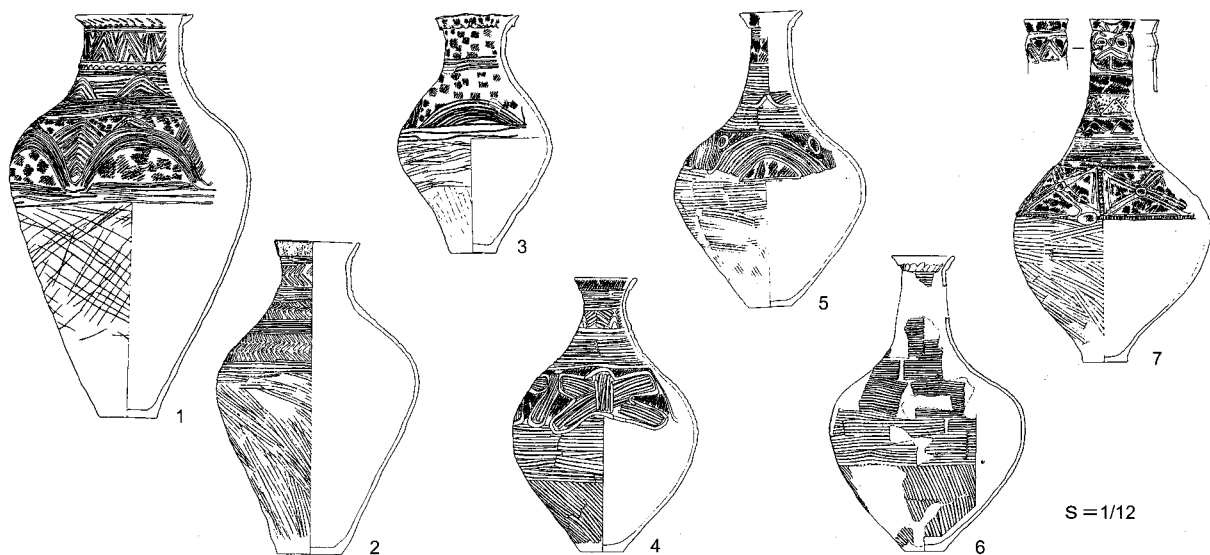
3は器高(現在高)44cm, 胴部最大径31.4cm, 底部径7.4cmを計る。全体的に茶褐色を呈するが一部赤みが強い。胎土に白色小石を含み, 焼成は不良である。底部辺部まで条痕文が及んでいる。『縄文を地文

とした上でX字状区画を主文様として間に1字状区画，X字の交点に円形文を配置する。主文様は頸部と肩部にあり，条痕が充填される。また，胴部下半はやはり斜位の条痕が施される。3の主文様のX字状区画は第229，230図でも明らかなように平沢式～中里式，出流原式～池上式の時期に共通して定着しているが，3は条痕文による施文である。胴下半部の条痕文も含め，平沢式の範疇としたいが，渡辺氏は1，2と同様に流原式との折衷的要素を指摘された。全体としては『出流原式古段階』の範疇において平沢式の型式属性を共有するという解釈は提示しておきたい。

なお，該期の参照資料としては，関氏の分析で著名な上敷免遺跡（出流原式直前期）を取り上げておくべきであろう（第232図）（関 1983）。1は「東海地方中期初等の条痕文系土器群が在地化した」とされる肩の張った広口であり，やや古式を示す。2は旧来「岩櫃山式」の範疇とされたものであるが，出土土器総体としては定形化した「平沢型の壺」（4～7）が多い（関 1983）。6のような全面条痕や4，5の頸部の横方向条痕文が明瞭に存在することは，鹿島台2，3とは基本的に異なる。但し，条痕使用による主文様の構成は類似している。また，7の人面は「上敷免3式」（鈴木 1984）とされ，出流原式の古段階に連なる。鹿島台遺跡についてもほぼこの時期に相当するのであろうか。

#### （4）鹿島台遺跡土坑（SK-20）出土土器（第27図1）

1は器高（現在高）19.0cm，最大幅14.8cmを計る。LR縄文が施された後，棒状工具による重三角連繫文が施され，間に刺突文が充填される。全体的に茶褐色を呈し，焼成は良好である。底部には布目痕が見られる。地文の位置，三角連繫文，刺突文はいずれも出流原式に見られる要素であり，特に文様構成及び大きさは第230図14の人面土器に共通する部分が多い。なお，14の人面土器は出流原遺跡での分析では第一類A類として「須和田式の初期」の位置づけがなされている。



第232図 上敷免遺跡出土土器

## 2，再葬墓と初現期の方形周溝墓について—鹿島台遺跡と常代遺跡—（その1）

### （1）常代遺跡との年代的な対比（第235図参照）

鹿島台遺跡から小糸川を約2km下った沖積地に常代遺跡がある。ここから多くの方形周溝墓や土坑（墓）が検出された。「再葬墓」と初現期の「方形周溝墓」が同時期に検出されたとなれば，弥生時代を代表す

る墓制の研究に大きな進展をもたらすであろう。しかし、鹿島台遺跡の整理作業は、中核となる中期後半の集落跡の地区（B、C区）が未完了である。そのため本書に掲載した該期の方形周溝墓についても資料紹介にとどめている。今後分析を継続するため本稿を「その1」としておきたい。

まず、鹿島台遺跡の再葬墓（SK-20）が常代遺跡と年代的にどう対比されるのか触れておく。常代遺跡は甲斐氏によって墓域の変遷が示されており、各墓域（A～C）ごとに各時期が存在しているが、特徴的な状況を原文に基づき抜粋すると以下のとおりである。

- |           |                                 |
|-----------|---------------------------------|
| 1期 弥生中期前半 | 墓域B、Cで土坑墓                       |
| 2期 弥生中期中葉 | 須和田式、墓域Aでは方形周溝墓（壺形が多い）主体。       |
| 3期 弥生中期中葉 | 須和田式最新、小敷田併行、墓域Bでは土坑墓（甕形が圧倒）主体。 |
| 4期 弥生中期後葉 | 宮ノ台式古段階、墓域Aで方形周溝墓継続             |
| 5期～8期     | 宮ノ台式～古墳時代前期（以下略）                |

石川氏は2期を中里・池上併行期とし、中期中葉でも新相を位置づけている（石川 2001）。鹿島台遺跡の再葬墓（SK-13）及び土坑（SK-20）は、上記の出土土器型式観から判断すると2期に併行すると思われるが、そうすると石川編年では中里・池上併行期に含まれることになり、「出流原式古段階」とした鹿島台例との微妙な時期差が生じてしまう。これについては今後の検討課題としたい。いずれにしても常代遺跡で方形周溝墓が初現した頃、近接する台地上の鹿島台遺跡では未だ再葬墓がつくられていたことは間違いないと考える。その後、鹿島台遺跡で形成された方形周溝墓群は、宮ノ台式期古段階からあるようだがB、C区が現在整理作業中であるため、成果を待って言及したい。

## （2）再葬墓の構造をめぐる諸問題

### ①再葬墓の周囲の遺構、遺物

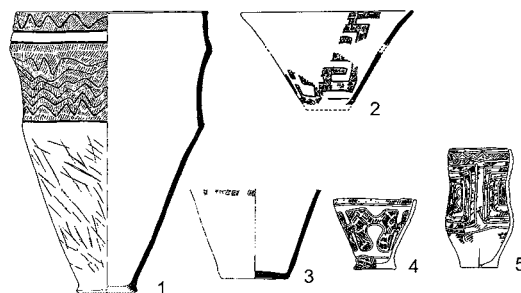
2004年の考古学ジャーナル12月特大号にて「再葬墓研究の現状と今後の課題」が発表された。縄文時代からの再アプローチや居住域を含めた空間的な復元を主とした新たな方向性であり、重要で優れた指針と言えよう。（石川他 2004）。常代遺跡の方形周溝墓との対比をする前提として、本稿ではこの指針に基づく「再葬墓の構造」に関して、僅かな情報であるが提示していきたい。

鹿島台遺跡では再葬墓SK-13は単独検出である。やせ尾根であるから当然なのか、と思ったが周囲の表採遺物を調べると縄文晩期から弥生中期中葉の土器片が確認できる。これらの提示は今後の報告に委ねざる得ないが、当該期の発掘調査においては、ローム層上位の包含層の存在に十分留意する必要がある。SK-13の場合、甕形を含む中期中葉の土器片及び石片が存在していたという情報もある。市原市の武士遺跡では再葬墓周囲に土器集中地点が存在している（加納 1996）。近年では須釜遺跡でも同様な状況がある（長谷川 2003）。このことは周囲にさらに複数の再葬墓が存在したか、性格の異なる（土器を伴う）遺構があったか、あるいは一時的な人間の滞在等の仮説も想定される。もともと再葬墓や土器棺（後期を含む）の発掘調査は、遺構確認面を上位で正確に捉えることは経験上難しい。ほとんどがはじめに土器の出土があって気付く場合が多い。またローム層に掘り込まれた土坑底面が周囲の遺構と比べても高位の場合がある。こうした県内の発掘例から、これらの葬法が意識的に地上に土器を露出させていたという仮説も成り立つことは、筆者も以前指摘したことはある（註1）。すなわち武士遺跡等の再葬墓周囲の遺物集中地点の存在は、石川氏らも指摘するように（掘り込みが無いが極めて浅い）何らかの遺構を伴っていた可能性はあり、これらを含めたトータルな再葬墓空間分析が今後必要であろう。

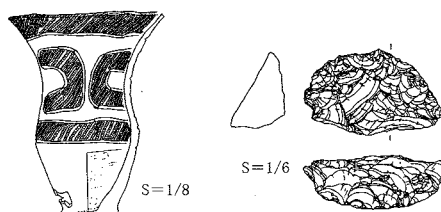
②再葬墓に見る器種と異系譜

筆者が特に注目しているのは須釜遺跡での甕形等の出土例である（第235図）。これは再葬墓内から共伴する場合や周囲から出土する場合がある。いずれにしても「壺形への再葬」とは異質の「甕形等を必要とする」用途、空間が、再葬墓本体もしくは周囲に存在していたわけである。再葬墓は骨が壺形に収められるまでには当然のことながら複雑なプロセスがあったわけで、縄文時代の具体例やその伝統については既に指摘されているところである（設楽 2004）。しかし、弥生中期の再葬墓の構造については平沢式の細頸壺の多用、甕形の少なさ、周囲に散在する遺物、遺構の内容等に不明な点が多い。そうした中で須釜遺跡では再葬墓の新相段階（池上式古段階）における「壺形以外」の多さが注目され、それらが再葬墓周囲からも出土し、さらに甕形がすべて伏せられていたという特異な姿が見られたのである。

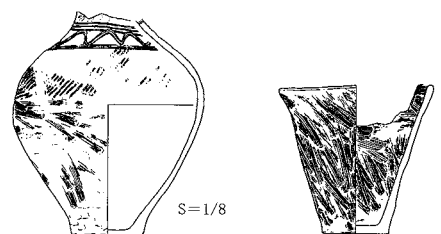
そこで須釜遺跡の類例を調べるために、時期的に前後する資料を第233図～第234図に示した。但しここには方形周溝墓及び「土器棺墓」と称せられる遺構等も含まれている。これらを見れば須釜遺跡とほぼ同時期の常代遺跡の「土坑」SK-463に同様な甕形の急増が見られていることが分かる。さらに気になるのは、常代遺跡では甕形において野沢式や北関東東部地域の系譜が目立つことである。この点については古く杉原氏が出流原遺跡における甕形について、壺形とは異なる女方式の系譜を指摘されている。また、利根川中流域では、平沢式の壺形土器が「岩櫃山式に共通の甕形土器と組成する」（渡辺 2005）状況があることも注目すべきである。もちろん、弥生時代中期前半期における関東各地域が、墓制とは関係なくこうした土器型式の複雑な合体、融合等を引き起こしていたことは周知されているものの、第233～第234図を見る限りは用途の異なる器種の利用の際に異なる系譜を顕在化させ、表現した可能性もあながち否定できない。なおかつそれは再葬墓に限らず、方形周溝墓や土坑においても共通していることに注目したい。常代遺跡の方形周溝墓SZ-63では壺形とは明確に用途が異なるもの＝石器（黒曜石石核）に北関東東部系譜の小形甕形（広口壺）が出土している。なお、石器の出土例は再葬墓においても類例があ



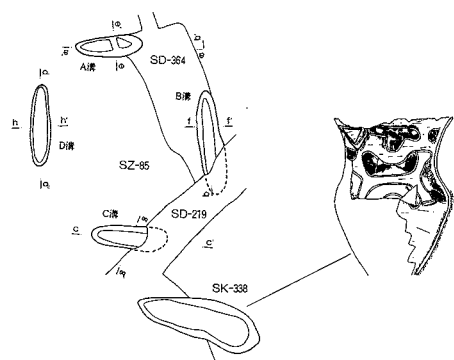
第233図「壺形以外」の一例（再葬墓）（中期中葉）  
1. 天神前2号墓墳 2. 出流原37号墓墳 3. 出流原31号墓墳  
4. 須釜8号再葬墓 5. 須釜7号再葬墓



（常代遺跡SZ63の甕形（広口壺）と石核）



（常代遺跡SZ151の壺形と甕形（広口壺））



（常代遺跡SZ85に近接するSK338の甕形（広口壺））

第234図「壺形以外」の一例（方形周溝墓）（中期中葉）





③再葬墓および方形周溝墓に共通して「壺形以外」の利用頻度は池上期にかけて共に高まる。再葬墓の隣に甕形のみ置く例（須釜遺跡）や方形周溝墓の隣に多くの甕形を集中させた土坑をつくる例（常代遺跡）が提示できる。

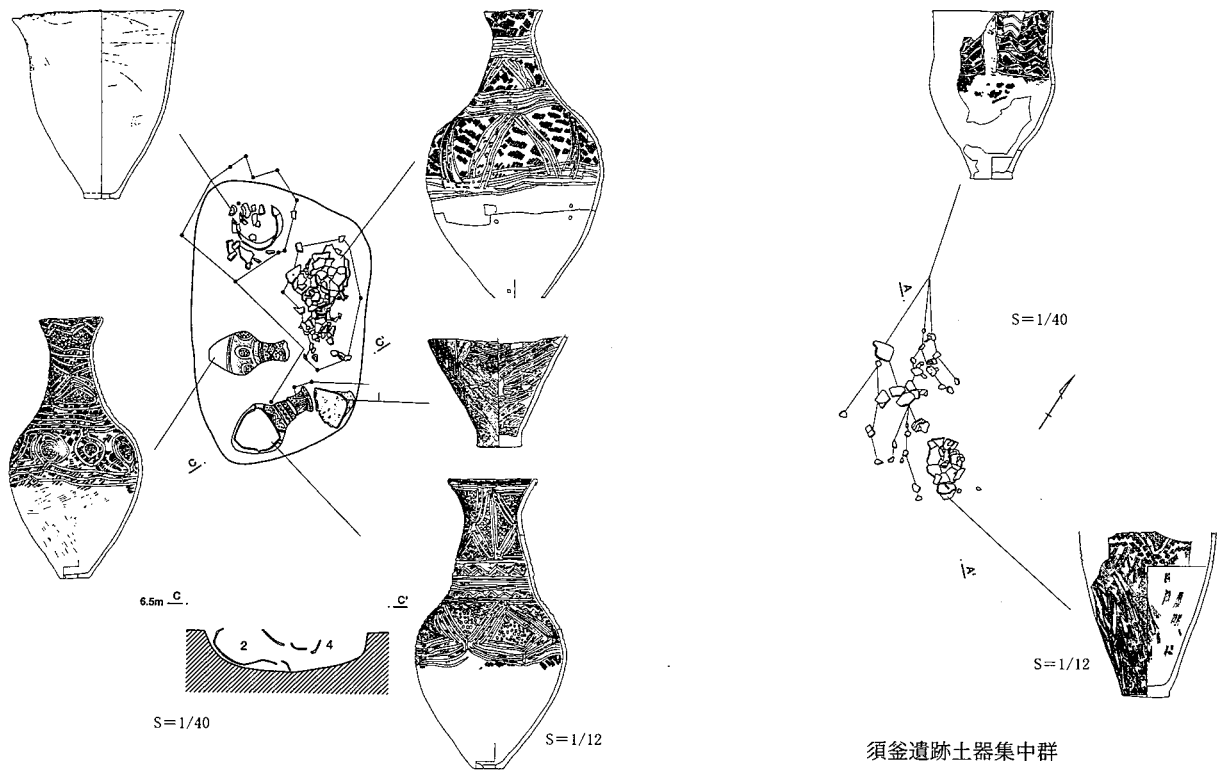
### （3）再葬墓と方形周溝墓の共通要素とその後の展開

前項では再葬墓と初期の方形周溝墓の共通要素が一部指摘された。さらに常代遺跡では土器の出土状況における共通性が話題となった。第229図27, 28等は中期中葉の方形周溝墓の溝からの出土であるが、溝の端部に偏ってまとまって重なるように出土しており、あたかも再葬墓の如くである（春成 1993, 石川 2001）。なお、この状況は小敷田遺跡でも共通する。同様に土坑（SK-463）の形状もまた方形周溝墓の溝の形状に近い長円形であることにも注目しておきたい。今後、再葬墓と初現期方形周溝墓の資料の分析の深化により、当時の異なる2つの墓制の中に見られる「共通要素」をより具体化できると考えている。この点は本報告書の続編での課題としたい。

再葬墓は現在のところ、従来編年で言う中期中葉「須和田式」を象徴してきたもので、その後の中期後半宮ノ台式期では「土坑墓」や「土器棺墓」と報告される遺構が多い。一方で方形周溝墓は継続的に飛躍的な分布の拡大と展開を見る。では再葬墓は関東各地からどのように姿を消したのであろうか。当然のことながら「土坑墓」や「土器棺墓」はそれぞれが内容的に同質一括できるものではなく、中には再葬墓との関連を十分指摘しなくてはならない様相のものも含まれている。須釜遺跡例を再葬墓とは呼ばず別の視点から見研究者もいるようであるが、県内でも印旛沼周辺地域の成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡では、細頸の壺形と「壺形以外」に整形（再利用）した土器が共伴し合口構造の「土器棺墓」と報告されて注目された（第236図）。ここでは「再葬墓」という断定は避けている。しかし注目すべきは二者の土器系譜が明確に異なり、一方は北関東東部地域に繋がっていることである（酒井 2002）。この現象については、断片的ではあるが、前述してきたように関東各地の再葬墓の初現から中期中葉後半にかけて見られた繋がりの中に見いだすことができよう。

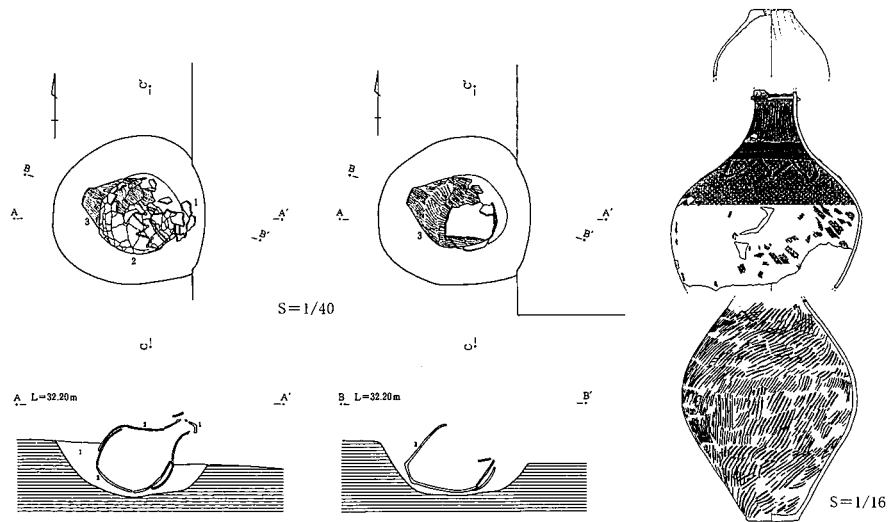
再葬墓は一般的には方形周溝墓の分布の拡大、展開とともに姿を消すと思われる。しかしタダメキ遺跡のある印旛沼周辺地域においては、弥生時代中期後半以降、西上総地域とは明確に異なり方形周溝墓が忽然と姿を消していることを強調したい。これらの状況は拙稿に紹介したが（加藤 2004）、北関東東部地域の系譜を維持した当地域では、伝統的な墓制が弥生時代当初から中期後半まで継続的に営まれていたことが想定できる。すなわち地域によっては中期後半の段階でも系譜的には「再葬墓」に繋がる「土器棺墓」が存在していたことを指摘しておきたい。今後は名称の問題や方形周溝墓の展開との関連について分析を深化させるべきであろう。





須釜遺跡 3号再葬墓

須釜遺跡土器集中群



成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡 5号土器棺墓

第236図 「壺形以外」の一例（再葬墓，土器棺）（中期中葉～中期後半）

引用文献

飯塚 博和 1982 『野田市半貝・倉之橋・勢至久保』野田市教育委員会  
 石川日出志 1996 『東日本弥生中期広域編年の概略』Y A Y！弥生土器を語る会  
 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学第113号』駿台史学会  
 2004 「再葬墓研究の現状と今後の課題」『考古学ジャーナル12月増大号』  
 市川市史第1巻 1971 「原始農耕文化—弥生時代—」市川市史編纂委員会  
 稲場昭智他 1995 「向神納里遺跡」『大竹遺跡群』（財）君津郡市文化財センター

- 大島 慎一 1997 「小田原地方の弥生土器研究に関する覚書」『小田原郷土文化館研究報告33』
- 甲斐 博幸 1996 『常代遺跡群』 君津郡考古資料刊行会
- 加藤 修司 2004 「印旛沼周辺地域における方墳の出現と展開」『研究紀要3』(財)印旛郡文化財センター
- 加納 実 1996 『市原市武士遺跡』財団法人千葉県文化財センター
- 亀井 正道 1961 「神奈川県秦野氏平沢遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編2』
- 神沢 勇一 『日本の考古学3』河出書房
- 呉地英夫他 1997 『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市教育委員会
- 小玉 秀成 2004 「霞ヶ浦の弥生土器」『平成16年度特別展』玉里村立史料館
- 酒井 弘志 2002 「成田市南羽鳥タダメキ第2遺跡」『南羽鳥遺跡群Ⅳ』(財)印旛郡文化財センター
- 設楽 博己 2004 「弥生再葬墓における縄文文化の伝統」「再葬墓研究の現状と今後の課題」  
『考古学ジャーナル12月増大号』
- 品川 欣也 2004 「弥生再葬墓と同時代遺物集中区」「再葬墓研究の現状と今後の課題」  
『考古学ジャーナル12月増大号』
- 白井久美子 2005 「千葉市中野台遺跡・荒久遺跡(4)」『千葉寺地区埋蔵文化財調査報告Ⅴ』  
(財)千葉県教育振興財団
- 杉原 荘介 1943 「下総新田山遺跡調査概報」『人類学雑誌58巻7号』
- 1961 「神奈川県小田原市中里(鴨の宮)遺跡(I)・(II)」『日本考古学年報8』
- 1961 「千葉県千葉市坂月新田山遺跡の土器」『弥生式土器集成 資料編2』
- 1968 「南関東地方」『弥生式土器集成 本編2』
- 1974 『佐倉市岩名天神前遺跡』明治大学
- 1984 『栃木県出流原における弥生時代再葬墓』明治大学
- 鈴木 正博 1982 「出流原抄」『利根川3』利根川同人
- 1984 「王子台」の頃』『利根川5』利根川同人
- 関 義則 1983 『上敷免遺跡』(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 千葉市史資料編1 1976 「弥生時代」千葉市史編纂委員会
- 中島 宏他 1984 『池守・池上』埼玉県教育委員会
- 中村 五郎 1972 「野沢1式土器の類例とその時代」『小田原考古学研究会会報2』
- 長谷川清一他2003 『須釜遺跡』埼玉県庄和町教育委員会
- 春成 秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」『国立歴史民俗博物館研究報告第49集』
- 蜂谷孝之他 1999 『市原市西国吉遺跡』(財)市原市文化財センター
- 蛭間真一他 1978 『上敷免遺跡』深谷市埋蔵文化財調査報告書 深谷市教育委員会
- 藤崎 芳樹 1983 「市原市小谷田八木遺跡の弥生式土器」『研究連絡紙3』(財)千葉県文化財センター
- 梁瀬裕一他 2001 「南屋敷遺跡」『千葉市源町遺跡群』(財)千葉市文化財調査協会
- 吉田 稔他 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 渡辺 正吾 1970 「大多喜町船子遺跡の新事例について」『総南文化12』
- 渡辺 修一 1988 「房総における弥生時代墓制」『東日本の弥生墓制』第9回三県シンポジウム
- 2001 「須和田遺跡雑感」『千葉県史研究第9号』千葉県
- 1991 「池花南遺跡」『内黒田遺跡群』財団法人千葉県文化財センター
- 2005 「第Ⅱ部資料 土器の変遷—弥生土器—」「遺物・遺構(4)壺棺再葬墓」  
『千葉県の歴史 資料編 考古4』
- 註1 加藤修司 平成16年度 千葉県法人連絡協議会共同研修会での事例発表 平成16年10月

## 第4節 古墳時代の遺構と遺物

### 1. D区の集落

古墳時代の遺構は、中期の竪穴住居22軒と弥生末から古墳時代初頭の方形周溝墓2基及び中期末から後期の古墳3基である。ここでは、主に竪穴住居出土の土器を基本にして住居跡の変遷を考えてみたい。出土土器については、地域性を考慮して小沢洋氏の分類（註1）を参考にした。

#### （1）出土土器について

中期のみの短期間のため、器形変化が乏しく分類することは難しいが、ここでは、全期を通してみられ、なおかつ比較的形態的な変化が伺われる高杯と杯を中心に時期区分を行うこととする。また、壺などの他器種の様相も加味する。

#### 第Ⅰ期

高杯は長脚で、全体的に開きは少なく、柱状に近い。杯部では、体部下端の稜が明瞭で、SI-010のように外方に突出する古い様相が残る。また、杯はSI-049で1点出土しているのみで、客体的存在である。壺では、素口縁のものがほとんどであるが、SI-010では、複合口縁も見られる。

#### 第Ⅱ期

この時期になると資料数が増加する。杯が本格的に出現してくるのが大きな特徴である。形状は、平底で器高の深いもの、椀状で口唇部を外側に摘み上げるものが多いが、SI-013のように器高の浅い丸底のタイプも姿を見るようになる。高杯をみると、長脚ではあるが、下部の開きがやや大きくなり、短くなる傾向がある。小型丸底壺も少なくなる。

#### 第Ⅲ期

本区での古墳時代集落最終段階の時期となる。この段階には、比較的時期の明瞭な須恵器がみられる。SI-011出土の直口壺は、作りが丁寧で、胴部のタタキ目を完全にナデ消しており、古い様相といえよう。TK-216の新段階頃であろうか。また、SI-022の舟絵が刻まれたコップ状の椀形土器については後述するが、TK-216の古段階頃と思われ、直口壺よりは古い時期の所産である。土師器杯は、前期に出現した器高の浅い丸底の杯が多くなる。高杯は脚部が短くなる傾向がさらに強まり、後期の高杯の様相に近くなる。

#### （2）集落の変遷

上記の土器の様相から、該期の年代観及び竪穴住居をみると、以下のように分けられよう。

I期（5世紀前半前葉頃）SI-010, SI-016, SI-024, SI-44, SI-049, SI-050, SI-060, SI-068

（小沢氏による2b期）

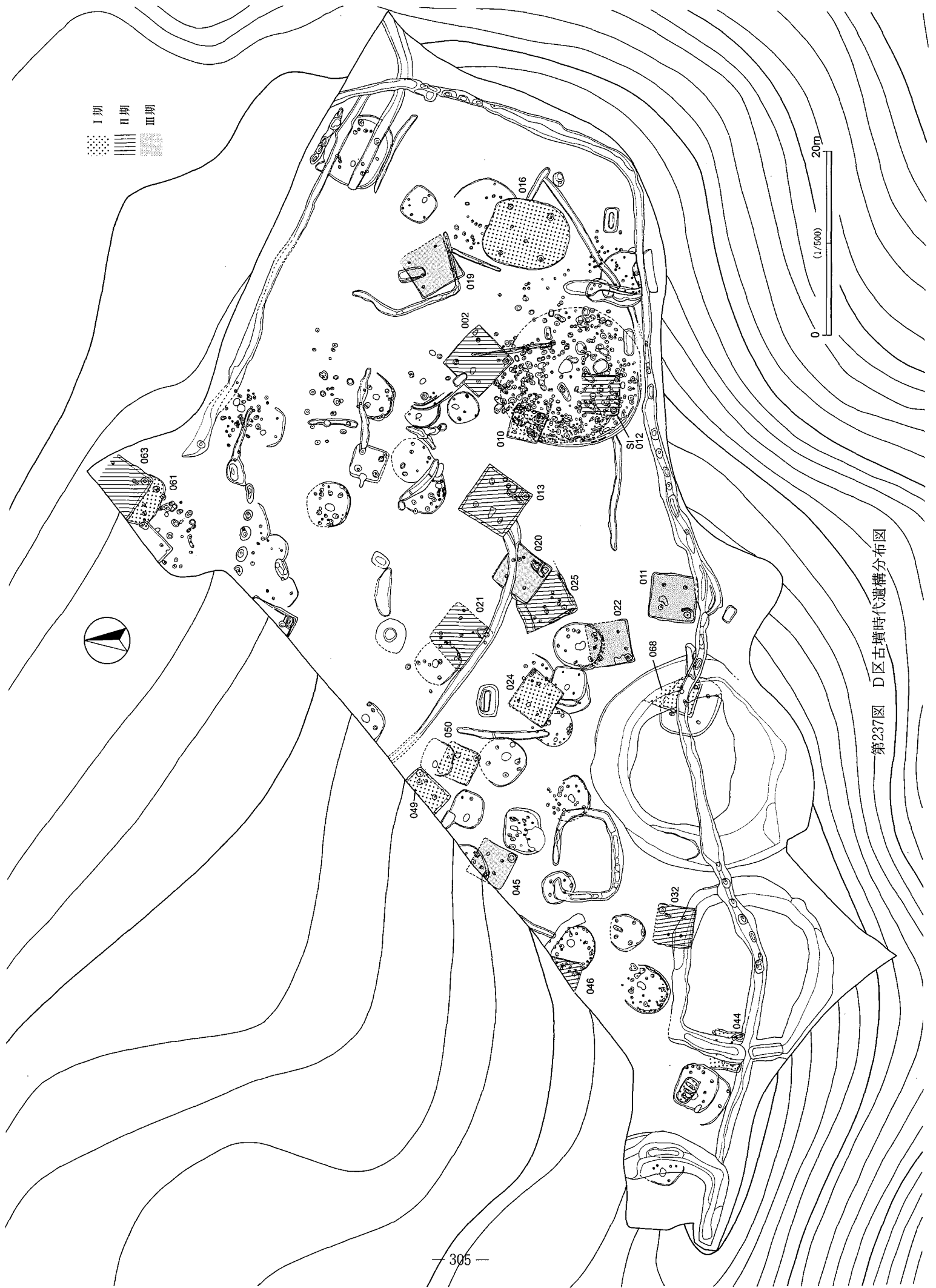
II期（5世紀前半後葉頃）SI-002, SI-012, SI-013, SI-020, SI-021, SI-025, SI-032, SI-046, SI-063

（3期）

III期（5世紀中葉頃）SI-011, SI-019, SI-022, SI-045

（4期）

まず、第Ⅰ期には8軒の竪穴住居が営まれる。調査区のほぼ中央部にSI-024, SI-049, SI-050, SI-068がほぼ直線的に並び、離れて東側にSI-010、西側にSI-044が一軒ずつ構築されている。床面積からみると、全体が明らかなのが少ないが、SI-024が19.9㎡と本期では大形で、以外の住居跡は14.5㎡前後を測る比較的小形のものが多い。なお、小判形を呈する大型のSI-016は、弥生後期の土器を含むが、古墳時代中期の土器が主体で、石製模造品が出土していることなどから第Ⅰ期の中を含めた。



第237图 D区古墳時代遺構分布图

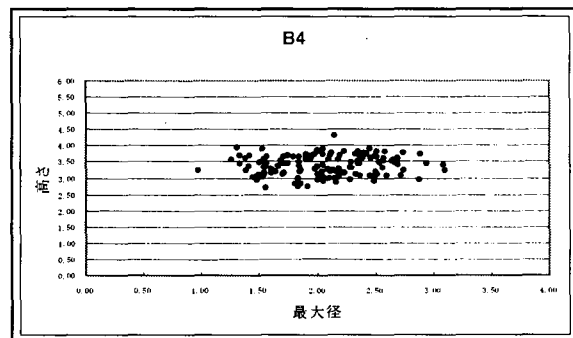
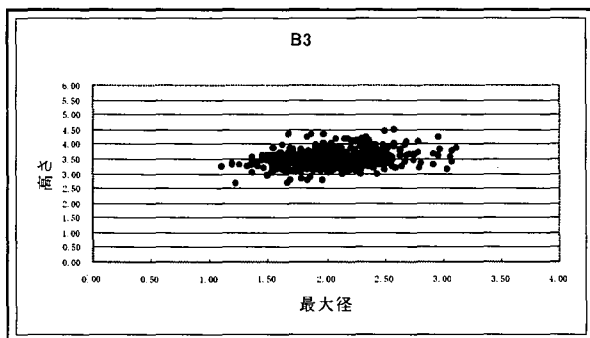
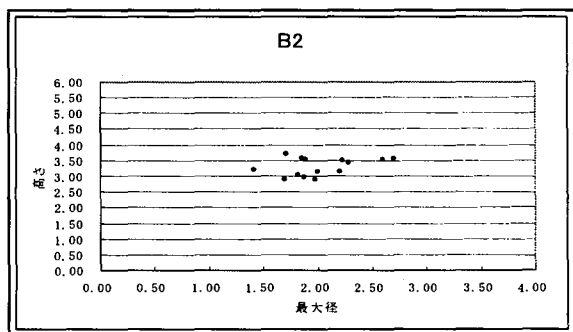
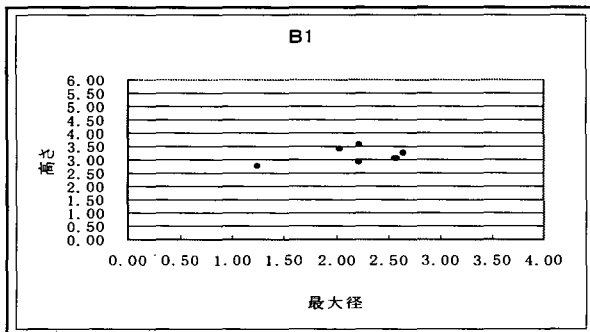
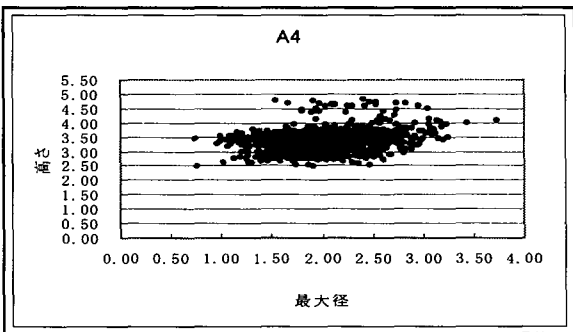
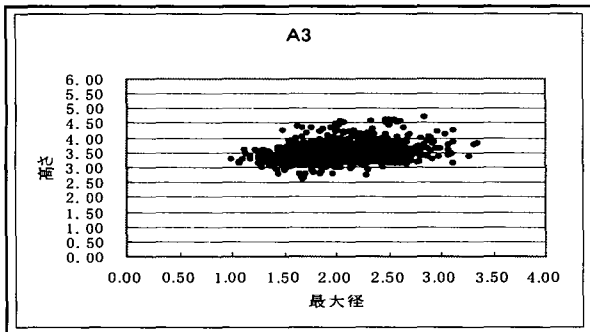
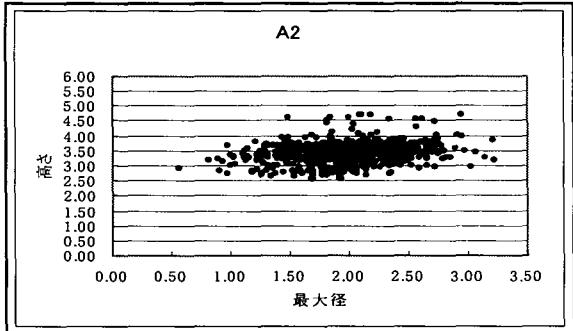
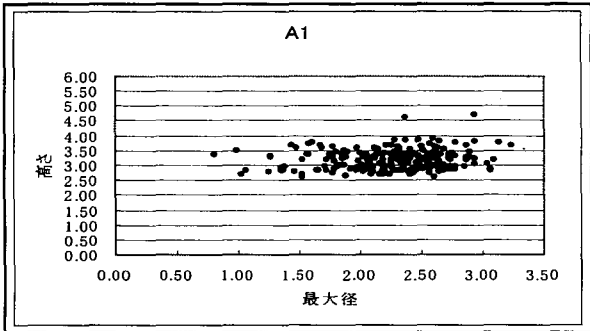
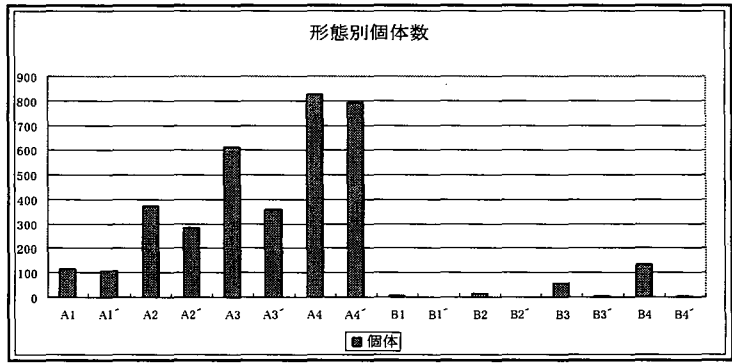
第Ⅱ期では9軒の竪穴住居数で、軒数的にはⅠ期とほとんど変わらない。調査区中央から東側に位置するSI-002・SI-013・SI-021・SI-025の4軒は床面積30㎡を超える住居跡で、Ⅰ期より大型化したグループとして存在し、中心的な区域となろうか。一方、西側のSI-046・SI-032はⅠ期同様小型で、中心的なグループとは主軸方向も異なる。Ⅲ期には5軒となり集落の規模が減少する。前期まで床面積の格差がみられたが、Ⅲ期ではいずれも20～26㎡程度と大きな差がなくなるのが特徴である。また、SI-022にカマドが出現するのも本期の注目すべき点である。分布としては、SI-019が単独で存在している以外は、Ⅱ期の中心域を踏襲するように調査区中央に集中する傾向がある。

本区の集落は、弥生時代後期の集落消滅後、前期がほとんど姿を見ずに、中期になって突如として再び台地上に集落が形成される。そこには内部の自発的発展ではなく、外部からの新たな入植を想定した方が妥当と思われる。ただ、調査区外となる本区の西側には明らかに集落が延びており、北側には、整理中のC区が位置する。C区も本区と似たような集落構成であり、その成果を併せてさらに検討していきたい。

## 2. A区古墳について

A区からは、高い墳丘を有する円墳である4号墳と墳丘が遺存していない2基の円墳が検出された。4号墳は、丘陵先端部に位置し、明確な周溝を持たずに、地山を整形することにより見かけの墳丘高を高く見せている。また、5基の木棺直葬の埋葬施設が設けられ、掘り込み面である平坦面がかなり広く形成されていることなどを考えると、まさしく中期の大型円墳の要素を含んでいる。一方、埋葬施設から出土した副葬品では、3号埋葬施設から出土した鉄鏃が良好な資料である。これらの鉄鏃の型式は、白井氏による分類（註2）の剣身系鉄鏃の範疇に含まれるものと考えられ、腸袂が明瞭に形成され、時期的には6世紀中頃の所産であろう。また、墳丘中から出土した土師器杯身と杯蓋は内外面赤彩され、器形の特徴から鉄鏃と同様の年代が考えられる。

一方、周溝のみを検出したSM-001は、小型壺の年代観から、5世紀中頃から後半にかけての築造と思われる。この古墳で注目されるのは、その位置からみて、埋葬施設になると想定されるSK-032の存在である。この施設からは、3,769個体もの大量の滑石製白玉とともに、細身の管玉や勾玉、鉄製刀子・針が出土している。白玉は、第2章第3節で説明したように、A1～A4及びB1～B4に分類され、A3・A4が圧倒的に多い。これらは、丁寧な調整で、算盤玉状あるいはそれに近い形状である。粗雑の作りが少ないことから、白玉の中でも比較的古い様相を示しているのであろう。また、4千個に近いきわめて大量の白玉を副葬する例は県内では見当たらない。このような特徴的な埋葬施設の中で、もう一つ注目される資料に、針と思われる鉄製品がある。エックス線撮影によって3本の針が筒状の木製容器に入っていることが明らかとなった。当初は縫い針と考えていたが、頭部に糸を通すための孔がなく、他の用途を考えてみた。そこで、全国古墳出土の同様な鉄製品を集成した結果、管見では71基の古墳で出土が確認され、その内12基で3本検出されている。3の倍数を加えると17基となる。もちろん、1本だけの出土が32例と多いが、3本1セットとなることが重要な鍵を握っているものと推測される。しかも、このような鉄製品を出土する古墳は中期古墳にほとんど限定される。3本1セットの用途を何に求めるかは現段階では難しいが、現在でも木の軸に3本の針を差し込んで使われているものに、刺青針がある。鹿島台遺跡B区の3号墳からは、線刻による入れ墨が施された顔の埴輪が確認されており、時期的にも5世紀中頃と思われる。このような状況から、本古墳から出土した鉄製品は入れ墨用の針となる可能性も考えられよう。これについては、別の機会にさらに検討を加えてみたい。



第238図 白玉の形態別グラフ

### 3. 舟絵の描かれた須恵器

弥生時代の絵画土器は、前期末に福岡市の吉武高木遺跡で現れる。中期の中葉に畿内で描かれ始め、そして中期後葉に盛行する。絵画土器全体の約65%が近畿地方に集中していることが、橋本氏により報告されており（註3）、近畿地方が絵画土器の中心であることは明らかである。その後、絵画土器が、東西に伝播していく中で、房総の地にもその足跡が見られるようになる。

本遺跡のD区SI-022から、焼成前に舟の絵が刻まれた須恵器が出土した。詳細を報告した上で、絵画土器のうち、房総での初現である弥生時代終末期から古墳時代の舟絵に限って紹介し、若干の考察を加えたいと思う。

#### （1）須恵器の概要

SI-022は本遺跡の竪穴住居の中で、唯一カマドを持つ。本カマドは煙道部が壁を掘り込まない構造で、初現期のタイプである。房総では、東京湾岸にいち早くカマドが導入されており、本遺跡もその範疇に入る地域であろう。舟絵の須恵器については、白井氏により詳細に紹介されている（註4）が、器形はコップ状の椀型を呈し、類例はあまりないが、調整技法などの特徴より、TK-73の新段階からTK-216の古い段階にあたると思われる。須恵器に描かれた絵画はゴンドラ形の舟と、舟の艫を切るように刻まれた「V」字形の記号である。絵画はその形状から、川舟であろうと思われる。また、「V」の記号は、須恵器製作集団、あるいは工人の窯印の可能性がある。

#### （2）各地の舟絵土器の例

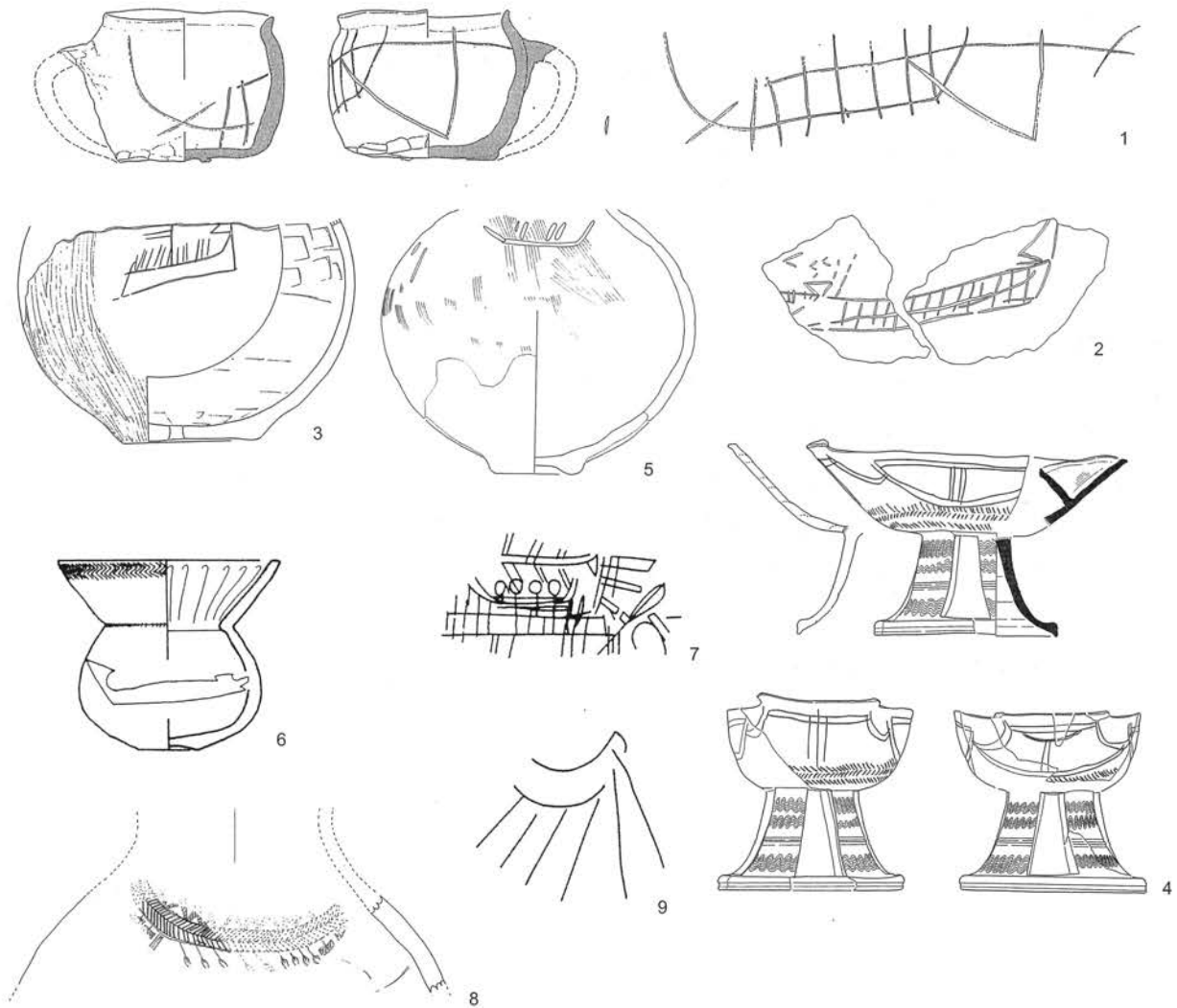
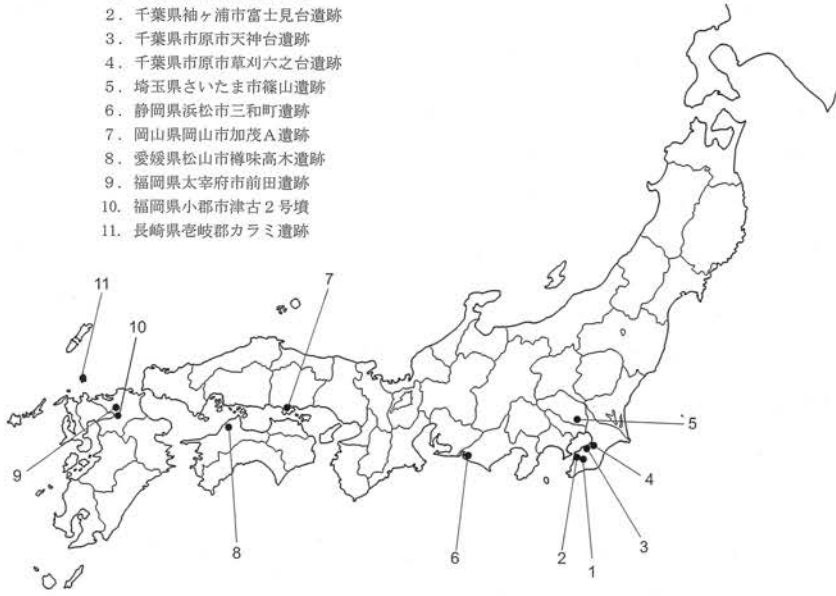
弥生時代の絵画土器は、畿内では中期の後葉に盛行し、後期になると中心地では衰退していく。一方、瀬戸内海沿岸、四国、九州の一部、関東地方など周辺地域では、出土例が増加してくる（註5）。第239図をみても、集中して絵画土器が出土している奈良県、大阪府をはじめとする近畿地方には、舟絵については弥生終末期には出土例がなくなっており、他の画材の絵画も土器にはほとんど描かれなくなる。

絵の描かれた土器の盛行する弥生時代中期の船の表現は、一般的に丁寧な描写である。それに対して、終末期から古墳時代は簡略化される傾向にある。本遺跡の須恵器の舟絵は簡略化された典型例である。県内では、現在のところ、本遺跡を含めて4例確認される。本遺跡と草刈六ノ台遺跡が須恵器で、六ノ台遺跡は高杯の杯部が舟形となるものである。TK-208期の所産で、本遺跡よりは新しいと思われる。富士見台遺跡例は、弥生後期の壺の肩部に焼成前に描かれ、天神台遺跡例は、古墳時代前期の壺の胴部上位にやはり焼成前に刻まれている。六ノ台遺跡以外は線刻によって舟の形や櫂等を表現しており、ある程度類似しているが、久ヶ原期と思われる富士見台例はやや丁寧な描写である。ここにも、先述した弥生時代から古墳時代へ移行するに従い、簡略化した表現となることを示していよう。

#### （3）鹿島台遺跡の舟絵の意味

この絵画須恵器が焼成前に描かれていることは、窯元である生産地から、消費地である本遺跡に運ばれてきたことは明らかである。その背景には、2つの現象が考えられよう。第1は、生産地に対して舟絵を描いた須恵器生産を依頼したことがあげられる。第2は、舟絵の土器を持った他地域集団の入植が想定される。須恵器の出土したD区は、古墳時代前期の集落がきわめて小規模で、中期になって多くの竪穴住居が営まれるようになる。整理中のC区も同様な状況で、中期の大規模な集落が形成されている。このようなことから、中期になって他地域からの大規模な入植があったと考えることが妥当と思われ、その過程の中で舟絵の須恵器を捉えることができる。第2の可能性がきわめて高いと思われる。いずれにしても、地

1. 千葉県君津市鹿島台遺跡
2. 千葉県袖ヶ浦市富士見台遺跡
3. 千葉県市原市天神台遺跡
4. 千葉県市原市草刈六之台遺跡
5. 埼玉県さいたま市篠山遺跡
6. 静岡県浜松市三和町遺跡
7. 岡山県岡山市加茂A遺跡
8. 愛媛県松山市樽味高木遺跡
9. 福岡県太宰府市前田遺跡
10. 福岡県小郡市津古2号墳
11. 長崎県老岐郡カラミ遺跡



第239図 各地の舟絵土器



理的に水上交通によって他地域とのやり取りが行われているということが想像できよう。舟絵の持つ意味はなかなか難しいが、他地域から本遺跡への入植には、太平洋岸及び東京湾に注ぐ小糸川を利用した海上・水上交通が不可欠であり、その際に使用された舟絵の須恵器ということができよう。

#### (4) 鹿島台遺跡の性格

本遺跡は、現在の海岸線からはやや上流に入り、小糸川河口から7kmほど東の丘陵上に位置している。付近の小糸川両岸には各時代の遺跡が分布しており、やや下流に位置する常代遺跡からは、弥生時代中期の大規模な方形周溝墓群や東海東部などの影響を受けた土器が出土しており、外来的な要素が伺える。また、弥生時代中期から後期にかけての大溝から舟形木製品が出土している。鹿島台遺跡の舟絵とは時期的にも異なるが、当該地域が弥生時代から水上交通の深い恩恵を浴していた地域であったことを示すものである。このように本遺跡は、水上交通の要衝にあり、早い段階から西方の文化が流入し、集団の移住等の結果、古墳時代中期段階に大規模な集落が形成されたものと考えられる。

#### 註

- 1 小沢 洋 1998「上総における古墳中期土器編年と古墳・集落の諸相」『研究紀要Ⅷ』君津郡市文化財センター
- 2 白井久美子 2002「東国後期古墳分析の視点－鉄鍬による後期古墳群の分析－」『古墳から見た列島東縁世界の形成』
- 3 橋本裕行 1994「弥生絵画に内在する象徴性について」『日本美術全集』第1巻  
橋本裕行 1995「弥生土器絵画研究の展望」『東アジアの古代文化』85号
- 4 白井久美子・小林清隆 2002「縄文時代後期の大型住居と舟の線刻をもつ須恵器－鹿島台遺跡の調査概要と新資料の紹介」『研究連絡誌』第63号 (財)千葉県文化財センター
- 5 註1に同じ

#### 参考文献

1. 浅利幸一 1992「土器に描かれた船」『研究紀要』Ⅱ (財)市原市文化財センター
2. 佐原 真 1980「弥生時代り絵画」『考古学雑誌』第66巻1号 日本考古学会
3. 相山林継 1993「富津市湊富士見台出土線刻画」『宇麻具多』第5号 木更津市古代史の会
4. 橋本裕行 1987「弥生土器の絵」『季刊考古学』第19号 雄山閣
5. 橋本裕行 1988「東日本弥生土器絵画・記号総論」『橿原考古学研究所論集第八 創立五十周年記念』橿原考古学研究所
6. 福岡市立博物館 1988「古代の船－いま甦る海へのメッセージ－」『福岡市立資料館図録第12集』

第13表 A区 縄文時代竪穴住居跡観察表

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (㎡)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴	壁溝 幅×深さ	炉 (長径×短径cm)	特記遺物・備考	時代区分
SI-001	不明	不明	不明	6~27	無	無	無	無	埋設土器	縄文中期
SI-003	4.2×4.2	不明	不明	8~50	P1. 50. 8 P2. 6. 4 P3. 19. 7	無	無	無		縄文中期

第14表 A区 縄文時代土器観察表

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整 内面	外面	備考
SI-001	10-1	縄文	深鉢	SX-005-5	26.0	—	20.8	30%	赤褐色	密	行'	隆帯区画, 半裁竹管による 充填	
SI-003	11-1	縄文	深鉢		—	—	[12.0]	10%	橙褐色	—	行'	櫛羽状条線→隆帯, 沈線	
	11-2	縄文	—		—	—	—	5%	赤褐色	—	行', じ'キ		スス付着
SK-061	13-2	縄文	深鉢	SM-003-5, 6, SK-61-2, A区表採, 225-021	34.0	—	(7.4)	30%	暗褐色	密	粗い条痕	擦痕の後刺突文	口唇部にキザミ

第15表 A区 弥生時代竪穴住居跡観察表

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (㎡)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴 (長径×短径×深さcm)	壁溝 幅×深さ	カマド・炉 (長径×短径cm)	特記遺物・備考	時代区分
SI-002	5.2×4.1	N-38-W	22.2	1.8~2.0	P1. 34. 7 P2. 37. 1 P3. 75. 1 P4. 93. 0	無	有 1.3×1.8	炉中央 (5.8×6.0)	焼失住居と思われる 埋甕炉	弥生中期

第16表 A区 弥生時代土器観察表

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整 内面	外面	備考
SI-002	16-1	弥生	甕	1, 2, 3, 5, 6, 7, 8, 22	36.2	9.4	42.3	90%	褐色	密	行'	行'→ハク→じ'キ	煤の付着
	16-2	弥生	甕	11, 12, 22	(25.2)	(6.4)	24.5	40%	褐色	密	ハク→行'	ハク→行'	二次焼成 底部木葉痕
	16-3	弥生	甕	17, ASM003-3, 1, ASK054-170, 4号墳3区023	(13.9)	5.2	14.6	70%	暗褐色	密	行'→じ'キ	行'→じ'キ	
	16-4	弥生	甕	17, 18, ASM003-1	(19.3)	—	[11.1]	10%	黒褐色	密	ハ行'	行'	
	16-5	弥生	甕	16, 20	—	7.0	[11.6]	30%	暗褐色	密	ハク→行'	ハク→行'	底部木葉痕
	16-6	弥生	鉢	18	(9.8)	(5.8)	6.8	70%	黒褐色	密	行'	行'	
SS-001a	17-1	弥生	鉢	1	(2.4)	—	(8.8)	5%	褐色	密	行'	行'	口唇部に指頭押捺
SS-001	17-2	弥生	甕		—	(7.5)	(3.7)	5%	褐色	密	行'	行'	
SS-002c	19-1	弥生	甕	1, 2, 3, 4, ASI-5-3	(12.0)	—	[21.1]	30%	褐色	密	行'	ハク→沈線	3所に補修孔あり
	19-2	弥生	甕	2	—	7.0	[27.1]	70%	褐色	密	不明	ハ行'→沈線, 行'→じ'キ	
SS-002	19-3	弥生	甕	2	—	6.6	[19.8]	80%	赤褐色	密	行'	行', じ'キ	外面赤彩
SS-004d	19-4	弥生	甕	4	(23.1)	7.4	22.7	80%	褐色	密	不明	じ'キ, LR縦施文→沈線	内外面口縁部, 胴部赤彩
	19-5	弥生	甕	ASS-d3, d2, d6, d7, ASX-005-1, 006-1, 1T-32	11.0	—	[12.9]	20%	褐色	密	行'	ハク→LR縦方向施文→沈線	
	19-6	弥生	甕	1	(8.0)	—	[7.3]	5%	橙褐色	密	行'	行'→櫛目状沈線, 棒状沈線	
	19-7	弥生	甕	6	—	8.0	[3.4]	10%	橙褐色	密	行'	行'→ハク	底部網代痕
SS-003b	20-1	弥生	甕	2	12.4	—	29.3	40%	暗褐色	密	ハク→ハ行'	ハク, じ'キ, LR縦施文	
SS-005	21-1	弥生	甕		—	—	[7.9]	5%	褐色	密	行'	くしがぎ紋	
SS-009d	22-1	弥生	甕	2	9.8	—	[15.3]	25%	橙褐色	密	ハク→ハ行'	行'→ハク→じ'キ→櫛目状沈線	
	22-2	弥生	甕	2	—	7.6	[4.4]	5%	橙褐色	密	行'	じ'キ	底部木葉痕
SS-010a	23-1	弥生	甕	1	8.6	7.8	25.4	80%	褐色	密	ハ行'	ハク→行'→じ'キ→沈線, 波状文	底部木葉痕
	23-2	弥生	甕	3	—	—	[7.3]	10%	褐色	密	ハク→行'	ハク→LR縦施文→沈線	
	23-3	弥生	甕	2, 6, 7, 9	—	8.0	[28.7]	70%	褐色	密	ハ行'	ハク→行'→じ'キ	底部木葉痕
SS-010b	23-4	弥生	甕	ASS-010b-1, ASD-003-1, ASM-003-5,	26.8	—	[29.7]	40%	暗褐色	密	行'→ハ行'	ハク	口唇部指頭による押捺
SS-012	24-1	弥生	甕	4, 15, 23	—	(7.6)	(22.7)	80%	橙褐色	密	行'	じ'キ, 行'	
SS-012	24-2	土師	小型甕	ASX3-7-45, ASS14-7, ASS-12-4, 20, 21	12.7	6.2	13.1	80%	褐色	密	行', ハ行', じ'キ	行'→じ'キ	
SS-014	24-1	弥生	甕	U7-08-1, 5, 7	(20.4)	7.0	18.7	55%	褐色	密	行'→じ'キ	行'→じ'キ	口唇部指頭による押捺
	24-2	弥生	甕	1	—	4.6	(7.0)	40%	橙褐色	密	行'	不明	外面赤彩
SS-015	25-1	弥生	甕	3, 6, 7	11.0	7.0	36.0	95%	褐色	密	行'	ハク→LR→沈線→波状文→行'	
SS-015	25-2	弥生	甕	1, 2, 3, 6, 7, 8, 9, SD-002-1, 2, 3, 4, 5, SD003-3	11.0	6.1	34.8	60%	褐色	密	ハク→行'	櫛目文→じ'キ	口唇部LR施文
SS-015	25-3	弥生	甕	4	—	5.8	[22.0]	80%	茶褐色	密	行'	無筋縄文→沈線→じ'キ	
SS-015	25-4	弥生	甕	4	—	(8.0)	[3.0]	10%	褐色	密	行'	行'→じ'キ	
SS-015	25-5	弥生	甕	6, 7	—	6.8	[4.2]	10%	褐色	密	行'	行'→ハ行'	
SS-016	25-1	弥生	甕	3	12.9	—	[22.1]	70%	褐色	粗	行'→じ'キ	行'→じ'キ→LR, RL施文	口唇部LR施文, 胴部赤彩
SS-016	25-2	弥生	甕	3区-22, 一括, 墳丘裾5	—	11.8	[6.3]	10%	褐色	密	ハ行'	ハ行'	
SK-013	26-1	弥生	甕	1, 2	10.1	7.1	64.8		橙褐色	密			胴部に焼成後の穿孔
	26-2	弥生	甕	3	9.8	4.3	53.8		橙褐色	密			
	26-3	弥生	甕	4	—	7.3	[44.0]		橙褐色	密			
SK-020	27-1	弥生	甕	2, U-75-1, SS-0016-1	—	6.0	[19.0]	45%	橙褐色	密	不明	LR→沈線と刺突文	
遺構外	28-1	弥生	甕	U6-14-1	—	—	18.1	30%	暗褐色	不明	行', じ'キ		外面赤彩
遺構外	28-2	弥生	甕	U5-70-1	(10.0)	—	[9.1]	10%	赤褐色	密	行'→じ'キ	行'→じ'キ→RL, 口唇部LR	外面赤彩, 2孔あり
遺構外	28-3	土師	甕	A区表採	(14.6)	—	[3.3]	10%	褐色	密	行'	行'→じ'キ	
遺構外	28-4	弥生	甕	4号墳4区-1, SM003-5	(10.8)	—	(7.0)	5%	褐色	行'	行'→じ'キ		焼成後の穿孔1ヶ所
遺構外	28-5	弥生	甕	4号墳3区-22, 23	(14.6)	—	(9.7)	20%	橙褐色	行'	ハク		黒斑
遺構外	28-6	弥生	甕	SM002-3, 4	(13.2)	—	(6.4)	15%	褐色	ハ行'	行'→ハク		
遺構外	28-7	弥生	鉢	4号墳1区-2, 2区-1, 第5一括	(19.0)	—	(8.7)	30%	橙褐色	じ'キ	じ'キ		内外面赤彩
遺構外	28-8	縄文	深鉢	SM001-4	—	(9.2)	(2.3)	10%	褐色	行'	行'		

第17表 A区 古墳時代土器観察表

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
4号墳	37-1	土師	杯	3区-19	15.2	—	[3.1]	10%	褐色	密	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	内外面赤彩
	37-2	土師	杯	1	13.4	—	4.3	70%	橙褐色	密	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	内外面赤彩
SM-001	38-1	土師	杯	SX-012-21	(14.2)	—	[4.1]	30%	赤褐色	密	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
	38-2	土師	杯	1	(14.2)	—	[3.7]	10%	褐色	密	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
	38-3	土師	杯	1	(14.0)	—	[1.5]	10%	褐色	密	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
	38-4	土師	埴	1, 5, 6,	8.3	—	9.3	90%	褐色	密	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ, ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
	38-5	土師	甕	1	—	8.1	[10.8]	30%	褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	外面胴部黒斑
SM-002	38-6	土師	杯	1	(11.4)	—	[3.7]	10%	褐色	密	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
SM-002	38-7	土師	杯	SK-004-1, 2,	(13.0)	—	[3.7]	10%	橙褐色	密	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
SM-002	38-8	弥生	壺	5	—	6.4	[12.0]	30%	褐色	密	不明	ナ	ナ	
SM-003	40-1	弥生	鉢	1, 4	(8.2)	4.2	8.4	40%	橙褐色	密	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	口唇部にキザミ
SM-004	40-2	土師	杯	2	11.6	3.4	7.2	100%	橙褐色	密	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
SK-018	42-1	土師	杯	1	(13.8)	—	[3.8]	20%	黄褐色	粗	ナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
遺構外	46-1	土師	高杯	U7-37-3	—	12.2	[6.5]	20%	橙褐色	密	ナ→ヘリナ	不明	不明	穿孔3ヶ所
	46-2	弥生	高杯	SM-002-3	—	(8.0)	[1.5]	10%	褐色	密	ナ	ナ	ナ	脚部赤彩
	46-3	弥生	壺	U6-41-1	—	7.4	[9.0]	15%	橙褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	
	46-4	弥生	甕	4号墳3区-22	—	(11.8)	[6.3]	10%	褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	
	46-5	弥生	壺	1	—	(7.6)	[3.2]	5%	黄褐色	密	不明	不明	不明	
	46-6	土師	甕	墳丘裾2	—	(7.2)	[5.3]	10%	暗褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	
	46-7	土師	甕	SM-001-1	—	(9.4)	[4.0]	10%	橙褐色	密	ナ	ナ	ナ	
	46-8	土師	甕	3T-1	—	8.4	[3.5]	10%	橙褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	
	46-9	土師	壺		—	(6.5)	[2.8]	10%	褐色	密	ナ	ナ	ナ	
	46-10	弥生	甕	4号墳4区一括	—	6.0	[3.1]	10%	橙褐色	密	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	ナ→ヘリナ	
	46-11	土師	甕	1, 2, 4	—	(5.4)	[3.2]	10%	褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	
	46-12	弥生	鉢	SM-003-1	—	5.6	[3.0]	10%	褐色	密	ヘリナ	ヘリナ	ヘリナ	内外面底部に黒斑
	46-13	弥生	甕	1	—	(7.6)	[2.7]	5%	褐色	密	ナ	ナ	ナ	底部木炭痕
	46-14	土師	甕	SM-001-13	—	(7.0)	[2.2]	10%	橙褐色	密	ナ	ナ	ナ	底部木炭痕
	46-15	弥生	甕	1	—	(6.8)	[4.2]	10%	暗褐色	密	ナ	ナ	ナ	

第18表 D区 縄文時代竪穴住居跡観察表

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (㎡)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴	壁溝 幅×深さ	カマド・炉 長径×短径cm	特記遺物・備考	時代区分
SI-001	(6.1) × 5.2	N-82-W	(23.4)	16~30	無	無	無	無		縄文後期
SI-003	3.4 × 3.3	N-14-W	9.4	9~22	P1. 22.8 P2. 54.9 P3. 79.3 P4. 43.0	無	無	炉北 78 × 54		縄文後期
SI-005	不明	不明	(8.7)	8~11	P1. 29.0	無	無	無		縄文後期
SI-009	4.6 × 3.8	N-155-W	(23.7)	18	P1. 63.6 P2. 65.5 P3. 44.8 P4. 39.9	無	有 25.0 × 16.0	炉南 71 × 60		縄文中期
SI-014	4.8 × (4.0)	N-93-W	(18.6)	67.4~47.2	ピット多数	無	無	1. 炉北東 160 × 90 2. 炉中央 90 × 70	南側は倒木により壁が 壊されている	縄文中期
SI-017	(3.9) × 4.0	N-174-W	(12.7)	0~30.1	P1. 52.7 P2. 44.1 P3. 59.8 P4. 61.1	無	無	炉北 110 × 45		縄文中期
SI-018	16.7 × 16.0	N-5.0-W	212.7	0~70.0	ピット多数	無	無	炉中央 168 × 120	立て替え2回以上	縄文後期
SI-029	5.5 × 5.1	N-89.0-E	17.9	62.7~12.3	P1. 35.0 P2. 95.2 P3. 119.7 P4. 27.3 ピット多数	無	有 24.0 × 12.0	炉中央 115 × 70	壁溝にピット列	縄文中期
SI-033	(3.4) × 4.1	N-150-W	不明	0~61.4	P1. 47.1 P2. 47.8 P3. 55.8	無	有 16.0 × 10.0	炉北東 50 × (40.0)	SI024に切られる	縄文中期
SI-036	3.6 × 3.4	N-177-W	(10.2)	9.3~55.9	P1. 57.9 P2. 56.1 P3. 68.8 P4. 67.0	無	無	炉北 14.0 × 12.0	SM001に切られる	縄文中期
SI-037	4.4 × 4.7	N-141-W	不明	0~47.0	ピット多数	無	有 24.0 × 不明	炉中央 90 × 51	壁溝にピット列	縄文中期
SI-038	5.5 × 4.8	N-152-W	(21.8)	0~110.0	P1. 44.5 P2. 63.5 P3. 63.1 P4. 69.2	無	有 24.0 × 28.0	炉北 118 × 49	壁溝にピット列 土器の口縁を使い二重, 三重に炉を囲む	縄文中期

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (㎡)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴	壁溝 幅×深さ	かまど・炉 長径×短径cm	特記遺物・備考	時代区分
SI-039	不明	N-90-W	不明	0~38.2	P1. 57.0 P2. 78.4 P3. 39.5 P4. 48.2	無	有 20.0×10.0	炉 西 64.0×58.0	11号墳周溝に切られる 焼失住居か	縄文後期
SI-040	不明	不明	不明	0	P1. 32.9 P2. 52.6 P3. 63.1 P4. 69.2	無	無	炉 中央 97×85	ピットの位置により プラン復元 SD016に切られる	縄文中期
SI-041	不明	不明	不明	0~21.6	ピット多数	無	無	炉 西 140×(130)	炉は壁ができるほど周囲 が赤く硬化している	縄文後期
SI-047	不明	不明	不明	不明	ピット多数	無	無	無	プランは推定	縄文中期
SI-054	(4.7)×4.8	N-171-W	(17.8)	0~24.6	P1. 73.8 P2. 72.5 P3. 73.6 P4. 62.1	無	有 20.0×6.5	炉 中央 91.0×85.0	石囲炉と思われる 礫や形の不明瞭な砂岩 土器が炉を囲んでいる 壁溝にピット列	縄文中期
SI-059	不明	N-167-W	不明	0~34.7	P1. 31.0 P2. 36.5 P3. 39.0 P4. 51.9	無	無	無	南東の隅のみの遺存 ピットでプラン復元 SI024に切られる	縄文後期
SI-061	(5.4)×(5.1)	N-170-E	不明	3.0~55.0	ピット多数	無	無	1. 炉 中央 70.1×55.0 2. 炉 中央 (70.0)×(60.0)	壁溝にピット列 SI046に切られる 炉は2基が重複している	縄文中期
SI-067	不明	不明	不明	不明	ピット多数	無	無	無	ピット群の検出で床面は すでに削平されていた	縄文中期
SI-069	不明	不明	不明	不明	ピット多数	無	無	無	小ピット群から推定復元	縄文後期

第19表 D区 縄文時代土器観察表

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SI-001	49-1	縄文	深鉢	33	28.4	—	(13.0)	30%	褐色	密	ナシ	ナシ	RL? 沈線? 磨消	RL施文→ナシ
SI-001	49-2	縄文	深鉢	14,16,18,21,不明1	(26.0)	—	(8.4)	10%	褐色	密	ナシ	ナシ	RL? 沈線? 磨消	
SI-001	49-3	縄文	深鉢	6,30,31	—	(3.2)	(5.7)	10%	褐色	密	ナシ	ナシ	RL? 沈線? 磨消	
SI-001	49-4	縄文	深鉢	19	—	(10.0)	(6.0)	5%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	底部網代痕
SI-001	50-14	縄文	異形台付土器	1,SD005-1	—	—	—	5%	橙褐色	粗	ナシ	ナシ	円形竹管文	
SI-001	50-15,16,17	縄文	土偶	1	—	—	—	40%	褐色	密	ナシ	ナシ	肩部に隆帯,脚部に沈線の文様	
SI-005	52-1	縄文	深鉢	1,4,6	(23.6)	—	(8.1)	20%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	沈線→RL,磨消	貼付文6単位
SI-005	52-2	縄文	浅鉢	1	(15.2)	—	(4.1)	10%	暗褐色	密	不明	不明	沈線→RL,磨消	貼付文
SI-005	52-3	縄文	深鉢	5,7,8	(27.4)	—	(12.9)	15%	褐色	密	ナシ	ナシ	条線,紐線文	
SI-009	53-1	縄文	深鉢	2,26	26.6	—	(20.3)	40%	暗褐色	粗	ナシ	ナシ	複線RLR,3本一組の沈線が7単位	外面煤の付着
SI-014	55-1	縄文	深鉢	673	—	—	(20.8)	20%	褐色	密	ナシ	ナシ	口縁部RL横,胴部RL縦施文	
SI-014	55-2	縄文	浅鉢	2	—	7.0	3.4	10%	褐色	密	不明	不明	不明	
SI-014	55-3	縄文	有孔罎付土器	33, 48, 595	13.0	—	(15.5)	45%	茶褐色	粗	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-014	55-4	縄文	深鉢	5317	—	—	(5.7)	5%	褐色	密	—	—	—	
SI-014	56-7	縄文	深鉢	347,354,357,359,460,461,463,468,580	24.1	—	(35.7)	60%	褐色	密	ナシ	ナシ	RL縦施文,沈線,ナシ	
SI-014	56-8	縄文	浅鉢	368, 421, 458, 467	(45.8)	—	(5.4)	10%	黒褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-017	58-6	縄文	深鉢	206, 207, 209	(25.8)	—	(14.6)	5%	褐色	密	ナシ	ナシ	複線RLR施文→隆帯	
SI-017	58-7	縄文	鉢	1	(24.6)	—	(7.7)	5%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	RL施文→隆帯	
SI-018	60-1	縄文	釣手土器	109	—	(5.1)	9.3	90%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ
SI-018	60-2	縄文	瓢形	39	8.8	3.4	12.8	90%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	沈線区画→RL,刻目文? 磨消	穿孔27所(焼成前)
SI-018	60-3	縄文	深鉢	82	17.0	4.5	17.0	90%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	LR,ナシ,刻み,条線? 磨消	
SI-018	60-4	縄文	台付浅鉢	123, 126	(27.0)	—	(8.5)	40%	暗褐色	粗	ナシ	ナシ	沈線,刻み	
SI-018	60-5	縄文	異形台付土器?	111	—	8.6	(9.5)	30%	橙褐色	密	ナシ	ナシ	LR施文,磨消	接地面に網代痕
SI-018	60-6	縄文	台付浅鉢	38,57	—	—	(5.2)	10%	褐色	密	ナシ	ナシ	LR,磨消,貼付文	
SI-018	60-7	縄文	注口	122	—	—	(8.2)	5%	黄褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-018	60-8	縄文	注口	190	—	—	—	5%	黄褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-018	60-9	縄文	釣手土器	108	—	—	(10.7)	10%	褐色	密	ナシ	ナシ	RL,ナシ	
SI-018	61-47	縄文	深鉢	4	—	3.8	(7.1)	10%	褐色	密	ナシ	ナシ	RL縦施文→条線,ナシ	
SI-018	61-48	縄文	深鉢	125	—	7.0	(7.7)	10%	橙褐色	密	ナシ	ナシ	LR縦施文	
SI-018	61-49	縄文	深鉢	118	—	2.2	(8.0)	20%	褐色	粗	ナシ	ナシ	不明	
SI-018	61-50	縄文	浅鉢	75,81,91,不明1	—	—	(6.5)	10%	褐色	粗	ナシ	ナシ	ヘラナリ→ナシ	
SI-018	61-51	縄文	深鉢	54	—	5.0	(2.5)	10%	褐色	粗	ナシ	ナシ	ヘラナリ	
SI-018	61-52	縄文	深鉢	97	—	(4.4)	(2.7)	5%	褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-018	61-53	縄文	深鉢	—	—	4.6	(3.0)	10%	黒褐色	ナシ	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-018	61-54	縄文	深鉢	175	—	5.6	(4.8)	10%	褐色	粗	不明	不明	不明	
SI-018	61-55	縄文	耳栓	35	(1.5)	(0.9)	(0.95)	70%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	ナシ	
SI-018	61-56	縄文	異形台付土器	117	—	—	—	5%	赤褐色	密	—	—	—	把手のみ,全体に赤彩
SI-029	65-1	縄文	深鉢	2,116,I-22-78-1	(34.6)	—	(24.0)	15%	暗褐色	密	ナシ	ナシ	L燃糸文→連弧文→磨消	口縁交互刺突文
SI-029	65-2	縄文	深鉢	なし	29.2	—	(26.8)	45%	褐色	密	ナシ	ナシ	半裁竹管→連弧文→磨消	

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SI-029	65-4	縄文	深鉢	118	—	6.4	[22.1]	80%	褐色	密	シガキ		R燃糸文→沈線	
SI-029	66-3	縄文	深鉢	115	—	10.6	[16.9]	20%	褐色	粗	ナデ		沈線→連弧文→磨消	
SI-029	66-31	縄文	深鉢	71	—	7.4	[3.6]	5%	褐色	密	ナデ		シガキ	
SI-036	69-1	縄文	深鉢	727, 728	(38.0)	—	[18.7]	50%	暗褐色	密	シガキ		LR→沈線,刻み→磨消	炉体
SI-036	69-2	縄文	深鉢	715	(30.6)	—	[25.5]	30%	暗褐色	密	ナデ		LR,沈線→刻み	
SI-036	69-4	縄文	深鉢	517, 587, 727	(25.6)	—	[17.6]	30%	暗褐色	密	シガキ		LR,沈線,シガキ	
SI-036	69-5	縄文	深鉢	172,不明2点	—	—	[7.4]	10%	暗褐色	密	ナデ		隆帯→沈線	
SI-036	69-6	縄文	深鉢	163,637,DSM-001-69	—	—	[7.2]	10%	暗褐色	密	不明		RL,隆帯	外部に煤の付着
SI-036	69-7	縄文	深鉢	392, 640	—	—	[6.9]	10%	暗褐色	密	シガキ		沈線→隆帯→刺突文	
SI-029	70-8	縄文	深鉢	62,611,639,644,725,DSM001-69	—	7.7	[8.6]	15%	茶褐色	密	ヘラナデ		LR,沈線	
SI-029	70-9	縄文	深鉢	840,不明2点	—	8.7	7.3	5%	茶褐色	密	ナデ		RL→沈線	
SI-029	70-10	縄文	深鉢	532	—	8.0	5.4	5%	褐色	密	不明		ナデ,クスリ	
SI-029	70-11	縄文	深鉢	17	—	7.4	3.7	5%	黒褐色	密	不明		ナデ,クスリ	
SI-037	71-1	縄文	深鉢	1282	21.5	—	[15.0]	35%	暗褐色	密	ナデ→シガキ		沈線→RL,磨消	
SI-037	71-2	縄文	深鉢	1,29,223	—	—	[11.2]	10%	褐色	密	シガキ		LR,隆帯,沈線	
SI-037	72-13	縄文	深鉢	1,24	—	8.2	[7.4]	10%	暗褐色	密	ナデ		ナデ→条線,シガキ	
SI-038	73-1	縄文	浅鉢	441	—	—	[9.9]	20%	橙褐色	密	ナデ,シガキ		隆帯→沈線,シガキ	炉体
SI-038	73-6	縄文	深鉢	283,440,441,441-R3,R4,R5,R6	35.9	—	[10.5]	20%	赤褐色	密	ナデ→シガキ		ナデ→シガキ	炉体
SI-039	75-1	縄文	ミチユフ	14	7.4	—	[2.4]	90%	褐色	密	ナデ→シガキ		ナデ→クスリ→シガキ	
SI-039	75-2	弥生?	壺?	13	—	5.8	[2.6]	10%	褐色	粗	ヘラナデ		ヘラナデ	
SI-039	75-3	縄文	深鉢	1,2,19	(20.0)	—	[4.4]	10%	褐色	密	シガキ		沈線→LR,沈線,磨消	
SI-041	77-1	縄文	深鉢	4	—	4.3	[9.1]	10%	橙褐色	密	ナデ		RL,ナデ	
SI-047	80-1	縄文	深鉢	22,30,31,32,16	—	—	[34.3]	70%	橙褐色	密	シガキ		隆帯,RL,沈線→磨消	
SI-047	80-2	縄文	深鉢	1,31,32	(24.4)	—	[17.7]	60%	暗褐色	粗	シガキ		LR,隆帯,沈線→磨消	
SI-047	80-3	縄文	深鉢	11,12,15,K20-92-1	(25.0)	—	[18.3]	40%	暗褐色	密	シガキ		RL→隆帯,沈線→磨消	
SI-054	81-1	縄文	深鉢	18	—	—	[21.5]	80%	褐色	粗	ナデ		LR,沈線	
SI-054	81-2	縄文	深鉢	4	—	(7.2)	[13.5]	15%	茶褐色	密	ナデ		沈線文→隆帯	底部網代痕
SI-061	83-1	縄文	深鉢	980,H-22-94-1	26.4	8.2	29.2	80%	褐色	密	シガキ		シガキ,LR,沈線	
SI-061	83-2	縄文	深鉢	981A	(20.4)	—	[6.2]	10%	暗褐色	粗	シガキ		RL,沈線	
SI-061	83-3	縄文	深鉢	2,U6-55	19.9	—	[17.6]	70%	褐色	密	シガキ		シガキ,沈線→隆帯	
SI-061	83-4	縄文	浅鉢	958,981A,981B	(42.8)	—	[9.8]	20%	橙褐色	粗	シガキ		シガキ	
SI-061	83-5	縄文	小型深鉢	981-B,C	—	—	[5.2]	5%	橙褐色	密	ナデ		LR,隆帯	
SI-069	86-1	縄文	深鉢	1	(26.8)	—	[20.8]	30%	暗褐色	密	シガキ		沈線→RL,磨消	
SK-044	87-1	縄文	浅鉢	1	26.0	4.6	11.8	45%	暗褐色	密	ナデ→ヘラナデ→ミナナデ		ナデ→ヘラナデ→ナデ	
SM-001	108-149	縄文	深鉢	2,U6-55	(13.4)	—	[3.4]	10%	褐色	密	シガキ		RL→半截竹管文	
J-22	115-307	縄文	鉢	91-25	—	(9.4)	[4.3]	5%	黄褐色	密	不明		R燃糸文,シガキ,ナデ	
遺構外	115-311	縄文	深鉢	1,024-2,L22-67-1	(34.8)	—	[32.2]	50%	黄褐色	密	シガキ		半截竹管による沈線文→隆帯	
I-21	117-346	縄文	不明	97-1	—	—	[3.7]	5%	黄褐色	密	—		—	
遺構外	117-348	縄文	釣手土器	7	—	—	[2.2]	5%	赤褐色	密	ナデ		ナデ	
遺構外	120-418	縄文	浅鉢	1	—	—	[4.8]	10%					沈線,ナデ	
遺構外	122-480	縄文	釣手土器	1	—	—	[4.4]	5%	暗褐色	密	ナデ		ナデ	
遺構外	122-481	縄文	浅鉢	125	—	6.8	[4.2]	20%	暗褐色	密	ヘラナデ		LR→沈線→磨消	
遺構外	122-482	縄文	浅鉢	117	(27.0)	—	[10.3]	20%	暗褐色	密	ナデ,シガキ		沈線,ナデ,クスリ	
遺構外	123-483	縄文	深鉢	1区-001,40	(25.4)	—	[4.8]	5%	褐色	密	ナデ→シガキ		条線→細線文	
遺構外	123-485	縄文	瓢形土器	1	(10.0)	—	[5.5]	20%	橙褐色	密	ナデ		ナデ→シガキ,ヘラナデ,ナデ	
L-22	126-568	縄文	深鉢	L22-90-1,SI-011-6, L23-00-1	(26.2)	—	[17.9]	30%	暗褐色	粗	不明		沈線,口縁部隆帯	
L-22	126-569	縄文	深鉢	90-1,23L-00-1,4	26.9	—	[32.0]	70%	褐色	密	シガキ		条線, 細線文	
遺構外	126-570	縄文	浅鉢	1区-001	17.7	—	9.1	60%	黒褐色	粗	ナデ→シガキ		沈線,ナデ	
遺構外	126-571	縄文	浅鉢	130	26.0	—	12.0	50%	暗褐色	密	ナデ,クスリ		LR→沈線→磨消	
遺構外	129-628	縄文	深鉢	2	—	8.0	5.0	5%	黄褐色	密	ヘラナデ		ナデ→シガキ,ヘラナデ	
遺構外	129-629	縄文	深鉢	17	—	(8.2)	[4.3]	5%	橙褐色	密	不明		ヘラナデ,クスリ,シガキ	
遺構外	129-630	縄文	深鉢	35	—	(9.4)	[5.5]	10%	褐色	密	ナデ		ナデ→シガキ	
J-21	129-631	縄文	鉢	17-1	—	(6.0)	[2.6]	10%	赤褐色	密	シガキ		シガキ,沈線	
遺構外	129-632	縄文	鉢	7	—	4.2	[2.6]	10%	橙褐色	密	シガキ		LR→沈線→磨消	
J-20	129-633	縄文	深鉢	44-1	—	2.6	[3.9]	10%	黒褐色	密	シガキ		クスリ→シガキ	
J-23	129-634	縄文	深鉢	02-11	—	7.2	3.1	5%	橙褐色	密	不明		ナデ	底部網代痕
J-22	129-635	縄文	深鉢	22-2	—	(6.0)	[3.8]	5%	橙褐色	密	シガキ		シガキ	
遺構外	129-636	縄文	深鉢	7	—	7.6	[3.0]	10%	茶褐色	密	ヘラナデ		ナデ,シガキ	
J-22	129-637	縄文	浅鉢	91-7	—	5.9	[3.2]	5%	橙褐色	密	シガキ		シガキ	底部網代痕
L-23	129-638	縄文	深鉢	00-1	—	4.0	[4.1]	10%	褐色	密	ナデ		シガキ	
J-21	129-639	縄文	深鉢	3-2	—	4.6	[5.0]	10%	褐色	密	ナデ		クスリ→ナデ	
遺構外	129-640	縄文	深鉢	29	—	(3.4)	[5.0]	5%	褐色	密				
遺構外	129-641	縄文	深鉢	22	—	(6.0)	[7.1]	5%	褐色	密	ナデ		ヘラナデ→シガキ	
J-22	129-642	縄文	深鉢	23-1	—	(6.4)	[6.4]	5%	橙褐色	密	ナデ→シガキ		ナデ→シガキ	
遺構外	129-650	縄文	土偶	7	—	—	[3.5]	5%	暗褐色	密	ナデ		RL→沈線→磨消	
J-20	130-671	縄文	注口土器	47-1	—	—	[5.9]	5%	褐色	粗	ナデ		シガキ	
遺構外	130-672	縄文	注口土器	4	—	—	—	10%	褐色	密	ナデ		シガキ	
I-21	130-673	縄文	注口土器	97-1	—	—	[3.4]	5%	暗褐色	密	ナデ		シガキ	
遺構外	130-674	縄文	注口土器	7	—	—	[3.1]	5%	褐色	密	ナデ		シガキ	

第20表 D区 弥生時代～奈良時代竪穴住居跡観察表

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (cm)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴 (長径×短径×深さcm)	壁溝	カマド・炉 (長径×短径cm)	特記遺物・備考	時代区分
SI-002	5.7×5.6	N-42.0-E	(32.0)	0～94.2	P1. 58 P2. 71 P3. 77 P4. 80	56.0×53.0×21.0	無	炉 北西 92×51		古墳中期
SI-004	不明	N-30-W	不明	0～91.5	P1. 69.1 P2. 54.8 P3. 45.0 P4. 77.7	無	有	炉 北西 68×50	住居拡張	弥生後期
SI-006	3.6×3.6	N-70.5-W	13.2	2.3～33.4	P1. 41.2 P2. 45.3 P3. 48.4 P4. 46.6	無	有	カマド 西	貯蔵穴の可能性	奈良時代
SI-007	不明	N-58.0-W	不明	4～25.8	P1. 26.2	無	有	炉 北西		弥生後期
SI-008	8.1×(6.4)	N-43.1-W	(43.1)	18.6～54.4	P1. 17.4 P2. 50.1 P3. 58.8 P4. 57.9	無	有	炉 北 60×53		弥生後期
SI-010	3.5×3.5	N-14.0-E	12.6	10.6～48.0	P1. 37.0 P2. 35.7 P3. 36.0 P4. 37.2	無	有	無		古墳前期
SI-011	5.2×5.2	N-7.0-E	26.2	26.3～79.1	P1. 78.7 P2. 71.3 P3. 96.4 P4. 81.2	74.0×68.0×94.1	無	炉 北 130×58		古墳前期
SI-012	(4.3) × (4.3)	N-6.0-W	(18.5)	10.3～67.3	P1. 45.9 P2. 51.7 P3. 79.8 P4. 53.1	71.0×66.2×52.6	無	炉 北 67×51		古墳中期
SI-013	6.9×5.9	N-54.0-W	34.6	31.2～84.8	P1. 81.4 P2. 76.5 P3. 72.5 P4. 73.9	70×72×83.0	有	炉 北西 120×50		古墳中期
SI-015	(5.0) × (5.1)	N-32.0-E	(21.2)	0～48.0	P1. 45.6 P2. 52.4 P3. 38.2 P4. 41.6	無	無	炉 南東 100×75		弥生後期
SI-016	9.2×7.6	N-12.0-E	60.6	2.0～69.0	P1. 28.3 P2. 50.7 P3. 45.5 P4. 118.5	無	無	無		弥生後期
SI-019	5.4×(5.0)	N-55.5-W	(18.7)	0～33.0	P1. 22.4 P2. 23.5 P3. 21.1 P4. 18.5	無	無	炉 北 45×41		古墳中期 後半
SI-020	5.0×4.9	N-37.5-E	(24.4)	23.5～68.0	P1. 63.7 P2. 66.7 P3. 69.5 P4. 53.8	60×58×62.7	有	無		古墳中期
SI-021	5.1. ×5.5	N-43.0-W	(28.5)	不明	P1. 37.7 P2. 39.8 P3. 34.6 P4. 45.0	(90.0) × (80.1) ×39.5	無	炉 中央	全体が流れており、柱穴貯蔵穴の一部から推定し破線で示している	古墳中期
SI-022	(4.6) ×4.8	N-11.0-W	(22.3)	0～39.3	P1. 85.7 P2. 83.6 P3. 35.2 P4. 73.1	72.0×70.0×70.6	無	無		古墳中期
SI-023	3.9×4.1	N-10.0-W	(11.9)	12.3～47.9	P1. 14.0 P2. 19.4 P3. 26.0 P4. 24.2	無	無	炉 中央 80×59		弥生後期
SI-024	4.7×4.5	N-50.1-W	(19.9)	0～50.5	P1. 54.6 P2. 67.3 P3. 71.6 P4. 71.8	無	無	炉 北西 60×48		古墳前期

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (cm)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴 (長径×短径×深さcm)	壁溝	カマド・炉 (長径×短径cm)	特記遺物・備考	時代区分
SI-025	5.9×不明	N-20.0-W	不明	0~44.3	ピット多数	無	有	無		古墳前期
SI-026	3.4×3.8	N-71.5-E	10.2	22.5~53.3	P1. 24.0 P2. 31.0 P3. 24.8 P4. 45.7	無	無	炉 西 71×44		弥生時代
SI-027	(4.4) × (4.9)	N-41.0-E	(17.8)	0~21.2	P1. 51.0 P2. 36.2 P3. 54.0 P4. 37.0	無	無	炉 中央 (70.0) × (39.0)		弥生後期
SI-028	不明	不明	不明	不明	無	無	無	無		弥生時代
SI-030	(4.9) × 5.2	N-48.0-E	(17.4)	0~26.2	P1. 30.7 P2. 24.3 P3. 21.0	無	無	無		弥生後期
SI-031	(4.2) × (4.3)	N-32.0-W	(5.8)	0~20.7	P1. 15.0 P2. 11.0 P3. 11.0	無	無	炉 中央 142×110		弥生後期
SI-032	(4.3) × 3.9	N-10.0-E	(16.9)	0~67.1	P1. 41.1 P2. 55.7 P3. 56.3 P4. 29.5	86.0×68.0×43.9	有	無	9号墳の周溝～ 墳丘下において 全体に堅くし まる。	古墳前期
SI-034	(5.9) × 不明	N-63.0-W	不明	0~45.5	無	無	無	炉 北西	SI053にきられる	弥生後期
SI-035	不明	N-37.0-E	不明	0~29.6	P1. 15.1 P2. 24.1 P3. 47.4	無	無	炉 西 72.0×19.0	11号墳周溝に 切られる。 焼失住居か	弥生末～ 古墳前
SI-042	不明	不明	不明	0~10.0	ピット多数	無	無	無	SI016, SD013・ 20に切られる 043と統合	弥生中期
SI-044	4.3×不明	N-10.0-E	不明	2.0~22.8	P1. 13.5 P2. 57.6 P3. 39.2 P4. 34.0	P1. 11.8× 11.5×48.1 P2. 12.0× 16.9×51.3	有	炉 西 42.0×38.0	9号墳に切られ る 焼失住居か	古墳中期
SI-045	(4.3) × (4.1)	N-31.0-E	(4.0)	0~61.2	P1. 56.8 P2. 68.4 P3. 58.1 P4. 69.7	85.0×84.0×56.4	有	炉 南西 (74.0) × 58.0	北西の角は調 査区域外	古墳中期
SI-046	不明	不明	不明	0~69.2	無	11.3×9.9×23.3	有	無	北西の半分以上 が調査区域 外 焼失住居 か	古墳中期
SI-048	7.7×6.9	N-67.0-W	11.0	12.8~46.8	P. 38.2	無	無	炉 西	北隅をSK039に 切られる	弥生後期
SI-049	不明×4.9	N-45.0-W	不明	7.5~50.9	P1. 85.0 P2. 61.4	81.0×81.0×89.2	有	無	北西半分は調 査区外 北東側の住居 の立ち上がり 不明瞭	古墳中期
SI-050	(3.8) × 3.8	N-23.0-E	(14.3)	0~34.0	無	58.0×49.0×31.1	無	炉 北東 90×38	焼失住居か 北をSI051に切 られる	古墳前期
SI-051	3.6 × (3.4)	N-75.0-W	(12.0)	0~29.5	無	無	無	炉 北西 80×51	北側の床面は 遺存しない 西隅をSI049に 切られる	古墳中期
SI-052	不明	N-49.0-W	不明	0~35.6	P1. 73.8	無	有	無	北西半分は調 査区外 SK038が中央に 存在	古墳中期

遺構No.	規模 (主軸×副軸m)	主軸方向	面積 (cm)	壁高 (cm)	柱穴深さ (cm)	貯蔵穴 (長径×短径×深さcm)	壁溝	カマド・炉 (長径×短径cm)	特記遺物・備考	時代区分
SI-053	5.1×4.9	N-67.0-W	19.4	0~38.1	P1. 30.7 P2. 70.2 P3. 76.2 P4. 71.2	無	無	炉 北西	SK045が西隅から中央にあり炉半分を切る。焼失住居か	弥生後期
SI-055	不明	N-23.0-E	不明	8.7~44.6	P1. 63.1	110.0×95.5×78.3	有	無	殆どが調査区外で南東の一部遺存焼失住居	古墳中期
SI-056	不明	N-33.5-W	不明	0~11.6	P1. 36.1 P2. 72.9 P3. 62.0 P4. 65.1	無	無	無	北側の床面が残存しない	弥生後期
SI-058	不明	N-45.0-W	不明	6.5~17.0	P1. 45.9	102×52.0×41.1	有	無	北西部は調査区外 SI060に切られる	弥生後期
SI-059	不明	不明	不明	0~27.6	P1. 67.0	無	有	炉 中央 規模不明	炉床部の残存あり SI064, SK040に切られる	弥生
SI-060	不明	N-30-E	不明	7.7~29.9	P1. 33.5 P2. 77.0	無	無	無	SI058を切り、SI063に切られる	古墳前期
SI-062	不明	不明	不明	0~15.6	無	無	無	無	SI064との前後関係不明瞭 フalan不明	弥生
SI-063	不明	N-52.0-W	不明	0~32.7	P1. 35.1 P2. 65.5	88.0×62.0×79.5	有	無	北側は調査区外 SI060を切る	古墳中期
SI-064	不明	不明	不明	0~17.6	無	無	有	無	SI062との前後関係不明瞭	弥生
SI-065	不明	不明	不明	27.7~47.4	無	有 50.0×50.0×27.2	無	無	SI045に切られる 北西部は調査区外	弥生後期
SI-066	6.1×(6.5)	N-14.0-E	(32.6)	0~50.2	P1. 53.9 P2. 43.0 P3. 56.1 P4. 40.5	無	有	炉1 中央 58.0×47.0 炉2 中央 (60.0)×53.3	東側を8号墳に切られる	弥生後期
SI-068	不明	N-31.0-E	不明	3.7~7.7	P1. 57.5	無	有	炉 南西 35.5×32.0	東側を8号墳周溝で切られる SI066を切る	古墳中期



第21表 D区 弥生時代土器観察表

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SI-008	143-1	弥生	壺	4, 6, 8, 9, 214	11.0	—	[12.2]	30%	橙褐色	密	不明	不明, 口縁部RL	不明, 口縁部RL	貼付文5単位
SI-008	143-2	弥生	甕	237	—	—	[5.4]	5%	橙褐色	粗	不明	不明	不明	
SI-008	143-3	弥生	壺	116, 258	—	(5.2)	[3.2]	30%	橙褐色	密	ヘラテ	テ	テ	
SI-008	143-4	弥生	壺	15, 21, 65, 203	—	6.6	[4.5]	20%	橙褐色	密	ヘラテ	テ	テ	
SI-008	143-5	弥生	壺	82	—	(10.2)	[4.4]	20%	橙褐色	密	テ	不明	不明	内面黒斑
SI-008	143-6	土師器	甕	240	—	7.2	[2.6]	20%	橙褐色	密	テ	テ	ヘラテリ→ハ	
SI-008	143-7	弥生	壺	169	—	8.0	[3.8]	20%	橙褐色	密	不明	不明	ヘラテ	
SI-008	143-8	弥生	壺	46	—	10.0	[13.6]	20%	橙褐色	粗	不明	不明	不明	外面赤彩
SI-008	143-9	土師器	高杯	32	—	—	[7.1]	20%	橙褐色	密	テ	テ	ヘラテリ	
SI-015	145-1	土師器	高杯	3	16.5	—	[7.7]	50%	赤褐色	密	テ→シカキ	テ→シカキ, ヘラテ→シカキ	テ→シカキ	
SI-015	145-2	土師器	壺	14	14.7	—	[3.9]	15%	橙褐色	粗	ヘラテ→テ	テ	テ	
SI-023	146-1	弥生	壺	6, 12, 17, 18, 不明2	(11.8)	—	[5.9]	10%	褐色	粗	シカキ	RL, シカキ	シカキ	外面赤彩
SI-023	146-2	弥生	壺	15	—	—	[3.0]	5%	褐色	密	テ	テ	RL施文	
SI-023	146-3	弥生	甕	11	(16.0)	—	[12.7]	30%	暗褐色	粗	テ→ヘラテ	テ→シカキ	テ→シカキ	口唇部指による押捺
SI-023	146-4	弥生	甕	9	25.3	7.8	21.5	55%	暗褐色	密	テ→ヘラテ	テ	テ	口唇部指による押捺
SI-023	146-5	弥生	甕	16	21.8	—	[16.8]	55%	黄褐色	粗	ヘラテ→テ	テ	テ	口唇部指による押捺
SI-023	146-6	弥生	甕	3, 14	—	—	[15.4]	30%	褐色	粗	ヘラテ→シカキ	テ	テ	
SI-023	146-7	弥生	壺	11	(14.0)	—	[5.4]	10%	褐色	粗	テ→シカキ	テ→シカキ	テ→シカキ	外面内面口縁赤彩
SI-031	148-1	弥生	甕	1, 12, 31	(18.0)	8.2	15.9	60%	褐色	粗	テ→ヘラテ	テ, ハ→テ	テ, ハ→テ	
SI-031	148-2	弥生	甕	13	(24.0)	—	[16.4]	20%	橙褐色	粗	テ→ヘラテ	テ	テ	口唇部指による押捺
SI-031	148-3	弥生	甕	8, 9	—	—	[11.6]	20%	橙褐色	粗	テ	テ	テ	
SI-034	149-1	弥生	壺	4, 15	(18.9)	—	[4.0]	5%	黄褐色	密	シカキ	シカキ, 羽状縄文	シカキ	ヘラによる押捺
SI-034	149-2	土師器	甕	36	(18.0)	—	[10.6]	20%	暗褐色	密	テ	テ	テ→クスリ	
SI-035	150-1	弥生	壺	30	—	6.4	[17.8]	70%	暗褐色	粗	テ	テ	縄文→沈線→シカキ	外面赤彩?
SI-035	150-2	弥生	壺	21, 31, 35	—	6.0	[12.5]	80%	赤褐色	密	不明	不明	縄文→シカキ	外面赤彩
SI-035	150-3	弥生	甕	26, 27, 28, 33, 35	22.7	7.4	21.4	90%	褐色	粗	テ→シカキ	テ→ヘラテ→シカキ	テ→ヘラテ→シカキ	外面煤の付着
SI-042	151-1	弥生	壺	2, 3, 4, 043-2, 5, 9	16.6	—	[10.0]	10%	橙褐色	密	不明	不明	不明	
SI-042	151-2	弥生	壺	2, 3, 043-11, 13, 19	—	—	—	10%	橙褐色	粗	不明	不明	結節回転文	
SI-042	151-3	弥生	壺	043-4	—	—	[5.7]	5%	褐色	密	不明	不明	LR, ボン状貼付文	
SI-042	151-4	土師器	高杯	043-1	—	—	[6.6]	20%	褐色	密	テ	シカキ	シカキ	
SI-042	151-5	土師器	高杯	043-4	—	—	[7.4]	20%	褐色	密	テ	テ	不明	
SI-042	151-6	土師器	高杯	043-1	—	—	[6.4]	20%	褐色	密	テ	シカキ	シカキ	
SI-042	151-7	土師器	高杯	1	—	—	[7.2]	15%	褐色	密	不明	不明	不明	
SI-042	151-8	土師器	高杯	043-1	—	—	[4.4]	20%	褐色	密	ヘラテ→シカキ	テ→ヘラテ	テ→ヘラテ	
SI-042	151-9	土師器	壺	043-4	—	9.0	[8.3]	15%	褐色	密	テ	テ	テ	
SI-042	151-10	土師器	甕	042-1, 043-1	—	7.0	[3.5]	5%	褐色	粗	不明	不明	不明	
SI-051	152-1	弥生	甕	3	—	7.4	[16.5]	40%	褐色	粗	テ	テ	テ→シカキ	
SI-051	152-2	弥生	壺	5	—	8.5	[6.3]	10%	赤褐色	粗	不明	不明	シカキ	
SI-052	152-1	弥生	壺	1, 5	—	10.8	[14.5]	10%	赤褐色	密	テ	テ	テ	外面赤彩
SI-053	153-1	弥生	鉢	11	13.9	6.6	7.5	85%	橙褐色	密	テ→シカキ	テ→シカキ, テ	テ→シカキ	
SI-053	153-2	弥生	甕	3, 7	—	—	[16.2]	30%	橙褐色	密	シカキ	シカキ	シカキ	胴部指による押圧
SI-053	153-3	弥生	甕	1, 4, 5, 13, 14, 15, 16, 18, 19, 20, 22, 23, 33	22.6	7.3	22.7	70%	赤褐色	密	テ→ヘラテ	テ→ヘラテ→シカキ	テ→ヘラテ→シカキ	指
SI-053	153-4	弥生	甕	1, 7, 8, 9, SK045-1	(25.5)	(8.0)	23.5	40%	橙褐色	密	テ→シカキ	ヘラテ→シカキ	ヘラテ→シカキ	
SI-053	153-5	弥生	甕	9, 12	—	—	[15.9]	20%	橙褐色	粗	テ→シカキ	テ→ヘラテ	テ→ヘラテ	
SI-053	153-6	弥生	鉢	2	—	(8.0)	[2.8]	5%	赤褐色	密	ヘラテ	ヘラテ	ヘラテ	内外面赤彩
SI-058	155-1	弥生	鉢	1	(10.0)	—	[8.1]	15%	橙褐色	密	テ→シカキ	テ→シカキ	テ→縄文→シカキ	外面赤彩
SI-058	155-2	弥生	甕	1, 2	—	—	[8.2]	10%	褐色	粗	テ	テ	テ	
SI-062	155-1	弥生	壺	1, 64-5	—	9.8	[12.9]	25%	橙褐色	粗	テ	テ	テ→シカキ	
SI-064	155-1	弥生	壺	5	—	—	[5.3]	10%	褐色	密	ヘラテ	テ	テ	
SI-064	155-2	弥生	鉢	5	—	—	[1.8]	70%	暗褐色	密	テ	テ	テ	
SI-065	156-1	弥生	鉢	5	(13.2)	—	[4.2]	5%	橙褐色	密	テ→ヘラテ→シカキ	テ	テ	
SI-065	156-2	弥生	甕	7, 9, 10, 11, 12, 14, 15, 24, 41	14.0	5.2	12.4	70%	暗褐色	密	テ→ヘラテ	テ→ヘラテ	テ→ヘラテ	口唇部指による押捺
SI-065	156-3	弥生	甕	35, 36	—	6.6	[1.8]	5%	橙褐色	密	テ	テ	ヘラテ	
SI-065	156-4	弥生	甕	41	—	(12.0)	[2.0]	5%	褐色	密	不明	不明	不明	
SI-066	157-1	土師器	壺	1, 6, 10, 12, 17	—	—	[29.4]	20%	橙褐色	密	テ	テ	テ, ハ	
SI-066	157-2	弥生	壺	3	—	—	[10.0]	40%	暗褐色	密	ヘラテ	ハ→シカキ, S字状結節文	ハ→シカキ, S字状結節文	
SI-066	157-3	弥生	甕	11	(14.8)	—	[3.8]	5%	黄褐色	密	テ→ヘラテ	テ	テ	外面煤の付着
SS-001	158-1	土師器	埴	1	(13.0)	—	[4.2]	5%	赤褐色	密	テ→シカキ	テ→シカキ	テ→シカキ	
J-21	160-1	弥生	壺	83-1	—	6.0	[21.0]	85%	橙褐色	密	テ	シカキ	シカキ	内外面赤彩
9号墳	160-2	弥生	壺	1区-1	—	—	[4.3]	5%	橙褐色	密	テ	テ	テ, 結節縄文	
11号墳	160-3	弥生	甕	1	(19.2)	—	[14.8]	10%	黄褐色	密	テ→シカキ, ハテ	テ, 指による押捺	テ, 指による押捺	
J-20	160-4	弥生	甕	53-1	—	—	[12.2]	10%	橙褐色	粗	テ	テ	テ	
SI-039	160-5	弥生	甕	1, 20, 22	—	—	[15.4]	40%	橙褐色	密	テ	テ	テ	
11号墳	160-6	土師器	甕	1, 9, 11	—	—	[8.2]	5%	褐色	密	テ→ハ	テ→ハ	ヘラテ→ハ	
8号墳	160-7	弥生	壺	1区-12, 18	—	8.2	[16.6]	25%	褐色	密	テ	テ	テ, シカキ	外面赤彩

第22表 D区 古墳時代土器観察表

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
8号墳	164-1	土師器	杯	1区-21	14.0	—	4.9	95%	赤褐色	密	滑	滑	滑	
8号墳	164-2	土師器	杯	1区-19, 25, 不明1	14.2	—	4.1	80%	赤褐色	粗	滑	滑	滑	
8号墳	164-3	土師器	杯	1区-001, 19, 25, 2区-001	12.6	—	4.5	40%	赤褐色	密	滑	滑	滑	
8号墳	164-4	土師器	高杯	1区-8	—	—	[8.0]	10%	赤褐色	密	滑, 不明	不明	不明	
8号墳	164-5	土師器	高杯	1区-9	—	—	[8.3]	20%	赤褐色	密	滑→滑'キ, 滑	滑	滑	
8号墳	164-6	土師器	高杯	1区-16	—	—	[5.4]	20%	褐色	密	滑→滑'キ	滑	滑	
8号墳	164-7	土師器	高杯	1区-10	—	—	[5.8]	15%	黒褐色	密	滑	滑	滑	
8号墳	164-8	土師器	甕	2区-1, 23	—	7.3	[28.1]	60%	黄褐色	密	滑→滑	滑→滑	滑	
8号墳	164-9	土師器	甕	1区-1	(15.0)	—	[7.2]	10%	赤褐色	密	滑→滑	滑	滑	内外面赤彩
8号墳	164-10	土師器	鉢	2区-28	18.8	7.2	14.6	80%	褐色	密	滑→滑	滑	滑	
8号墳	164-11	土師器	甕	1区-20, 21, 24, 26	—	7.7	[14.9]	40%	橙褐色	密	滑	滑	滑	
8号墳	164-12	土師器	鉢	4区-1	—	6.0	[2.1]	5%	橙褐色	密	不明	不明	不明	
8号墳	164-13	土師器	壺	1区-11	—	3.0	[2.1]	10%	赤褐色	密	滑→滑'キ	滑	滑	
8号墳	164-14	土師器	ミチブツ	2区-3	—	3.4	[1.8]	30%	黒褐色	密	不明	不明	不明	
9号墳	168-1	土師器	高杯	1区-1, 32, 34, 40, 2区-1	17.5	(13.6)	13.5	70%	橙褐色	密	滑→滑	滑	滑	
9号墳	168-2	土師器	高杯	1区-1, 2区-1	—	(15.0)	9.0	35%	赤褐色	密	滑→滑	滑	滑	外面赤彩
9号墳	168-3	土師器	高杯	1区-21	—	(7.4)	[7.1]	20%	赤褐色	密	滑, 滑'キ	滑'キ	滑	
9号墳	168-4	土師器	高杯	1区-35	—	—	8.3	40%	橙褐色	密	滑	滑	滑	
9号墳	168-5	土師器	高杯	1区-23	—	—	[5.6]	20%	黄褐色	密	滑→滑'キ	滑	滑	
9号墳	168-6	土師器	高杯	1区-23	—	—	[5.7]	40%	橙褐色	密	滑→滑	滑	滑	
9号墳	168-7	土師器	高杯	1区-28	—	—	[4.9]	25%	橙褐色	密	滑	滑	滑	
9号墳	168-8	土師器	器台	1	—	—	[4.3]	10%	黄褐色	密	滑	不明	不明	
9号墳	168-9	土師器	鉢	2区-2	(11.0)	—	[4.0]	5%	黄褐色	密	滑→滑'キ	滑	滑	
9号墳	168-10	土師器	甕	1区-18	—	5.0	[4.6]	20%	褐色	密	滑→滑	不明	不明	
9号墳	168-11	土師器	甕	1区-10, 11, 12	—	5.0	[5.3]	10%	赤褐色	密	滑	滑	滑	
9号墳	168-12	土師器	壺	1区-8	—	4.0	[2.2]	10%	赤褐色	密	滑	滑	滑	
9号墳	168-13	土師器	壺	1区-40	—	4.6	[2.1]	5%	赤褐色	密	滑	滑	滑	
9号墳	168-14	土師器	瓶	2区-1	—	(5.0)	[2.3]	5%	黄褐色	密	滑	滑	滑	
9号墳	168-15	土師器	壺	2区-1	—	3.0	[1.2]	30%	褐色	密	滑	滑	滑	
11号墳	169-1	土師器	高杯	4	—	—	5.9	20%	褐色	密	滑, 滑'キ	滑	滑	
11号墳	169-2	土師器	高杯	5	—	—	5.5	15%	赤褐色	密	滑	不明	不明	
11号墳	169-3	土師器	甕	11	(14.8)	—	[3.8]	5%	黄褐色	密				外面煤の付着文
11号墳	169-4	土師器	甕	1, 11	—	6.8	[2.2]	5%	黄褐色	密	滑	滑	滑	
SM-001	170-1	土師器	高杯	9, 8号墳-1区-27	19.3	11.8	12.2	85%	赤褐色	密	滑→滑'キ, 滑	滑, 滑→滑'キ	滑	8号墳-4と接合, 内外面赤
SM-001	170-2	土師器	器台	61	—	13.0	[7.2]	50%	黄褐色	密	滑→滑	滑	滑	
SM-001	170-3	土師器	器台	8, 62	—	9.5	[7.0]	50%	橙褐色	粗	不明	不明	不明	
SM-001	170-4	土師器	鉢	47	10.8	6.0	5.2	95%	褐色	密	滑	滑	滑	
SM-001	170-5	土師器	壺	46	—	5.6	[10.1]	40%	黄褐色	粗	滑	不明, 滑'キ	不明, 滑'キ	
SM-001	170-6	土師器	壺	5, 6, 68, 69	—	3.4	[6.6]		橙褐色	粗	滑	滑	滑	
SM-001	170-7	土師器	壺	44, 49	(10.0)	—	[9.1]	10%	赤褐色	粗	滑→滑	滑→滑'キ	滑	内外面赤彩
SM-001	170-8	土師器												
SM-001	170-9	土師器	壺	1, 22, 44, 54, H23-006-1	14.8	—	[4.3]	20%	黄褐色	密	滑, 滑'キ	滑'キ	滑	
SM-001	170-10	土師器	甕	1, 15, 19, 20, 23, 24, 28, 35, 38, 41, 43, 53, 54, 55, 58, 68	17.5	6.4	24.8	90%	黄褐色	粗	滑→滑	滑→滑	滑	外面に煤の付着, 木葉痕
SM-001	171-11	土師器	甕	1, 9, 31, 33, 68	14.0	—	[15.8]	40%	橙褐色	密	滑→滑	滑→滑	滑	
SM-001	171-12	土師器	壺	1, 12, 13, 54	—	5.0	[17.4]	30%	橙褐色	粗	滑, 滑	滑	滑	
SM-001	171-13	土師器	甕	1, 21, 25, 27, 68	—	5.6	[8.2]	15%	褐色	密	滑	滑	滑	
SM-001	171-14	土師器	甕	1	—	6.0	[4.9]	10%	褐色	密	滑'キ	滑	滑	
SM-001	171-15	土師器	甕	1	—	5.6	[4.7]	10%	橙褐色	粗	滑	滑	滑	内面煤の付着
SM-001	171-16	土師器	壺	48, 50	—	7.4	[3.5]	15%	黒褐色	密	滑	滑	滑	
SM-001	171-17	土師器	甕	17	—	5.0	[3.0]	10%	褐色	密	滑	滑	滑	
SM-001	171-18	土師器	壺	2	—	(11.0)	[4.1]	5%	橙褐色	粗	不明	不明	不明	
SK-016	172-1	弥生	壺	2	—	—	[4.3]	5%	褐色	密	滑			袋状の貼付
SK-016	172-2	土師器	甕	1	—	(6.6)	[1.8]	5%	橙褐色	密	不明	不明	不明	
SK-016	172-3	土師器	壺	1	—	6.0	[3.0]	10%	赤褐色	密	滑	不明	不明	
SK-013	173-1	土師器	壺	7	—	7.4	[1.9]	5%	暗褐色	密	滑	滑	滑	
-	174-1	土師器	鉢	9	10.4	3.0	5.7	95%	赤褐色	密	滑→滑	滑→滑	滑	内外面赤彩
SI-002	174-2	土師器	杯	42, 43	12.6	—	5.1	95%	褐色	粗	滑→滑	滑→滑	滑	外面赤彩
SI-002	174-3	土師器	杯	3, 4	(13.0)	—	[3.6]	10%	暗褐色	密	滑→滑'キ	滑→滑'キ	滑	外面黒色処理
SI-002	174-4	土師器	杯	3, 4, 29, 30	(15.8)	—	[3.4]	20%	暗褐色	密	滑	滑	滑	
SI-002	174-5	土師器	鉢	8, 10	12.5	4.4	4.6	55%	暗褐色	密	滑→滑'キ	滑→滑'キ	滑	
SI-002	174-6	土師器	碗	7, 21	10.2	2.4	4.9	95%	橙褐色	密	滑→滑	滑→滑	滑	
SI-002	174-7	土師器	ミチブツ	37	8.2	4.8	5.6	85%	橙褐色	密	滑→滑	滑, 滑	滑	
SI-002	174-8	土師器	高杯	61	19.1	—	[13.4]	60%	橙褐色	粗	滑→滑'キ	滑→滑	滑	絞目残る
SI-002	174-9	土師器	高杯	10, 18	(14.4)	(10.7)	11.3	60%	橙褐色	密	滑→滑'キ	滑, 滑	滑	焼成前の未貫通の孔1ヶ所
SI-002	174-10	土師器	高杯	55, 64	12.3	9.4	10.8	70%	橙褐色	密	滑→滑	滑→滑, 滑→滑'キ	滑	

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SI-002	174-11	土師器	高杯	52	18.8	—	[6.7]	60%	褐色	密	ナゲ→ハケ→ミダキ	ナゲ→ハケ→ミダキ		
SI-002	174-12	土師器	高杯	3, 44, 45	20.0	—	[6.5]	35%	橙褐色	粗	ヘナゲ→ナゲ	ナゲ, 不明		
SI-002	174-13	土師器	高杯	31	(18.3)	—	[6.3]	25%	橙褐色	密	ヘナゲ→ナゲ	ハケ→ナゲ		
SI-002	174-14	土師器	高杯	1, 13	—	—	[3.5]	20%	橙褐色	密	ヘナゲ	不明		外面赤彩
SI-002	174-15	土師器	高杯	21	—	12.2	[6.7]	30%	橙褐色	密	ヘナゲ→ハケ→ナゲ	ナゲ→ヘナゲ		外面赤彩
SI-002	174-16	土師器	台杯甕	3, 4	—	(13.0)	[5.0]	20%	褐色	密	ハケ→ナゲ	ハケ→ナゲ		
SI-002	175-17	土師器	埴	11	9.4	3.2	[9.7]	100%	橙褐色	密	ヘナゲ→ナゲ	ヘナゲ→ナゲ		
SI-002	175-18	土師器	壺	38	(10.0)	—	[7.4]	20%	赤褐色	密	ナゲ	ナゲ		内面口縁・外面赤彩
SI-002	175-19	土師器	甕	2, 3, 4, 24	(12.2)	—	[8.2]	30%	褐色	密	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ナズリ		
SI-002	175-20	土師器	甕	10	(10.4)	4.0	[11.0]	80%	橙褐色	密	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ナズリ→ナゲ		
SI-002	175-21	土師器	甕	60	17.8	6.8	[22.2]	80%	褐色	密	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ナズリ→ナゲ		外面に煤の付着
SI-002	175-22	土師器	甕	16	18.2	—	[6.4]	20%	褐色	粗	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ナズリ		外面に煤の付着
SI-002	175-23	土師器	甕	47, 71	(15.0)	—	[6.6]	15%	褐色	密	ハケ→ナゲ	ハケ→ナゲ		
SI-002	175-24	土師器	壺	4, 59	(10.0)	—	[4.5]	10%	褐色	粗	ヘナゲ→ナゲ	ナゲ→ナズリ→ナゲ		
SI-002	175-25	土師器	鉢	62	(13.0)	—	[7.6]	30%	赤褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ		内外面赤彩
SI-002	175-26	土師器	壺	14	—	5.6	[12.6]	20%	褐色	密	ヘナゲ	ナゲ→ミダキ		
SI-002	175-27	土師器	甕	4, 17	—	7.7	[8.0]	20%	暗褐色	密	ハケ→ナゲ	ハケ→ミダキ		
SI-002	175-28	土師器	甕	47, 48, 71	—	6.4	[4.1]	10%	暗褐色	密	ヘナゲ	ナズリ→ナゲ		
SI-002	175-29	土師器	壺	33	—	6.4	[2.4]	5%	褐色	密	ヘナゲ	ヘナゲ→ミダキ, ヘナゲ		
SI-010	176-1	土師器	高杯	1, 2, 3, 4, 5, 95	15.6	—	[4.5]	45%	褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ, ナゲ		
SI-010	176-2	土師器	高杯	1, 6	(17.4)	—	[5.7]	10%	褐色	密	ナゲ	ナゲ		
SI-010	176-3	土師器	埴	10, 11, 18, 66, 97	10.4	3.6	[13.0]	80%	褐色	密	ナゲ, ヘナゲ	不明		
SI-010	176-4	土師器	椀	62	—	4.6	[2.7]	30%	橙褐色	粗	不明	不明		
SI-010	176-5	土師器	甕	10, 13, 51, 55, 63, 64	—	7.2	[10.2]	30%	橙褐色	密	ナゲ	ナゲ		
SI-010	176-6	土師器	ミチマ	68	—	—	[3.5]	30%	橙褐色	密	ナゲ	ナゲ		
SI-010	176-7	土師器	甕	72	—	(6.6)	[3.9]	5%	褐色	密	ナゲ	不明		
SI-011	177-1	須恵器	壺	1, 2, 61, 27	10.3	—	[15.3]	100%	灰黒色	密	ナゲ	ナゲ, 口縁部と胴部に波状文		
SI-011	177-2	須恵器	壺	1, 5	(11.0)	—	[4.3]	5%	灰色	密	ナゲ	ナゲ		櫛目波状文2段
SI-011	177-3	土師器	杯	1109	(12.6)	—	[4.8]	20%	褐色	密	ヘナゲ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-011	177-4	土師器	杯	67	(16.4)	—	4.4	40%	暗褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ		
SI-011	177-5	土師器	杯	42	—	—	[3.2]	40%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-011	177-6	土師器	高杯	1, 38, 177, 178, 179	(19.4)	(12.8)	[11.2]	60%	暗褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ, ヘナゲ		
SI-011	177-7	土師器	高杯	11, 37, 139, 170	16.0	11.8	[11.4]	80%	橙褐色	密	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-011	177-8	土師器	高杯	36	16.6	—	[5.3]	60%	褐色	密	ナゲ	ナゲ→ミダキ		
SI-011	177-9	土師器	高杯	63, 68, 70, 不明1	(17.4)	—	[11.5]	45%	褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ, ヘナゲ		
SI-011	177-10	土師器	高杯	1, 43, 50, 51	(16.3)	(11.0)	[10.2]	30%	橙褐色	粗	不明	不明		外面赤彩
SI-011	177-11	土師器	高杯	73, 77, 97, 104	16.8	—	[5.8]	40%	褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ		
SI-011	177-12	土師器	高杯	1, 37, 39	17.4	—	[6.5]	40%	橙褐色	密	ナゲ→ハケ→ナゲ	ナゲ→ハケ→ナゲ, ヘナゲ		
SI-011	177-13	土師器	高杯	113, 120, 180	—	13.2	[4.4]	25%	橙褐色	密	ナゲ→ヘナゲ→ミダキ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-011	177-14	土師器	高杯	76	—	—	[6.9]	20%	橙褐色	密	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-011	177-15	土師器	高杯	1	—	—	[8.0]	30%	橙褐色	密	ナゲ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-011	177-16	土師器	杯	1, 4, 84	(12.0)	—	[5.2]	30%	暗褐色	密	ナゲ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-011	177-17	土師器	甕	11, 55	—	6.4	[4.4]	30%	暗褐色	密	ミダキ	ナズリ→ヘナゲ, ナゲ		
SI-011	177-23	土師器	甕	1, 60, 78, 121, 131, 133, 143, 145, 155, 162	22.0	6.4	[13.8]	75%	橙褐色	密	ナゲ→ハケ→ヘナゲ	ナゲ→ハケ→ヘナゲ		
SI-011	178-18	土師器	甕	46, 74, 95, 140, 141, 143, 147, 166, 167	14.4	7.2	[28.7]	70%	暗褐色	密	ハケ→ナゲ, ヘナゲ	ナゲ→ハケ→ヘナゲ		
SI-011	178-19	土師器	甕	1, 89, 190	(13.1)	7.4	[27.0]	80%	暗褐色	密	ナゲ→ヘナゲ→ナゲ	ナゲ→ハケ→ナゲ		
SI-011	178-20	土師器	甕	1, 111, 116, 157, 181, 183, 不明1	—	7.4	[9.9]	10%	褐色	密	ハケ→ナゲ	ハケ→ナゲ		
SI-011	178-21	土師器	甕	64, 159	—	7.0	[6.6]	20%	暗褐色	密	ハケ→ナゲ	ハケ→ナゲ		
SI-011	178-22	土師器	甕	1, 17, 125	(24.0)	—	[4.9]	10%	橙褐色	密	ナゲ→ハケ	ハケ→ナゲ		
SI-012	179-1	須恵器	ハツ	1	(6.6)	—	[1.9]	5%	灰色	密	ナゲ	ナゲ		
SI-012	179-2	土師器	鉢	37, 76	(12.0)	—	[4.2]	30%	暗褐色	密	ナゲ, ヘナゲ	ナゲ, 不明		
SI-012	179-3	土師器	鉢	2, 21, 226	(10.2)	—	[4.9]	20%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-012	179-4	土師器	椀	97	—	3.4	[2.3]	30%	褐色	密	不明	不明		
SI-012	179-5	土師器	高杯	113	(15.0)	—	[4.7]	35%	褐色	密	ナゲ→ミダキ	ナゲ		
SI-012	179-6	土師器	高杯	1, 4, 14	—	—	[9.8]	60%	褐色	密	ナゲ	ナゲ→ミダキ		
SI-012	179-7	土師器	高杯	1, 29, 229	—	(10.7)	[9.6]	55%	橙褐色	粗	不明	不明		
SI-012	179-8	土師器	高杯	194	—	—	[9.2]	60%	橙褐色	粗	不明	不明		
SI-012	179-9	土師器	高杯	244	—	—	[5.0]	20%	暗褐色	密	ナゲ	ナゲ		
SI-012	179-10	土師器	壺	123, 133, K22-92-34	18.0	—	[7.2]	30%	褐色	粗	ナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ		
SI-012	179-11	土師器	甕	10, 60, 62, 80, 109, 118, 192, 不明1	16.4	—	[19.6]	40%	橙褐色	粗	ナゲ→ヘナゲ→ミダキ	ナゲ→ミダキ		
SI-012	179-12	土師器	甕	1, 22, 23, 24, 230, 232, 233, 234, 235, 236, 239	18.2	—	[21.0]	30%	橙褐色	粗	ナゲ	ナゲ		
SI-012	179-13	土師器	甕	3, 9, 17, 18, 20	(15.0)	—	[15.3]	20%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-012	179-14	土師器	甕	206	24.6	—	[7.6]	5%	褐色	密	不明	不明		
SI-012	180-15	土師器	甕	47, 49, 56, 58, 59, 60, 66, 73, 75	16.2	—	[20]	30%	橙褐色	密	ナゲ	ナゲ→ヘナゲ		
SI-012	180-16	土師器	甕	1, 19, 142, 174, 175, 242	(16.4)	—	[8.2]	10%	橙褐色	密	ナゲ	ナゲ		
SI-012	180-17	土師器	甕	30, 81, 112, 144, 151, 177, 181, 186	14.8	—	[9.6]	10%	橙褐色	粗	ナゲ→ヘナゲ	ナゲ→ヘナゲ		外面煤の付着
SI-012	180-18	土師器	甕	5, 25, 27, 34	—	(11.9)	[15.0]	15%	橙褐色	密	ヘナゲ	ナズリ→ヘナゲ		内面煤の付着, 外面黒斑

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整 内面	外面	備考
SI-012	180-19	土師器	甕	224	(17.8)	—	(5.1)	10%	暗褐色	粗	ナデ	ナデ→ヘラナデ	
SI-012	180-20	土師器	鉢	2, 13, 214	(10.9)	4.0	10.4	70%	橙褐色	粗	不明	不明	
SI-012	180-21	土師器	壺	221	—	4.2	[1.7]	10%	褐色	密	シガキ	ナデ	
SI-012	180-22	土師器	壺	134, 146, 162, 不明1	—	8.0	[4.5]	10%	褐色	密	不明	シガキ→ナデ	
SI-012	180-23	土師器	壺	191, 250	—	(8.0)	[3.2]	5%	褐色	密	不明	不明	
SI-013	181-1	土師器	杯	66	14.4	—	4.3	95%	褐色	粗	ナデ→シガキ	ナデ, 不明	
SI-013	181-2	土師器	椀	4	(13.4)	—	[3.2]	5%	赤褐色	密	ナデ	ナデ→クスリ→ナデ	内外面赤彩
SI-013	181-3	土師器	鉢	71, 72, 99,	11.8	—	6.0	95%	橙褐色	密	ナデ→シガキ	ナデ→ハケ→ナデ	
SI-013	181-4	土師器	壺	76	11.8	2.8	8.5	90%	褐色	粗	ナデ, 不明	ハケ→ナデ, 不明	
SI-013	181-5	土師器	壺	67	(10.7)	2.6	10.0	95%	暗褐色	密	ナデ→シガキ, 不明	ハケ→ハケ→シガキ	
SI-013	181-6	土師器	高杯	68, 71, 75	17.0	(11.6)	13.0	80%	褐色	密	ナデ→ヘラナデ→シガキ	ナデ→ヘラナデ→シガキ	
SI-013	181-7	土師器	高杯	3, 69, 73, 79, 94	17.1	10.8	11.6	80%	橙褐色	密	ナデ, ヘラナデ	ナデ, 不明	
SI-013	181-8	土師器	甕	3, 8, 75, 77, 83, 85, 88, 89, 91, 93, 94	(21.8)	6.8	29.8	55%	暗褐色	密	ヘラナデ→ナデ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-013	181-9	土師器	甕	53	(17.0)	—	[4.9]	10%	褐色	密	ハケ→ナデ	ナデ	
SI-016	182-1	土師器	高杯	2, 3	(15.6)	—	[5.4]	15%	橙褐色	密	不明	不明	
SI-016	182-2	土師器	高杯	3, 38, 65, 66	18.0	—	[5.8]	40%	橙褐色	密	ナデ, 不明	ナデ→ヘラナデ	
SI-016	182-3	土師器	高杯	24, 26	—	—	[8.5]	35%	橙褐色	密	不明	不明	
SI-016	182-4	土師器	高杯	1, 3, 4, 44,	—	—	[2.1]	5%	橙褐色	粗	不明	不明	
SI-016	182-5	土師器	高杯	94	—	—	[6.9]	10%	橙褐色	密	ナデ, ヘラナデ	不明	
SI-016	182-6	土師器	高杯	56	—	—	[7.5]	30%	黄褐色	密	ナデ→シガキ, ヘラナデ	ナデ→シガキ, ナデ→ヘラナデ	
SI-016	182-7	土師器	高杯	24, 96	—	—	[8.5]	25%	橙褐色	密	ナデ→シガキ, ナデ	ナデ→ヘラナデ→シガキ	
SI-016	182-8	土師器	高杯	95	—	—	[6.2]	10%	褐色	密	不明	不明	
SI-016	182-9	土師器	高杯	4	—	—	[5.0]	10%	褐色	粗	不明	不明	
SI-016	182-10	土師器	高杯	不明	—	(9.6)	[4.8]	10%	褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	
SI-016	183-11	土師器	壺	19, 51	(18.9)	—	[7.9]	5%	橙褐色	密	ナデ, 不明	ナデ, 不明	
SI-016	183-12	土師器	埴	2	—	—	[9.6]	40%	橙褐色	密	不明	不明	
SI-016	183-13	土師器	埴	92, 82,	—	3.2	[3.1]	20%	橙褐色	密	不明	不明	
SI-016	183-14	土師器	壺	61, 83	—	24.0	[3.0]	50%	橙褐色	密	ヘラナデ	ヘラナデ→ナデ, ヘラナデ	
SI-016	183-15	土師器	甕	1, 14, 16, SI043-4	12.3	—	[6.9]	10%	橙褐色	粗	ナデ→ヘラナデ	ナデ, 不明	
SI-016	183-16	土師器	壺	1, 5, 32	—	5.6	[4.3]	10%	橙褐色	密	ヘラナデ	ヘラナデ	
SI-016	183-17	土師器	壺	68	—	6.2	[3.9]	10%	橙褐色	粗	ヘラナデ	不明	
SI-016	183-18	土師器	壺	120	—	10.0	[1.5]	5%	橙褐色	粗	ナデ	不明	
SI-016	183-19	弥生	壺	122	—	4.8	[8.2]	70%	褐色	密	ナデ	ナデ	
SI-016	183-20	弥生	ミチエフ	1	(4.0)	—	2.3	30%	褐色	密	ナデ	ナデ	
SI-016	183-21	弥生	鉢	4	(20.0)	—	[7.0]	10%	褐色	密	不明	RL→LR→無節回転文 (S字)	
SI-016	183-22	弥生	壺	121	(22.0)	—	[3.3]	5%	褐色	密	ナデ	ナデ, 縄文→沈線	鋸歯状沈線区画内にRL
SI-016	183-23	弥生	壺	58, 59	—	6.4	—	15%	橙褐色	密	不明	不明, 頸部にLR, RL施文	4と接合
SI-016	183-25	弥生	壺	115	—	—	—	5%	橙褐色	粗	不明	不明	3と接合
SI-019	184-1	土師器	杯	52, 53, 98, 97	13.6	4.8	5.2	90%	橙褐色	粗	ナデ→シガキ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-2	土師器	杯	4, 39	(15.0)	—	[5.5]	30%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-3	土師器	杯	4, 24, 49	15.3	—	4.3	90%	橙褐色	密	ナデ→シガキ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-4	土師器	杯	54	15.0	—	4.2	30%	褐色	密	ナデ→シガキ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-5	土師器	杯	50	(13.6)	—	4.5	40%	褐色	密	ナデ→シガキ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-6	土師器	杯	1, 4, 22, 46	(13.6)	—	[4.1]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-7	土師器	杯	1	(11.9)	4.0	4.8	20%	褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ, 不明	
SI-019	184-8	土師器	椀	58	(11.3)	4.0	5.8	55%	褐色	密	ナデ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-019	184-9	土師器	高杯	26	—	—	[6.4]	10%	赤褐色	密	ナデ→ハケ	ハケ→シガキ	
SI-019	184-10	土師器	高杯	49	—	—	[8.4]	40%	橙褐色	密	ナデ, クスリ, シガキ	ナデ→シガキ	
SI-019	184-11	土師器	壺	4, 50, 66	—	—	[8.6]	20%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→クスリ→シガキ	
SI-019	184-12	土師器	甕	4, 28, 42, 48, 51, 52, 76, 93	18.6	8.1	32.6	60%	橙褐色	密	ナデ, 不明	ナデ	
SI-019	184-13	土師器	甕	1, 4, 20, 52, 56, 57, 73, 94, 96, 97, DSK016-1	15.0	—	[25.7]	60%	橙褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	
SI-019	185-14	土師器	甕	45, 49, 51, 59, 60	(15.4)	—	[14.0]	30%	橙褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ハケ→ナデ	
SI-019	185-15	土師器	甕	1, 4, 49, 50, 51	—	(8.6)	[11.4]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→ハケ	
SI-020	186-1	土師器	杯	5, 30	(12.2)	—	[5.3]	40%	橙褐色	密	ナデ→シガキ	ハケ→ナデ	
SI-020	186-2	土師器	鉢	30, 43	(11.8)	4.0	5.1	60%	黄褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	
SI-020	186-3	土師器	高杯	26, 34	—	—	[6.6]	20%	橙褐色	密	ナデ→シガキ, ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	
SI-020	186-4	土師器	壺	35, 36, 47	16.2	—	[7.4]	20%	橙褐色	密	ナデ→シガキ	ナデ→シガキ	
SI-020	186-5	土師器	甕	1, 6, 7, 8, 10, 13, 14, 17, 20, 22, 30	15.5	9.2	29.8	80%	橙褐色	密	ヘラナデ→ナデ	クスリ→ナデ	
SI-020	186-6	土師器	甕	1, 2, 3, 4, 30, 31	17.8	6.6	27.4	80%	褐色	粗	ナデ→ヘラナデ	ナデ→クスリ→ナデ	
SI-020	187-7	土師器	甕	6	17.5	7.6	33.6	80%	褐色	密	ナデ, ハケ→ヘラナデ	ナデ→ハケ→シガキ	
SI-020	187-8	土師器	甕	6	19.8	—	[7.5]	20%	褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ→シガキ	
SI-020	187-9	土師器	甕	34, J22-022-1	(18.2)	—	[7.4]	5%	褐色	密	ナデ→ヘラナデ	ナデ→ヘラナデ	
SI-020	187-10	土師器	甕	37, 42, 48	—	7.0	[9.9]	20%	橙褐色	密	ヘラナデ	ヘラナデ	
SI-020	187-11	土師器	甕	25	—	7.6	[3.4]	10%	橙褐色	粗	ヘラナデ	ヘラナデ	
SI-021	188-1	須恵器	壺	6	—	—	[3.3]	5%	灰色	密	ナデ	ナデ	
SI-021	188-2	土師器	杯	61	15.8	4.5	6.2	80%	褐色	密	ナデ→ヘラナデ→シガキ	ナデ→シガキ	
SI-021	188-3	土師器	高杯	2, 44	(18.0)	—	[5.6]	30%	橙褐色	密	ナデ→シガキ	ナデ→シガキ	

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SI-021	188-4	土師器	高杯	15	—	—	[7.9]	30%	橙褐色	密	ナテ→クスリ	ナテ		
SI-021	188-5	土師器	高杯	71	—	—	[6.9]	20%	褐色	密	ナテ→クスリ	ナテ→クスリ→ナテ		
SI-021	188-6	土師器	高杯	10	—	—	[6.8]	30%	暗褐色	密	ナテ	ナテ→シタキ		
SI-021	188-7	土師器	鉢	23, 66	13.4	—	[5.6]	20%	褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→シタキ		
SI-021	188-8	土師器	甕	69, 92	13.0	6.4	10.5	80%	褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→シタキ		
SI-021	188-9	土師器	壺	62, 64	12.8	—	[8.3]	30%	褐色	密	ナテ→ハラナテ, シタキ	ナテ→シタキ		胴部外面に研磨痕あり
SI-021	188-10	土師器	甕	51, 62	15.6	—	[15.0]	30%	橙褐色	密	ナテ	ナテ→クスリ→ナテ		外面に煤の付着
SI-021	188-11	土師器	甕	27, 28, 48, 81, 87, 88, 105	14.4	—	[10.5]	30%	橙褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-021	188-12	土師器	壺	62, 94	(15.0)	—	[8.2]	10%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-021	188-13	土師器	瓶	27	—	—	—	5%	橙褐色	密	—	ナテ		握手のみ
SI-022	189-1	須恵器	椀	51	6.3	4.5	5.6	95%	黒灰色	密	ナテ	ナテ→ハラクスリ		線刻(舟絵)
SI-022	189-2	土師器	杯	3, 26	(13.6)	—	3.8	10%	橙褐色	粗	ナテ→シタキ	ナテ→シタキ		
SI-022	189-3	土師器	杯	54	(14.6)	3.8	5.3	50%	褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→シタキ		
SI-022	189-4	土師器	杯	31	—	4.4	[3.2]	15%	褐色	密	シタキ	シタキ, ナテ		
SI-022	189-5	土師器	杯	19, 91	—	5.0	[1.7]	10%	褐色	粗	シタキ	シタキ		
SI-022	189-6	土師器	杯	94	12.8	—	6.0	80%	橙褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→シタキ		
SI-022	189-7	土師器	高杯	72	—	—	[6.0]	30%	褐色	密	ウ→シタキ	ウ→シタキ		
SI-022	189-8	土師器	高杯	3, 41	—	(13.0)	[4.2]	5%	褐色	密	ナテ	ナテ→ハク		
SI-022	189-9	土師器	高杯	23	—	—	[6.5]	15%	橙褐色	密	ナテ→クスリ	ウ→ナテ		
SI-022	189-10	土師器	高杯	37	—	—	[5.7]	15%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ハラナテ		
SI-022	190-11	土師器	甕	96	18.7	5.7	27.9	95%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-022	190-12	土師器	甕	60	18.0	7.8	27.0	80%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→クスリ→ナテ		
SI-022	190-13	土師器	甕	34, 59, 65, 68, 69	16.8	7.0	24.4	80%	褐色	密	ウ→ナテ	ウ→ナテ, シタキ		
SI-022	190-14	土師器	甕	70, 64, 67, 71	18.6	—	[20.7]	60%	暗褐色	密	ナテ→ウ→ナテ	ナテ→ウ→ハラナテ		
SI-022	190-15	土師器	甕	3, 15, 18, 56	(17.0)	—	[17.0]	10%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハク		
SI-022	190-16	土師器	甕	3, 6, 33, 39, 40, 42, 43	—	—	[21.9]	30%	褐色	密	ウ→ハラナテ	ウ		外面煤の付着
SI-022	190-17	土師器	甕	73	—	—	[23.9]	70%	暗褐色	密	ナテ	ナテ→ウ→ナテ		
SI-022	191-18	土師器	甕	48, 70, 71	11.9	7.6	18.2	80%	暗褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→クスリ→ナテ, 頸部指ナテ		
SI-022	191-19	土師器	甕	4, 27, 58, 59, 不明1	16.4	—	[10.9]	30%	褐色	密	ウ→ナテ, ハラナテ	ウ→ナテ		外面煤の付着
SI-022	191-20	土師器	甕	2, 7, 49, 93	(15.6)	—	[8.2]	15%	暗褐色	密	ハラナテ→ナテ	ウ→ナテ		外面煤の付着
SI-022	191-21	土師器	甕	44, 55, 92	18.0	—	[5.8]	20%	赤褐色	密	ウ→ナテ	ウ→ナテ		
SI-022	191-22	土師器	甕	97	15.0	—	[8.8]	30%	暗褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-022	191-23	土師器	甕	32	—	4.2	[2.6]	10%	赤褐色	密	シタキ	シタキ, ナテ		
SI-022	191-24	土師器	甕	13, 14, 18, 46	—	7.2	[3.7]	10%	褐色	密	ウ	ウ→ナテ		
SI-022	191-25	土師器	瓶	61	14.0	5.1	17.6	80%	褐色	粗	ナテ→ハラナテ	ナテ→クスリ→ナテ, 頸部指ナテ		
SI-022	191-26	土師器	ミチアブ	88	—	4.0	[3.2]	50%	褐色	密	ハラナテ	シタキ		
SI-024	192-1	土師器	高杯	15	—	—	[3.8]	10%	赤褐色	密	ナテ	ナテ		内外面赤彩
SI-024	192-2	土師器	高杯	26	—	—	[5.5]	10%	赤褐色	密	ウ→ナテ	ナテ→ハク→シタキ		
SI-024	192-3	土師器	ハツカ	29	(8.3)	3.2	11.3	80%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	不明		
SI-024	192-4	土師器	甕	3, 18	(19.0)	—	[9.0]	10%	橙褐色	密	ウ→ナテ	ウ→ナテ		
SI-025	193-1	土師器	杯	16, 34, 50	11.2	(3.7)	5.1	60%	橙褐色	密	ウ→ナテ	ウ→ハラナテ, ナテ		
SI-025	193-2	土師器	椀	21, 27, 47, 78	12.9	6.0	4.8	80%	褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→シタキ		
SI-025	193-3	土師器	高杯	36, 39, 40, 不明2	(17.1)	—	[6.0]	10%	橙褐色	粗	不明	不明		
SI-025	193-4	土師器	高杯	3	—	—	[4.7]	10%	褐色	密	シタキ, ハラナテ	ウ→ナテ		
SI-025	193-5	土師器	高杯	69, 72	—	—	[4.8]	10%	褐色	密	不明	不明		
SI-025	193-6	土師器	高杯	83	—	—	[5.0]	10%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-025	193-7	土師器	甕	1, 2, 3, 38, 40, 55, 60, 63, 97	(18.4)	8.2	25.3	40%	橙褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ウ→ハラナテ		
SI-025	193-8	土師器	甕	1, 58, 80	(17.8)	—	[17.5]	15%	橙褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→クスリ→ナテ		
SI-025	193-9	土師器	甕	J-22-69-1, 32, 39	15.8	—	[9.2]	20%	褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-025	193-10	土師器	甕	15, 61	(14.4)	—	[6.0]	15%	橙褐色	密	ナテ→ハラナテ→ナテ	ウ→ナテ, ハラナテ		
SI-025	193-11	土師器	甕	11, 44	—	7.6	[12.3]	40%	褐色	粗	クスリ→ナテ	ウ→ハラナテ		
SI-025	193-12	土師器	甕	J22-71-5, 62	—	7.4	[4.6]	10%	橙褐色	密	ハラナテ→シタキ	ハラナテ		
SI-025	193-13	土師器	壺	51, 58	—	5.2	[5.2]	10%	褐色	密	ハラナテ	ナテ, 不明		
SI-032	194-1	土師器	鉢	15, 16	(12.8)	5.2	7.5	80%	橙褐色	粗	ナテ	ナテ→クスリ→ナテ		
SI-032	194-2	土師器	高杯	67	—	—	[2.9]	5%	赤褐色	密	ナテ	ナテ		内外面赤彩
SI-032	194-3	土師器	高杯	1, 67, 42,	15.7	—	[7.3]	35%	橙褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→ウ→シタキ, ハラナテ		
SI-032	194-4	土師器	高杯	1, 50, 52, 53, 54, 66, 67,	—	(15.0)	[8.9]	25%	赤褐色	密	ナテ→ハラナテ	ナテ→ハラナテ		外面赤彩
SI-032	194-5	土師器	甕	80	(14.4)	7.4	22.6	80%	暗褐色	密	ナテ	ナテ→ハラナテ		
SI-032	194-6	土師器	甕	1, 21, 28, 9号墳4区-1	(18.2)	—	[6.1]	10%	褐色	密	ナテ	ナテ		
SI-032	194-7	土師器	甕	37, 41, 9号墳1区-40	17.6	—	[7.0]	15%	橙褐色	密	ナテ	ナテ→シタキ		
SI-032	194-8	土師器	壺	1, 32	—	3.6	[3.5]	10%	褐色	密	ナテ	ハラナテ		内外面赤彩
SI-044	195-1	土師器	壺	4, 9, 23	10.2	—	[7.3]	20%	暗褐色	密	ナテ	ナテ→ハラナテ→シタキ		
SI-044	195-2	土師器	甕	3	(18.0)	—	[8.2]	10%	褐色	密	ウ→ナテ	ウ→ナテ		
SI-044	195-3	土師器	甕	16, 17, 18	(18.4)	—	[4.0]	10%	橙褐色	密	ウ→ナテ	ウ→ナテ		
SI-045	196-1	土師器	壺	91, 111	(9.0)	—	[3.4]	10%	橙褐色	密	ナテ	ナテ		
SI-045	196-2	土師器	杯	156	10.6	3.0	3.9	90%	橙褐色	密	ナテ→シタキ	ナテ→クスリ→ナテ		
SI-045	196-3	土師器	杯	116, 139, 144, 170	(12.0)	—	3.6	55%	黄褐色	密	ナテ	ナテ→クスリ		

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SI-045	196-4	土師器	杯	152	(11.0)	—	3.8	40%	黄白色	密	不明	不明		
SI-045	196-5	土師器	杯	32, 33, 62, 63, 58, 170	(12.4)	4.4	4.8	55%	褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-045	196-6	土師器	杯	119	(12.6)	—	[3.5]	15%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-045	196-7	土師器	高杯	52, 169, 170, 171	(20.6)	—	[6.5]	20%	褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→シロキ		外面に煤の付着
SI-045	196-8	土師器	高杯	40, 69, 103, 169	(15.2)	—	[5.0]	35%	橙褐色	密	ナテ→ハナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-045	196-9	土師器	高杯	150	(15.0)	—	[5.0]	30%	橙褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-045	196-10	土師器	高杯	53, 83, 113, 170	16.2	—	[4.8]	30%	橙褐色	密	ナテ, 不明	ナテ→シロキ→ナテ		
SI-045	196-11	土師器	高杯	30, 169	(15.2)	—	[5.6]	20%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-045	196-12	土師器	高杯	51	—	—	[3.6]	20%	暗褐色	密	シロキ	ナテ, ハナテ		
SI-045	196-13	土師器	高杯	120, 169, 170, 172	(16.8)	—	[3.8]	20%	赤褐色	密	ナテ	ナテ		内外面赤彩
SI-045	196-14	土師器	高杯	9	—	(20.0)	[4.0]	10%	褐色	密	ナテ, 不明	ナテ		
SI-045	196-15	土師器	高杯	114	—	—	[6.2]	30%	橙褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→シロキ		
SI-045	196-16	土師器	高杯	104	—	—	[5.8]	20%	褐色	密	ナテ	シロキ		
SI-045	196-17	土師器	蓋	130	—	—	[1.8]	5%	赤褐色	密	ナテ	ナテ		外面赤彩
SI-045	196-18	土師器	埴	41	—	—	[5.8]	30%	褐色	密	ハナテ→ナテ			
SI-045	196-19	土師器	埴	12, 99	(12.0)	—	[5.3]	10%	暗褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ		外面に煤の付着
SI-045	196-20	土師器	壺	169, 172	(17.0)	—	[5.0]	5%	橙褐色	密	シロキ	不明		口縁平織りによる押捺
SI-045	196-21	土師器	甕	105, 107	(18.0)	—	[5.5]	50%	暗褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→ハナテ→シロキ		
SI-045	196-22	土師器	甕	115, 116, 138	(17.9)	—	[7.8]	5%	褐色	粗	ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-045	196-23	土師器	甕	57, 63	(19.0)	—	[5.2]	5%	褐色	密	ナテ	ナテ		
SI-045	196-24	土師器	甕	13, 54	—	6.4	[4.3]	10%	褐色	粗	ハナテ	ハナテ		
SI-045	196-25	土師器	甕	101	—	9.0	[4.0]	10%	黄褐色	密	ハナテ	ナテ, ハナテ		
SI-045	196-26	土師器	甕	116	—	5.6	[2.2]	10%	黄褐色	密	ハナテ	ナテ		
SI-046	197-1	土師器	碗	7	(11.2)	3.0	5.6	70%	橙褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→ハナテ→ナテ		内外面赤彩
SI-046	197-2	土師器	鉢	7	(13.4)	(6.0)	3.9	10%	褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→ハナテ→ナテ		
SI-046	197-3	土師器	高杯	2, 7	(18.6)	—	[5.2]	30%	橙褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→シロキ		
SI-046	197-4	土師器	高杯	4	—	—	[5.1]	15%	褐色	密	ナテ→ハナテ	シロキ→ナテ		
SI-046	197-5	土師器	甕	1, 3, 7	(9.3)	8.0	27.3	70%	褐色	密	ハナテ→ナテ	ナテ→ハナテ		
SI-046	197-6	土師器	壺	7	—	4.0	[2.4]	5%	褐色	粗	ハナテ	ハナテ		
SI-046	197-7	土師器	壺	7	—	(6.8)	[3.0]	5%	黒褐色	密	ナテ	ナテ		
SI-046	198-1	土師器	杯	8	(10.4)	2.2	4.5	80%	黄褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→ハナテ→ナテ		
SI-049	198-2	土師器	高杯	1, 14	(17.5)	(13.2)	12.8	50%	赤褐色	密	ナテ, ハナテ	ナテ		内外面赤彩
SI-049	198-3	土師器	高杯	1, 9	(20.4)	—	[5.2]	15%	赤褐色	密	ナテ	ナテ		内外面赤彩
SI-049	198-4	土師器	高杯	1	(21.4)	—	[3.8]	20%	赤褐色	密	ナテ	ナテ		内外面赤彩
SI-049	198-5	土師器	高杯	7, 19	—	—	[9.2]	35%	赤褐色	密	ハナテ→ハナテ	ハナテ		
SI-049	198-6	土師器	高杯	1	—	—	[6.3]	35%	橙褐色	密	ハナテ	ハナテ		
SI-049	198-7	土師器	甕	6	(20.4)	6.0	22.0	60%	茶褐色	粗	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-050	199-1	土師器	手捏	1	—	4.4	[3.4]	80%	暗褐色	密	ナテ	ナテ		
SI-050	199-2	土師器	高杯	3	—	—	[9.7]	35%	赤褐色	密	ナテ	ハナテ→シロキ		
SI-050	199-3	土師器	甕	1	(17.9)	—	[4.2]	5%	暗褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-050	199-4	土師器	甕	1, 4, 105	—	7.9	[5.7]	20%	黄褐色	粗	ナテ	ハナテ→ナテ		
SI-055	200-1	土師器	高杯	4	(18.8)	—	[7.5]	30%	暗褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-060	201-1	土師器	高杯	1, 063-7, 8,	16.2	—	5.2	30%	褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→ハナテ		
SI-060	201-2	土師器	蓋	1, 063-7	12.2	4.6	14.4	65%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-060	201-3	土師器	甕	1	15.1	—	[7.3]	15%	褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-060	201-4	土師器	甕	注記ナ	—	(9.0)	[2.6]	5%	橙褐色	密	不明	ハナテ		底部木炭痕
SI-060	201-5	土師器	壺	1	—	5.6	[2.3]	5%	褐色	密	ハナテ	ナテ		
SI-063	202-1	須恵器	壺	7	(8.6)	—	[1.5]	5%	黒灰色	密	ナテ	ナテ		
SI-063	202-2	土師器	鉢	7, 8	(10.8)	2.0	5.8	50%	橙褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ, ナテ		
SI-063	202-3	土師器	高杯	2, 7	(15.6)	—	[5.4]	40%	暗褐色	密	ナテ→ハナテ→シロキ	ナテ→ハナテ→シロキ		
SI-063	202-4	土師器	高杯	7	(18.0)	—	[4.2]	30%	橙褐色	密	ナテ→ハナテ→シロキ	ナテ→ハナテ→シロキ		
SI-063	202-5	土師器	高杯	7	—	—	[6.6]	10%	橙褐色	密	不明	不明		
SI-063	202-6	土師器	埴	7	7.9	—	7.9	80%	橙褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-063	202-7	土師器	甕	4, 6, 7, 062-7	(17.0)	—	[24.8]	40%	褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→シロキ		
SI-063	202-8	土師器	甕	7	(18.0)	—	[3.8]	10%	暗褐色	密	ナテ, 不明	ハナテ		
SI-063	202-9	土師器	壺	7	(10.6)	—	[5.5]	10%	褐色	密	不明	不明		
SI-063	202-10	土師器	壺	7, 8	—	—	[6.4]	10%	褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-063	202-11	土師器	壺	7	—	7.0	[2.3]	10%	褐色	密	ハナテ	ハナテ		
SI-068	203-1	土師器	埴	7	—	3.1	[7.3]	80%	黄褐色	密	ハナテ→ナテ	不明		
SI-068	203-2	土師器	甕	1, 12, 13, 17	(18.5)	—	[12.5]	10%	暗褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ		
SI-068	203-3	土師器	甕	8, 23	(16.0)	—	[12.0]	10%	暗褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SI-068	203-4	土師器	甕	1, 3, 4, 5, 6	—	4.8	[17.8]	60%	橙褐色	粗	ハナテ	ハナテ		
SI-068	203-5	土師器	甕	19, 20	—	7.6	[2.6]	5%	暗褐色	粗	ハナテ	ハナテ		
SI-068	203-6	土師器	甕	10	—	6.4	[3.0]	5%	黄褐色	密	ハナテ	ハナテ		
SK-039	205-1	土師器	埴	3	11.3	3.2	6.3	70%	黄褐色	密	ナテ→シロキ	ナテ→シロキ		
SK-039	205-2	土師器	甕	1, 10	20.3	6.8	24.6	70%	褐色	密	ナテ→ハナテ	ナテ→ハナテ		
SK-039	205-3	土師器	壺	6	—	(9.6)	[3.1]	10%	褐色	密	ナテ	ハナテ		

遺構No.	挿図No.	器質	器形	遺物番号	口径	底径	器高	遺存度	色調	胎土	調整	内面	外面	備考
SD-002	206-1	土師器	甕	1	—	(6.4)	[4.6]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ→シガキ	底部木葉痕
SD-012	206-2	土師器	壺	9	—	5.5	[3.8]	20%	暗褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ→シガキ	
SD-012	206-3	土師器	高杯	1	—	—	[6.8]	10%	褐色	密	ナデ	ナデ	ナデ	
SD-020	206-4	弥生	鉢	2	—	6.0	[10.8]	70%	褐色	粗	ヘナデ	RL, 結節縄文		
SD-020	206-5	土師器	甕	1	—	(6.0)	[3.1]	5%	褐色	密	不明	不明		
K-22	207-1	須恵器	壺	96-1	(18.6)	—	[2.4]	5%	黒灰色	密	ナデ	ナデ		
K-22	207-2	土師器	杯	92-52	(14.0)	—	[2.9]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ→シガキ	
K-22	207-3	土師器	杯	92-37	(14.0)	—	3.9	30%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ→シガキ	
K-22	207-4	土師器	高杯	91-1, 47, 48, 56, 92-29	(16.6)	(12.8)	[11.1]	60%	橙褐色	密	不明	不明		
K-22	207-5	土師器	高杯	92-32	(13.8)	—	[5.1]	35%	褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ→ハク→シガキ	
K-22	207-6	土師器	高杯	86-1	—	(12.0)	[7.4]	35%	赤褐色	密	ハク, 不明	不明		
K-22	207-7	土師器	埴	92-48	(10.6)	—	[4.6]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ	
K-22	207-8	土師器	埴	91-3, 31, 54	—	—	[8.3]	20%	黄褐色	密	ナデ	不明		
K-22	207-9	土師器	甕	00-1	(17.2)	—	[12.0]	20%	黄褐色	密	ハク→ナデ	ハク→ナデ		
K-22	207-10	土師器	甕	92-9, 53	(12.8)	—	[8.7]	15%	黄褐色	密	ナデ	ナデ→ヘナデ	ナデ→ヘナデ	
K-22	207-11	土師器	甕	K22-91-26, 32, 42, 63, 75, 92-22, 39, 40, 41	—	7.4	[20.1]	15%	黄褐色	密	ヘナデ	ヘナデ		
K-22	207-12	土師器	甕	91-7, 25, 41, 45, 62, 92-7, 21, 24	—	—	[19.9]	15%	橙褐色	密	不明	不明		
K-22	207-13	土師器	甕	92-18, 19, 20	—	—	[10.3]	5%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→ヘナデ	ヘナデ→ナデ	
K-22	207-14	土師器	甕	41-1, 51-1	—	4.7	[3.4]	30%	褐色	密	不明	不明		
K-22	207-15	土師器	甕	不明	—	7.0	[4.4]	10%	黄褐色	密	不明	不明		
K-22	207-16	土師器	甕	02-1	—	6.6	[3.2]	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ	ヘナデ	
K-22	207-17	土師器	甕	91-15, 70, 92-38	—	7.6	[5.1]	10%	黄褐色	密	不明	不明		
J-23	208-18	土師器	杯	53-3	13.2	—	[3.6]	70%	橙褐色	密	不明	不明		
J-23	208-19	土師器	杯	16-14	11.9	—	[4.1]	20%	赤褐色	密	不明	不明		
トナチ	208-20	土師器	杯	45T-1	(13.6)	—	[4.5]	10%	赤褐色	密	ナデ	ナデ→ヘナデ	ナデ→ハク→ナデ	
K-20	208-21	土師器	杯	9-2	(12.8)	—	3.0	5%	褐色	密	ナデ	ナデ		
H-23	208-22	土師器	高杯		—	—	[10.5]	40%	橙褐色	密	不明	ヘナデ		内外面赤彩
J-22	208-23	土師器	高杯	71-1, 72-1, 13	—	—	[4.8]	15%	橙褐色	粗	ヘナデ	不明		
J-22	208-24	土師器	高杯	72-1	—	—	[13.8]	20%	橙褐色	密	ヘナデ	ハク→ナデ		
トナチ	208-25	土師器	高杯	45T-3	—	—	[3.2]	10%	黒褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ヘナデ	
トナチ	208-26	土師器	高杯	44T-1	—	—	[9.0]	35%	褐色	密	シガキ	ヘナデ→シガキ		内外面赤彩
I-22	208-27	土師器	高杯	23-1	—	—	[8.5]	40%	橙褐色	密	ナデ, 不明	ヘナデ		
トナチ	208-28	土師器	高杯	45T-7	—	—	[6.6]	20%	赤褐色	密	—	ヘナデ		
J-22	208-29	土師器	高杯	80-2	—	—	[7.4]	20%	黄褐色	密	ナデ	シガキ		
トナチ	208-30	土師器	高杯	45T-4	—	—	[4.9]	20%	黄褐色	密	ナデ	ヘナデ→シガキ		
SK-002	208-31	土師器	高杯	15	—	(11.0)	[6.1]	20%	橙褐色	密	不明	不明		
I-22	208-32	土師器	高杯	32-1	—	11.6	[2.6]	25%	赤褐色	密	ハク→ナデ	ナデ→シガキ		外面赤彩
J-22	208-33	土師器	高杯	91-22	11.3	—	[5.5]	50%	暗褐色	密	ナデ	ナデ		
I-23	208-34	土師器	ニテ	28-2	—	5.2	[3.0]	40%	赤褐色	密	ナデ	ナデ		
I-23	208-35	土師器	甕	1, 2, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16, 17	12.8	7.6	[27.0]	70%	橙褐色	粗	ナデ	ナデ→ヘナデ	ヘナデ→シガキ	
H-23	208-36	土師器	甕	6-1, 9号墳2区-2	(19.0)	—	[5.8]	10%	褐色	密	ハク	ナデ, ヘナデ		
トナチ	208-37	土師器	甕	45T-3	(18.0)	—	[6.4]	10%	褐色	密	ナデ	ナデ→ヘナデ	ナデ→ヘナデ	
SK-006	208-38	土師器	甕	1, 4, DSK-005-1	(16.0)	—	[7.0]	10%	褐色	密	ナデ	ナデ→ヘナデ	ナデ→ヘナデ	
K-20	208-39	土師器	甕	08-1	—	—	2.1	5%	褐色	密	ナデ	不明		
トナチ	208-40	土師器	鉢	45T-3	—	4.2	[4.5]	40%	褐色	粗	ヘナデ	ナデ		
J-22	208-41	土師器	壺	91-7	—	5.9	[3.2]	5%	橙褐色	密	シガキ	シガキ		底部網代痕
J-23	208-42	土師器	甕	02-11	—	7.2	3.1	5%	橙褐色	密	不明	ナデ		
J-22	208-43	土師器	甕	52-1, 71-1, 4, 5, 11, 72-1	—	(6.7)	[14.3]	50%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→ハク	ハク→ナデ→シガキ	
I-22	208-44	土師器	壺	67-1	—	9.6	[7.5]	10%	黄褐色	粗	ナデ	ヘナデ		
SI-006	211-1	土師器	杯	17	(11.4)	(8.0)	4.1	10%	橙褐色	密	ナデ	ナデ		
SI-011	212-1	土師器	杯	1, 3, 4, 5, 101	13.9	9.2	4.0	60%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→シガキ	ナデ→ハク	
SI-011	212-2	土師器	甕	101	11.2	9.0	15.2	100%	橙褐色	密	ナデ	ナデ→ヘナデ	ナデ→ハク	

# 写真図版





鹿島台遺跡周辺航空写真 (1 : 13000)



A区全景 (北から)



A区全景 (南から)



A区空撮





SI-001



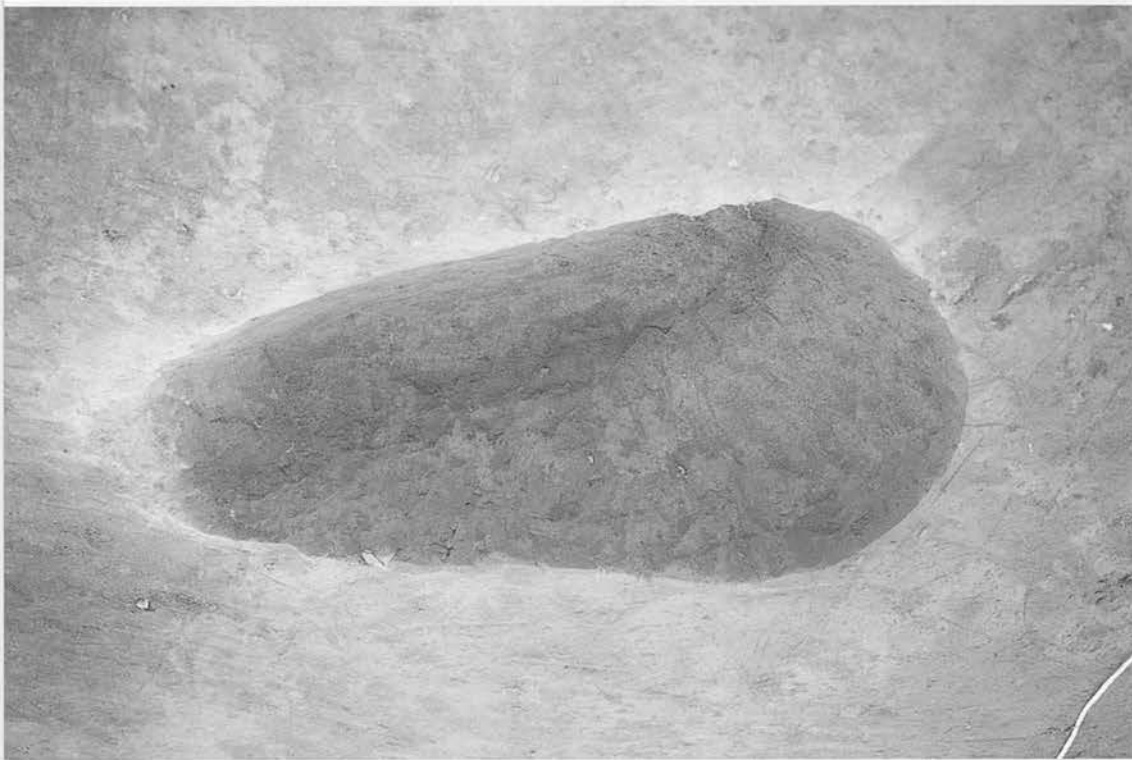
SI-001 遺物出土状況



SI-003



SK-051



SK-052



(左)SK-051  
遺物出土状況

(右)SK-052  
遺物出土状況



SK-061



SI-002



SI-002 遺物出土状況

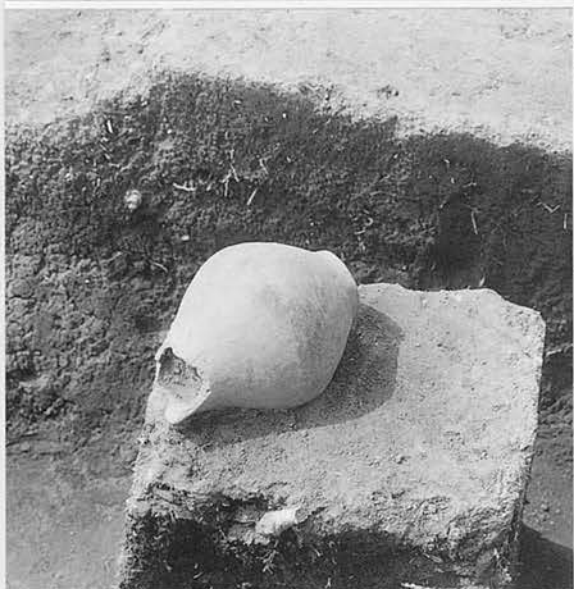




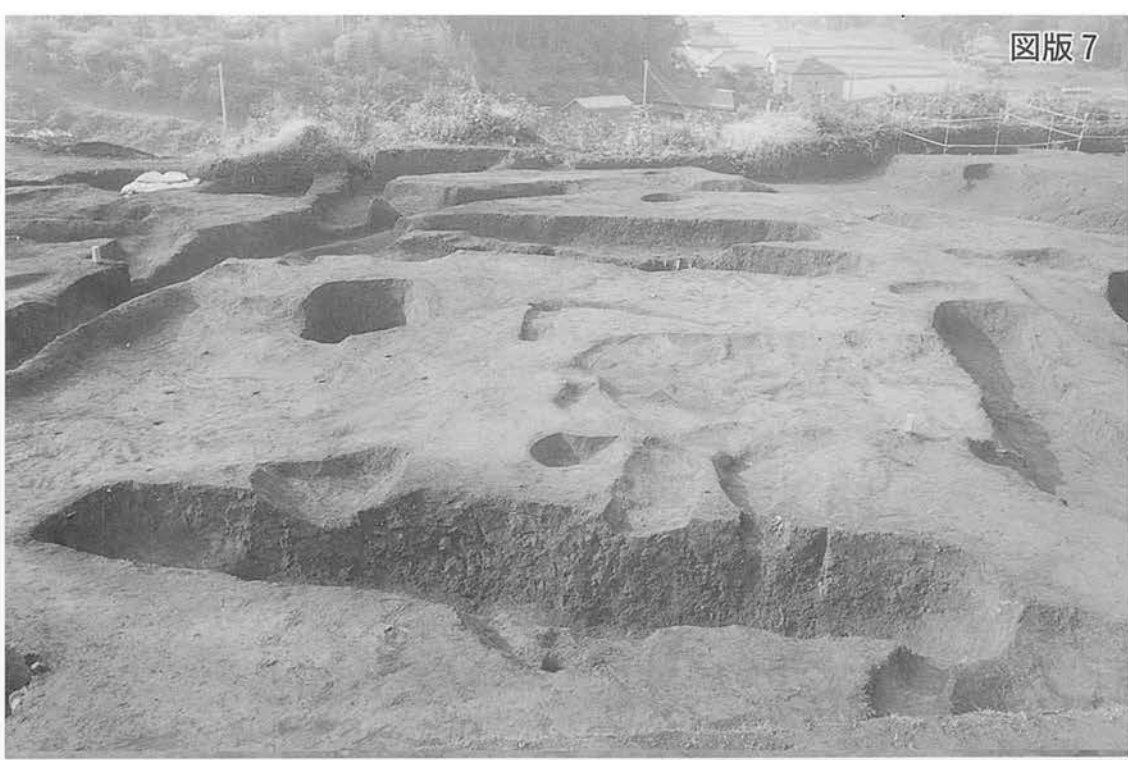
SI-002 遺物出土状況



SS-002



SS-002 遺物出土状況



SS-003



SS-003 遺物出土状況



SS-004



SS-004 遺物出土状況



SS-009a



SS-009b





SS-009c



SS-009d



SS-009d 遺物出土状況



SS-010a



SS-010b



SS-010 遺物出土状況



SS-012



SS-013



SS-014





SS-015



SS-015 遺物出土状況



SS-016



SS-016 遺物出土状況

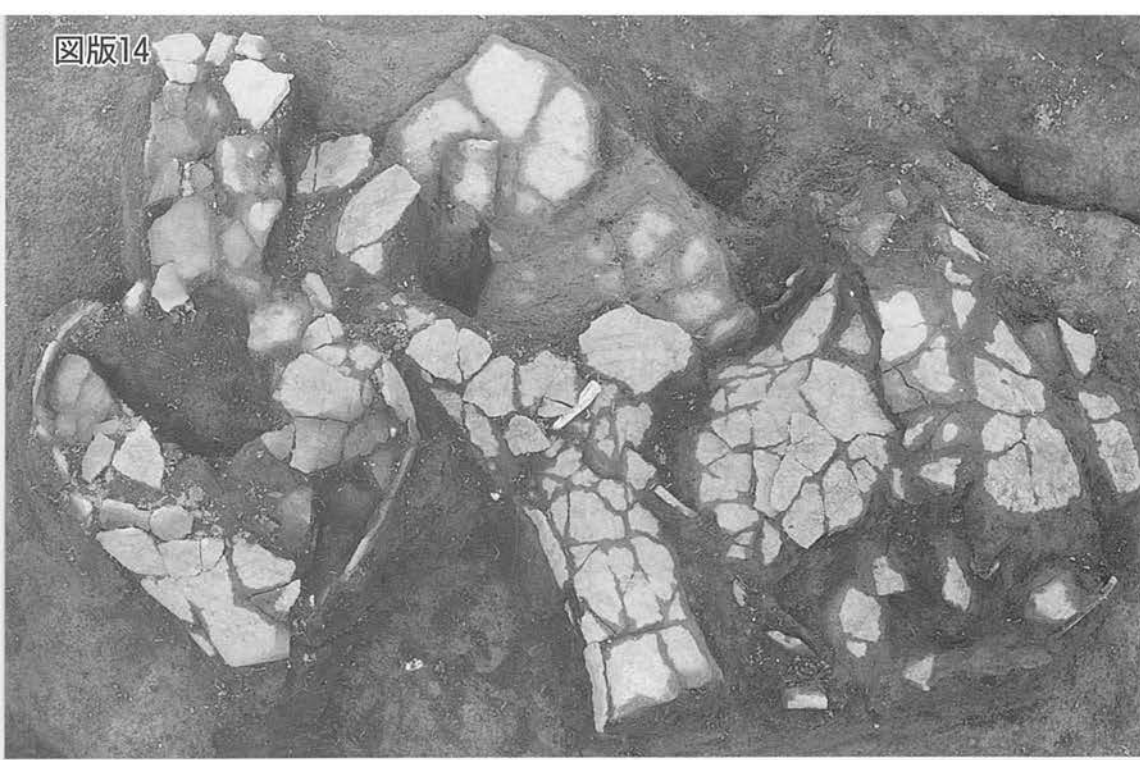


SS-017



SK-013





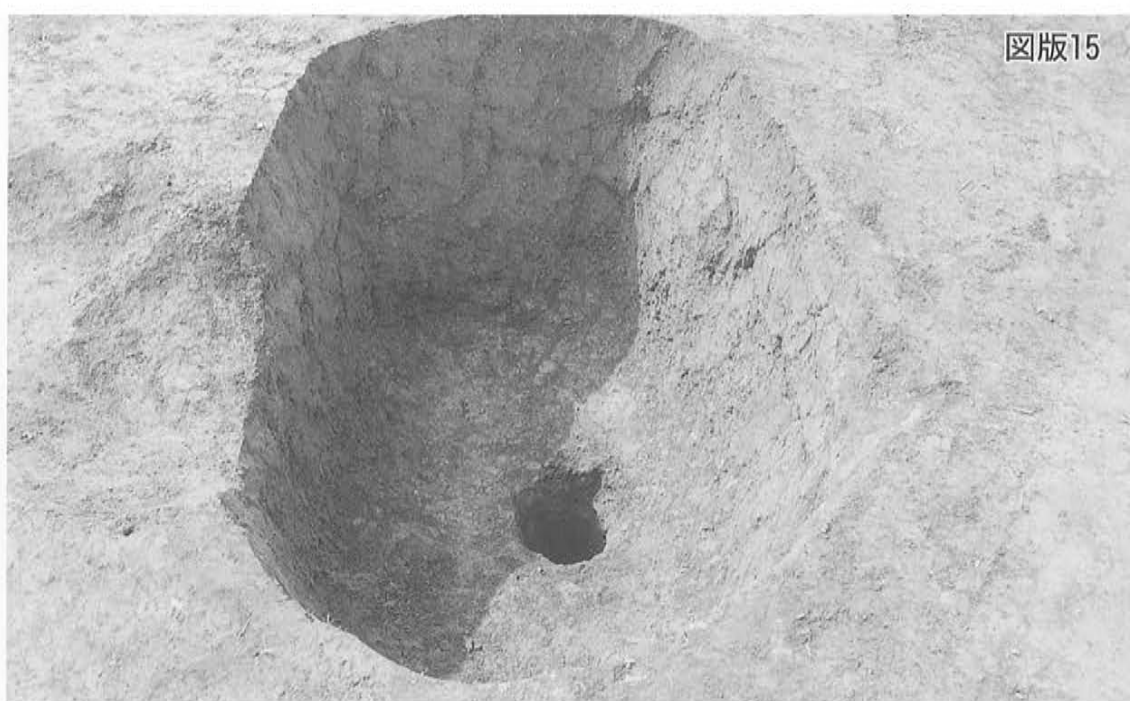
SK-013 遺物出土状況



SK-020



SK-010・011・016



SK-026



SK-029



SK-053



SK-054



SK-054 遺物出土状況



SK-056





SK-057



SK-066



4号墳 調査前状況



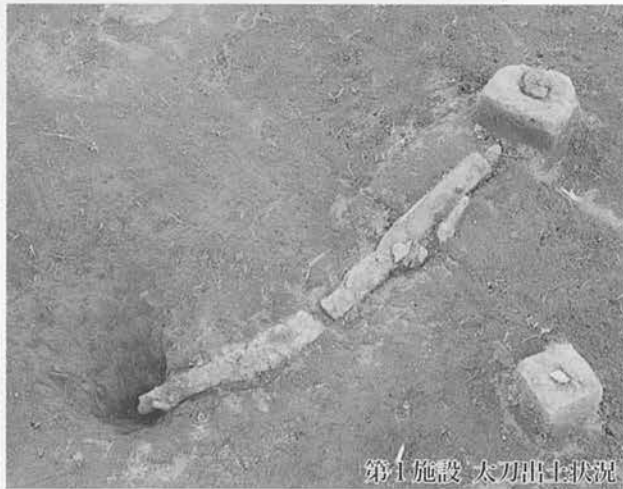
4号墳全景



4号墳 南西土層断面



第1施設



第1施設 太刀出土状況



第2施設



第2施設 鉄鏡出土状況





第2・3施設



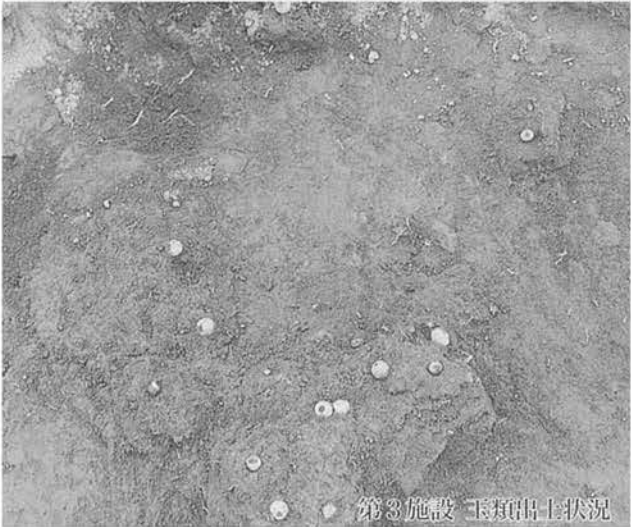
第3施設 太刀出土状況



第3施設 刀子出土状況



第3施設 鉄出土状況



第3施設 玉類出土状況



第4施設



第5施設



第5施設 鉄剣出土状況



SM-001



SM-001 遺物出土状況



SM-001・002土層





SM-003



SM-004



SM-004 遺物出土状況



SM-005



SK-032



(左)SK-032 鉄製品出土状況  
 (右)SK-032 管玉・勾玉出土状況



(左)SK-032 管玉出土状況  
 (右)SK-032 玉類出土状況



SI-001-1



SI-001-1



SI-003-2



SI-001-1



SI-003-1



SK-061-2

縄文時代竪穴住居跡・土坑出土土器



SI-002-1



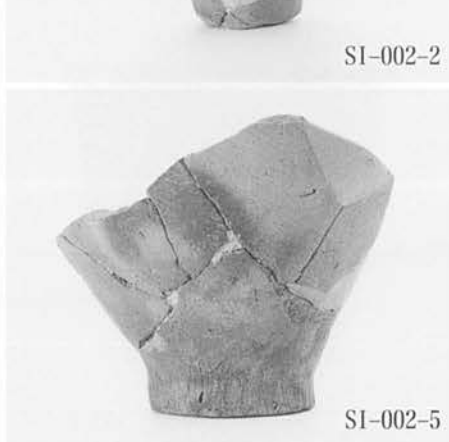
SI-002-2



SI-002-6



SI-002-3



SI-002-5



SS-002-2

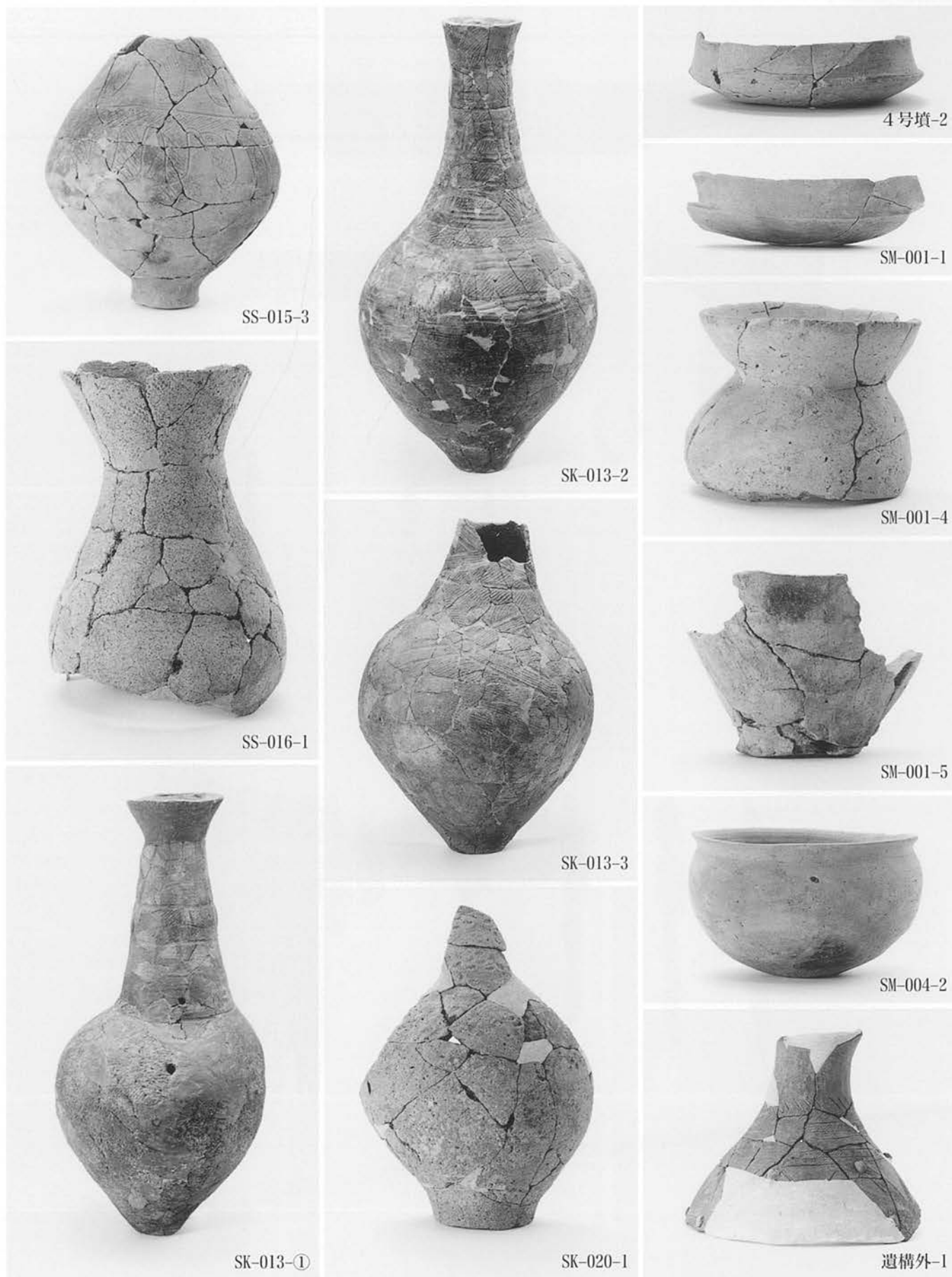
弥生時代竪穴住居跡・方形周溝墓出土土器 (1)



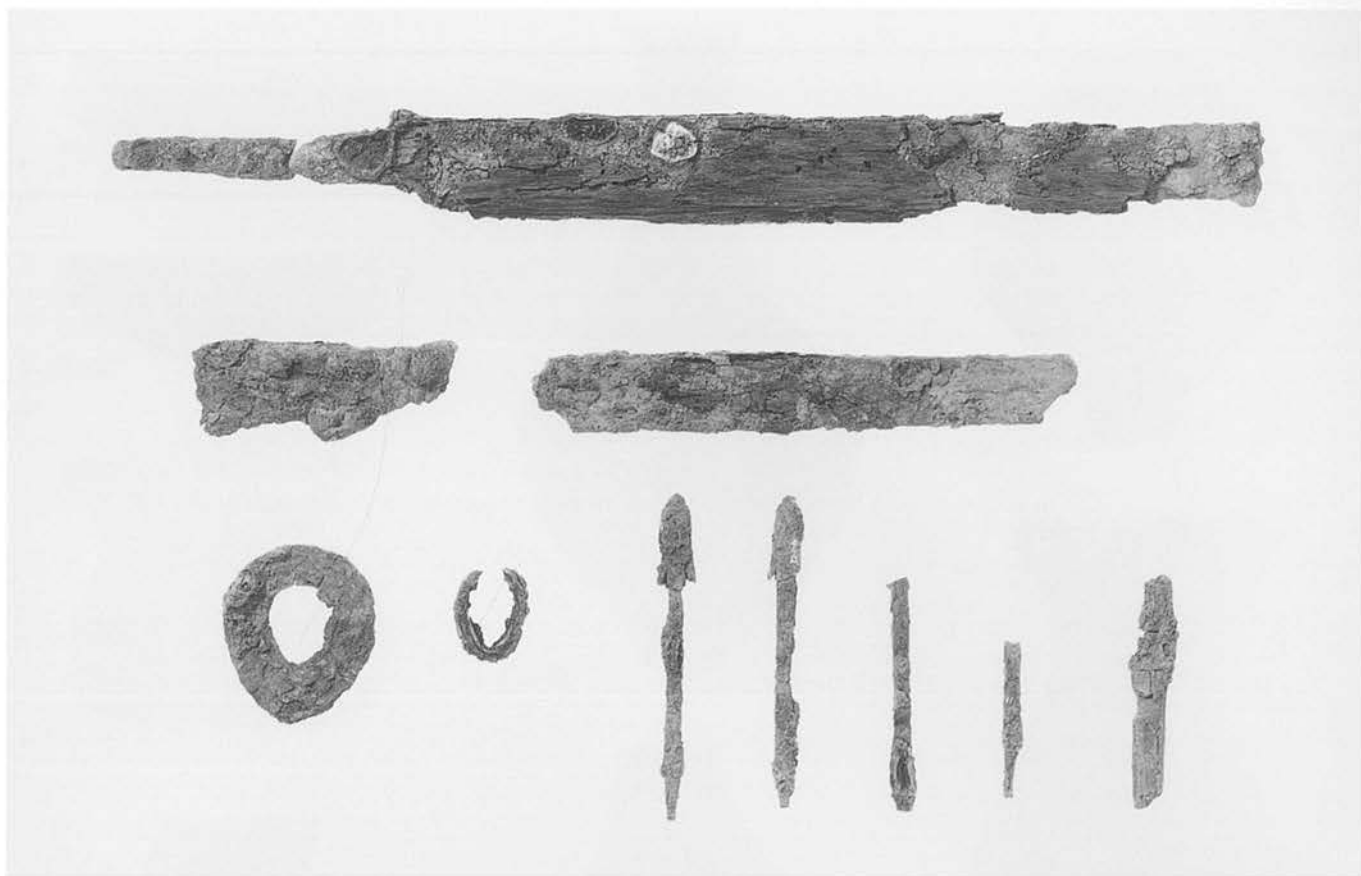


方形周溝墓出土土器 (2)

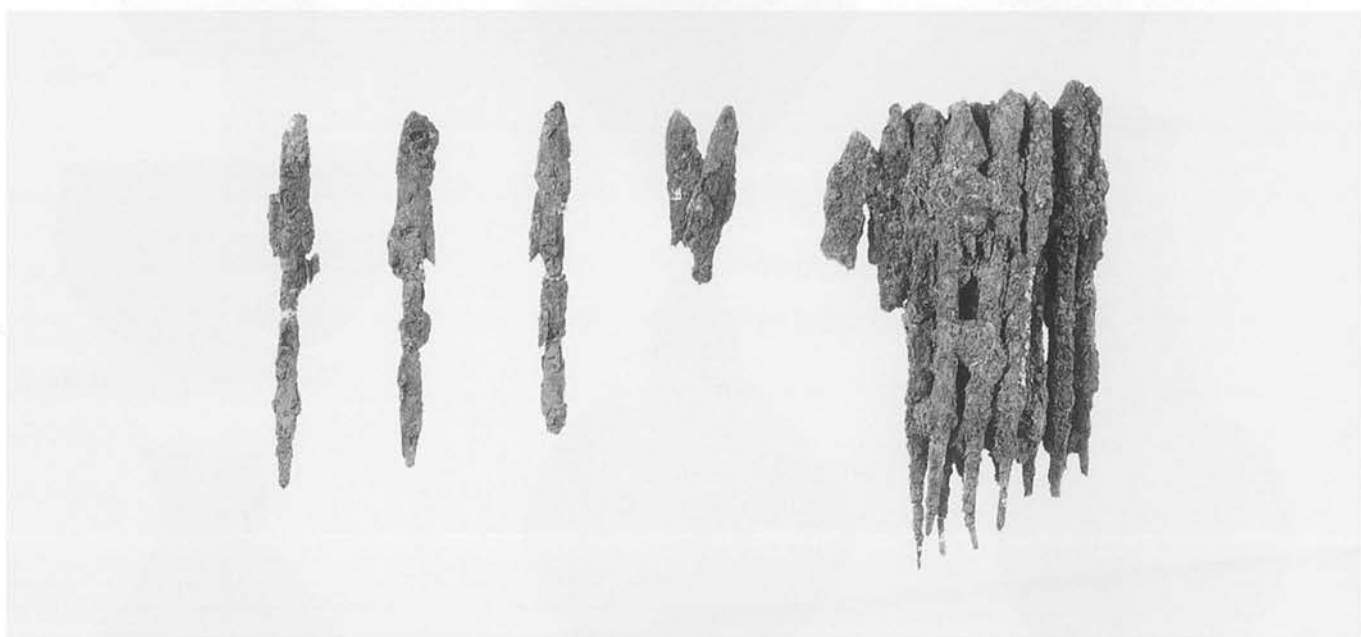




方形周溝墓出土土器 (3)・再葬墓・古墳・遺構外出土土器



第1施設

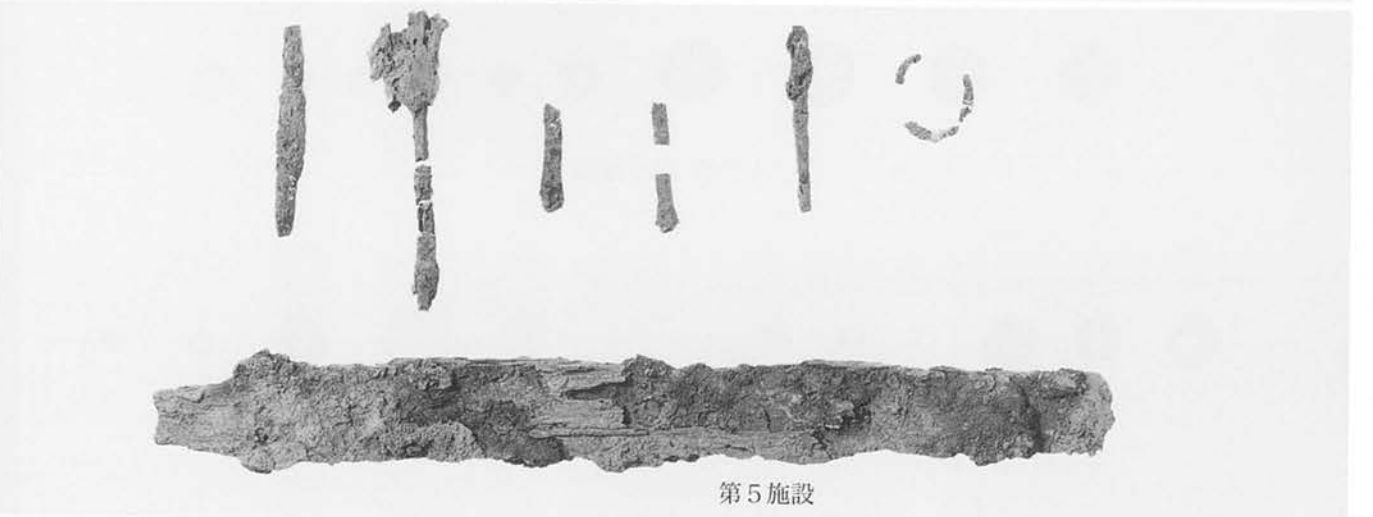


第3施設

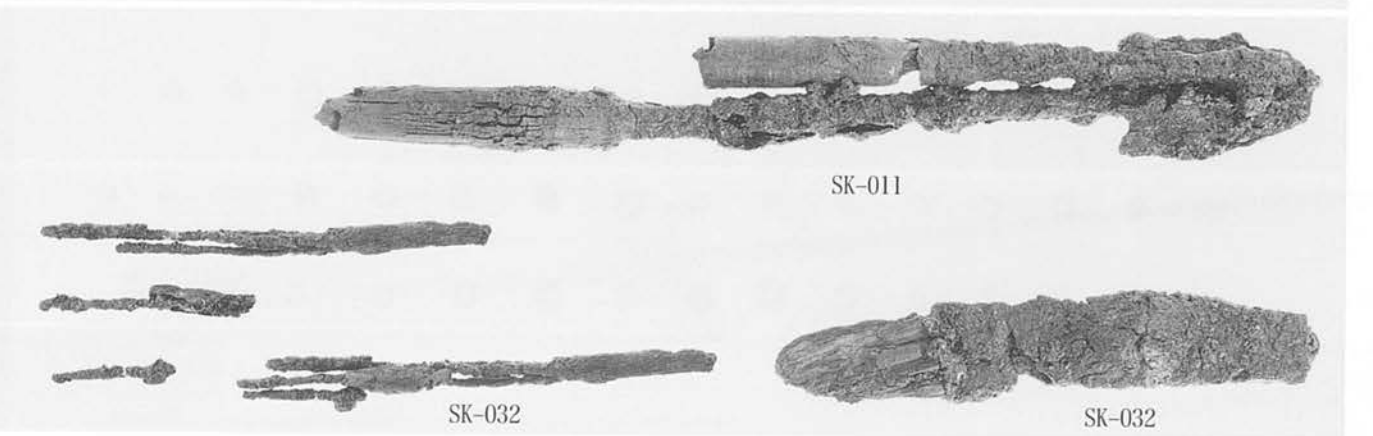
4号墳出土鉄製品



第3施設



第5施設

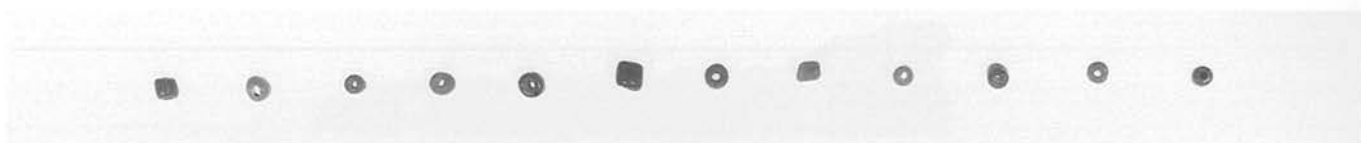


SK-011

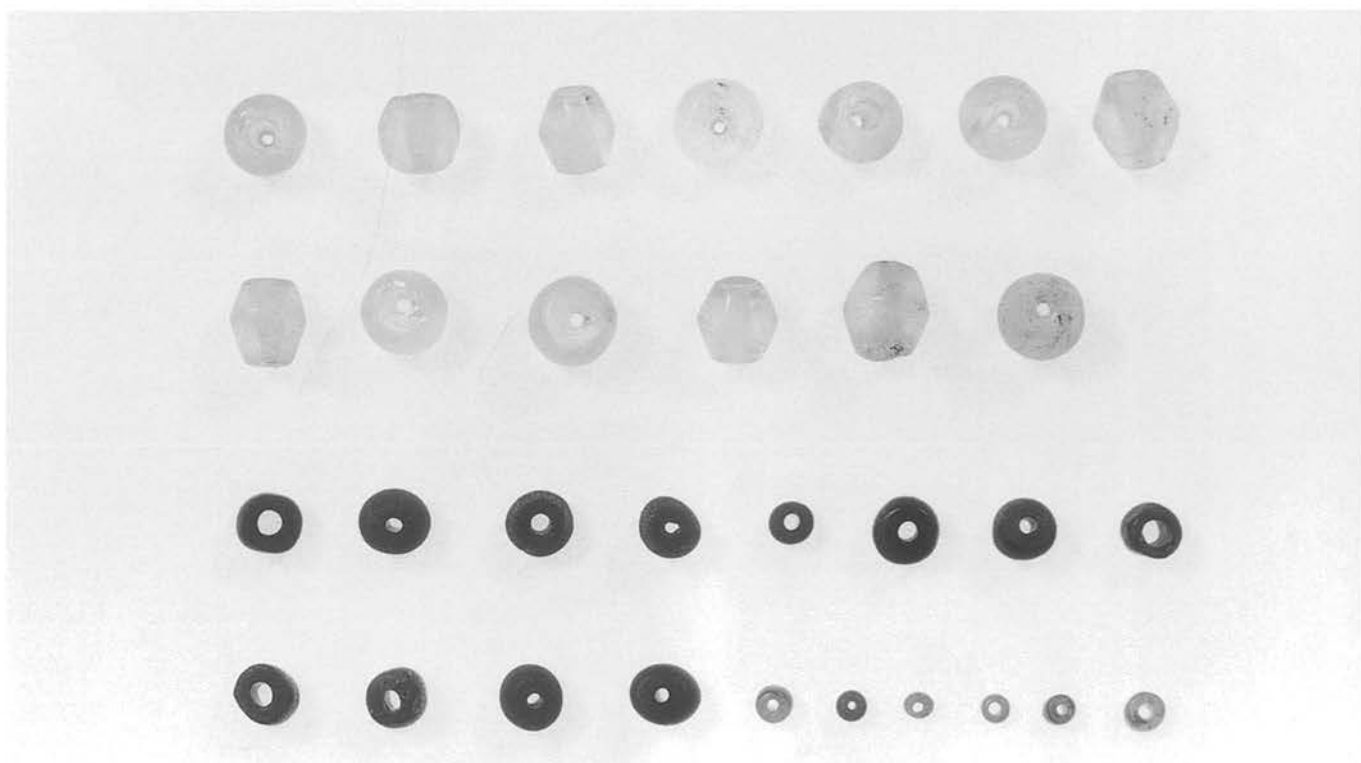
SK-032

SK-032

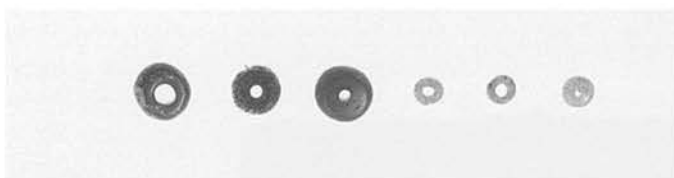
4号墳・土坑出土鉄製品



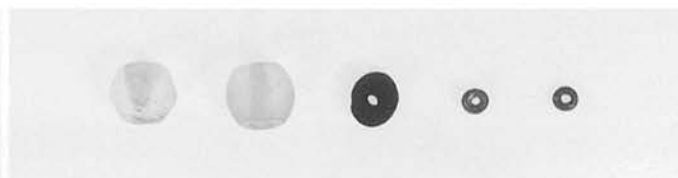
4号墳 第3施設



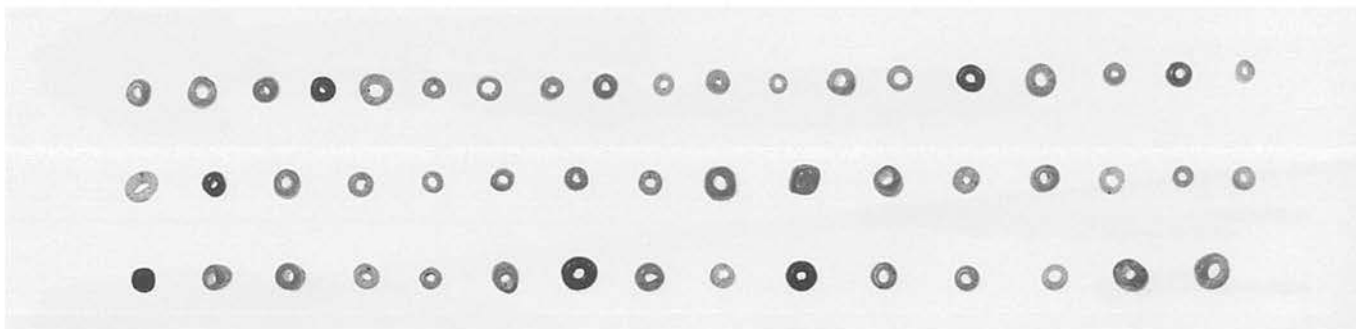
4号墳 第5施設



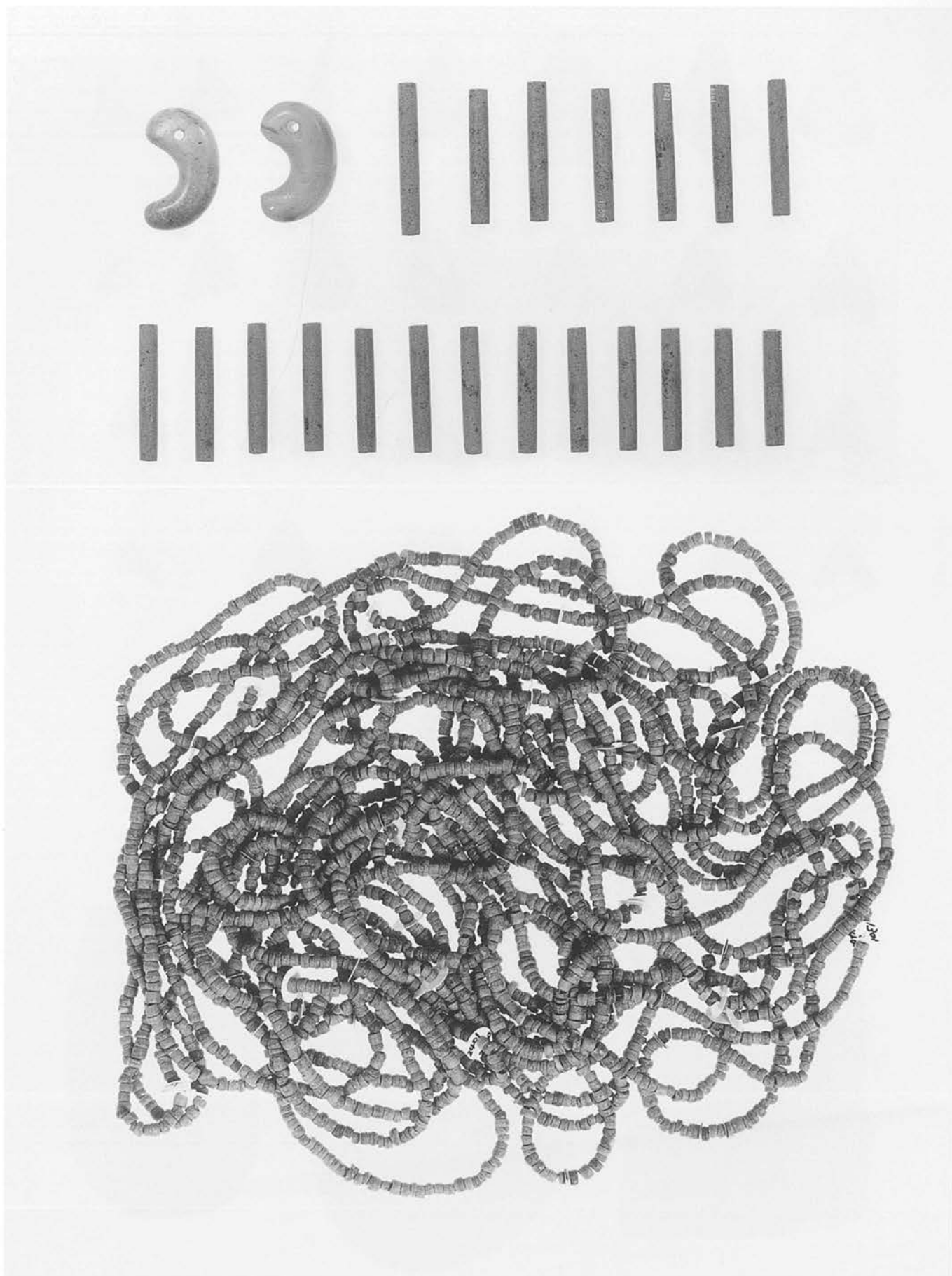
4号墳 第4施設



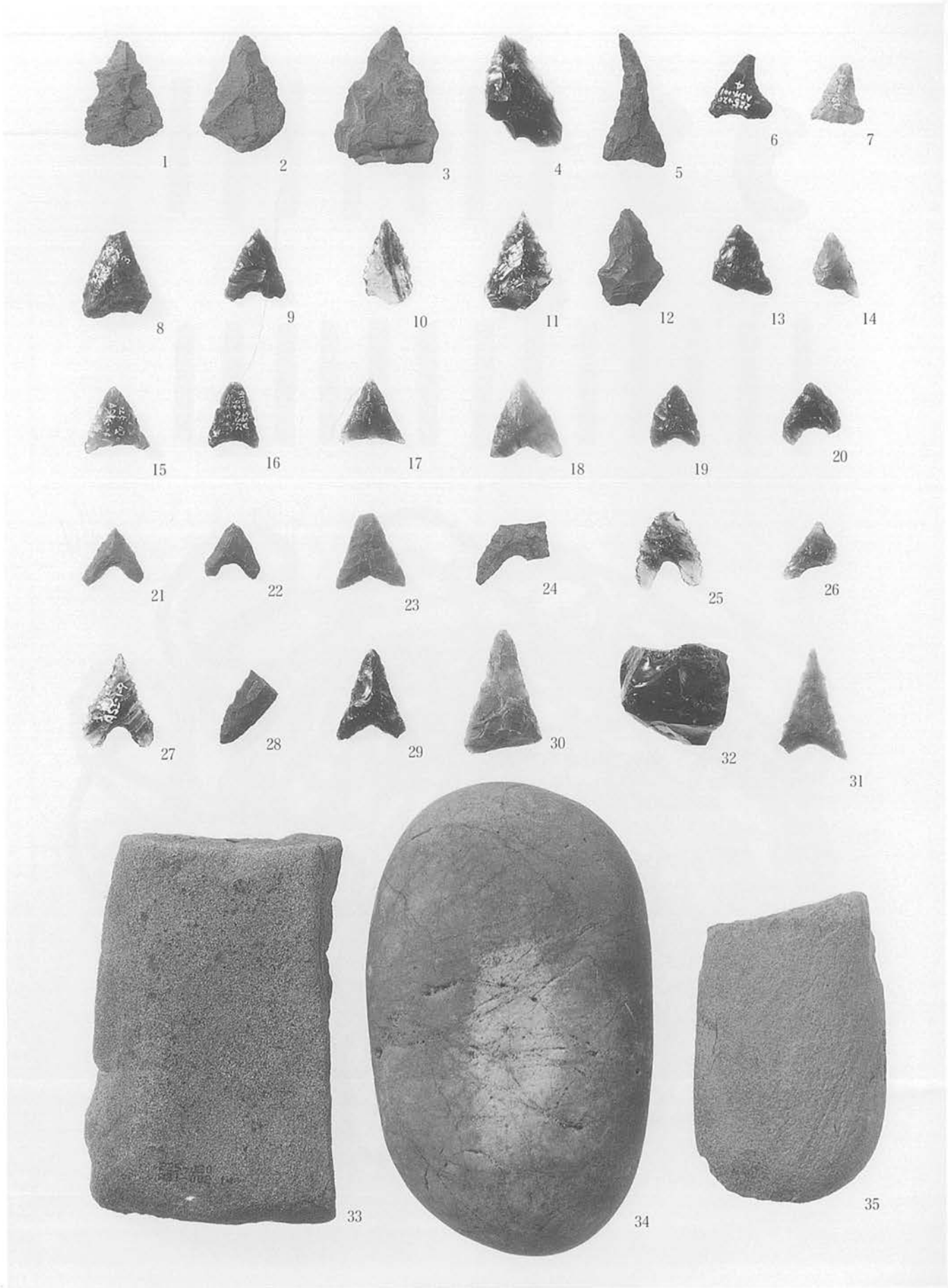
4号墳一括



SK-054



SK-032出土玉類



A区出土石器





D区 調査前全景



8・9・11号墳



D区 空撮



SI-001



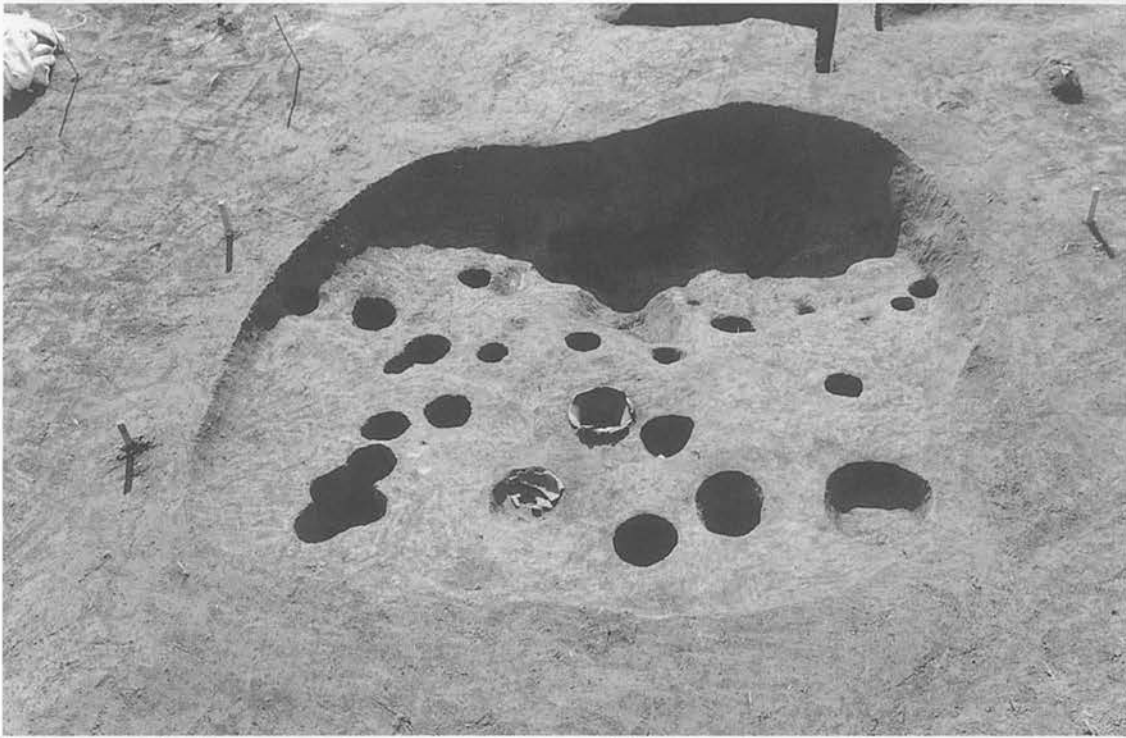
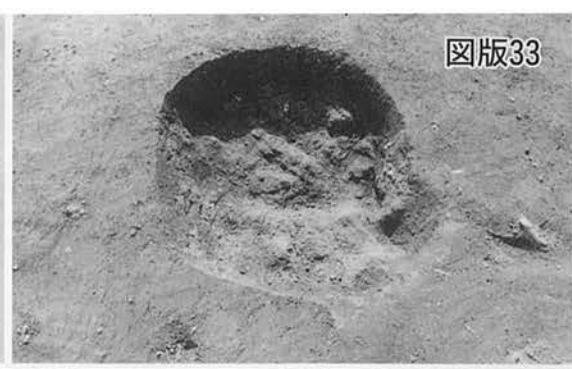
SI-003



SI-009



(左)SI-009 遺物出土状況  
(右)SI-009 炉跡



SI-014



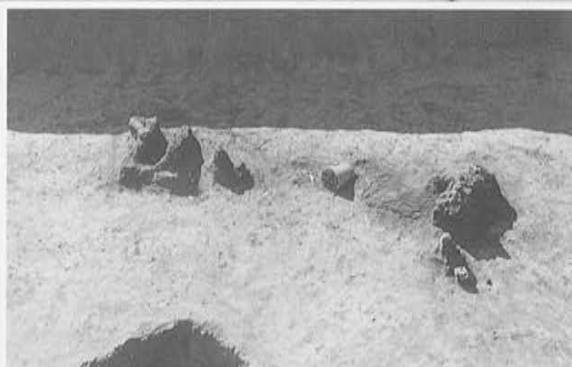
SI-014炉



SI-017



SI-018



(左)SI-018 柱穴材  
(右)SI-018 炭化材



SI-018 遺物出土狀況



(左)SI-018 石棒出土狀況  
(右)SI-018 炉



SI-018 遺物出土狀況



SI-029



SI-033



SI-036





SI-036 遺物出土状況



SI-037



(左)SI-037 炉  
(右)SI-038 遺物出土状況



SI-038

(左)SI-041 炉  
(右)SI-047 炉



SI-054



SI-061・046

SI-061 遺物出土状況





SK-011



SK-044



SI-004





SI-007



SI-008



SI-015



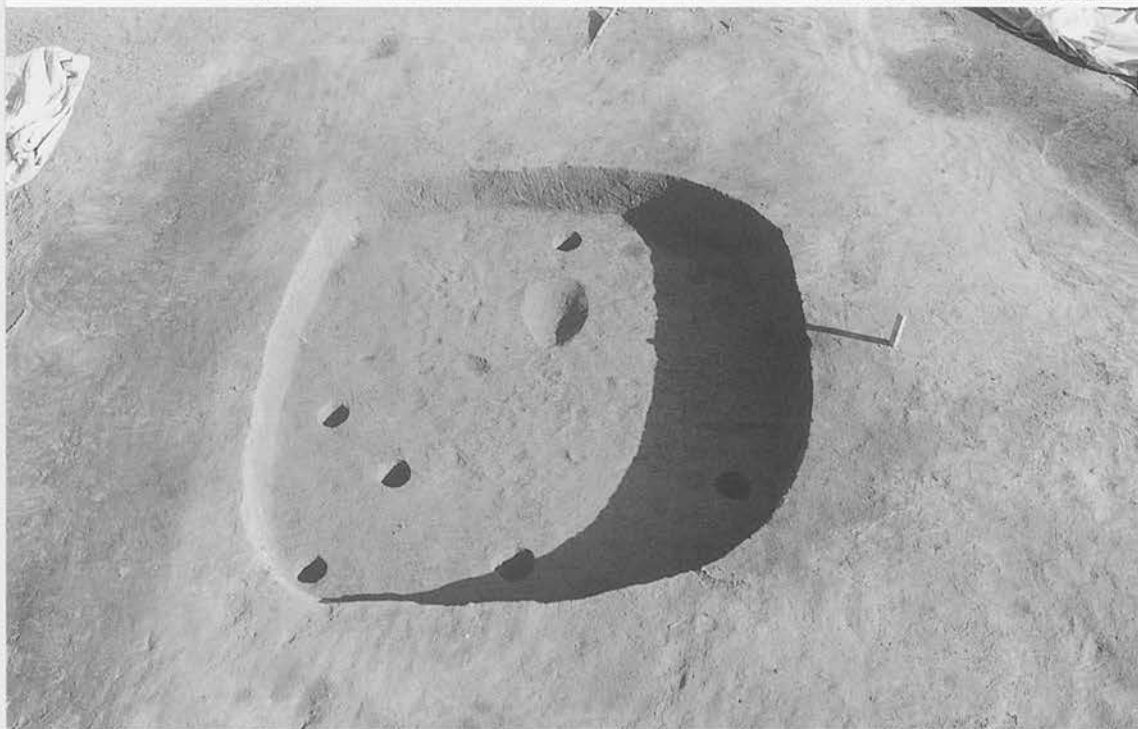
SI-023



(左)SI-023 遺物出土状況  
(右)SI-023 炉



(左)SI-023 遺物出土状況  
(右)SI-026 炉跡



SI-026





SI-027

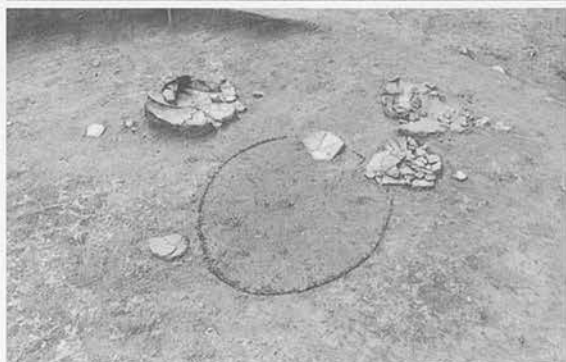


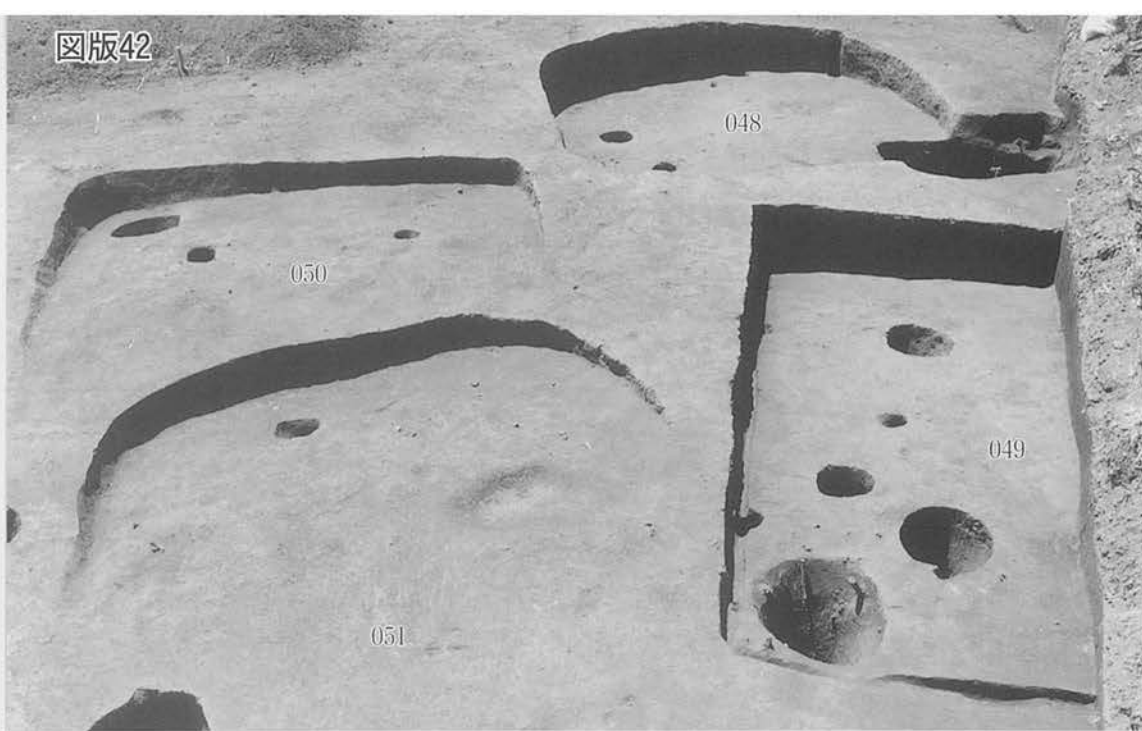
SI-035

SI-035 遺物出土狀況



(左)SI-031 遺物出土狀況  
(右)SI-051 遺物出土狀況





SI-048~051



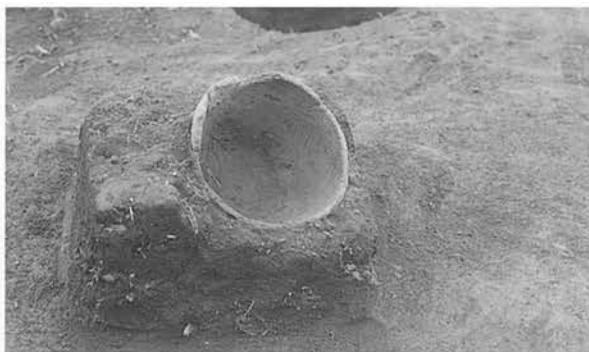
SI-052



SI-053・034



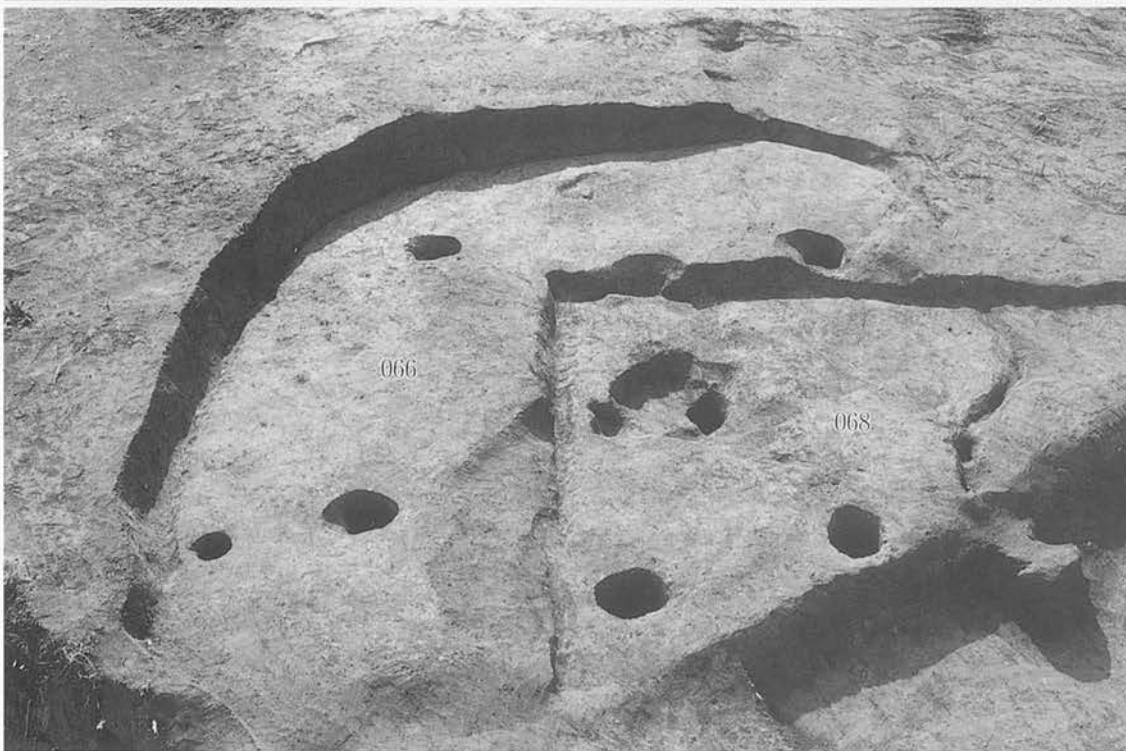
SI-053 遺物出土状況



SI-056



SI-066・068



(左)SI-002 炭化物出土状況  
(右)SI-002 遺物出土状況





SI-002



SI-002 遺物出土状況



SI-010



(左)SI-010 遺物出土状況  
(右)SI-011 遺物出土状況



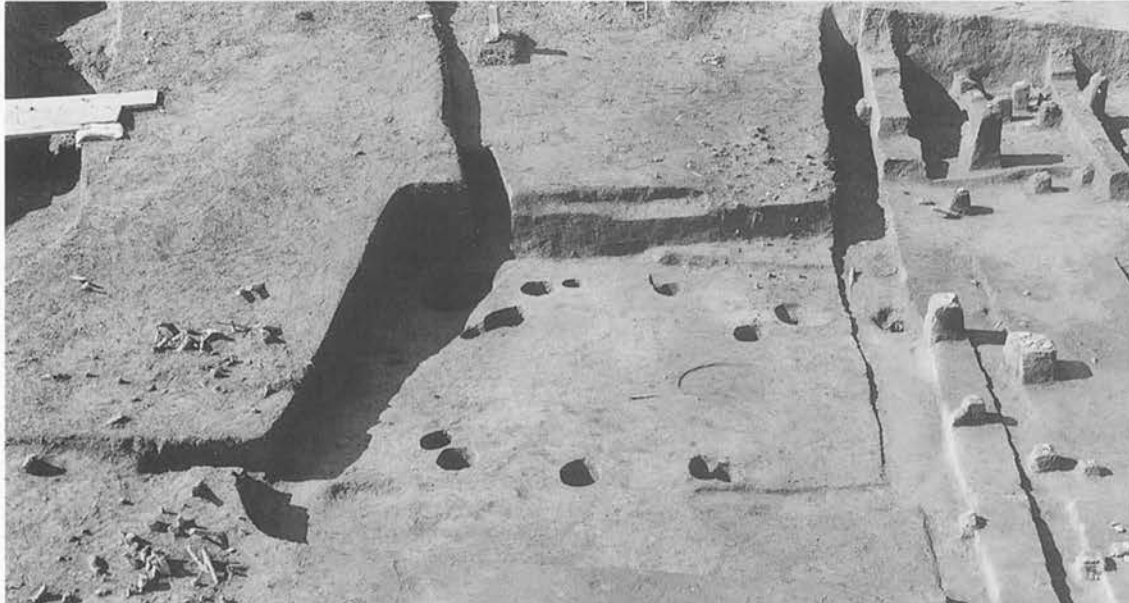


SI-011

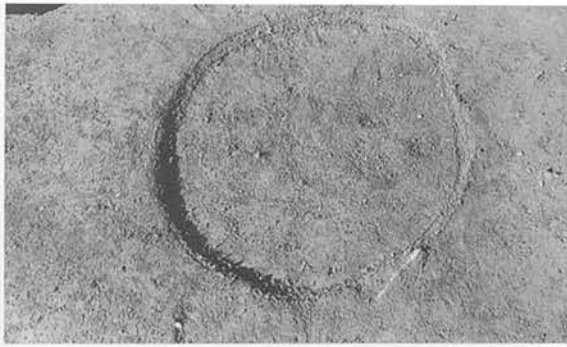
(左)SI-011 土層断面  
(右)SI-011 遺物出土状況



(左)SI-011 鎌出土状況  
(右)SI-011 柱穴内炭化材  
出土状況



SI-012



(左)SI-012 遺物出土状況  
(右)SI-012 炉



SI-013



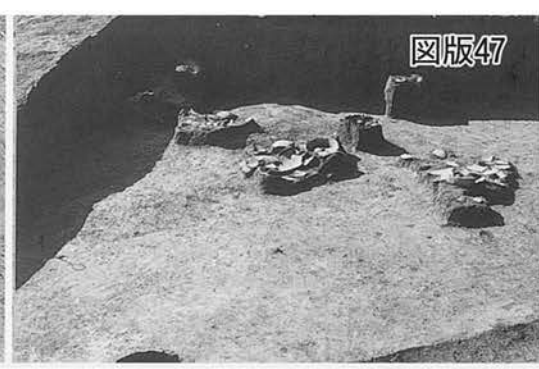
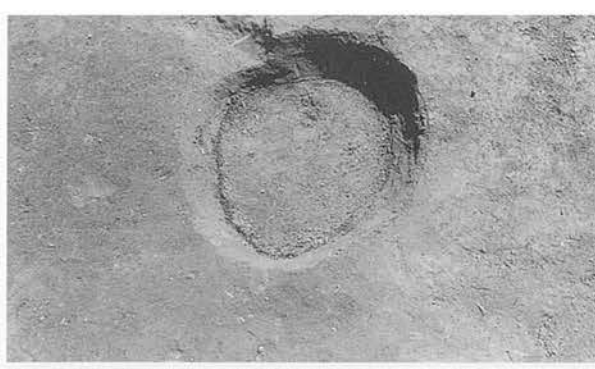
(左)SI-013 炉  
(右)SI-019 遺物出土状況



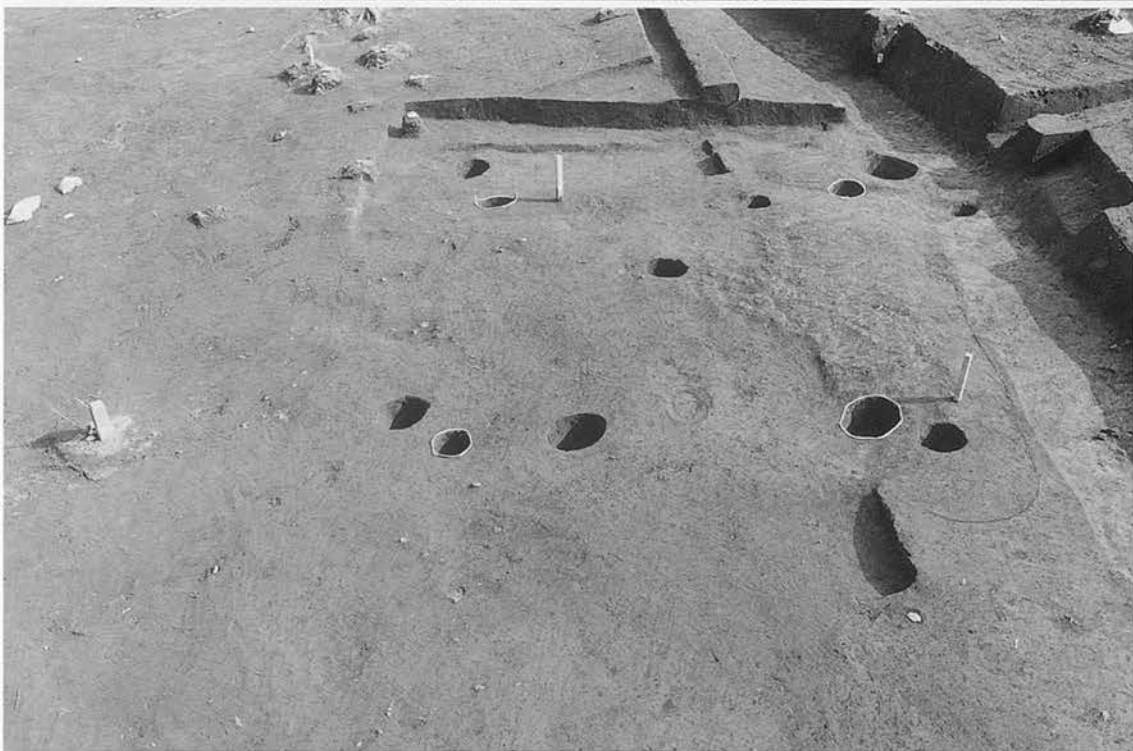
SI-019



(左)SI-019 炉  
(右)SI-020 遗物出土状况



SI-020

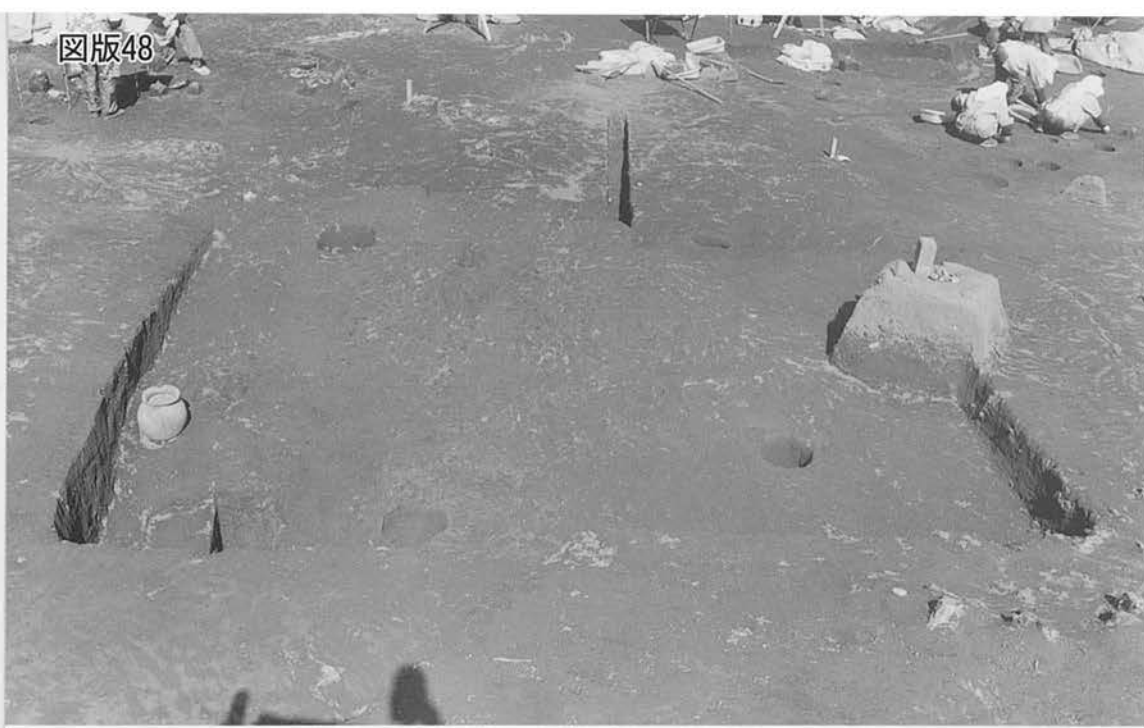


SI-021

(左)SI-021 遗物出土状况  
(右)SI-022 遗物出土状况







SI-022



(左)SI-022 遺物出土状況  
(右)SI-022 カマド状況



SI-024



(左)SI-024 遺物出土状況  
(右)SI-046 遺物出土状況



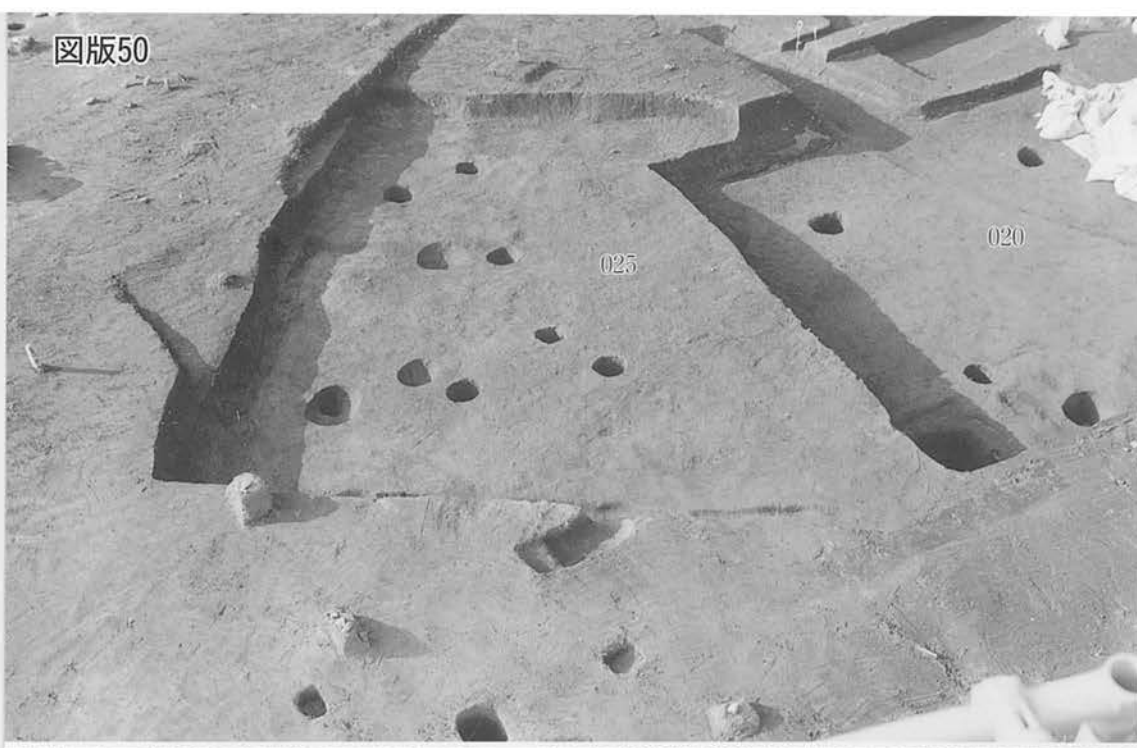
SI-049



SI-058



SI-060 · 063



SI-025



SI-044



SI-045・065



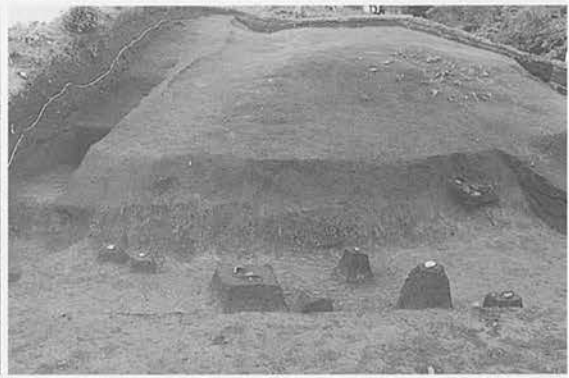


8号墳

(左)表土除去後  
(右)周溝



(左)墳丘断面  
(右)遺物出土状況



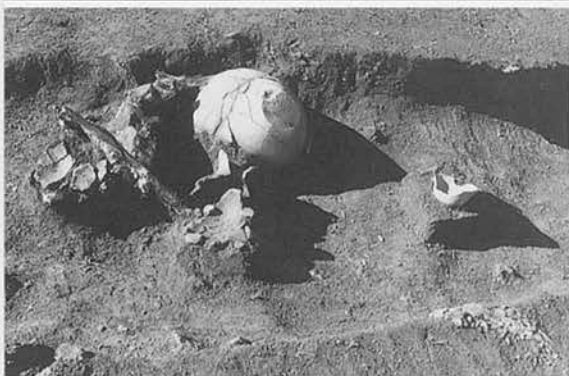
9号墳



11号墳



SM-001



SM-001 遺物出土状況



(左)SM-001 周溝内土層断面  
(右)SI-006 カマド





SK-006



SK-004



SK-009



SK-010



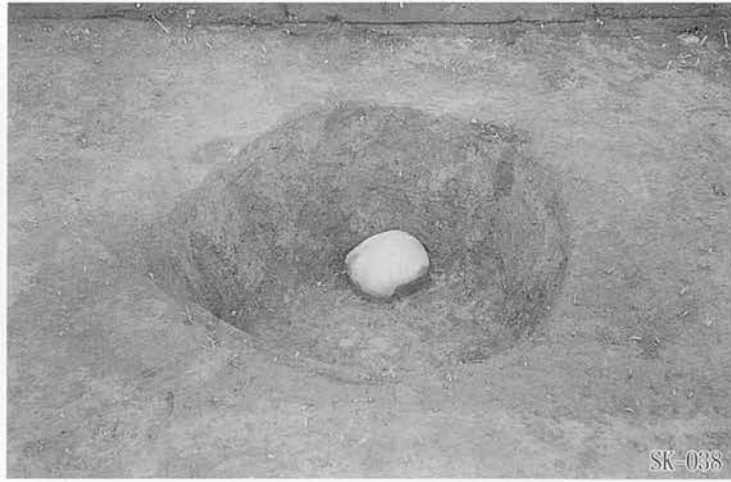
SK-013



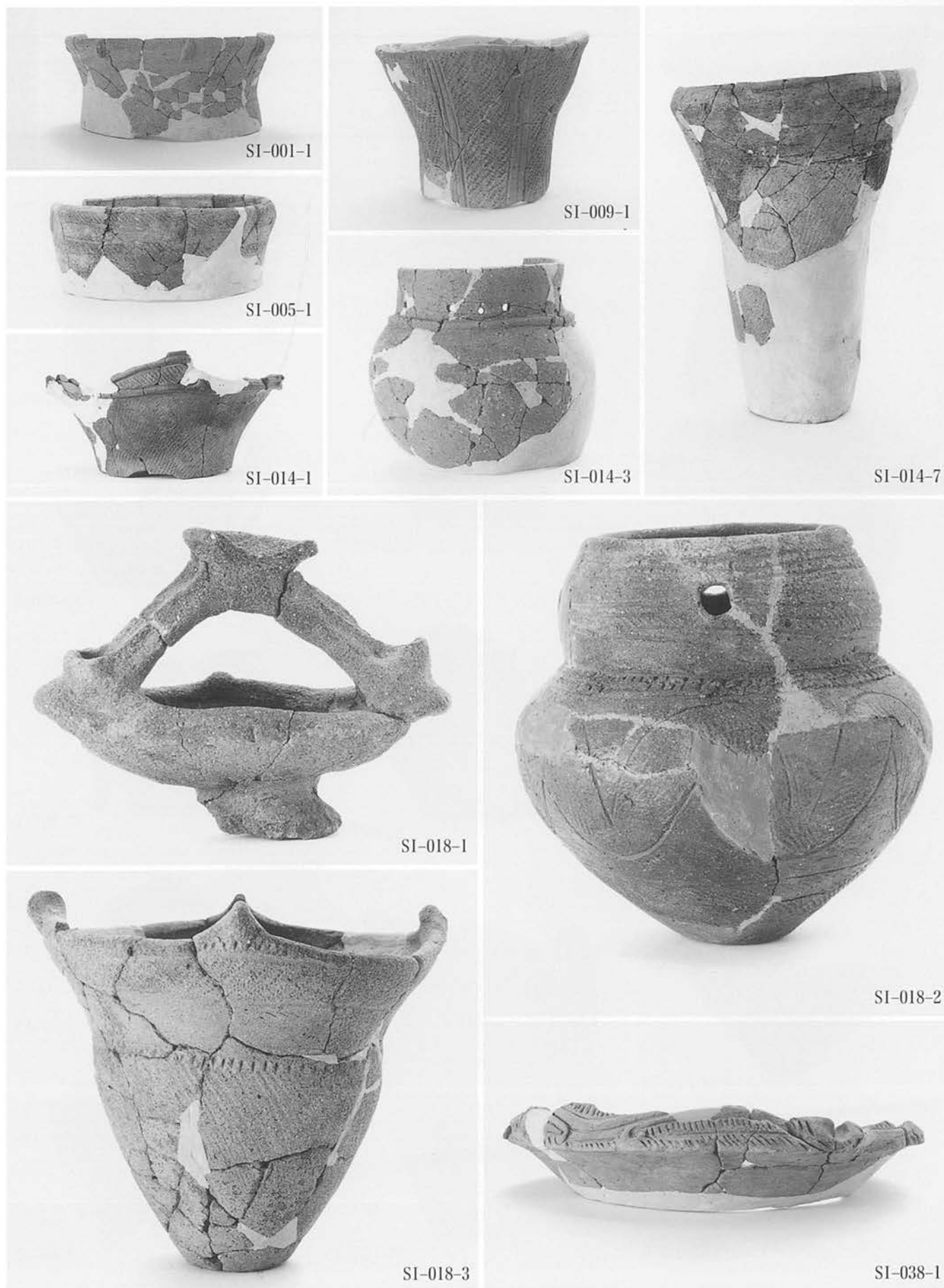
SK-017



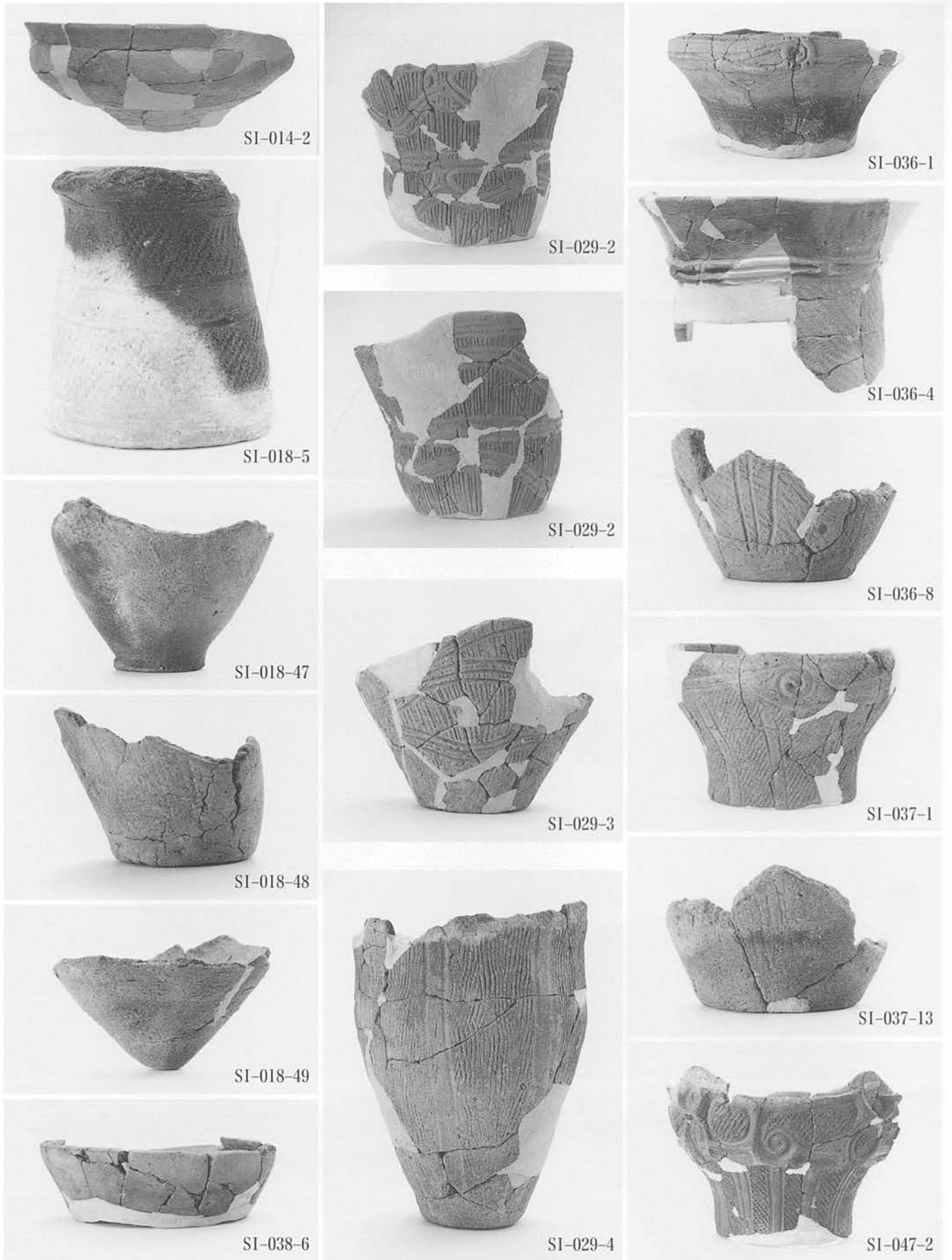
SK-018



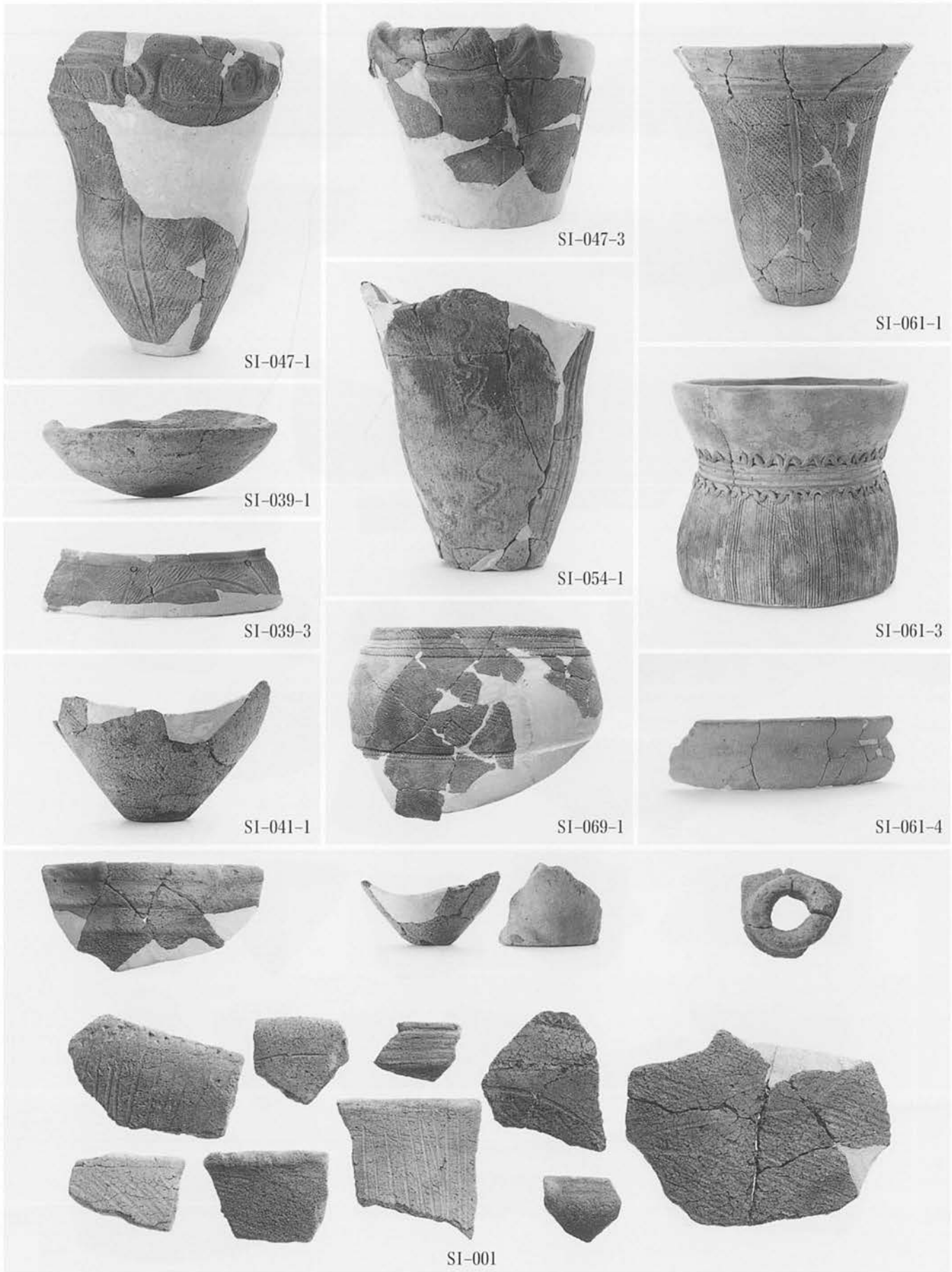




豎穴住居跡出土土器 (1)



竖穴住居跡出土土器 (2)

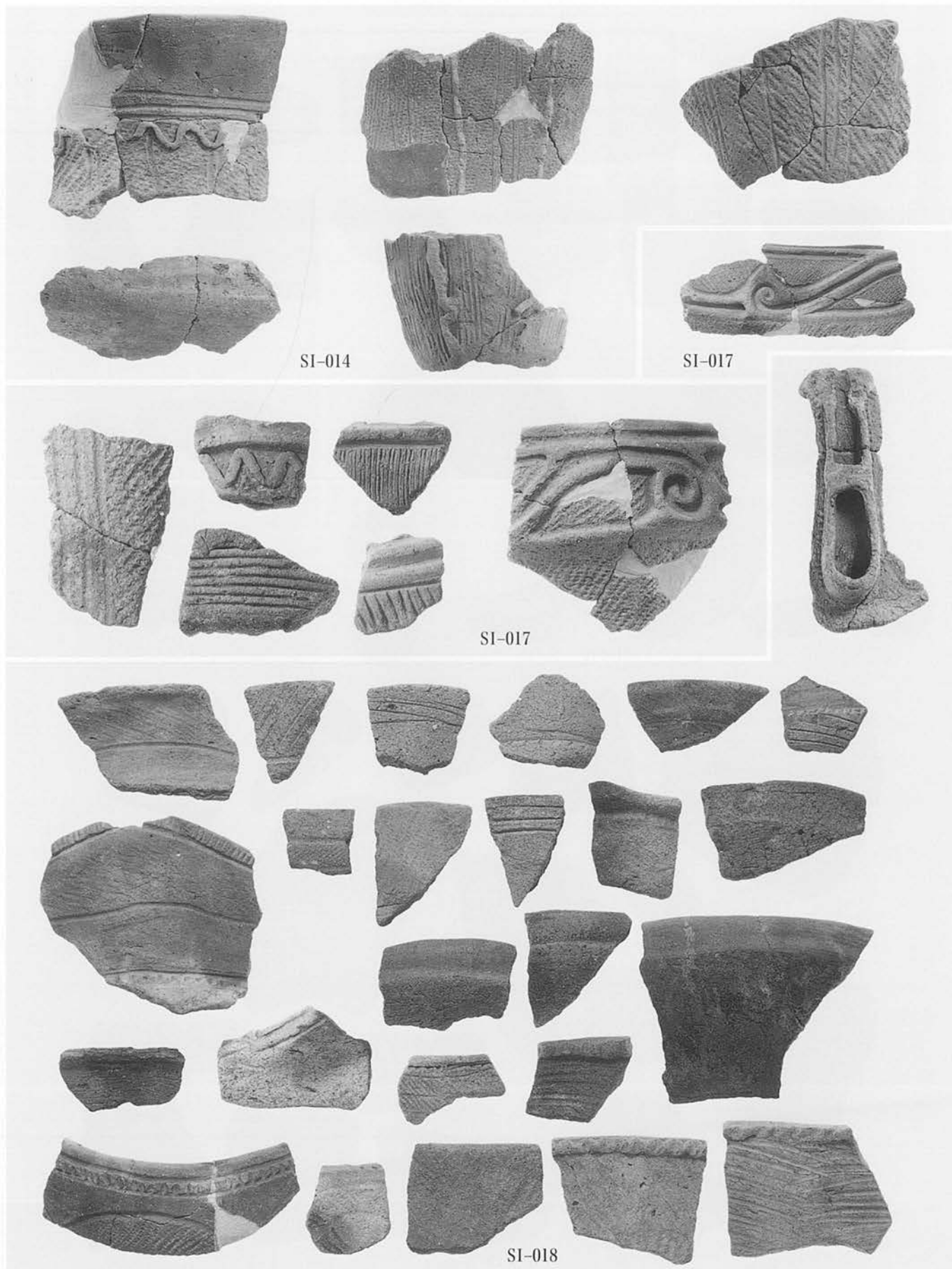


竖穴住居跡出土土器 (3)



竖穴住居跡出土土器 (4)

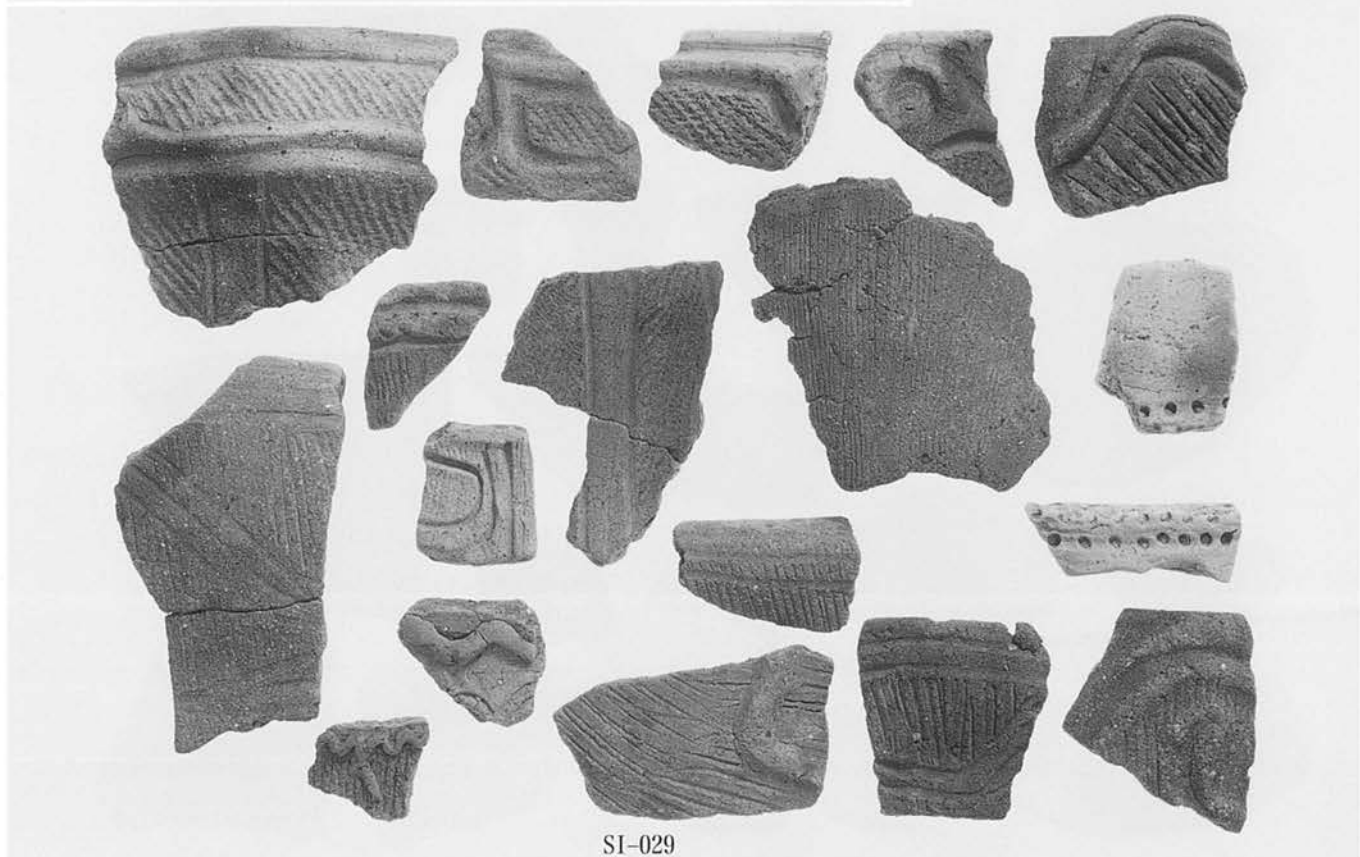




竖穴住居跡出土土器 (5)



SI-018



SI-029

竖穴住居跡出土土器 (6)



SI-029



SI-033



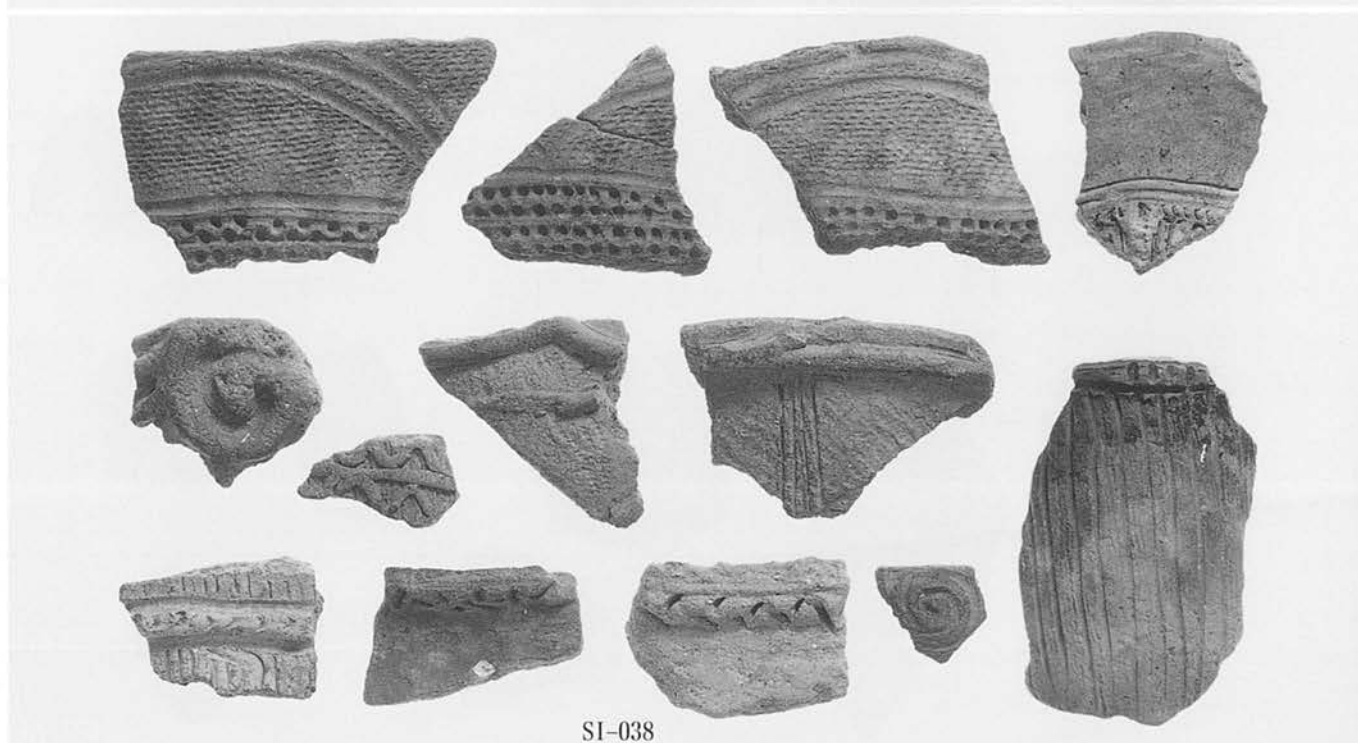
SI-036

竖穴住居跡出土土器 (7)



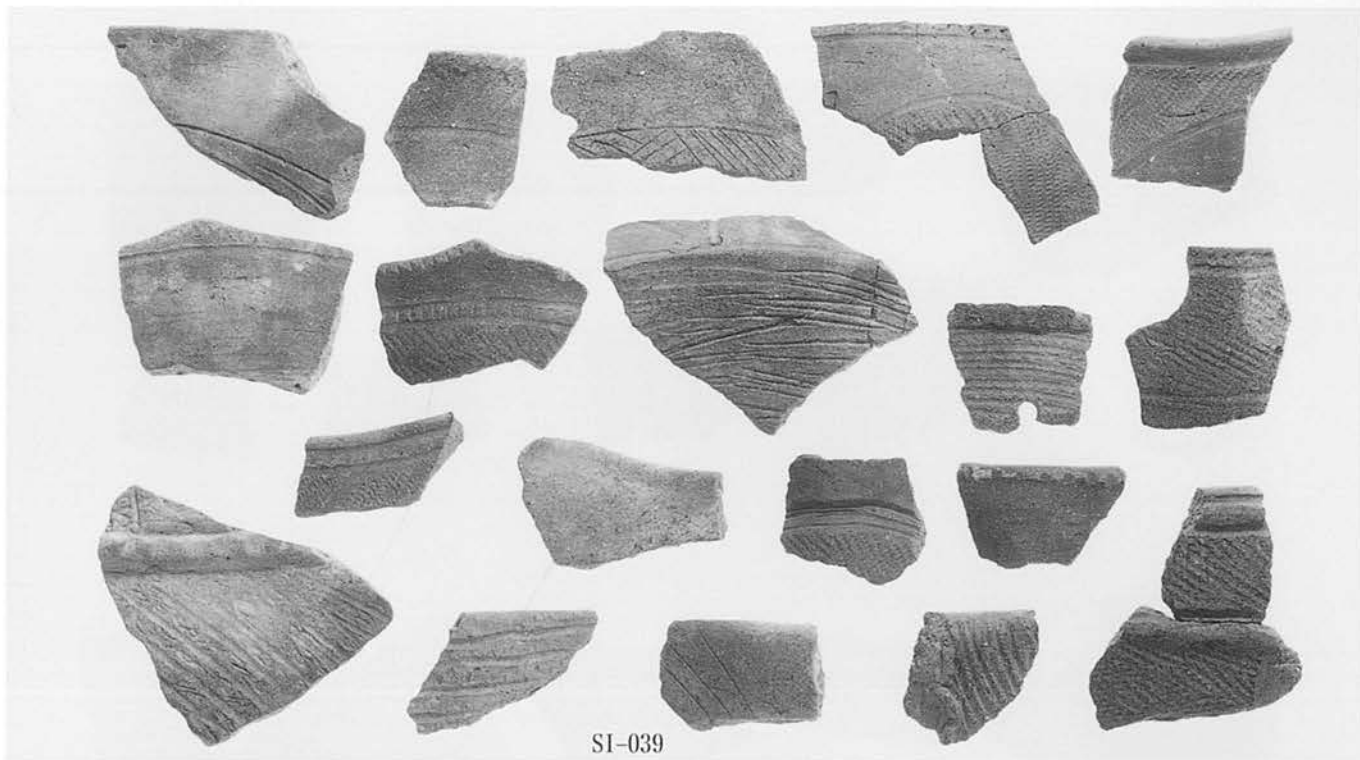


SI-037



SI-038

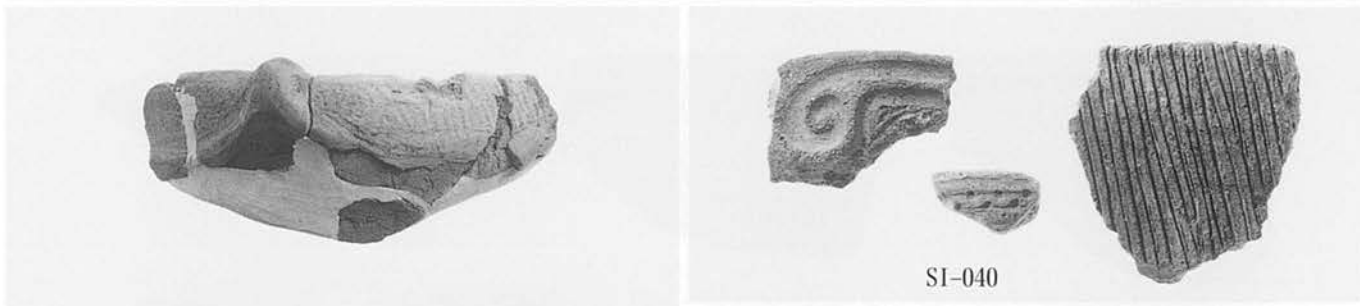
竖穴住居跡出土土器 (8)



SI-039



SI-041



SI-040



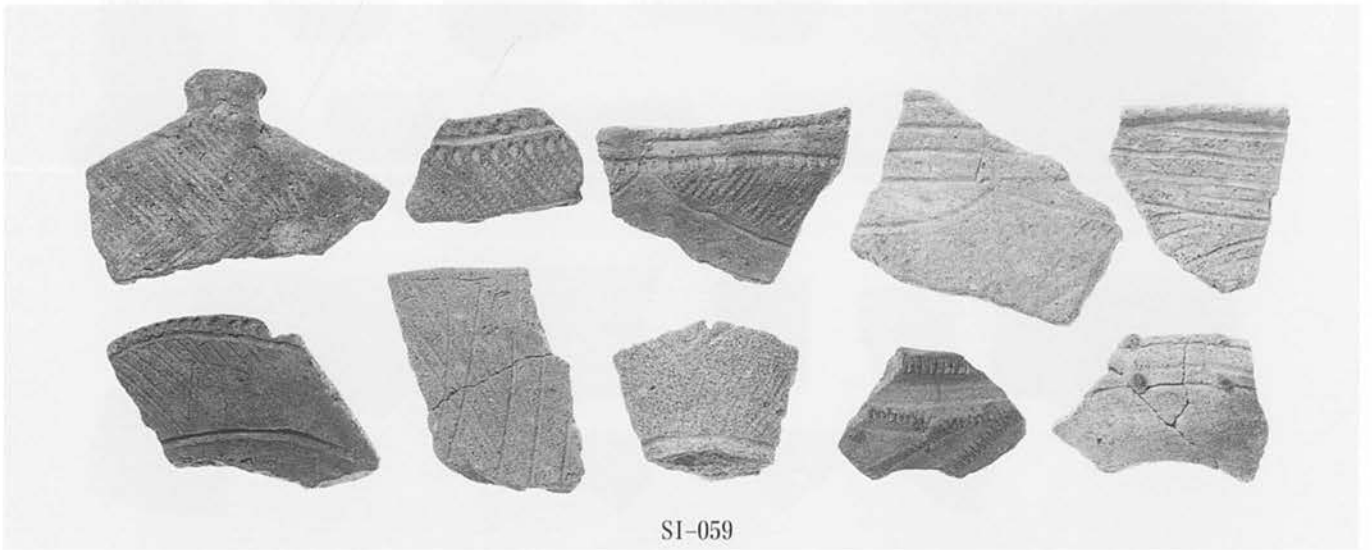
SI-047

SI-054

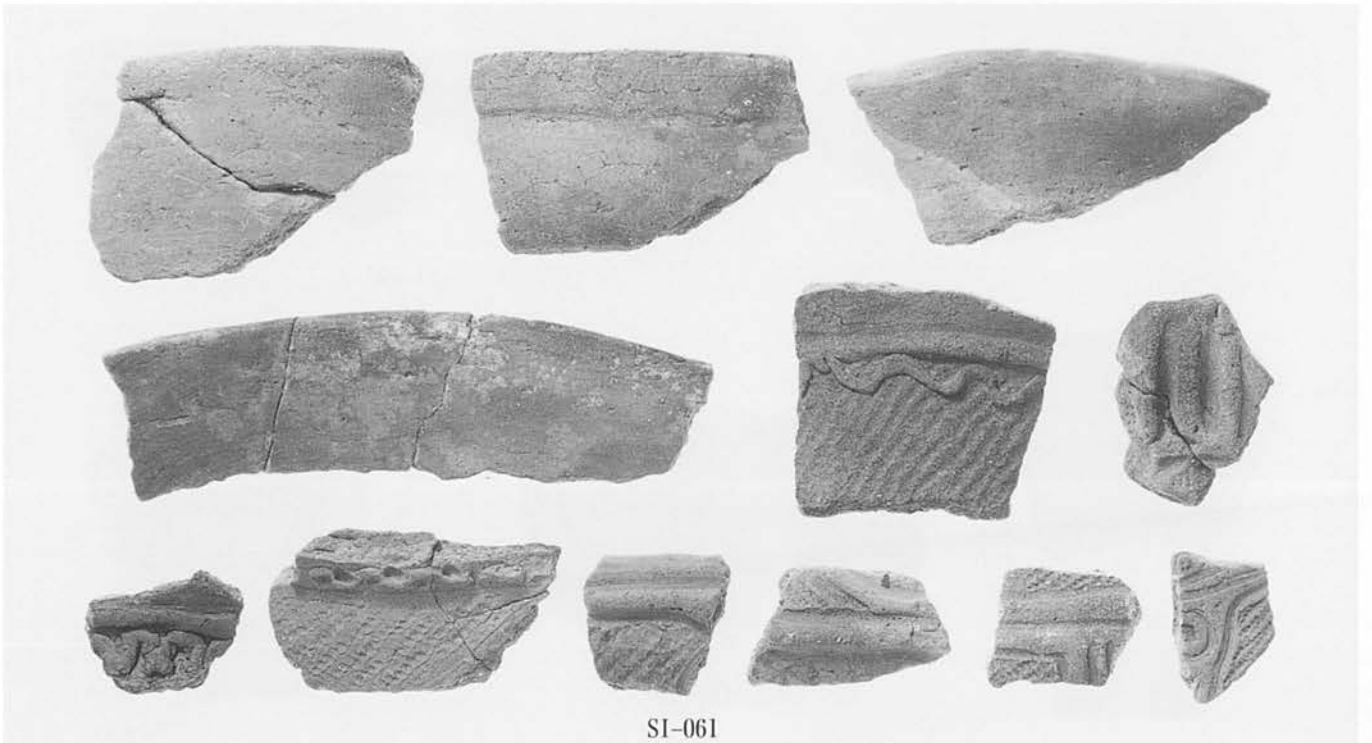
豎穴住居跡出土土器 (9)



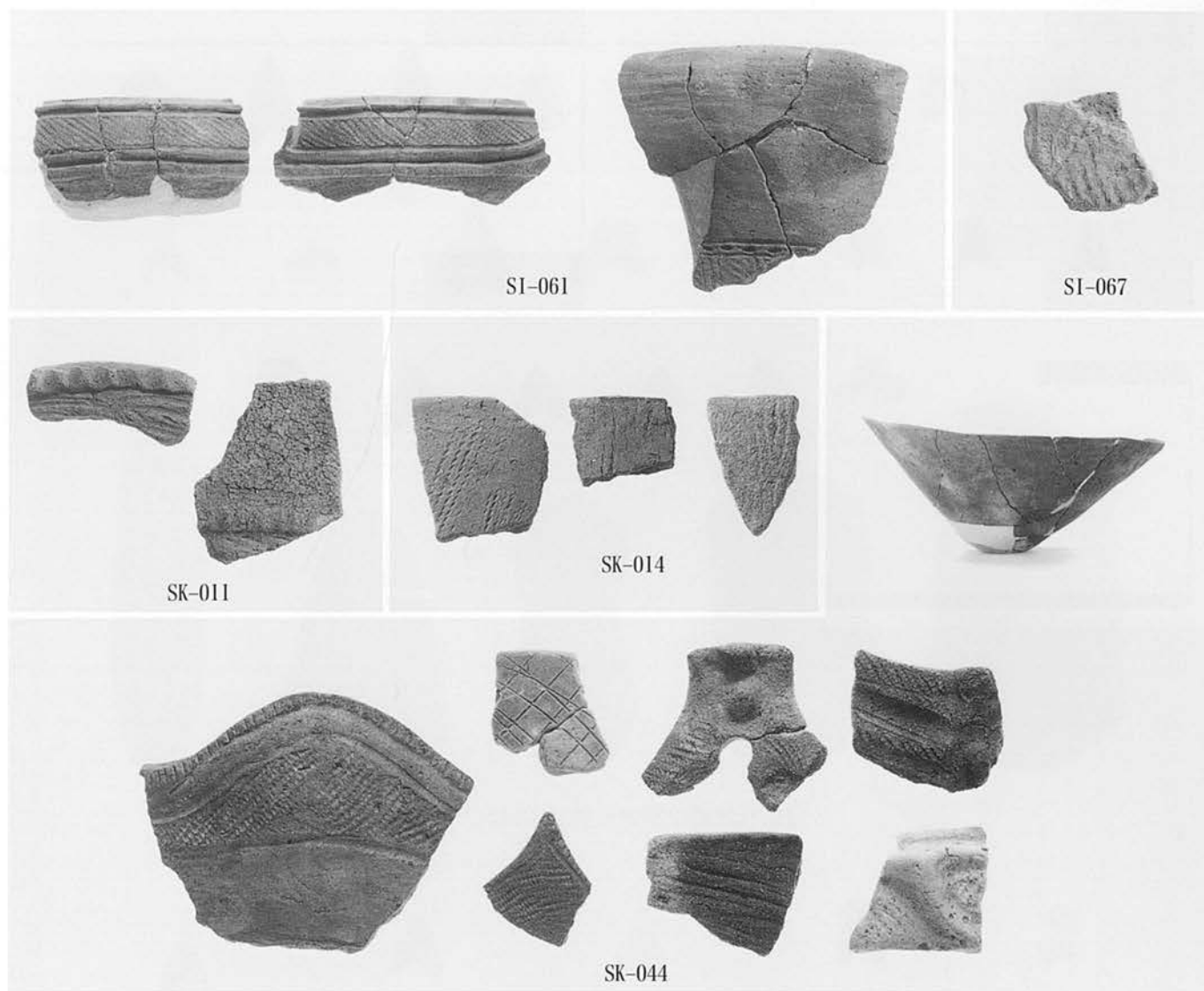
SI-054



SI-059



SI-061



竖穴住居跡 (11)・土坑出土土器



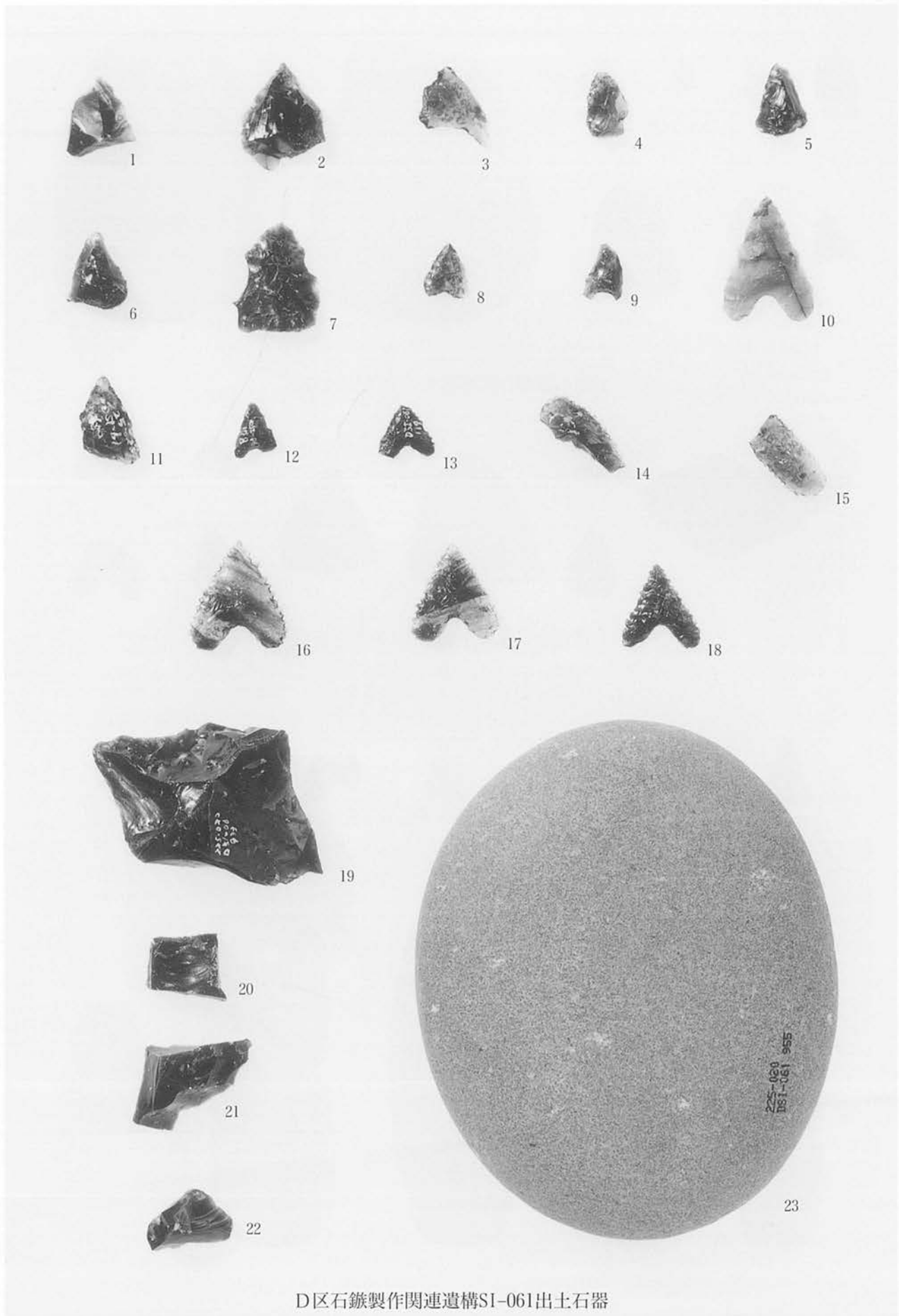
D区石鏃製作関連遺構SI-014出土石器



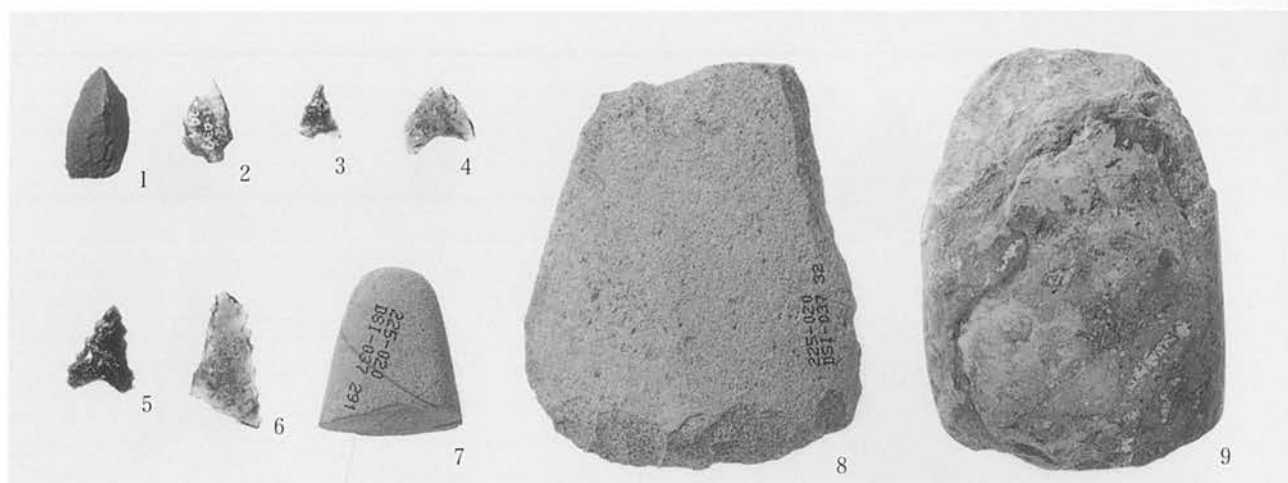
D区石鏃製作関連遺構SI-017出土石器

D区石鏃製作関連遺構SI-036出土石器





D区石鏃製作関連遺構SI-061出土石器



D区石鏃製作関連遺構SI-037出土石器

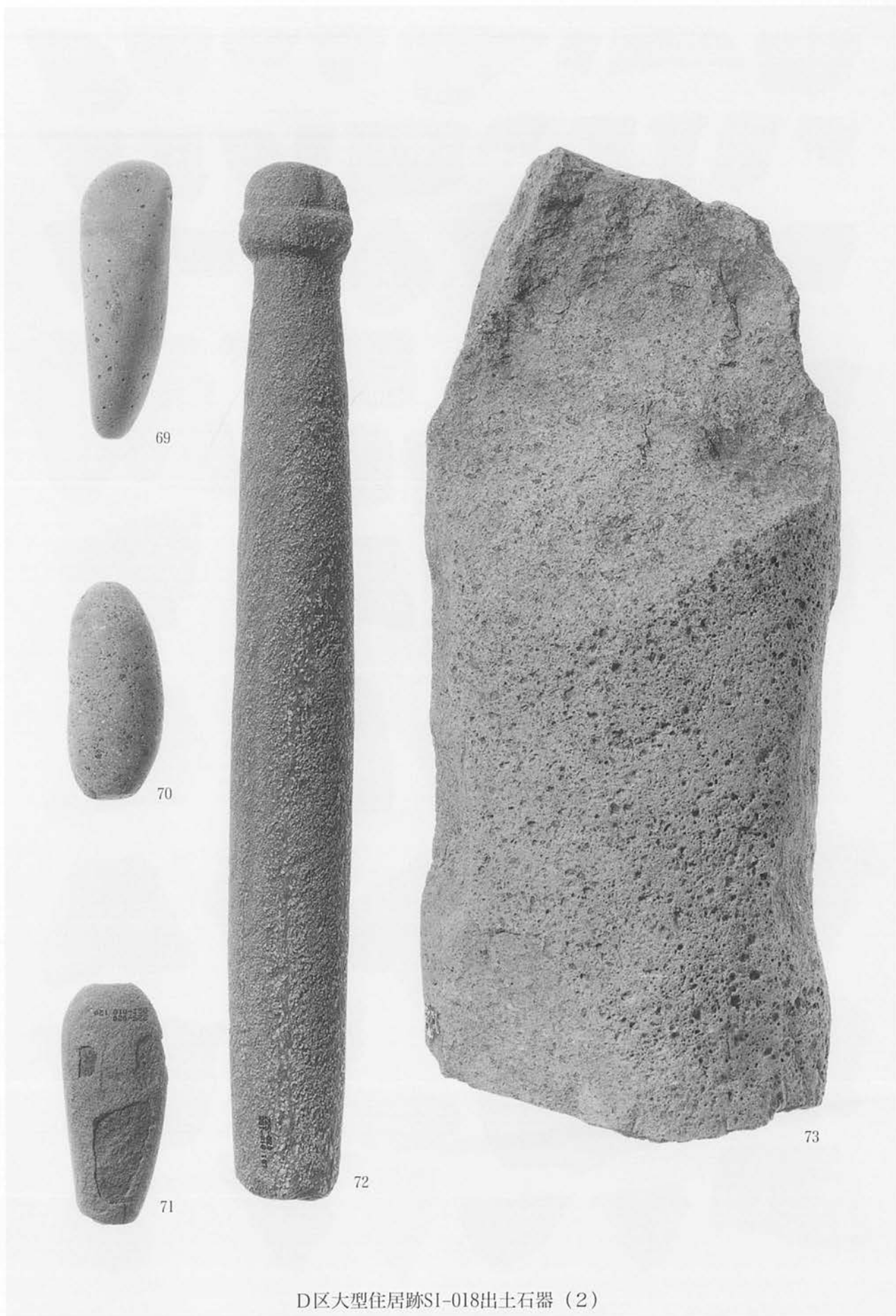


D区石鏃製作関連遺構SI-038出土石器

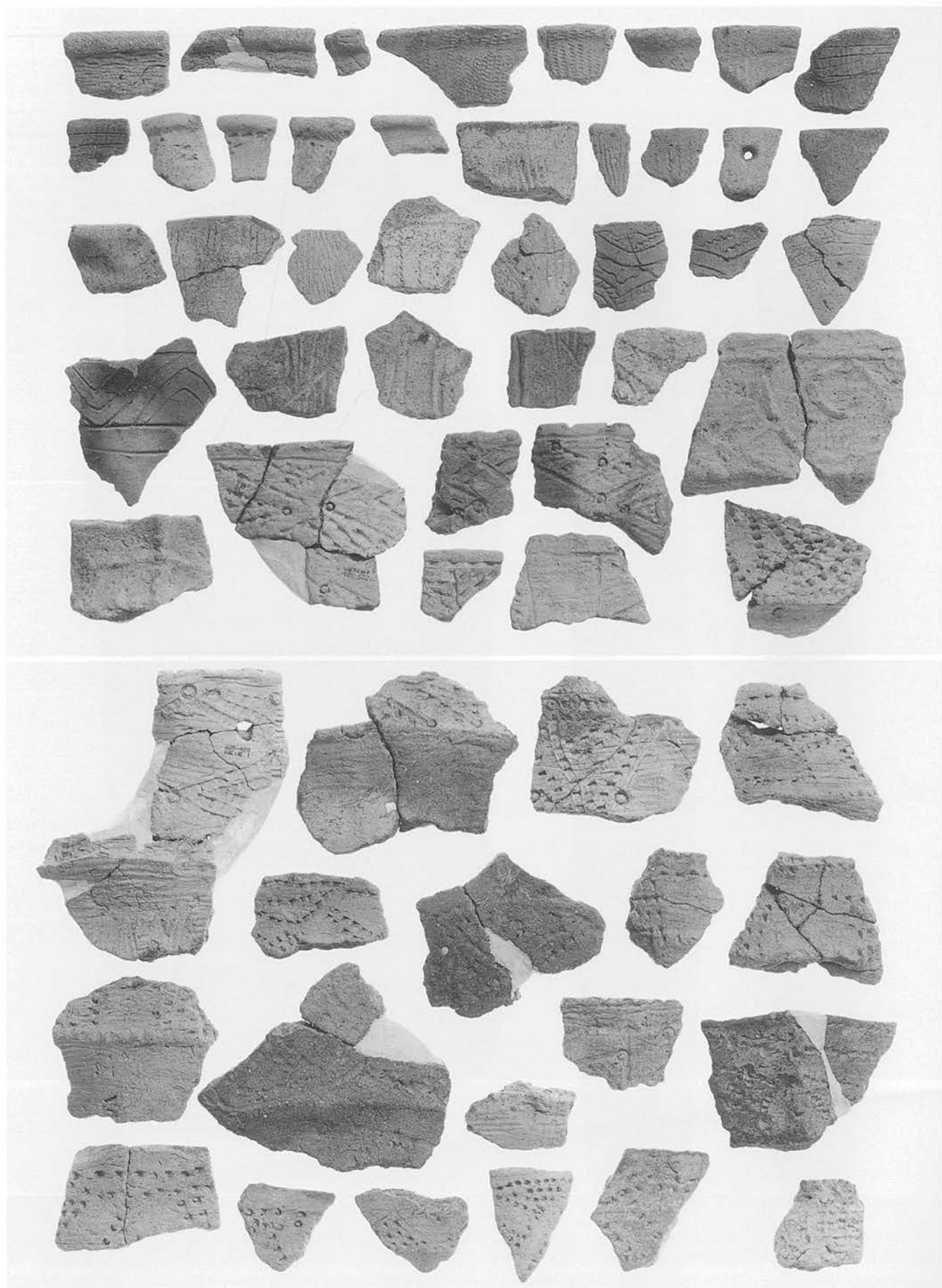


D区大型住居跡SI-018出土石器 (1)

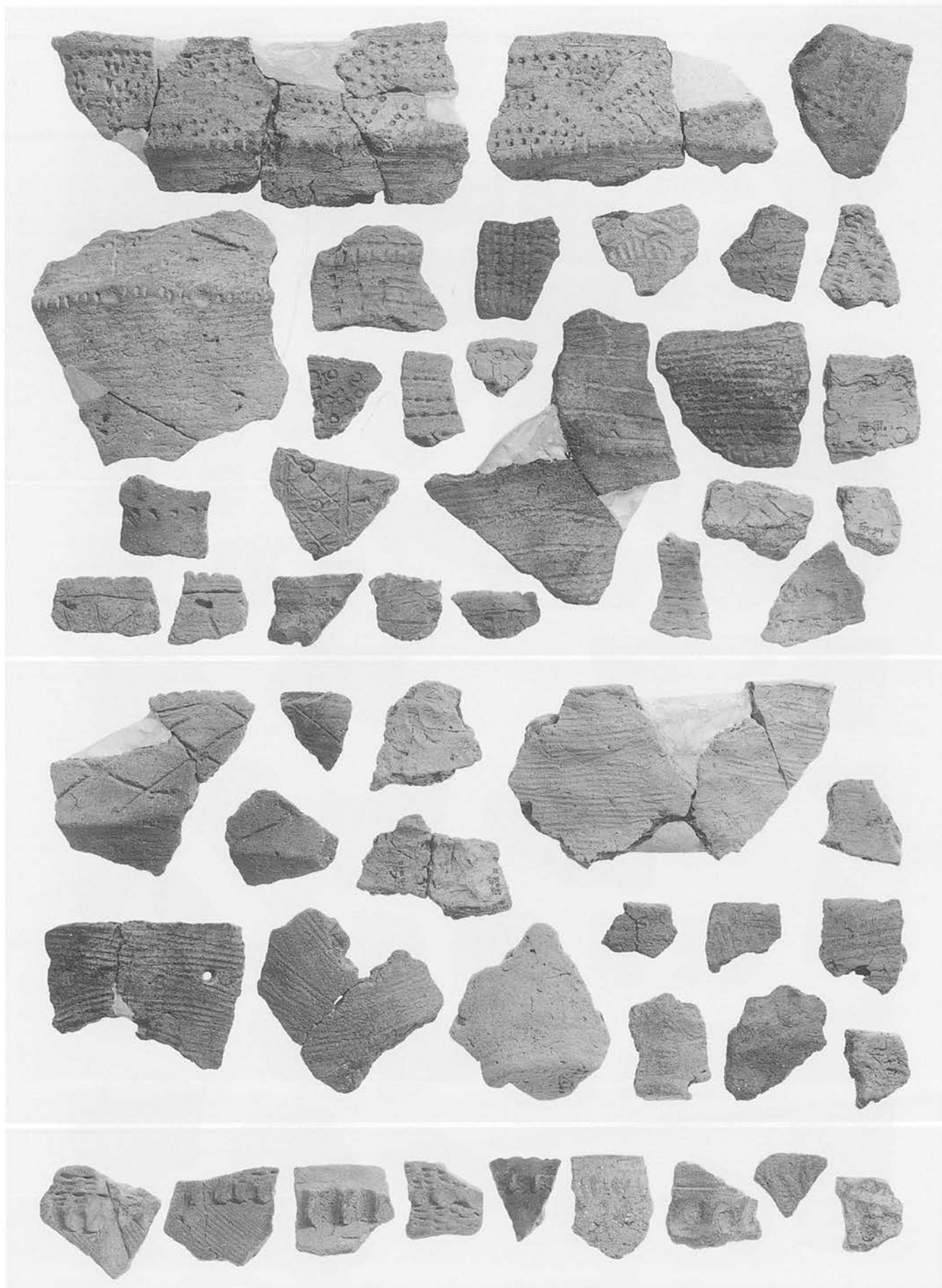




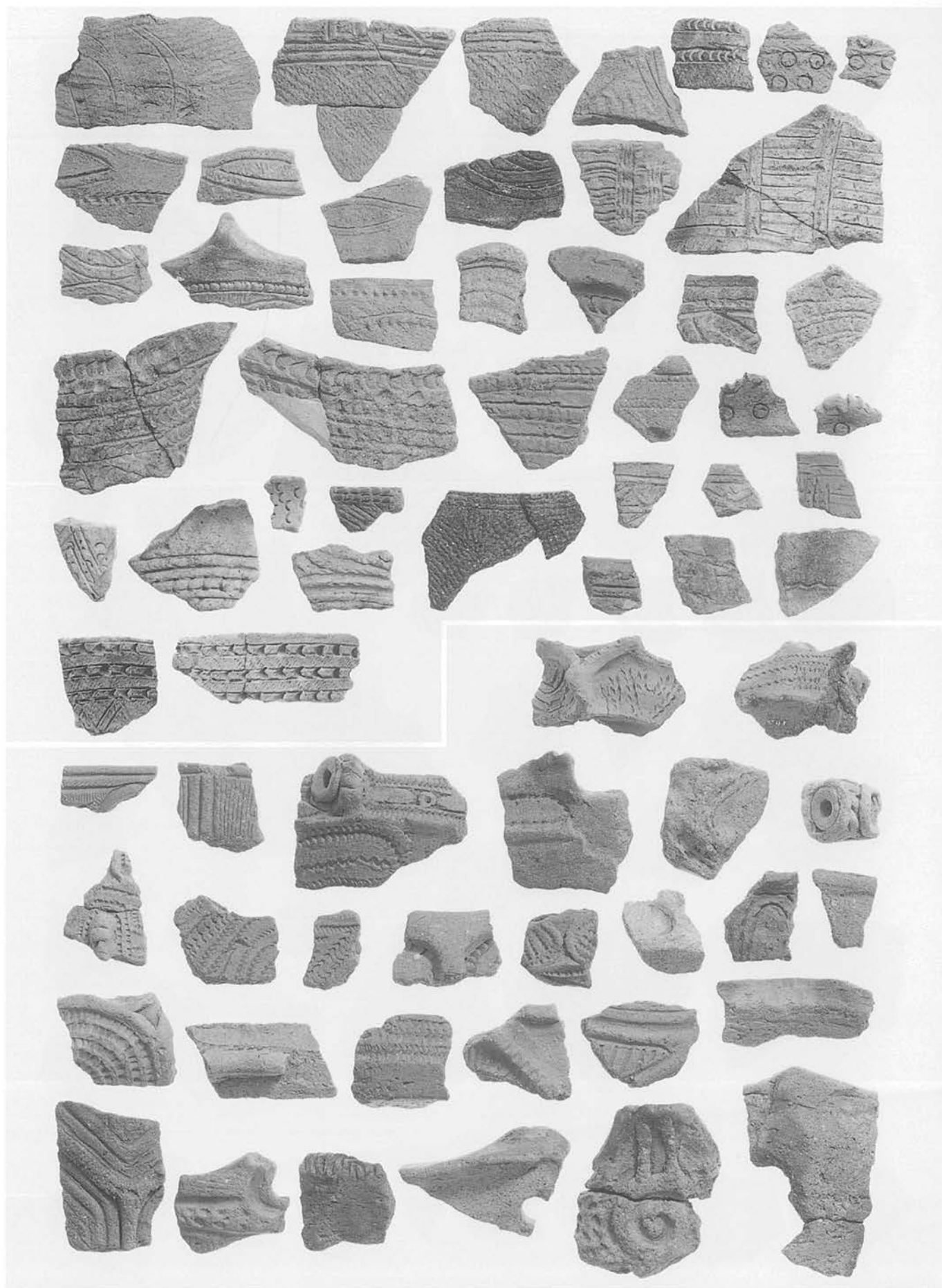
D区大型住居跡SI-018出土石器（2）



A・D区遺構外出土縄文土器(1)

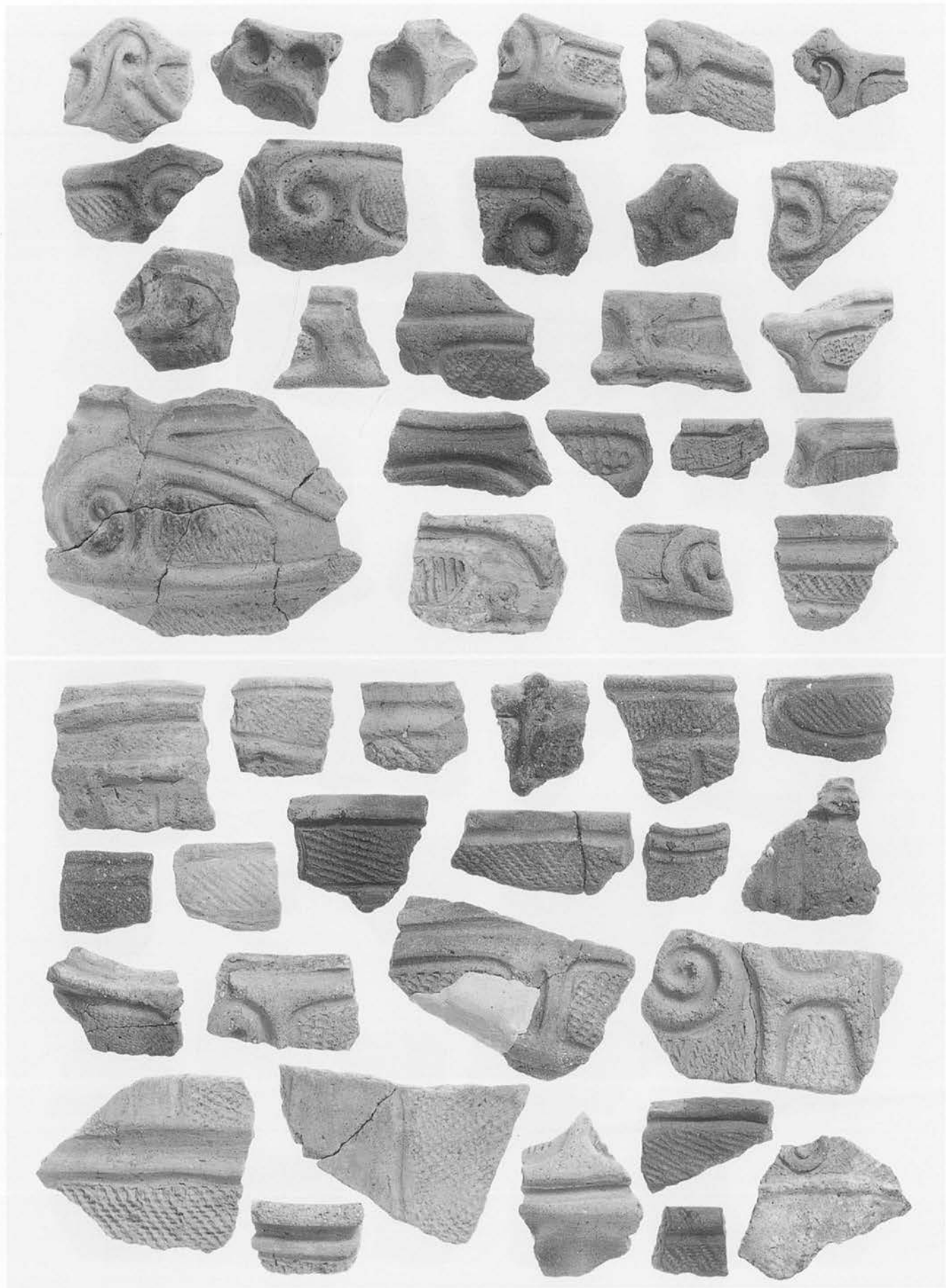


A·D区遺構外出土縄文土器(2)

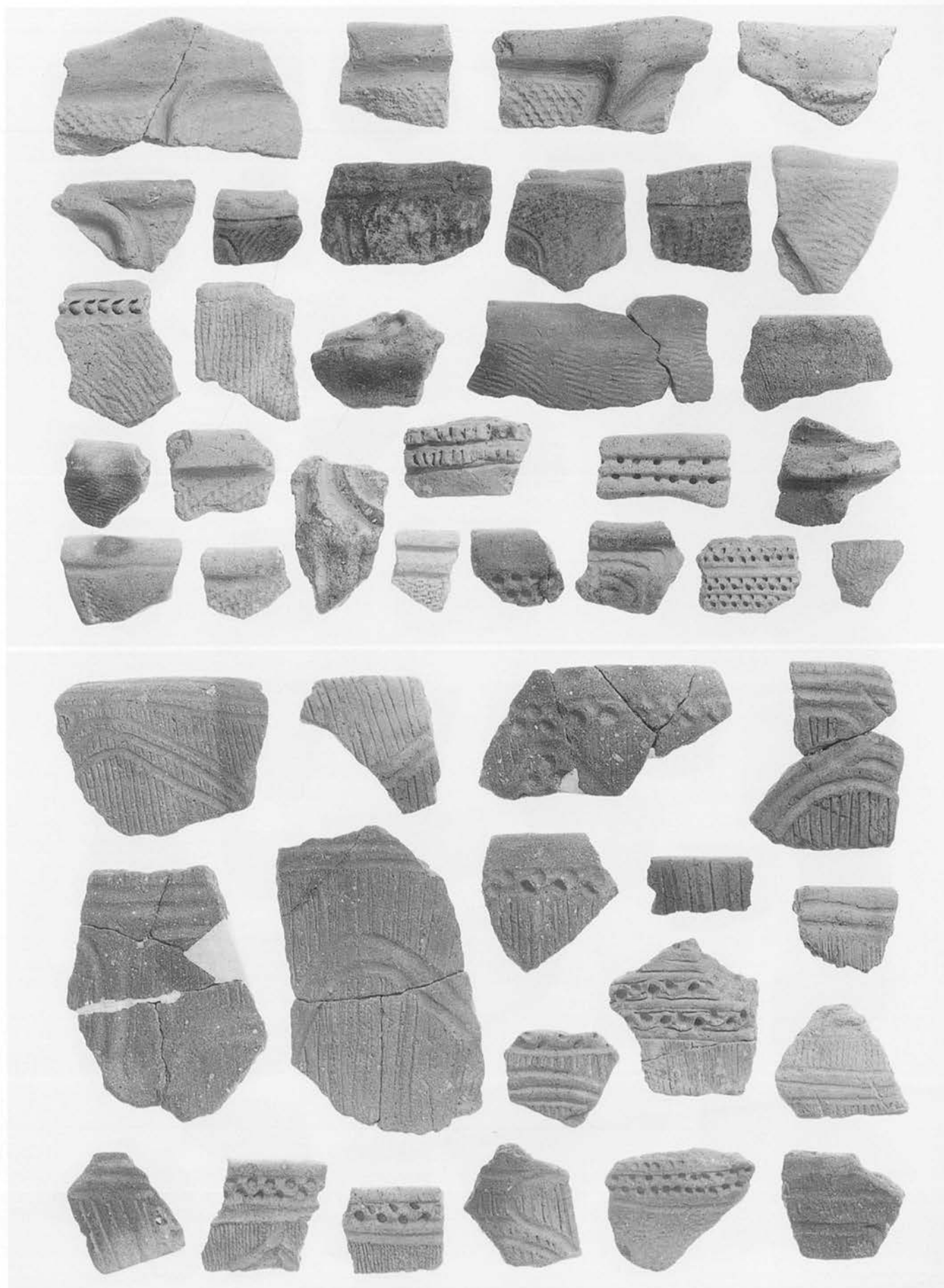


A・D区遺構外出土縄文土器(3)





A·D区遺構外出土縄文土器(4)

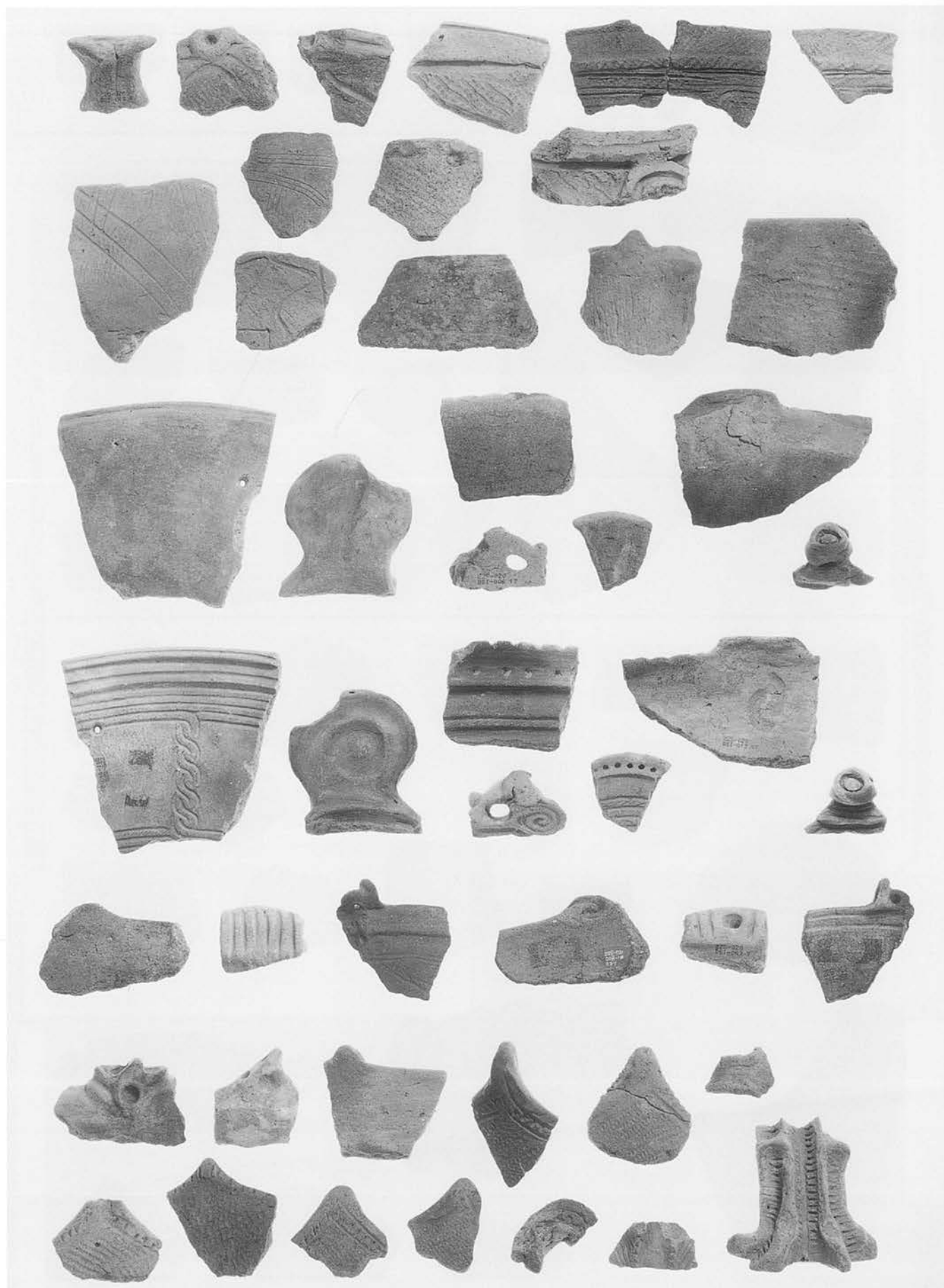


A·D区遺構外出土縄文土器(5)

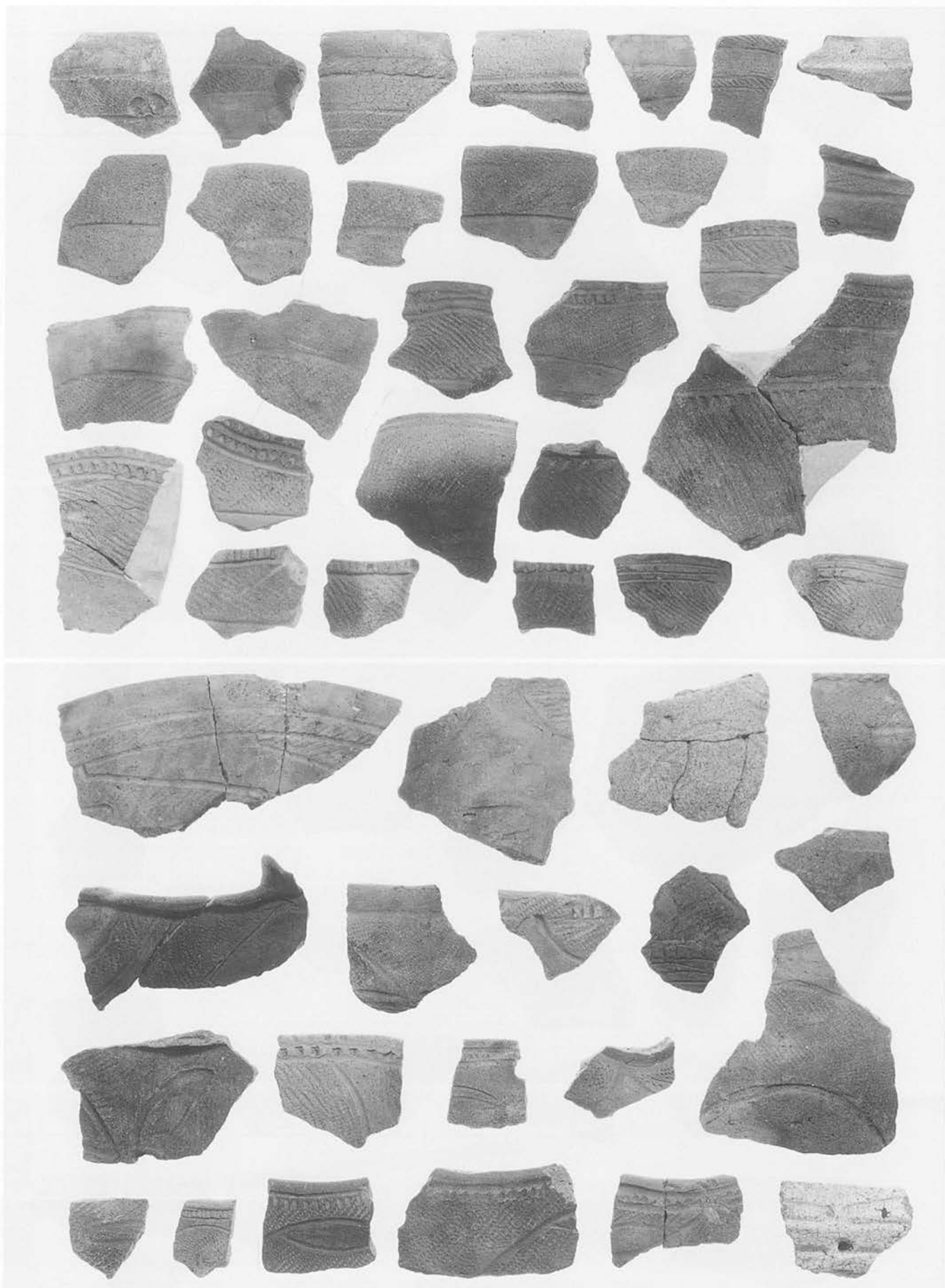


A·D区遺構外出土繩文土器(6)

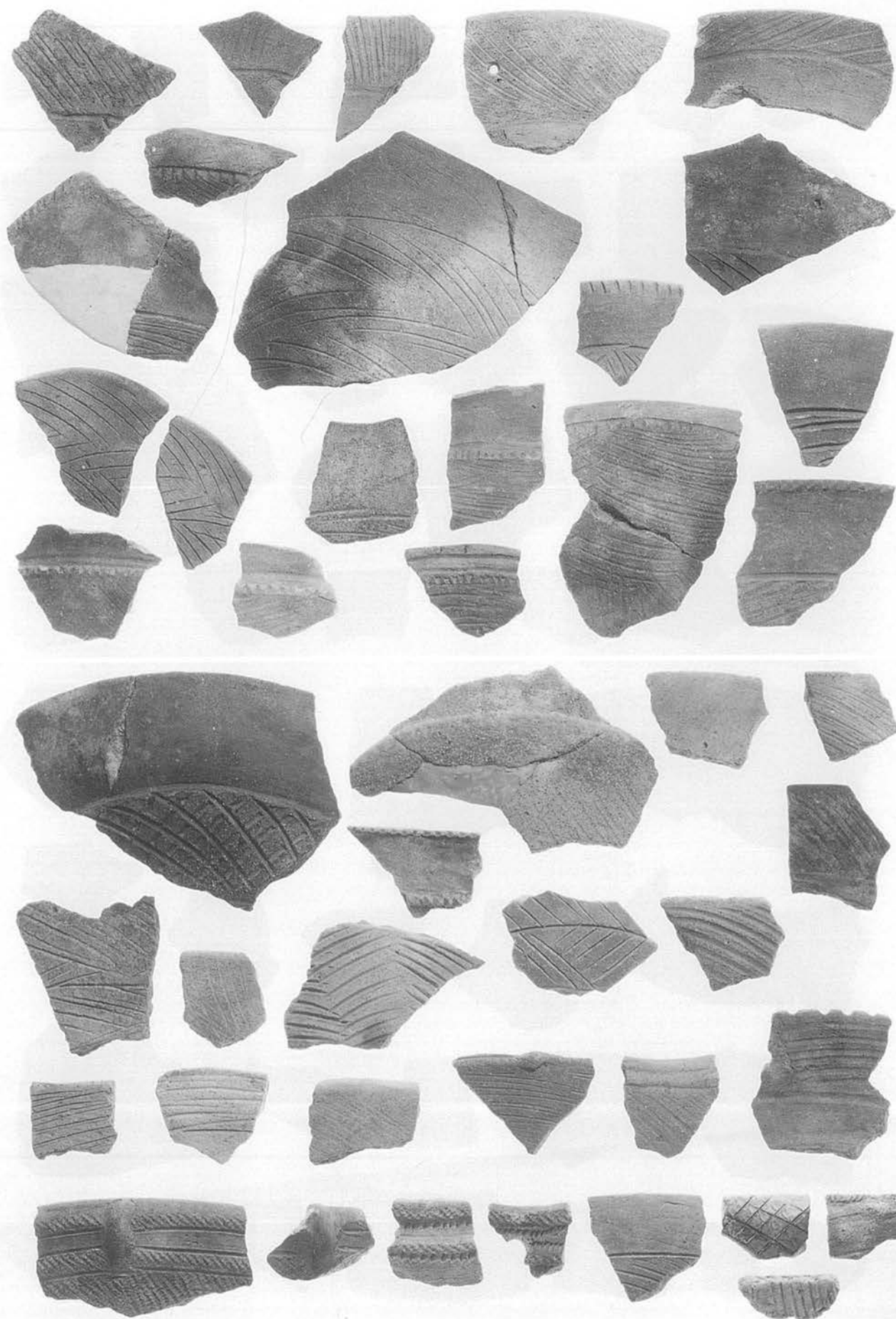




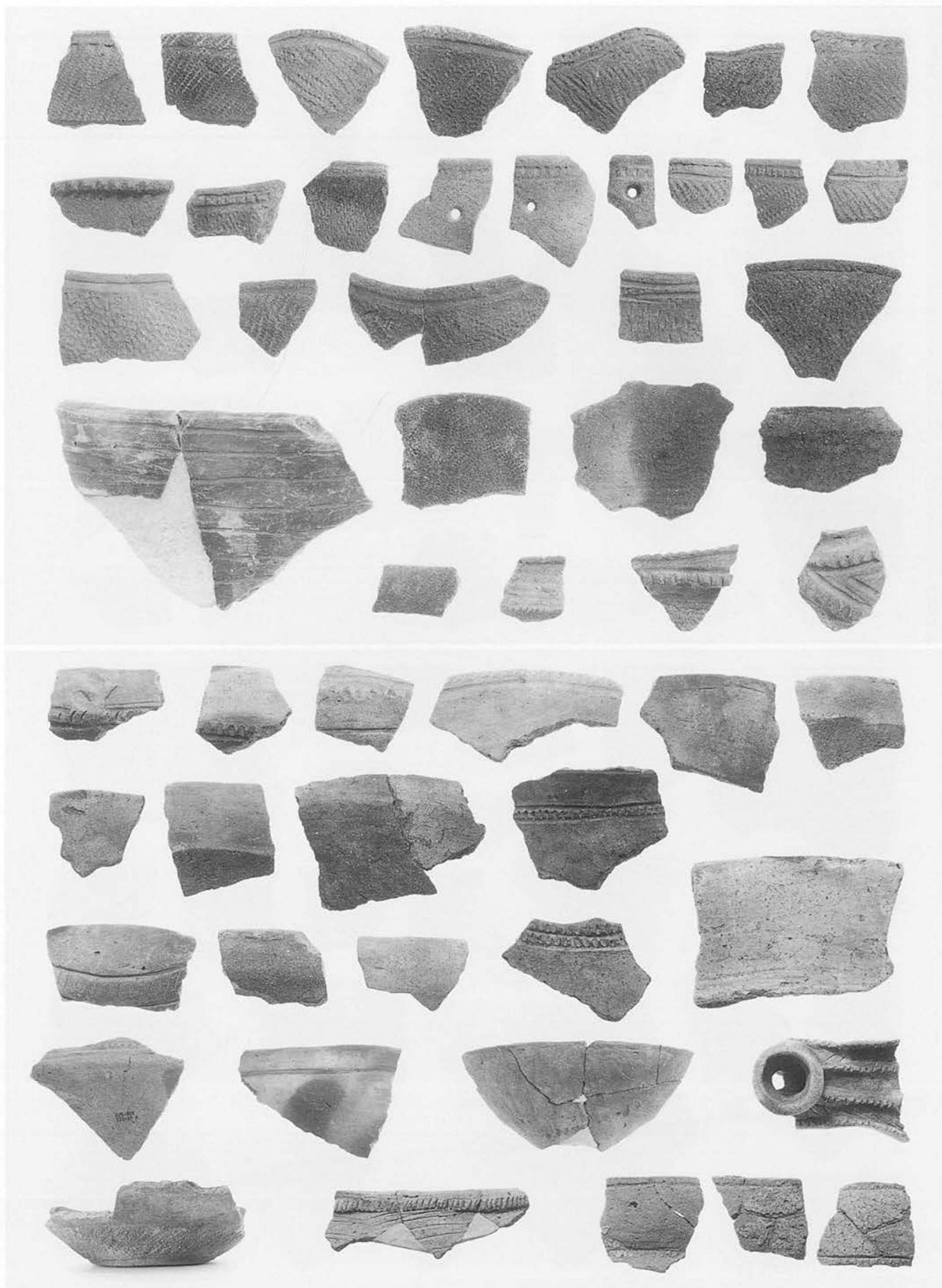
A・D区遺構外出土縄文土器(7)



A · D区遺構外出土繩文土器 (8)

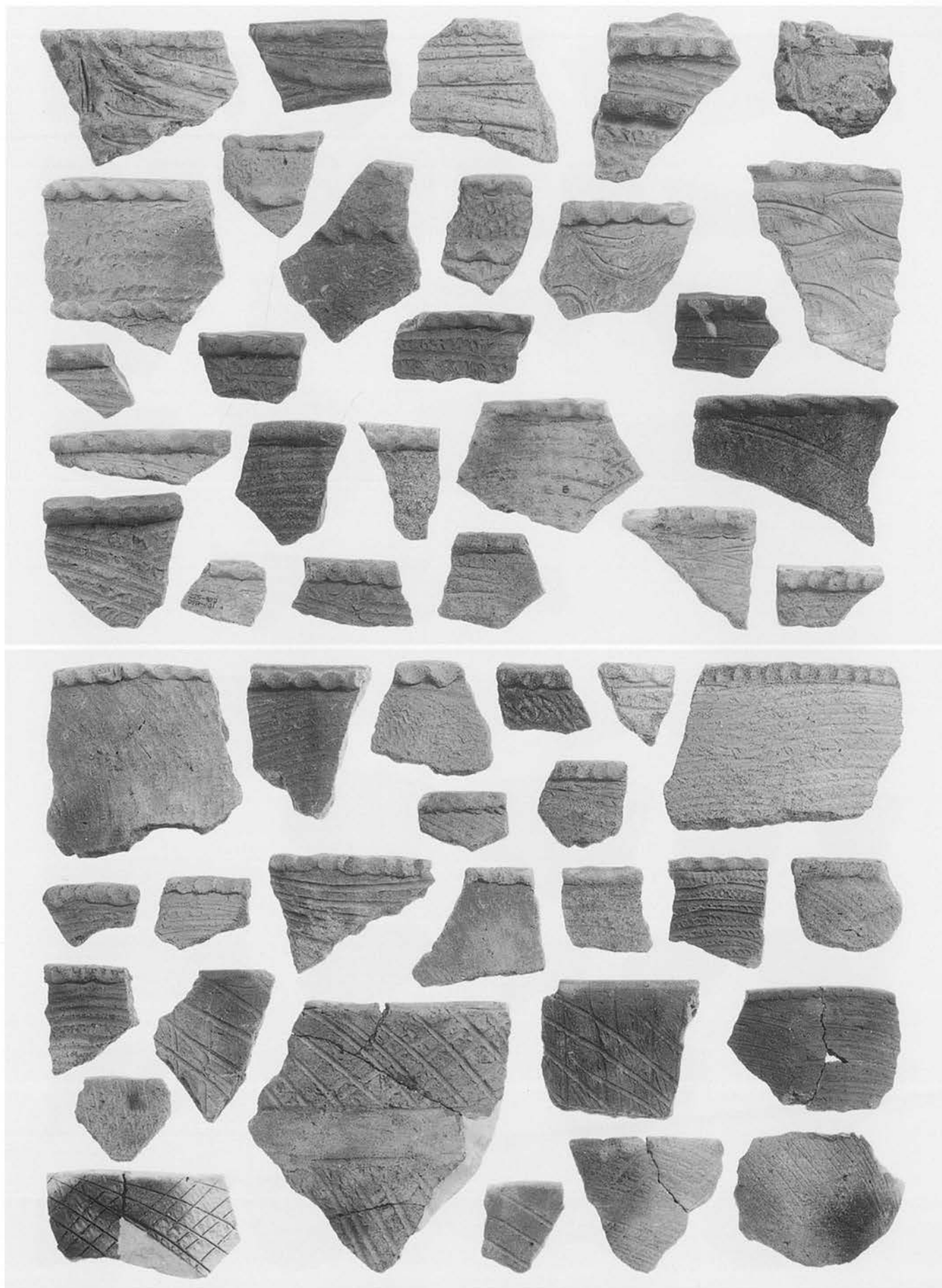


A·D区遺構外出土縄文土器(9)

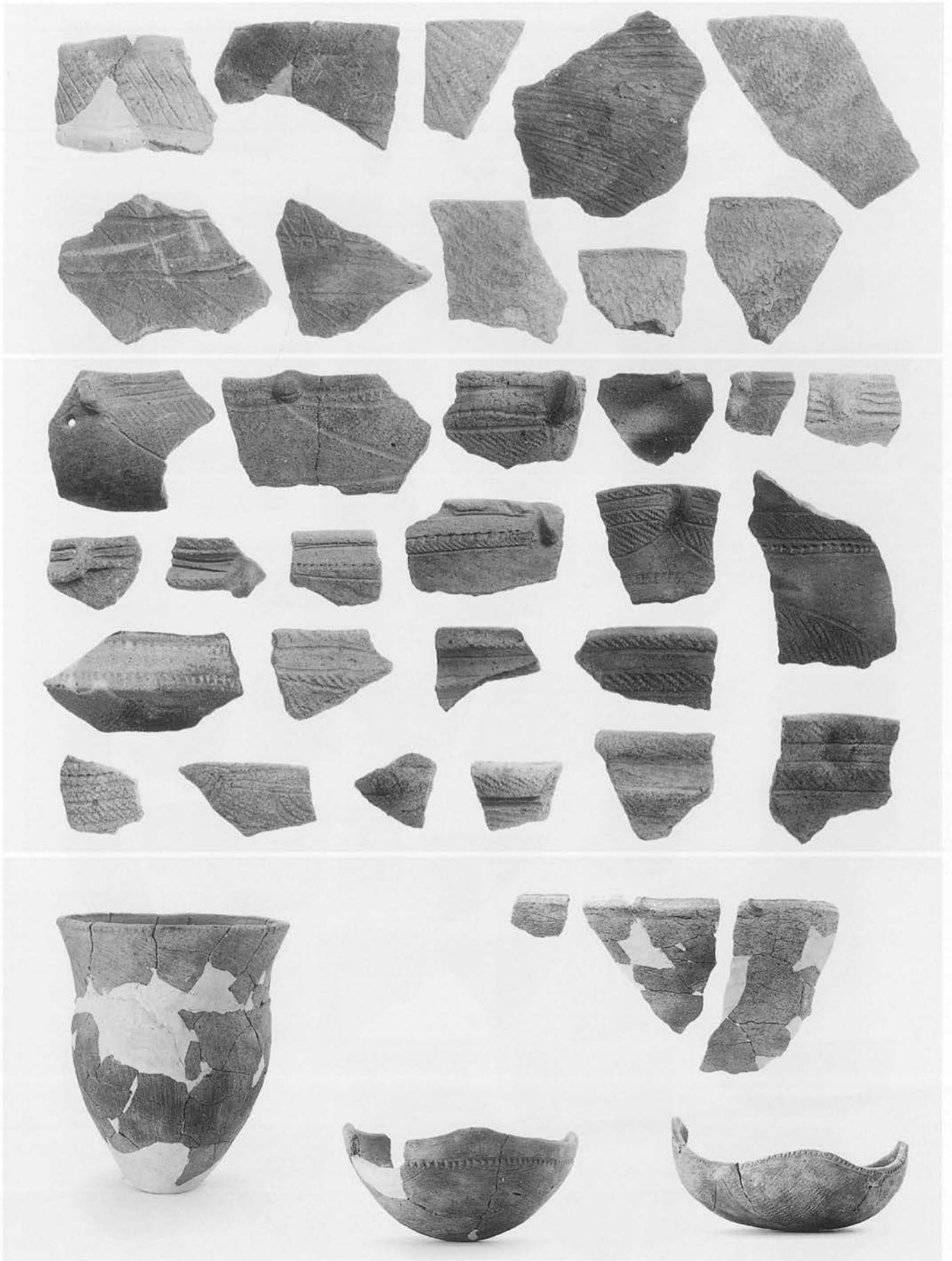


A·D区遺構外出土縄文土器 (10)

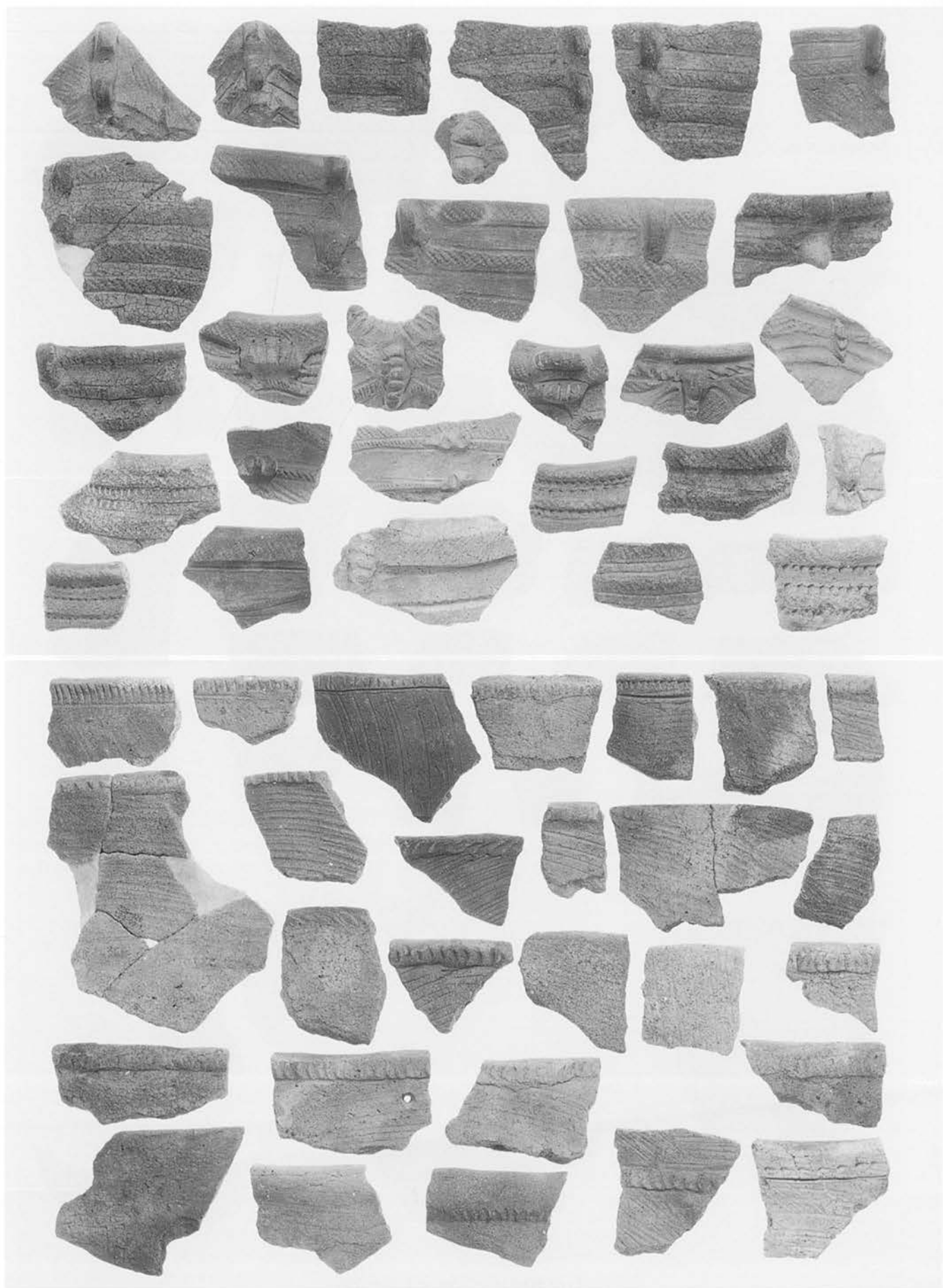




A·D区遺構外出土縄文土器 (II)

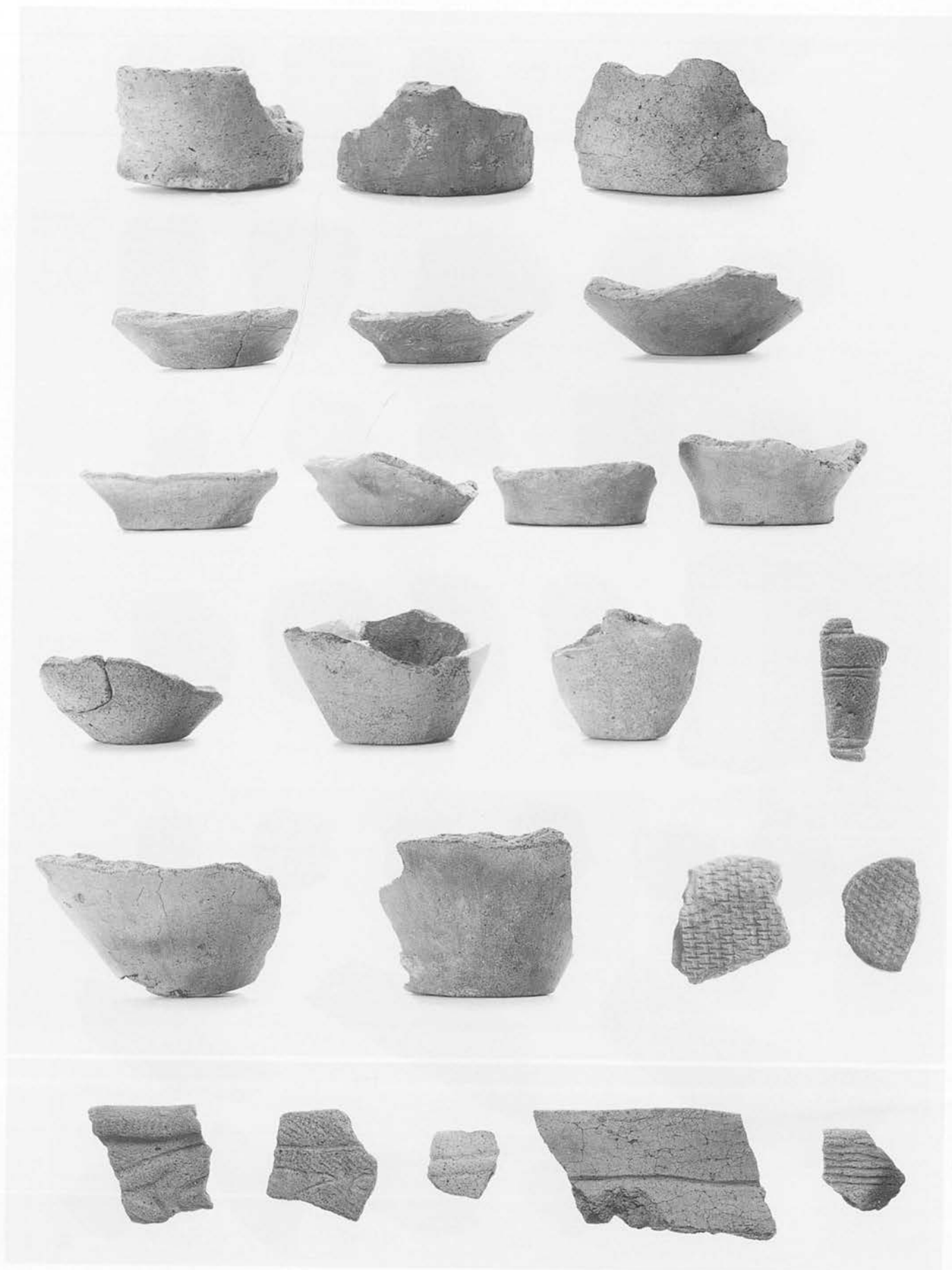


A・D区遺構外出土縄文土器 (12)

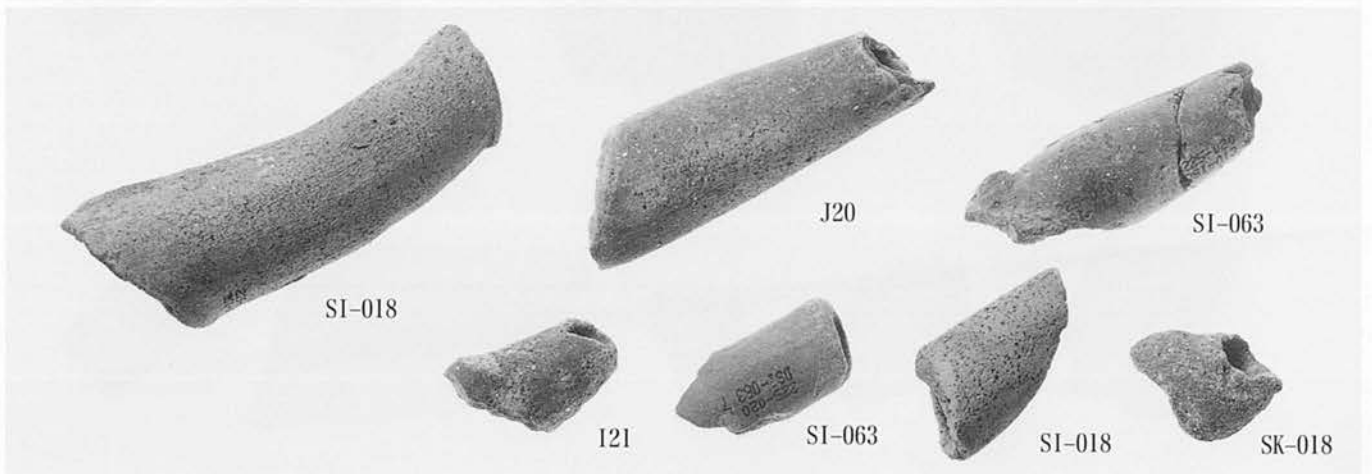
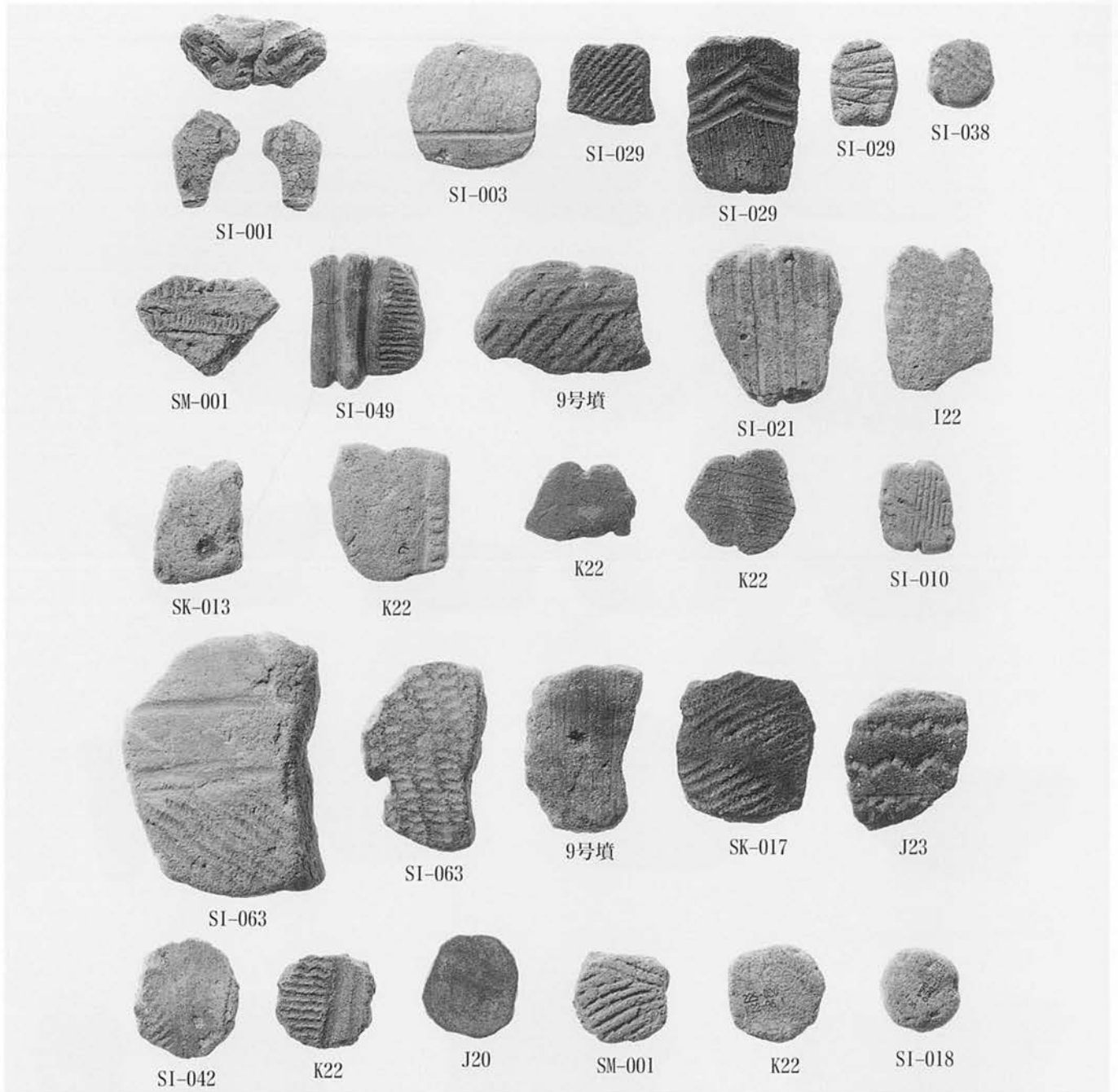


A·D区遺構外出土縄文土器 (13)

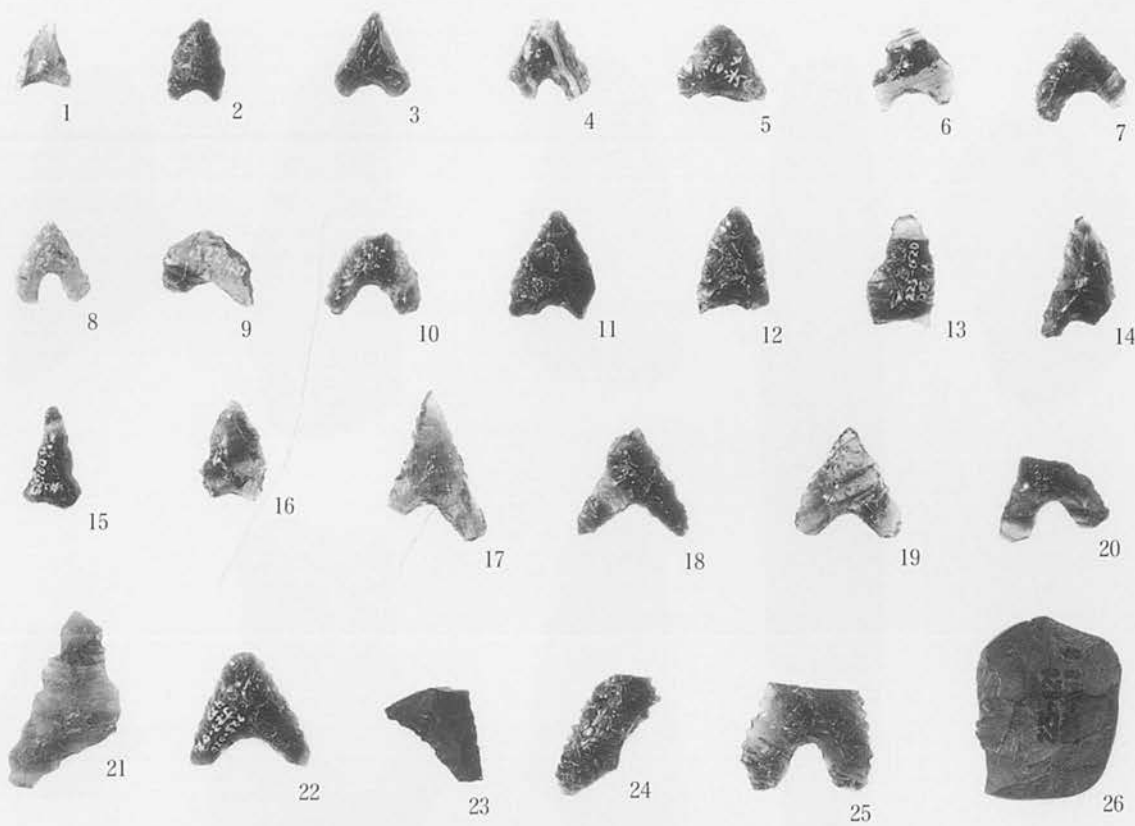




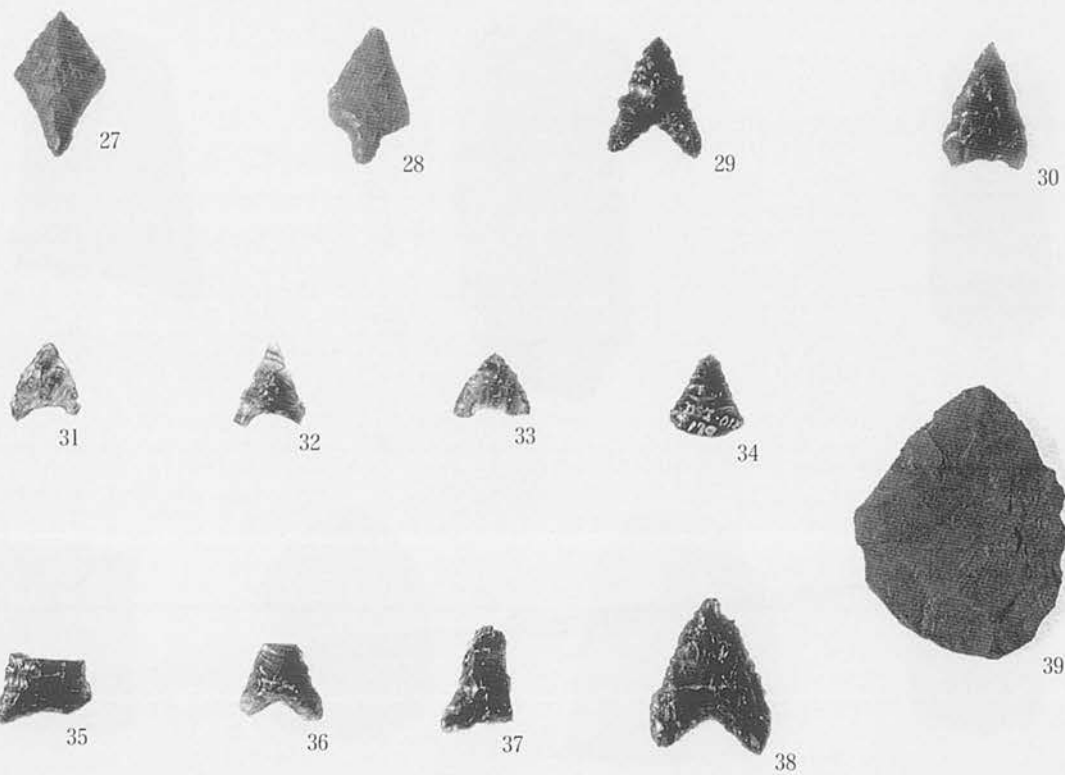
A·D区遺構外出土縄文土器 (14)



D区出土土製品・注口



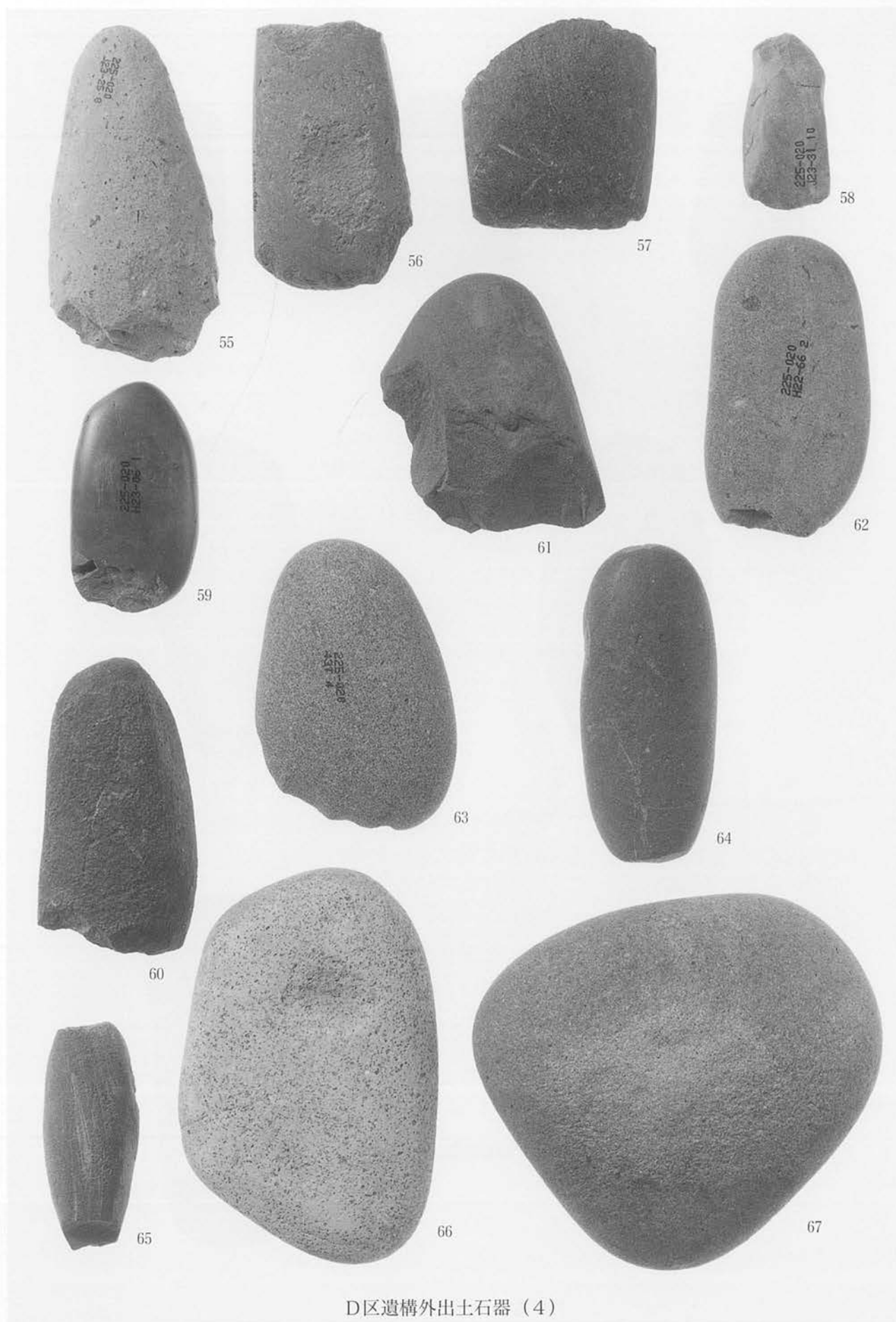
D区遺構外出土石器 (1)



D区遺構外出土石器 (2)



D区遺構外出土石器 (3)

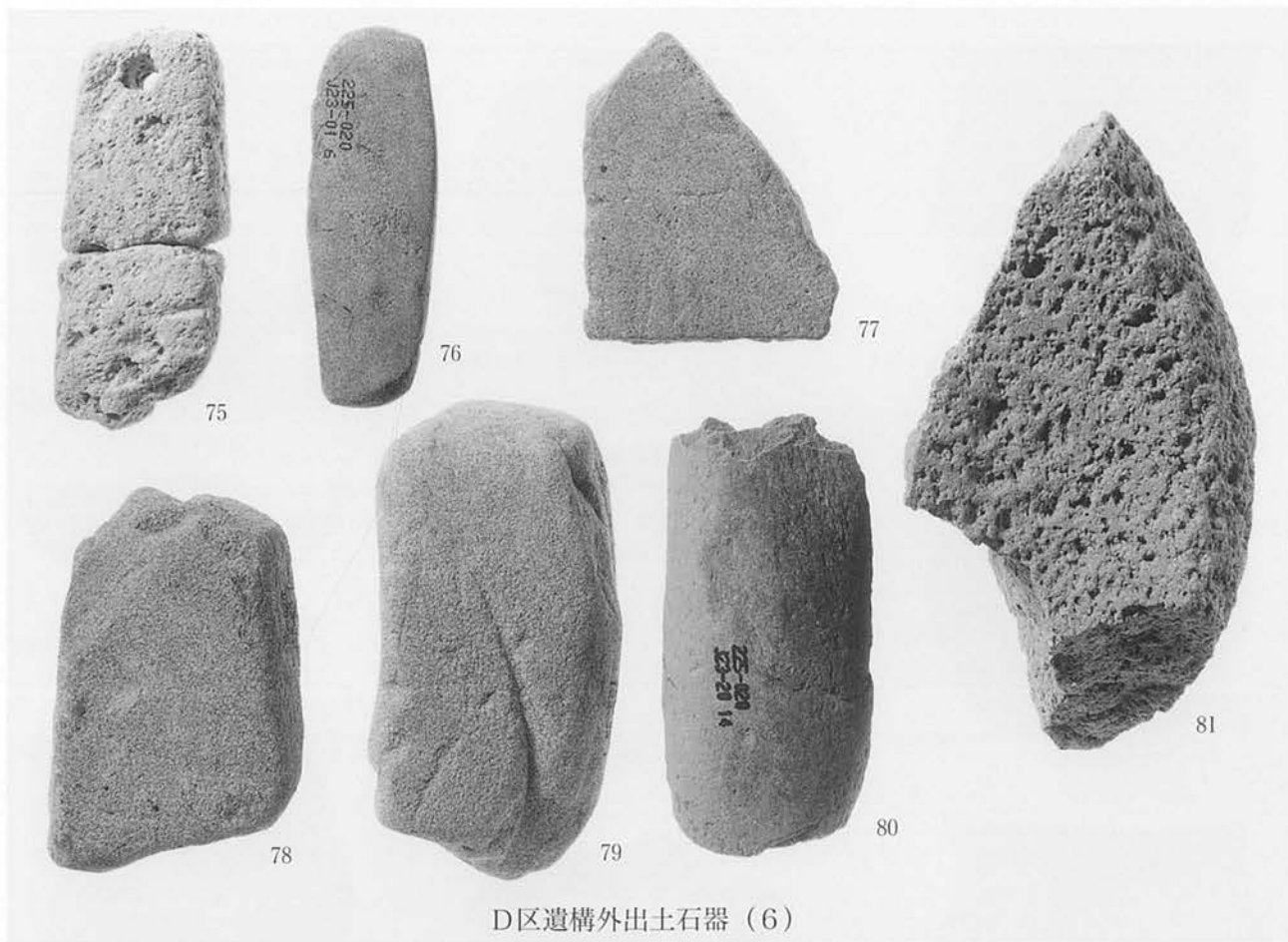


D区遺構外出土石器 (4)



D区遺構外出土石器 (5)





D区遺構外出土石器 (6)



D区遺構外出土石器 (7)





SI-023-4



SI-035-2



SI-053-3



SI-023-5



SI-035-3



SI-062-1



SI-023-6



SI-051-1



SI-065-2



SI-035-1



SI-052-2



遺構外-1



SI-053-1



1

縄文時代草創期石器



D区-1



D区-4



D区-5



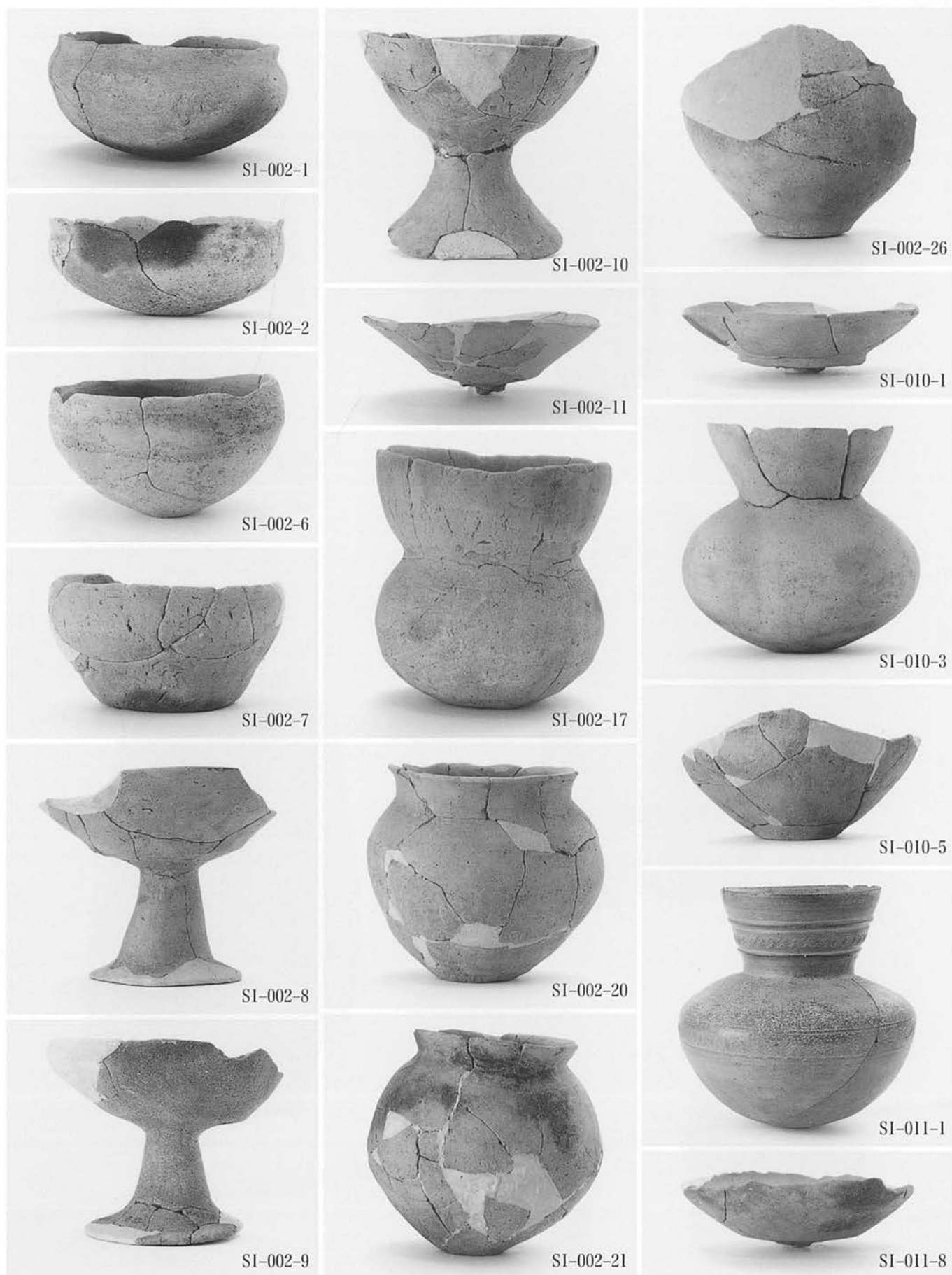
D区SS009出土-3



D区-2



D区-3



竖穴住居跡出土土器 (1)



SI-011-6



SI-011-7



SI-011-11



SI-011-12



SI-011-23



SI-011-19



SI-011-18



SI-012-6



SI-012-8



SI-012-11



SI-012-10



SI-012-12



SI-012-20



SI-013-1



SI-013-3



SI-013-4

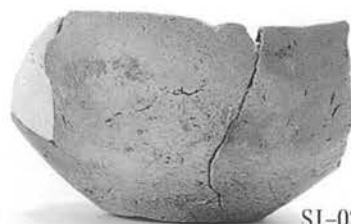
竖穴住居跡出土土器 (2)



SI-013-5



SI-019-1



SI-020-2



SI-013-6



SI-019-3



SI-020-4



SI-013-7



SI-019-8



SI-020-5



SI-013-8



SI-019-12



SI-020-6



SI-016-12



SI-019-13



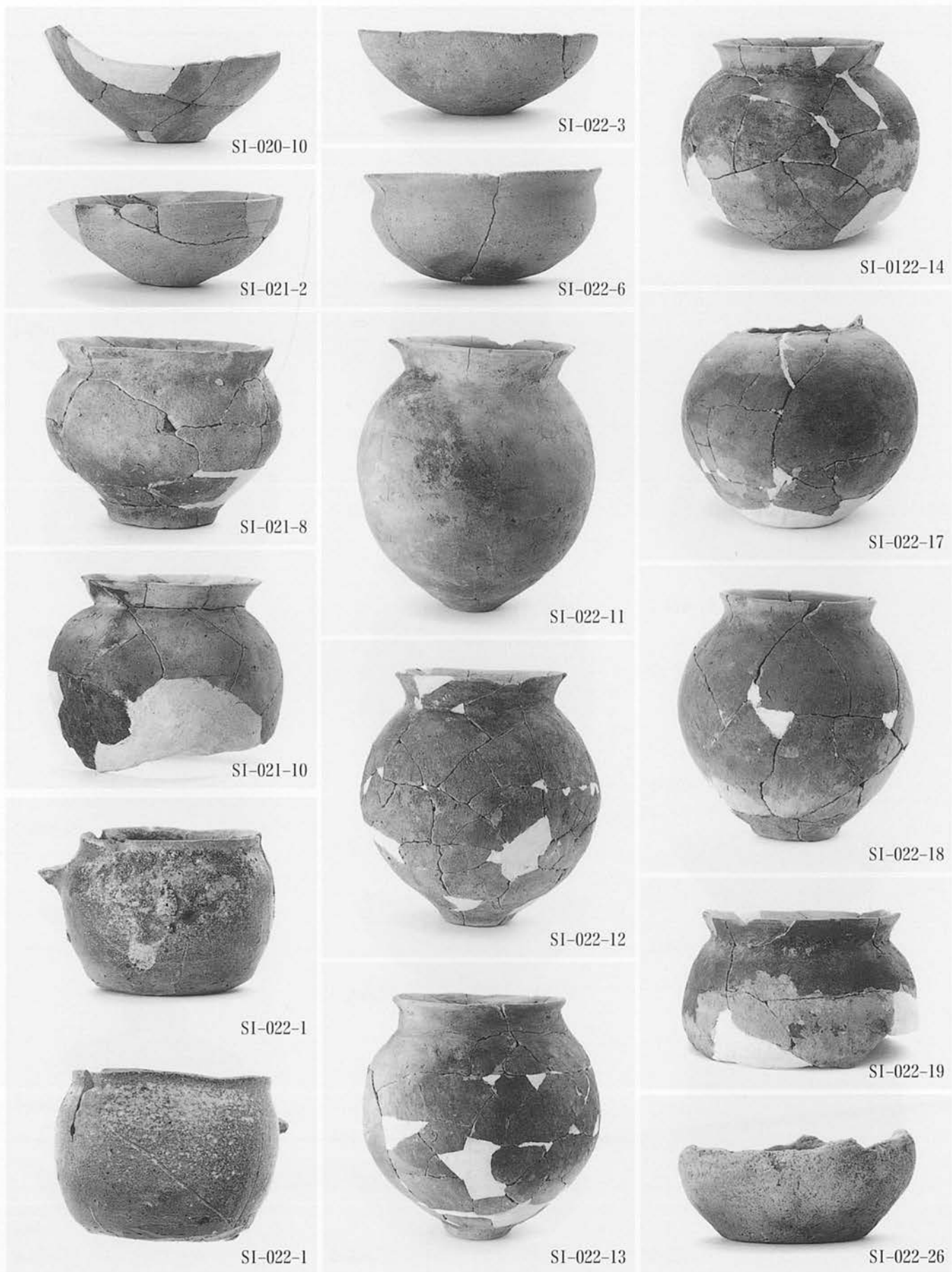
SI-020-7



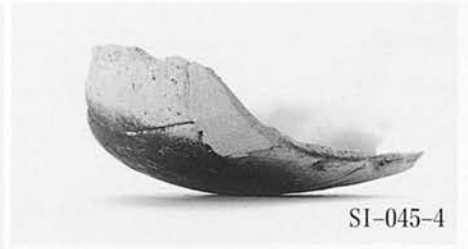
SI-020-1

竖穴住居跡出土土器 (3)





豎穴住居跡出土土器 (4)



竖穴住居跡出土土器 (5)





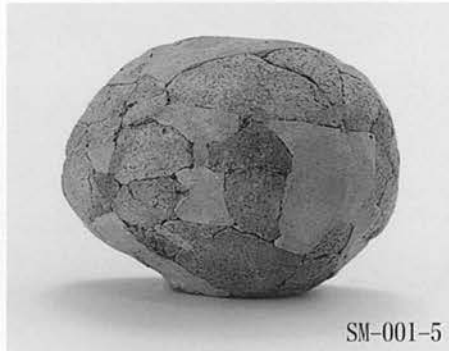
SI-049-7



SI-063-7



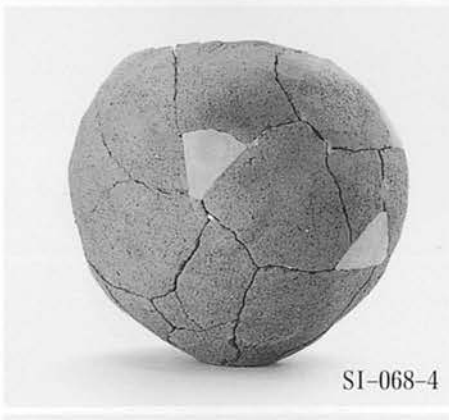
SM-001-4



SM-001-5



SI-060-2



SI-068-4



SM-001-6



SI-063-2



SM-001-1



SM-001-8



SI-063-6



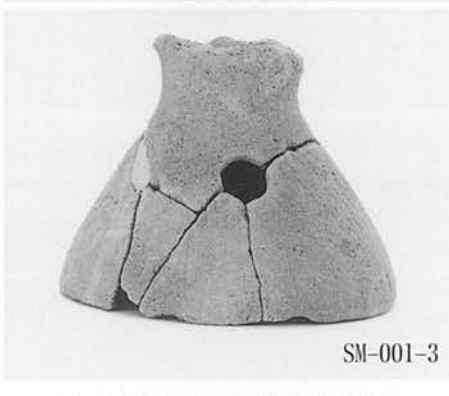
SM-001-2



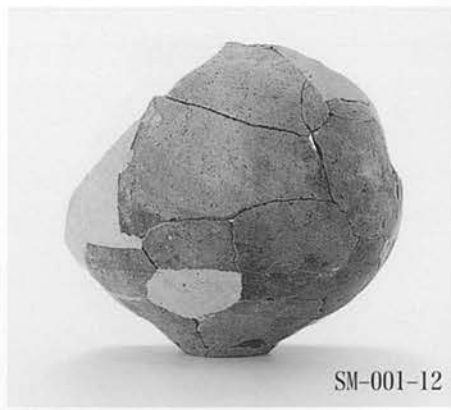
SM-001-10



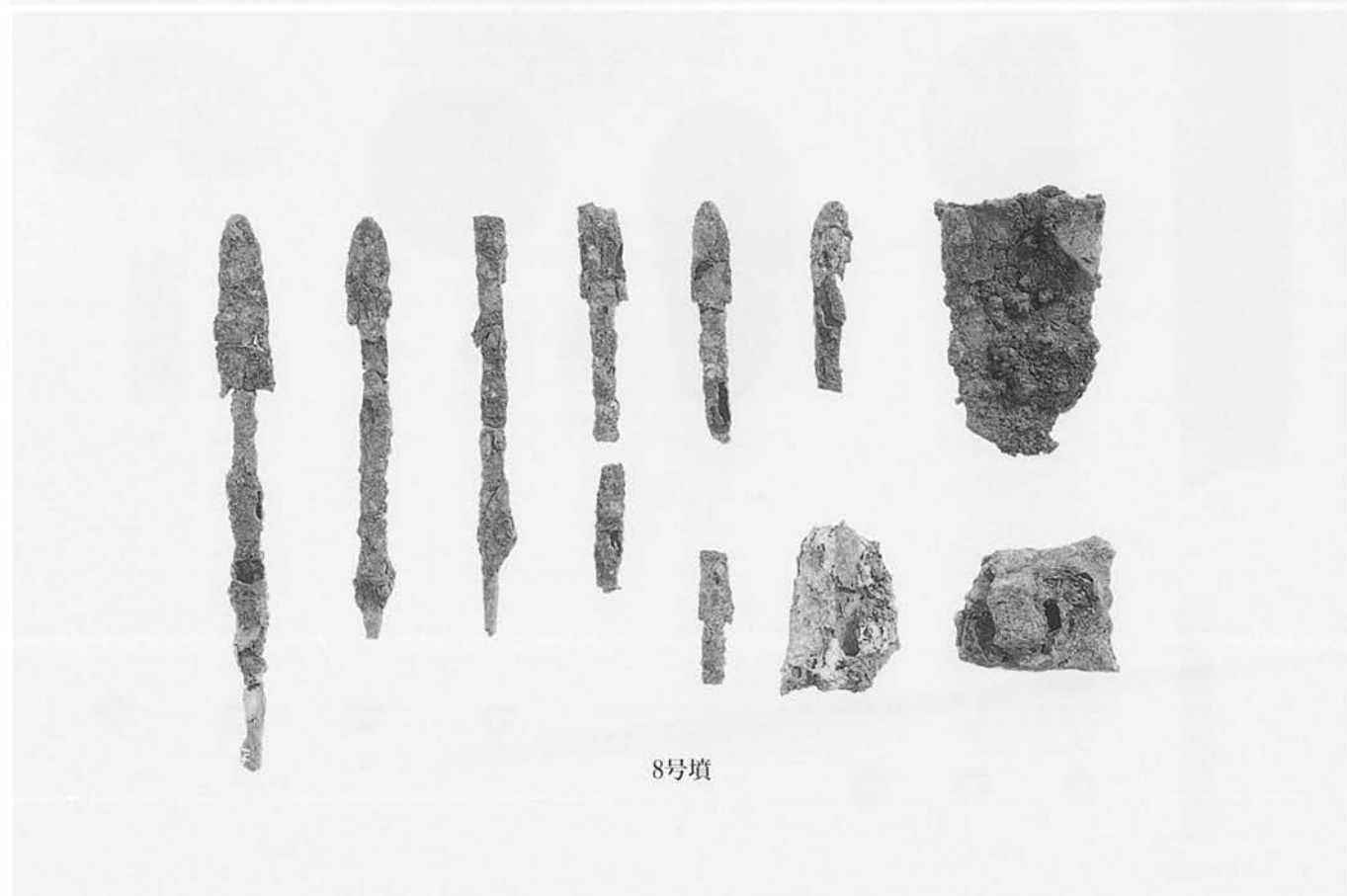
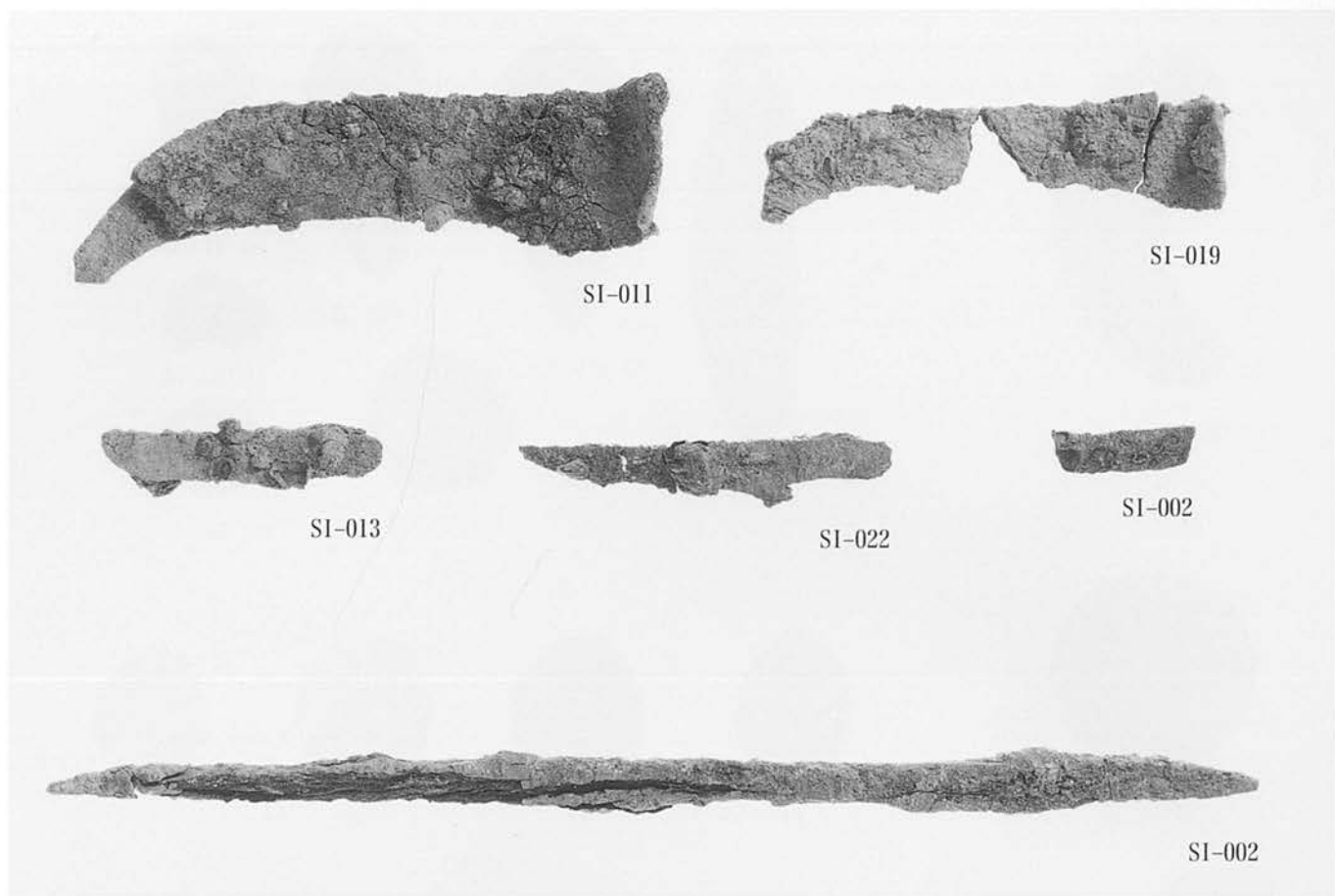
SI-068-1



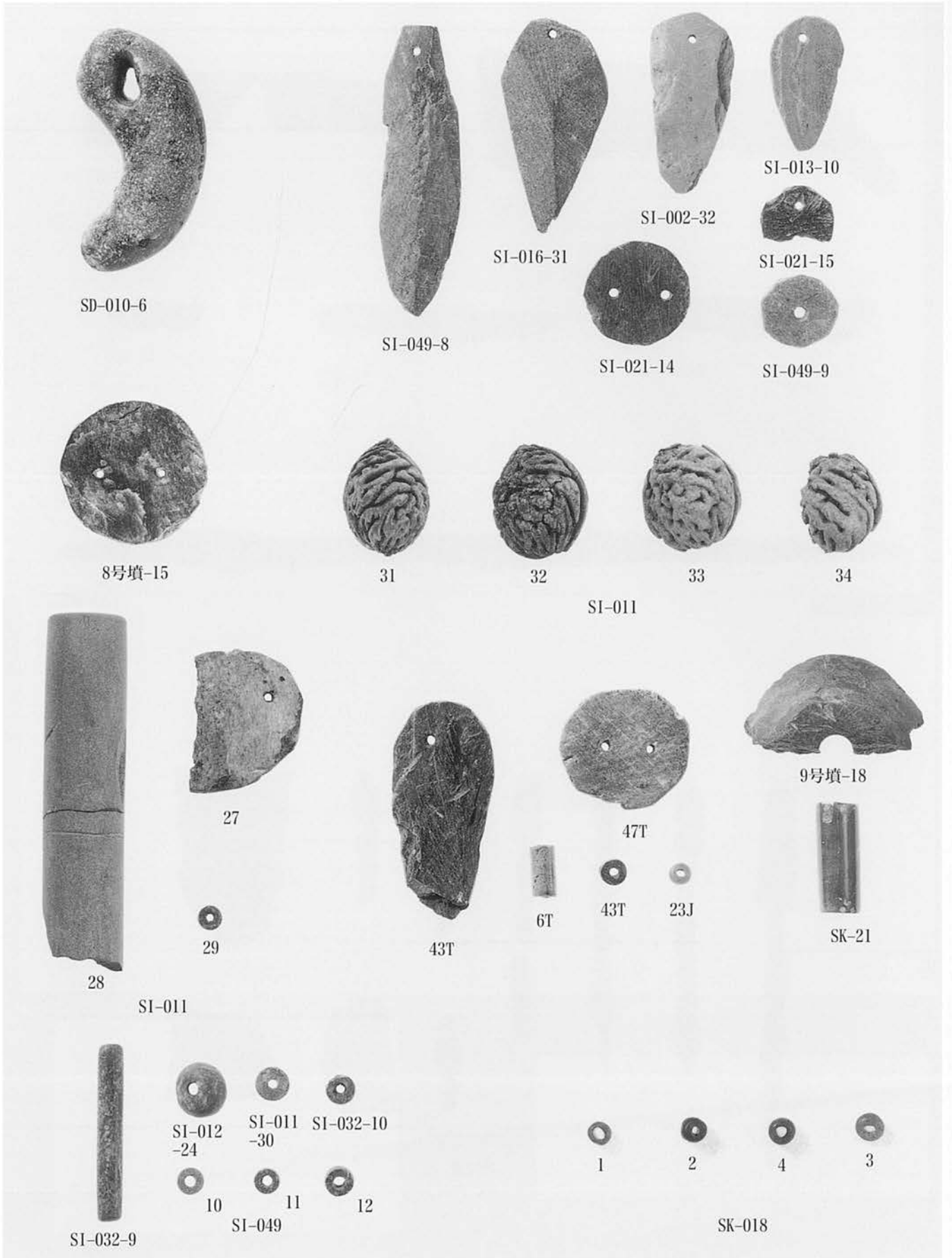
SM-001-3



古墳・土坑出土土器



竖穴住居跡・古墳出土鉄製品



出土石製品・その他



溝出土-4



遺構外-35



遺構外-43



奈良・平安出土-2



遺構外-4



遺構外-11



奈良・平安出土-1



遺構外-18

遺構外出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	ひがしかんとうじどうしゃどう (きさらづ・ふつつせん) まいぞうぶんかざいちょうさほうこくしょ							
書名	東関東自動車(木更津・富津線)埋蔵文化財調査報告書 5							
副書名	君津市鹿島台遺跡(A区・D区)							
巻次	5							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第529集							
編著者名	栗田則久・中道俊一・新田浩三・安井健一							
編集機関	財団法人千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809-2 TEL 043 (422) 8811							
発行年月日	西暦2006年3月24日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かしまだいいせき 鹿島台遺跡 (A区)	きみつしむてあぎかしまだいい 君津市六手字鹿島台 761-1ほか	12225	020	35度 17分 42秒	139度 56分 28秒	20000405～ 20010330 20010402～	2,220, 古墳1基	道路建設に伴う 埋蔵文化財調査
かしまだいいせき 鹿島台遺跡 (D区)		12225	020	35度 17分 40秒	139度 56分 29秒	20020331	5,870, 古墳3基	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鹿島台遺跡 (A区)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	2軒	縄文土器, 礫		弥生時代中期を中心とした方形周溝墓群に加えて, 上総地域ではあまり例のない再葬墓が検出された。	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	1軒	弥生土器			
	集落跡	古墳時代	古墳	6基	土師器, 玉類, 金属製品			
鹿島台遺跡 (D区)	集落跡	縄文時代	竪穴住居跡	21軒	縄文土器, 土偶, 土器片錘, 耳栓, 土製円盤, 石棒, 石鏃, 磨石, 石皿		縄文時代では, 中期後半の竪穴住居跡6軒から石鏃製作に関連する遺物が多量に出土した。後期中葉には大形住居跡が構築された。また, 弥生時代後期から古墳時代中期にかけての集落が形成された後に墓域として古墳群を築造したことが伺える。	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡	24軒	弥生土器			
	集落跡 古墳	古墳時代	竪穴住居跡	23軒	土師器, 須恵器, 金属製品, 玉類, 石製模造品			
			古墳	2基				
			土坑墓	4基				
			土坑	16基				
			方形周溝墓	1基				
集落跡	奈良・平安時代	溝	4基					
		竪穴住居跡	1軒					

千葉県教育振興財団調査報告第529集

東関東自動車道（木更津・富津線）

埋蔵文化財調査報告書 5

－鹿島台遺跡（A区・D区）－

---

平成18年3月24日発行

編 集 財団法人千葉県教育振興財団  
発 行 東日本高速道路株式会社  
関東支社

台東区北上野一丁目10番14号

財団法人千葉県教育振興財団

四街道市鹿渡809-2

印 刷 株式会社 東 プ リ

船橋市咲が丘1-11-9

---